

『パンとぶどう酒』第一節「聖なる夜」その五

— 林苑と盟約 —

高橋 克己

内容梗概

人文学部独文研究室

〔一〕 序 論

〔第34巻〕

二(156)頁— 五(159)頁

付録「浪漫化」と「理想化」

〔第38巻その二〕

(4)頁— (15)頁

〔二〕 有和の旋律

〔第34巻〕

六(160)頁— 一五(169)頁

付録(一九八三年十一月五日、日本独文学会中国四国支部・第三十三回
研究発表会、徳島眉山会館、口頭発表の原稿および欧文資料など)

〔第38巻その二〕

(16)頁— (25)頁

〔三〕 燈火と松明

〔第34巻〕

一六(170)頁— 二八(182)頁

付録(一九八五年五月二十五日、日本十八世紀学会・第七回大会、高知
大学人文学部、口頭発表の原稿および欧文資料など)

〔第38巻その二〕

(26)頁— (42)頁

〔四〕 思慮深い家長(改稿)

要 旨

〔第38巻その二〕

二九(43)頁

(1) 緒 言

三〇(44)頁— 三一(45)頁

(2) 親友ランダウエル

三一(45)頁— 三三(51)頁

(3) ランダウエル絨毯毛織物商会

三七(51)頁— 三九(53)頁

(4) 共和精神と専制

四〇(54)頁— 四三(57)頁

註 解

(58)頁— (73)頁

付録(一九八五年十一月九日、日本独文学会中国四国支部・第三十五回
研究発表会、香川大学教育学部、口頭発表の原稿および欧文資料より)

〔第38巻その二〕

(74)頁— (82)頁

LANDAUER — "ein sinniges Haupt" in Hölderlins „Brod und Wein“ (Neufassung) 〔第38巻その二〕 (83)頁— (90)頁

〔五〕 黄昏から聖夜へ

(1) 離 在

(2) 噴 泉

(3) 晩鐘と時禱

(4) 林苑と盟約

(5) エレウシース

〔第36巻〕

〔第37巻〕

〔第38巻その二〕

四四(15)頁— 五〇(21)頁

五〇(21)頁— 五六(27)頁

五七(2)頁— 六三(8)頁

六四(92)頁— 九五(123)頁

〔六〕 結論——啓蒙期より十九世紀へ

後日刊行予定

和文註解／欧文註解 (Quellennachweis)

Zusammenfassung/Sommaire/Abstract

Inhalt/Table des matières/Contents

※既刊部(一)―(四)および(五)(1)―(3)は左記の学術刊行物に掲載されて
おり、尚この研究の一環としては別に、『パンとぶどう酒』冒頭の都市像
(一九八三年度・高知大学学術研究報告、第三二巻、人文科学篇、二二頁—
七〇頁所収、一九八四年三月刊)がある。

(一)―(三) 一九八五年度・高知大学学術研究報告、第三四巻、人文科学篇、
一五五頁—二〇一頁所収、一九八六年二月刊

(四) 旧稿 一九八六年度・高知大学学術研究報告、第三五巻、人文科学篇、
六七頁—一〇二頁所収、一九八六年十一月刊。

(五)(1)―(2) 一九八七年度・高知大学学術研究報告、第三六巻、人文科学篇、
一五頁—四二頁所収、一九八七年九月刊。

(五)(3) 一九八八年度・高知大学学術研究報告、第三七巻、人文科学篇、
一頁—九〇頁所収、一九八八年六月刊。

※本研究(五)(4)は、平成元年度「特定研究費」(西欧啓蒙主義の比較研究)
による学術研究成果報告書その一である。

研究代表者 高橋克己(人文学部助教授、研究者番号 五三四〇二七〇三)
刊行費 一二六〇千円より

『パンとぶどう酒』冒頭の都市像 DAS STADT- BILD IM ANFANG VON „BROD UND WEIN“

(一九八三年度・高知大学学術研究報告、第三二巻、二二頁―七〇頁、
一九八四年三月刊)

序論 (EINFÜHRUNG) [第32巻] I (21)頁―III (23)頁

〔一〕 市街の外延 (Umgebung der Stadt)

- (1) 都市と農村 (Stadt und Land) IV (24)頁―V (25)頁
- (2) 農業の世紀 (Ökonomisches Jahrhundert) V (25)頁―VI (27)頁

〔二〕 都 市 (Stadt)

- (1) 市壁の内側 (Innenraum der Stadt) VII (27)頁―VIII (28)頁
- (2) 城塞都市 (Burgstadt) VIII (28)頁―XI (31)頁
- (3) 首都シュトゥットガルト (Residenzstadt Stuttgart) XI (31)頁―XII (33)頁

〔三〕 市 民 (Bürger)

- (1) 市民生活 (Stadtleben) XII (33)頁―XIII (42)頁
- (2) Erleuchtung (光明) XIII (42)頁―XXIX (49)頁
- (3) 祝祭とオペラ文化 (Festspiel und Opernkultur) XXIX (49)頁―XXXV (55)頁
- (4) 変貌する社会 (Übergangsgesellschaft) XXXV (55)頁―XL (60)頁

結 論 (SCHLUSS) XL (60)頁―XLIV (64)頁

要 旨

ヘルダーリンの雄篇『パンとぶどう酒』(一八〇〇年―一〇一年)は、西欧精神史の難問を内に蔵し、盛られた内容を読み解くに容易ならぬ思想詩なのであるが、冒頭の始まりは一見するところ極めて日常的な表象に満ちており、在来の研究では取り立てて問題にされることはなかった。例えばシュミット著『ヘルダーリンのエレギー「パンとぶどう酒」』(一九六八年)では、全百六十句からなる思想詩全体に百五十頁程に亘る註釈を施しながらも、冒頭の六句全体については僅か一頁程(三四頁―三五頁)の分量の註解をあてているに留まっている。なるほど思想豊かで難解な『パンとぶどう酒』の内容から考えて、思想詩冒頭の然りげ無い日常性が意味を持つとは考え難かったであろう。ところが、何気なく当たり前に思われるこの歌い出しの諸表象に注意を傾け、思想詩に盛られた内容との関連に思いを凝らしてみると、解説されるべき様々な問題が既にこの冒頭に素朴な形で提示されているのに私は気付いた。その第一句では、一つの世界空間として都市の夕暮の情緒が内面への探求に至る門戸を開放する。ここで既に思想豊かな抒情詩に相応しい内面空間として、市壁に取り囲まれた市街が選ばれているのである。この都市像を究明するにあたって本論では、当時すなわち江戸時代後期の西欧の歴史的現実を考慮しながら、思想詩の映像や調べの喚起する世界を裏付けてゆきたいと考えている。しかしながらこの際ヘルダーリンに関する伝記的研究、例えばミッヒェル著『フリードリヒ・ヘルダーリン伝』(一九四〇年)は意外に頼りにならない。なぜなら、そこでは大抵詩人個人の人生行路や当時の政治状況が問題となるのであって、残念ながら当時の日常生活の具体的な様子とか、その経済的基礎づけにはあまり配慮が払われていないからである。そこで本論としては経済史や農史などの歴史研究の成果を踏まえ、『パンとぶどう酒』冒頭の詩想が

土台としている西歴一八〇〇年頃のドイツにおける都市と農村のあり方またそれらの各領邦における差異を顧慮するとともに、他の先進諸国に比べ産業革命の立ちおくれていた当時のドイツ社会における生産様式の発展段階をも留意したいと考えている。例えば、夜間照明の問題（第一句―第二句）にしても、門閥の社交広間の華美な装飾用釣燭台に輝く蜜蠟燭は、一般市民の手の届く代物ではなく、市民生活の街路や屋内を点す光は獣脂蠟燭や油燈のささやかな灯火であったと考えられる。

このような歴史探求が詩想から遊離して空回りしないために、本論としてはできる限り思想詩の叙述に即して史的問題を扱ってゆきたい。本論の始まりに都市の外延を扱うのは、脇道に逸れるためではなく、この迂回を通して当時の西欧都市のあり方を正確に規定するために他ならない。都市経済の支配する流動的な今日の市民社会とは異なり、当時ドイツは農村依存型の固定化した社会であり、この基礎の上に既存の封建的特権が息づいており、装飾用釣燭台の輝く華麗な宮廷風オペラ文化が咲き誇っていたのである。『パンとぶどう酒』第三句の文字通り「歩いて（*gehn*）帰宅する人々」との対比で、私は第二句の「松明を飾して（大略を）疾駆し馬車が過ぎ去る」に、歌劇場や社交の夜会へと急ぐ門閥の姿を考え、これを「過ぎ去る」と歌った詩人の姿勢に注目した。つまり、私は既存の「オペラ文化」（ニーチュ『悲劇の誕生』参照）を否定して、新たに來たるべき祝祭空間へと向けられた詩人の眼差をここに読み取ったのである。この関連で『パンとぶどう酒』中央部の「至福なるギリシア」（第五五句）における「天上の祝祭」（第一〇八句）が、「偉大なる運命の轟く」（第五二句）古典ギリシア祝祭悲劇の時空として立ち現われる。即ち蒼穹の清澄な大気アイテールの下、白昼に野外で催された古典ギリシア祝祭悲劇の誕生する開かれた空間が、装飾用釣燭台の輝く西欧の歌劇場や社交広間の閉ざされた屋内と好対象をなすのである。この関連で興味深いのが、ヘルダーリンが讃歌『ライン河』（一八〇一年）

の第十節以下や頌歌『ルソー』（一八〇〇年）などで、英雄のごとき時代の予言者と称えたルソーの『演劇論』であらう。つまり此所でルソーが、共和国（具体的にはギリシアの都市国家ポリスとかルソーの祖国である西欧都市ジュネーヴ）の祝祭の全人民的性格と、宮廷風オペラ文化の排他的な性格とを見事に分析し、オペラ文化を睨み合せて、祝祭空間の開けへと雄飛せんとしているからである。

同時代の資料として私は、ヘルダーリンの畏友ヘーゲルの政治論文『ヴェルテムベルクの最近の内情について』（一七九八年）の分析を参考にして、『パンとぶどう酒』第一句に登場する領邦ヴェルテムベルクの首都シュトゥットガルトの民会における都市貴族の越権と宮廷との癒着を考えに入れ、ヘルダーリンが然り気なく自ら自身も恐らく直接念頭に置かず、このような門閥に纏わる華美な装飾用釣燭台や松明の光を何時とはなしに「過ぎ去る」ものとして描き（第二句）、他方それに対して、慎ましさと優しさに包まれてほのかに点る燈火の街路（第一句）を、都市像の象徴として心をこめて表現しているのに注目した。

- 一 静かに安らう都市。ひそやかに街路に燈火がともり
- 二 して松明に飾られて騒然と馬車は疾駆し過ぎ去る。
- 三 満ち足りて家路へと、昼間の飲びに別れを告げ、安らぎを求め歩みゆく人々。
- 四 して収支得失を慮る思慮深い家長は
- 五 悠然と和やかにわが家にくつろぐ。（黄昏の今は）葡萄も花束もなく。
- 六 して手仕事の品々もなく安らう、（昼間は）忙しき広場の市場。
- 七 だが他方、堅琴の音が彼方の庭園から響いて来る。恐らくは
- 八 そくて恋人が奏で、或いは孤独な者が
- 九 彼方の友を想いつつ、また若き日を偲びつつ。して噴泉が
- 一〇 滔々と湧き、清冽な水しぶきをあげ進み、芳香に匂う花壇を露している。
- 十一 ひそやかに黄昏の夜気に響き渡る晩鐘の音
- 十二 して時刻を想い、その数を夜警は声高に呼ばれる。

「浪漫化」と「理想化」

——ヘルダーリンの『パンとぶどう酒』第一節をめぐる——

高橋 克己

内容梗概

要旨

- | | | | |
|--|-----------|-------|-------|
| (1) 無限への憧憬と「泡立つ無限」 | (第38卷その二) | (4)頁 | (4)頁 |
| (2) 「滅びの中で生まれるもの」 | | (5)頁 | (5)頁 |
| (3) プレンターノによる「夜」の受容 | | (5)頁 | (6)頁 |
| (4) 古典ギリシア——浪漫派と古典派 | | (6)頁 | (7)頁 |
| (5) ランダウエルとヘルダーリン——「思慮深い家長」(第四句)と「孤独な者」(第八句) | | (7)頁 | (7)頁 |
| (6) 市民社会の樹立——シラーの「散策」(一七九五年)との関連で | | (7)頁 | (8)頁 |
| (7) 「人倫の偉容」たる「ドイツの尊厳」 | | (8)頁 | (8)頁 |
| (8) 「夜」とシラーの「理想化技法」 | | (9)頁 | (9)頁 |
| 註解 | | (9)頁 | (9)頁 |
| 欧文資料 (Materialien) | | (10)頁 | (15)頁 |

要旨

「浪漫化」では濃淡細やかなノヴァーリスの『夜の讃歌』へ、「理想化」では思念豊かなシラーの哲学詩へと結びつき、この両者がヘルダーリンの『パンとぶどう酒』第一節に織り合われ、一重に浪漫風とも古典風とも決めかねる詩想を形造っている。例えば古典美の始源は「至福なるギリシア」として無限への憧憬を誘い、あたかも浪漫派の「夜」を想わせるが、しかし古典世界は探し求められているものの、あくまで厳然とパルテノン神殿の如く造形力に満ちて聳え立つ。しかも『夜の讃歌』では後世キリスト者の魂の夜により克服された遺物に過ぎぬギリシアの

昼が、『パンとぶどう酒』では古典派シラーたちの場合と同様、詩魂に生ける現実として働きかける。他方その魂の現実に応える『パンとぶどう酒』第一節の都市像からは、遁世ならぬ人倫社会の只中から理想を求め「無限が泡立つ」と言え、此所にシラーの「理想化」が継承されている。それと同時にヘルダーリンの都市像は『夜の讃歌』に似て何処か根源より照らし出されており、シラー風に内から沸き上がり生成する「息吹き」(第十三句)と共に、密やかに秘蔵の莊嚴より何時とはなしに目立たず働きかける「月影」(第十四句)が、詩想に微妙な陰影を投げかける。かつまた都市像は空想の所産として片付けられぬ史実の裏付けも得ており、何より「思慮深い家長」(第四句)の背後に控える新興の工場制手工業主たる豪商の存在が無視できぬのである。

(1) 無限への憧憬と「泡立つ無限」

『パンとぶどう酒』(一八〇〇年—〇一年)の成立期は、啓蒙時代より浪漫主義への移行期にあたり、音楽史ではベートーヴェンがヴィーン古典派の遺産を受け継ぎ、新たな表現を生み出し始めていた頃である。同様ヘルダーリンも先輩ヴァイマル古典派シラーたちの成果を踏まえて新機軸をうち出す。この際シラーとの差異が関心の的となり強調されると、これ迄の研究の如く、やたら「浪漫化」に焦点を当てざるを得ない。すると『パンとぶどう酒』第一節「夜」は、一種ノヴァーリス風の「夜の讃歌」に組みこまれてしまう。

確かに『夜の讃歌』と同様、ヘルダーリンの「夜」も、浪漫風心情が期待する無限への憧憬に十分応える要素を有している。ところが同時に『パンとぶどう酒』第一節の場合、現実の生よりシラー風に理想を求め「泡立つ無限」の要素も見損うことが出来ない。実際この第一節に描かれた都市像を、単に遁世のための踏み台として片付けず、それ自体で意

味ある造形と看做さんとするならば、それは尚更のことなのである。

(2) 「滅びの中で生まれるもの」

冒頭の都市像でまず注目すべきは、第一句後半の「光明」である。通例こは「密やかに燈火が点る街路」と解され、淡い油燈の光のみが目にとまる。ところが既に「月影」(第十四句)も「街路」に射し込んでおり、実際こは「密やかに燈火(と月影)の光明が満ちる街路(sich wird die erleuchtete Gasse)」と読める。丁度ベートーヴェンの鍵盤曲『月光』(一八〇二年)に似て、此所では目立たぬけれども万象を包みこむ月影の光明が人間を照らし、心魂の奥深い内面と外界の都市像とが靈妙に協和し合う。

かく都市像は聖化され、この只中で「思慮深い家長が／悠然と和やかにくろぐ」(第四句―第五句)。この市民生活の日常性と鋭い明暗を織り成す要素も見逃せない。即ち特権門閥の華麗な夜会や観劇へと「松明に飾られ騒然と馬車が疾駆し過ぎ去る」(第二句)のがそれで、この「過ぎ去る(hinweg)」と好対称をなして、市井の諸相が光明に満ちて浮き彫りにされ、ヘルダーリンの歴史観「滅びの中で生まれるもの」を具現する。

祖国のこの没落、ないしは、この意味での変遷は、既存の世界の四肢において感取せられ、その様は、この既存のものが解体する瞬間と度合いに応じて正に、新たに勃興するもの、若々しいもの、可能なものが感取されるという具合なのである。

(『滅びの中で生まれるもの』一七九九年)

同じ第一節の中で繰り返される動詞にも、このことは確かめられる。右の第二句で「騒然と疾駆し(rauschen)過ぎ去る」のに対し、第九句から第一〇句にかけては、「噴泉が／滔々と湧き、清冽な水しぶきをあげ迸り(rauschen)、芳香に匂う花壇を落している」。此所では人工と自

然との対比が明瞭であり、この自然の脈動に依じて、引き続き第十一句では、「密やかに黄昏の夜気に響き渡たる晩鐘の音(geläutete Glocken)」が歌われる。

(3) プレンターノによる『夜』の受容

当該の「晩鐘の音」に焦点をあて、浪漫派プレンターノは『パンとぶどう酒』第一節「夜」に、遁世風な無限への憧憬を抱き、シラー風に「泡立つ無限」を証す自然の脈動を見逃してしまふ。

殊に『夜』は明澄で星辰に輝き、孤独で、そして過去へまた未来へとあらゆる想いの響く晩鐘(tönende Glocke)です。…その様なことを体験しつつ、私は知らぬ間に一篇の詩歌を創作してみたくまりました。

(一八〇〇年一月二十一日ルンゲ宛書簡)

「一篇の詩歌」は後に実現の運びとなり、そこでは『パンとぶどう酒』第十二句の「夜警」が話題となる。

私は持ち、夜は近づく、

あたかも捕われた者へ忍び寄る夜警の如く。

ここに(ぶどう酒の)杯がある。その夜は語る。この杯をあなたの涙で充たしなさい。

此所の石を胸に抱きなさい。そうすれば石はあなたのパンとなるであろう。

(『夜』への続篇、第一句―第四句)

浪漫派の無限への憧憬は、未だ第一節「夜」のみしか知らぬにも拘わらず、既に「パン」と「ぶどう酒」へと言及する程の宗教性を宿し、この意味では正に『パンとぶどう酒』の核心を突いていると考えられる。しかしながら遁世の姿勢は、あくまで当所なく空虚とした彼方へと迷い、結局ヘルダーリンの「至福なるギリシア」のような明確な理想追求の道

を指し示すには至らなかったのである。

五五 至福なるギリシア! ……

…… 輝く、彼方をまで射抜くあの神託、

…… 轟く、かの偉大なる運命、

…… かの神速の運命は ……

雷鳴とともに、清澄なる大気から眼界を過り突入して来る、

六五 父なる(清澄なる)神氣アイテール! ……

(『パンとぶどう酒』第四節、第五五句—第六五句)

(4) 古典ギリシア——浪漫派と古典派

彼方に憧れる『パンとぶどう酒』の詩想は、成程ブレンターノの様な浪漫情緒をも満喫させるのであるが、但し詩想に孕まれた理念追求の道は、ヴァインケルマンの『古代ギリシア芸術作品模倣論』(一七五五年)以来、ゲーテの『イフィゲーニエ』(一七八七年)やシラーの『ギリシアの神々』(一七八八年)において育くまれた史観の沃土を辿る。この点ヘルダーリンも古典派と同じく、右の「至福なるギリシア」にも漲る「清澄なる神氣」の時空へと突き抜けることになる。

他方この光明の古典世界と明暗なす陰影を、『パンとぶどう酒』第一節「夜」の場合は見過せない。このことは既に述べた「月影」や「街路」に確かめられる。恐らくこの場合ノヴァーリスの云う「浪漫化」が考え併され得よう。

「世界は浪漫化される必然にある。 ……
浪漫化とは質的累乗で高めることに他ならない。 ……」

(『断章』一七九八年)

まずこのことは『夜の讃歌』(一八〇〇年)において実践され、此所で

は至福の死、^①が靈妙不可思議な「夜」として万象を映し出し「浪漫化」する。確かに魂が宗教性豊かな根源より照らし出される点において、ヘルダーリンの「夜」も同様な「浪漫化」の好例であろう。ところが『パンとぶどう酒』の「夜」には、古典ギリシアの昼が対峙される。他方ノヴァーリスの讃歌は「夜」のみ光彩を放つ。

例えば第五讃歌を見ると、明朗な古典古代は、後世キリスト者の魂に宿る「夜」により克服され、歴史の過去へと昔日の遺物として片付けられる。かくして浪漫派は既成の体制宗教を、勃興する理想界ギリシアに対して擁護したことになる。反して今日バルテノン神殿がアクロポリスの丘に厳然と聳え、夥しい旅の巡礼をひきつけるように、古典派にとりギリシアの理想は揺らがず留まる。昔日キリスト教西欧が解決済みとした古典ギリシアとの確執が新たに始まり、ヘルダーリンの『パンとぶどう酒』こそは先輩シラーたちの成果にも増して、精神史におけるこの相克を難問として真摯に引き受けるのである。

既に『ギリシアの神々』においてシラーは、この難問と取り組んだものの、体制宗教を守らんとする側からの重圧に耐えかね、ついに問題の急所をはぐらかし、改稿後は罪なき牧歌風ギリシア世界へと変えてしまった。また古典との取り組みはゲーテの場合、この難問を繰り広げるとは反対に、「丸く収まった芸術作品」へと閉じてしまった。

ゲーテが書いたものは全て丸く収まった芸術作品となった。^②

(ハイネ『ロマン派』一八三五年—三六年)

ヴァイマル古典派とヘルダーリンとの間に見られるギリシア観の相異を、単に芸術や学問の領域に限るなら不十分であろう。なぜなら各々の古典観には、それを活かす歴史上の現実が控えているからで、『パンとぶどう酒』第一節の場合シラーたちには期待できない程、革命後に勃興する市民社会が肯定され、この史実の盤石を礎として「偉大なる運命が

轟く」「至福なるギリシア」が神殿さながらに響えると考えられる。

(5) ランダウエルとヘルダーリン——「思慮深い家長」(第四句)と「孤独な者」(第八句)

前述の「滅びの中で生まれるもの」(註(3))に關し、一七八九年勃発のフランス革命に続く政治意識の変化が顧慮されるのは当然である。更に『パンとぶどう酒』冒頭では、後ればせながら十八世紀末に軌道に乗り始めたドイツ産業革命の余韻が響く。

して収支得失を慮る思慮深い家長は

五 悠然と和やかにわが家にくつろぐ。……

(『パンとぶどう酒』第一節、第四句—第五句)

抒情表現が高まりゆく只中に、「収支得失」が浮上するのが興味深い。勿論これは内省する魂の揺れ動きに相応する「収支得失」であるが、同時に勤勞の所産も十分留意されている。

詩人自身は「孤独な者」(第八句)に他ならないが、これと明暗を織り成して「思慮深い家長」(第四句)が、対立しながらも協和する。詩人の伝記は「家長」の背後に、その親友で裕福な毛織物商人ランダウエルの存在を教えてくれる。実際一八〇〇年六月より翌年一月にかけ、つまり『パンとぶどう酒』成立時期ヘルダーリンは、この豪商の館でもてなされた。詳しく『ヴェルテルムベルク年鑑』(一八三二年)などを調べてみると、当商館が一七九七年に創設された工場制手工業(Manufaktur)形態の「ランダウエル絨毯毛織物商会」と解かる。故に新興の産業革命の息吹きを帯びた「思慮深い家長」が経済上の広野に立ち、「孤独な者」の詩想を支えていることになる。

在来の研究は、この様な詩魂と都市像との内的関連を十分留意しなかつ

た。その結果「思慮深い家長」が「悠然と和やかにくつろぐ」理由に、「市場での營業が儲けたから」と説明がつき、「『孤独な者』の堅琴の音は利得に關し何ら知らない」とあったり、また冒頭の都市像に見られる「忙しい生活の価値領域」が、詩想の核心なす「崇高な精神的瞑想の生活の価値領域には踏みこめないものとして限定づけられている」とされている。孰れも読解の基調は、遁世風浪漫派ブレンターノの場合と同じである。

冒頭六句は、現実へ向けての世の営みが疲労へと至るものではないでしょうか。引き続く六句(第七句—第十二句)は、(失なわれた)時への憧れであり、喪失の感情ではないでしょうか。第七句に登場するのは、失なわれた無垢への回顧であり、……

(日記書簡、一八一六年十二月)

解釈は結局『パンとぶどう酒』第六句と第七句との間に亀裂を見出し、「思慮深い家長」の住まう都市像と、「孤独な者」に固有な詩想の内実とは、言わば水と油の如く分離されてしまふのである。

(6) 市民社会の樹立——シラーの『散策』(一七九五年)との関連で

以上の浪漫風の遁世を目指す趨勢に流されぬよう、外界の都市像と詩想の内実との協和に注目するならば、『パンとぶどう酒』は『夜の讃歌』より、むしろ当時フランス革命期の現実に応えようとしたシラーの『散策』(一七九五年)へと繋がる。就く当詩歌も古典ギリシア世界を作品の中心に据え、それと睨み合せて革命期の活路を見い出さんとしている点で、ヘルダーリンの詩歌と類似の関心圈の中にあると看做される。但し『散策』の詩人は、新たな市民社会の樹立を目指しながらも、古代都市国家の「躍動する理念」を貫徹するに至らず、結局は革命期の動乱から「恒に変わらぬ自然」(第一九五句)へと逃避してしまふ。

一種浪漫風の自然回帰により『散策』は「丸く収まった芸術作品」(註(8))となり、その中央部で悲劇的に盛り上がった古代ギリシア世界も所詮「一沫の夢」(第一八六句)と化し、高々牧歌風自然の田園に「ホメーロスの太陽も我らに微笑みかける」(第二〇〇句)に過ぎなくなる。他方ヘルダーリンの場合、「躍動する理念」を孕み「偉大なる運命が轟く」「至福なるギリシア」(註(6))を目指し、既に『パンとぶどう酒』第一節の都市像には前述の如き「滅びの中で生まれるもの」(註(3))の胎動が確かめられ、政治革命のみならず産業革命の息吹きをも伝えていると言える。

(7) 「人倫の偉容」たる「ドイツの尊厳」

話題の「至福なるギリシア」に「躍動する理念」を冒頭の都市像に探すなら、第十一句より徐々に高まりゆく抒情の調べが、第十三句の文字通り「揺り動かす」所に見い出せる。

密やかに黄昏の夜気に響き渡る晩鐘の音おと

して時刻を想い、その数を夜警は声高に呼ばわる。

今やある息吹きが到来し、林苑の樹頭を(天上へと)揺り動かす。

(『パンとぶどう酒』第一節、第十一句―第十三句)

此所は浪漫派ブレンターノが「晩鐘」(註(4))と「夜警」(註(5))に通世風な無限への憧憬を読み取った箇所であるけれども、本論は目下シラー風の「泡立つ無限」(註(1))を当詩節に確かめる。

静聴する詩人は『聖書』や北欧神話の基底より、「林苑の樹頭を揺り動かす息吹き」の深層の意味を指し、此所から「躍動する理念」が「至福なるギリシア」を目指す。神木のそよぎとかゴティック風教会聖堂の鐘の音が「生命溢れるもの」を伝える。

： 古く野蛮な体制のゴティック風廃墟の直下で、生命溢れるもの (das

Lebendige) が誕生する。 ……⁽⁹⁾

(シラー『ドイツの偉容』一七九七年)

これに先行する言葉は、啓蒙と革命の時代にとり睥睨すべき発言である。

ドイツの威厳は、決して王侯の頭上に存在しなかった。 …… ドイツの尊厳 …… その尊厳は人倫の偉容であり、それが住まうのはその国の文化と気質である。 ……⁽¹⁰⁾

(『ドイツの偉容』)

断片として先輩シラーが起草した「人倫の偉容」としての「ドイツの尊厳」を、今や『パンとぶどう酒』第一節でヘルダーリンは形象豊かな詩想展開において繰り広げる。

昔日ブレンターノが期待したような宗教感情が否定されるわけではない。ただ宗教意識は「晩鐘」や「夜警」の場合、むしろミレーの名画『晩鐘 (L'Angelus) 』(一八五八年―五九年) における時禱の現実に似ており、素朴な気取らぬ日常生活の只中に、慎ましくも謹厳な「人倫の偉容」が、一言も格言とか説教を交えずに具現されていると見られる。かくして未だ箴言風の教訓調が拭い去れないシラーの哲学詩に盛られた内容が、『パンとぶどう酒』第一節では詩歌象徴そのものとなり、何時とはなしに読者の脳裏に刻み込まれることになる。

(8) 『夜』とシラーの「理想化技法」

最後にヘルダーリンの「夜」を、シラーの「理想化技法」⁽¹¹⁾を念頭に置いて考えてみたい。その典拠は『ビュルガーの詩歌について』(一七九一年)で、当詩論においてシラーは「個別化」を非とせず、正にそれを踏まえた上で、「魂の分離された諸力を再び協和一致へとたらしめる」ことを、自らの置かれた近世の課題としている。当然キリスト教西欧と古典ギリシアとの「切開と新たな縫合」⁽¹²⁾(一七八八年十二月二十五日ケルナー宛

シラー書簡)こそ、この「理想化技法」が実現される場と考えられるが、しかし先に『ギリシアの神々』や『散策』について見た通り、「切開」に長けたシラーは結局「新たな縫合」に失敗し、この課題が『パンとぶどう酒』に負わされたのであった。既に『パンとぶどう酒』第一節「夜」には、「至福なるギリシア」が隠れて働きかけている。故に西欧の夜とギリシアの昼との明暗は留意されて然るべきと思われる。更に当該詩節では詩人の内観と外界の都市像との間に「切開と新たな縫合」が見られる。つまり両者は「理想化技法」の観点からすれば、例えば「思慮深い家長」と「孤独な者」という具合に「個別化」されていると同時に、かつ「再び協和一致へととたらず」べく相の下にある。もしヘルダーリン自身の言葉でこれを語れば、『エムペクレースの基底』(一七九九年)より引用して、「疎遠な形式は疎遠であればある程、より生き生きと働きかけるに違いない。……」と述べることができる。西欧キリスト者の逆説思考が此所に生きており、この「理想化技法」と浪漫派ノヴァーリスの説く「質的累乗で高める」「浪漫化」とが、見事に共存している所に、『パンとぶどう酒』第一節「夜」の真骨頂が確かめられると言うのが、本論の主旨である。

註 解

- (1) ヴァイマル版シラー全集、第一巻、一九四三年、一一二頁。『友情』(一七八二年)第五八句―第六〇句
縦んば至高存在が無類無比であらうとも、
靈魂の国そのものなす玉杯より
- 六〇 神を指し泡立つ――無限(die Unendlichkeit)。
シュトゥットガルト版ヘルダーリン全集、一九四六年―七七年(索引一九八五年)、第二巻、九〇頁。以下『パンとぶどう酒』第一節(第一句―第十八句)よりの引用は同頁より。

- (3) 註(2)全集、第四巻、二八二頁。
 - (4) 註(2)全集、第七巻(資料篇)、第二分冊、四〇七頁。
 - (5) 註(2)全集、第七巻(資料篇)、第三分冊、五三九頁
 - (6) 註(2)全集、第二巻、九一頁―九二頁。
 - (7) 四巻本ノヴァーリス著作集、一九二九年、第二巻、三三五頁。
 - (8) 世紀記念版、第八巻、一九七二年、三五頁。
 - (9) ヴァックヴィッツ『一八〇〇年頃の悲哀と理想――ヘルダーリンの悲歌作品研究』(一九八二年)三〇頁。
 - (10) シュミット『ヘルダーリンのエレギー「パンとぶどう酒」』(一九六八年)三五頁。
- この他アンガー『ヘルダーリンの主要な詩歌』(一九七五年)七〇頁では、やたら「願望、或いは郷愁や懐旧の情に駆られた憧憬」とか「時の分断性や無常性」が話題に上り、サイモン『フリードリヒ・ヘルダーリン、宗教的詩歌の理論と実践、悲歌類研究』(一九八七年)二七頁では、「人間の活動を描写する言葉が全て此所では潜在的に軽蔑的である。例えば『忙しき』(第六句)、『手仕事の品々』(第八句)、『収支得失』(第四句)」と説明され、就れも通世風浪漫派プレンターノの読解と基調を同じくしている。
- (11) 註(2)全集、第七巻(資料篇)、第二分冊、四三三頁。
 - (12) ナイト『ラシーヌとギリシア』(一九五〇年)一三八頁。
- 私達が今日ギリシア文学の案内として有しているものは、単にアリストテレスやロンギノス、ホラーティウスやドーナートゥスの修辭学や詩論だけでなく、また四倍ないしは五倍に俗化した人文主義の伝統だけでなく、……この文学に反映している変遷する文明の躍動する理念(idée dynamique)でもある。
- (13) 註(1)全集、第二巻、第一部、一九八三年、三二二頁―三二四頁、以下『散策』よりの引用は同頁より。
 - (14) 註(1)全集、第二巻、第一部、四三二頁。
 - (15) 註(1)全集、第三巻、一九五八年、二四五頁以下／二五三頁。
 - (16) 註(1)全集、第二五巻、一九七九年、一六七頁。
 - (17) 註(2)全集、第四巻、一五一頁。

(H) „DIE NACHT“ UND SCHILLERS „IDEALISIERKUNST“

(15) Schiller „Über Bürgers Gedichte“ (1791): NA. Bd. 22.
S. 245f./S. 253.

Bei der Vereinzelung und getrennten Wirksamkeit unsrer Geisteskräfte, die der erweiterte Kreis des Wissens und die Absonderung der Berufsgeschäfte notwendig macht, ist es die Dichtkunst beinahe allein, welche die getrennten Kräfte der Seele wieder in Vereinigung bringt, welche Kopf und Herz, Scharfsinn und Witz, Vernunft und Einbildungskraft in harmonischem Bunde beschäftigt, welche gleichsam den ganzen Menschen in uns wieder herstellt. ... Die Sitten, den Charakter, die ganze Weisheit ihrer Zeit müßte sie, geläutert und veredelt, in ihrem Spiegel sammeln und mit idealisierender Kunst aus dem Jahrhundert selbst ein Muster für das Jahrhundert erschaffen. ...

Eine der ersten Erfordernisse des Dichters ist Idealisierung, Veredlung, ohne welche er aufhört, seinen Namen zu verdienen. ... Alle Ideale, die er auf diese Art im einzelnen bildet, sind gleichsam nur Ausflüsse eines innern Ideals von Vollkommenheit, das in der Seele des Dichters wohnt. Zu je größerer Reinheit und Fülle er dieses innere allgemeine Ideal ausgebildet hat, desto mehr werden auch jene einzelnen sich der höchsten Vollkommenheit nähern. Diese Idealisierkunst vermissen wir bei Hn. Bürger. ...

(16) Hölderlin „Grund zum Empedokles“ (1799): StA. Bd. 4.
S. 151.

Die fremden Formen müssen um so lebendiger seyn, je fremder sie sind, und je weniger der sichtbare Stoff des Gedichts dem Stoffe der zum Grunde liegt, dem Gemüth und der Welt des Dichters gleicht, um so weniger darf sich der Geist, das Göttliche, wie es der Dichter in seiner Welt empfand, in dem künstlichen fremden Stoffe verläugnen. Aber auch in diesem fremden künstlichen Stoffe darf und kann sich das Innige, Göttliche, nicht anders aussprechen, als durch einen um so größern Grad des Unterscheidens, je inniger die zum Grunde liegende Empfindung ist. ...

(F) GRÜNDUNG EINER BÜRGERLICHEN GESELLSCHAFT — IM ZUSAMMENHANG MIT SCHILLERS „SPAZIERGANG“(1795)

(13) Schiller „Der Spaziergang“(Erste Fassung „Elegie“ 1795): NA. Bd.2. Teil 1. S.313f.

Bin ich wirklich allein? In deinen Armen, an deinem 185
Herzen wieder, Natur, ach! und es war nur ein Traum,
Der mich schauernd ergriff, mit des Lebens furchtbarem Bilde,
Mit dem stürzenden Thal stürzte der finstre hinab.
Reiner nehm' ich mein Leben von deinem reinen Altare,
Nehme den fröhlichen Muth hoffender Jugend zurück! 190
Ewig wechselt der Wille den Zweck und die Regel, in ewig
Wiederhohlter Gestalt wälzen die Thaten sich um.
Aber jugendlich immer, in immer veränderter Schöne
Ehrst du, fromme Natur, züchtig das alte Gesetz,
Immer dieselbe, bewahrst du in treuen Händen dem Manne, 195
Was dir das gaukelnde Kind, was dir der Jüngling vertraut,
Nährest an gleicher Brust die vielfach wechselnden Alter;
Unter demselben Blau, über dem nehmlichen Grün
Wandeln die nahen und wandeln vereint die fernen Geschlechter,
Und die Sonne Homers, siehe! sie lächelt auch uns. 200

(G) „DIE DEUTSCHE WÜRDE“ ALS „SITTICHE GRÖSSE“

(14) Schiller „Deutsche Größe“: NA. Bd.2. Teil 1. S.431.

... mitten unter den gothischen Ruinen einer alten barbarischen
Verfaßung bildet sich das Lebendige aus. ...

Die Majestät des Deutschen ruhte nie auf dem Haupt s. Fürsten. Abgesondert von dem politischen hat der Deutsche sich einen eigenen Werth gegründet und wenn auch das Imperium unterginge, so bliebe die deutsche Würde unangefochten. ... Sie ist eine sittliche Größe, sie wohnt in der Kultur u: im Character der Nation, der von ihren politischen Schicksalen unabhängig ist. — Dieses Reich blüht in Deutschland, es ist in vollem Wachsen und mitten unter den gothischen Ruinen einer alten barbarischen Verfaßung bildet sich das Lebendige aus. (Der Deutsche wohnt in einem alten sturzdrohenden Hauß aber er selbst ist ein edler Bewohner, und indem das politische Reich wankt hat sich das Geistige immer fester und vollkommener gebildet.)

(10) Schmidt, Jochen: Hölderlins Elegie „Brod und Wein“. Die Entwicklung des hymnischen Stils in der elegischen Dichtung. Berlin 1968. S.34f.

aber bei aller Freundlichkeit der Verse, die das Bild schöner Erfüllung geben, indem sie die prächtig mit Fackeln geschmückten Wagen vorüberbrausen lassen ... , bleibt der Wertbereich des geschäftigen Lebens doch abgegrenzt gegen den des hohen, geistesinnigen Lebens, ist beschränkt, noch nicht von tiefstem Daseinssinn erfüllt. Später wird im Gedicht nicht mehr von den „Freuden des Tags“, sondern von der ganz anders gearteten dionysischen Freude in nächtlicher Zeit die Rede sein. ... Das in dieser Stunde vom Dasein der Welt selbst Vernehmbare ist aber gerade das, was im Treiben des Tages wegen seiner Unaufdringlichkeit und gesetzlichen Gleichmäßigkeit unbeachtet bleibt und doch viel tieferes Symbol unseres Daseins ist als die Gegenstände, denen unsere Aufmerksamkeit während der hellen Stunden gilt: das Abbild des Lebens selbst, der „immerquillende“ Brunnen, welcher vom steten Werden und vom steten Vergehen spricht; die Glocken, deren Tönen den großen Puls der Zeit erfüllen läßt. — Zwei Hauptmotive der romantischen Poesie, das der Ferne und des Verfließens der Zeit, sind in der zweiten Distichentrias in seltener Reinheit verkörpert. ...

(11) Ungar, Richard: Hölderlin's Major Poetry. The Dialectics of Unity. Indiana University 1975. S.70.

The first three distichs of the evocative first strophe depict the ending of day as a time of cheerful busyness and mundane concern with the practical details of living: Satt gehn heim von Freuden des Tags ... However, the quietude of evening may also be an occasion for desire or nostalgic longing, as when a "lover" or "lonely man", making music, attempts to express and assuage a certain pang of absence. For such men the pleasant inactivity of nightfall is not especially restful, but fosters consciousness of deprivation. They find the incessant flowing of nocturnal fountains analogous to the persistence of time, while bells and cries of watchmen enforce their awareness of time's divisions and its transiency. These sounds thus induce authentic consciousness of temporality. ...

(12) Simon, Martin: Friedrich Hölderlin. The Theory and Practice of religious Poetry. Studies in the Elegies. Stuttgart 1987. S.125/S.127.

The sphere of the first triad is sealed off and enclosed. ... Thus the triad is a search for and attaining of peace. ... The central triad mediates between 'rest' among men and the 'coming' of Night. It is the spell itself, and thus begins with music ('Saitenspiel'). ... Now this gliding transition reflects the poet's agape, love for the world of men that is blind both to Night and to (what lies beyond the poem) Day, knows only its 'Tag' (1.3), a chaotic 'Treiben'. Not just 'satt' and 'wohlzufrieden', all the words describing man's activity are here potentially pejorative: 'geschäftig', 'Werke der Hand', 'Gewinn und Verlust'. ...

(6)-(9)

(6)Heine „Die romantische Schule“(1835f.) I.Buch: Säkularausgabe. Berlin/Paris. Bd.8. 1972. S.35.

Goethe ... Da er nemlich den christlichen Enthusiasmus ... verdrießlich ablehnte, und den philosophischen Enthusiasmus unserer Zeit nicht begriff, oder nicht begreifen wollte, ... : so behandelte er den Enthusiasmus überhaupt ganz historisch, als etwas Gegebenes, als einen Stoff, der behandelt werden soll, der Geist wurde Materie unter seinen Händen, und er gab ihm die schöne gefällige Form. So wurde er der größte Künstler in unserer Literatur, und alles was er schrieb wurde ein abgerundetes Kunstwerk. ...

(E) LANDAUER UND HÖLDERLIN — „EIN SINNIGES HAUPT“(V.4)
UND „EIN EINSAMER MANN“(V.8)

(7)„Landauersche Fußsteppiche- und Wollwarenhandlung“

„Landauersche Fußsteppiche- und Wollwarenhandlung“

(„Stuttgarter Firmenbuch“ 1832)

Vgl. „Verzeichniß der im Königreich Württemberg befindlichen Fabriken und Manufakturen“ aus dem „Württembergischen Jahrbuch 1832“ herausgegeben vom 1820 eingerichteten „Statistisch-Topographischen Bureau“

Christian Landauer (1769-1845), Fabrik. Fabrikat: Fußsteppiche. ...
Jahr der Entstehung: 1797.

(8)Wackwitz, Stephan: Trauer und Utopie um 1800. Studien zu Hölderlins Elegienwerk. Stuttgart 1982. S.30.

Im Gegensatz zur menschlichen Erinnerung, die allein Verluste – die vergangene Jugend und die fernen Freunde – bilanzieren kann, ist die ökonomische Reflexion – die Überlegungen des „sinnigen Haupts“, des bourgeois – affirmativ. „Gewinn und Verlust“ werden „wohlzufrieden“ bedacht, denn die Praxis des Markts hat sich gelohnt. Das Saitenspiel des „einsamen Manns“ weiß nichts von Gewinnen; er hat sich aus der Sphäre der gesellschaftlichen Vermittlung zurückgezogen und formuliert seinen melancholischen Einspruch gegen die optimistische Bilanz des bürgerlichen Wirtschaftssubjekts. ...

(9)Brentanos Tagebuchbrief vom Dezember 1816: StA. Bd.7. Teil 2. S.434.

Sind die ersten sechs Verse nicht das weltliche Treiben ins Reale bis zur Ermüdung, die folgenden sechs nicht die Sehnsucht der Zeit und das Gefühl der Verlorenheit. Tritt im siebten Vers nicht der Rückblick zur verlorenen Unschuld ein, und sprechen die immer quillenden Brunnen nicht von dem ewigen Quell der Verheißung, an dem die Gerechten sich laben?
...

(B) „DAS WERDEN IM VERGEHEN“

(2) Hölderlin „Das Werden im Vergehen“ (1799): StA. Bd. 4. S. 282.

Das untergehende Vaterland, Natur und Menschen insofern sie in einer besondern Wechselwirkung stehen, ... Dieser Untergang oder Übergang des Vaterlandes (in diesem Sinne) fühlt sich in den Gliedern der bestehenden Welt so, daß in eben dem Momente und Grade, worinn sich das Bestehende auflöst, auch das Neueintretende, Jugendliche, Mögliche sich fühlt. ...

(C) BRENTANOS REZEPTION DER „NACHT“

(3) Brentanos Brief an Runge vom 21. Januar 1810: StA. Bd. 7. Teil 2. S. 407.

Besonders ist die Nacht klar und sternenhell und einsam und eine rück- und vorwärts tönende Glocke aller Erinnerung; ich halte sie für eines der gelungensten Gedichte überhaupt. Während ich Solches erlebte, entstand in mir unbewußt die Begierde, ein Gedicht zu erfinden, ...

(4) Brentanos Fortsetzung von Hölderlins „Nacht“ („Brod und Wein“ V. 1-18): StA. Bd. 7. Teil 3. S. 539.

Ach und sie tröstet mich nicht, ich kenn' sie, ich laure sie nahet
Wie zum Gefangenen sich schleicht der Wächter heran
Hier ist ein Becher so spricht sie füll ihn dir mit Tränen
Hier diesen Stein nimm aufs Herz das er dir werde zu Brod
...

(D) DAS KLASSISCHE GRIECHENTUM — ROMANTIKER UND KLASSIKER

(5) Novalis „Fragment von 1798“: Schriften in 4 Bänden. Leipzig 1929. Bd. 2. S. 335.

Die Welt muß romantisiert werden. So findet man den ursprünglichen Sinn wieder. Romantisieren ist nichts als eine qualitative Potenzierung. ... Indem ich dem Gemeinen einen hohen Sinn, dem Gewöhnlichen ein geheimnisvolles Ansehn, dem Bekannten die Würde des Unbekannten, dem Endlichen einen unendlichen Schein gebe, so romantisiere ich es. ...

„ROMANTISIEREN" UND „IDEALISIEREN"

- Über die erste Strophe von Hölderlins „Brod und Wein"

Katsumi TAKAHASHI

*INHALT

- (A) Die Sehnsucht ins Unendliche und die „schäumende Unendlichkeit"
- (B) „Das Werden im Vergehen"
- (C) Brentanos Rezeption der „Nacht"
- (D) Das klassische Griechentum — Romantiker und Klassiker
- (E) Landauer und Hölderlin — „ein sinniges Haupt"(V.4) und „ein einsamer Mann"(V.8)
- (F) Gründung einer bürgerlichen Gesellschaft — Im Zusammenhang mit Schillers „Spaziergang"(1795)
- (G) „Die deutsche Würde" als „sittliche Größe"
- (H) „Die Nacht" und Schillers „Idealisierungskunst"

(A) DIE SEHNSUCHT INS UNENDLICHE UND DIE „SCHÄUMENDE UNENDLICHKEIT"

* Schiller „Die Freundschaft" 10.Str. V.55-60: Weimarer Nationalausgabe (=NA). Bd.1. S.111.

Freundlos war der grose Weltenmeister, 55
 Fühlte Mangel — darum schuf er Geister,
 Sel'ge Spiegel seiner Seligkeit! —
 Fand das höchste Wesen schon kein Gleiches,
 Aus dem Kelch des ganzen Seelenreiches
 Schäumt ihm — die Unendlichkeit. 60

(1) Hölderlin „Brod und Wein"(1800-01) 1.Str. V.1-18: „Die Nacht"(Seckendorfs „Musenalmanach" 1807: Stuttgarter Ausgabe (=StA). Bd.2. S.90.

Rings um ruhet die Stadt; still wird die erleuchtete Gasse,
 Und, mit Fakeln geschmückt, rauschen die Wagen hinweg.
 Satt gehn heim von Freuden des Tags zu ruhen die Menschen,
 Und Gewinn und Verlust wäget ein sinniges Haupt
Wohlfrieden zu Haus; leer steht von Trauben und Blumen, 5
 Und von Werken der Hand ruht der geschäftige Markt.
 Aber das Saitenspiel tönt fern aus Gärten; vielleicht, daß
 Dort ein Liebendes spielt oder ein einsamer Mann
 Ferner Freunde gedenkt und der Jugendzeit; und die Brunnen
Immerquillend und frisch rauschen an duftendem Beet. 10
 Still in dämrriger Luft ertönen geläutete Glocken,
 Und der Stunden gedenk rufet ein Wächter die Zahl.
 Jezt auch kommet ein Wehn und regt die Gipfel des Hains auf,
 Sieh! und das Schattenbild unserer Erde, der Mond
Kommet geheim nun auch; die Schwärmerische, die Nacht kommt, 15
 Voll mit Sternen und wohl wenig bekümmert um uns,
 Glänzt die Erstaunende dort, die Fremdlingin unter den Menschen
 Über Gebirgshöhn traurig und prächtig herauf.

『パンとぶどう酒』第一節「聖なる夜」

(一) 宵和の旋律 (冒頭の歌い始め) RINGS UM RU- HET DIE STADT

付録 (一九八三年十一月五日、日本独文学会中国四国支部・第三十三回研究発表会、徳島眉山会館、口頭発表の原稿および欧文資料など)

ヘルダーリンの『パンとぶどう酒』第一句について

要 旨 (約二二〇字) [第38巻の61]

(1) 第一句の前半 (Rings um ruhet die Stadt;) 一(16)頁

I. RINGS UM RUHET DIE STADT; ... 二(17)頁

II. RINGS UM ... 二(17)頁

III. RINGS UM RUHET DIE STADT; STILL WIRD ... 二(17)頁 四(19)頁

(2) 第一句の後半 (still wird die erleuchtete Gasse;) 四(19)頁

IV. DIE ERLEUCHTETE GASSE 四(19)頁

1) Gasse 四(19)頁 六(21)頁

2) Erleuchtung 七(22)頁 一〇(25)頁

欧文資料 (当日配布)

研究発表要旨 (一九八四年一〇月三〇日刊、日本独文学会中国四国支部編、

三修社刊、『ドイツ文学論集』第十七号、七〇頁—七二頁所収)

一八〇〇年頃成立した思想詩『パンとぶどう酒』冒頭は『Rings um ruhet die Stadt; ...』といふ素通りしてしまふような然りげ無い表現で始まる。ところが何気ないこの歌い出しに実は、ひき続いて歌われる具体的な個々の情景(街路とか馬車)の礎となる基底の律動が既に胎動していると考えられる。

実際この個々の情景の展開で基調となる内向的性格に相応しい内面世界として、思想詩冒頭では、当時の市壁に囲まれた都市の市街が扱われているのである。

思想詩冒頭の考察は、まず六歩格(ヘクサメトロン)詩型を念頭に置いて、歌い出しの副詞『ringsum』の二語への分離、続く主幹動詞『ruhet』における『e』の検討をもつて始めとする。次に、余韻をこまなり三度(第一句、第三句、第六句)も繰り返す『ru』の響き(… ruhet... ruhen... ruht)に注目し、頭韻(『r』—『u』—『ru』)なす歌い出しの『Ruhe』の内向性を考えてみる。この際、同じく夕暮の情緒を歌いながらも平声で流れる『über allen Gipfeln/Ist Ruh』、『ゲーテ』旅人の夜の歌『冒頭』における山気の全き静寂と対比して、思想詩冒頭の次第に下降する律動に示される人間の内面化する動静を考えることにする。

ひき続く第一句後半『... still wird die erleuchtete Gasse』では、まず第一句前半末尾と呼応する頭韻『t』の心に入る響きに留意した後、『松明を飾って馬車が疾駆する』(第二句)に足る大路(Strasse)との対比で、第一句の『街路(Gasse)』のひっそりとした性格を確認した上で、街路にとまる燈火(Erleuchtung)に焦点をうつる。

論究はまず、当時の燈火の効果、またこれが街路の角燈から輝くのか？それとも窓辺の光なのか？月夜(第十四句)における市街照明はどうか？またこの光源の原料は何か？と言った問題を考え、当時の歴史的現実を顧慮し、この関連で、『bürgerliche Talglichter』を『edlige Wachskerzen』に配置したハイネ『ロレン派』の叙述とか、ヘルダーリンの手紙における表現『eine Lampe und Öl』、またフランク家の人々に登場する豪商の発言『die fatalen Öllampen mit ihren Ketten』などを考量する。

最後に、類義語『beleuchtet』を眺めあわせて、第一句の表現『erleuchtet』を考察してみる。例えば『聖書』やそれに纏わる『照明説(Illuminationstheorie)』(アウグステス)、更には当時十八世紀の体制宗教と反目した『啓明結社(Illuminatenorden)』との関連の下、即ち靈魂の光明では専ら『Erleuchtung』が語られる点に留意すると、西欧精神史の難問『Hellas und Hesperien』を中核で探求する思想詩の冒頭を点す燈火としては、『Beleuchtung』よりもむしろ『Erleuchtung』の方が相応しいと言え、それ故に詩人の表現が正に適切であると考えられよう。

(1) 第一句の前半 (Rings um ruhet die Stadt:)

それでは、資料(1)の左上冒頭、第一章から始めます。ヘルダーリンの思想詩『パンとぶどう酒』は『Rings um ruhet die Stadt (通く都市内は静かに安らう)』と歌い出します。第一章の例1)では、思想詩の成立当時、江戸時代後期の西暦一八〇〇年頃における西欧都市の姿を、詩人の別の作品『Die Muße (閑暇)』からの引用で示してあります。この詩『閑暇』では、田園地帯の只中に都市が『Majestätisch ... wie eine ehene Rüstung (青銅の甲冑をながらに堂々とした)』姿を呈しており、甲冑と申しますのは、都市を取り囲む『Stadtmauer (都市の城壁)』を念頭に置いての上であります。本題の思想詩『パンとぶどう酒』の冒頭で「遍く憩っており、この城壁に囲まれており、都市の市街の内部空間 (Innenraum) なのです。このように、思想詩冒頭概念規定は、内面への道を開いております。この内面への開けが、響きや律動でどのように深められてゆくのか？ については、順を追って検討いたしたいと思ひます。

ひき続き、第一章の2)の問題点に移ります。ここに示しましたa)とb)は、残存いたします二つの草稿の冒頭を整理したものです。興味深いことに、始めの例では、冒頭の『Rings um ruhet die Stadt』と云う表現が、なお留保されて歌い出されないうちに留まっており、そこで、この始まりが、有るのと無いのとで、詩句のまとまりが大いに左右されます。即ち、歌い出しの欠けました例a)では、いきなり、個々の情景(つまり街路とか馬車)が登場してまいります。それに対して、その下の例b)では、それらの情景を基礎づける胎動 (Bewegung) と云う表現が、冒頭で既に、しかと腰を据えております。ここでは、この胎動の様子を、以下、詳しく検討して参りたいと思ひます。

まず、思想詩冒頭の二語『Rings um』です。資料(1)の第二章の例1)を御覧下さい。これは、韻律上の問題でありまして、二行連句詩型 (Distichon) の前半は六歩格 (ヘクサメトロン) の律動をとりま

I
1)

I
2)
a)

a) b)

II
1)

すから、冒頭の律動は、古典詩型に則りますと、例a)にございます。うな、「ダクテュロス」或いは「スポンディオス」を取ります。但し、ドイツの韻律では、例b)に見られますような、「トロカイオス」も許容されました。ところで、問題の『Rings um』は、引き続き『... ruhet ...』と歌われますから、「ダクテュロス」はとり得ません。ならば、「スポンディオス」か「トロカイオス」のどちらかです。このことを気にとめておかれまして、第二章の例2) Aussprache (発音) の問題点を御覧下さい。興味深いことは、a) b) c) の三例とも、後半の部分『um』に何より強声を置いている点です。即ち、韻律上、思想詩冒頭は「スポンディオス」をとり、「リンクス・ウム」と母音豊かに朗読されることとなります。この聴覚上での効果を、視覚的にも確かめるのにはしておりますが、副詞『Ringsum』の二語への分離であります。これにしましては、第二章の3)の例、a)とb)が、歴史的な用法への見通しをつけてくれます。殊に、例b)に掲げました『グリム独語辞典』の用例を一瞥しますと、分離されました場合が、比較的、古い時代に見られることが見て取れます。即ち、分離しました表記の方が、分離しない場合よりも、古風な印象を与えると推測できます。その下の例c)を御覧下さい。これは、ヘルダーリン自身の詩作上の用例におきまして、この分離と非分離の問題を考えたものです。この場合は、副詞『Ringsum』の分離と非分離が、くっきりと二分されております。初期の詩作品で非分離でありましたものが、後期の詩作品では分離して参ります。ここには、恐らく、詩人自らの意図が潜んでいるように思われます。とにかく、副詞『Ringsum』の二語への分離が、思想詩冒頭では、「スポンディオス」のゆったりした律動を、より確かなものとするにより、悠然たる音調の流れが、朗々と響き始めたと思ひます。

続きまして、資料(2)へ参りたいと思ひます。第三章の例1)では、内面化 (Verinnerlichung) する響き「ルー」[ru:] が注目されます。この際、頭韻 (Alliteration) に留意しまして、思想詩を読み進みますと、そこに示しました第三句と第六句で、この「ルー」[ru:] の反響が呼応し、この三度の「ルー」[ru:] の繰り返し、読者の耳に印象深く

a)

II
2)
a) b)

II
3)
a) b)

c)

III
1)

余韻をともなつて残ります。ところで、第一句冒頭では、動詞の活用型が《ruht》ではなくて、《ruhe》となつております。

第三章の例2)では、このような活用形の問題につきまして、ヘルダーリンの詩作品からの用例をまとめてみました。ここから、次のことが解ります。初期作品では、《ruht》《ruhn》《ruhs》と云つた活用型の頻度が高いのに対して、後期詩作品では、これらに暖昧母音の加わりました《ruhe》《ruhen》《ruhes》の用例が多くなつております。

このように暖昧母音が付加されますと、動詞の根幹をなします母音「ウー〔u:]」は、続く子音〔r〕に直接阻まれることなく、伸びやかに響き渡ります。このことは、第三章の3)に示しました対比から一層明瞭にお解りになると思います。即ち《ruhe》にして始めて、詩歌の律動として伸びやかに響き渡ることができると考えられます。

この《ruhe》におきまして朗々と響き渡ります諧調(ハルモニア)は、次の例4)に示したように、《...Stad; still...》と言つた頭韻をなす子音〔t〕の反響に落ち着き、深まります。この心に入り、沈み深まる親密な(tiefe Innigkeit)が、内面化する冒頭の流れの一度沈みゆく水面であります。この水の面の鏡の性格を、トラールが「石材にて築きあげられた(Steinern aufgebaut)」と適切に表現しております。そこに掲げました引用を御覧下さい。

以上見て参りました冒頭を、今度は、音調の流れに留意して眺めてみますと、次第に下降する動静に気がきます。即ち、第三章の例5)に示しましたように、上から下に向かいまして音調が《Rings um ruhet die Stadt》と流れ下ります。この動静は、その下に引用しましたゲーテの詩の冒頭《Über allen Gipfen / Ist Ruh, —》に見られます水平な揺らがない音の流れと対比していただきますと、一層はつきりとお解りになるのではないのでしょうか。実際、それぞれの音の流れは、歌われました対象の本性に根ざしております。ゲーテの『旅人の夜の歌』の場合は、大自然の静寂が、揺らがない水平な音の流れに、また、『パンとぶどう酒』冒頭の場合は、人間の動静が、次第に下降する音調の流れに呼応しております。その例5)の右側に示しまし

III 2)

III 3)

III 4)

III 5)

た、思想詩の第六句が、この人間の動静の動きをとらえ、(「屋間に」)忙しかった市の立つ広場が、(夕暮時には)憩つてゐる(„...ruht der geschäftige Markt“)と物語つております。このように、『パンとぶどう酒』冒頭におきましては、躍動と静寂とが相互に反響し合いながら、独自の世界の動静を形造つてゐるのであります。

ここで少しつゝこんで、只今の両者の静けさの相異に思いを凝らしてみましよう。『旅人の夜の歌』の静寂に關しましては、ハンブルグ版で紹介されておりますウィルキンソンの評釈「全き静寂(The perfect stillness)」をここに引用いたしました。詩の冒頭で、それは意識に映じました大自然の全き静寂として把握されます。ところが、その静寂は、意識の内にもみ留まらず、詩の末尾では、人間存在の静止として、即ち「死」として表象されます。《Warte nur, balde / Ruhest du auch. (やがて、お前も大地の懷へと帰るであらう)》。実際、死を前にした老ゲーテ自身が、この意味で詩句を解して、自らの言葉を身をもって体現し、おいおいと涙を流し、「雪のように白いハンカチ(sein schneeweißes Taschentuch)」で「あふれる涙をぬぐつた」と報告されております。

III 5)

こうした脈絡を、「全き静寂は悲哀へと至り、死の形相呈する。」と分析したのが、死を前にしました Jean Jacques ROUSSEAU (ジャン・ジャック・ルソー)でありました。資料での引用を御覧下さい。《Un silence absolu porte à la tristesse. Il offre une image de la mort》とあります。この分析は、ルソーの晩年の遺作『孤独な散步者の夢想』にあらわれます。この際、老ルソーの最大の関心事は「至福(La suprême félicité)」の問題でありまして、「全き静寂」は「至福」へは至らない。と云う考えが、この老哲学者の達した結論でした。ならば、「至福」への道はどこか? と申しますと、その下に引用しました老ルソー自身の言葉によりますと、「内面の動き(mouvements internes)」へと通ずる《Le flux et reflux... (寄せては返す波の動き)》なのであります。

この観点で、『パンとぶどう酒』冒頭の悠然たる律動に留意しますと、六歩格(ヘクサメトロン)と五歩格(ペンタメトロン)の行き交

III 5)

う二行連句の対句の流れが、寄せては返す音調の波動として注目されます。第三章の最後に引用しました二行連句の動詞の意味の変化が、これに呼応します。第一句後半では「生成(Werden)」が、第二句後半では「消滅(Vergehen)」が語られ、相反する動きが相互に反響し合っており、この波動が、内面の動きへと深まりゆく過程におさまって語り出されますのが、思想詩『パンとぶどう酒』の難問「至福なるギリシア」の「天上の祝祭」であり、その祝祭における「キリスト像」なのです。この「至福」への道程として、『パンとぶどう酒』冒頭は波立っておりまして、「死の形相を呈する全き静寂」はここに見い出せないのではありません。即ち、この思想詩では、万象の懐へと無機化してゆく自我の消滅が問題ではなく、死へのめり込むのではなく、死を真正面から直視して精神となりゆく自然の有機的新たな生(Geist der Natur)が探求されているからであります。この脈絡では、ヘルダーリンの友ヘーゲルの大作「精神現象学」序論に興味深い発言が見い出せますから、後にゆっくりと御検討下さい。

(2) 第一句の後半 (still wird die erleuchtete Gasse.)

これにて資料の前半部を終えまして、後半の問題に移りたいと思います。資料(3)と(4)におきましては、第一句末尾の「燈火のともる街路(die erleuchtete Gasse)」について考察します。まず、第四章の1)では《Gasse》が問題となります。その1)の例a)を御覧下さい。第二句での表現にあります《...rauschen die Wagen hinweg. (数台の馬車が疾駆し過ぎ去る)》と言いうことから、この背景としましては「大路(Strabe)」が考えられ、第一句での「街路(Gasse)」と好対称をなします。この点、例b)で示しましたように、仏訳やイタリア語訳のどれも、この《Gasse》にあたりません。ところが、この《Gasse》と《Strabe》との対比は留意すべき点には思われます。更に、例c)を御覧いただきますと、西欧都市の街路に比べて、小アジアの「広い街路(die breiten Gassen)」と云う表現が注目されます。このことから、西欧都市の街路が、狭く、ひっそりしたものと思

III 5)

IV 1) a)

b)
c)

解できます。次に話題となります「燈火(Erleuchtung)」のともる場所は、このように、ひっそりとした街角(Strabenecke)なのであります。

続きます第四章の2)にあります《Erleuchtung》が、今日の最後の話題です。これは翻訳が大変困難な言葉ですので、このまま《Erleuchtung》として話題にさせていただきます。まず、例a)では、当時の街路照明を考えます。訳語で注目すべきは英訳で、情緒豊かに「淡い油燈の燈火(in pale lamplicht)」とあります。これを裏証しますのが、江戸時代の天保十三年の著作「ドイツの農村と家庭での生活」(一八四二年)からの引用であります。ここでは、技術的先進国イギリスの著作家の眼を通して、ロマン主義時代のドイツの街路照明が「劣悪(badly)」であったと報告されております。二番目の例は、トーマス・マンの小説からの引用で、安政年間、一八五〇年代におけるハンザ都市貴族ブデンブロークの発言として記述されております。華美を好む都市の門閥には、新興の「ガス照明(die Gasbeleuchtung)」が好ましく、街路に「鎖をわたして吊した油燈(Ollampen mit ihren Ketten)」の「やちやかな燈火は」、「劣悪(badly)」どころではなく、「唾棄すべきもの(fatal)」として片付けられております。即ち、こう言った門閥には、次のハインェからの引用が語っておりますような高価で華美な「蜜蠟燭(Wachskerzen)」を何本もつけまして、夜の社交広間に煌煌と輝く「裝飾用釣燭台(Kronleuchter)」が念頭にあったからです。他方、「市民の蠟燭(la chandelle bourgeoise)」は、その記述にありますように《bürgerliche Talglichter (庶民的な獣脂蠟燭)》でありました。

この門閥の意識との関連で、例b)では、表現上の類語を考えて三つ並べました。この中で、ドイツ語としましては、《Illuminieren》が最も華やかな印象を与えます。先のブデンブロークの発言に「知りました《Gasbeleuchtung》のように、《Beleuchtung》は、やちやかなと申します」と、物をやらけ出す能動的な照明と考えられますから、思想詩冒頭にございますような、ひっそりとした街路にとる慎まし

IV 2) b)

IV 2) a)

くさやかな燈火といましては、『Erleuchtung』の方が、より相応しいと看做せましよう。

次の例)では、先の都市貴族が唾棄しました「油燈の燈火」に話題が戻ります。引用の文例は、詩人が弟に向って、『Philosophie muß Du studiren,... (お前は、哲学を研究しなければならぬ)』と云う前提の下に、そのために是非とも必要な「一台の油燈と油 (eine Lampe und Öl)」を力説いたします。ハンザ都市の門閥には、不愉快の種でしか有り得なかつた、このささやかな燈火が、詩人兄弟には、心の奥底の魂をも点す光明となり得たわけです。

ところで、この手紙では、屋内照明が問題となっています。そこで翻つて、思想詩冒頭の『Erleuchtung』の光の源を考えてみますと、必ずしも、屋外照明でなくともよいのではないかと思われま

す。この関連で、次に引用しました、大都市パリにおける「市街全域の照明 (Une illumination générale)」とつて「窓辺の光 (les lumières aux fenêtres)」が興味深い実例と考へられます。実は、この件はフランス共和制の国会が王の死刑を宣告しました一七九三年についての記録ですから、思想詩成立当時、一八〇〇年頃の実情を直接に物語っていると看做せましよう。

更に、この屋内照明を裏付けますのが、資料(4)冒頭に示しました例d)の月夜 (Mondnacht) の問題でもあります。そこには、まず思想詩・第一節の第十四句以下の引用があります。うづむは、星辰を散りめた (Voll mit Sternen)」「月 (der Mond)」の「夜 (die Nacht)」が「輝き渡りて (Glänzt... herauf)」をGETして「月夜 (Mondnacht)」に関連する発言と考へまう。月がなら闇夜に限つて (only on dark and moonless nights)」「先程の「劣悪な照明 (badly lit)」がなやめぬおぼや。

以上、これまでは、『Erleuchtung』の自然物理の側面を問題といたしました。が、私達、人文科学者 (Geisteswissenschaftler) には、この自然物理 (フイズィカ: Physica) の後 (メタ: Meta) に、メタフイズィカ (Metaphysica) ・形而上学の問題が残つておられます。この「哲学の光」の関連は、もはや、『Beleuchtung』とは屈をさせぬから、専ら、

IV 2) c)

『Erleuchtung』が話題となります。

この『Erleuchtung』を、ラテン系の言葉では、『Illuminatio』とか『Illumination』と申します。英訳は物理的に「淡い燈火の光」と意識しただけでありましたが、イタリア語訳や仏訳におきましては、この『Illuminatio』を念頭に置きまう、『Illuminatio』と訳しております。これは、資料(3)に引きます第IV章の2)の例a)に示してありました。このラテン系の言葉の用例を、第IV章の2)の例e)では、フランス革命期に刊行されました権威あるフランス学士院の辞書 (Dictionnaire de l'Académie française) の第五版を資料として検討してみました。うづむは、自然物理の光の例とともに、精神的な「福音の光 (illumine par l'Évangile)」が言及されています。次の例は、伊独辞典における『Illuminismo』の説明の件です。イタリア語では「啓蒙 (Aufklärung)」を『Illuminismo』と申します。従つまして既成宗教キリスト教の教会の内と外におきまう『Illuminatio』が問題となります。とりわけ、十八世紀には、興味深い秘密結社『Illuminatenorden (啓明結社)』の運動があります。

IV 2) e)

IV 2) d)

この啓明主義運動に関連します当時の発言が、次に掲げましたヘルダーリンの友シュリングからヘーゲルに宛てた書簡にあらわれます。うづむは、「民主主義者 (Demokrat)」」「啓蒙主義者 (Aufklärer)」と言つた進歩思想、これを保守体制の側からとらへずれば、危険思想の脈絡で「啓明主義者 (Illuminat)」が語らるべきまう。これが、「暴政 (Despotismus)」とか「無知 (Ignoranz)」迷信 (Aberglaube)、「狂信 (Schwärmerei)」に對立する。この『Illuminat』を、フランス語のく表現する、『Erleuchter』となります。この『Illuminatenorden (啓明結社)』は、バイエルンで創設され、基本的に「アングロ・サクソン系の「自由石工結社 (Freimaurerorden)」と類似した性格を有し、当時の保守主義の代表的組織と申せます。「イエズス会 (Jesuitenorden)」に對抗いたしました。そしてこれは、ヘルダーやヴィーランドたちも加入していた知識人の組織であり、単な

る政治運動ではありませんでした。ヘルダーリンに関しましても、そこに掲げましたグラスルの学術論文『ヘルダーリンと啓明主義者たち (Hölderlin und die Illuminaten)』と申します研究があるほどです。この脈絡を今日では無視できなくなっております。

続きます例)には、キリスト教の『新約聖書』からの用例を示してあります。始めの二つの例は、『ヨハネ福音書』の一の九にありまして、救世主キリストの光 (Erleuchtung: illuminatio Christi) に言及しております。その下にあります二つの例は、『グリム独語辞典』には引用されておりましたが、このキリストの光を雄弁に物語りました使徒パウロのコリント人への書簡からとられたものです。両方の訳とも歴史上の名訳で、上は教父ヒエロニムスのラテン語訳で、今日でもカトリック教会の公認聖書 (Vulgata) となっております。その下は、ルターの格調高い独訳です。ここでは、これを読んでおきましょう。

『Denn Gott, der sprach: (すなわち、神が語られた)』『Licht soll aus der Finsternis (光が闇から)』『hervorleuchten; (トーン・フォーア・ロベヒン) (輝き出るように、と)』『der ist als heller Schein in unsern Herzen (その神は、明るき輝きとして、私達の心の中に)』『aufgegangen: (アッ・ゲ・ガンゲン) (立ち現われた)』『damit wir erleuchtet werden (私達が照明されるために)』『zur Erkenntnis der göttlichen Herrlichkeit (神の栄光の認識のため)』『auf dem Angesicht Jesu Christi. (イエス・キリストを直視して)』。

最後の例)に参りましょう。ここでは、アウグスティヌスの『三位一体論 (De Trinitate)』から、『私達の照明 (Erleuchtung)』に關します件の一部を独訳にて味読しておきましょう。

『Unsere Erleuchtung ist Teilnahme am Worte, das heißt am Leben, welches das Licht des Menschen ist.』(『私達の照明とは、ロゴスに与かること、即ち、人の光である生命に与かることである。』)『Indem also Christus seine der unseren ähnliche menschliche Natur mit uns verband.』(『即ち、キリストが、私達に類似の人間の本性を自ら取られ、私達に結びつき』)『Iob er die

IV 2) f)

in unserer Ungerechtigkeit liegende Unähnlichkeit auf.』(人間の正しくない性質に根ざす、私達のキリストとの不類似を昇華させられたのです。『Indem er unserer Sterblichkeit teilhaftig wurde.』(『私達の死すべき性質に、キリスト自身も与かられ』)『mache er uns seiner Göttlichkeit teilhaftig.』(『自らの神々しい性質を、キリストが、私達に与からしめられたのである。』) この件で、印象深く思われますのは、いささかも、説教臭くなく、押しつけがましくない、慎ましい探求の姿であります。一種、対句風の漸増する表現で、ひたむきに問いつづけます。強靱な思索の言葉の力は、次第に生育します自然の息吹きに似たものを、思わず読者に伝えます。『パンとぶどう酒』に限らず、ヘルダーリンの後期の大作に一派通ずると申せますこの性格が、千数百年をも経ました歴史的過去のキリスト教父の魂にも宿り、思想詩・冒頭の、慎ましくさやかな『照明 (Erleuchtung)』と美しく協和しながら、思想詩『パンとぶどう酒』のより本質的な問題であります『キリスト論』へと、一条の光を投げかけておりますのが、私には大変興味深く思われます。

IV 2) g)

- 一 静かに安らう都市。ひそやかに街路に燈火がともし
 - 二 して松明に飾られて騒然と馬車は疾駆し過ぎ去る。
 - 三 満ち足りて家路へと、昼間の歓びに別れを告げ、安らぎを求め歩みゆく人々。
 - 四 して収支得失を慮る思慮深い家長は
 - 五 悠然と和やかにわが家にくつろぐ。(黄昏の今は) 葡萄も花束もなく。
 - 六 して手仕事の品々もなく安らう、(昼間は) 忙しき広場の市場。
 - 七 だが他方、堅琴の音が彼方の庭園から響いて来る。恐らくは
 - 八 そこで恋人が奏で、或いは狐独な者が
 - 九 彼方の友を想いつつ、また若き日を偲びつつ。して噴泉が
 - 一〇 滔々と湧き、清冽な水しぶきをあげ送り、芳香に匂う花壇を濡している。
 - 十一 ひそやかに黄昏の夜気に響き渡る晩鐘の音
 - 十二 して時刻を想い、その数を夜警は声高に呼ばわる。
 - 十三 今や又ある息吹きが到来し、林苑の樹頭を(天上へと) 揺り動かす。
- (『パンとぶどう酒』第一節、第一句―第十三句)

- 2)ERLEUCHTUNG ————— ... ; still wird die erleuchtete Gasse, 1
- d)Mondnacht
- ° Sieh! und das Schattenbild unserer Erde, der Mond 14
 - Komet geheim nun auch; die Schwärmerische, die Nacht kommt 15
 - Voll mit Sternen und wohl wenig bekümmert um uns 16
 - Glänzt die Erstaunende dort, die Fremdlingin unter den Menschen 17
 - Über Gebirgeshöhen traurig und prächtig herauf. 18
 - ("Brod und Wein" 1.Str. : FrA 6. 210)
- °The towns, and that only on dark and moonless nights, are badly lit by lamps, hung, as in France, from a rope across the street. Here one twinkles, and at a vast and solitary distance glimmers another ... (Howitt,W.:op.cit. 1842; Bruford:Germany in 18. cen. 1935. S.212)
- e)Illumination(Erleuchtung) - illuminismo(Aufklärung) - Illuminatenorden
- °Toute la Ville étoit illuminée par les feux de joie, qu'on avoit allumés dans les rues. (Dictionnaire de l'Académie française. 5.Aufl. Paris. J.J.Smitz et C^e. Vol. 1. 1799. S.707)
 - °Ce Pays là n'avoit pas encore été illuminé par l'Évangile.(ibd.)
 - °illuminismo m. <Stor> Aufklärung f. - illuminista I s.m.f. Aufklärer m.(f. -in). - II a. - illuministico. (Sanzoni:Dizionario delle lingue italiana e tedesca. 1. 655)
 - °Der Despotismus unsrer philosophischen Halbmänner jener moralische Despotismus Ignoranz, Aberglaube und Schwärmerei (Schelling an Hegel 21.7.1795:PhB Hegel. Briefe. 1. 27.)
 - Fragen ..., die man hier und da wegen meiner gemacht hat, ob ich Demokrat, Aufklärer, Illuminat u.s.w. seie? (Schelling an Hegel Jan. 1796: op.cit. 1. 35) ((ILLUMINATENORDEN (1778- ca.1785)))
 - °Societas Jesu: JESUITENORDEN ←→ (Secta massonica:FREIMAUERORDEN)
- f)Biblia sacra: (Vgl. Graßl,H.:Hölderlin und die Illuminaten. 1971)
- °das war des warhaftige liecht, welchs alle menschen erleuchtet. Joh. 1.9 (Grimm:Deutsches Wörterbuch. Bd.3. 1862. S. 904)
 - °Erat lux vera, quae illuminat omnem hominem (Biblia sacra juxta vulgatam Clementinam. Paris. Desclée. 1956. S.[98])
 - °quoniam Deus, qui dixit de tenebris lucem splendescere, ipse illuxit in cordibus nostris, ad illuminationem scientiae claritatis Dei, in facie Christi Jesu. (2.Kor. 4.6.: Vulgata. S. [192])
 - °Denn Gott, der sprach: Licht soll aus der Finsternis hervorleuchten, der ist als heller Schein in unsern Herzen aufgegangen, damit wir erleuchtet werden zur Erkenntnis der göttlichen Herrlichkeit auf dem Angesicht Jesu Christi.(Luther.Stuttgart.Deutsche Bibelstiftung. 1975 S.190)
- g)ILLUMINATIO ——— REVELATIO(Offenbarung) CHRISTI.
- °Inluminatio quippe nostra : Unsere Erleuchtung ist Teilnahme am Worte, das heißt am Leben, welches das Licht der Menschen ist. Indem also Christus seine der unseren ähnliche menschliche Natur mit uns verband, hob er die in unserer Ungerechtigkeit liegende Unähnlichkeit auf. Indem er unserer Sterblichkeit teilhaftig wurde, machte er uns seiner Göttlichkeit teilhaftig. (AUGUSTINUS "De Trinitate" IV.2. Corpus Christianorum. Series Latina. Tomus L. Opera. Pars XVI. 1.Turnhout.Brepols.1968.S.163-4: Bibliothek der Kirchenväter.II.Reihe. Bd.13. S.143. Ins Deutsche übers. v. SCHMAUS, Michael)

IV. DIE ERLEUCHTETE GASSE

1) GASSE

- a) ; still wird die erleuchtete Gasse
Und mit Fakeln geschmückt rauschen die Wagen hinweg --- STRASSE ↑
(Plural) ---stratum
(Pflaster)
---stratus
- b) rue ----- via ----- street -----
(Roud: BP. 808) (Vigolo: NUE.33.101) (Hamburger: 243) (ausgestreckt)
↑ ↓
ruelle vicolo lane
- c) Mir Asia auf, und geblendet sucht' (Hölderlin
Ich eines, das ich kennete, denn ungewohnt "Patmos" V.31-V.33:
War ich der breiten Gassen, ... StA 2. 166)

2)ERLEUCHTUNG

- a) illuminée ----- illuminata ----- in pale lamplight (Hamburger)
(Roud) (Vigolo)
- °The towns ... are badly lit by lamps, hung, as in France, from a rope across the street. Here one twinkles, and at a vast and solitary distance glimmers another ... (Howitt, W.: The rural and domestic life of Germany. 1842)
- °Ich kann nicht sagen, welche Genugtuung ich empfinde, daß nun die Arbeiten für die Gasbeleuchtung begonnen haben und endlich die fatalen Öllampen mit ihren Ketten verschwinden;
(Mann, Th.: Buddenbrooks. Berlin (Aufbau) 1956. Bd. 1, S. 369)
- °in großen Häusern, ... daß nicht bürgerliche Talglichter statt adliger Wachskerzen auf die herrschaftliche Tafel gesetzt werden: plutôt que de voir la chandelle bourgeoise remplacer la bougie aristocratique sur la table de leurs seigneurs (Heine: Die romantische Schule. Säkularausgabe. 8. 22: 16. 123)
- b) erleuchten — beleuchten — illuminieren
- °die lampe konnte das zimmer nur spärlich erleuchten.
(Grimm. Bd. 3 (1862) S. 904)
- °die stadt strahlte von beleuchtungen. (Grimm. Bd. 1 (1854) S. 1446)
- °Erleuchten, ... In engerer Bedeutung, mit vielen Lichtern oder Lampen hell machen (illuminieren). (Campe. Bd. 1 (1807) S. 989)
- c) LAMPE und ÖL
- °Philosophie mußst Du studiren, und wenn Du nicht mehr Geld hättest, als nötig ist, um eine Lampe und Öl zu kaufen, und nicht mehr Zeit, als von Mitternacht bis zum Hahnenschrei. Das ist es, was ich in jedem Falle wiederhole, und das ist deine Meinung.
(Hölderlin. Br. 126 : 13.10.1796 : StA 6. 218)
- °La longue séance fut levée à onze heures du soir. Une illumination générale fut ordonnée dans l'intérêt de la sûreté publique. Null chose plus sinistre. Partout les lumières aux fenêtres, pour éclairer les rues désertes; ... (Michelet, Jules (1798-1874): Histoire de la Révolution française (1847-53): BP 2. 176)
- °LA TOUR, George (1593-1652): La Madeleine à la veilleuse (1635-40)
=Le LOUVRE=

III. Rings um ruhet die Stadt ; ...

- 1) (r) — [u:] — {rū:} — VERINNERLICHUNG
... zu ruhen die Menschen (V.3: FrA 6. 210)
... ruht der geschäftige Markt (V.6: FrA 6. 210)
- 2) ruhet — [e]
a) ruht ("Wörterbuch zu Fr. Hölderlin" 1. Teil S. 541)
(StA I. 3&, 4, 103, 109, 170, 225, 241, 278, 280, 281&, 436, 506, 581)
(StA II. 39, 41, 60, 81, 84, 90, 97, 110, 129, 146, 147)
b) ruhet
(StA I. 48&, 306, 401)
(StA II. 16, 31, 41, 90, 113, 118, 146, 208&, 250, 317, 324)
a) ruhn
(StA I. 75, 76, 180, 208, 225, 236&, 265, 277, 280, 292, 293, 308)
(StA II. 15, 52, 99, 110, 128, 218, 417, 603, 608)
b) ruhen
(StA I. 76&, 107, 236)
(StA II. 72, 76, 90, 108, 189, 217, 225, 270, 412, 596)
a) ruhest (StA I. 244, 272)
b) ruhest (StA II. 37, 103, 691&)
- 3) Rings um ruhet die Stadt — Rings um ruht die Stadt
Rings um ruht nun die Stadt
- 4) Rings um ruhet die Stadt ; still — TIEFE INNIGKEIT
(t) Ihr großen Städte (Trakt: Abend-
Steinern aufgebaut land. 4. Fas.
In der Ebene! V. 39-V. 41)
(Dichtungen und Briefe. S. 77)

5) = ABENDDÄMMERUNG =

Rings um ruhet die Stadt; ruht der geschäftige Markt. (V. 6)

Über allen Gipfeln → MENSCH — Dynamik
Ist Ruh, ———→ NATUR ——— Statik
In allen Wipfeln (Goethe: Wanderers Nachtlied.
Spürest du HA 1. 142)
5 Kaum einen Hauch;
Die Vögelein schweigen im Walde
Warte nur, balde 'The perfect stillness' ——— SEIN
Ruhest du auch. (Wilkinson, E.M.: HA 1. 555)

°Un silence absolu porte à la tristesse. ———
Il offre une image de la mort.
(Rousseau: Les Rêveries du promeneur soli-
taire. V.: BP 1. 1047)

°Le flux et reflux de cette eau, son bruit continu mais
renflé par intervalles frappant sans relache mon oreille
et mes yeux supplétoient aux mouvemens internes
(Rousseau: op. cit. BP 1. 1045)

6) = DISTICHON (Hexameter/Pentameter) =

(StA 2. 90)
Rings um ruhet die Stadt; still wird die erleuchtete Gasse, — WERDEN ↑
Und, mit Fackeln geschmückt, rauschen die Wagen hinweg. ——— VERGEHEN ↓

TOKUSHIMA 5. 11. '83

Über den ersten Vers von Hölderlins "Brod und Wein".

TAKAHASHI, Katsumi
(Universität Kochi)

I. RINGS UM RUHET DIE STADT; ...

1) Innenraum innerhalb der Stadtmauer.

Fernher dämmert die Stadt, wie eine eherne Rüstung
Gegen die Macht des Gewittergotts und der Menschen geschmiedet,
Majestätisch herauf, und ringsum ruhen die Dörfchen;
("Die Muße" V.21-23: StA I.236)

2) Beweggrund vom ringsumruhenden Stadtbild in der Abenddämmerung.

- a) still wird die erleuchtete Gasse
Und mit Fakeln geschmückt rauschen die Wagen hinweg
(Konstituierter Text nach der Hs 14: FrA 6.205, 238)
- b) Rings um ruhet die Stadt; still wird die erleuchtete Gasse,
Und mit Fakeln geschmückt rauschen die Wagen hinweg.
(Hs 5 : FrA 6. 210-211)

II. RINGS UM

- 1) Hexameter a) — — oder — ∪ ∪ (Klassisch)
=Daktylos= Singe den Zorn, / Ihn, der entbrannt ...
— ∪ ∪ | ———— — ∪ ∪ | ————
=Spondeios= Und viel tapfere Seelen ... (Voß; Homeros: Ilias I.1-3:
— — | ———— dtv S.5)
b) — ∪ (Deutsch)
=Trochaios= Saget, Steine, mir an, ... (Goethe: Römische Elegien.
— ∪ | ———— I. 1: HA I. 157)

2) Aussprache ——— UM-Betonung

- a) ringsum ['rɪps 'ʊm] (Der Große Duden 6. 641)
b) rings 'um (Wahrig: Deutsches Wörterbuch. S.2951)
c) rings·um [rɪps-ʊm, rɪps-ʊm] (博友社: 大独和辞典. S. 1200)

3) Rechtschreibung — RINGS UM oder RINGSUM

- a) Campe: Wörterbuch der Deutschen Sprache. Bd.3(1809) S.842.
Rings, adv. ——— Rings um die Stadt, ———
Ringsum, adv. ——— Und ringsum lag ein schimmerndes Gemisch ———
- b) Grimm: Deutsches Wörterbuch. Bd.8(1893) S.1015.
RINGSUM, adv. ——— rings um ——— ringsum ——— ringsumb
——— rings umb ——— ringest um ——— ringest um ———
ringsummen ——— ringsummen ——— ringsumb, ringsum
- c) Wörterbuch zu Friedrich Hölderlin auf der Textgrundlage der StA.
I. Teil: Die Gedichte. 1983. S.535(rings, ringsum) S.693-4(um)
Ringsum(StA I.7), ringsum(I.25), ringsum(I.89), ringsum(I.236),
um mich rings(I.294), ringsum(I.300),
rings um(II.55), Rings um("Brod und Wein" V.1; II.90), rings, um
Klarheit("Patmos" 2., 3. und 4. Fassung: II. 173, 179, 184),
rings um(II.385), rings um(II.670), rings um(II.699)

III. Rings um ruhet die Stadt; ... 1) 2) 3) 4) 5) 6)

IV. DIE ERLEUCHTETE GASSE

- 1) GASSE a) b) c)
2) ERLEUCHTUNG a) b) c) d) e) f) g)

『パンとぶどう酒』第一節「聖なる夜」

(三) 燈火と松明

付録 (一九八五年五月二十五日、日本十八世紀学会・第七回大会、高知大学人文学部、口頭発表の原稿および欧文資料など)

松明と燈火——十八世紀啓蒙オペラ文化とヘルダーリンの古典祝祭空間

(詩歌『パンとぶどう酒』冒頭の都市像における光の対位法)

要旨 (約八〇〇字)	一(26)頁
要旨 (約四〇〇〇字)	二(27)頁—四(29)頁
本論	

(1) ドイツの現状	四(29)頁—五(30)頁
(2) 静かに安らう都市	五(30)頁—六(31)頁
(3) 光の対位法	六(31)頁—七(32)頁
(4) 思慮深い家長	七(32)頁—七(32)頁
(5) 門閥と啓蒙オペラ文化	七(32)頁—八(33)頁
(6) 古典悲劇祝祭の時空	八(33)頁—九(34)頁
(7) 心の燈火の光	九(34)頁—一(36)頁
欧文資料 (当日配布)	一(37)頁—一七(42)頁
(「L'éclat des torches」 et « les lumières aux fenêtres » — La culture de l'opéra au XVIII ^e siècle des lumières et l'espace de la fête classique de Hôlderlin)	

研究発表要旨 (一九八五年四月刊『日本十八世紀学会報』第十八号、五頁—六頁所収、約八〇〇字)

啓蒙期は光の世紀と云われ、通常は高価な蜜燭燭を幾本も点した華麗な装飾用釣燭台が煌煌と輝いた門閥の夜会が連想され易いが、しかし実際に巷では慎ましい燈火の光が街角の窓辺を密やかに点していた古式な時代であった。蓋しこの時期は、この燈火に憩う都市生活の只中から謹厳な市民意識が次第に交響曲の如く悠然と生育し、やがて啓蒙オペラ文化に花咲いた農業本位の既成封建体制を崩壊させ、新たな十九世紀資本主義市民社会へと開花する発酵と解体なす過渡期でもあった。この啓蒙と革命なす十八・十九世紀の転換点において、南西ドイツの詩人ヘルダーリンは、正にこの滅びの中で生まれるものに静聴し、思想詩『パンとぶどう酒』冒頭で、静かに安らぎ憩いゆく黄昏の都市像に兆す動静を詩歌象徴の調べに乗せ歌い上げた。

新旧の相克なす動静は、第一句で「密やかに街路に点る燈火の光 (Beleuchtung)」と第二句で「騒然と疾駆し過ぎ去る幾台もの馬車に飾された松明」の輝き (Beleuchtung) との対比に読み取れ、この光の対位法は同時に、第三句で「家路へと憩いを求め人々が歩む」街路 (Gasse) と門閥の自家用車たる「幾台もの馬車が疾駆する」大路 (Strasse) との場の対位法に呼応する。この際詩人が、大路を華麗な夜会へと疾駆する松明照明 (Beleuchtung) の馬車を過ぎ去る (hinweg) と歌い、これに対して第四句から第五句にかけて「和やかに悠然とわが家にくつろぐ思慮深い家長」を温かい眼差しで見守り、この憩いの場の窓辺を点す燈火の光こそが、深沈せる内面の道を歩み思想詩の最高潮で歌い出される「至福なるギリシア」の悲劇祝祭なす蒼穹に開かれた清澄なる時空に繋がるのであり、この悠久なる天地自然を母胎とした悲劇誕生の時空を睨み合せて始めて、屋内に閉じた啓蒙オペラ文化の既存特権空間が過ぎ去ると歌われ得るのである。

「松明と燈火」とは言わば「ヴォルテールとルソー」とか、「啓蒙主義とロマン主義」という対概念である。故に切り離して別々に考えるのではなく、両者が相互対立しながら織り成す明暗を話題としなくてはならない。

- 一 静かに安らう都市。ひそやかに街路に燈火がともし、
- 二 して松明に飾られて、騒然と馬車は(大路を)疾駆し過ぎ去る。

『パンとぶどう酒』の冒頭二句である。この二句は単に韻律上で六歩格と五歩格の対句を成しているのみならず、光の明暗(燈火と松明)とか場の対比(街路と大路)とともに、「生成と消滅」の相克をも浮き彫りにしつつ、現存を一色で塗り潰すことなき「調和ある対立」の構図の下に歌い上げている。

韻律上で注目されるのは、各句の後半部である。対句前半なす第一句の六歩格後半では、次第に打ち寄せる律動の波が高潮を目指す。他方、対句後半なす第二句の五歩格後半では、逆に引潮となり、文字通り「過ぎ去る(hinweg)」。

- 一 Rings um ruhet die Stadt: still wird die erleuchtete Gasse,
- 二 Und, mit Fackeln geschmückt, rauschen die Wagen hinweg.

第一句の後半で高潮なすのは「エーロイヒテ(erleuchtete)」の部分で、正に此所に「燈火の光(Erleuchtung)」が宿る。他方「松明に飾られ」た「馬車が過ぎ去る」と歌われる第二句末尾「ヴァーゲン・ヒンヴェーク(Wagen hinweg)」が、これと好対称なす引潮を形造る。かくして文字通り「燈火」が「生成(wird)」う、同時に「松明」が「馬車」とともに「過ぎ去る(hinweg)」こととなる。

この「消滅の只中での生成(Das Werden im Vergehen)」を織り成す明暗を、私は「松明(Beleuchtung)と燈火(Erleuchtung)」として擲んだ。この微妙な両語の対比を大胆な比喩で語れば、前述の言葉で「ヴォルテールとルソー」とでも表現できよう。言わば多才多芸に輝く貴族ヴォルテールがフランス古典主

義宮廷文化の終焉の「松明」として「過ぎ去る」のに対し、他方で独学独歩の謹厳な市民ルソーは来たるべき革命の「燈火」として「生成」して来る。この十八世紀西欧の現実に対応して、正に「松明と燈火」の両者が織り成す明暗が、思想詩『パンとぶどう酒』冒頭で形造られる。

当時の音楽史を瞥見すると、これはバッハからヴィーン古典派をへてベートーヴェンへと雄飛するドイツ精神が、在来のロココ風フランス趣味に凱歌を挙げる「発酵と解体」の時期である。この折に言わば「松明」に輝く啓蒙オペラ文化に対して、あたかも「燈火」に似て「ひそやかに」目立たず「マタイ受難曲」の如き稀有の大作が「生成」したのであり、正にこの「燈火」を継承したベートーヴェンやヴァーグナーが十九世紀西欧音楽の動向を決定してゆく。此所に『悲劇の誕生』第十九章でニーチェが力説する「ドイツ音楽、殊にそのバッハからベートーヴェンへ、ベートーヴェンからヴァーグナーへの偉大な日輪の歩み」が「オペラ文化(Cultur der Oper)」に立ち開かる脈絡が考え併されるのである。

ところで、この「ドイツ音楽、殊にそのバッハ」の作品は、十八世紀ドイツ市民社会から遊離した特権階級の華麗な宮廷オペラ文化と異なり、むしろ日常の夕暮に開かれた祈りの場で静かに力強く奏でられたと想像される。

即ち恰も高きより、かの壮麗に調律された、(教会の)風琴(Orgel)より
あの聖なる(祈りの)会堂では、
清冽なる(響きの)噴泉が滔々と、尽きせぬ(音の)管また管から、
序曲なして、目覚めよと呼ぶ声が、……

讃歌「ドーナウの源で」の残存草稿冒頭でヘルダーリンは、かく自らの新教プロテスタント教会オルガン音楽の様を雄渾に歌い上げている。当然十八世紀オルガン音楽の精華は北ドイツのプロテスタント教徒セバステリアン・バッハの作品群に他ならないと言えよう。

もし日曜祝祭日なら教会において、当該の都市の夕暮には礼拝とともに楽音が響き渡ったと思われるが、蓋し『パンとぶどう酒』の第六句に「(黄昏に)安らう(昼間は)忙しい市場(der geschäftige Markt)」とあることから、目下は週日であり、新教キリスト者は教会へ赴かず、むしろ「悠然と和やかにわが家にくつろぐ」と考えられ、この日常の只中に「夕べの祈りの歌(Abendlied)」

が心に響く。

- 三 昼間の歎びに別れを告げ、満ち足りて家路へと安らぎを求め歩みゆく人々。
- 四 して収支得失を慮る思慮深い家長は
- 五 悠然と和やかにわが家にくつろぐ。……

『パンとぶどう酒』第三句以下第五句までは、このように市民の夕暮の姿へと目が留まる。第三句で「歩みゆく人々 (geh'n heim... die Menschen)」は恐らく「燈火のともる街路 (Gasse)」(第一句)を、他方オペラ劇場へと「松明に飾られ馬車」は大路 (Strasse) を「疾駆し過ぎ去る」(第二句)と読める。此所に場の対比が明瞭に読み取れる。つまり言わば自家用車に乗り広い「大路」を遊興へ赴く門閥と、狭い「街路」を徒歩で「家路へと歩みゆく人々」が明暗を成す。そして後者の狭い「街路にひそやかに燈火がともる」のである。因みに当日は明かす「月夜」(第十四句-第十六句)なので、当該の「燈火」とは「街燈」ではなく、屋内から洩れる「窓辺の光」と考えられる。そしてこの「窓辺の燈火の光」の点る屋内には静かに市民が憩う場が拡がり、この広がり包まれ詩人ヘルダーリンも心落ち着けて、古典ギリシア悲劇を「窓辺の光」の下で読み耽ると想像されるのである。

「至福なるギリシア! …… 偉大なる運命が轟く」(第五五句以下)と歌う古典詩文の友ヘルダーリンが、事もあろうに此所では「収支得失を慮る家長」へと眼差を落とし、しかもこれを「思慮深い家長 (ein sinniges Haupt)」(第四句)として温かく見守り肯定している。この脈絡は詩歌の響きから考えると、現金勘定と言うよりは、むしろ日々反省する心の揺れ動きを示し、故に「家長」で「仕事第一 (Les affaires avant tout)」を旨とするような「抜かりのない商人」(手塚富雄訳)を想像するのは難い。実際に詩人の伝記を細いてみると、興味深いことに「思慮深い家長」の背後には親友ランタウエルが、即ち詩人の故郷シュヴァーベン^{シュヴァーベン}の領邦ヴェルテムベルクの首都シュトゥットガルト在住の裕福な毛織物商人の姿が思い浮かぶ。因みに『パンとぶどう酒』成立に先立つ約半年間(一八〇〇年夏六月から翌年一月)ヘルダーリンは、この親友の商館に部屋を借り手厚くもてなされていたのである。

当該の富豪の商館を念頭に置くと、『パンとぶどう酒』冒頭は相当に具体化で

きる。まず「松明に飾られた馬車」は、今日のケーニヒ大路 (König-Strasse) を中央駅方面へと、当時の宮廷オペラ劇場を目指し「疾駆し過ぎ去る」と読める。他方この「騒然と馬車が疾駆」するのを喧噪として耳にする詩人は、ケーニヒ大路と学院通り (Gymnasiums-Strasse) が交差する付近に建っていた当時のランタウエル邸の一部屋で古典詩文に目を落す。更に教会の「鐘の音」(第十一句)や「夜警の時を告げる声」(第十二句)のみならず、「滔々と逝る噴泉」(第九句-第一〇句)の躍動にも耳を澄ます詩人の心の淵を、何時となく「騒然と馬車が疾駆し過ぎ去る」のである。

かく深沈し内省する魂の歌声 (Seelengesang) としつ『パンとぶどう酒』冒頭は決して都市生活の描写とか記述などではない。むしろこの冒頭は、『マタイ受難曲』を締め括る合唱の歌声「優しき (sanfte) 安らぎ (Ruh)」を告げ、歌い始めて「静かに安らう (Rings um ruhet) 都市」(第一句頭)で「Ruh」と響く「安らぎ (Ruh)」の調べが、引き続く第三句「安らぎ (ruhen)」と第六句「安らう (ruht)」へと木霊してゆく。蓋しこの「悠然と和やかにわが家にくつろぐ (wohlzufrieden zu Haus)」(第五句)と高唱される都市生活の只中に「ひそやかに生成 (still wird)」する「燈火の光 (Erleuchtung)」こそは、新たに勃興して来る大革命 (一七八九年) 後の謹厳な市民意識「今や既に王の時代ではない」の誕生を告げる。そして正にこれが「運命」(一八〇八年)や『復活』(一八九四年)と題される古典交響曲の如く雄渾なる「至福なるギリシア」を目指し、旧封建体制下に咲いた啓蒙オペラ文化を色褪せさせるのである。これは言わば「松明」に輝く華美な宮廷オペラ劇場前の「飲宴の園」を飾るヘレニズム風の優婉な裸体像に対し、慎しき深い古典ギリシア芸術の「優美と尊厳 (Anmut und Würde)」(シラー)が立ち開かるのに似ている。

ところで『パンとぶどう酒』の焦眉の急は、何と言おうが神人キリスト像である。但し決して「聖書」からではなく、これは敢て「至福なるギリシア」に現象する「神話の神」に他ならない。つまり讚美歌にしばしば見られるような彼岸への単なる歓声「ハレルヤ」に終ることなく、内省する魂の淵でキリストが『マタイ受難曲』の如き芸術美へと結実せねばならない。この啓蒙思潮の要請に応えて歌われる『パンとぶどう酒』のキリスト像は、この思想詩の終結部において「松明をかざす者 (Fackelschwinger)」(第一五五句)として、彼岸なす「至福なるギリシア」の悲劇誕生の時空から此岸の「西欧の夜」へと現われる。此所では既

に第二句末尾で彼方へと「消滅」した「松明」が、今度は成仏して彼方からキリストとともに「生成」して来る。蓋しこの「松明をかざす者」との邂逅は、内省する生者にとり死園との相互対話(Dialektik)に他ならない。つまり此岸に留まる魂の淵に現象する神人キリストが生者を目指せば、生者は自ずと彼岸なす「至福なるギリシア」の死園へと魂を回向(Conversio)せらるるのであり、この回心を機に『パンとぶどう酒』は終結するのである。

- 一 静かに安らう都市。ひそやかに街路に燈火がともり
 - 二 して松明に飾られて騒然と馬車は疾駆し過ぎ去る。
 - 三 満ち足りて家路へと、昼間の飲びに別れを告げ、安らぎを求め歩みゆく人々
 - 四 して収支得失を慮る思慮深い家長は
 - 五 悠然と和やかにわが家にくつろぐ。(黄昏の今は) 葡萄も花束もなく。
 - 六 して手仕事の品々もなく安らう、(昼間は) 忙しき広場の市場。
 - 七 だが他方、堅琴の音が彼方の庭園から響いて来る。恐ろしくは
 - 八 そこで恋人が奏で、或いは孤独な者が
 - 九 彼方の友を想いつつ、また若き日を偲びつつ。して噴泉が
 - 一〇 滔々と湧き、清冽な水しぶきをあげ送り、芳香に匂う花壇を露している。
 - 一一 ひそやかに黄昏の夜風に響き渡る晩鐘の音
 - 一二 して時刻を想い、その数を夜警は声高に呼ばれる。
 - 十三 今又ある息吹きが到来し、林苑の樹頭を(天上へと) 揺り動かす。
 - 十四 見よ! して我らの大地の影像たる月も
 - 十五 また秘蔵の荘厳より解き放たれ、靈氣溢れる夜が到来する。
 - 十六 星辰に輝きみち(清澄な) 夜は、恐らく私達などまず配慮もせず。
 - 十七 彼方で光明を放ち、驚嘆させ、人間では異邦の者として
 - 十八 山頂の上高く、悲愴かつ壮麗に立ち現われる。
- (『パンとぶどう酒』一八〇〇年—〇一年、第一節、第二句—第十八句)

松明と燈火—十八世紀啓蒙オペラ文化と

ヘルダーリンの古典祝祭空間

«BELEUCHTUNG» et «ERLEUCHTUNG» («l'éclat des torches» et «les lumières aux fenêtres») — La culture de l'opéra au XVIII^e siècle des lumières et l'espace de la fête classique de Hölderlin: Le contrepoint des lumières dans l'image de la cité au début de «Brod und Wein» («Le Pain et le vin»)

(1) ドイツの現状

今回取りあげます詩歌『パンとぶどう酒』の冒頭で歌われております都市像は、十八世紀啓蒙時代のドイツを背景に致しております。つまり、この詩歌の成立は、西暦一八〇〇年から翌年にかけての寛政年間と考えられまして、十八世紀から十九世紀へと移りゆきます変動の時代、詳しく申しますと、一七八九年のバスターイーユ牢獄の陥落にひき続きます、フランス大革命の動乱期でありました。

この革命の時代にありまして、ドイツの現状を外から眺めますと、フランスなどの先進国に比べますと、むしろ後進国として映じて参ります。成程モーツァルトの歌劇に見られますような華麗な宮廷風オペラ文化は、華やかに咲き誇っていたのでありますが、実はこの宮廷風文化の華美な出で立ちの拠って立つ地盤は、当時の工業先進国に立ちおかれておりました農業国ドイツなのであります。このドイツの現状に關しましては、資料(1)を御覧下さい。一八四八年のドイツ三月革命の頃におきまして、あまり状況は変わっていません。一八四七年の論文『ドイツの現状(Der Status quo in Deutschland)』で、エンゲルスは次のように申しております。

ドイツの現状は次の如くである。フランスやイギリスでは、力強く勃興した市民階級が、封建貴族を倒し、国家の支配階級に伸し上がる程などであるが、しかしドイツの市民階級は未だこれ程までに成長していない。……フランスやイギリスでは都市が農村を支配しているのに反し、ドイツでは農村が

都市を、農業が商工業を抑えている。このことがドイツでは、絶対君主国のみならず立憲君主国にもあてはまる。すなわち(東欧寄りの)オーストリアやプロイセン(のような絶対君主国)のみならず、(西欧寄りの)ザクセンやヴュルテムベルクやバーデン(のような立憲君主国)でも事情は変わりないのである。……農業の政治上の代表者は、ドイツでも他の欧州諸国でも、大土地所有者たる封建貴族階級であり、この封建貴族の専制支配に適合した政治形態が封建制度である。この封建制が瓦解した所では、どこでも農業が国の主要産業ではなくなり、農業を営む階層と並んで、商工業を営む階層が、農村と並んで都市が形成されているのである。

此所でエンゲルスは、ドイツ社会の立ち後れた現実の地盤と致しまして、農業本位の産業形態を考え、これが封建制度の温床となり、商工業の担い手たる市民階級の台頭を阻んでいると考えております。

(2) 静かに安らう都市

確かに、フランス革命を担うほどの強力な市民階級の勃興が、ドイツに見られなかったことは事実です。しかしながら、寛政年間の世紀の変わり目ころには、新たな商工業を営む市民階層が次第にドイツでも生育し、都市の基本性格を特徴づけ始めたと考えられます。例えば資料(2)を御覧下さい。今回話題と致しております詩歌冒頭の都市像には、商工業を営む階層の姿が、温かく見守る詩人の視線の下に造形されております。この詩歌「パンとぶどう酒」冒頭の六句を一瞥しておきましょう。

一 静かに安らう都市。ひそやかに燈火がとる街路。
二 して松明に飾られて、(幾台もの)馬車が、(大路を)騒然と疾駆し過ぎ去る。

三 満ち足りて、屋間の歎びに別れを告げ、家路へと安らぎを求め歩む人々。
四 して収支得失を慮る思慮深い家長は、
五 和やかに悠然とわが家にくつろぐ。今は葡萄も花束もなく、
六 して手仕事の品々もなく、(夕暮に)安らう(昼間は人繁き)広場の市場。

この詩歌冒頭の都市像は、第一句の《ruhe》、第三句の《ruhen》、第五句

の《Wohnzufrieden》、更に第六句の《ruh》に基調をなしまして、安らぎ(Ruhe)や平安(Frieden)へと憩いゆく悠然とした詩句の静かな流れが滔々と流れております。

此所で、温かく見守る詩人の優しい視線の下に浮き彫りにされておりますのが、商工業を営む階層の夕暮の姿であります。第三句での「満ち足りて家路へと歩む人々」すなわち「雇用職人(Geselle)」も、また第四句で「収支得失を慮る家長」、つまり資産家の商人も、共に第五句に申します「和やかに悠然とわが家にくつろぐ」と想像されます。

この当時のドイツにおきます産業形態を社会経済史の上で眺めますと、個々の職人によります手仕事の作業形態(Handwerk)から、工場制手工業(Manufaktur)への過渡的段階をなしております「問屋制(Verlagssystem)」と考えられます。この問屋制におきまして、新たな資産家の商人と、在来の職人とが手を結び、場合によりましては、この詩歌のように両者が共和共存していたと考えられます。従いまして、この「和やかなくつろぎ(Wohnzufrieden)」は、必ずしも詩人の想像力が戯れに作り出した虚像と看做せないと思われれます。

ところで、この「和やかなくつろぎ」を、慎ましく点しておりますのが、第一句後半で歌い出されました「燈火の光(Erleuchtung)」と想像されます。この「燈火の光」を英訳は、その月(に)示しましたように、「淡い油燈の光(in pale lamplight)」と、情趣豊かに訳し、当時の雰囲気を感じさせております。

この第一句後半で歌い出されました「ひそやかに燈火がとる街路(die erleuchtete Gasse)」を、恐らく第三句で「家路へと歩む人々」も歩いていると想像されます。この第三句の動詞《gehen》を、私はドイツ語の文字通り、「歩み行く」と解釈すべきだと思います。この人々の姿、つまり乗用車を持たぬ市民の歩みゆく姿と、好対称をなしておりますのが、第二句で華やかに「松明を飾りて、騒然と疾駆する馬車(Wagen)」であります。

この「馬車」が当時では、貴族など門閥の乗用車と考えられます。この乗用車が「騒然と疾駆(rauschen)」するの、第一句末の「街路(Gasse)」では狭すぎて十分ではありません。当然、より広い「大路(Strasse)」が想定されなくてはなりません。しかも、ここに言う「馬車(Wagen)」は、一台のみではありません。動詞と定冠詞の変化形が、このことを物語っております。従いまして、幾台もの馬車が、大路を疾駆し過ぎ去ると想像されます。この「街路(Gasse)」

と「大路(Strabe)」との場の対位法を考えますと、資料②に掲げた伊仏英訳のどれも、第一句で狭い「街路(Gasse)」を明示することなく、この場所の対比を十分に物語っていないことがお解かりになると思われます。

(3) 光の対位法

この場所の対位法(Kontrapunkt)と呼応いたしておりますのが、光の対位法であります。第一句で「密やかに点る燈火の光(Erleuchtung)」と好対称をなしまして、第二句では「松明に飾られ」ました華麗な輝き(Beleuchtung)が歌われております。しかもこれは、一本の松明(Fackel)ではありません。幾本もの松明(Fackeln)に飾られました馬車(Wagen)が幾台も騒然と疾駆するのであります。このように輝く「松明を幾本も燃して、幾台もの馬車が騒然と疾駆」いたしますことは、実際に相当危険なことと思われれます。すなわち「松明」に燃える炎が、火災の心配の種となるからであります。そこで、果して、これが文字通り、「松明(Fackel)」だったのか、或いはより安全な「角燈(Laterne)」だったのか、恐らく歴史研究には大変興味深い問題に思われますが、しかしながら、詩人にとりましては、これが「幾本もの松明(Fackeln)」である心の必然性があつたと考えられます。すなわち、「幾本もの松明に飾られて疾駆する幾台もの馬車」の華麗な出で立ちが、正にこの表現におきまして、適切に言い現わされると考えられるからであります。

このように、「幾本もの松明に飾られ、馬車が騒然と疾駆し過ぎ去る(mit Fackeln geschmückt, rauschen die Wagen hinweg)」と第二句では歌われております。ここで興味深く思われますのは、詩人がこれを「過ぎ去る(hinweg)」と歌っている点であります。このように彼方へと「過ぎ去る」とは、彼岸へと消滅することでしょうか。これに對しまして想像豊かな方は、「松明(Fackel)」で直ちに神話知識を活用され、古代ギリシア神話の葡萄酒の神バックス・ディオニュソスに捧げられました祝祭の松明を思い描かれるかも知れません。実際のこの詩歌「パンとぶどう酒」は、古典ギリシアとキリスト教西欧の両義性を兼ね備えておりまして、神の子キリストとともにバックス神ディオニュソスも問われているからであります。

確かに、詩歌「パンとぶどう酒」では、再び詩歌の終結部におきまして、「松

明(Fackel)」が語り出されます。その第九節の箇所に注目してみましよう。資料②の「BELEUCHTUNG」の下(6)を御覧下さい。そこには「松明を翳す者(Fakeischwinger)」が「シリア人(イエス・キリスト)」として次のように歌われております。

だが、かくするうちに、松明を翳す者、至高なる者の

息子、シリア人(イエス・キリスト)が(西欧キリスト者の住む)幽魂の影なす闇の世界へと降りて来る。

詩歌「パンとぶどう酒」冒頭の第二句で「騒然と疾駆し過ぎ去る馬車」を装飾しておりました「幾本もの松明(Fackeln)」は、ここではむしろ一本の彼岸からの燈明となり、神の子キリストとともに幽かに現われて参ります。この慎ましくも威厳ある神格キリスト像に宿ります「一本の松明(Fackel)」には、華やかな出で立ちは跡かたもなく消え失せて、もはや輝き(Beleuchtung)と申しますよりは、むしろ燈火(Erleuchtung)「詳しく申しますと、彼岸から此岸へと訪れます「心の燈火(Erleuchtung)」となっております。この「心の燈火」が、詩歌冒頭の第一句におきまして、慎ましくも厳やかに点る市民生活の「燈火の光(Erleuchtung)」に協和いたしますことは申すまでもありません。かくして詩歌「パンとぶどう酒」終結オーメガ(Ω, Léya)の光が、冒頭アルファ(Α, Alfa)の光へと繋がり、作品全体の円環を閉じることとなります。

再び詩歌冒頭の第一句と第二句との対比に目を留めますと、此所には光と場の対位法「すなわち「燈火と松明(Erleuchtung u. Beleuchtung)」そして「街路と大路(Gasse und Strabe)」の対位法とともに、「生成と消滅(Werden und Vergehen)」の対位法が見い出されます。詩歌の第一句におきまして動詞は《werden》の三人称単数現在形の《wird》が使われて、この「生成(Werden)」を告げております。これに對しまして第二句末尾では、分離動詞の分離前綴《hinweg》が消え去りゆく「消滅(Vergehen)」を告知しております。しかもこれは同時に生起していると想像されまして、資料②の(6)に示しましたヘルダーリンの論文名の如く、「滅びの中で生まれるもの(Das Werden im Vergehen)」を全体で形造っていると考えられます。

(4) 思慮深い家長

この「滅びの中で生まれるもの」とは、先のエンゲルスの論文『ドイツの現状』が述べております所の、既成の封建体制から新たな市民社会へと変貌いたします歴史の現実と符号すると考えられます。まず此所で、新たに生育する市民生活の姿に注目してみますと、既に考察いたしましたように、問屋制(Verlagsystem)におきます資本主義の芽ばえにありまして、職人も資産家と共に「和やかに悠然とわが家にくつろぐ」、慎ましく充足した方方を示しております。とりわけ此所で肯定的に歌い出されておりますのが、第四句末の「思慮深い家長」であります。

考えてみますに、日頃から古典ギリシア詩文の如き崇高美を目指して研鑽し続け、日常茶飯の俗事を厭うとも申せす詩人ヘルダーリンが、事もあろうに「収支得失を慮る家長」を、これ程までに優しい眼差の下に歌いあげておりますのは、実に興味深いことに思われます。但し、これは空想の遊戯ではございません。確かに、この「思慮深い家長」を裏付ける人格が、詩人の伝記から浮び上がって参ります。それは詩人の一歳年上の親友でありました裕福な毛織物商人クリスティアン・ランダウエルであります。

ここで「詩人の伝記を繙いてみようと思います。只今話題と致しております詩歌『パンとぶどう酒』は、既に申しあげましたように、寛政年間(1798-1800)の世の変わり目、詳しく申しますと、一八〇〇年から一八〇一年にかけて創作されました。実は、この創作期に先立ちます、一八〇〇年夏六月から翌一八〇一年冬一月にかけての約半年間、ヘルダーリンは故郷シュヴァーベン(現ドイツ南部)の領邦国家ヴュルテムベルクの宮殿の所在地シュトゥットガルトに居を構えておりました。つまり裕福な毛織物商人ランダウエル家の館に世話になっておりました。

このシュトゥットガルトの屈指の商家ランダウエル家の「思慮深い家長」が、他ならぬ詩人の友クリスティアン・ランダウエルでありました。詳しく申しますと、この毛織物商人は、資料(3)の(6)に掲げました「ランダウエル絨毯毛織物商会(Landauersche Teppich- und Wollwarenhandlung)」の経営主でありました。そこに一八三三年の『ヴァルテムベルク工場目録(Verzeichnis der Fabriken und Manufakturen)』から引用いたしました、ランダウエル商会設立の年、西暦一七九七年から考えますと、この商会は、新たに勃興して参りました。

たドイツ資本主義の萌芽をなしておりました代表的な会社の一つと考えられます。実際、その下に記しておきました、一九六七年に刊行されました松田智雄著『ドイツ資本主義の基礎研究』におきましても、恐らく誤植か写し間違いと思われる「ランダウエル商会」が「ラウダウエル商会」として記載されております。このランダウエル家での住み心地は、ヘルダーリンに大変良かったようで、例えば資料(3)の(7)に引用いたしました詩歌『ランダウエル君に』が、そのことを十二分に物語っております。この詩歌は、親友クリスティアン・ランダウエルの三十一歳の誕生日でありました、西暦一八〇〇年十二月十一日の直前に、詩人により創作されまして、後にランダウエル家で十二月の聖夜に集った人々と共に歌われた模様です。そこに示しました詩歌の第五句以下が、正に『パンとぶどう酒』冒頭の都市像の基本性格に協和しております。

ランダウエル君、君のように、わが家に平和と慈みと充足と、そして安らぎを見い出す人は、至って幸福なのだ。

此所に申します「充足」や「安らぎ」の礎が、『パンとぶどう酒』第四句で歌われております「収支得失を慮る」ことと考えられます。ところでこの「収支得失(Gewinn und Verlust)」とは、単に家計や経済上の収支決算に留まることなく、更に「思慮深い家長」が、自己自身を、更に自らの日頃の行為を、静かに熟慮反省して省みる折の、心のたゆとう揺れをも伝えます広い現存全体の律動と申せましょう。

(5) 門閥と啓蒙オペラ文化

以上のように、「和やかに、わが家にくつろぐ」市民生活の夕暮の窓辺に、詩歌冒頭の「燈火(Erleuchtung)」が密やかに点ると想像されます。これに對しまして、詩歌の第二句では、華麗な「松明に飾られて、幾台もの馬車が騒然と疾駆し過ぎ去る」と歌われております。この幾台もの「馬車」の往き先と致しましては、華麗なる社交人趣味(préiosité)に特色づけられます。門閥の夜会(Abdengesellschaft)が想像されます。時は「光の世紀(Le siècle des lumières)」と呼ばれます啓蒙時代でありまして、門閥の社交広間には、華麗な

裝飾用釣燭台に、高価な蜜蠟燭が煌々と何本も輝いておりました。

先程の「思慮深い家長」が悠然とわが家にくつろぎ自らを省みるのの対し、門閥はきらびやかに着飾り、夜の社交の場へと繰り出します。それはフランス宮廷風のオペラ劇場か王宮か、とにかくシュトゥットガルトは宮殿の所在地でありましたから、様々な豪華な会合へと、華麗な「松明に飾られて、幾台もの馬車が騒然と（大路を）疾駆し過ぎ去る」と想像されます。この「過ぎ去る」とは、既に考察いたしましたように、詩人の脳裏を過り、その意識に点る謹嚴な「心の燈火（Erleuchtung）」の下に滅び去りゆく事と解されます。

ところで、この滅びゆく門閥と致しまして、先程の資料(1)でエンゲルスは、封建貴族を念頭に置いておりました。ところが只今話題と致しております領邦都市シュトゥットガルトの場合は、資料(2)の右側に示しておきましたように、封建貴族（*patricius feudalis*）たる「Ade」とともに、都市の門閥を成しておりました都市貴族（*patricius civilis*）所謂「Patricia」を忘れることができません。エンゲルスも資料(1)で申しておりますように、フランス寄り南ドイツの領邦国家ヴュルテムベルクは一応、立憲君主国（*konstitutionelle Monarchie*）でありました。従いまして、「宮廷」と並びまして「民会」が政治権力として見逃せないであります。

この領邦国家ヴュルテムベルクにおきます、「宮廷」と「民会」との当時の関係につきましては、資料(4)を御覧下さい。ヘルダーリンのチュービンゲン神学院以来の親友ヘーゲルが、その「ヴュルテムベルクの最近の内情（*die neuesten inneren Verhältnisse Württembergs*）」（一七九八年）を次のように、論述いたします。

高級官僚の越権行為が就んずく、古今を通じて、民会（*Landschaft*）にまつわるあらゆる害悪の根源であった。……（民会の）常任委員会（*Ausschub*）そのものは、決して越権行為などしなかった。（実は）その（委員会）の中の高級官僚である）相談役（*Konsulent*）と顧問役（*Advokat*）が越権行為を成したのである。……宮廷（*Hof*）に対して気前良く振舞うように、常任委員会を籠絡したのも、この高級官僚たちであった。……この高級官僚たちこそ、宮廷は味方に引きいれようと努めたのである。

此所にヘーゲルは、「宮廷（*Hof*）」と「高級官僚（*Offizialen*）」との癒着が、「民会（*Landschaft*）」を有名無実なものにしていると批判いたしております。このヘーゲルからの引用の下に示しましたように、当時のヴュルテムベルク民会の最有力者シュトゥックマイヤーは、一七七〇年に顧問役（*Advokat*）となりまして、更に一七九一年に娘婿のアーベルを相談役（*Konsulent*）と致しまして、民会の実権を完全に掌握しました。一時フランス共和制の影響の下に、所謂「シュヴァーベン共和国（*Schwäbische Republik*）」建設が話題となるまでに至りました革命運動の時期、すなわち先の論文をヘーゲルが執筆いたしました前年、一七九七年から暫く、シュトゥックマイヤーは民会の革新勢力により解任させられておりましたが、革命運動が挫折しますと、再び一八〇〇年に早々再任されております。ヘルダーリンもヘーゲル同様に、この経緯に強い関心を寄せていたに違いありません。詩歌「パンとぶどう酒」には政治問題が直接には語られておりませんが、しかし都市貴族と宮廷とが癒着します格好の社交場、華麗なる門閥の夜会へと目指して華やかな「松明に飾られ、騒然と馬車が疾駆し過ぎ去る」と歌うことによりまして詩人の内観には、いつとはなしに既成封建勢力が、その啓蒙オペラ文化とともに滅びゆくものと映じていたと読み取れるのであります。

(6) 古典悲劇祝祭の時空

このように第一句の謹嚴な「燈火の光（*Erleuchtung*）」と好対称をなしまして、第二句で歌い出されます華美な「松明（*Beleuchtung*）」の輝きの往き着く先を考えてみますと、豪華な門閥の装いを一層と際立たせます高価な蜜蠟燭を幾本も点しました裝飾用釣燭台が煌々と輝いておりました華麗なる社交空間やオペラ劇場が想像されます。この広間や劇場が、詩歌「パンとぶどう酒」におきましては、古典ギリシア悲劇誕生の母胎たる野外劇場の祝祭空間と睨み合わされます。

資料(5)を御覧下さい。詩歌の第四節で歌い出されます「至福なるギリシア（*Seeliges Griechenland*）」の「莊嚴なる祝祭の広間」におきましては、「床は海原なし、食卓は山岳なす」と語られております。この万有の大自然へと開かれました時空「至福なるギリシア」は、古典悲劇誕生に君臨する「偉大なる運命（*das große Geschick*）」に焦点をあてまして、次のように歌われております。

何処に、一体何処に輝いているのか、彼方をまで射抜く(アポローン神の弓の如き)あの神託は?

デルポイは微睡んでいる。——何処に轟くのかあの偉大なる運命は?

何処にあの神速の運命は、何処で碎けるのか? 普遍の幸に満ちて、

雷鳴とともに清澄なる大気から、眼の当たりに運命が突入して来るのは何処か?

父なる神気アイテールよ! かく叫び舌から舌へ言葉は翔んだ、

幾重にも。この生命を一人で担えるものは誰もいなかった。

古典ギリシア悲劇祝祭の時空は、碧空の「清澄なる大気アイテール」へと開かれました天地自然の懷を母胎といたしておりました。これと好対称をなしまして、十八世紀啓蒙期の門閥の社交広間やオペラ劇場の闊ざされた屋内には、蜜蠟燭を点しました裝飾用燭台が煌々と輝いておりました。この華麗な社交広間と、白昼の熾烈な日輪の下に繰り広げられました古典ギリシア悲劇祝祭の時空とが、詩歌『パンとぶどう酒』では睨み合っておりま。

詩人の姿勢は既に考察いたしましたように、「松明に飾られ過ぎ去る馬車」とともに華麗な社交広間へと閉じることなく、むしろ謹厳な燈火の光(Erleuchtung)に「和やかに悠然とくつろぎ(Wohlfrieden)」この慎ましくも厳かな市民意識への沈潜を経まして始めて、古典ギリシア悲劇祝祭の時空へと、内面の道を歩み西欧キリスト者の意識を越え出でてゆくのであります。

ところで、この謹厳な市民意識は、ヘルダーリン専有のものではありませんでした。実はこの詩人が、英雄の如き予者として讀まされたジュネーヴの市民ルソーの『演劇論』が同様の脈絡を話題と致しております。資料(6)を御参照下さい。ルソーはフランス宮廷風の劇場建設に反対して、ジュネーヴ市民に次のように呼びかけます。

だが諸君! あの(宮廷風の)演劇(スペクタクル)は採用してはいけません。あれは排他的で、惨めにも少数の人々を暗い洞穴に閉じこめ、心の中だけでわくわくはらはらさせ、押し黙らせて何ら行為を生みません。……

否、幸福な市民諸君! 諸君の祝祭(fest)はそのようなものではなく、うち開かれた野外で大気に包まれた蒼穹の下に諸君は集い、諸君の甘美な(埋

蔵なき)幸福感に身を委ねることが大切です。

このように碧空へとうち開かれました「祝祭」の時空へと繋がりますのが、ヘルダーリンの詩歌『パンとぶどう酒』第一句の「燈火の光(Erleuchtung)」と考えられます。この謹厳な光は、当時新たに生れんと胎動しておりました市民意識を礎と致しまして、既成の封建制宮廷オペラ文化の閉ざされた屋内特権空間の殻を破り、古典祝祭悲劇の誕生する清澄なる大自然に開かれた時空へと、西欧意識の内面の道を歩み越え出でてゆくのであります。

(7) 心の燈火の光

このような西欧キリスト者の姿勢に関しまして、資料(7)に示しました神父アウグスティヌスは、その(7)に引用いたしました『真の宗教について(De vera religione)』の一節におきまして次のように語っております。

外へ往くな。君自身の内へと帰れ。現存の深い奥に真理は住まう。そして、もし君の本性が移ろい往くのを見出し出したら、君自身をも越えた現存の彼方へと向かえ。

このような内面の道を歩みます精神風土を、十八世紀のドイツに求めますと、まず念頭に浮かびますのが「敬虔主義(Pietismus)」と申します精神史の流れであります。

詳細に、この「敬虔主義」は、ここで話題と致しております詩人ヘルダーリンの場合のみならず、この詩人の同郷シュヴァーベン(シュヴァーベン)の先輩シラーや更にケーニヒスベルクの哲学者カントの場合にも話題となりまして、当時のこれらの思想家や詩人の精神形成に大いに与かっていたようであります。私自身この脈絡を詳しくは存じませんが、少くとも此所で話題と致しております都市シュトゥットガルトに関して考えますと、このシュヴァーベンの領邦国家ヴュルテムベルクの場合、宮廷とそれに纏わる貴族にはカトリック色が強く、多分にフランス王宮風の十八世紀啓蒙オペラ文化が色濃く見られたと思われま。この華麗な人々の集いが、詩人により『パンとぶどう酒』第二句「過ぎ去る(chinweg)」と歌われしました「松明に飾られ」ますような輝き(Beleuchtung)に象徴されております。

他方、この華麗な輝きと好対称をなしまして、詩人シラーやヘルダーリンの内面性豊かな精神世界を慎ましくも厳かに点します「敬虔（ピエタース）」なる心の燈火の光（Erleuchtung）が、思想詩冒頭の第一句で「街路」とともに文字通り「密やかに」歌われております。この「敬虔（ピエタース）」なる心の燈火の光（Erleuchtung）が点る都市像の背景をなしておりますのが、所謂シュヴァーベン敬虔主義（ピエティスムス）運動と呼ばれます精神史の潮流と考えられまして、この流れを堅実に形造っておりますのが、例えばヘルダーリンにより『パンとぶどう酒』冒頭で、温かく見守る詩人の優しい眼差の下に浮き彫りにされた市民層かと思われまします。

この市民の意識に「密やかに点り」ます「敬虔（ピエタース）」なる心の燈火の光（Erleuchtung）が向かう所に、当然『パンとぶどう酒』の焦眉の急をなしますキリスト像が見い出されます。この「燈火の光（Erleuchtung）」と「キリスト像」との脈絡を考えてみますに、資料(7)のb)に掲げましたアウグスティヌスのキリスト論『三位一体論（De trinitate）』の第四巻・第二章の一節を御覧下さい。この『三位一体論』におきましては、「心の燈火の光（Erleuchtung）」を「イルミナーティオー」と申しまして、教父アウグスティヌスの所謂「イルミナーティオー説（テオリアー）」を次のように説き起こしつつ、西欧キリスト者の中心問題に迫ってゆきます。

ところで私達の心の燈火の光（イルミナーティオー）は、叡知（ロゴス）の分有、言い換えると人類の光（ルークス）なる生命の分有である。だがしかし、この叡知（ロゴス）の分有に与るに私達は全く無力で、しかも諸々の不純な罪心の垢（イムンディティア）ゆえ一層相応しくなかったのである。だから私達は清く澄んだ浄め（ムンディティア）に委ねられるべきであった。そこで敵意が有和され崇敬へと高ぶる心が和らぐ唯一無比の清澄なる浄めは、正しい者（キリスト）の受難なす聖なる血とこの神の（受肉なす）謙虚（フミリタース）に他ならず、それ故に本性（ナートウーラ）において私達と異なる神（デウス）の観想（テオリアー）への道程で、私達は彼の本性（ナートウーラ）において私達と同じ人の姿を取り現われた神（なる人キリスト）により清澄なる浄め（ムンディティア）へと委ねられるべきであった。この神が私達と異なるのは本性（ナートウーラ）においてではなく、不純な

罪（ベッカートウム）の心の垢ゆえである。だが私達は本性（ナートウーラ）において神ではなく、私達は本性において人間であり、不純な罪（ベッカートウム）の心の垢ゆえ私達は正しくない。故に神（なる人キリスト）が正しい人の姿を取り、不純な罪の心の垢なす人間に代わり、神（デウス）への仲介者となったのである。すなわち不純な罪人は正しい者に調和（ハルモニアー）しないが、しかし人（の姿を取る神キリスト）に人間が調和するからである。それ故に神なる人キリストは私達に、神自身の人性（フーマーニタース）との類似を結び合わせつつ、私達が（神と）調和しない不類似を取り去ったのであり、そして私達の死すべき運命（モルターリタース）を神なる人キリストが分有しつつ、自らの神性（ディヴィンイーニタース）を私達に分有せしめたのである。

この件で興味深く思われますのは、凡そ世間で為になる格言とか説教に見られますような上から押しつけがましく教えを垂れる心の垢（イムンディティア）が影を密めまして、むしろその正反對をなします清澄なる浄め（ムンディティア）を目標し、人性（フーマーニタース）の謙虚（フミリタース）を証いたします深く心の奥底へと沈みゆく内面の歌声が、思弁（speculatio）の鏡（speculum）にくっきりと映し出されている点であります。

正にこの慎ましくも厳かなる直向な思弁の力の中に密やかに点ります心の燈火（イルミナーティオー）におきまして、ヘルダーリンの思想詩『パンとぶどう酒』冒頭の都市像に幽かに点る燈火の光（Erleuchtung）の淵源が見い出せるのではないかと思われまします。すなわち、此所にこそ、資料(7)のc)に掲げました、アウグスティヌスの『告白（コンフエスィオーネース）』第五巻・第五章に申します、「*pietas est sapientia*」。

敬虔（ピエタース）が知恵（サピエンティア）である。

と云う言葉が、言語表現に受肉し具現されていると思えるからであります。

このように敬虔（ピエタース）の光として燈火の光（Erleuchtung）は、一方で西欧意識の内観キリストへと展開する酵母となっております。ところが、このような内面の道にのみ深まりゆくことで、罪のない信心の燈明として、この燈

火の光 (Erleuchtung) が既成宗教に呑み込まれてゆくわけではありません。かつて教父アウグスティヌスの場合には、西欧キリスト教会の護教論の骨肉として、巧みに体制宗教に組み込まれまして、遂には「聖者」の列にまで加えられ、丸く収まり有難がられるお目出度い大団円を迎えました。実際このアウグスティヌスの作品で、その(6)に示しました『神の国 (De civitate Dei)』におきまして既に、この体制建設の敷石が堅固に据えられており、例えばヘルダーリンの思想詩の中心問題であります、古典ギリシアとキリスト教西欧との矛盾相克も、西欧キリスト者の意識に在りて在る生ける唯一「神」と一元化され、その「神の国」へと併合されてゆきます世界秩序が有力となっております。

この帝国主義的世界秩序は、例えば文芸復興の萌芽をなしますダンテの『神曲 (Divina Commedia)』にも、文字通り「コメディア (喜劇)」として組み込まれております。これに對しまして、資料(5)で示しましたヘルダーリンの「至福なるギリシア」の悲劇祝祭空間が立ち開かれます。かつてアウグスティヌスなどの教父により、キリスト者の特権となりました「至福 (ベアティタース)」が此所では、むしろ「至福なるギリシア」の側にあり、ダンテの『神曲』では高々地獄の辺獄 (リムボ) にしか住むことを許されなかった古代ギリシア人たちが、思想詩『パンとぶどう酒』ではむしろ天上人として把握されております。このように「ギリシア」が「至福」となりますと、十八世紀当時世界に冠たるキリスト教西欧は逆に「至福」なき闇の世界とならざるを得ません。しかも西欧意識の魂の夜を点すキリスト像も「至福なるギリシア」の秘蔵の荘厳に住まい、キリスト教西欧にとり在りて在る、自明の神ではなくなります。かくして、ヘルダーリンの宗教観は既成体制宗教と真向から対決することになるのです。

ところで、この反体制の脈絡での「心の燈火の光 (イルミナティオー)」と致しまして十八世紀啓蒙期におきましては、例えば資料(8)に示しました政治色の強い秘密結社「イルミナティオー (啓明) 結社」の革命精神が想い浮かびます。もし二十年程前までのヘルダーリン研究でありましたならば、まずこのような啓蒙と革命の精神との関連など話題とならなかったものでありますが、近年のフランス共和国におけます大革命期ドイツ研究、例えば、その資料(8)の(6)と(7)に示しました哲学者オントのヘーゲル研究や独文学者ベルトのヘルダーリン研究の成果によりまして、今日ではその(7)に掲げましたグラスルの論文『ヘルダーリンと啓明結社員たち』が著わされている程であります。此所ではまず、この南ド

イツ由来の「啓明結社」がアングロ・サクソン系の「自由石工結社 (Society of Freemasons)」とともに、当時におきましては「イエズス会 (Societas Jesu)」のような保守勢力と睨み合っておりました点に留意いたしたいと思います。このことは例えば、その(6)に示しましたヘルダーリンの学友シェリングが親友ヘーゲルに宛てました一七九六年一月の書簡で確かめることができます。そこではこう語られております。

ぼくが民主主義者だとか、啓蒙主義者だとか、啓明結社員だとか、ぼくのことでそここの人々がかもし出している嫌疑 ……

このように「民主主義」とか「啓蒙主義」と同じく、当時の保守体制の側から危険思想と看做されておりました進歩思想に「イルミナティオー (啓明) 結社」の運動も加わっていたのであります。この「啓明 (イルミナティオー)」を外來語ならぬドイツ語で直接に示せば当然「エアロイヒトゥング」と成ることは申すまでもありません。

以上の脈絡を踏まえまして、『パンとぶどう酒』冒頭の都市像を点します燈火の光 (Erleuchtung) が、英訳のように「淡い燈火の光 (in pale lamplight)」と解されましても十分でなく、また教父アウグスティヌスの「イルミナティオー説」とともに体制宗教の信心深さに終始いたしましても十全ではないことがお解かりになると思われます。この心の燈火の光 (Erleuchtung) は、一方でドイツ浪漫派と一脈通じます敬虔 (ピエタース) なる祈り (レリギオー) の光でありますとともに、その浪漫派の甘美な夢想や体制擁護とか復古思想を微塵に碎きます啓蒙と革命の光でもありまして、単に想像や観念の内面世界に閉じることなく、新たに生育する市民社会の現実世界へと開いておりますと同時に、華麗なる屋内に閉じた十八世紀啓蒙オペラ文化の華やかな輝き (Beleuchtung) と鮮やかな明暗の対立法をなしまして、内面の道を歩み古典ギリシア悲劇の誕生する祝祭の時空へと西欧キリスト者の既成意識を越え出でてゆくのであります。

° „Nos lumières sont une participation du Verbe, c'est-à-dire de cette vie qui est la lumière des hommes. Mais nous étions vraiment bien inadaptés et bien peu propres à une telle participation, avec la souillure de nos fautes. Il fallait donc nous purifier. Or pour les injustes et les orgueilleux, il n'y a qu'une seule purification: le sang du Juste et l'humilité de Dieu. Pour nous permettre de contempler ce Dieu que nous ne sommes pas par nature, le Verbe nous purifierait alors en devenant ce que nous sommes par nature et ce que nous ne sommes plus par suite du péché. Par nature nous ne sommes pas Dieu, par nature nous sommes hommes, par le péché nous ne sommes plus justes. Alors Dieu s'est fait homme juste et il a intercédé auprès de Dieu pour l'homme pêcheur. Si le pécheur ne va pas avec le Juste, l'homme va avec l'homme. En nous apportant la ressemblance de son humanité, il a effacé la dissemblance de notre iniquité. Devenu participant de notre mortalité, il nous a rendus participants de sa divinité." (op.cit. Bd. 15: „La Trinité" I-VII (français: M.MELLET/Th.CAMELOT) 1955. S.345f)

γ) „Confessiones" (397-400): PIETISMUS

„ecce pietas est sapientia" (Bibliotheca Teubneriana. Stuttgart. 1969. „Confessiones" S.81)

δ) „De civitate Dei" (413-426): BEATITAS ↔ „Seeliges Griechenland" (5) →

Doctrina Hellenica < Doctrina Christiana

Vgl. DANTE, Alighieri (1265-1321) „Divina Commedia": „Comedia" (1472) „Inferno" IV. 88ff.: „Limbo"

„Omero poeta sovrano ... Socrate e Platone ...

„Orfeo" (Opere. Firenze. Società Dantesca. 1960. S.457-458)

(8) „Illuminatenorden (=Secta illuminata)" } ↔ „Jesuitenorden (Societas
(1778-ca.1785) } Jesu)" (1540-1773/1814ff)
Vgl. „Freimaurerorden (=Secta massonica)" }

α) HONTE, Jacques „Hegel secret" (1968): „Shirarezaru Hegel" (Miraisya

β) BERTAUX, Pierre „Hölderlin und die Französische Revolution" / (1980)
(Edition Suhrkamp. 1969)

γ) GRASSL, Hans „Hölderlin und die Illuminaten" (Sprache und Bekenntnis. Berlin. Dunker/Humblot. 1971)

δ) SCHELLING, Friedrich (1775-1854): Brief an HEGEL (Januar 1796)

„Fragen ... , die man hier und da wegen meiner gemacht hat, ob ich Demokrat, Aufklärer, Illuminat u.s.w. seie?"

(Philosophische Bibliothek. Briefe von und an Hegel. Hamburg. Felix Meiner. 1952-60. Bd.1. S.35)

(7) AUGUSTINUS, Aurelius (354-430)

α) „De vera religione” (390): VERINNERLICHUNG

° „Noli foras ire, in te ipsum redi. In interiore homine habitat ueritas. Et si tuam naturam mutabilem inueneris, transcede et te ipsum.” (Corpus Christianorum. Series Latina. Turnhout. Brepols. Bd.32. 1962. S.234)

° „geh nicht nach außen, kehr zu dir selbst zurück. Im innern Menschen wohnt die Wahrheit, und wenn du deine Natur zu wandelbar empfindest, geh auch über dich selbst hinaus.” (Deutsche Augustinusaussgabe. „Die wahre Religion” (Deutsch: PERL, C.J.) Paderborn. Ferdinand Schöningh. 1957. S.64)

° „Au lieu d'aller dehors, rentre en toi-même: c'est au coeur de l'homme qu'habite la vérité. Et, si tu ne trouves que ta nature, sujette au changement, va au-delà de toi-même” (Bibliothèque Augustinienne. Paris. Desclée. Bd.8: „La vraie religion” (français: PEGON, J.) 1982. S.131)

β) „De trinitate” (400-419): DOCTRINA CHRISTIANA: Illuminationstheorie

° „Inluminatio quippe nostra participatio uerbi est, illius scilicet uitae quae lux est hominum. Huic autem participationi prorsus inhabiles et minus idonei eramus propter immunditiam peccatorum; mundandi ergo eramus. Porro iniquorum et superborum una mundatio est sanguis iusti et humilitas dei, ut ad contemplandum deum quod natura non sumus per eum mundaremur factum quod natura sumus et quod peccato non sumus. Deus enim natura non sumus; homines natura sumus; iusti peccato non sumus. Deus itaque factus homo iustus intercessit deo pro homine peccatore. Non enim congruit peccator iusto, sed congruit homini homo. Adiungens ergo nobis similitudinem humanitatis suae abstulit dissimilitudinem iniquitatis nostrae, et factus particeps mortalitatis nostrae fecit participes diuinitatis suae.” (op.cit. Bd.50. S.163-164)

° „Unsere Erleuchtung ist Teilnahme am Worte, das heißt am Leben, welches das Licht der Menschen ist. Zu dieser Teilnahme aber waren wir ganz unfähig und untauglich wegen der Unreinheit unserer Sündhaftigkeit. Wir mußten daher gereinigt werden. Die einzige Reinigung der Sünder und Stolzen ist das Blut des Gerechten und die Verdemütigung Gottes. Für die Anschauung Gottes, der wir von Natur nicht sind, mußten wir gereinigt werden durch den, der wurde, was wir von Natur sind und was wir wegen der Sünde nicht sind. Gott sind wir nämlich von Natur nicht, Menschen sind wir von Natur, Gerechte sind wir wegen unserer Sünden nicht. Gott wurde also ein gerechter Mensch und setzte sich bei Gott für den sündigen Menschen ein. Übereinstimmung besteht nämlich im Menschsein und Menschsein, nicht aber im Gerecht- und Sündigsein. Indem also Christus seine der unseren ähnliche menschliche Natur mit uns verband, hob er die in unserer Ungerechtigkeit liegende Unähnlichkeit auf. Indem er unserer Sterblichkeit teilhaftig wurde, machte er uns seiner Göttlichkeit teilhaftig.”

(Bibliothek der Kirchenväter. II.Reihe. Bd.13-14: „Über die Dreieinigkeit” (Deutsch: SCHMAUS, Michael) München. Kösel/Pustet. 1935-36. Bd.13. S.143)

(5) „SEELIGES GRIECHENLAND“

α) „Seeliges Griechenland“

55

.....
Festlicher Saal! der Boden ist Meer! und Tische die Berge,

Wo, wo leuchten sie denn, die fernhintreffenden Sprüche?
 Delphi schlummert und wo tönet das große Geschick?
 Wo ist das schnelle? wo brichts, allgegenwärtigen Glücks voll
 Donnernd aus heiterer Luft über die Augen herein?
Vater Aether! so riefs und flog von Zunge zu Zunge
Tausendfach, es ertrug keiner das Leben allein;" 65
 („Brod und Wein" 4.Str. V.55/V.57/V.61-66: StA 2. 91-92)

β) „Grecia felice! / Sala di feste! Il suolo è mare e sono mense i monti,
 Ove, ove splendono gli oracoli, adesso, che colgono lungi?
 Delfo è assopita e dove suona il grande destino?
 Dov'è il veloce? dove, d'un bene universo ricolmo
 Rompe sugli occhi, tuonando dall'aria serena?
 «Padre Etere!» ecco il grido che di labbro in labbro volava 65
In mille modi e nessuno sopportava la vita da solo."
 (Nuova Universale Einaudi. 33. 102-103: VIGOLO, Giorgio)

γ) „Ô Grèce bienheureuse! /tagnes
 Ô salle des festins! Ton sol? Mais c'est la mer! Tes tables? Les mon-
 Où brillent-ils, où donc, les oracles frappant au loin comme l'éclair?
 Delphes dort, et la voix du grand Destin, où sonne-t-elle? /fête
 Où le dieu prompt? Lourd d'un universel bonheur, où, de quels cieux en
 Jailli, frappe-t-il les regards de sa splendeur tonnante?
 Éther, ô Père! Ainsi montait le cri par mille et mille lèvres 65
Multiplié; nul n'était seul à supporter la vie."
 (Bibliothèque de la Pléiade. S.810: ROUD, Gustave) /tains,
 /tables are moun-

δ) „Happy land of the Greeks, /Festive hall, whose floor is ocean, whose
 Where, then, where do they shine, the oracles winged for far targets?
 Delphi's asleep, and where now is great fate to be heard?
 Where is the swift? And full of joy omnipresent, where does it
 Flash upon dazzled eyes, thundering fall from clear skies?
Father Aether! one cried, and tongue after tongue took it up then, 65
Thousands, no man could bear life so intense on his own;"
 (Poems & Fragments. S.245/S.247: HAMBURGER, Michael)

(6) ROUSSEAU, Jean-Jacques (1712-78) „Sur les spectacles": Lettre à M. d'
 Alembert (1758) Garnier-Flammarion. 1967. S.233.

„Mais n'adoptons point ces spectacles exclusifs qui renferment triste-
 ment un petit nombre de gens dans un antre obscur; qui les tiennent
 craintifs et immobiles dans le silence et l'inaction;
 Non, peuples heureux, ce ne sont pas là vos fêtes! C'est en plein air,
 c'est sous le ciel qu'il faut vous rassembler et vous livrer au doux
 sentiment de votre bonheur."

TAKAHASHI: Beleuchtung/Erleuchtung

(3) LANDAUER, Christian (1769-1845) — „ein sinniges Haupt" (V.4)

α) Hölderlin in STUTTGART (Juni 1800-Januar 1801) — (Schwaben)
 ‚Residenzstadt des Territorialstaats WÜRTTEMBERG‘
 Bei Christian LANDAUER: Tuchhändler

β) „Landauersche Fußteppiche- und Wollwarenhandlung
 (Stuttgarter Firmenbuch. 1832)

„Landauersche Handlung. ... Jahr der Entstehung: 1797"
 (Verzeichniß der im Königreich Württemberg befindlichen Fabriken
 und Manufakturen. Württembergisches Jahrbuch. 1832)

Vgl. MATSUDA, Tomoo „Kisokenkyū (=Grundlegung) des deutschen Kapitalismus" (Iwanami. 1967) S.375: „Ch. Landauer, F."

γ) „AN LANDAUER" (11.12.1800: 31. Geburtstag des Christian LANDAUER)

„Und seelig, wer im eignen Hauße Frieden, — „Wohlfrieden ↑
 Wie du, und Lieb' und Fülle sieht und Ruh;" — zu Haus" — (2)

(„An Landauer" 2.Str. V.5-6: Stuttgarter Ausgabe. 2. 114)

„E beato chi nella sua casa pace,
 Come te, e amore e dovizia vede e quiete;"
 (Nuova Universale Einaudi. 33. 53)

„Heureux qui, comme toi, voit sa maison
 Par la paix calme de l'amour comblée!"
 (Jaccottet: Bibliothèque de la Pléiade. S.831)

(4) HEGEL, Friedrich (1770-1831)

„Über die neuesten inneren Verhältnisse Württembergs" (1798)
 (Werke. Suhrkamp. 1969-71. Bd.1. S.271-272)

„Die Anmaßungen der höheren Offizialen waren es vorzüglich, was
 in älteren und neueren Zeiten alles Übel über die Landschaft
 gebracht hat. Der Ausschuß selbst war nie anma-
 ßend. Seine Konsulenten und Advokaten waren es. ... Diese
 waren es, die den Ausschuß zu einer Freigebigkeit gegen den Hof
 verleiteten, ... Sie waren es, die der Hof zu gewinnen
 suchte"

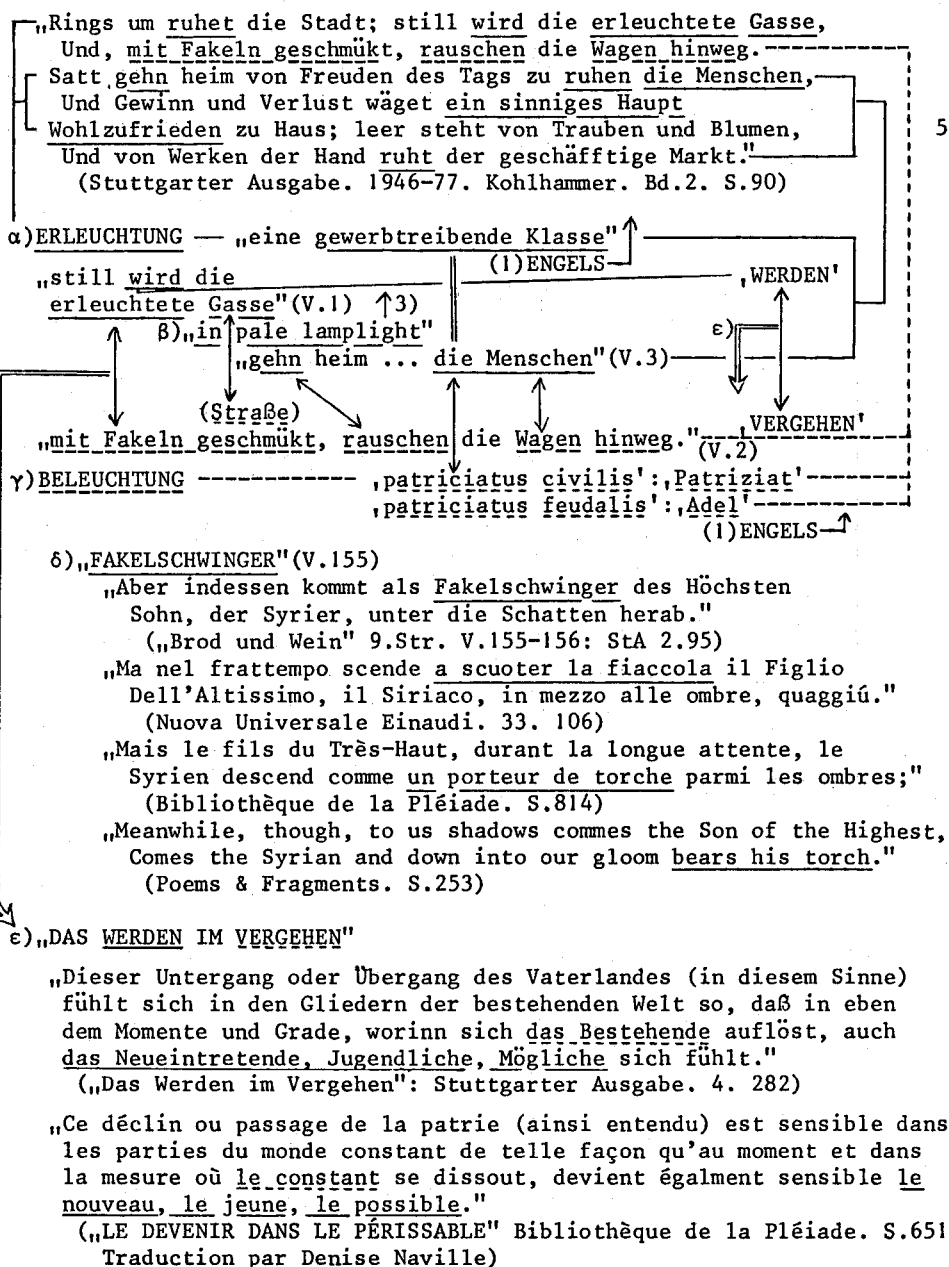
„Die Schwäbische Republik"

=ADVOKAT (1770-97//1800ff) — ↓ STOCKMEIER, Friedrich Amandus (1731-1813)

=KONSULENT (1791ff) — ABEL, Konradin (1750-1823): Schwieger-
 sohn des Friedrich Amandus STOCKMEIER

„in den konstitutionellen Monarchien Württemberg ↑
 (1) ENGELS —

(2)HÖLDERLIN „Brod und Wein" 1.Str. V.1-6:



5

«Beleuchtung» et «Erleuchtung» («l'éclat des torches» et «les lumières aux fenêtres») — La culture de l'opéra au XVIII^e siècle des lumières et l'espace de la fête classique de Hölderlin: Le contrepoint des lumières dans l'image de la cité au début de «Brod und Wein» («Le Pain et le vin»)

Kootchi, 25 mai 1985 TAKAHASHI, Katsumi

- (1) ENGELS, Friedrich (1820-95) „Der Status quo in Deutschland“ (1847) II: Marx/Engels. Werke. Berlin (Dietz) 1955-72. Bd.4. S.43-44.

„Der Status quo in Deutschland ist folgender. Während in Frankreich und England die Bourgeoisie mächtig genug geworden ist, um den Adel zu stürzen und sich zur herrschenden Klasse im Staat emporzuschwingen, hat die deutsche Bourgeoisie dieses Macht bisher noch nicht gehabt. Während in Frankreich und England die Städte das Land beherrschen, beherrscht in Deutschland das Land die Städte, der Ackerbau den Handel und die Industrie. Dies ist der Fall nicht nur in den absoluten, sondern auch in den konstitutionellen Monarchien Deutschlands, nicht nur Österreich und Preußen, sondern auch in Sachsen, Württemberg und Baden. Der politische Repräsentant des Ackerbaus ist in Deutschland wie in den meisten europäischen Ländern der Adel, die Klasse der großen Grundbesitzer. Die der ausschließlichen Herrschaft des Adels entsprechende politische Verfassung ist das Feudalsystem. Das Feudalsystem ist überall in demselben Maße zerfallen, in welchem der Ackerbau aufgehört hat, entscheidender Produktionszweig eines Landes zu sein, in welchem sich neben der ackerbauenden eine gewerbtreibende Klasse, neben den Dörfern Städte gebildet haben.“

- (2) HÖLDERLIN, Friedrich (1770-1843) „Brod und Wein“ (1800-01) I.Str. V.1-6:

1) „Riposa intorno la città: si tace la via illuminata

E ornati di fiaccole, lontano trabalzano i cocchi.

Sazi delle gioie del giorno al riposo rientrano gli uomini

E perdita e profitto, giudizioso capo soppesa

Nella sua casa contento; vuoto sta d'uve e di fiori

E da mestieri e lavori il mercato riposa.”

(Vigolo: Nuova Universale Einaudi. 33. Torino. 1963. S.101)

2) „La ville autour de nous s'endort. La rue illuminée accueille le
silence,

Et le bruit des voitures avec l'éclat des torches s'éloigne et
meurt.

Rassasiés des plaisirs du jour, vers le repos s'en vont les hommes,

Et satisfait, songeur, un front penché soupèse

5 Pertes et gains. Dépouillé de ses fleurs, dépouillé de ses grappes,

Las du labeur de mille mains, désert, le marché dort.”

(Roud: Bibliothèque de la Pléiade. Paris (Gallimard) 1967. S.807f)

3) „Round us the town is at rest; the street, in pale lamplight, grows
quiet

And, their torches ablaze, coaches rush through and away.

People go home to rest, replete with the day and its pleasures,

There to weigh up in their heads, pensive, the gain and the loss,

5 Finding the balance good; stripped bare now of grapes and of flowers,

As of their hand-made goods, quiet the market stalls lie.”

(Hamburger: Poems & Fragments. Cambridge Universität. 1980. S.243)

『パンとぶどう酒』第一節「聖なる夜」

〔四〕思慮深い家長（改稿）

内容梗概

〔一〕序論〔第34巻〕

〔二〕宥和の旋律

〔三〕燈火と松明

〔四〕思慮深い家長（改稿）

要旨〔第38巻その二〕

〔一〕緒言

〔2〕親友ランダウエル

〔3〕ランダウエル絨毯毛織物商会

〔4〕共和精神と専制

和文註解

欧文註解 (Quellennachweis)

付録（一九八五年十一月九日、日本独文学会中国四国支部・第三十五回研究発表会、香川大学教育学部、口頭発表の原稿および欧文資料より）

〔第38巻その二〕

（74）頁—（82）頁

LANDAUER — „ein sinniges Haupt“ in Hölderlins „Brod und Wein“

〔Neufassung〕

〔第38巻その二〕

（83）頁—（90）頁

〔五〕黄昏から聖夜へ

〔一〕離在

〔2〕噴泉

〔3〕晩鐘と時禱

〔4〕林苑と盟約

〔5〕エレウシース

〔六〕結論

後日刊行予定

四四（15）頁—五〇（21）頁
五〇（21）頁—五六（27）頁
五七（2）頁—六三（8）頁
六四（92）頁—九五（123）頁

要旨

毛織物商人ランダウエルと詩人との親睦には、銀行家ゴンタルトと詩人との間に生じた様な現実には有りがちな市民と芸術家との軋轢を乗り越え、心の深い所で「思索家と実務家とが然かるべく一体化」している稀有な出会いが見られ、この現実での調和ある対立を歴史上での礎として詩歌象徴「思慮深い家長」では心の内と外から異質な魂同志が邂逅する。一元化され得ぬこの多様の「一者は思想詩の本質契機として、西欧近世市民社会形成原理たる専制ならぬ共和精神へと繋がる。本論では更にこれを二七九七年に創設されたランダウエル絨毯毛織物商会の経営形態にも確かめ、「思慮深い家長」を経済面からも基礎づける。史料は一八三二年の工場目録で、この統計の分析から商会在来の問屋制を軸とした工場制手工場で、しかも専制画一化した集合形態ならぬ分散形態であった事実が確認され得る。

共和制と専制との明暗を更に、内陸部の新興企業家ランダウエルと旧来のハンザ都市貴族との利害関係と見ると、内地ドイツ独自の工業発展と関税同盟成立が注目される。即ち同盟成立以前に中継ハンザ海外貿易の比重は大きく、この経済上の偏向が国内産業発展の停滞と内陸部の農業優位に附合し、技術後進国ドイツは先進国の言わば植民地に甘んじ、農産物輸出と織物工業製品輸入に終始していた。故に内地工業発展とハンザ都市貴族没落は経済上の表裏なし、實際マンの「ブデンブローク家」に見られるようにハンザ都市貴族の栄華が去りゆく十九世紀には、「思慮深い家長」の共和精神の土壌に生い育った商会在躍進してゆくと考えられるのである。

※旧稿（第35巻、67頁—87頁）では「思慮深い家長」を更に「ランダウエル兄弟株式会社」（一八九七年創立）へと結び付けたが、しかし残念ながら家系上でこの筋を立証するのは目下不可能なので、この株式会社への言及は取り消す次第である。この点に関しては、西独シュトゥットガルト在住の方々、紋章学のクレス（Kress, Hanns-Wolfgang）氏（Max-Brod-Weg 14）や、碩学マルティニ（Martini, Fritz）教授（Grüneisenstraße 5）や、それに篤学なシッラー（Müller, Christiane）女史（Markgräflerstraße 18 a）の御協力に対し、此所で謝意を表しておきたい。

〔四〕 思慮深い家長

(1) 諸言

ドイツ精神史にとり何がフランクフルトとホムブルクでなされたのか、これを早急にヴァイマルやイエーナの眼鏡で見なくてはならない。つまり見えないからである。ここ西部ドイツでは、フランス革命がひき起こした封建制崩壊が全く身近に感じられ、……^①

(ベゲラー『ドイツ精神史における登頂前夜ホムブルク』序言)

更に私はこの脈絡で「フランクフルトとホムブルク」に続き「シュトゥットガルト」をも付加したい。例えば本論に関する「思索家と実務家」(2)(7)あるいは市民と芸術家の問題にしても、ゲーテ作『タッソー』(一七八九年)やマンの『ブデンブローック家』(一九〇一年)に見られるような宮廷人や都市貴族の倫理観にはまず浮上して来ない、異質な魂同志の稀有な出会いが、正に当時では現実のシュトゥットガルトにおいて成立し得た事実があり、この史実の裏付けをも踏まえて始めて実存の根を張り、シラーやゲーテには望み得ない思想詩の豊かな調べが響き出すのである。

此所では俗説に二云う、市民社会形成への参与に失敗し挫折したと言うが如き夢想家ヘルダーリンの姿は掻き消される。実に思想詩「パンとぶどう酒」こそは、既成の封建道徳と辻褃が合うような体制教会の説教を思索と熟慮の深みから見限り破邪するのみならず、単なる夢想家の瞑想へと自己閉塞し得ぬ生々しい当時革命期の現実を映す心の鏡でもあり、本論ではこれを産業革命の進展と睨み合わせて考察してみたいと思うのである。

既に私は本論の扱う思想詩第四句の詩歌象徴「思慮深い家長 (ein sinniges Haupt)」に關し若干の考察を試みた。その折の問題は、和訳

ヘルダーリン全集の訳語「抜かりのない商人」(手塚富雄訳)と、私の提示した訳語「思慮深い家長」^③との比較検討であった。問題点は既に此所に二つあり、第一は形容詞の解釈で、「思慮深い」と「抜かりのない」との対比、第二は主語名詞の訳語である「家長」と「商人」に関するものであった。

この際、第一の問題点である形容詞の訳語に関しては、既に明確な解答が与えられたと私は考えている。まず「sinnig」の語義に關して言え、諸家の訳語「sageur」^①、「sindiosos」^②、「pensive」^④のみならず、「へさかしい」^⑤などとの悪いひびきはない(南原実註)とする解も明示しているように、当該の形容詞は素直に読んで否定的よりは、むしろ肯定的な意味に解されるからである。しかしながら敢て「抜かりのない」と読むには、或る了解が先行している。すなわち引き続く第五句で、「悠然と和やかにわが家にくころぐ (Wohnzufrieden zu Haus)」と歌い継がれる脈絡を、例えばヴァックヴィッツ註のように「市場での営業が儲かったからである」と考え、当該の第四句に搾取階級ブルジョワ (bourgeois) を読み取る場合がこれである。^⑥

恐らく孤高の詩人と綽名されるヘルダーリンには、「収支得失を慮る (Gewinn und Verlust wäget)」(第四句)と云う筋が一見疎遠な詩歌象徴と映るのも止むを得ないかも知れない。だが心して思想詩冒頭を読み進んでみると、実は一見疎遠なこのような現実が、見事に格調高い詩歌の響きに乗り歌い上げられているのに読者は驚くのである。何故に驚くかと言え、俗人ならぬ詩人ヘルダーリン、あの古典ギリシアの崇高美へと眼差を向けて逸らすことなき稀有な魂が、然り気ない有り来たりの日常性を温かく見守りつつ静かに歌うからである。

静かに安らう都市。ひそやかに街路に燈火がともし、
して松明に飾られて騒然と馬車は疾駆し過ぎ去る。

満ち足りて家路へと、昼間の歎びに別れを告げ、安らぎを求めて歩みゆく人々。

して収支得失を慮る思慮深い家長は

五 悠然と和やかにわが家にくつろぐ。(黄昏の今は) 葡萄も花束もなく、

して手仕事の品々もなく安らう、(昼間は) 忙しい広場の市場。

だが他方、竖琴の音が彼方の庭園から響いてくる。恐ろしくは

そこで恋人が奏で、或いは孤独な者が

一〇 彼方の友を想いつつ、また若き日を偲びつつ。して噴泉が

滔々と湧き、清冽な水しぶきをあげ迸り、芳香に匂う花壇を濡して

いる。

ひそやかに黄昏の夜気に響き渡る晩鐘の音。

して時刻を想い、その数を夜警は声高に呼ばわる。

(『パンとぶどう酒』第一節、第一句―第十二句)

此所では現実の生において遠く隔ったものの、全く異なる方向へと自己「実現する魂同志が出会っている。故に「収支得失(Gewinn und Verlust)」(第四句)と言っても、「金銭のもうけだけでなく、今日の一日は自分に何をもたらしたか、自分はこの一日に何を学び、どういう失敗をしたか、ということ」(南原実註)をも含む、人間の内外に互る心の揺れであり魂の律動なのであるから、「抜かりのない」と云うよりは、むしろ「思慮深い」と当該の形容詞は解されるのが自然と考えられるのである。

他の「家長」か「商人」か云う問題に関しては、本論の引き続き論述で明らかとなる「思慮深い家長」たる商人ランダウエルを念頭に置くならば、両者ともに語義の上からは間違いないと言えない。しかしながら既に別論(註(3))でも述べたように、実際に文脈に即して『パンとぶどう酒』を第四句から第五句にかけて読み進んでみると、

四 ein sinniges Haupt

五 Wohlfrieden zu Haus;

四五 『パンとぶどう酒』第一節「聖なる夜」その五 (高橋)

読点(欧語では、)が第四句末になく、第五句頭へと休止を置かず流れゆく律動の中において、頭韻「H」をなして《Haupt...Haus》と呼応する響きが注目値する。そしてこの響き合いから、第五句に云う「家(Haus)」と協和して、第四句末は「家長(Haupt)」と読め得ると思われるのである。

四 思慮深い家長は

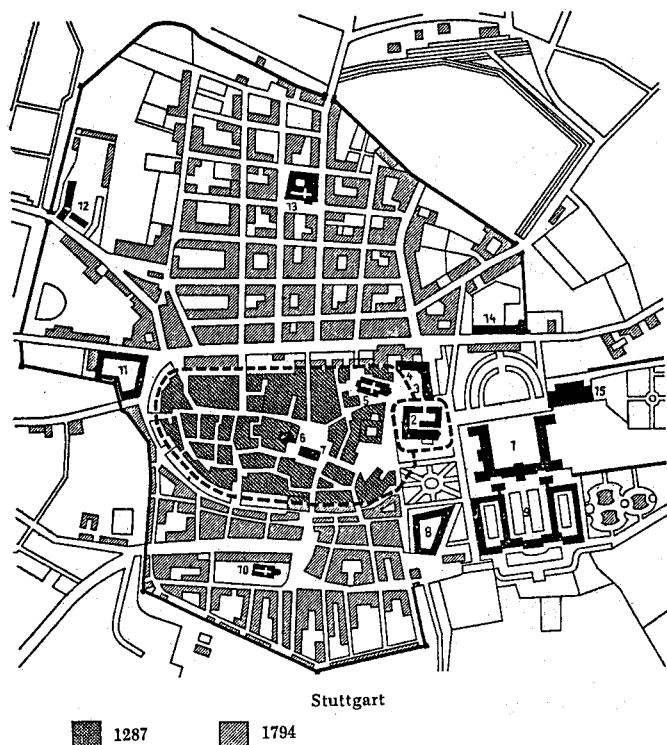
五 悠然と和やかにわが家にくつろぐ。

(2) 親友ランダウエル

以上のように文脈上で既に積極的な意味合いを帯びる「思慮深い家長」(第四句)を念頭に置いて、思想詩『パンとぶどう酒』の成立背景をヘルダーリンの伝記に探してみると、当時の現実から毛織物商人ランダウエル(一七六九年―一八四五年)の姿が浮かび上がってくる。興味深いことに実は思想詩成立に先立つ一八〇〇年夏六月から、収穫の秋を経て翌一八〇一年一月に至る約半年間、詩人はこの親友ランダウエルのもと、すなわち領邦ヴェルテムベルク的首都シュトゥットガルトに居を構えており、実際『パンとぶどう酒』冒頭で「静かに安らう都市(Rings um ruhet die Stadt;)(1)(11)」と歌われている、この「都市」が他ならぬシュトゥットガルトと考えられるのである。

更に思想詩を読み進んでみると、第一句後半では「ひそやかに街路に燈火がともり(still wird die erleuchtete Gasse;)」と、引き続き第二句では「して松明に飾られて騒然と(幾台もの)馬車が(大路を)疾駆し過ぎ去る(Und, mit Fackeln geschmückt, rauschen die Wagen hinweg;)」と歌われる。まず此所での「街路(Gasse)」(第一句)と「大路(Strasse)」とに關して具体化してみよう。第二句で「幾台もの馬車が大路を疾駆し過ぎ去る」と歌われていることを念頭に置くと、恐らく第三句になう「家路へ

と歩みゆく人々 (... sein heim ... zu ruhen die Menschen,)は「街路」を通ると考えられよう。この際に「大路」として当時の領邦首都シュトゥットガルトの目抜き通り、すなわち今日の「ケーニヒ大路 (Königsstraße)」（掲載市街図11から14にかけて）を考えると、この大路を宮廷オペラ劇場（掲載図15）を目指し、つまり今日の中央駅方面（北東方向、掲載図では右方向）へと向け、華麗な出で立ちで「松明に飾られ騒然と幾台もの馬車が疾駆し過ぎ去る」と読める。



掲載図解

■ 1287年当時の市街
 ■ 1794年当時の市街

- 1 旧 城
- 2 新 城
- 3 官 庁
- 4 公子館
- 5 シュティフト教会
- 6 市 庁
- 7 殿方館 (1820年に取り壊し)
- 8 孤児院 (外務施設)
- 9 学士院 (当時カール学院)
- 10 レーオンハルト教会
- 11 } 兵舎
- 12 }
- 13 ホスピタル教会
- 14 乗馬学校
- 15 歌劇場 (宮廷オペラ劇場)

他方「家路へと歩みゆく人々」は、その「ケーニヒ大路」から入りこんだ何処かの「街路」を通り、「悠然とわが家にくつろぐ (Wohlfrieden zu Haus)」（第五句）ために帰宅する。この家路へと安らぎを求め歩みゆく市民と、前述の宮廷オペラ劇場 (Opernhaus) すなわち「歓楽の館 (Lusthaus) 」での遊興へと自家用馬車で赴く門閥との折り成す接点、具体化すると「ケーニヒ大路」と「ホスピタル教会 (Hospitalkirche) 」南西側 (掲載図13の左横) へと伸びる「学院通り (Gymnasiumstraße) 」とが出会う付近に、当該の「思慮深い家長」(第四句) の商館つまりラシダウエル邸が建っていたのであり、詩人ヘルダーリンはこの豪商の館に一室を構えて世話になっていた模様である。

恐らく古典ギリシア悲劇でも読みながら、心の深い淵での魂の歌声へと傾聴する詩人には、「静かに黄昏の夜気に響く (教会の) 晩鐘の音 (still in dämmeriger Luft ertönen geläutete Glocken,)」(第十一句) とか、「また時を刻み数を告げる夜警の声 (Und der Stunden gedenk ruft ein Wächter die Zahl) 」(第十二句) のみならず、「更に噴泉が (und die Brunnen) 滔々と湧き、して清冽な水しぶきをあげ迸り、芳香に匂う花壇を濡し、immerquillend und frisch rauschen an aufendem Beet.)」(第九句-第十句) と歌われる無言の自然の脈動も明らかに聞

こえたと想像される。故に他方「馬車が疾駆し過ぎ去る」(第二句)のは、必然として「騒然」としたものであったと解され得るのである。

かく内省する魂が『パンとぶどう酒』冒頭では、包容力豊かな「思慮深い家長」たる豪商ランダウエルのもとに安らぎを得て憩い、「思慮深い家長は悠然と和やかにわが家にくつろぐ」(第四句―第五句)と高らかに歌い上げ、敢て市民生活の日常を温かく見守る。此所では通常相互に遠く隔たっている者同志が、「調和ある対立(Harmoniscentgegensetz)」を織り成して邂逅している。一方は実生活の上で経済活動に励み自らの経営の手腕を発揮せんと「収支得失を慮る思慮深い家長」であり、他方は内省する魂の奥底から「祖国(ドイツ)の詩歌の崇高で純粹な歓呼(das hohe und reine Frohlocken vaterländischer Gesänge)」を歌い上げんと古典詩文味読に余念なき思索家である。この心の内と外との両極が、とかく日常の現実には有りがちな「芸術家と市民」との相克を乗り越え、異質な魂同志の稀有な出会いとして成就していると思われる。もし現実はこの稀有な親睦が無かったとしたならば、当然「パンとぶどう酒」冒頭の「思慮深い家長」は瞑想家の空想に過ぎない観念の所産となろう。ところが事實は虚構(Dichtung)をも凌ぐ真迫力を以て詩歌象徴を充実させる。例えばランダウエル邸に居を構えた翌月、つまり一八〇〇年七月に詩人は母宛書簡で近況報告を述べて次のように心中を語る。

当地に参りましてから私は、…… 久しく見失なわれておりました寛ぎと安らぎ(Zufriedenheit und Ruhe)を心に抱いております。此所の人々は大変親切なのです。

思想詩冒頭の基調と照応する現実が此所に語り出だされている。「寛ぎ」は第五句冒頭「悠然と和やかにくつろぐ(Wohlfrieden)」で高らかに歌い上げられ、「安らぎ」は冒頭六句において三度「安らう(ruh)……安らぎ(ruhen)……安らう(ruh)」「(第一句と第三句と第六句)と響

き渡ることとなる。

實際ランダウエル家での住み心地は、ヘルダーリンに大変良かったように、このことは更に詩歌『ランダウエル君に(An Landaer)』が十二分に物語っている。実はこの詩歌は、親友クリスティアン・ランダウエルの三十一歳の誕生日であった、西暦一八〇〇年十二月十一日を祝して創作され、同月の聖夜にランダウエル家に集った客人の皆知る旋律で以て歌われた模様である。殊にその第五句以下に注目してみよう。

ランダウエル君、君のように、わが家に平和(Frieden)と慈み(Lieb)と充足(Fülle)と、そして安らぎ(Ruh)を見出す人は、至福(seelig)なのだ。

(『ランダウエル君に』第五句―第六句)

此所でも先程の書簡(註(3))に確かめた『パンとぶどう酒』冒頭の基調(ruhet … ruhen … / Wohlfrieden … ruht)が、「平和(Frieden)」と「安らぎ(Ruh)」と云う表現と美しく呼応し合っているのである。

このように詩人の魂の奥底から商人ランダウエルに向かい諧調な歌声が奏でられるには、当然「思索家と実務家とが然かるべく一体化している(Denker und Geschäftsmann, wie es sich gehört, vereint)」と云える現実が誕生していることを前提としている。実はこの「思索家と実務家」との諧調を詩人自身が心から願ったのは、行政の実務に携っていた異父弟カール・ゴック(一七七六年―一八四九年)に対してであった。すなわち父ヨハン・ゴック(一七四八年―一七七九年)譲りの「活動的精神(der thätige Geist)」に向かい兄ヘルダーリンは次のように語りかける。

おまえは哲学(Philosophie)を字はなくてはいいけない。たとえ一台の油燈と油を買うだけに必要なお金しか残っていないとしても、また真夜中から鶏

の鳴く頃までしか時間が無くとも。このことは、どんな折でも兄さんが繰り返していることで、おまえの考えでもあるのだ。……もし将来おまえに、思索家と実務家とが然かるべく一体化しているのを認めることが出来れば、兄さんは全体どんなに嬉しいことだろう。

(一九九六年十月十三日付弟宛書簡)

本論の叙述する詩人と商人との親睦においてこそ、正にこの心の内と外とに大きく拡がる現存の豊かな可能性が育くまれてしていると看做されるのである。

ところで「思索家と実務家」との実りある相互対話は、ヘルダーリンとランダウエル^⑦の二人にのみ限られた孤立したものでなかった。更に行政の実務に携る公務員の中にも、詩人の学識に敬意を払い、敢て「哲学の講義」を依頼する人も現われたのである。

幸運にも既に官庁に勤める若い人から、然かるべく願ってもない申し出があり、その人は私に哲学の講義(Stunden in der Philosophie)をして欲しいとのこと、これに対して毎月一カロリンが支払われます。

(一八〇〇年六月末か七月初め母宛書簡)

これはランダウエル邸に転居して間もない頃であるが、当時三十才の詩人には更に後日、歳上の公務員からも「講義の申し込み」が二件あった。

またもや一件新たな講義(Lectionen)の申し込みを、ラーシュタットで知り合いました登記史グッチャー氏から受けた。

(一八〇〇年七月二十日頃母宛書簡)

この母宛書簡では此所に云うラーシュタット会議(一七九八年十一月)にヴェルテムベルク州会議員代表として出席したヤーコプ・フリードリヒ・グッチャー(一七六〇年—一八三四年)とともに、一八〇〇年十一月末まで詩人と同じくランダウエル邸に居を構え世話になっていた教会長老会の記帳係ヨハン・ゲオルク・フリッシュ(一七六三年—一八三六年)も、詩人から講義を受けている公務員として名が挙げられている。

以上の結果から、

私は目下三人から講義の申し出を受け、どれも皆楽しいものです。

(一八〇〇年七月母宛書簡)

と詩人は語ることが出来たのである。

当時の実務家たちの教養の巾が伺える、このような「講義の申し出」を、実はランダウエルが色々と斡旋していた模様である。

ランダウエルは私が(当地シュトゥットガルトに)留まることを強く望んでいるらしく、私がなお二件か三件ほどは申し出を受け、月に約三リドル収入を増すようにと取り計らってくれた。

(一八〇〇年十月上旬妹宛書簡)

「思慮深い家長」ランダウエルの「慮る収支得失」(第四句)には、単に自らの商会経営に纏わる営業のみならず、更に広くこのように詩人へルダーリンを心から敬し、この才氣溢れ世渡りの下手な親友の生計をも苦慮せんとする巾の広さが認められるのである。

ところで前掲の母宛書簡(一八〇〇年七月)で詩人は、「久しく見失なわれておりました寛ぎと安らぎ」(註(3))が親友ランダウエルの下で再び見い出されたと告白していた。この脈絡を伝記の上で考えてみると、実は詩人の所謂ディオティーマズゼツテ体験が此所で浮上して来る。つまり『ヒューペリオン』第一巻(一七九七年)で、詩人の筆力により言わば永遠なる女性へと昇華された^⑧と云える、このディオティーマ体験において恐らく始めて、詩人は真正正銘の「寛ぎと安らぎ(Zufriedenheit und Ruhe)」を獲得することが出来た模様である。すなわちズゼツテ・ゴントルト婦人(一七六九年—一八〇二年)の子弟の家庭教師時代(一七九六年一月から一七九八年九月フランクフルト)初期の充実した姿を、ヘルダーリンは詩作上の友ノイファーに向かい心から喜びに満ちて報告している。

僕はこの上なく元氣だ。屈託なく暮らしている。きつと至福なる神々 (die seeligen Götter) もこんな生活だろう。⁽¹³⁾

(二七九六年三月付ノイファー宛書簡)

この文字通り「至福」な充ち足りた時期に見られた程の「寛ぎと安らぎ」が、幸運にも詩人の伝記では再び親友ランダウエルのもとで獲られたと思われるのである。

「乏しき時代の詩人 (Dichter in dürtiger Zeit)」と「パンとぶどう酒」(第七節、一二二句)において自覚し、時代の夜を歩むヘルダーリンにとり、かくして「寛ぎと安らぎ (Zufriedenheit und Ruhe)」の稀有な時節は人生で二度訪れたことになる。しかもこの親密なる者たちとの邂逅を機に、詩人の実作『ヒュペーリオン』と『パンとぶどう酒』が実り豊かな詩想展開を始めたのである。伝記上とかく取り上げられるのは女性ディオティーマ・ズゼッテ体験であり、確かに外見の華やかさにおいて恋愛体験を凌ぐものは無からう。蓋し「思慮深い家長」ランダウエルとの交誼は、もし『パンとぶどう酒』が詩想の豊かさや深みにおいて『ヒュペーリオン』を凌駕し、前者のキリスト像が後者の永遠なる女性ディオティーマ像以上に濃淡細やかな詩歌象徴として現象している点を留意するならば、恋愛体験にも負けず劣らぬ現存の両極の出会いである当該の「思索家と実務家 (Denker und Geschäftsmann)」(註(5))とが織り成す「調和ある対立 (Harmoniscentgegensetzt)」が重視されて然かるべきであらう。

殊にヘルダーリン詩歌においては、「母なる大地 (Mutter Erde)」と共に、『パンとぶどう酒』第四節に云う「父なる神気アイテル (Vater Aether)」(第六五句)が重きを成して、大地ゲルマニアの母なる懐へと「至福なるギリシア」(第五五句)が「偉大なる運命 (das große Geschick)」(第六二句)として空無の彼方から「普遍的幸に満ちて、雷

鳴とともに清澄なる大気 (アイテル) から眼界を過り突入して来る」(第六三句―第六四句)。かくして「永遠なる女性 (Das Ewig-Weibliche)」(註(12))なす浪漫情緒は玉碎し、この幽玄なる悲劇の誕生する魂の淵から「祖国 (ドイツ) の詩歌の崇高で純粹な歓呼 (das hohe und reine Frohlocken vaterländischer Gesänge)」(註(2))が「父なる神気アイテルよ! (Vater Aether)」(註(2))と産声をあげる。この「至福」なる「父」と同様に、「思慮深い家長」ランダウエルは詩人にとり全く別世界の存在である。反して女性ディオティーマ像こそ正に詩人の心に適う別かち難き同居人に他ならない。

なるほど全く別世界の存在であるにも拘わらず、否むしろ正に全然無縁だからこそ、『パンとぶどう酒』では敢て「父 (Vater)」(第二七句)の懐から「神自身もまた人の姿を取り来臨した (er kam auch selbst und nahm des Menschen Gestalt an)」(第一〇七句)と歌われる。「パンとぶどう酒」を物語る「聖書」に依れば、「父」たる「神自身」こそ天地万有の「思慮深い家長」に他ならない。しかもこの「家長」の「思慮」は人知の外にありながらも「隠れて働き (Verborgengewirkend)」⁽¹⁴⁾つづけていると思われる。丁度そのように詩人のような内面的存在とは一見無縁な豪商ランダウエルが、実は「思慮深い家長」としてヘルダーリンを庇護していたのである。

一七九九年一月一日付弟宛書簡で詩人自身が語る所によると、「何事にもまして僕たちは、あの偉大なる言葉『私は人間なのだ。人間に関するもので私に無縁なものは何一つ無いと私は思う (homo sum, nihil humani a me alienum puto)』を、全き愛と全き真剣を以て受け取る⁽¹⁵⁾」と一応表明することは出来たとしても、実状は難く現に一七九八年十一月十二日付ノイファー宛書簡では本音を吐き、「僕は実生活における凡俗を余りに厭いすぎ (ich scheue das Gemeine und Gewöhnliche im wirklichen Leben zu sehr.)」と告白している。だがしかしながら、

『聖書』の父なる神自身が罪人ゆえにこそ世に隠れて働き(註(22))かける正にその様に、「思慮深い家長」ランダウエルは、稀有の詩才が凡俗ならぬ故にこそ、その非凡な親友を俗の側から寛く包容できたのである。

君は全くの四面楚歌だ(Dein Schirm ist durchaus nirgends zu finden.)。だが僕は諸手を上げて君を待た(Dich erwartet mit offenen Armen)

君のクリスティアン・ランダウエル

(一八〇一年八月二十二日付詩人宛書簡)

恐らく『パンとぶどう酒』冒頭の都市像における日常性は、もし豪商ランダウエルとの出会いが無かったならば、あれ程に心をこめて歌われはしなかったであろう。否、そもそも日常の俗界などが、思想詩『パンとぶどう酒』と結び得たことさえ、両友の交誼なしには考え難いと思われるのである。

ところで当時の資産家が概して豪商ランダウエルの如く寛大であったかと云うと、事実は恐らく逆であったと推測される。たとえ詩人の伝記に限定してみても、正反対の人物像を探するのは容易である。実は先程ディオティーマ体験の折に触れたズゼッテ・ゴンタルト婦人の配偶者ヤーコプ・ゴンタルト(一七六四年—一八四三年)が、毛織物商人ランダウエルと好対称をなす、「仕事第一(les affaires avant tout)」を旨とした生粋の実務家(reiner Geschäftsman)であった。

銀行家ゴンタルトと商人ランダウエルほど大きく食い違う人物像はまず考え難い。当然ながら前者は冷徹な現世主義者(kühler Weltmann)であったが、後者は実務上の人生の課題と或る高次な美意識とを結びあわせる心術(art)を心得ていたのである。

(ホイシエレ『ヘルダーリンの友人圈』)

こう書くとも如何にも銀行家ゴンタルトが異常な精神の持ち主であるかの様な印象を与えるが、実際には例えばゲーテ作の長篇小説『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』(一七九六年)に登場するヴェルナーと余り異なることなき当時の平均的実業家の一人としてゴンタルトをも考え併せるのが穏当ではなからうかと思われる。

当の長篇小説において「真の商魂(Geist eines echten Handelsmannes)」との関連で、ヴェルナーは「複式簿記」を「人間精神の最もすばらしい発明の1つ(eine der schönsten Erfindungen des menschlichen Geistes)」と褒め称え、更に別の箇所では「わが愉快な信条(mein lustiges Glaubensbekenntnis)」を次のように告白する。

「実務を整え、金を儲け、家族の者と楽しくやり、世間のことで役に立たない事には何一つ関心を払わないことなのだ。」

この現実主義者の発言を、實在の銀行家ゴンタルト自身の信条告白と看做しても、恐らく大過ないと考えられ得よう。

このように世間知に長け経済活動に励む通例の実務家の人生観に、抑々ヘルダーリンのように深く物思いに耽り静かに思索をめぐらす詩人の内観が働きかけない事は世に珍らしくない。むしろ稀な場合に「思索家と実務家」との両者が実り豊かな対話を始める。例えばシラーとその親友ケルナー(一七五一年—一八三二年)の場合も特筆すべき例であった。但しケルナーは法律関係の実務家、つまり前述のグッチャーやフリッシュ(註(9))のような言わば公務員あるいは官僚であった。考えてみるに、これら法律関係の実務家は職務上すでに公益を代弁するのであるから、民間で経済活動に励み「収支得失を慮る」商人や銀行家とは趣を異にし、敢て「祖国(ドイツ)の詩歌の崇高で純粋な歓呼」(註(2))に耳目をそばだてても不思議ではない。他方民間の実業家は、もし銀行家ゴンタルトのように実益上の「収支得失」に余念が無ければ、当然「詩歌の歓呼」のように「役に立たない事には何一つ関心を払わない」(註(29))のが普通である。ところが毛織物商人ランダウエルは異例であった。し

かもこの稀有な「思慮深い家長」が常に「諸手を拡げて待つ」(註(25))「寛きと安らぎ(Zufriedenheit und Ruhe)」(註(3))の場が紛うことなき日常の現実として開かれていたればこそ、敢てこの日常性を窓として西欧意識の淵を彩る魂の歌声が次第に心を開き、あたかも生育する自然の如く充実した思索の力を展開することが出来たと思われるのである。

(3) ランダウエル絨毯毛織物商会

前述した実務家ランダウエルが思索家ヘルダーリンを庇護できた脈絡は、異質な魂が相互の違いを認めつつも歩み寄り対話し得た現実を物語るものである。この言わば調和ある対立、(2)(1)の契機は思想詩『パンとぶどう酒』において、別に例えば「昼と夜」とか「古典ギリシアとキリスト教西欧」と云うように一見したところ水と油の如き矛盾対立が、何らかの相互対話を目指す経緯へと繋がる。蓋しこの脈絡はあくまで相互対話であり、所詮「対立」は解消されず統一されぬのであるが、しかし正に「対立」が形造る明暗が「調和」を仮象として樹立するのである。

つまり「思索家と実務家」(2)(5)のように、日常意識においては「対立」しているものが、稀有な詩歌象徴の調べにより「調和」を目指しているのが、思想詩『パンとぶどう酒』の基本性格と考えられる。故に古典ギリシアの昼とキリスト教西欧の夜とか、或いは内面の精神界と外界の現実とかが、濃淡細やかな明暗を織り成し、この思想詩の中では減張ある平衡を獲ており、此所では決して或る唯一の原理が全体を丸く収め大団円をなすことはない。そしてこの中央集権ならぬ共和精神を体現し、敢て専制を厭う『パンとぶどう酒』の詩想は、幾重にも微妙な心の髪を織り成しつつ、複雑な西欧キリスト者の意識の淵に深まり沈みゆくのである。

この専制を厭う共和精神を表現していると思われる具体的な詩節を思想詩の中に探すと、それは第三節の第四四句以下に見い出される。

……永遠に存続する規矩(Maas)、
四五 万人に普遍で、しかも各人各様(の規矩)が定められ、何処に往き来しようとも自由なのだ。^①

(『パンとぶどう酒』第三節、第四四句―第四六句)

この「規矩」は場合により、ルソー著『社会契約論』(一七六二年)に云う「普遍意志の至高の指導(La suprême direction de la volonté générale)」とか、カント著『人倫の形而上学』(一七九七年)に云う「万人の心を合わせて一致した意志(der übereinstimmende und vereinigte Wille)」とか、フィヒテの『ドイツ国民に告ぐ』第十三講(一八〇八年)に云う「精神界の彼の最高法則(jenes höchste Gesetz der Geisterwelt)」などに遡求でき得る西欧近世市民社会形成原理と考えられるが、とにかくこの脈絡は「最高の共同が最高の自由である(Die höchste Gemeinschaft ist die höchste Freiheit)」(ヘーゲル)と要約でき得ると思われる。^②

この観点を物語るヘルダーリン自身の言葉としては思想詩『パンとぶどう酒』第八四句の「一にして全(Eines und Alles)」とか、哲学長篇小説『ヒュペリオン』第一部(一七九七年)に云う「ヘーラクレイトスの多様の一者(ein Hagegor eurq)」(第三〇書簡)とか、或いは一七九九年七月三日付ノイファール宛書簡にある「各個が固有の全体(der ein eignes Ganze ist)」などが考えられるが、恐らく一七九八年十二月二十四日付シンクレア宛書簡の次の一節が引用するに適切であろう。

かくしてまたそれ故に次のことが明らかである。各個が全体と親密に結びつき、この各個と全体との両者が唯一の生きた全体を形造る。だがこの全体は徹底して個別化され、この個別の全く独立した諸部分から成り立ち、しかもこの諸部分は正にかく親密に何時までも結び合わされているのである。^③

これをシラーの戯曲『群盗』第二版(一七八二年)巻頭の扉絵下の言葉で示せば「暴君打倒(in Tyrannen)」と政治色濃く表現できようし、また一七九三年二月二十三日付ケルナー宛の所謂シラーの『カリアース書簡』によれば「美(schön)」と一言で以てこれを蔽うことが可能であろう。

以上の如く思想詩『パンとぶどう酒』などに表明された「調和ある対立」なす共和精神を鑑みて、今度は詩人の友ランダウエル商会経営を考え併せてみようと思う。果してこの経営形態が共和精神に適うものであったのか、或いはそれを裏切る専制形態であったのかが此所で問われることになる。この分析のための資料としては、一八二〇年に始めて設立された「統計・地誌局(Statistisch-topographisches Bureau)が一八三二年に刊行した「ヴュルテムベルク年鑑(Württembergisches Jahrbuch)」に収められた「ヴュルテムベルク王国内工場目録(Verzeichniß der im Königreich Württemberg befindlichen Fabriken und Manufakturen)」が有効と考えられる。

この「ヴュルテムベルク工場目録」からは、「ランダウエル絨毯毛織物商会(Landauersche Fellepiche- und Wollwarenhandlung)」に關し次のことが解かる。

製品は絨毯。工場内労働者なく、工場外労働者八名。商会設立一七九七年¹³⁾

此所に云う商会の製品たる「絨毯(Fellepiche)」の製作には、確かに相当な高度の技術が必要であったと考えられる。すると「工場外労働者八名」としては、恐らく織物職人の親方(Webermeister)を考えるのが適切であろう。

ところで、このように在来の手仕事職人と新興の資産家とが手を結んでいた当時の経営形態を、社会経済史の上では「問屋制度(Verlagssystem)」と呼び、「個々の独立した手工業(Handwerk)と工

場制手工業(Manufaktur)との間に位置する資本主義の発展段階」と看做している。つまりこれは資本主義勃興期に、殊に当該のヴュルテムベルクなど西南ドイツで見受けられた経営形態であり、決して大規模な工場への集中形態ではない。従って、一七九七年に新たに創設された「ランダウエル商会」においては、資産家であった経営主クリスティアン・ランダウエルに対し八名の手工業職人が全き従属関係に立たず、各々個人が固有の在り方を保持しながら相互に「調和ある対立」の様を呈していた可能性が高いと想像されるのである。

すなわち「ランダウエル商会」を、工場制手工場の中で分類すると、労働集中管理を旨とする中央集権型の「集合工場(Manufacture réunie)」と言ふよりは、むしろその対をなす「分散工場(Manufacture dispersée)」と看做される¹⁴⁾。

幾百の人々が一人の経営主の下で働く大規模工場を、通常は集合工場(vereinigte Manufakturen)と呼んでゐる。……この集合工場(Die vereinigte Fabrik)は一人あるいは二人の企業家に巨万の富をもたらす。……他方、分散工場(die getrennte Fabrik)では誰か一人が富むのではなくて、多数の労働者が結構に暮らしてゆけるのである¹⁵⁾。

(マルクス『資本論』第一巻、一八六七年、第七篇「資本の蓄積過程」、第四章「いわゆる本源的蓄積」)

確かに『資本論』での精緻な分析を待つまでもなく、既に『百科全書(Encyclopédie)』第一〇巻(一七六五年)でほぼ百年前に、「集合工場」に關して、

この大工場(La grande manufacture)では、鐘を叩く一撃の下に全てが執り行なわれ(tout se fait au coup de cloche)職人は一層と拘束され手荒く扱われている¹⁶⁾。

と巧みな比喻で叙述されており、他方また「分散工場」については、

この小工場 (Le petit fabricant) では職人が親方の仲間 (camarade) であり、親方とは同僚 (son égal) との如く生活する²⁵⁾

と物語られている通り、「集合工場」の中央集権型専制が「分散工場」の共和精神と好対称をなしている。そして取りも直さず「ランダウエル絨毯毛織物商会」が、正にこの「分散工場」の一形態と看做されるのである。

当該の「思慮深い家長」の内実が以上の考察で経営上の出来事としても確かめられたと思われる。つまり「思慮深い家長」は、このような経済上での基礎をも踏まえて、更に稀有な詩人ヘルダーリンをも親友として迎えることのできた手腕を有していたと考えられる。そして現美上のこの「思慮深い家長」の存在は、徐々^{おもろ}に思想詩『パンとぶどう酒』全体の世界へと協和なして響き渡ってゆくのであり、決して冒頭の都市像を飾るに過ぎぬ詩想展開上の付け足しと解されてはならないのである。

「家長」とは既に述べたように「父 (Vater)」(2) (19) へと繋がり、然り気なく「隠れて働き (Verborgengewirkend)」(2) (22) につけていられると思われる。そして何時とは無しに思想詩の基調へと靈妙に協和してゆく。

Vater Aether erkannt jeden und allen gehört.

父なる神気アイテールが誰にも知られ、万人のものとなる²⁶⁾

(『パンとぶどう酒』第九節、一五四句)

あたかも天空の大気の如く「父」たる「神自身」(2) (20) は「万人」に開かれており、「誰」の魂の心鏡にも満面を映す。此所に「思慮深い家長」(第四句) が心から反響する思想詩の淵源がある。この魂の淵源は果して「至福なるギリシア」(第五五句) に在る。つまり「在りて在る」²⁷⁾「ねたむ神」²⁸⁾にのみ巨万の讚美歌が専有される中央集権化した「汝なすべし (Du sollst)」の神界ではなく、十人十色の「神話の神 (Gott

der Mythe)』²⁹⁾が矛盾を孕みつつも「調和ある対立」(2) (1) を織り成し、濃淡細やかな魂の明暗を彩る「神々の昼 (Tag)」(第七二句) がこれであり、この「天上の祝祭 (das himmlische Fest)」(第一〇八句) に自然と雄大に輝く「父なる神気アイテール (Vater Aether)」(註(20)) の晴やかで清澄なる性格、

五五 Seeliges Griechenland!

..... tönet das große Geschick
..... brichts, allgegenwärtigen Glücks voll

六五 Vater Aether!

Vater! heiter!

五五 至福なるギリシアよ!

..... あの偉大なる運命が轟き、
..... あの神速の運命が砕け、普遍の幸に満ちて、
雷鳴とともに清澄なる大気から眼界を過り突入して来る。

六五 父なる神気アイテールよ!

..... 父よ! 清澄で晴やかな者よ!³⁰⁾

(『パンとぶどう酒』第四節、第五五句—第六九句)

へと靈妙に木霊^{こだま}なして、当時十八世紀ドイツ史の現実社会から、気宇壮大な「思慮深い家長」が稀有な詩歌象徴として『パンとぶどう酒』冒頭の都市像に立ち現われるのである。

(4) 共和精神と専制

前掲の「ヴェルテムベルク工場目録」(③)(13)から「ラングウェル絨毯毛織物商会」の設立が「一七九七年」であることが確かめられた。この設立時期は当該の西南ドイツ地方シュヴァーベンにおいては決して遅いものではなく、むしろこの地方の資本主義勃興期を代表する先駆的企業として「ラングウェル商会」が一七九七年に創設されたと見受けられる。例えば当の「工場目録」によると、この一七九七年よりも早く設立された企業がシュトゥットガルトに見い出されないことから、「ラングウェル商会」が手工業から工場制手工業(Manufaktur)へと進展する産業革命期に先駆けて設立されたことが肯けるのである。

実はこの産業革命期は同時に政治革命期でもあり、一七八九年に勃発したフランス大革命に続き、一八三〇年の七月革命、更には一八四八年のフランス二月革命とドイツ三月革命へと市民社会形成は、既成の中央集権封建体制に丸く収まった専制の殻を破り、新たな「調和ある対立」(②)(1)を実現すべく議会制民主共和制を目指して実質あるものと成ってゆく。これに先駆けドイツではフランス語とフランス文化の専制が、十八世紀後半には完全に打ち砕かれ、「ドイツ音楽、殊にそのバッハからベートーヴェン、ベートーヴェンからヴァーグナーへの偉大なる日輪の歩み」(ニーチェ)を先頭にして、これに加えてカント批判哲学に始まりフィヒテ知識学からヘーゲル精神現象学へと雄飛する学問の充実と、この学知と「音楽の精神」(註(1))に協和する詩歌象徴の調べなす思想抒情詩、とりわけ『パンとぶどう酒』とか『パトモス』の如き後期ヘルダーリンの「魂の歌声(Seelengesang)」⁽²⁾が、フランス文化とドイツ文化との「調和ある対立」を実現する礎として据えられたのである。

本論の関心は当面、近世ドイツ産業革命における経済面へと向けられる。ところで既に当該の西歴一八〇〇年頃に文化面でドイツは心をつ

にし、敢て自らの充実を「ドイツ精神(der deutsche Geist)」⁽³⁾と言いつ得る程の自覚に達していたのであるが、他方その外の経済や政治の面では小邦分立(Kleinstaaterei)ゆえに現実に上まどまりの悪い実情を示していた。辛くも政治上の小ドイツ統一は一八七〇年に軍事力により漸く成し遂げられるのであるが、それに対して経済上のまどまりは一八三三年に成立した関税同盟(Zollverein)が翌一八三四年から一八六七年にかけて実効を増してゆく経過を目安にすることができる。

すなわち当時は「ドイツ」と一言で云っても小邦分立の時代であり、今日ドイツと称する東独と西独との国土は凡そ三百程にも互る政治単位に分かれ、このうち五十程の帝国自由都市を除く二百五十程が領邦国家であり、この三百程が各々独自の関税を物品にかけていた模様である。従って、このドイツの中を商品が流通するとなると、幾重にも互る関税の網の目に捕われることになり、各小邦を経る毎に商品が割高となり経済流通が悪くなるのが実情であった。

この現状で得をしていたのが、北海に面していたハンザ都市の富豪と考えられる。すなわち海上では内陸のように関税がかからずに商品が運べ、何よりまず先進工業国ブリテン王国の織物製品がハンザ都市には容易に入手でき得た。そしてこの工業製品に対しては、東欧にかけての内陸穀倉地帯から農奴制や大農地主(Junker)制の下での安価な農産物や畜産製品を交易のため運んで来れば良く、この後進農業地帯と先進工業国との間を仲介する中継貿易でハンザ都市の富豪は栄えていたのである。

かくして中継ハンザ海外貿易を軸とした経済活動は、一方で工業先進国の繁栄を一層と助長し飛躍的産業発展を大英帝国に専ら約束するとともに、他方では内陸部での旧封建体制の温床たる農業優位を決定ならしめ、内陸ドイツ独自の産業革命の進展を阻むものと看做される。この点を三月革命(一八四八年)前夜にエンゲルスが厳しく批判している。

イギリスは農産物を全く輸出しておらず、絶えず外国から輸入しなければならぬ。フランスは少くとも輸出するだけ輸入しており、この仏英両国の富の源泉は就んずく工業製品の輸出である。これに対してドイツは工業製品をほとんど輸出しておらず、夥しい穀物、羊毛、家畜を輸出している。……農業の政治上の代表者は、他の欧州諸国と同様にドイツでも、大土地所有者たる封建貴族であり、この貴族の専制支配に適う政治形態が封建制度である。そしてこの封建制が解体した所はどこでも、農業が国の産業を決定しなくなつたのである。

（『ドイツの現状』一八四七年）

実に関税同盟成立（一八三三年）後の一九世紀中葉においても尚このような批判が妥当しており、文化面では既に啓蒙先進諸国の学芸成果を凌ぐ音楽や思索の力がカントやベートーヴェンの名声とともに確実な影響を諸外国に与えていたにも拘わらず、経済面において先進工業国とドイツとの「調和ある対立」はなお今後の大きな課題に留まり続いていたのである。

因みに『ドイツの現状 (Der Status quo in Deutschland)』（註(4)）においてエンゲルスは封建貴族 (patricius feudalis) にのみ言及しているが、更に只今話題としたハンザ都市の富豪のような都市貴族 (patricius civilis) をも考え併せると、封建制の温床たる「農業の優位 (Die überwiegende Bedeutung des Ackerbaus)」（エンゲルス）とともに中継ハンザ海外貿易に根ざした両貴族の勢力が、内陸ドイツ独自の工業発展を阻み、仏英など産業先進国に対するドイツの後進性を裏付け、これら諸外国とドイツとの経済面における「調和ある対立」への努力に水を差す障壁となっていたと見受けられるのである。

この脈絡で興味深く思われるのが、思想詩『パンとぶどう酒』冒頭の都市像が形造られつつあった一八〇〇年秋十一月初旬に公刊されたフィヒテ著『封鎖商業国家論 (Der geschlossene Handelsstaat)』である。

一見この書名「鎖国論」は「開国論」と比べる時、自由な通商を拒む時代後れの考えを論述した著作を思わせる。確かに当時アイルランドをも併合（一八〇一年）し海外植民地争奪戦に勝ちどきを挙げていた大英帝国の高度経済成長を積極的に評価するならば、通商の自由へと開国を促進しない理論は反動と映じる以外に術はない。なぜなら、「或る見えざる手により導かれ (led by an invisible hand)」（スミス『国富論』一七七六年）で巧妙に練られていると思われる自由放任の経済活動こそが、正に「諸国民の富 (The Wealth of Nations)」の源泉と考えられたからである。

それは商業精神 (Handelsgeist) であり、この精神は戦争と共存し得ず、そして早晩どの国民をも支配するのである。⁵⁸⁾

（カント『永遠平和のために』一七九五年、補遺第一「永遠平和保証について」）

なるほど内陸東欧の穀倉地帯と大英帝国産工業製品との中継貿易で栄えていた海港都市ケーニヒスベルク在住のカントが、「永遠平和のために」「商業精神」を肯定したのも不思議とは思われない。

これに反して内陸ドイツの領邦ザクセンの寒村に貧しい織工の子として生まれたフィヒテは、「商業精神」による資本主義が正に帝国主義へと繋がり、「永遠平和のために」なるどころか、むしろ「この精神が戦争と共存し得る」「遍く見受けられる密やかな商業戦争 (ein allgemeiner beheimter Handelskrieg)」に他ならないと主張し、先師カントの平和論を敢て批判する⁵⁹⁾。

この密やかな商戦は暴力行為へと繋がる。……相争う商業利害関係がしばしば諸々の戦争の真の原因であり、しかも口実は別に与えられるのである。⁶⁰⁾

（フィヒテ『封鎖商業国家論』一八〇〇年、第二書「現代史——目下現実の諸国家における通商状態について」、第六章）

単に「商業利害関係 (Handelsinteresse)」と云つても抽象的だが、此所で先程から話題とした大英帝国の経済発展に軍事拡張が伴つていた点を顧慮するならば、無制限の自由放任な商業精神を否定的に見直し「鎖国論」を説くフィヒテの主張に一理あることが解かるのである。

殊にエンゲルスの説くように、内陸ドイツにおける「農業の優位」(註5)が封建制の残存する温床となり、しかもドイツが言わば大英帝国の商業資本の植民地として後進地域に甘んじねばならなかった当時としては、『ドイツ国民に告ぐ』第十三講(一八〇八年)でフィヒテが、

ドイツ人相互の一致とともに、国内の独自性と国内商業の自立がそれに次ぐ繁栄への道なのである。⁹⁹⁾

と力説したのも観念でなく現実であつたと看做され得よう。すなわち前述した北海ハンザと内陸ドイツとの対立から考えると、「ドイツ国内の独自性と国内商業の自立」を生み出す母胎として、ドイツ内部での関税の撤廃と内地工業の保護育成こそが、ドイツ産業発展を約束する具体策として思い浮かぶからである。

正にこの脈絡において、内陸ドイツの新興企業家であつた毛織物商人ランダウエルの姿が浮かび上がって来る。すなわち一七九七年に創設されたこの商会の発展にとり、取りもなおさずドイツ内部での関税の撤廃と内地工業の保護育成こそが鍵となるからである。果して実際に十九世紀ドイツ史の現実はこの方向に向かい、次第にハンザ都市の中継海外貿易の意義は失なわれてゆき、その都市貴族はマン著『ブデンブローック家』(一九〇一年)に描かれた当家的ように没落した模様である。そしてこの際十九世紀を通じて、ドイツ関税同盟が促進され、やがてドイツも仏英に追いつかんばかりの先進工業国に成長してゆくのである。

この十九世紀ドイツ資本主義の展開に伴う産業革命の進展において、旧来の中継ハンザ海外貿易を動脈とした経済構造が崩れてゆき、これと

ともに内陸ドイツ独自の工業発展の時代が到来することになる。この新たな時代に先がけ一七九七年に、「思慮深い家長」が「ランダウエル絨毯毛織物商会」を設立したと考えられる。久しく中継ハンザ海外貿易を主軸として、ドイツには産業先進国から織物工業製品が内陸からの農産物と引き換えに流入し、ドイツは言わば大英帝国の植民地たる工業後進国に甘んぜねばならなかった。ところが、この新たなドイツ産業革命の進展の時代には、経済上のこの専制を破き、仏英など工業先進国との経済面における「調和ある対立」を目指し、ドイツ国内産業が育成されてゆくのである。そして、この産業革命の力が、先にエンゲルスの二云「貴族の専制支配」たる「封建制が解体」する母胎となつてゆくのである。市民社会形成の原動力となつてゆくのである。

本論がヘルダーリンの思想詩『パンとぶどう酒』第四句に読んだ「思慮深い家長」ランダウエルの姿は、このような十九世紀資本主義西欧市民社会形成への展望の下に、一層と意義深く映じて来る。実際ドイツ文学史上の稀有の詩才をも温かく包容できたこの「実務家」の力量は、恐らく経済活動においては一層と巾広い視野と、祖国ドイツの遠い将来への見通しの下に発揮された事と思われる。更に留意すべきは、例えば『ヘルダーリン年代記』(一九七〇年)における解説において、詩人の伝記に関する第一人者アドルフ・ベックが、

政治上ランダウエルもまた共和主義者 (Republikaner) であり民主主義者 (Demokrat) であつた。¹⁰⁰⁾

と叙述して、詩人と同様に毛織物商人「もまた (auch)」政治上民主共和制の支持者であつた旨を物語っている。このことから解かる通り、商人ランダウエルが政治にも無関心でなかつた点が重要である。

つまり豪商ランダウエルは宮廷と結託せずに「共和主義者であり民主主義者」(註(11))として市民層とともに未来を指したと思われる。こ

れに反して未だ経済成長なき封建制下での当領邦ヴェルテムベルクでは、豪商ヨゼフ・ジュス・オッペンハイマー（一六九二年—一七三八年）¹³が、いわゆる宮廷ユダヤ人（Hofjude）として重用され枢密財政顧問官（Geheimer Finanzienrat）にまで出世し人々の羨望の的となり、挙げ句の末は政權交代を機に一七三八年二月四日に公衆の面前で絞首刑にされている。当時は恐らく宮廷に取り入るのが豪商の実力を発揮する最も有効な道だったのであろう。だがフランス大革命勃発（一七八九年）後の産業革命進展の中においては事情が異なり、「思慮深い家長」ランダウエルのように生育し発展する市民社会と歩みをともしながら、稀有の詩才をも庇護し得た豪商が出現し得たのである。

故に「思慮深い家長」ランダウエルが、在来の啓蒙期における専制支配、いわゆる啓蒙専制の「実父長的統治（väterliche Regierung）」に組するとは考え難い。なぜならカントが『「理論上は正しくとも実践で役立たぬ」と云う俗説について』（一七九三年）と云う論文で述べているように、

言わば子供たちに対する家父長権の様な、国民に対する好意（Wohllollen）の原理に基くが如き統治、すなわち家父長的統治（imperium paternale）では従って臣民が、自らにとり真に何が有益か有害かを判断できぬ未成年の子供同然で、全く受動的に振舞わざるを得ず、如何に幸福たるべきかに關しては専ら国家元首の判断を、またこの元首が何を欲しようとも専らその親切を期待するのみであり、このような家父長的統治は考えられる限り最大の専制支配（der größte denkbare Despotismus）である。

と判断されるからで、政治上のみならず経済面においても上述の如き「共和主義者であり民主主義者」であり得た「思慮深い家長」は、旧封建体制下での啓蒙専制の範型なす「家父長的統治」に代わる新たな人倫統治のあり方を求めていたと思われるのである。

この要請に応える政治上の特筆すべき出来事が、フランス大革命下で

の王制廃止、すなわち共和制（République）樹立（一七九二年九月）と旧国王ルイ・斬首（一七九三年一月）であった。殊に諸外国の「家父長的統治」が皆この共和国フランスを敵視し、反動勢力として結託し王政復古を目指した結果として、四面楚歌のフランス人民は祖国（patrie）のために自ら進んで抗戦した。つまり心の内からの必然により、何ら或る「家父長」の命令に依存しない「祖國的統治（vaterländische Regierung）」が此所に誕生したと見ることが出来る。

家父長的な *patris* 祖國的統治（imperium non paternale, sed patrioticum）のみが正に、諸權利の資格ある市民のため、同時に統治者の好意を顧慮して考え出され得る唯一のものである。祖國的（Patriotisch）とは、つまり國民の誰もが（国家元首も例外とせず）公共体を母なる懷と、或いは国土を父なる大地と看做す考え方であり、この生まれ育った祖国を誰もがまた言わば貴重な遺産として後世に残さねばならないと言えり。それは取りも直さず各人が自らの諸權利を公共体の（普遍）意志に拠る諸立法により守るためであり、決して統治者の無制限な（絶対）恣意に従属する事態を正当とは看做さないものである。

このようにカントは『俗説について』の論文において、「祖國的統治」を「家父長的統治」に對置せしめている。

恐らくこの「家父長的ならざる祖國的統治（Nicht eine väterliche, sondern eine vaterländische Regierung）」の原理は、正に冒頭の詩歌象徴「思慮深い家長」のみならず、この思想詩『パンとぶどう酒』の作品全体の基調と協和しうる指導理念であろう。すなわちドイツ人ランダウエルが社会経済面において「祖国」ドイツ市民社会形成に力を尽したとすれば、この豪商の友ヘルダーリンこそ、他の諸々の詩人たち例えばシラーやゲーテにも増して「祖国（ドイツ）の詩歌の崇高で純粹な歓呼（das hohe und reine Frohlocken vaterländischer Gesänge）」¹⁴（2）（2）を目指し達成した歌人と看做されるからである。

註 解

〔四〕「思慮深い家長」

(1) 緒 言

- (1) 『ドイツ精神史における登頂前夜ホームブルク』一九八一年「序言」一七頁。
- (2) 和訳ヘルダーリン全集、河出書房新社、一九六六年―一九六九年、第二巻、一〇九頁。
「抜かりのない商人はわが家にくつろいでその日の損益を思いはかる。」(第四句―第五句)
- (3) 『パンとぶどう酒』冒頭の都市像、高知大学学術研究報告第三十二巻、人文科学、一九八四年、(三三)市民 (1)市民生活、三八頁―三九頁。
- (4) 仏訳ヘルダーリン作品集、ブレイヤード版、一九六七年、八〇八頁、ルイー訳。
- (5) 伊訳ヘルダーリン詩集、エイナウディ叢書三三、一九六三年、一〇一頁、ヴィゴロロ訳。
- (6) 独英対訳ヘルダーリン『詩歌と断片』一九八〇年、ハンバーガー訳、二四三頁。
- (7) シンチンガー編『ドイツ詩集』第三書房、一九六九年、一二九頁。
- (8) ヘルダーリン全集、シュトゥットガルト版、一九四六年―一九七七年、第二巻、九〇頁。
- (9) 『一八〇〇年頃の悲哀と理想——ヘルダーリンの悲歌作品研究』一九八二年、三〇頁。
- (10) 全集、第二巻、九〇頁。
- (11) 『ドイツ詩集』(註(7)) 一二九頁。
- (2) 親友ランダウエル
- (0) クレーナー版『ドイツ史跡都市案内』第六巻「バーデン・ヴュルテムベルク」一九六五年、六五七頁、欧文註掲載市街図参照。
- (1) 『詩歌精神の方法論』全集、第四巻、二六〇頁。
- (2) 全集、第六巻、四三六頁。一八〇三年十二月付ヴィルマンズ宛書簡「四五。

- (3) 全集、第六巻、三九八頁。母宛書簡二一〇。
- (4) 全集、第二巻、一一四頁。
- (5) 全集、第六巻、二一八頁。弟宛書簡二二六。
- (6) 全集、第七巻、第二分冊、三九一頁。母の遺書(一八二二年九月十日付)の記述により。
- (7) 註(5) 弟宛書簡、二一八頁。
- (8) 全集、第六巻、三九五頁。母宛書簡二〇八。
- (9) 全集、第六巻、三九七頁。母宛書簡二〇九。
- (10) 全集、第六巻、三九八頁。母宛書簡二一〇。
- (11) 全集、第六巻、四〇一頁。妹宛書簡二二五。
- (12) ゲーテ『ファウスト』結句(第一二二二〇句)。ハムブルク版作品集、一九八二年、第三巻、三六四頁。
- (13) 全集、第六巻、二〇五頁。書簡一一八。
- (14) 全集、第二巻、九四頁。
- (15) 『パンとぶどう酒』第三部「西欧(ヘスペリア)の夜」(第七節―第九節)参照。

- (16) 全集、第二巻、一二三頁。『母なる大地に』。
- (17) 全集、第二巻、九二頁。
- (18) ニーチェ『悲劇の誕生』一八七二年。
- (19) 全集、第二巻、九四頁。第八節。
- (20) 全集、第二巻、九三頁。第六節。
- (21) 『新約聖書』「マタイ福音書」第二六章、第二六節―第二九節。「マルコ福音書」第十四章、第二二節―第二五節。
- (22) 全集、第一巻、二七八頁。『婚礼前のエミリア』第三〇句。
- (23) 『旧約聖書』「イザヤ書」第四五章、第十五節「隠れた神(Deus absconditus: ein verborgener Gott)」参照。
- (24) 全集、第六巻、三〇七頁。弟宛書簡一七二。
- (25) 全集、第六巻、二八九頁。書簡一六七。
- 他方詩人の「凡俗嫌い(Odi profanum vulgus)」(ホラーティウス『歌章』第三巻、第一歌、第一句。作品集、トイブナー古典叢書、一九七〇年、六五頁)は珍らしいことではない。別に陶潜『歸園田居五首、其一』冒頭「少無

通俗韻（少きより俗に適うの韻べく）（岩波中國詩人選集、第四卷、一海知義注『陶淵明』一九五八年、二五頁）参照。蓋し「凡俗」とは「聖域を漬す世俗の徒」（前記『歌章』藤井昇訳、現代思潮社、古典文庫、第四七卷、一一五頁）と解され得る「穢土」でもある。

(25) 全集、第七卷、第一分冊、一六九頁。

(26) ベック／ラーベ共編『ヘルダーリン年代記』一九七〇年、三七二頁―三七七頁。

(27) 『ヘルダーリンの友人圈』一九七五年、八六頁。

(28) 作品集、第七卷、三七頁。

(29) 作品集、第七卷、二八七頁。

(3) ランダウエル絨毯毛織物商会

(1) 全集、第二卷、九一頁。

(2) 全集、ブレイード版、第三卷、一九六四年、三六一頁。『社会契約論』第一編、第六章。

「われら構成員の各人が自己の人格および能力を公に委ね、普遍意志の至高の指導の下に置く。そして我々は各構成員を、全体から分かち難い部分として、皆一緒に受けとるのである。」

「つまり各人が自己を皆のものとしつつ、誰にも自分を譲渡しないのである。」

(3) アカデミー版に拠る作品集、一九六八年写真複製版、第六卷、三二三頁。

「それゆえ各人が万人に関し万人が各人に同じ正に同一の決定をする限りでの、万人の心を合わせて一致した意志に、すなわち公民の一致した普遍意志のみに立法権がある。」

(4) 作品集、一八四五年―四六六年版に依る写真複製版、一九七二年、第七卷、四六七頁。

「精神の本性は人類の本質を偏に最高度に多様な諸段階をなし、各々個人においても、また大きな全体としての個体、つまり諸国民においても表現し得た。あたかも各国民が自己を頼みとし、自らの固有性に従い、また更にこの国民に属する個人が、国民共通の固有性とともに自らの特殊な固有性に従い、自己展開し自己形成する丁度そのように、神性の現象は自ら固有の鏡に自己を映し出すのである。」

(5) 作品集、一八三三年―四五年版に拠る、一九六九年―七一年、第二卷、

八二頁。『フィヒテ哲学体系とシュリング哲学体系の差異』（一八〇一年）「フィヒテ体系の叙述」。

(6) 当該の詩節を「自由」に関して私は既に、「至福なるギリシア」（第五五句）を指す「空無を孕む内面の飛翔」において考察した。詳細は高知大学学術研究報告（一九八五年度）第三四巻の人文科学篇所収（一頁―七二頁）の筆者の別論、ヘルダーリンの西欧ギリシア論——「至福なるギリシア」のうち（三）神話の神、殊にその（9）堅固に留まる一者を参照。

(7) 全集、第二卷、九二頁。

(8) 全集、第三卷、八一頁。

(9) 全集、第六卷、三三九頁。書簡一八三。

此所に云う「各個が固有の全体」とは、「威厳ある悲劇形式」における「音調（トーン）の各個が固有の全体」のことである。なぜなら、「この詩歌諸形式のうち最も厳格な悲劇形式が焦眉の急として目指す点が、如何なる飾り気もなく、各個が固有の全体をなす濁りなき偉大な諸音調が十中八九、諧調なして転移しつつ進展する」ことに他ならないから。

(10) 全集、第六卷、三〇一頁。書簡一七一。

この他ゲーテの『ドイツ建築術について』（一七七二年）参照。作品集、第一二巻、一一頁―一二頁。中央公論社『世界の名著』第三八巻、共同訳、一九七九年、三〇七頁―三〇八頁、シュトラスブルク大聖堂について。

「無数の部分が全体の質量にとけこんで、それが単純巨大な姿となって私の魂の前に立ち、私の力は享受と認識のために歓喜に満ちてひろげられるのであった。……まるで永遠な自然の作品のように、無数の小さな部分の一点一画にいたるまで生命が息づいている。すべてが集中して一つの形を作り、すべてが全体を目ざしている。」

同様の観察が大聖堂に関し、ゲーテの『詩と真実』第九書（作品集、第九巻、三八四頁）にも見られる。

「そのような多様性が常に或る大いなる快感を与えるのは、それが然るべき所から導き出され、従って同時に統一感をひきおこすからで、その様な場合にごそ芸術の極致として芸術創作の完成が称えられるのである。」

(11) 全集、ヴァイマル版、第三巻、一九五三年、三四四頁と三四五頁との間。この「暴君打倒」は欧文註に掲げたアイスキュロス『ペルシア人』第二四一

句など古代ギリシア都市国家の民主思想へと遡求でき得る。

- (12) 五巻本ハンザー版全集、一九六五年—七六年、第五巻、四三三頁。美学芸術論集、石原達二訳、富山房百科文庫、一九七七年、六四頁。

「ある風景が美しく構成されるというのは、その個々の部分が互にはたらくあつて、各自がみずからその限界を置き、全体を個々の部分の自由の結果であるようにする場合です。風景のなかのすべての部分が全体に関係づけられていながら、なお各自固有の規則に従い、自分だけの意志に従っているのかのように見えなければなりません。」

- (13) シュトゥットガルト市史料編纂所(Stadarchiv)所蔵。因みにこの「工場目録」の記載は邦語文献、松田智雄著『ドイツ資本主義の基礎研究』(岩波書店、一九六七年)にも採られているが、しかし恐らく写し間違いか誤植ゆえに、「ランダウエル商会」が「ン」を「ウ」とした「ラウダウエル商会」(Ch. Laudauer, F.) (三十五頁)として紹介されている。

- (14) 右記シュトゥットガルト市史料編纂所所蔵「シュトゥットガルトの会社名簿(Stuttgarter Firmenbuch)」(一八三二年)に記載。

- (15) マイヤー百科事典、第二四巻、一九七九年、四八四頁、「問屋制度」の項。

- (16) この「集合工場」と「分散工場」の二分類は、デイドロ編『百科全書(Encyclopédie)』第一〇巻(一七六五年)所収の「マニファクチュール」の項(六〇頁左段—六二頁左段)に拠る。詳細にマルクス『資本論(Das Kapital)』第一巻(一八六七年)の第七篇・第二四章には、「革命の獅子ミラボー」の言葉として「集合工場(manufacture réunieあるいはfabrique réunie)」と「分散工場(fabrique séparée)」が挙げられている(マルクス・エンゲルス全集、第三巻、一九六二年、七四四頁—七四五頁)。尚『百科全書』原典は高知大学附属図書館所蔵の貴重本を用いた。

- (17) 右記(註(16))全集、第三巻、七四四頁—七四五頁におけるミラボーよりの引用。

- (18) 右記(註(16))『百科全書』第一〇巻、六一頁左段。

- (19) 詳細に『百科全書』第一〇巻で「工場制手工業」に関し、その「分散工場」について語られた共和精神は同時に、編集長デイドロを中心にして諸学者が協力した当の『百科全書』そのものの基本姿勢でもあった。

「学術団体のさまざまな対象だけでなく、人知の全領域にわたるこのような

企画を実施すること、これこそ『百科全書』の果すべき役目である。この事業は、それぞれ別個に各自の専門に専心しながら、同時に人類共通の利害と相互の善意によって結ばれた文筆家・技芸家の結社によりはじめて実施に移されることになるだろう。……私は、これら有能の士がそれぞれ別個にあることを望む。……各自が各自の行ないを誇りとし、熱意を燃やす。」「『百科全書』第五巻、一七五五年、デイドロ執筆「百科全書」の項、六三六頁右の左段。法政大学出版局刊『デイドロ著作集』第二巻、一九八〇年、『百科全書』より「百科全書」の項、中山毅訳、九一頁。)

- (20) 全集、第二巻、九五頁。

- (21) 「我は在りて在る者であるぞ(エヒイエ・アシエル・エヒイエ)。」(『旧約聖書』「出エジプト記」第三章、第一四節)。シュトゥットガルト版原典へブライ語聖書、ドイツ聖書協会刊、一九八四年、八九頁。

- (22) 「ねたむ(カンナー)神」(『旧約聖書』「出エジプト記」第二〇章、第五節。第三章、一四節。右記(註(21))原典聖書、一一九頁。一四四頁。その他「申命記」第四章、第二四節。第五章、第九節。第六章、第一五節。右記原典聖書、二九二頁。二九四頁。二九七頁。尚この「ねたむ神」は同時に「生ける(ハイム)神(エローヒム)」(『申命記』第五章、第二六節。右記原典聖書、二九六頁)たる「在りて在る者」(註(21))である。「カンナー(eifersüchtig)」の語彙に関しては、ゲゼニウス『旧約ヘブライ語・アラム語中型辞典(Handwörterbuch)』(第一七版、一九一五年)七二七頁参照。

- (23) ニーチュ『ツアラトウストラはこう語った』第一部、第一章「三段の変容」において、西欧キリスト教倫理を一言で以て蔽ったもの。批判版作品全集、第六部、第一巻、一九六八年、二六頁。

- (24) ヘルダーリン『宗教論(Uber Religion)』一七九九年。全集、第四巻、二八一頁。

- (25) 全集、第二巻、九二頁。『パンとぶどう酒』第二部「ギリシアの日」を、その第四節でこう「神々の日(昼)」と呼ぶ。

- (26) 全集、第二巻、九三頁。右記(註(25))「ギリシアの日」を、その第六節でこう命名する。

- (27) 全集、第二巻、九一頁—九二頁。

(4) 共和精神と専制

- (1) 『音楽の精神からの悲劇の誕生』(一八七二年) 第十九章。批判版作品集、第三部 第一巻、一九七二年、一二三頁。「同じ源泉から溢れ出ずるドイツ哲学の精神」(同章、一二四頁)。

- (2) 『ドイツの歌』第二五句―第二〇句。

一五 として緑濃き木蔭に深く坐し、

また頭の上で微風に櫛の木立ちが戦ぐと、

涼しく息吹く小川に佇ずみドイツの詩人は

かつ歌うのだ、もし明鏡の水面上から

しかと飲みほすと、遠い彼方へと静聴する耳をそばだて、

二〇 魂の歌声を(歌うのだ)。

(全集、第二巻、二〇二頁)

- (3) この「ドイツ精神」を自覚した当時の代表として此所ではフィヒテ

(一七六二年―一八四四年)を挙げておこう。実に一七九九年五月二十二日

付ラインホルト宛書簡でフィヒテ自ら「もし何らかドイツ精神が救われ得る

なら、私が告ぐ(mein Reden)ことにより救われ得る」(バイエルン学術

アカデミー編フィヒテ全集、一七九六年―一九九年往復書簡集、一九七二年、

三五五頁)と表明している程であり、しかもこれが空言でなかったことが

『ドイツ国民に告ぐ(Reden an die deutsche Nation)』(一八〇七年―

〇八年)で明らかに確かめられ得るからである。

(4) マルクス・エンゲルス全集、第四巻 一九六四年、四四頁。

(5) 右記全集、第四巻、四四頁。

(6) 『国富論』(初版一九〇四年刊二巻本) 第三版、一九三二年、第一巻、四二

一頁。第四書「経済学諸体系論」第二章。

(7) 『諸国民の富の本質と諸原因の探求』が『国富論』と訳される書物の原題

である。

(8) 作品集(3)(3) 第八巻、三三八頁。

この他ヘーゲルの『歴史哲学』序論(3)註(5) 作品集、第二巻、一三二

頁)に同旨の主張がある。「通商と航海が第三の原理、市民の自由は

この第三の原理と結びつく。」

- (9) 作品集(3)(4) 第三巻、四六八頁。

- (10) 作品集(3)(4) 第七巻、四六七頁。

- (11) ヘルダーリン協会刊『ヘルダーリン年代記』(2)(26) 一九七〇年、三八

九頁。

- (12) 山下肇『近代ドイツ、ユダヤ精神史研究』有信堂、一九八〇年、六三頁

参照。

- (13) 作品集(3)(3) 第八巻、二九〇頁―二九二頁。

- (14) 作品集(3)(3) 第八巻、二九二頁。

一 静かに安らう都市。ひそやかに街路に燈火がともし

二 して松明に飾られて騒然と馬車は疾駆し過ぎ去る。

三 満ち足りて家路へと、昼間の飲ひに別れを告げ、安らぎを求め歩みゆく人々。

四 して収支得失を慮る思慮深い家長は

五 悠然と和やかにわが家にくつろぐ。(黄昏の今は) 葡萄も花束もなく。

六 して手仕事の品々もなく安らう、(昼間は) 忙しき広場の市場。

七 だが他方、堅琴の音が彼方の庭園から響いて来る。恐らくは

八 そこで恋人が奏で、或いは孤独な者が

九 彼方の友を想いつつ、また若き日を偲びつつ。して噴泉が

一〇 滔々と湧き、清冽な水しぶきをあげ送り、芳香に匂う花壇を活している。

一一 ひそやかに黄昏の夜気に響き渡る晩鐘の音。

一二 して時刻を想い、その数を夜警は声高に呼ばわる。

十三 今や又ある息吹きが到来し、林苑の樹頭を(天上へと) 揺り動かす。

十四 見よ! して我らの大地の影像たる月も

十五 また秘蔵の莊嚴より解き放たれ、靈氣溢れる夜が到来する。

十六 星辰に輝きみち(清澄な) 夜は、恐らく私達などまず配慮もせず。

十七 彼方で光明を放ち、驚嘆させ、人間では異邦の者として

十八 山頂の上高く、悲愴かつ壮麗に立ち現われる。

(『パンとぶどう酒』一八〇〇年―〇一年、第一節、第一句―第十八句)

9) Fichte „Der geschlossene Handelsstaat“ (1800) II. Buch. Zeitgeschichte – Vom Zustande des Handelsverkehrs in den gegenwärtigen wirklichen Staaten. 6. Kap.: Werke (IV(3)4). Bd. 3. S. 468.

Es entsteht zu der feindseligen Tendenz, welche ohnedies alle Staaten gegen alle wegen ihrer Territorial-Grenzen haben, noch eine neue um das Handelsinteresse; und ein allgemeiner geheimer Handelskrieg. Dieser geheime Krieg geht in Thätlichkeiten über, und in solche, die nicht ehrenvoll sind. Man befördert den Schleichhandel in benachbarte Länder, und muntert ihn wohl öffentlich auf. – Das streitende Handelsinteresse ist oft die wahre Ursache von Kriegen, denen man einen anderen Vorwand giebt.

10) Fichte „Reden an die deutsche Nation“ 13. Rede: Werke (IV(3)4) Bd. 7. S. 466-467. Vgl. „jenes höchste Gesetz der Geisterwelt“ (IV(3)4).

Möchten wir endlich einsehen, dass alle jene schwindelnden Lehrgebäude über Welthandel und Fabrication für die Welt zwar für den Ausländer passen, und gerade unter die (S. 466/S. 467) Waffen desselben gehören, womit er von jeher uns bekriegt hat, dass sie aber bei den Deutschen keine Anwendung haben, und dass, nächst der Einigkeit dieser unter sich selber, ihre innere Selbstständigkeit und Handelsunabhängigkeit das zweite Mittel ist ihres Heils, und durch sie des Heils von Europa.

11) Hölderlin: Eine Chronik in Text und Bild (IV(2)26). S. 389.

Politisch war auch er Republikaner, Demokrat.

12) Yamashita, Hajime: Studien zur neuzeitlichen Geistesgeschichte des deutschen Judentums. Yushindo. 1980. S. 63.

13) Kant „Über den Gemeinspruch: Das mag in der Theorie richtig sein, taugt aber nicht für die Praxis“ (1793): AT (IV(3)3). Bd. 8. S. 290-291.

Eine Regierung, die auf dem Princip des Wohlwollens gegen das Volk als eines Vaters gegen seine Kinder errichtet wäre, d. i. eine väterliche Regierung (*imperium paternale*), wo also die Unterthanen als unmündige Kinder, die nicht unterscheiden können, was ihnen wahrhaftig nützlich oder schädlich (S. 290/S. 291) ist, sich bloß passiv zu verhalten genöthigt sind, um, wie sie glücklich sein sollen, bloß von dem Urtheile des Staatsoberhauptes und, daß dieser es auch wolle, bloß von seiner Gütigkeit zu erwarten: ist der größte denkbare Despotismus (Verfassung, die alle Freiheit der Unterthanen, die alsdann gar keine Rechte haben, aufhebt). Nicht eine väterliche, sondern eine vaterländische Regierung (*imperium non paternale, sed patrioticum*) ist diejenige,

14) Kant: op. cit. S. 291.

Nicht eine väterliche, sondern eine vaterländische Regierung (*imperium non paternale, sed patrioticum*) ist diejenige, welche allein für Menschen, die der Rechte fähig sind, zugleich in Beziehung auf das Wohlwollen des Beherrschers gedacht werden kann. Patriotisch ist nämlich die Denkungsart, da ein jeder im Staat (das Oberhaupt desselben nicht ausgenommen) das gemeine Wesen als den mütterlichen Schooß, oder das Land als den väterlichen Boden, aus und auf dem er selbst entsprungen, und welchen er auch so als ein theures Unterpfand hinterlassen muß, betrachtet, nur um die Rechte desselben durch Gesetze des gemeinsamen Willens zu schützen, nicht aber es seinem unbedingten Belieben zum Gebrauch zu unterwerfen sich für befugt hält. – Dieses Recht der Freiheit kommt ihm, dem Gliede des gemeinen Wesens, als Mensch zu, so fern dieser nämlich ein Wesen ist, das überhaupt der Rechte fähig ist.

nicht die Geistlichkeit, wohin ich mich auch wende, den Pöbel gegen mich aufhetzen, mich von ihm steinigen lassen, und nun – die Regierungen bitten, mich als einen Menschen der Unruhen erregt zu entfernen? Aber darf ich denn schweigen? Nein, das darf ich warlich nicht; denn ich habe Grund zu glauben, daß, wenn noch etwas gerettet werden kann des deutschen Geistes, es durch mein Reden gerettet werden kann, und durch mein Stillschweigen die Philosophie ganz, und zu früh, zu Grunde gehen würde. (S.355).

Vgl. „Reden an die deutsche Nation“(1807-1808): IV(3)4.

4)Engels „Der Status quo in Deutschland“(1847): Marx/Engels. Werke(IV(3)17). Bd.4. 1964. S.44.

England exportiert gar keine Ackerbauprodukte, sondern hat fortwährend auswärtige Zufuhren nötig; Frankreich importiert wenigstens ebensoviel davon, als es ausführt, und beide Länder stützen ihren Reichtum vor allem auf ihre Ausfuhr von Industrieerzeugnissen. Deutschland dagegen exportiert wenig Industrieprodukte, aber große Massen von Korn, Wolle, Vieh usw. ... Der politische Repräsentant des Ackerbaus ist in Deutschland wie in den meisten europäischen Ländern der Adel, die Klasse der großen Grundbesitzer. Die der ausschließlichen Herrschaft des Adels entsprechende politische Verfassung ist das Feudalsystem. Das Feudalsystem ist überall in demselben Maße zerfallen, in welchem der Ackerbau aufgehört hat, entscheidender Produktionszweig eines Landes zu sein, in welchem sich neben der ackerbauenden eine gewerbtreibende Klasse, neben den Dörfern Städte gebildet haben.

5)Engels: op.cit. S.44.

Deutschland dagegen exportiert wenig Industrieprodukte, aber große Massen von Korn, Wolle, Vieh usw. Die überwiegende Bedeutung des Ackerbaus war noch viel größer als jetzt zu der Zeit, als Deutschlands politische Verfassung festgesetzt wurde – im Jahre 1815, und wurde damals noch durch den Umstand vermehrt, daß gerade die fast ausschließlich ackerbautreibenden Teile Deutschlands sich am eifrigsten an dem Sturz des französischen Kaiserreichs beteiligt hatten.

6)Smith, Adam „An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations“(1776) 4.Buch: Of Systems of political OEconomy. 2.Kap.: The Wealth of Nations in 2 Bänden. Hrsg: Cannan, Edwin. London. Methuen. 1.Aufl. 1904. 3. Aufl. 1922. Bd.1. S.421.

he intends only his own gain, and he is in this, as in many other cases, led by an invisible hand to promote an end which was no part of his intention.

7)Vgl. IV(4)6.

8)Kant „Zum ewigen Frieden“(1795) 1.Zusatz. Von der Garantie des ewigen Friedens.: AT(IV(3)3). Bd.8. S.368.

Es ist der Handelsgeist, der mit dem Kriege nicht zusammen bestehen kann, und der früher oder später sich jedes Volks bemächtigt.

Vgl. Hegel „Philosophie der Geschichte“ Einleitung: Werke(IV(3)5). Bd.12. S.131.

Für Asien gilt nun hauptsächlich, was oben im allgemeinen von den geographischen Unterschieden bemerkt worden ist, daß nämlich die Viehzucht die Beschäftigung des Hochlandes, der Ackerbau und die Bildung zum Gewerbe die Arbeit der Talebenen ist, der Handel aber endlich und die Schifffahrt das dritte Prinzip ausmacht. Patriarchalische Selbständigkeit ist mit dem ersten Prinzip, Eigentum und Verhältnis von Herrschaft und Knechtschaft mit dem zweiten und bürgerliche Freiheit mit dem dritten Prinzip eng verbunden. ...

(4) GEMEINGEIST UND ALLEINHERRSCHAFT

1) Nietzsche „Die Geburt der Tragödie aus dem Geiste der Musik“ (1872): Gesamtausgabe (IV(3)23). 3. Abteilung. Bd. 1. S. 123 (9. Kapitel).

die deutsche Musik, wie wir sie vornehmlich in ihrem mächtigen Sonnenlaufe von Bach zu Beethoven, von Beethoven zu Wagner zu verstehen haben. Was vermag die erkenntnisslüsterne Sokratik unserer Tage günstigsten Falls mit diesem aus unerschöpflichen Tiefen emporsteigenden Dämon zu beginnen?

Vgl. op.cit. 9. Kap. S. 124.

denn gerade sie ist, inmitten aller unserer Cultur, der einzig reine, lautere und läuternde Feuergeist, von dem aus und zu dem hin, wie in der Lehre des grossen Heraklit von Ephesus, sich alle Dinge in doppelter Kreisbahn bewegen: alles, was wir jetzt Cultur, Bildung, Civilisation nennen, wird einmal vor dem untrüglichen Richter Dionysus erscheinen müssen.

Erinnern wir uns sodann, wie dem aus gleichen Quellen strömenden Geiste der deutschen Philosophie, durch Kant und Schopenhauer, es ermöglicht war, die zufriedne Daseinslust der wissenschaftlichen Sokratik, durch den Nachweis ihrer Grenzen, zu vernichten, wie durch diesen Nachweis eine unendlich tiefere und ernstere Betrachtung der ethischen Fragen und der Kunst eingeleitet wurde, wie wir geradezu als die in Begriffe gefasste dionysische Weisheit bezeichnen können: wohin weist uns das Mysterium dieser Einheit zwischen der deutschen Musik und der deutschen Philosophie,

2) Hölderlin „Deutscher Gesang“: StA 2. 202.

Wenn der Morgen trunken begeisternd heraufgeht
Und der Vogel sein Lied beginnt,
Und Stralen der Strom wirft, und rascher hinab
Die rauhe Bahn geht über den Fels,
Weil ihn die Sonne gewärmet.

5

.....

dann sitzt im tiefen Schatten,
Wenn über dem Haupt die Ulme säuselt,
Am kühlathmenden Bache der deutsche Dichter
Und singt, wenn er des heiligen nüchternen Wassers
Genug getrunken, fernhin lauschend in die Stille,
Den Seelengesang.

20

Und noch, noch ist er des Geistes zu voll,

3) Fichte: Gesamtausgabe. Bayerische Akademie der Wissenschaften. III: Briefband. Bd. 3. S. 353-363: Brief an Karl Leonhard Reinhold. 22. Mai. 1799.

Ich darf jezt nicht verstummen; schweige ich jezt, so dürfte ich wohl nie wieder an's Reden kommen. - Es war mir, seit der Verbindung Rußlands mit Österreich schon höchst wahrscheinlich, was mir nunmehr durch die neusten Begebenheiten, und besonders seit des gräßlichen Gesandtenmords (über den man hier jubelt, und über welchen Schiller, u. Göthe ausrufen: so ist's recht, diese Hunde muß man todschlagen) völlig gewiß ist, daß der Despotismus sich von nun an mit Verzweiflung vertheidigen wird, daß er durch Paul, u. Pitt consequent wird, daß die basis seines Plans die ist, die Geistesfreiheit auszurotten, und daß die Deutschen ihm die Erreichung dieses Zwecks nicht erschweren werden. (S. 354).

In Summa; es ist mir gewisser, als das gewisseste, daß wenn nicht die Franzosen die ungeheuerste Uebermacht erringen, und in Deutschland, wenigstens einem beträchtlichen Theile desselben, eine Revolution durchsetzen; in einigen Jahren in Deutschland kein Mensch mehr, der dafür bekannt ist in seinem Leben einen freien Gedanken gedacht zu haben, eine Ruhestätte finden wird. Gesezt, ich schweige ganz, schreibe nicht das geringste mehr; wird man mich unter dieser Bedingung ruhig lassen? Ich glaube das nicht; und gesezt ich könnte es von den Höfen hoffen, wird

- 22)Biblia Hebraica Stuttgartensia(IV(3)21). S.119: Exodus. XX. 5.
 אֱלֹהֵי קָנָאָא : Eel Kannaä.
 Vgl. Exodus XXXIV. 14: op.cit. S.144 und Deuteronomion IV. 24 / V. 9 / VI. 15: op.cit. S.292 / S.294 / S.297 und Gesenius, Wilhelm: Hebräisches und aramäisches Handwörterbuch über das Alte Testament. Bearbeitet von Frants Buhl. Unveränderter Neudruck der 1915 erschienenen 17. Auflage. Berlin/Göttingen/Heidelberg. Springer. 1962. S.717 über das Wort „Kannaä“. eifersüchtig, v. Jahve
 Vgl. Septuaginta(IV(3)21). Vol.I. S.120/S.146/S.293/S.295/S.298.
 θεὸς ζηλωτής: theos zeelootees.
 Vgl. Biblia iuxta Vulgata Versionem. Tomus I. S.104/S.125/S.240/S.242/S.244.
 ego sum Dominus Deus tuus fortis zelotes(Ex.XX.5)/ Dominus Zelotes nomen eius Deus est aemulator(Ex.XXXIV.14)/ Dominus Deus tuus ignis consumens est Deus aemulator(Dt.IV.24)/ ego enim sum Dominus Deus tuus Deus aemulator(Dt.V.9)/ Deus aemulator Dominus Deus tuus(Dt.VI.15). Aemulator(=Nach-eiferer).
 Vgl. Biblia germanica 1545. S.XLIII/S.LII/S.XCIX/S.C/S.C.
 Denn ich der HERR dein Gott / bin ein eueriger Gott / (II.Buch Mose.XX.5)
 Denn der HERR heisst ein Eiuerer / darumb das er ein eueriger Gott ist / (II.Buch Mose. XXXIV. 14)
 Denn der HERR dein Gott ist ein verzehrend Fewr / vnd ein eueriger Gott. (V.Buch Mose. IV. 24)
 DENN ich bin der HERR dein Gott / ein eueriger Gott / (V.Buch Mose. V. 9)
 Denn der HERR dein Gott ist ein eueriger Gott vnter dir / (ibd. VI. 15)
 Vgl. Die Bibel. Altes und Neues Testament. Einheitsübersetzung. Stuttgart. Katholische Bibelanstalt. Freiburg i.Br./ Basel/Wien. Herder. 1980. S.72/S.86.
 Denn ich, der Herr, dein Gott, bin ein eifersüchtiger Gott. (Ex. XX. 5)
 Denn Jahwe trägt den Namen »der Eifersüchtige«; ein eifersüchtiger Gott ist er. (Ex. XXXIV. 14)
 Vgl. Nova Vulgata Bibliorum. Vaticana Libreria. 1979. S.107/S.127.
 Deus zelotes(Ex. XX. 5) / Dominus Zelotes nomen eius, Deus est aemulator. (Ex. XXXIV. 14)
 Vgl. Biblia Hebraica Stuttgartensia. S.296: Deuteronomion V. 26.
 אֱלֹהֵי חַיִּים : Elohyim Hayim. /Bibelanstalt. 1930. S.76.
 Vgl. Septuaginta. Vol.I. S.296: Dt. V. 26. /NT graece. Stuttgart. Württembergische
 θεὸς ζῶν: theos zoon. Vgl. Novum Testamentum. Evangelium secundum Matthaeum. 26. 63:
 Vgl. Biblia iuxta Vulgata Versionem. Tomus I. S.243: Dt. V. 26.
 Deus vivens. Vgl. Deus vivus(Ev.Matth.26.63: Tomus II. S.1570).
 Vgl. Biblia germanica 1545. S.C: V.Buch Mose. V. 26.
 die stimme des lebendigen Gottes ...
 23)Nietzsche „Also sprach Zarathustra“(1891) I.Teil. 1883. Von den drei Verwandlungen: Werke. Kritische Gesamtausgabe. Berlin. Gruyter. 6.Abteilung. Bd.1. 1968. S.26.
 Welches ist der grosse Drache, den der Geist nicht mehr Herr und Gott heissen mag? „Du-sollst“ heisst der grosse Drache. Als sein Heiligstes liebte er einst das „Du-sollst“:
 24)Hölderlin „Über Religion“(1799): StA 4. 281.
 Gott der Mythe. So wäre alle Religion ihrem Wesen nach poetisch.
 25)Hölderlin „Brod und Wein“ 4.Str.: StA 2. 92. Vgl. IV(2)17.
 Ausgetheilet erfreut solch Gut und getauschet, mit Fremden,
 Wirds ein Jubel, es wächst schlafend des Wortes Gewalt
 Vater! heiter! und hallt, so weit es gehet, das uralt
 Zeichen, von Eltern geerbt, treffend und schaffend hinab. 70
 Denn so kehren die Himmlischen ein, tiefschütternd gelangt so
 Aus den Schatten herab unter die Menschen ihr Tag.
 26)Hölderlin „Brod und Wein“ 6.Str.: StA 2. 93. V.105-V.108(IV(2)20).
 27)Vgl. IV(2)17 und IV(3)25.

17) Marx „Das Kapital" Bd.1. 1867. VII. Abschnitt. Der Akkumulationsprozeß des Kapitals. 24. Kapitel. Die sogenannte ursprüngliche Akkumulation. Marx zitiert aus „De la Monarchie Prussienne" (London. 1788) von Honoré-Gabriel-Victor Mirabeau (1749-91): Marx/Engels. Werke. Berlin. Dietz. Bd.23. 1962.

Zur Zeit Mirabeaus, des Revolutionslöwen, hießen die großen Manufakturen noch manufactures réunies, zusammengeschlagene Werkstätten, wie wir von zusammengeschlagenen Äckern sprechen. „Man sieht nur", sagt Mirabeau, „die großen Manufakturen, wo Hunderte von Menschen unter einem Direktor arbeiten, und die man gewöhnlich vereinigte Manu- (S.774/S.775) fakturen (manufactures réunies) nennt. Diejenigen dagegen, wo eine sehr große Anzahl Arbeiter zersplittert und jeder für seine eigne Rechnung arbeitet, werden kaum eines Blicks gewürdigt. Man stellt sie ganz in den Hintergrund. Dies ist ein sehr großer Irrtum, denn sie allein bilden einen wirklich wichtigen Bestandteil des Volksreichtums. ... Die vereinigte Fabrik (fabrique réunie) wird einen oder zwei Unternehmer wunderbar bereichern, aber die Arbeiter sind nur besser oder schlechter bezahlte Tagelöhner und nehmen in nichts am Wohlsein des Unternehmers teil. In der getrennten Fabrik (fabrique séparée) dagegen wird niemand reich, aber eine Menge Arbeiter befinden sich im Wohlstand. ... "(S.775)

18) Encyclopédie (IV(3)16). Bd.10. Neuchâtel. Samuel Faulche. 1765. S.61.
A la grande manufacture tout se fait au coup de cloche, les ouvriers sont plus contraintes & plus gourmandés. ... Chez le petit fabriquant, le compagnon est le camarade du maître, vit avec lui, comme avec son égal; a place au feu & à la chandelle, a plus de liberté, & préfère enfin de travailler chez lui.

19) Diderot über „Encyclopédie": Encyclopédie (IV(3)16). Bd.5. Paris. Briasson/David/Le Breton/Durand. 1755. S.636.

C'est à l'exécution de ce projet étendu, non seulement aux différents objets de nos académies, mais à toutes les branches de la connoissance humaine, qu'une Encyclopédie doit suppléer; Ouvrage qui ne s'exécutera que par une société de gens de lettres & d'artistes, épars, occupés chacun de sa partie, & liés seulement par l'intérêt général du genre humain, & par un sentiment de bienveillance réciproque. Je dis une société de gens de lettres & d'artistes, afin de rassembler tous les talents. Je les veux épars, ... On s'applaudit intérieurement de ce que l'on fait; on s'échauffe;

20) Hölderlin „Brod und Wein" 9.Str.: StA 2. 95.

Keines wirkt, denn wir sind herzlos, Schatten, bis unser 153

Vater Aether erkannt jeden und allen gehört. 154

21) Biblia Hebraica Stuttgartensia. Stuttgart. Deutsche Bibelgesellschaft. 1967/77, 1984. S.89: Exodus. III. 14.

אֲנִי הָאֵשֶׁר אֲנִי אֵהְיֶה Ehyeh Asher Ehyeh.

Vgl. Septuaginta. Id est Vetus Testamentum graece iuxta LXX interpretes.

Stuttgart. Württembergische Bibelanstalt. 1935. 8.Aufl. 1965. Vol.I. S.90.

Ἐγώ εἰμι ὁ ὢν: Egoo eimi ho on: Ich bin der (wahrhaft) Seiende.

Vgl. Biblia iuxta Vulgatam Versionem (IV(2)21). Tomus I. S.79.

ego sum qui sum: Ich bin der ich bin. Hieronymos (340-419).

Vgl. Biblia germanica 1545 (IV(2)22). II. Buch Mose. S.XXXIII.

Ich werde sein der ich sein werde. Luther (1483-1546).

Vgl. Platon „Phaidros" 249C/247C: Werke (Griechisch/Deutsch: Schleiermacher) auf der Textgrundlage der „Oeuvres complètes (Collection des Universités de France)" (Paris. Les Belles Lettres. 1955-74). Darmstadt. Wissenschaftliche Buchgesellschaft. 1971-81. Bd.5. S.84 (S.85)/S.76 (S.77).

τὸ ὂν ὄντως: to on ontoos (das wahrhaft Seiende). Phdr. 249C / 247C

ἡ οὐσα ὄντως οὐσα: hee uusiaa ontoos uusa (das wahrhaft seiende Wesen)

Vgl. Takahashi, Katsumi: Hellas und Hesperien bei Hölderlin (IV(3)6). [II] Das klassische Griechentum und das abendländische Christentum. Anmerkung 68) und [III] „Gott der Mythe". Anmerkung 34) und 93).

- Vgl. Goethe „Von deutscher Baukunst“(1772): HA 12. 11.
Wie oft hat die Abenddämmerung mein durch forschendes Schauen ermattetes Aug' mit freundlicher Ruhe geletzt, wenn durch sie die unzähligen Teile zu ganzen Massen schmolzen, und nun diese, einfach und groß, vor meiner Seele standen und meine Kraft sich wonnevoll entfaltete, zugleich zu genießen und zu erkennen! ...
- Vgl. Goethe „Dichtung und Wahrheit“ II.Teil. 9.Buch: HA 9. 384.
Denn ein Kunstwerk, dessen Ganzes in großen, einfachen, harmonischen Teilen begriffen wird, macht wohl einen edlen und würdigen Eindruck, ... wir sehen alle und jede Zieraten jedem Teil, den sie schmücken, völlig angemessen, sie sind ihm untergeordnet, sie scheinen aus ihm entsprungen. Eine solche Mannigfaltigkeit gibt immer ein großes Behagen, indem sie sich aus dem Gehörigen herleitet und deshalb zugleich das Gefühl der Einheit erregt, und nur in solchem Falle wird die Ausführung als Gipfel der Kunst gepriesen. ...
- 11)Schiller „Die Räuber“(1.Aufl. 1781. 2.Aufl. 1782) Titelblatt der 2. Schauspielausgabe: Werke. Nationalausgabe. Weimar. Hermann Böhlaus Nachfolger. Bd.3. 1953. Zwischen S.344 und S.345.
in Tirannos
- Vgl. Aischylos „Perser“ V.241 über die Athener: Tragödien und Fragmente. Tusculum(Griechisch/Deutsch)-Bücher. München. Heimeran. 1969(2.Aufl.). S.275.
Und wer führt, dem Volk ein Hirte, und gebeut, Zwingherr dem Heer?
Keines Menschen Sklaven sind sie, keinem Manne untertan.
- Vgl. Euripides „Die bittflehenden Mütter (Hiketides)“ V.429 über den „Zwingherrn(Despotes: Tyrannos)“: Sämtliche Tragödien und Fragmente. Tusculum-Bücher. Griechisch/Deutsch. München. Heimeran. 1972(Bd.1-4)/1977(Bd.5)/1981(Bd.6). Bd.3. 1972. S.37.
Der Zwingherr ist der größte Feind des Staats!
Da gilt vor allem kein gemeines Recht, 430
Der eine hat die Macht, nimmt das Gesetz
In seine Hand und Gleichheit ist vorbei.
- 12)Schiller „Kallias / Brief an Körner vom 23.Feb.1793“: Sämtliche Werke in 5 Bänden. München. Hanser. 1965-76. Bd.5. S.422.
Eine Landschaft ist schön komponiert, wenn alle einzelne Partien, aus denen sie besteht, so ineinanderspielen, daß jene sich selbst ihre Grenze setzt und das Ganze also das Resultat von der Freiheit des Einzelnen ist. Alles in einer Landschaft soll auf das Ganze bezogen sein, und alles Einzelne soll doch nur unter seiner eigenen Regel zu stehen, seinem eigenen Willen zu folgen scheinen.
- 13)„Verzeichniß der im Königreich Württemberg befindlichen Fabriken und Manufakturen“ aus dem „Württembergischen Jahrbuch 1832“ herausgegeben vom 1820 eingerichteten „Statistisch-Topographischen Bureau“
Fabrikat: Fußsteppiche. Zahl der Arbeiter innerhalb der Fabrik: 0. Zahl der Arbeiter außerhalb der Fabrik: 8. ... Jahr der Entstehung: 1797.
- 14)„Stuttgarter Firmenbuch“(1832)
Landauersche Fußsteppiche- und Wollwarenhandlung.
- 15)Meyers Enzyklopädisches Lexikon. Bd.24. 1979. S.484.
Verlagssystem ... als Stadium in der Entwicklung des Kapitalismus zwischen dem selbständigen Handwerk und der Manufaktur liegt.
- 16)Encyclopédie. Hrsg: Diderot, Denis. Bd.10. Neuchâtel. Samuel Faulche. 1765. S.60-62 über „MANUFACTURE“. „MANUFACTURE, RÉUNIE, DISPERSÉE.“(S.60).
Par le mot manufacture, on entend communément un nombre considerable d'ouvriers, réunis dans le même lieu pour faire une sorte d'ouvrage sous les yeux d'un entrepreneur; De-là on peut distinguer deux sortes de manufactures, les unes réunies, & les autres dispersées.(S.60).

3) Kant „Die Metaphysik der Sitten“ (1797) „Rechtslehre“ 46. Kap.: Werke. Akademie-Textausgabe (=AT). Unveränderter photomechanischer Abdruck des Textes der von der Preussischen Akademie der Wissenschaften 1902 begonnenen Ausgabe von Kants gesammelten Schriften. Berlin. Gruyter. 1968. Bd. 6. S. 313f.

Also kann nur der übereinstimmende und vereinigte Wille Aller, so fern ein jeder über Alle und Alle über einen jeden ebendasselbe beschließen, mithin nur der allgemein vereinigte Volkswille gesetzgebend sein

4) Fichte „Reden an die deutsche Nation“ (1807-1808) 13. Rede: Werke. Fotomechanischer Nachdruck der „sämtlichen Werke“ (Hrsg: Fichte, Immanuel Hermann. Berlin. Veit & Comp. 1845/1846). Berlin. Gruyter. 1971. Bd. 7. S. 467.

Die geistige Natur vermochte das Wesen der Menschheit nur in höchst mannigfaltigen Abstufungen an Einzelnen, und an der Einzelheit im Grossen und Ganzen, an Völkern, darzustellen. Nur wie jedes dieser letzten, sich selbst überlassen, seiner Eigenheit gemäss, und in jedem derselben jeder Einzelne jener gemeinsamen, so wie seiner besonderen Eigenheit gemäss, sich entwickelt und gestaltet, tritt die Erscheinung der Gottheit in ihrem eigentlichen Spiegel heraus, so wie sie soll; und nur der, der entweder ohne alle Ahnung für Gesetzmässigkeit und göttliche Ordnung, oder ein versteckter Feind derselben wäre, könnte einen Eingriff in jenes höchste Gesetz der Geisterwelt wagen wollen.

5) Hegel „Differenz des Fichteschen und Schellingschen Systems der Philosophie“ (1801) „Darstellung des Fichteschen Systems“: Werke auf der Grundlage der „Werke“ (1832-45). Frankfurt am Main. Suhrkamp. 1969-71. Bd. 2. S. 82.

Die höchste Gemeinschaft ist die höchste Freiheit,

6) Takahashi, Katsumi: Hellas und Hesperien bei Hölderlin - „Seeliges Griechenland“ [II] (6)-(7) und [III] (1)-(9). In: Forschungsberichte der Universität Kochi fürs Jahr 1985. Vol. 34. Geisteswissenschaften. 1986. S. 1-72.

Vgl. vor allem [III] „Gott der Mythe“ (9) „Fest bleibt Eins“.

7) Hölderlin „Brod und Wein“ 5. Str.: StA 2. 92.

Möglichst dulden die Himmlischen diß; dann aber in Wahrheit

Kommen sie selbst und gewohnt werden die Menschen des Glücks

Und des Tags und zu schauen die Offenbaren, das Antlitz

Derer, welche, schon längst Eines und Alles genannt,

Tief die verschwiegene Brust mit freier Genüge gefüllet,

85

Und zuerst und allein alles Verlangen beglückt;

8) Hölderlin „Hyperion“ I. Band. 2. Buch. 30. Brief: StA 3. 81.

Das große Wort, das εν δαίμονι εαυτω (das Eine in sich selber unterschiedne) des Heraklit, das konnte nur ein Grieche finden, denn es ist das Wesen der Schönheit, und ehe das gefunden war, gabs keine Philosophie.

9) Hölderlin: Brief 183 an Neuffer. 3. Jul. 1799: StA 6. 339.

Man will aber auch nur rührende erschütternde Stellen und Situationen, um die Bedeutung und den Eindruck des Ganzen bekümmern sich die Verfasser und das Publikum selten. Und so ist die strengste aller poetischen Formen, die ganz dahin eingerichtet ist, um, ohne irgend einen Schmuck fast in lauter großen Tönen, wo jeder ein eignes Ganze ist, harmonisch wechselnd fortzuschreiten, und in dieser stolzen Verläugnung alles Accidentellen das Ideal eines lebendigen Ganzen, so kurz und zugleich so vollständig und gehaltreich wie möglich, deswegen deutlicher aber auch ernster als alle andre bekannte poetische Formen darstellt - die ehrwürdige tragische Form ist zum Mittel herabgewürdigt worden, um gelegentlich etwas glänzendes oder zärtliches zu sagen.

10) Hölderlin: Brief 171 an Sinclair. 24. Dez. 1798: StA 6. 301.

so ist auch daraus klar, wie innig jedes Einzelne mit dem Ganzen zusammenhängt und wie sie beide nur Ein lebendiges Ganze ausmachen, das zwar durch und durch individualisiert ist und aus lauter selbständigen, aber eben so innig und ewig verbundenen Theilen besteht.

ich scheue das Gemeine und Gewöhnliche im wirklichen Leben zu sehr.
Vgl. Horatius „Carmina“ Liber III. 1: Opera. Bibliotheca Teubneriana. Leipzig. Teubner. 1970. S.65.

Odi profanum volgus et arceo.

Das Volk der Spötter hass' ich, hinweg mit ihm!

(Carmina/Gedichte. Mit Übersetzung deutscher Dichter. dtv-zweisprachig. München. Deutscher Taschenbuch Verlag. 1977. S.125. Deutsch: Geibel, Emanuel)

25) Landauers Brief an Hölderlin. 22.Aug.1801: StA Bd.7. 1.Teil. S.169.

Dein Schirm ist durchaus nirgends zu finden. Dich erwartet mit offenen Armen Dein C. Landauer

26) Hölderlin: Eine Chronik in Text und Bild. Hrsg: Beck, Adolf / Raabe, Paul. Schriften der Hölderlin-Gesellschaft. Bd.6/7. Frankfurt am Main. Insel. 1970. Bild-Erläuterungen von Beck. S.371f. über Jakob Friedrich Gontard.

Der Überlieferung nach war er reiner Geschäftsmann mit dem Wahlspruch:

»Les affaires avant tout«, dabei von »nervöser Erregbarkeit«.
Für seine erste Frau und den Dichter hatte er gewiß nicht eben viel Verständnis;

27) Heuschele, Otto: Hölderlins Freundeskreis. Stuttgart. Theiss. 1975. S.86.

Es waren kaum größere Gegensätze denkbar als der Bankier Gontard und der Kaufmann Landauer. Während jener ein kühler Weltmann gewesen sein muß, verstand es dieser, die praktischen Lebensaufgaben mit einem hohen Sinn für das Schöne zu verbilden.

28) Goethe „Wilhelm Meisters Lehrjahre“(1796) I.Buch. 10.Kap.: HA 7. 37.

Von der Handlung hattest du damals keinen Begriff; ich wüßte nicht, wessen Geist ausgebreiteter wäre, ausgebreiteter sein müßte als der Geist eines echten Handelsmannes. Welchen Überblick verschafft uns nicht die Ordnung, in der wir unsere Geschäfte führen! Sie läßt uns jederzeit das Ganze überschauen, ohne daß wir nötig hätten, uns durch das Einzelne verwirren zu lassen. Welche Vorteile gewährt die doppelte Buchhaltung dem Kaufmanne! Es ist eine der schönsten Erfindung des menschlichen Geistes, und ein jeder gute Haushalter sollte sie in seiner Wirtschaft einführen.

29) Goethe „Wilhelm Meisters Lehrjahre“ V.Buch. 2.Kap.: HA 7. 287.

Das ist also mein lustiges Glaubensbekenntnis: seine Geschäfte verrichtet, Geld geschafft, sich mit den Seinigen lustig gemacht und um die übrige Welt sich nicht mehr bekümmert, als insofern man sie nutzen kann. (Werner).

(3) „LANDAUERSCHE FUSSTEPICHE- UND WOLLWARENHANDLUNG“

1) Hölderlin „Brod und Wein“ 3.Str.: StA 2. 91.

Göttliches Feuer auch treibet, bei Tag und bei Nacht, 40

Aufzubrechen. So komm! daß wir das Offene schauen,

Daß ein Eigenes wir suchen, so weit es auch ist.

Fest bleibt Eins; es sei um Mittag oder es gehe

Bis in die Mitternacht, immer bestehet ein Maas,

Allen gemein, doch jeglichem auch ist eignes beschieden, 45

Dahin gehet und kommt jeder, wohin er es kann.

2) Rousseau, Jean-Jacques „Du Contrat Social“(1762) Livre I. Chapitre 6.

Enfin chacun se donnant à tous ne se donne à personne, Chacun de nous met en commun sa personne et toute sa puissance sous la suprême direction de la volonté générale; et nous recevons en corps chaque membre comme partie indivisible du tout.

(Oeuvres complètes. Bibliothèque de la Pléiade. Paris. Gallimard. Tome 3. 1964. S.361)

- Vgl. Hölderlins Brief an den Bruder(11.2.1796):StA 6. 201.
Deus nobis haec otia fecit.
- 14)Hölderlin „Brod und Wein" 7.Str.: StA 2. 94.
..... Indessen dünket mir öfters
Besser zu schlafen, wie so ohne Genossen zu seyn, 120
So zu harren und was zu thun indeß und zu sagen,
Weiß ich nicht und wozu Dichter in dürftiger Zeit?
- 15)Hölderlin „Brod und Wein" 3.Teil: Hesperische Nacht.
- 16)Hölderlin „Der Mutter Erde": StA 2. 123.
- 17)Hölderlin „Brod und Wein" 4.Str.: StA 2. 92.
Wo, wo leuchten sie denn, die fernhintreffenden Sprüche?
Delphi schlummert und wo tönet das große Geschick?
Wo ist das schnelle? wo brichts, allgegenwärtigen Glücks voll
Donnernd aus heiterer Luft über die Augen herein?
Vater Aether! so riefs und flog von Zunge zu Zunge 65
Tausendfach, es ertrug keiner das Leben allein;
- 18)Nietzsche „Die Geburt der Tragödie": „Aus dem Geiste der Musik"(1872).
„Oder: Griechentum und Pessimismus"(1886).
- 19)Hölderlin „Brod und Wein" 8.Str.: StA 2. 94.
Nemlich, als vor einiger Zeit, uns dünket sie lange, 125
Aufwärts stiegen sie all, welche das Leben beglückt,
Als der Vater gewandt sein Angesicht von den Menschen,
Und das Trauern mit Recht über der Erde begann,
Als erschienen zu lezt ein stiller Genius, himmlisch
Tröstend, welcher des Tags Ende verkündet' und schwand, 130
- 20)Hölderlin „Brod und Wein" 6.Str.: StA 2. 93.
Warum zeichnet, wie sonst, die Stirne des Mannes ein Gott nicht, 105
Drückt den Stempel, wie sonst, nicht dem Getroffenen auf?
Oder er kam auch selbst und nahm des Menschen Gestalt an
Und vollendet' und schloß tröstend das himmlische Fest.
- 21)Biblia. Evangelium secundum Mattheum. 26. 26ff: Biblia iuxta Vulgatam
Versionem. Deutsche Bibelgesellschaft. 1.Aufl. 1969. 3. verbesserte Aufl.
Stuttgart. 1983. Tomus II. S.1568.
Cenantibus autem eis accepit Iesus panem et benedixit ac fregit
deditque discipulis suis et ait
accipite et comedite hoc est corpus meum
Et accipiens calicem gratias egit et dedit illis dicens
bibite ex hoc omnes
hic est enim sanguis meus novi testamenti
- 22)Hölderlin „Emilie vor ihrem Brauttag": StA 1. 278.
Der, wie ein stiller Gott auf dunkler Wolke,
Verborgenwirkend über seiner Welt 30
Mit freiem Auge ruht,
- Vgl. Biblia Hebraica Stuttgartensia(IV(3)21). Jesaia. 45. 15. S.746.
אל קטנת: Eel MiStateer (Deus absconditus).
- Vgl. Biblia iuxta Vulgatam Versionem(IV(2)21). Tomus II. S.1144.
vere tu es Deus absconditus Deus Israhel salvator
- Vgl. Biblia germanica 1545. Deutsch: Luther. Faksimilierte Ausgabe. Stutt-
gart. Deutsche Bibelgesellschaft. 1967, 1983. Jesaia. 45. 15. S.XXV.
FVRwar du bist ein verborgen Gott / du Gott Israel der Heiland.
- 23)Hölderlin: Brief an den Bruder. 1.Jan.1799: StA 6. 307.
Vor allen Dingen wollen wir das große Wort, das homo sum, nihil humani a
me alienum puto, mit aller Liebe und allem Ernste aufnehmen;
- 24)Hölderlin: Brief an Neuffer. 12.Nov.1798: StA 6. 289.
Es fehlt mir weniger an Kraft, als an Leichtigkeit, weniger an Ideen, als
an Nüancen, weniger an einem Hauptton, als an mannigfaltig geordneten Tö-
nen, weniger an Licht, wie an Schatten, und das alles aus Einem Grunde;

so fühle ich eine Zufriedenheit und Ruhe, die ich lang entbehrte, und ich hoffe, es soll so bleiben, und dieser Zustand werde einen vesten und frohen Dank gegen die theuern Meinigen und gegen meine Freunde in mir erhalten. Ich habe jetzt drei Anerbieten zu Lectionen, die mir alle angenehm sind.

4)Hölderlin „An Landauer“(1800): StA 2. 114.

Und seelig, wer im eignen Hauße Frieden, 5
Wie du, und Lieb' und Fülle sieht und Ruh;
Manch Leben ist, wie Licht und Nacht, verschieden,
In goldner Mitte wihnest du.

Dir glänzt die Sonn' in wohlgebauter Halle,

Am Berge reift die Sonne dir den Wein, 10

Und immer glücklich führt die Güter alle

Der kluge Gott dir aus und ein.

5)Vgl. IV(2)7.

6)Das Testament der Mutter Hölderlins: StA Bd.7. 1.Teil. S.391.

der thätige geist meines l. S Mans

7)Hölderlin: Brief 126 an den Bruder. 13.10.1796: StA 6. 217.

Philosophie muß Du studiren, und wenn Du nicht mehr Geld hättest, als nöthig ist, um eine Lampe und Öl zu kaufen, und nicht mehr Zeit, als von Mitternacht bis zum Hahnenschrei. Das istes, was ich in jedem Falle widerhohle, und das ist auch Deine Meinung. Professoren und Universitäten kannst Du freilich im Nothfall entbehren, aber ich möchte Dir denn doch gönnen, lieber Junge! daß Du Dich weniger leiden müßtest, um Dein edelstes Bedürfniß zu befriedigen. Es sollte mich so herzlich freuen, einmal in Dir den Denker und Geschäftsmann, wie es sich gehört, vereint zu sehen.

8)Hölderlin: Brief 208 an die Mutter. Ende Juni oder Anfang Juli 1800: StA 6. 395.

Ich halte es für ein Glück, daß mir schon das anständige und erwünschte Anerbieten von einem jungen Manne, der in der Canzlei arbeitet, gemacht worden ist, daß ich ihm Stunden in der Philosophie geben möchte, wofür mir monatlich ein Karolin bezahlt wird.

9)Hölderlin: Brief 209 an die Mutter. Um 20.Juli.1800: StA 6. 397.

Ich habe auch wieder einen neuen Antrag zu Lectionen von HE. Registrator Gutscher, den ich noch von Rastadt aus kannte, bekommen. Wahrscheinlich will mich HE. Registrator Frisch vierteljährlich bezahlen, denn ich habe noch nichts von ihm eingenommen, kann aber, wie ich weiß, in jedem Falle auf seine Generosität rechnen.

10)Vgl. IV(2)3.

11)Hölderlin: Brief 215 an die Schwester. Anfang Okt. 1800: StA 6. 401.

Landauer scheint sehr zu wünschen daß ich bleibe, und hat Anstalten gemacht, daß ich vielleicht einige Informationen mehr, also ungefähr 3 Luidor des Monats erhalte.

12)Goethe: Werke. Hamburger Ausgabe (=HA). München. Beck/dtv. 1982. Bd.3.

„Faust“. S.364.

Alles Vergängliche

Ist nur ein Gleichnis; 12105

Das Unzulängliche,

Hier wird's Ereignis;

Das Unbeschreibliche,

Hier ist's getan;

Das Ewig-Weibliche 12110

Zieht uns hinan.

13)Hölderlin: Brief 118 an Neuffer. März 1796: StA 6. 205.

Mir geht es so gut, wie möglich. Ich lebe sorgenlos, und so leben ja die seeligen Götter.

10)Hölderlin: Sämtliche Werke. Stuttgarter Ausgabe (=StA). Stuttgart.
Kohlhammer. 1946-77. Bd.2. „Brod und Wein“ 1.Str. V.1-12. S.90.

Rings um ruhet die Stadt; still wird die erleuchtete Gasse,
Und, mit Fakeln geschmückt, rauschen die Wagen hinweg.
Satt gehn heim von Freuden des Tags zu ruhen die Menschen,
Und Gewinn und Verlust wäget ein sinniges Haupt
Wohlfrieden zu Haus; leer steht von Trauben und Blumen,
Und von Werken der Hand ruht der geschäftige Markt.
Aber das Saitenspiel tönt fern aus Gärten; vielleicht, daß
Dort ein Liebendes spielt oder ein einsamer Mann
Ferner Freunde gedenkt und der Jugendzeit; und die Brunnen
Immerquillend und frisch rauschen an duftendem Beet.
Still in dämmriger Luft ertönen geläutete Glocken,
Und der Stunden gedenk rufet ein Wächter die Zahl.

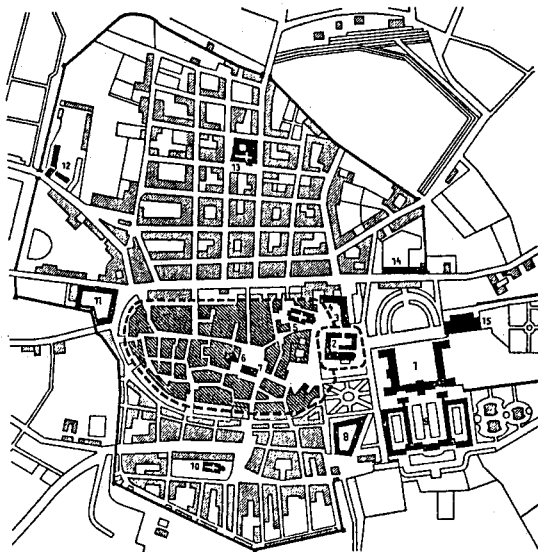
5

10

11)Das deutsche Gedicht(IV(1)7). S.129.

(2) CHRISTIAN LANDAUER

0)Handbuch der historischen Stätten Deutschlands. Bd.6: Baden-Württemberg.
Stuttgart. Kröner. 1965. S.657.



Stuttgart

1287

1794

- 1 Neues Schloß
- 2 Altes Schloß
- 3 Kanzleigebäude
- 4 Prinzenbau
- 5 Stiftskirche
- 6 Rathaus
- 7 Herrenhaus, 1820 abgebrochen
- 8 Waisenhaus
(Institut für Auslandsbeziehungen)
- 9 Akademie
(ehem. Hohe-Carls-Schule)
- 10 Leonhardskirche
- 11 Legionskaserne
(Schillers Kaserne)
- 12 Rotebühlkaserne
- 13 Hospitalkirche
- 14 Reitschule, jetzt Königsbau
- 15 Opernhaus

- 1)Hölderlin „Über die Verfahrungsweise des poetischen Geistes": StA 4. 260.
das Harmoniscentgegengesetzte in der lebendigen Einheit
- 2)Hölderlin: Brief 243 an Friedrich Wilmans. Dez. 1803: StA 6. 436
Übrigens sind Liebeslieder immer müder Flug, denn so weit sind wir noch
immer, trotz der Verschiedenheit der Stoffe; ein anders ist das hohe und
reine Frohloken vaterländischer Gesänge.
- 3)Hölderlin: Brief 210 an die Mutter. Juli 1800: StA 6. 398.
Wenn ich denke, wie viel stärker und gesünder ich mich seit der Verände-
rung meins Aufenthalts fühle, und wie sich meine jezige Lage täglich an-
gemessener für meine Bestimmung und sicherer zu meinem Auskommen bildet,

QUELLENNACHWEIS

〔IV〕 „EIN SINNIGES HAUPT“

(1) VORWORT

1) Homburg vor der Höhe in der deutschen Geistesgeschichte. Studien zum Freundeskreis um Hegel und Hölderlin. Hrsg: Jamme, Christoph / Pöggeler. Stuttgart. Klett-Cotta. 1981. Einleitung von Otto Pöggeler. S.17.

was im Frankfurt-Homburger Raum für die deutsche Geistesgeschichte getan wurde, darf nicht vorschnell im Licht von Weimar und Jena gesehen werden, denn es ist unvergleichbar. Hier im deutschen Westen war der politische Umsturz, den die Französische Revolution einleitete, ganz nahe; das Leben in der freien Reichsstadt und die ständischen Aktivität in Württemberg oder überhaupt im Südwesten hatten eine bürgerliche Tradition ausgebildet. Wenn die Forderung einer „neuen Mythologie“ weiterentfaltet wurde, dann nicht primär vom Literarisch-Ästhetischen her; vielmehr sah man die politische Dimension, die auch zur Mythologie gehört, und für einstige Theologen wie Hölderlin und Hegel hatte die „neue Mythologie“ oder „schöne Religion“ einen letzten existenziellen Ernst.

2) Japanische Hölderlin-Ausgabe. 1966-69. Bd.2. S.109.

3) Takahashi, Katsumi: Das Stadtbild im Anfang von „Brod und Wein“ (Forschungsberichte der Universität Kochi. Vol.32. Geisteswissenschaften. 1984. S.21-70). [III] Bürger. (1) Bürgerleben. S.38-39.

4) Hölderlin: Œuvres. Bibliothèque de la Pléiade. Paris. Gallimard. 1967. „Le Pain et le vin“ (Französisch: Roud, Gustave). S.808.

La ville autour de nous s'endort. La rue illuminée accueille le silence,
Et le bruit des voitures avec l'éclat des torches s'éloigne et meurt.

Rassasiés des plaisirs du jour, vers le repos s'en vont les hommes,

Et satisfait, songeur, un front penché soupèse

Pertes et gains. Dépouillé de ses fleurs, dépouillé de ses grappes, 5

Las du labeur de mille mains, désert, le marché dort.

5) Hölderlin: Poesie. Nuova Universale Einaudi. Bd.33. Torino. Einaudi. 1963. Italienisch: Vigolo, Giorgio. „Pane e vino“. S.101.

Riposa intorno la città: si tace la via illuminata

E ornati di fiaccole, lontano trabalgano i cocchi.

Sazi delle gioie del giorno al riposo rientrano gli uomini

E perdita e profitto, giudizioso capo soppesa

Nella sua casa contento; vuoto sta d'uve e di fiori 5

E da mestieri e lavori il mercato riposa.

6) Hölderlin (Deutsch/Englisch): Poems & Fragments. Englisch: Hamburger, Michael. Cambridge Universitätsverlag. 1980. „Bread and Wine“. S.243.

Round us the town is at rest; the street, in pale lamplight, grows quiet

And, their torches ablaze, coaches rush through and away.

People go home to rest, replete with the day and its pleasures,

There to weigh up in their heads, pensive, the gain and the loss,

Finding the balance good; stripped bare now of grapes and of flowers, 5

As of their hand-made goods, quiet the market stalls lie.

7) Das deutsche Gedicht. Hrsg: Schinzinger, Robert. Japanische Anmerkungen von Minoru Nambara. Daisan-Shobo. 1969. Anmerkungen. S.129.

8) Vgl. IV(1)11.

9) Wackwitz, Stephan: Trauer und Utopie um 1800 — Studien zu Hölderlins Elegienwerk. Stuttgart. Hans-Dieter Heinz. 1982. S.30.

Im Gegensatz zur menschlichen Erinnerung, die allein Verluste — die vergangene Jugend und die fernen Freunde — bilanzieren kann, ist die ökonomische Reflexion — die Überlegungen des „sinnigen Haupts“, des bourgeois — affirmativ. „Gewinn und Verlust“ werden „wohlzufrieden“ bedacht, denn die Praxis des Markts hat sich gelohnt.

付録(一九八五年十一月九日、日本独文学会中国四国支部、第三十五回研究発表会、香川大学教育学部、口頭発表の原稿および欧文資料より)

ランダウエルとヘルダーリン——市民と芸術家

(思想詩『パンとぶどう酒』との関連に見る「ランダウエル絨毯毛織物商会」)

要旨(約一〇〇〇字) [第38巻その二]

- | | |
|---------------------|---------------|
| (1) 「実務第一」 | 一(74)頁 |
| (2) 「思索家と実務家」 | 二(75)頁—二(75)頁 |
| (3) 「調和ある対立」 | 二(75)頁—三(76)頁 |
| (4) 「ランダウエル絨毯毛織物商会」 | 三(76)頁—三(76)頁 |
| (5) 西南ドイツと北海ハンザ | 三(76)頁—四(77)頁 |
| 欧文資料(当日配布) | 四(77)頁—五(78)頁 |
| | 五(78)頁—六(79)頁 |
| | 六(79)頁—九(82)頁 |

研究発表要旨(約一〇〇〇字)

当面の考察は思想詩『パンとぶどう酒』第四句末の表現「思慮深い家長」を窓として始まる。この「家長」の背後にはヘルダーリンの伝記から、シュトゥットガルトで毛織物商を営んでいた親友ランダウエルの姿が浮かぶ。まず此所では、日常の現実には有りがちな「芸術家と市民」との相克を乗り越え、心の深い所で「思索家と実務家」とが然るべく「一体化」している両友の親睦な交誼を、思想詩の内容と照応させつつ考量することを企図している。

この異質な魂の親交に見い出される稀有な「調和ある対立」は、思想詩の本質契機たる共和精神(例えば第四五句前後)へと繋がる。啓蒙期ではルソーやカントに一脉通ずるこの西欧近世市民社会形成原理を、此所では「ランダウエル絨毯毛織物商会」の経営形態にも見出し、「思慮深い家長」の共和精神を経済上でも基礎づけてみたい。資料はシュトゥットガルト市統計地誌局(一八二〇年設置)の編纂になるヴェルテムベルク年鑑(一八三二年)に収められた工場目録で、ここから商會が一七九七年に創設され、在来の問屋制を軸とした分散制手工業形態であると判る。そこで更に『百科全書』第一〇巻(一七六五年)や『資本論』

(一八六七年)における工場制手工業の分析を鑑み、専制なす集合形態とは異なるこの分散形態に、共和精神を認め一層と論旨を堅固にしてゆく。

更に探求は内陸西南ドイツにおけるこの新興企業ランダウエル商会を、思想詩の裏にある祖国への関心との脈絡で、経済上のドイツ統一を意味する関税同盟成立への展望において把え、特に既存のハンザ都市の富豪との利害対立を慮る。ここでは既出の専制と共和精神との対立が、ハンザ都市による海外中継貿易(内陸産穀物羊毛類輸出と外国産織物等工業製品輸入)と、内陸諸地域におけるドイツ独自の主体的な織物等産業発展との対比に符合する。しかもこの貿易不均衡の温床「農業の優位」なす「ドイツの現状」こそが、封建制下ドイツの後進性を裏づけていたのである。

故に十九世紀西欧市民社会発展の歴史においては、この農業の優位と北海ハンザ中継貿易に偏した経済構造が克服され、次第に先進工業国とドイツとの「調和ある対立」へと向かう道が切り開かれることとなる。すると当然のことながら封建貴族とともにハンザ都市貴族は没落してゆく。反して他方、この産業革命の進展が新興企業ランダウエル商会の将来を約束するものとなり得たことは言うまでもないことであろう。

- 一 静かに安らう都市。ひそやかに街路に燈火がともし
 - 二 して松明に飾られて騒然と馬車は疾駆し過ぎ去る。
 - 三 満ち足りて家路へと、昼間の飲びに別れを告げ、安らぎを求め歩みゆく人々。
 - 四 して収支得失を慮る思慮深い家長は
 - 五 悠然と和やかにわが家にくつろぐ。(黄昏の今は)葡萄も花束もなく。
 - 六 して手仕事の品々もなく安らう、(昼間は)忙しき広場の市場。
 - 七 だが他方、堅琴の音が彼方の庭園から響いて来る。恐らくは
 - 八 そこで恋人が奏で、或いは狐独な者が
 - 九 彼方の友を想いつつ、また若き日を偲びつつ。して噴泉が
 - 一〇 滔々と湧き、清冽な水しぶきをあげ送り、芳香に匂う花壇を濡している。
 - 十一 ひそやかに黄昏の夜風に響き渡る晩鐘の音
 - 十二 して時刻を想い、その数を夜警は声高に呼ばれる。
 - 十三 今や又ある息吹きが到来し、林苑の樹頭を(天上へと)揺り動かす。
- (『パンとぶどう酒』一八〇〇年—〇一年、第一節、第一句—第十三句)

ランダウエルとヘルダーリン——市民と芸術家

(思想詩『パンとぶどう酒』との関連に見る「ランダウエル絨毯手織物商会」)

(1) 「実務第一」

通常ヘルダーリンの伝記におきまして、資産家としてみず思ひ浮かびますのは、フランクフルト市の銀行家ゴンタルト家かと思われれます。資料(1)に掲げましたように、実はこのゴンタルト家の豪邸にヘルダーリンは家庭教師として備われ、一七九六年一月から一七九八年九月中頃にかけまして住み込んでおりました。この際に特筆すべき事と致しましては、此所のゴンタルト夫人ズゼッテと詩人が大変親しい間柄になった点であります。やがて『ヒューペーリオン』などの文学作品におきまして、言わば永遠の女性ディオティーマ像へと理想化されました人物が、他ならぬこのズゼッテ・ゴンタルト夫人でありました。

この夫人ズゼッテと好対称をなしまして、詩人と折り合いの悪かったのが、そのゴンタルト家の主人ヤーコプであります。この銀行家に関しましては、資料(1)のβ)に引用いたしました研究書が物語っておりますように、「実務第一」(『affaires avant tout』)を信条と致しますような「生粋の実務家」でありまして、凡そ詩人などと申します儲けにならない存在は眼中になど無かった人のようであります。当然のことながら、この実務家と詩人との間はこじれまして、ヘルダーリンにとり後々まで心の痛手となりますズゼッテ・ディオティーマとの別離にまで至りました。

ところで、詩人とズゼッテ・ディオティーマとの心の通う世界から眺めますと、このヤーコプ・ゴンタルトの存在意義は極めて薄いのですが、しかしながら当時の実務家、例えば資料(1)のγ)に示しましたヴェルナー、すなわちゲーテの小説に登場いたします人物の物の考え方からしますと、ヤーコプ・ゴンタルトも世間並みの経済人と想像されます。例えば、そこに引用いたしましたヴェルナーの言葉を御覧下さい。

これが僕の愉快な信条なのだ。つまり実務を整え、金を儲け、家族の者と楽しくやり、世間のことで役に立たない事には何一つ関心を払わないことなのだ。

このヴェルナーの発言を、実在の銀行家ヤーコプ・ゴンタルト自身の信条告白と看做しても、恐らく大きな間違いはないのではないかと思います。

(2) 「思索家と実務家」

このように世間知に長けまして経済活動に励みます実務家の人生観に、抑々ヘルダーリンのように深く物思いに耽り静かに思索をめぐらします詩人の内面世界が働きかけないのは世に珍らしくないことであります。むしろ稀な場合にこの両者が実り豊かな対話を始めます。例えば此所で扱いますランダウエルとヘルダーリンとの間はこの稀有な出会いの一つと看做されるのであります。

資料(2)のα)に示しましたように、ランダウエルは実務家毛織物商人であり、南西ドイツの領邦国家ヴュルテムベルク的首都シュトゥットガルトに居を構えておりました。実はこのクリスティアン・ランダウエルのもとに、詩人は一八〇〇年六月から翌一八〇一年一月にかけて半年程、世話になっておりました。この当時の様子を伝えますのが、まずヘルダーリンの書簡でありまして、例えばそのα)に示しました一八〇〇年七月の母への手紙で詩人は近況報告を致しております。

当地に参りましてから私は、久しく見失なわれておりました充足と安らぎを心に抱いております。此所の人々は大変親切なのです。

この書簡で語られております「充足と安らぎ」を詩人がこれより以前に見い出しておりましたのは、先程申しましたズゼッテ・ディオティーマのもとに他なりませんでした。

ところが、ゴンタルト家でのヤーコプとの亀裂を機にズゼッテとの別離となりまして、久しくこの「充足と安らぎ」が見失なわれておりました。しかし遂にこの「充足と安らぎ」が、商人ランダウエルのもとで見い出されました。資料(2)のβ)を御覧下さい。この毛織物商人のもとでの滞在を機に成りました詩歌の一つ、思想詩『パンとぶどう酒』冒頭におきまして、この毛織物商人を思わせます「思慮深い家長」の姿が、温かく見守る詩人の眼差の下に浮き彫りにされております。

静かに安らう都市。ひそやかに街路に燈火がともり、
そして松明に飾られて、騒然と馬車が疾駆し過ぎ去る。

満ち足りて屋の歎びに別れを告げ、憩いを求め歩み往く人々。

そして収支得失を慮る思慮深い家長は

悠然と和やかにわが家にくつろぐ。葡萄も花束もなく、

そして手仕事の品々もなく(黄昏時に)憩う(昼間は)忙しき広場の市場。

凡そ世事には疎い詩人ヘルダーリンによりまして、此所まで心を込めて歌い出されました「思慮深い家長」は、もし歴史上の人物ランダウエルを考え併せますれば、単なる空想の遊戯ではなく、正に稀有な「市民と芸術家」との対話の成果として読み取れます。

この脈絡を詩人自身の言葉で申しますと、資料(2)の7)に示しました一七九六年十月十三日の弟への書簡の一節により、「思索家と実務家とが然かるべく一体化している」と表現でき得るかと思われまします。実際にやがて「実務家」へと成長いたします弟に向かい、詩人自身がこの「思索家と実務家との一体」を強く願っておりますことは興味深いことに思われます。

(3) 「調和ある対立」

この「思索家と実務家」のように、日常意識におきましては対立しておりますものが、稀有な詩歌象徴の調べにより調和を旨指しておりますのが思想詩『パンとぶどう酒』の基本性格と考えられます。例えば、古典ギリシアの昼とキリスト教西欧の夜とか、内面世界と外界の現実とかが、濃淡細やかな明暗を織り成しまして、この思想詩の中では減張ある平衡を保持しております。此所では或る唯一の原理が全体を丸く収め大団円なすことはございません。この中央集権ならぬ共和精神を体現し専制を厭います思想詩『パンとぶどう酒』の詩想は、幾重にも微妙な心の襞を織り成しつつ、複雑な西欧キリスト者の意識の深みに沈みゆくのであります。この共和精神の基本性格を一言で以て蔽いますと、資料(3)に示しました詩人の術語で「調和ある対立」と言い表わせると思われまします。

この「調和ある対立」を表明いたしておりますのが、思想詩では資料(3)の2)に引用いたしました第三節の詩行であります。

…… 永遠に存続する規矩、

万人に普遍で、しかも各人各様(の規矩)が定められ、

何処に往き来しようとも自由なのだ。

この第四四句に申します「規矩(Maß)」は場合によりまして、その下の2)以下に示しましたルソーとかカントやフヒテの思想圏に遡求でき得るかと思われますが、とにかくこの脈絡は次の2)に示しましたヘーゲルの言葉により、「最高の共同(Gemeinschaft)」が最高の自由である」と要約でき得るかと思われまします。この観点を物語りますヘルダーリン自身の言葉と致しましては、例えば次の2)に掲げました一七九八年十二月二十四日のシンクレーア宛書簡の一節が適切かと思われまします。

かくしてまたそれ故に次のことが明らかである。各個が全体と親密に結びつき、この各個と全体との両者が唯一の生きた全体を形造る。だがこの全体は徹底して個別化され、この個別の全く独立した諸部分から成り立ち、しかもこの諸部分は正にかく親密に何時までも結び合わされているのである。

(4) 「ランダウエル絨毯毛織物商会」

以上の如く思想詩『パンとぶどう酒』などに表明されました「調和ある対立」の相を鑑みまして、今度は詩人の友ランダウエルの商会経営を考え併せてみたいと思ひます。果してこの経営形態がどうであったのか? これを伝えます統計と致しまして、私は資料(4)の2)に、一八二〇年に始めて設立されました「統計・地誌局」が一八三二年に刊行いたしました「ヴェルテムベルク年鑑」に収められた「工場目録」の記載を掲げました。実はこの記載が次の2)に示しました邦語文献、松田智雄著『ドイツ資本主義の基礎研究』(一九六七年)にも採られておりますが、しかしこの著書の三七五頁には、恐らく誤植か写し間違いのせいで、「ランダウエル商会」が「ラウタウエル商会」として紹介されております。とにかく問題なのは、この商会の経営形態であり、「ヴェルテムベルク工場目録」からは次のことが解かります。

製品は絨毯。工場内労働者なく、工場外労働者八名。商社設立一七九七年。

まず製品の絨毯に関しましては、資料(4)の2)に示しました「シュトゥットガルト商会名簿」に「ランダウエル絨毯毛織物商会」とありますことから確認されます。ところで、絨毯製作には相当な技術が必要であったと考えられます。その事を考えますと工場外労働者八名は、恐らく織物職人の親方(Webermeister)で

あろうと推測されます。

このように在来の手仕事職人と新興の資産家とが手を結んでおりました経営形態を経済史の上では、資料(4)のe)に示しました「問屋制度(Verlagsystem)」と申します。つまり個々の独立した手工業から工場制手工業へと展開いたします資本主義勃興期の経営形態でありまして、大規模な工場への集中形態ではございません。従いまして、一七九七年に新たに設立されました「ランダウエル商会」におきましては、資産家であります経営主クリスティアン・ランダウエルに八名の手工業職人が全き従属関係に立たず、各々個々の在り方を保持しながら相互に「調和ある対立」の姿を呈しておりました可能性が大きかったと想像されるのであります。

この「ランダウエル商会」を工場制手工業の中で分類いたしますと、資料(4)のe)に示しました「集合工場」と申すよりは、むしろ次のf)に示しました「分散工場」として整理されます。例えばe)の「集合工場」に關しましては、マルクスの『資本論』第七篇・第二章の叙述にございますように、「一人あるいは二人の企業家に巨万の富をもたらす」経営形態と考えられます。この形態について、十八世紀フランスの『百科全書』第一〇巻では、そこに示しました言葉通り、「この大工場では、鐘を叩く一撃の下に全てが執り行なわれ、職人は一層と拘束され手荒く扱われている」とあります。

この反対がりに示しました「分散工場」と考えられます。そこに『百科全書』からの引用の次に掲げました『資本論』からの叙述に見られますように、「この分散工場では(中央集権化された集中型大工場とは)異なり、唯一人(抜きん出て)裕福になることはないが、多数の労働者が結構に暮らしてゆける」と考えられます。この「分散工場」として「ランダウエル商会」を構想いたしますと、先程申しました「問屋制度」を軸とした親方職人八名と経営者ランダウエルとの「調和ある対立」の様が一層と肯けるのであります。

この各個と全体との緊張ある平衡状態を、再び思想詩『パンとぶどう酒』の表現に探してみますと、資料(4)のc)に示しました詩節第一五四句が相当するかと思われます。

父なる神氣アイテールが誰にも知られ万人のものとなる。

(5) 西南ドイツと北海ハンザ

以上の「調和ある対立」に關しまして、次はドイツ国内での局所に偏らない経済上の発展に留意いたしまして、「ランダウエル商会」を考察してゆきたいと思ひます。ところで、「ドイツ」と一言に申しますが、当時ドイツは「小邦分立」の時代でありまして、今日ドイツと申します国土は、凡そ三百程にも互ります政治単位に分かれ、このうち五十程の帝国自由都市と共に二百五十程の領邦国家が各々独自の関税を物品にかけておりました。従いまして、このドイツの中を商品が流通しますためには、幾重にも互る関税の網に捕われることになり、国を経る毎に商品が高くなり流通が悪くなるのが実情でした。

この現状で得をしておりましたのが、北海に面しておりましたハンザ都市の富豪でありました。すなわち海では関税がかからず製品が運べ、まず先進国ブリテン王国の工業製品が手に入ります。これに対しては東欧の農業地帯から穀物や家畜を運んで来れば良かったのです。この先進国と後進国との間に立つ中継貿易でハンザ都市の富豪は栄えていたのであります。

この中継貿易を軸と致しました経済活動は、工業国の繁栄を助けるとともに、内陸部での農業優位を決定づけ、内陸ドイツ独自の工業発展を阻むものでした。この点を十九世紀中葉にも尚、資料(5)のd)に示しましたエンゲルスの論文が厳しく批判いたしております。

イギリスは農産物を全く輸出しておらず、絶えず外国から輸入しなければならぬ。フランスは少くとも輸出するだけ輸入しており、この仏英兩國の富の源泉は就んずく工業製品の輸出である。これに対してドイツは工業製品をほとんど輸出しておらず、夥しい穀物、羊毛、家畜を輸出している。……

農業の政治上の代表者は、他の欧州諸国と同様にドイツでも、大土地所有者たる封建貴族であり、この貴族の専制支配に適う政治形態が封建制度である。この封建制度が解体する所はどこでも、農業が国の産業を決定しなくなるのである。

此所でエンゲルスは封建貴族にのみ言及しておりますが、先のハンザ都市の富豪のような都市貴族をも考え併せますと、農業と中継貿易に根ざしましたこの両貴族の勢力が、内陸ドイツの工業発展を阻み、仏英両先進国に対するドイツの後進

性の温床であつたと考えられるのであります。

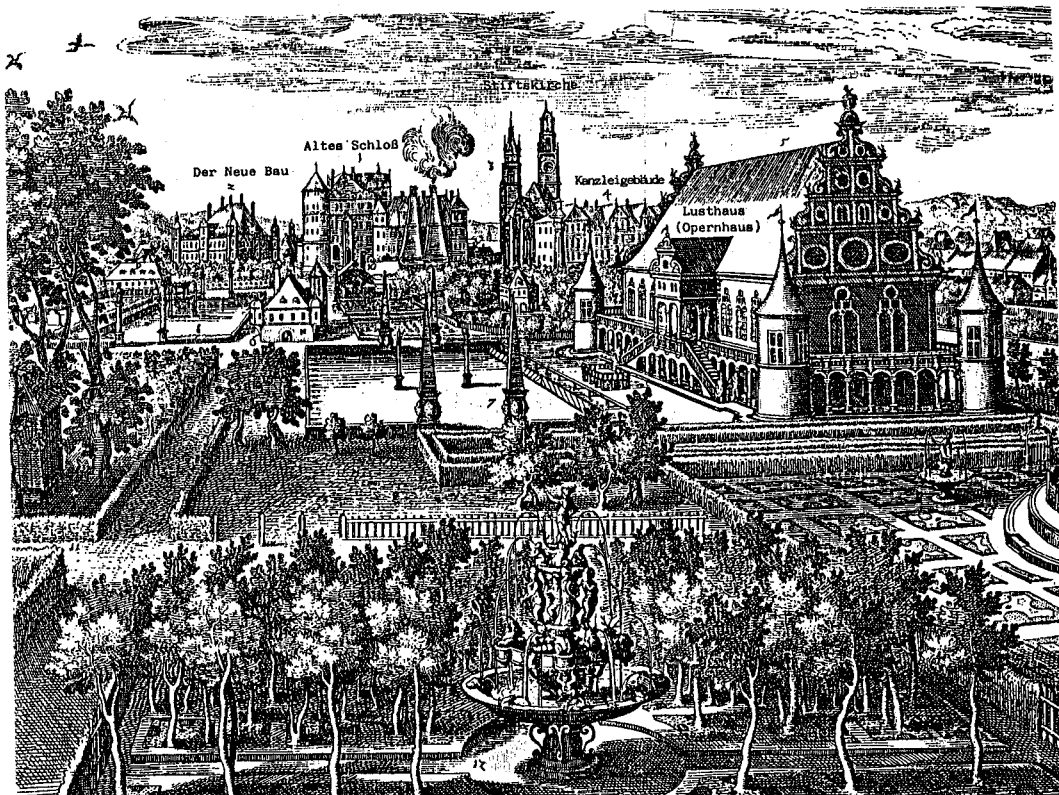
この脈絡で興味深く思われますのが、次の資料(5)の(6)に掲げましたフィヒテの論述であります。すなわち、一八〇八年に『ドイツ国民に告ぐ』第十三講演におきまして、フィヒテは次の点を力説いたしております。

ドイツ人相互の一致とともに、国内の独自性と商業の自立がそれに次ぐ繁栄への道なのである。

このフィヒテの主張を、今まで考察して参りました北海ハンザと内陸ドイツとの対立から考えますと、「ドイツ国内の独自性と商業の自立」を生み出す母胎と致しまして、ドイツ内部での関税の徹廃と内地工業の保護育成が具体策として念頭に浮かぶのであります。

正にこの脈絡におきまして、内陸ドイツの新興毛織物商ラングウエルの姿が浮かび上がって参ります。すなわち、この商会の発展にとり、ドイツ内部での関税の徹廃と内地工業の保護育成が鍵となるからであります。実際に歴史の現実はこの方向に向かい、次第にハンザ都市の中継貿易の意義は失われてゆき、その都市貴族はマンの「ブデンブローク家」のように没落してゆきました。この際、十九世紀を通じてドイツ関税同盟が実現し、内地ドイツ独自の工業発展が促され、やがてドイツも仏英に追いつかんばかりの先進工業国に成長してゆくのであります。

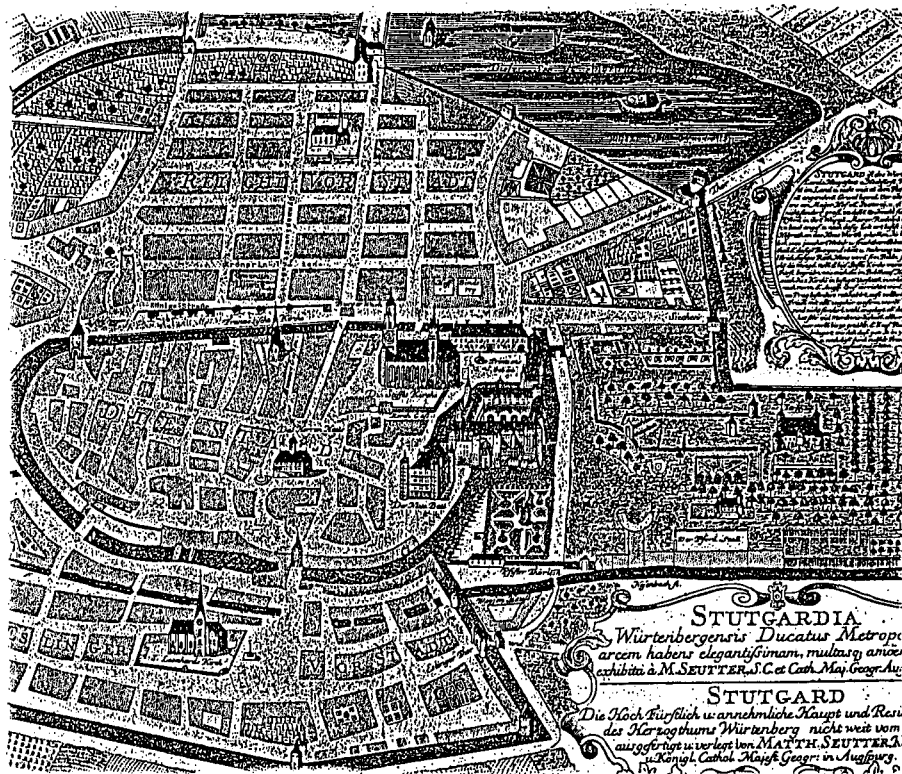
この十九世紀ドイツ資本主義の展開におきまして、在来のハンザ中継貿易に偏っておりました経済構造が崩れてゆきまして、これとともに内陸ドイツ独自の工業発展の時代が到来いたします。この新たな時代に先がけまして、一七九七年に「ラングウエル商会」が設立されたと考えられます。久しくハンザ中継貿易を動脈としてドイツには先進国から織物工業製品が農産物との引き換えに流入し、ドイツは工業後進国に甘んじておりました。ところが新たな時代には、経済上のこの専制を破き、工業先進国との新たな「調和ある対立」を目指して、ドイツ国内工業が育成されてゆくのであります。そして、この産業の力が、先にエンゲルスが申しました「貴族の専制支配」たる「封建制度が解体」する母胎となつてゆくのであります。



„England exportiert gar keine Ackerbauprodukte, sondern hat fortwährend auswärtige Zufuhren nötig; Frankreich importiert wenigstens ebensoviel davon, als es ausführt, und beide Länder stützen ihren Reichtum vor allem auf ihre Ausfuhr von Industrieerzeugnissen. Deutschland dagegen exportiert wenig Industrieprodukte, aber große Massen von Korn, Wolle, Vieh usw. ... Der politische Repräsentant des Ackerbaus ist in Deutschland wie in den meisten europäischen Ländern der Adel, die Klasse der großen Grundbesitzer. Die der ausschließlichen Herrschaft des Adels entsprechende politische Verfassung ist das Feudalsystem. Das Feudalsystem ist überall in demselben Maße zerfallen, in welchem der Ackerbau aufgehört hat, entscheidender Produktionszweig eines Landes zu sein“

β) FICHTE „13. Rede an die deutsche Nation“: Werke. 7. 467.

„... den Deutschen ... dass, nächst der Einigkeit dieser unter sich selber, ihre innere Selbstständigkeit und Handelsunabhängigkeit das zweite Mittel ist ihres Heils“



(4) „LANDAUERSCHE HANDLUNG“

α) „Verzeichniß der im Königreich Württemberg befindlichen Fabriken und Manufakturen“ aus dem „Württembergischen Jahrbuch 1832“ herausgegeben vom 1820 eingerichteten „Statistisch-Topographischen Bureau“

„Fabrikat: Fußteppiche. Zahl der Arbeiter innerhalb der Fabrik: 0
Zahl der Arbeiter außerhalb der Fabrik: 8. ...
Jahr der Entstehung: 1797“

β) MATSUDA, Tomoo „Kisokenkyu (=Grundlegung) des deutschen Kapitalismus“ Iwanami. 1967. S.375:

„Ch. Laudauer, F.“

γ) „Landauersche Fußteppiche- und Wollwarenhandlung“ („Stuttgarter Firmenbuch“ 1832)

δ) „Verlagssystem ... als Stadium in der Entwicklung des Kapitalismus zwischen dem selbständigen Handwerk und der Manufaktur liegt.“ (Meyers Enzyklopädisches Lexikon. Bd.24. 1979. S.484)

ε) „die großen Manufakturen, wo Hunderte von Menschen unter einem Direktor arbeiten, und die man gewöhnlich vereinigte Manufakturen (manufactures réunies) nennt. ... Die vereinigte Fabrik (fabrique réunie) wird einen oder zwei Unternehmer wunderbar bereichern“ (MARX, Karl „Das Kapital“ Bd.1. 1867. VII. 24: Marx/Engels. Werke. Dietz. Bd.23. S.774-775)

° „A la grande manufacture tout se fait au coup de cloche, les ouvriers sont plus contraints & plus gourmandés.“ („Encyclopédie“ Bd.10. 1765. „Manufacture“ S.61)

ζ) „L'autre espèce de manufacture est de celles qu'on peut appeller dispersées“ („Encyclopédie“ Bd.10. „Manufacture“ S.61)

° „In der getrennten Fabrik (fabrique séparée) dagegen wird niemand reich, aber eine Menge Arbeiter befinden sich im Wohlstand“ (MARX „Das Kapital“: op. cit. S.775)

η) HÖLDERLIN „Brod und Wein“ 9.Str. V.154: StA 2. 95.

„Vater Aether erkennt jeden und allen gehört.“

(5) INNLAND UND HANSA

α) ENGELS, Friedrich (1820-95)

„Der Status quo in Deutschland“ (1847): Marx/Engels. Werke. 4. 44.

(3) „HARMONISCHENTGEGENSESETZ“

(HÖLDERLIN „Über die Verfahrungsweise des poetischen Geistes“:
StA 4. 260 usw.)

α) HÖLDERLIN „Brod und Wein“ 3.Str. V.44-46: StA 2. 91.

„ immer bestehet ein Maas, 44
Allen gemein, doch jeglichem auch ist eignes beschieden, 45
Dahin gehet und kommt jeder, wohin er es kann.“ 46

β) ROUSSEAU, Jean-Jacques (1712-78) „Du Contrat Social“ (1762) I. 6:

„Chacun de nous met en commun sa personne et toute sa puissance
sous la suprême direction de la volonté générale; et nous rece-
vons en corps chaque membre comme partie indivisible du tout.“
(Oeuvres complètes. Bibliothèque de la Pléiade. Gallimard.
Bd.3. 1964. S.361)

γ) KANT, Immanuel (1724-1804) „Die Metaphysik der Sitten“ (1797) „Rechts-
lehre“ 46 Kap.: Akademie-Textausgabe. Faksimile-Neudruck. Gruyter. 1968.
Bd.6. S.313-314.

„Also kann nur der übereinstimmende und vereinigte Wille Aller, so
fern ein jeder über Alle und Alle über einen jeden ebendasselbe
beschließen, mithin nur der allgemein vereinigte Volkswille ge-
setzgebend sein.“

δ) FICHTE, Gottlieb (1762-1814) „13. Rede an die deutsche Nation“ (1808):
Werke (1845/46). Faksimile-Neudruck. Gruyter. 1971. Bd.7. S.467.

„Die geistige Natur vermochte das Wesen der Menschheit nur in höchst
mannigfaltigen Abstufungen an Einzelnen, und an der Einzelheit im
Grossen und Ganzen, an Völkern, darzustellen. Nur wie jedes dieser
letzten, sich selbst überlassen, seiner Eigenheit gemäss, und in
jedem derselben jeder Einzelne jener gemeinsamen, so wie seiner
besonderen Eigenheit gemäss, sich entwickelt und gestaltet, tritt
die Erscheinung der Gottheit in ihrem eigentlichen Spiegel heraus,
so wie sie soll; ... jenes höchste Gesetz der Geisterwelt“

ε) HEGEL, Friedrich (1770-1831) „Differenz des Fichteschen und Schelling-
schen Systems der Philosophie“ (1801) „Darstellung des Fichteschen Sys-
tems“: Werke (1832-45). Suhrkamp. 1969-71. Bd.2. S.82.

„Die höchste Gemeinschaft ist die höchste Freiheit“

ζ) HÖLDERLIN. Brief an Sinclair (24.12.1798): StA 6. 301.

„ ... , so ist auch daraus klar, wie innig jedes Einzelne mit dem
Ganzen zusammenhängt und wie sie beede nur Ein lebendiges Ganze
ausmachen, das zwar durch und durch individualisirt ist und aus
lauter selbständigen, aber eben so innig und ewig verbundenen
Theilen besteht.“

Kagawa 9. 11. 1985

- (1) HÖLDERLIN (1770-1843) als Hauslehrer bei GONTARD in Frankfurt
(Januar 1796 - September 1798)

α) GONTARD, Susette (1769-1802)

Vgl. „DIOTIMA" in Hölderlins „Hyperion" (1797/99) uam.

β) GONTARD, Jakob (1764-1843): Bankier

„Der Überlieferung nach war er reiner Geschäftsmann mit dem Wahl-
spruch: »Les affaires avant tout«, dabei von »nervöser Erregbar-
keit«. ... Für seine erste Frau und den Dichter hatte er
gewiß nicht eben viel Verständnis"

(BECK/RAABE: Hölderlin. Eine Chronik in Text und Bild. Insel.
1970. S.371-372)

γ) WERNER in „Wilhelm Meisters Lehrjahre" (1796): GOETHE (1749-1832).
Hamburger Ausgabe (=HA) 7. 287.

„Das ist also mein lustiges Glaubensbekenntnis: seine Geschäfte
verrichtet, Geld geschafft, sich mit den Seinigen lustig gemacht
und um die übrige Welt sich nicht mehr bekümmert, als insofern
man sie nutzen kann."

- (2) HÖLDERLIN als Pensionsgast bei LANDAUER in Stuttgart
(Juni 1800 - Januar 1801)

α) LANDAUER, Christian (1769-1845): Tuchhändler

„... seit der Veränderung meines Aufenthalts ... fühle ich
eine Zufriedenheit und Ruhe, die ich lang entbehrte, ... in
guter wohlmeinender Gesellschaft"

(HÖLDERLIN. Brief an die Mutter. Juli 1800: Stuttgarter Ausgabe
(=StA) 6. 398)

β) HÖLDERLIN „Brod und Wein" (1800-01) 1.Str. V.1-6: StA 2. 90.

„Rings um ruhet die Stadt; still wird die erleuchtete Gasse,	1
Und, mit Fackeln geschmückt, rauschen die Wagen hinweg.	2
Satt gehn heim von Freuden des Tags zu ruhen die Menschen,	3
Und Gewinn und Verlust wäget <u>ein sinniges Haupt</u>	4
<u>Wohlfrieden zu Haus</u> ; leer steht von Trauben und Blumen,	5
Und von Werken der Hand ruht der geschäftige Markt."	6

γ) HÖLDERLIN. Brief an den Bruder (13.10.1796): StA 6. 218.

„Philosophie mußt Du studiren, ... Es sollte mich so herzlich
freuen, einmal in Dir den Denker und Geschäftsmann, wie es sich
gehört, vereint zu sehen."

Lichtkontrapunktes zwischen der anspruchsfrei „zärtlichsten“⁴⁴⁾ „Erleuchtung“ der stadtbürgerlichen „Gasse“: „... still wird die erleuchtete Gasse“ (V. 1), und in der prächtig „mit Fakeln geschmückten“ höfischen Beleuchtung der Straße, wo nicht nur ein Wagen fährt, sondern „rauschen die Wagen hinweg“ (V. 2). Im Kontrast zum „hinwegrauschenden“ Vorgang der „geschmückten Wagen“ auf dem Weg zur feudal-privilegierten Abendgesellschaft in schmuckhafter Pracht prägt sich das bescheidene „Werden“ der innerlich heranwachsenden „Erleuchtung“ in bürgerlichem Ernst aus.⁴⁵⁾

Mitten in dieser „zärtlichsten“ „Erleuchtung“ ruht das „sinnige Haupt / Wohlzufrieden zu Haus“, als ein Sinnbild des Hausvaters des heranwachsenden Bürgertums, „bis daß es reift, furchtsamgeschäftiges“⁴⁶⁾. Dieser Hausvater Landauer sann wahrscheinlich kaum auf eine despotisch „väterliche Regierung (imperium paternale), wo also die Unterthanen ... sich bloß passiv zu verhalten genöthigt sind“, sondern vielmehr auf eine antimonarchische „patriotische Regierung (imperium non paternale, sed patrioticum)“⁴⁷⁾, sowohl im politischen Sinne als auch auf dem wirtschaftlichen Gebiet. Der ausschließliche Überseehandel, von dessen „Gewinn und Verlust“ der prächtige Reichtum der hanseatischen Patrizier abhing, galt damals für eine monarchisch „väterliche Regierung“ auf dem wirtschaftlichen Feld, wie sie der preußische Despot Friedrich II. in der politischen Strategie des 18. Jahrhunderts verkörperte.⁴⁸⁾ Aber in der geschichtlich notwendigen Entwicklung vermittle des „Deutschen Zollvereins“ mußte solche despotische Macht sich in ihren Untergang fügen, weil der Zollverein die bisherigen partikularistischen Zollgrenzen der Kleinstaaterie auflösen und Deutschland im wirtschaftlichen Sinne vereinigen wollte. Daraus folgt, daß der inländische Fabrikant Landauer in dieser zukünftigen Hinsicht „erst recht aufgehen, und geräuschlos, wie die wachsende Natur, seine geheimen weitreichenden Kräfte entfalten“⁴⁹⁾ konnte.

44) „Der Tod des Empedokles“ I. Fas. (1798–99). V. 123 bezüglich auf „Antigonä“ (V. 124) des „Sophokles“ (V. 114): StA 4. 7.

45) Vor allem im Kapitel über die „Erleuchtung“ in meiner Arbeit: Das Stadtbild im Anfang von „Brod und Wein“ (S. 42–49).

46) „Friedensfeier“ V. 156: StA 3. 538.

47) Kant „Über den Gemeinspruch: Das mag in der Theorie richtig sein, taugt aber nicht für die Praxis“ (1793): Werke. Bd. 8. S. 290f.

48) Fichte „13. Rede an die deutsche Nation“ (1808): Gegen den „Überseehandel“ und das „Traumbild einer Universalmonarchie“ riet er „den Deutschen ... dass, nächst der Einigkeit dieser unter sich selber, ihre innere Selbstständigkeit und Handelsunabhängigkeit das zweite Mittel ist ihres Heils“ (Werke. Berlin (Gruyter) 1971. Bd. 7. S. 467).

49) Br. 222 an den Bruder um Neujahr 1801: StA 6. 407.

offene Heiterkeit und die republikanische Idee beruht, hängt das Interesse des Dichters fürs „Vaterländische“ in „Brod und Wein“ zusammen.⁴¹⁾ Unter Berücksichtigung dieses „Vaterländischen“ handelt es sich hier darum, die „Landauersche Handlung“ in Hinsicht auf den „Deutschen Zollverein“ (1834–67) zu betrachten, der die wirtschaftliche Vereinigung Deutschlands bedeutete. In diesem Zusammenhang taucht der geschichtlich unabwendbare Widerspruch der Interessen zwischen den neu heranwachsenden Unternehmern im Inland wie Landauer im Südwesten und den bestehenden Handelsherren der Hansestädte im 19. Jahrhundert auf. Denn der ausschließliche Überseehandel der Hansestädte, wie z.B. ihre Einfuhr der Textilwaren aus dem technisch fortgeschrittenen Britannien, widerspricht dem selbständigen Gewerbefleiß der heranwachsenden Webwarenfabriken im Inland. Dabei führten die Hansestädte Getreide, Schafwolle, Vieh usw. nach Britannien aus. Solange also das deutsche Gewerbe von diesem einseitigen Überseehandel abhing, mußte es sich leider in seine Rückständigkeit fügen.

Diese wirtschaftliche Rückständigkeit in der Übergangszeit vom monarchischen Feudalismus zum republikanischen Bürgertum läßt sich im Aufsatz von Friedrich Engels „Der Status quo in Deutschland“ (1847) im politischen Sinne begründen: „Das Feudalsystem ist überall in demselben Maße zerfallen, in welchem der Ackerbau aufgehört hat, entscheidender Produktionszweig eines Landes zu sein, in welchem sich neben der ackerbauenden eine gewerbtreibende Klasse, neben den Dörfern Städte gebildet haben.“⁴²⁾ Hier spiegelt sich das bürgerliche Bewußtsein des Sohns eines Textilfabrikanten im Ruhrgebiet, der mit seinem Freund Karl Marx „in eben dem Momente und Grade, worinn sich das Bestehende auflöst, auch das Neueintretende, Jugendliche, Mögliche“⁴³⁾ scharfsinnig sah. Daß solch heranwachsendes Bewußtsein des gärenden Bürgertums auch im anfänglichen Stadtbild von „Brod und Wein“ aufgehen konnte, behauptet meine oben erwähnte Arbeit „Das Stadtbild . . .“ (3) auf der Grundlage des

41) Um das „harmoniscentgegengesetzte“ Gleichgewicht zwischen dem „Griechischen“ und dem „Vaterländischen“ ging es in meiner Arbeit: Über das „Griechische“ und das „Vaterländische“ in Hölderlins „Brod und Wein“ („Die Deutsche Literatur“, hrsg. vom Zweigbezirk Chugoku-Shikoku der Japanischen Gesellschaft für Germanistik. Nr. 11. 1978. S. 28–35), in der ich die Vernachlässigung des „Griechischen“ wegen der Betonung des „Vaterländischen“ bei Jochen Schmidt kritisierte, der behauptete, daß in der Mitte der Gedankenlyrik „das Griechische gelegentlich durchschimmernder Ausgangspunkt“ sei (Hölderlins Elegie „Brod und Wein“. Berlin (Gruyter) 1968. S. 81).

42) Marx / Engels: Werke. Bd. 4. S. 44.

43) „Das Werden im Vergehen“ (1799): StA 4. 282.

Aus dem Entstehungsjahr entnehme ich, daß die „Landauersche Handlung“ um 1800 eine neu heranwachsende Firma war. Aber unter den „Fabriken und Manufakturen“ in Stuttgart war keine Firma früher als 1797 entstanden. Das „sinnige Haupt“ Landauer ging also dieser Übergangszeit vom Handwerk zur Manufaktur voran. Außerdem läßt sich die Betriebsart der Firma mit acht Arbeitern außerhalb der Fabrik als das bisherige „Verlagssystem“ ansehen, das „als Stadium in der Entwicklung des Kapitalismus zwischen dem selbständigen Handwerk und der Manufaktur liegt“³⁵⁾. Die Arbeiter waren wohl Webermeister, die sich vermutlich keinem monarchischen Betriebsführer unterordnen, sondern vielleicht im „harmonisch-entgegengesetzten“ Umgang mit dem „sinnigen Haupt“ stehen mochten.

Zusammen mit diesem „Verlagssystem“ gehört die Firma Landauer kaum zu jenen „vereinigten Fabriken und Manufakturen (fabriques et manufactures réunies)“, die fast nur „einen oder zwei Unternehmer wunderbar bereichern“³⁶⁾, wo „tout se fait au coup de cloche, les ouvriers sont plus contraints & plus gourmandés“³⁷⁾. Vielmehr gilt ihre Betriebsform für eine „getrennte Fabrik und Manufaktur (manufacture dispersée)“, in der die Teilnehmer, „épars, occupés chacun de sa partie, & liés seulement par l'intérêt général“ (Denis Diderot)³⁸⁾, arbeiten können. Daraus ergibt sich, daß das „sinnige Haupt“ nicht nur im freundlichen Umgang mit dem Dichter, sondern auch auf dem wirtschaftlichen Gebiet jenes antimonarchische Element der Gedankenlyrik verkörperte, das auch der „Vater Aether“ (V. 65) inmitten des „himmlischen Festes“ (V. 102) des „seeligen Griechenlandes“ (V. 55) von „Brod und Wein“ verbildlicht: „Vater Aether erkennt jeden und allen gehört.“ (V. 154)³⁹⁾

(3) „DER FERNHINSINNENDE KAUFMANN“⁴⁰⁾

Mit dem „Griechischen“, auf dem die vorliegende Betrachtung über die

35) Meyers Enzyklopädisches Lexikon. Bd. 24. 1979. S. 484.

36) Marx, Karl: „Das Kapital“ Bd. 1. 1867. Abschn. 7. 24. Kap.: Marx / Engels: Werke. Berlin (Dietz) 1955-72. Bd. 23. S. 774f.

37) Im Artikel ‚MANUFACTURE‘ der „Encyclopédie“ (Bd. 10. Neuchatel (Faulche) 1765. S. 61).

38) Im Artikel ‚ENCYCLOPÉDIE‘ der „Encyclopédie“ (Bd. 5. Paris (Briasson / David / Le Breton / Durand) 1755. S. 636).

39) StA 2. 91-95.

40) „Archipelagus“ V. 72-75 in bezug auf „Athen“ (V. 62): „Siehel da löste sein Schiff der fernhinsinnende Kaufmann,/Froh, denn es wehet' auch ihm die beflügelnde Luft und die Götter/Liebten so, wie den Dichter, auch ihn, dieweil er die guten/Gaaben der Erd' ausglich und Fernes Nahem vereinte.“ (StA 2. 105)

Das „Maas“, sei es der auch über den olympischen Zeus waltende „Nomos“²⁷⁾, „la suprême direction de la volonté générale“²⁸⁾, der „kategorische Imperativ“ des „moralischen Gesetzes“²⁹⁾ oder „die republikanische Verfassung“³⁰⁾, kann sich jedenfalls auf den idealistischen Satz des Freundes Hölderlins, Hegels, beziehen: „Die höchste Gemeinschaft ist die höchste Freiheit“³¹⁾ („Darstellung des Fichteschen Systems“, 1801). „So ist auch daraus klar, wie innig jedes Einzelne mit dem Ganzen zusammenhängt und wie sie beide nur Ein lebendiges Ganze ausmachen, das zwar durch und durch individualisirt ist und aus lauter selbständigen, aber eben so innig und ewig verbundenen Theilen besteht“³²⁾: „In Tirannos“ (Schiller: „Die Räuber“, 2. Aufl. 1782).

Mit Bezug auf dieses antimonarchische Element soll im folgenden über die Betriebsverhältnisse der „Landauerschen Fußteppiche- und Wollwarenhandlung“³³⁾ nachgedacht werden, um das „sinnige Haupt“ auch auf dem wirtschaftlichen Feld zu betrachten. Im „Verzeichniß der im Königreich Württemberg befindlichen Fabriken und Manufakturen“ aus dem „Württembergischen Jahrbuch 1832“, das das 1820 eingerichtete „Statistisch-Topographische Bureau“ veröffentlichte, finden sich über die „Landauersche Handlung“ folgende Angaben:

Fabrikat: Fußteppiche. Zahl der Arbeiter innerhalb der Fabrik: 0.
Zahl der Arbeiter außerhalb der Fabrik: 8. Cataster: 37 Fl. 36 Kr.
Absatz: Bayern, Baden und Schweiz. Jahr der Entstehung: 1797.³⁴⁾

27) Sophokles „Antigonä“ 450ff.

28) Rousseau, Jean-Jacques „Du Contrat Social“ (1762) Buch I. Kap. 6: Œuvres complètes. Paris (Gallimard) Bd. 3. 1964. S. 361. Vgl. Kant „Die Metaphysik der Sitten“ (1797) „Rechtslehre“ 46. Kap.: „Also kann nur der übereinstimmende und vereinigte Wille Aller, so fern ein jeder über Alle und Alle über einen jeden ebendasselbe beschließen, mithin nur der allgemein vereinigte Volkswille gesetzgebend sein.“ (Werke. Akademie-Textausgabe. Berlin (Gruyter) 1968. Bd. 6. S. 313f.).

29) Kant, Immanuel „Kritik der praktischen Vernunft“ (1788) I. Teil. I. Buch. I. Hauptstück. 7. Kap.: Werke. Bd. 5. 30ff.

30) Kant „Zum ewigen Frieden“ (1795): Werke. Bd. 8. S. 366. Vgl. Rousseau „Émile“ (1762) Buch II.: „on réuniroit dans la République tous les avantages de l'état naturel à ceux de l'état civil“ (Œuvres complètes. Bd. 4. 1969. S. 311).

31) Hegel, Friedrich „Differenz des Fichteschen und Schellingschen Systems der Philosophie“ (1801): Werke. Frankfurt am Main (Suhrkamp) 1969–71. Bd. 2. S. 82.

32) Br. 171 an Sinclair vom 24. Dez. 1798: StA 6. 301.

33) Im Stuttgarter Firmenbuch vom Jahrgang 1832 findet sich der Eintrag: Landauer, Christian. Kaufmann. Landauersche Fußteppiche- und Wollwarenhandlung.

34) In „Kisokenkyu (= Grundlegung) des deutschen Kapitalismus“, Tokyo (Iwanami) 1967, von Tomoo Matsuda lautet der fehlerhafte Name „Laudauer“ (S. 375) sicher aufgrund eines Druckfehlers oder einer falschen Abschrift.

Diese schwierige Aufgabe, die sich widersprechenden Möglichkeiten des menschlichen Daseins, „Denker und Geschäftsmann“ oder „Künstler und Bürger“ miteinander zu versöhnen, erfüllte sich tatsächlich in der „harmoniscentgegengesetzten“²³⁾ Freundschaft Hölderlins mit Landauer in höherem Maße als in der alltäglichen Wirklichkeit.

(2) „LANDAUERSCHE FUSSTEPPICHE- UND WOLLWAREN-HANDLUNG“

Der gedankenlyrische Kontrapunkt wie z.B. „Tag und Nacht“ oder „Hellas und Hesperien“ in „Brod und Wein“ hängt kaum von einem endgültigen Vereinigungsknoten ab, sondern vielmehr beruht er auf dem versöhnlichen Gleichgewicht der Elemente, die sich zu keinem Einheitssatz konzentrieren, sondern „das Offene schauen, / Daß ein Eigenes wir suchen, so weit es auch ist“²⁴⁾. Daher „blickt auch gern“ „der besonnene Tag“ so tief „in die Nacht hin“²⁵⁾, wie der „Geschäftsmann“ den „Denker“ fest auf dem Schoß hielt. Von dieser antimonarchischen Haltung der republikanischen Auffassung zeugt z.B. die folgende Aussage der dritten Strophe der Gedankenlyrik:

... immer besteht ein Maas,
Allen gemein, doch jeglichem auch ist eignes beschieden, 45
Dahin gehet und kommt jeder, wohin er es kann.²⁶⁾

23) „Über die Verfahrungsweise des poetischen Geistes“ (1799): StA 4. 260ff. Der gleichen Gesichtspunkte finden sich in anderen Aufsätzen der Homburgerzeit (1798-1800): „Reflexion“, „Über Religion“ u.a.m.

24) „Brod und Wein“ V. 41f.: StA 2. 91.

25) „Brod und Wein“ V. 24 / V. 27: StA 2. 90. / 91.

26) „Brod und Wein“ V. 44ff.: StA 2. 91. „jeglichem . . . eignes (Maas)“ heißt, daß „jeder ein eignes Ganze ist“ (Br. 183 an Neuffer vom 3. Juli 1799: StA 6. 339). Vgl. „Eines und Alles“ („Brod und Wein“ V. 84: StA 2. 92) in bezug auf „das *εν διαφερον εαυτω* (das Eine in sich selber unterschiedne) des Heraklit“ („Hyperion“ StA 3. 81). In „Brod und Wein“ geht es um den „harmoniscentgegengesetzten“ Zusammenhang des „einen Maases“ (V. 44) mit „jeglichem“ „eigenen“ Maß. Dagegen stellen die bisherigen Erläuterungen darüber das erste „Maas“ dem zweiten gegenüber: Pezold, Emil. Hölderlins Brod und Wein. Sambor 1896/97 (Neudruck 1967) S. 92; Schmidt, Jochen. Hölderlins Elegie „Brod und Wein“. Berlin (Gruyter) 1968. S. 49. Dabei nehmen die beiden Interpreten Rücksicht auf die dualistische Struktur, sei es die zwischen dem „Massstab der moralischen Beurtheilung“ und dem „Grad psychischer Leistungsfähigkeit“ (Pezold) oder die zwischen der „schicksalhaften Gebundenheit“ und der „Einbildungskraft“ (Schmidt). Nach meiner Lesart kann ein solcher Dualismus im „Harmoniscentgegengesetzten“ aufgehoben werden.

LANDAUER——„ein sinniges Haupt“ in Hölderlins „Brod und Wein“

„Ich scheue das Gemeine und Gewöhnliche im wirklichen Leben zu sehr“¹⁵⁾ obwohl er „das große Wort, das homo sum, nihil humani a me alienum puto, mit aller Liebe und allem Ernste aufnehmen“¹⁶⁾ wollte. Um diesem der Weltklugheit fremden Freund aus der Not zu helfen, schrieb Landauer seinem „lieben Hölderlin“ am 22. August 1801: „Dein Schirm ist durchaus nirgends zu finden. Dich erwartet mit offenen Armen . . .“¹⁷⁾

In diesem Zusammenhang mag man sich auch an den Ehemann der geliebten Susette erinnern: Jacob Friedrich Gontard (1764–1843). „Der Überlieferung nach war er reiner Geschäftsmann mit dem Wahlspruch: » Les affaires avant tout«, dabei von » nervöser Erregbarkeit«, . . . Für seine erste Frau und den Dichter hatte er gewiß nicht eben viel Verständnis.“¹⁸⁾ „Es waren kaum größere Gegensätze denkbar als der Bankier Gontard und der Kaufmann Landauer. Während jener ein kühler Weltmann gewesen sein muß, verstand es dieser, die praktischen Lebensaufgaben mit einem hohen Sinn für das Schöne zu verbinden.“¹⁹⁾ Aber solche Geschäftsmannfiguren fand man damals wahrscheinlich nicht selten, wie z.B. „Werner“ in Goethes „Wilhelm Meisters Lehrjahre“ (1796), der bezüglich des „Geistes eines echten Handelsmannes“ „die doppelte Buchhaltung“ als „eine der schönsten Erfindungen des menschlichen Geistes“²⁰⁾ ansieht und behauptet: „Das ist also mein lustiges Glaubensbekenntnis: seine Geschäfte verrichtet, Geld geschafft, sich mit den Seinigen lustig gemacht und um die übrige Welt sich nicht mehr bekümmert, als insofern man sie nutzen kann.“²¹⁾

Im ruhig-zufriedenen Aufenthalt bei der geliebten Susette in Frankfurt schrieb Hölderlin an den Bruder am 13. Oktober 1796: „Philosophie mußst Du studiren . . . Professoren und Universitäten kannst Du freilich im Nothfall entbehren . . . Es sollte mich so herzlich freuen, einmal in Dir den Denker und Geschäftsmann, wie es sich gehört, vereint zu sehen.“²²⁾

15) Br. 167 vom 12. Nov. 1798: StA 6. 289.

16) Br. 172 vom 1. Jan. 1799 an den Bruder: StA 6. 307.

17) StA 7. (1). 169.

18) Beck, Adolf / Raabe, Paul: Hölderlin. Eine Chronik in Text und Bild. Frankfurt am Main (Insel) 1970. S. 371f.

19) Heuschle, Otto: Hölderlins Freundeskreis. Stuttgart (Theiss) 1975. S. 86.

20) Goethe, Wolfgang: Werke. Hamburger Ausgabe. München (Beck / dtv) 1982. Bd. 7. S. 37.

21) Goethe: Werke. Bd. 7. S. 287.

22) Br. 126: StA 6. 218.

dem der Dichter sich als Pensionsgast vom Juni 1800 bis zum Januar 1801 niederließ, während der fast 7 Monate also, die sich an die Entstehungszeit von „Brod und Wein“ anschließen.

Im Brief an die Mutter (Juli 1800) berichtete Hölderlin über seinen Aufenthalt bei Landauer in Stuttgart: „... seit der Veränderung meines Aufenthalts ... fühle ich eine Zufriedenheit und Ruhe, die ich lang entbehrte ... in guter wohlmeinender Gesellschaft ... und mein eigenstes Geschäft gehet, wie es scheint, mir jetzt auch leichter und reiner von Herzen“.⁴⁾ Auch in den späteren Briefen an Landauer (Februar / März 1801) dankte er diesem „edlen treuen Freund“⁵⁾ für solch „eine rechte Ruhe“⁶⁾ beim „Zusammenseyn in Stuttgart“.⁷⁾ Im Anfang von „Brod und Wein“ spiegelt sich diese „Zufriedenheit und Ruhe“ im verinnerlichenden Grundton in vollem Akkord mit dem „wohlzufriedenen“ (V. 5) Wesenszug des bürgerlichen „sinnigen Hauptes“ (V. 4).

„... Zufriedenheit und Ruhe, die ich lang entbehrte“ — so lautet der Brief vom Juli 1800. Diese Entbehrung stammt aus der bitteren Trennung von der Geliebten, Susette Gontard (1769–1802), die sich durch Hölderlins Dichtkunst in die ideale Gestalt verwandelte: „Diotima“ (z.B. in „Hyperion“ 1797/99). Allerdings fand der Dichter „Ein seeliges Eins in diesem Wesen“⁸⁾, um zu sagen: „Mir geht es so gut, wie möglich. Ich lebe sorgenlos, und so leben ja die seeligen Götter“.⁹⁾ Eben dieser „lebendigen Ruhe“¹⁰⁾ der offenen Heiterkeit entspricht der Grundzug des „himmlischen Festes“ (V. 102)¹¹⁾ des „seeligen Griechenlandes“ (V. 55)¹²⁾ in „Brod und Wein“: „Vater Aether! ... Vater! heiter! ...“ (V. 65/69).¹³⁾ So freundlich wie Susette = Diotima konnte auch Landauer mit dem „Dichter in dürftiger Zeit“¹⁴⁾ umgehen, der seinem Freund Neuffer folgendes gestehen mußte:

4) Br. 210: StA 6. 398.

5) Br. 230: StA 6. 417.

6) Br. 229: StA 6. 415.

7) Br. 229: StA 6. 416. Im Gedicht „An Landauer“, das Hölderlin dem Freund zum 31. Geburtstag (11. Dez. 1800) widmete, lauten die Verse (V. 5f.): „Und seelig, wer im eignen Hauße Frieden, / Wie du, und Lieb' und Fülle sieht und Ruh“ (StA 2. 114).

8) Br. 123 vom 10. Juni 1796 an Neuffer: StA 6. 213.

9) Br. 118 vom März 1796 an Neuffer: StA 6. 205.

10) Br. 172 vom 1. Jan. 1799 an den Bruder: StA 6. 305.

11) StA 2. 93.

12) StA 2. 91.

13) StA 2. 92.

14) „Brod und Wein“ V. 122: StA 2. 94.

LANDAUER — „ein sinniges Haupt“ in Hölderlins „Brod und Wein“

KATSUMI TAKAHASHI

(1) „DENKER UND GESCHÄFTSMANN“

Im gedankenlyrischen Anfang von „Brod und Wein“ erscheint das „sinnige Haupt“ (V. 4) im abendlich dämmernden Innenraum der ringsum ruhenden Stadt:

Rings um ruhet die Stadt; still wird die erleuchtete Gasse,
Und, mit Fakeln geschmückt, rauschen die Wagen hinweg.
Satt gehn heim von Freuden des Tags zu ruhen die Menschen,
Und Gewinn und Verlust wäget ein sinniges Haupt
Wohlfrieden zu Haus; leer steht von Trauben und Blumen, 5
Und von Werken der Hand ruht der geschäftige Markt.¹⁾

Die verinnerlichende Richtung des Zur-Ruhe-gehns (V. 1/3/6) prägt den Grundton des anfänglichen Stadtbildes aus. Diesem Grundton entsprechend ruht auch das „sinnige Haupt / Wohlfrieden zu Haus“ (V. 4–5).

Mit der Frage, ob das „sinnige Haupt“ ein „gescheiter Kaufmann“²⁾ oder ein „besonnener Hausvater“ ist, habe ich mich schon in meiner Arbeit: „Das Stadtbild im Anfang von „Brod und Wein““³⁾ auseinandergesetzt. Dem verinnerlichenden Grundton des gedankenlyrischen Stadtbildes kann eher die „besonnene“ Erwägung zum denkerischen Besinnen entsprechen als die „gescheite“ Bereitschaft zur Berechnung der Einnahmen und Ausgaben, zumal wenn hinter dem „sinnigen Haupt“ der Freund Hölderlins, Tuchhändler Christian Landauer (1769–1845) in Stuttgart, hervortritt, bei

1) Hölderlin, Friedrich: Sämtliche Werke. 1946–77. Stuttgarter Ausgabe: StA 2. 90.

2) Im zweiten Band (1967) der Hölderlin-Übertragung ins Japanische (S. 109) lautet es: „Nukarinonai Shonin“ (Tomio Tezuka).

3) Forschungsberichte der Universität Kochi. Vol. 32. Geisteswissenschaften. März 1984. S. 38f. Den Zusammenhang legte ich auch metrisch aus: Da das vierte Versende keine Kommata hat, kann sich der Anfang des fünften Verses fast ohne Pause mit ihm verbinden. Also lege ich mehr Gewicht auf die vom Stabreim [H] zusammengebundene Wortfügung: „... Haupt / Wohlfrieden zu Haus“ (V. 4f.) als auf die logische Konstruktion des ganzen vierten Verses: „Und Gewinn und Verlust wäget ein sinniges Haupt“.

『パンとぶどう酒』第一節「聖なる夜」その五

——林苑と盟約——

高橋 克己

人文学部独文研究室

内容梗概

(一) 序論	二(156)頁—	五(159)頁
(二) 宥和の旋律	六(160)頁—	一五(169)頁
(三) 燈火と松明	一六(170)頁—	二八(182)頁
(四) 思慮深い家長(改稿)	二九(43)頁—	四三(57)頁
(五) 黄昏から聖夜へ		
(1) 離在	四四(15)頁—	五〇(21)頁
(2) 噴泉	五〇(21)頁—	五六(27)頁
(3) 晩鐘と時禱	五七(2)頁—	六三(8)頁
(4) 林苑と盟約	〔第36卷〕	
	〔第37卷〕	
	〔第38卷その二〕	
本論要旨(約一六〇〇字)		
(a) 「息吹き」	六五(93)頁—	六四(92)頁
(b) 「林苑」と「ねたむ神」	六五(93)頁—	六七(95)頁
(c) 根源より始源へ	六七(95)頁—	六八(96)頁
(d) 「魂の目」と「魂の歌声」	六八(96)頁—	六九(97)頁
(e) 「息吹く檻」	六九(97)頁—	七一(99)頁
(f) 「樹齡千年の檻」	七一(99)頁—	七二(100)頁

(g) 「牧歌風現実」と「人倫の偉容」	七二(100)頁—	七四(102)頁
(h) 「空無を孕んだ知性」	七四(102)頁—	七五(103)頁
(i) 静聴する理性	七五(103)頁—	七六(104)頁
(j) 「浅薄な詩人たち」	七六(104)頁—	七七(105)頁
(k) 「林苑同盟」	七七(105)頁—	七八(106)頁
(l) 「盟約」	七八(106)頁—	八二(109)頁
(m) 「神聖なる野蛮人」	八二(109)頁—	八三(111)頁
(n) 「優美と尊厳」	八三(111)頁—	八六(114)頁
(o) 「音楽的なもの」	八六(114)頁—	八九(117)頁
(p) 「理想化技法」	八九(117)頁—	九二(120)頁
(q) 「保守と革命の盟約」	九二(120)頁—	九五(123)頁
和文註解	(124)頁—	(143)頁
欧文註解 (Quellenachweis)	(144)頁—	(203)頁
Zusammenfassung/Sommaire/Abstract	(204)頁—	(210)頁
Inhalt/Table des matières/Contents	(211)頁—	(214)頁
(5) エレウシース		
(a) 「悲愴かつ壮麗」		
(b) 「神の国」		
(c) 「月夜」		
(d) 「星辰」		
(e) 「理想と人生」		
(f) 「聖夜」		
(g) 「探求」と「吟味」		
(h) 「直観」と「探求」		
(i) 「浪漫化」		
(j) 「人倫」		
(六) 結 論——啓蒙期より十九世紀へ		
(1) (8)		

後日刊行予定

『パンとぶどう酒』第一節「聖なる夜」

「五」黄昏から聖夜へ

(4) 林苑と盟約

- | | |
|---------------------|----------------|
| (a) 「息吹き」 | (j) 「浅薄な詩人たち」 |
| (b) 「林苑」と「ねたむ神」 | (k) 「林苑同盟」 |
| (c) 根源より始源へ | (l) 「盟約」 |
| (d) 「魂の目」と「魂の歌声」 | (m) 「神聖なる野蛮人」 |
| (e) 「息吹く檻」 | (n) 「優美と尊厳」 |
| (f) 「樹齢千年の檻」 | (o) 「音楽的なもの」 |
| (g) 「牧歌風現実」と「人倫の偉容」 | (p) 「理想化技法」 |
| (h) 「空無を孕んだ知性」 | (q) 「保守と革命の盟約」 |
| (i) 静聴する理性 | |

本論要旨

『パンとぶどう酒』第十三句の詩歌象徴に關して在来の註解や研究においては、主に「息吹き」と「揺り動かす」が詩人自身の用語や語法に係わる修辭上の脈絡でのみ話題とされた嫌いがある。ところが少くとも修辭上に限るとしても、第十三句で語氣は句末で最高潮を迎えると読み取れ、それ故に「息吹き」以上に「林苑」こそ律動において浮き彫りにされる。そこで本論としては、まず「パンとぶどう酒」の宗教内容に相応しい始源の神人応答の場として、『旧約聖書』の「創世記」に現われるアブラハム・ハームの「林苑(エーローネ) マムレー」を考え併せる。すると更に同じ『旧約聖書』の「出エジプト記」でモーセに向かい、異教の「林苑を根絶せよ」と命じた「ねたむ神」も想い浮かばざるを得ず、『旧約』の「盟約」がギリシアにせよゲルマニアにせよ、古代神話の神々を偶像として破壊した史実を本論は重視することになるのである。

他方ひとたび「根絶」された「林苑」の「檻の樹頭」は、『オシアン』(一七六〇年)など北歐神話世界を新たに目覚めさせる十八世紀啓蒙の「息吹き」により甦り、『パンとぶどう酒』第十三句の文字通り、この「息吹きが林苑の(檻の)樹頭を揺り動かす」ことになる。ドイツ抒情詩史上この様な詩想の先駆者は誰より

クロプシュトックであり、殊にその北欧吟唱歌『ドイツの祖トウイスコン』(一七六四年)において、「耳をそばだて」て静聴する理性が注目される。かくして理論理性の合理ならぬ「魂の歌声」が「ドイツの歌」として此所から響き始め、この様な「音楽の精髄」から「ドイツ神話の復活」が望まれる。すると当の脈絡から、かつて精神史の過去において「人間の聴きとることを観照に変え」た「アレクサンドレイア風明朗性」は砕かれ、「永遠に清澄にして明鏡の如き」「至福なるギリシア」がドイツ「音楽の精髄」から形造られてゆくのである。

この古典ギリシアの明鏡を指す『パンとぶどう酒』の詩想展開において、「林苑の(檻の)樹頭」は古代オリュムピアの「神苑」とか、北欧ゆかりの「トル雷神ドーナルの檻」など、昔日の神話世界の根源から厳肅に擲み直され、目下「牧歌風現実を気安く好む趣向」に適う隣国ブルボン王朝風の単なる「林苑」に對峙する。これは思潮史において外来のロココ趣味を見限り、新たな疾風怒濤の啓蒙と革命の時代を招来した「息吹き」に呼応し、本論においては此所で一七七二年に結成されたゲッティンゲン林苑詩人同盟が話題とされることになる。

但し「ドイツ神話の復活」を根源から成し遂げんとするこの様な刷新の動きが、もし直向に古典ギリシアの明鏡へと心魂を投機せず、「一重に疾風怒濤なす衝動に駆られたままならば、「ねたむ神」と同様に「神聖なる野蛮人」と呼ばれざるを得なくなる。そこで「新たな盟約」は「気高くする生き生きとした感情」を単に「靈感のみ」として「あたかも鉄砲玉のように」は発動せず、十九世紀ドイツ古典交響曲の雄渾な脈動に通ずる「強力な浄化された意志」が「生き生きとした全き形成」をなすドイツならではの思想詩(Gedankenlyrik)を円熟せんとするのである。

ところでシラーやヘルダーリンのドイツ思想詩は、ゲーテの体験詩や機会詩と異なり、敢て「個々の状況を永遠化すること」を根本から諦観し、むしろ「極めて高貴で威力ある表現様式における情操の全体」を言わば「音楽的なもの」として表現するのであるが、同時に意識内の「切開と新たな縫合」を相互對話の弁証力が推進し、一度は「分離された魂の諸力を再び協和一致へ」ともたらし「唯一の真理の盟約の中へと回帰する」ことを主眼としている。故に「古典ギリシアとキリスト教西欧」との間に厳然と横たわる魂の亀裂を深く自覚して始めて、「至福なるギリシア」の彼方にキリスト像を理念追求する「理想化技法」は成就され得るのである。

(4) 林苑と盟約

(a) 「息吹き」

『パンとぶどう酒』冒頭の都市像は、第十三句において、新たな転調を迎え、石造にて築き上げられた西欧都市の内部(市壁内)空間へと、何処ともなき彼方から「或る息吹き(ein Wehn)が到来」する。

二三 Jetzt auch kommet ein Wehn und regt die Gipfel des Hains auf,

二三 今や又ある息吹きが到来し、林苑の樹頭を揺り動かす。

(『パンとぶどう酒』第一節、第十三句)

「林苑の樹頭を揺り動かす」「息吹き」は、見たり触れたりされるものではなく、静聴する心に響き、内省する魂に聞こえる。「靈氣(ガイスト、Wehmag)」ルーアハ(「W」)に他ならない。

この「息吹き(Wehn)」(第十三句)に關しシュミット著、ヘルダーリンのエレギー『パンとぶどう酒』(一九六八年)では、「一応これを『プネウマの意』と解し、長篇哲学小説『ヒューペリオン』(第一卷(一七九七年)第十三書簡(八八頁)における「靈の息吹き(das geistige Wehen)」そして『エレゲイオン』(一七九九年)第一〇〇句の「息吹く… 神氣(Wehet … göttlicher Odem)」とともに、更に自由韻律讃歌『ライン河』(一八〇一年)第十三節に云う「木暗き樹林を(die finsternen Bäume)／靈氣が包みさやぐ(Der Geist umsäuselt)」(第一八九句—第一九〇句)の三例が説明のため引用されており、例証はこれで終っている。

引き続きシュミット註解は、第十三句後半の分離動詞「揺り動かす(regt … auf)」の語勢を、文字通り「上へ(auf)」と読み取る旨を述べ、以上の語法の修辭上の問題に終始して、残念ながら、詩想の内幕

へと立ち入った論究を残していない。しかしこれでは木を見て森を見ずの印象を免れ難く、本論としては以下この物足りなさを少しでも埋めるべく努力を続けてみたいと思うのである。

まず詩句そのものの語氣に注目するならば、印象深く残るのは、第十三句中央部での盛り上がり「息吹き(Wehn)」より以上に、その六歩格(ヘクサメロン)詩脚の終結を締め括る「林苑を(天上へと)動かす(Hains auf)」の部分と考えられる。

Jetzt auch kommet ein Wehn und regt die Gipfel des Hains auf,

— (— — —) — (— — —) — (— — —) — (— — —) —

確かに「息吹き(Wehn)」の直後は韻律上で中間休止(＝)となり、第一の高潮はこの「息吹き」に現われる。だがその後の第二の盛り上がり「林苑を動かす(Hains auf)」の強強格(スポンディオス)にこそ、当の第十三句の最高潮は見い出され、「息吹き」以上に「林苑(Hain)」こそ浮き彫りにされる名辞と考えられるのである。

とは言うものの勿論「息吹き」が「靈氣」として詩想の基調をなしており、この高揚する「息吹き」の裏付けを得てこそ、始めて「林苑」の本質が顕わとなる。この事は詩句そのものが物語る通りである。

… 息吹きが、して揺り動かす林苑の樹頭を天上へと。

「息吹き」と「林苑」は別かち難く結びついており、此所では「息吹きが揺り動かす林苑」が探求されなくてはならない。『パンとぶどう酒』の場合に、まず『聖書』に目を遣るのも無駄ではなからう。

(b) 「林苑」と「ねたむ神」

『旧約聖書』冒頭の「創世記」には次のように記されている。

して一行がカナアンの地に来ると、アブラームは過りシケムと云う所、モー

レの林苑^{ハイム}へと赴いた。…(第十二章、第六節)。…してヘブロンにあるマムレーの林苑に住み、そこに主(なる神)のため祭壇を築いた。(第十三章、第十八節)。…その日に主(なる神)はアブラハムと盟約を結んだ。…(第十五章、第十八節)。…「して我は、わが盟約を我と汝との間に結ばう。…(第十七章、第二節)。…「見よ、我在りて、わが盟約を汝と有する。…(第十七章、第四節)。…「故に、もはや汝はアブラハムと称せず、アブラハムが汝の名となるのだ。…(第十七章、第五節)。…して主(なる神)はマムレーの林苑で、アブラハムに現われた。…(第十八章、第一節)。

始源的な宗教体験の場として此所では「林苑(Hayn)」が挙げられており、それに関連して神との「盟約(Bund)」が物語られている。

アブラハムとの「盟約」は、後にモーセと神との「盟約」として異常な最高潮を迎える。すなわち「聖なる民(ein heiliges Volk)」として選んだユダヤ人民の族長モーセに向かい、「ねたむ神」は『出エジプト記』でこう語る。

「見よ、われ盟約を結ばん、汝の民すべてを前にして。…(第三章、第一〇節)。…用心せよ、汝の赴く土地の住民と盟約を結ばぬように。…(第三章、第二二節)。…むしろその者たちの祭壇を倒し、その者たちの偶像を破壊し、その者たちの林苑を根絶せよ。(第三章、第二三節)。すなわち汝は他の神を崇拜してはならぬ。なぜなら(汝の)主(なる神である我こそ)は、ねたむ神(ein eigner Gott)である故に、ねたむ者(ein Eigner)と呼ばれるからである。(第三章、第一四節)。…これらの言葉を書き記せ。なぜなら、これらの言葉に拠り、我は汝およびイスラエルと盟約を結んだからである。」(第三章、第二七節)。…してモーセは石板の上に、かくの如き盟約を十誡として書き記す。(第三章、第二八節)。今やモーセはシナイ山から下った時、証の石板二枚を手にしていた。…(第三章、第二九節)。

目下ドイツの詩人ヘルダーリンが『パンとぶどう酒』第十三句で歌う、

北欧ゲルマニアの「林苑」も、この「ねたむ神」の破壊から免かれたわけではなかった。

わが国の出雲大社や伊勢神宮に見られるように「林苑」は、北欧神話世界の没落以前には「神苑」であった。ところが、この聖所が中近東由来のキリスト教により偶像として破壊され根絶された模様である。従って、アブラハム物語(註(9))で確かめられるような、神の「息吹きが揺り動かす林苑」は、西欧キリスト教ラテン中世の誕生とともに、北欧ゲルマニア風土からは姿を消したと考えられる。故に、このラテン中世の解体とともに、新たな神の「息吹きが揺り動かす林苑」が徐々に目覚めるのである。

他方『パンとぶどう酒』の詩想の核心なす「至福なるギリシア」(第四節、第五五句)においても、「ねたむ神」(註(11))の偶像破壊と神苑根絶の暴風雨は無慈悲に吹き荒れた。例えば伊勢神宮を想わせる古代オリュピアの奥深い自然の林苑へと、実際に今なお誰一人ギリシア人は詣でない。この様に参拝が無ければ神楽も舞われず、ただ考古学資料の陳列館が立派に建立され、古典古代を固定化して記述する死せる意識の墓所が顎を開くことになる。

一〇〇 Thebe welkt und Athen; rauschen die Waffen nicht mehr
In Olympia, nicht die goldenen Wagen des Kampfspiels,

Warum freuet sich denn nicht der geweihte Tanz?

一〇〇 テーバイは凋落し、またアテナイも。轟然と武具甲冑がもはや響かず、

オリュピアでは戦闘競技の黄金馬車も、もはや疾駆しないのか。

……

何故に飲ばぬのであろうか、聖化された神楽は?

(『パンとぶどう酒』第六節、第一〇〇句—第一〇四句)

古典古代の「神苑」^(ハイン)との絆を求め、この様に悲壮にヘルダーリンは歌い上げる。ところが自然風土に根ざした神々の「林苑」^(ハイ)を、今日の正教会の下でのギリシアに見い出すのは難い。すなわち北歐から南歐にわたる異教を撲滅せんとした中世キリスト教の専制は、これ程までに甚だしかったのである。

(c) 根源より始源へ

文芸復興^(ルネサンス)と宗教改革こそ、この画一化された「ねたむ神」の専制を砕く精神運動であり、当の『パンとぶどう酒』はこの両者を前提としつつ、更に啓蒙と革命の時代十八世紀を背景としている。文芸復興で開かれた眼差が究極には「至福なるギリシア」(註(13))へと既成キリスト者の西欧意識を突き破ってゆくように、宗教改革の精神は『聖書』の始源的宗教体験が生まれた「林苑」^(ハイ)(エーローネー) マムレー^(マムレー)「⁽¹⁴⁾」へと向かうことになる。

始源へ至らんとする心は蓋し、根源から沸き出でた。後世で話題となる作の真偽をよそに『オシアン』(一七六五年)は、英雄叙事詩の古典『イーリアス』にさへ比肩する画期的な作品として登場し、北歐神話世界へと開かれた窓となった⁽¹⁵⁾。そして『若きヴェルテルの悩み』(一七七四年)でゲーテが引用した箇所が物語るように、それは「林苑の樹頭を天上へと揺り動かす息吹き」の感じられる聴覚の場となった。

Heult, Stürme, im Gipfel der Eichen!

吠えよ、嵐よ、樅の樹頭で!

(『若きヴェルテルの悩み』終結部)

更に『救世主(Der Messias)』(一七四八年—一七三年)を高唱したクロプシュトックが、この筋の抒情詩「北歐吟唱歌(Bardengesang)」に新

九五 『パンとぶどう酒』第一節「聖なる夜」その五 (高橋)

風を巻き起す。例えば「樅が息吹く(die Eiche weht)」⁽¹⁶⁾「吟唱歌人の林苑(Hain der Barden)」⁽¹⁷⁾での「ドイツの祖(トゥイスコン)」⁽¹⁸⁾について、こう歌われる。

九 …… Und Thuiscon vernimmt, und schwebt

一〇 In wehendem Geräusche des begrüßenden Hains, und horcht;

九

一〇 挨拶する林苑の息吹くさわめきに(揺れ)、して耳をそばだてる。

(『トゥイスコン』一七六四年、第三節、第九句—第一〇句)

「耳をそばだて(horchen)」聴き取り(vernehmen)、「そして知解するのは、啓蒙期の単なる理論理性(Ratio)に留まらぬ「ドイツの祖トゥイスコン」の言わば純粹理性(Vernunft)に他ならない。

Hijōs biō ek

静聴をお願いする、私は、

(『エッダ』「巫女の予言」冒頭)

当の北歐神話世界観の基底なす始源の歌声『エッダ』冒頭でも、この様に「巫女の予言」が口を開くとともに、「耳をそばだて」「静聴」する「理性」が目覚めるのである。

理の本性は理路整然とした筋道を辿るより先に、まず予感(Ahnung)され聴き取られる。『パンとぶどう酒』第十二句で「今や又ある息吹きが到来し、林苑の樹頭を天上へと揺り動かす(Jetzt auch kommt ein Wehn und regt die Gipfel des Hains auf)」(註(一))のもそのためであり、此所から敢て「ドイツの歌」と言ひ得る「魂の歌声(Seelengesang)」が響き始めるのである。

一五

dann sitzt im tiefen Schatten,
Wenn über dem Haupt die Ulme säuselt,

Am kühnlichen Bache der deutsche Dichter
Und singt, wenn er des heiligen nüchternen Wassers
Genug getrunken, fernhin lauschend in die Stille,
Den Seelengesang.

二〇 Den Seelengesang.
して緑濃き(林苑の)木蔭に深く坐し、
また頭の上で微風に榦の木立ちが戦ぐと、
涼しく息吹く小川に佇すみドイツの詩人は
かつ歌うのだ、もし明鏡の水面から
しかと飲みほすと、遠い彼方へと静聴する耳をそばだて、
魂の歌声を(奏するのだ)。
(『ドイツの歌(Deutscher Gesang)』第一五句—第二〇句)

断片草稿であるが、この『ドイツの歌』(一八〇一年)において、ヘルダーリンは自らを北欧ゲルマニア神話世界の「林苑」の「息吹き」を伝える「ドイツの詩人」(第一七句)として明確に意識しており、更にこの自覚に相応しい詩歌象徴の調べで、この「自己」認識が空言に終わらなかったことを確認しているのである。

(d) 「魂の目」と「魂の歌声」

以上の如く北欧神話世界観の象徴として「息吹く林苑」が浮かび上がり、何時とはなしに始源の宗教体験が誕生したアブラーハムの「林苑(エーローネー) マムレー」(註(15))と呼応し合うと思われる。その際に両者に木蓋し合うのが造形よりは、むしろ音響である。すなわち世界の応答関係の基盤は眼でなく耳に存する。だが『旧約聖書』ヘブライ語原典が『七十人訳ギリシア語聖書セプトゥア・ギンター』へと希訳された古代文化の中心地アレクサンドレイアにおいて、「耳が眼に、更に魂の眼への変様」が起きた模様である。

ギリシア的な要素を充分もっているプイローンの釈義においては、聖書原典

で人間の耳が神の明らかな語りかけに出会うという場合、彼はただちにこの神の語りかけを除き去り、人間の聴きとることを観照に変え、しかも観照は「魂の眼(Auge der Seele)」という風にかえつing。
(ボーマン『ギリシア人の思惟との比較によるヘブライ人の思惟』第五部、その四「両思惟方法の形式的特質」)

イエス(前四年頃—三〇年)の時代に、国際都市アレクサンドレイアで活躍したユダヤ人学者プイロン(前—三年頃—五四年頃)において、「静聴」する魂の耳が、視覚造形見事な古代ギリシア風の観照(Seelaria)を事とする「魂の眼(τὸ τῆς ψυχῆς ὄμμα)」に置き換えられ、「息吹く林苑」における始源の宗教体験は理論(Theoria)化され合理(Ratio)化されたと見えよう。

興味深いことに『音楽の精髓(Geist der Musik)』からの悲劇の誕生(一八七二年)においてニーチェは、この様な理論化・合理化の波を「悲劇の死! (die Tragödie ist tot!)」(第十一章)に、すなわち古典ギリシア文化そのものの没落に結びつけ、後期ギリシア文化衰退期ヘレニズムに固有の「理論(テオリアー) 的人間の明朗性」(第十七章)を「アレクサンドレイア風明朗性」(第十九章)と命名した。そうしておいてニーチェはこの「明朗性」を打破すべき「唯一の純粹で清澄なる浄化する燃える精神」として「ドイツ音楽、殊にバッハからベートーヴェン、ベートーヴェンからヴァーグナーへと至る日輪の雄歩の如き姿」(第十九章)を念頭に置き、この「音楽の精髓」に「酒神ディオニュソスの精神の新たな目覚めと、悲劇の復活」(第二〇章)を見る。更にニーチェは、この様な「壮麗で内面豊かな太古の力」の「深みから、ドイツの宗教改革が生い育ち、その合唱歌においてドイツ音楽の未来の調べが始めて響き、かく深く、雄々しく、魂に溢れ、かく滔々と十全に優しく、このルターの合唱歌が轟いた」とし、正に此所に「ドイツ神話の復活」(第二三章)を確かめようとするのである。

話題の『パンとぶどう酒』も、古代ゲルマニア神話世界観の基底から溢れる「ドイツ神話の復活」(註(32))および「酒神ディオニウスの精神の新たな目覚めと、悲劇の復活」(註(30))と無縁ではない。後者は第四節の第五句で「至福なるギリシア!」(註(13))が召喚されるや、引き続き讃歌燃焼の最高潮で「悲劇の誕生」に君臨する「偉大な運命が轟く」(第六二句)箇所に見い出される。

六一 Wo, wo leuchten sie denn, die fernhinführenden Sprüche?

六二 Delphi schlummet und wo tönet das große Geschick?

六三 Wo ist das schnelle? wo bricht, allgegenwärtigen Glüts voll

六四 Donnernd aus heiterer Luft über die Augen herein?

六一 何処に、一体何処に輝いているのか、彼方をまで射抜く彼の神託は?

六二 (託宣で名高き) デルポイは微睡んでいる。して何処に轟くのか、かの偉大なる運命(モイラ)は?

六三 何処に彼の神速の運命は? 何処で碎けるのか、普通の幸に満ちて

六四 雷鳴とともに清澄なる大気から眼界を過り、運命(モイラ)が突入して来るのは何処か?

(『パンとぶどう酒』第四節、第六一句―第六四句)

もし絵画とか彫刻などの視覚芸術で以て、この「偉大なる運命が轟く」「至福なるギリシア」を表現するならば、^{しやうめい}声明にも似た音声で呻吟されたドイツ「音楽の精神からの悲劇の誕生」(註(25))の「息吹き」が色褪せ、一転して「悲劇の死!」(註(26))へと落ちこむことにならざるを得ぬであろう。

右の讃歌燃焼(註(34))に最高潮の盛り上がりなす「ドイツ神話の復活」(註(33))を証する「魂の歌声」(註(23))として、『パンとぶどう酒』は「ドイツの歌」(註(23))となる。蓋しこれは一重に古代ゲルマニア風の根源より「息吹き」が立ち昇るのみならず、同時に古典ギリシアの明鏡へと自己を空しく放下し、この「空無を孕む内面の飛翔」

の果において、新たな「神話の神」⁽³⁶⁾としてキリスト像を問い探し求める詩想展開でもある。故に自他の応答する敬虔なる始源の宗教体験が生まれたアブラーハムの「林苑(エーローネー)マムレー」(註(15))に木霊して、北欧ゲルマニア神話世界に「息吹く林苑」⁽³⁷⁾が『パンとぶどう酒』第十三句で思い併されるのである。

すなわち此所は「ドイツ神話の復活」(註(33))にのみ帰着するのではなく、内省する魂が徐々に「古典ギリシア精神と空無の思想」(Griechentum und Pessimismus)⁽³⁸⁾へと心を開く風土ゲルマニアでもある。仮に当の第十三句のみを取り出したのなら、かく空無へと心を開く祈り、(Religio)の動静は察し難いであろう。だが『パンとぶどう酒』を冒頭から読みすすんで第十三句へと至るならば、「滔々と湧く噴泉(Brunnen/Immerquellend)」(第九句―第一〇句)の音にさえ耳を澄ます「離在(Abschiedenheit)」⁽³⁹⁾の彼方へと放下した「孤独」⁽⁴⁰⁾(第八句)を大地として、その「神苑の樹頭を息吹きが天上へと揺り動かす」(第十三句)ことが解かるのである。

(e) 「息吹く檜」

しかれども現実の「神苑」⁽⁴¹⁾は、タキトウス(五五年頃―一二〇年頃)が『ゲルマニア』第九章で、「ゲルマン人たちは神苑を神々の聖域としている(nemora consecrant)」と述べている所の「神苑」へと自然に繋がる。次にこの「神苑」の樹木について考えを進めてみよう。例えば木に關して『パンとぶどう酒』第三節には「唐檜(die Fichten)」⁽⁴²⁾が歌われ、更に第九節で「常緑の唐檜の青葉(Glas Laub der immergrünen Fichte)」と詳述されているのであるが、目下の『パンとぶどう酒』冒頭の背景なす都市シュトゥットガルトに關しては、ヘルダーリンの別の詩歌で「林苑」⁽⁴³⁾がこう歌われている。

七 und die Stadt und der Hain ist
八 Rings von zufriedenen Kindern des Himmels erfüllt.

一五 und der Fichte
一六 Schatten;

二七
二八 Alle Sitte, jetzt komm' und feire des Herbstes

三四 Rund um den Eichbaum, wir sitzen und singen um ihn,
三五 Diß der Pokale Klang, und darum zwinget die wilden
三六 Seelen der streitenden Männer zusammen der Chor.

七七 Herrlich steht sie und hält den Rebensstab und die Tanne
七八 Hoch in die seeligen purpurnen Wolken empor.

七
八 囲りを満ち足りた天上の子らに充たされ、
.....

一五
一六 蔭
.....

二七
二八 昔きならわしを、
.....

三三 榿の木の周囲に、我らは坐り、そして樹木を囲み歌う。
三五 これが玉杯の響き、してそれ故に強いて、あの勇猛な(魂)、
三六 苦悶する男子の魂を一つに結ぶのだ、合唱の歌声が。

七七 壮麗に立つ都市(シュトゥットガルト)は、して葡萄の支え棒と樅とを
七八 高く至福なる深紅の雲間へと聳てる。
.....

(『シュトゥットガルト』第一節 第五節)

ほぼ此所に主な樹木が出そろっている。この「唐櫨(Fichte)」(第十五句)と「榿の木(Eichbaum)」(第三十四句)と「樅(Tanne)」(第七十七句)の中で、当面の『パンとぶどう酒』第十三句で「息吹く林苑」に関連させるに興味深いものは、恐らく「囲み歌う榿の木」(第三十四句)であろう。実際『オシアン』で嵐が吠えたのも「榿の樹頭(Gipfel der Eichen)」(註(17))であったし、『トウイスコン』でクロプシュトゥックが、「ドイツの祖は、それを聴き取り」(第九句)「耳をそばだてる」(第一〇句)と歌った(註(20))ところの「吟唱歌人(バルデ)らの林苑(ハイン)」(第三句、註(19))においても、「榿が息吹く(die Eiche weht)」(第八句、註(18))とあったからである。

更に留意すべきは、この様な北欧神話の根源から「息吹く榿」が、同時に始源の宗教体験の場となったアブラーハムの「林苑(エーローネ)マムレー」(註(15))の木とも考えられる点である。例えば、この「林苑」は古代ギリシア語訳『七十人訳聖書セプトゥアーギンター』では、単数でただ「樹木(δένδρον)」と訳され、この単語はランゲンシャイト刊メンゲ編ギュートリング『希独大辞典』によると「森林の樹木、樹木(Baum)」、殊に榿(Eiche)、また唐櫨(Fichte)と説明され、「榿(Eiche)」のみが太文字なのであるから、「林苑」の「樹木」は「榿」と考えて良いであろう。また当の「林苑(エーローネ)」(註(15))と同根(「エーローネ」の「樹木(アローネ)」が、『創世記』第三章で「嘆きの榿(アローネ・バークト)」(第八節)とあることから、「林苑」と「榿」との結び付きの深さが伺えるのである。

「榿」とは、ところでこの場合、洋榿であり、「粗榿」とか「赤榿」な

どわが国の「榿」と同一視はできないけれども、また通例の訳語「かしわ(榿、榿、柏)」と同じでもない。この点を多少考えてみよう。そもそも「榿」は「堅木」の文字通り硬質な材木となる広葉樹であり、比較的軟質な針葉樹と異なる。先の例「シットウツガルト」(註(45))に見られる「唐櫟」(第十五句)と「榿」(第七七句)とは共に常緑針葉樹であり、この点で「榿」と質を違える。言葉の象徴性が高いゲーテ「ファウスト」第二部では、この「堅木」の「榿」について「聳える逞しき榿の広葉に巻かれ(Von hoher Eichenkraft umlaubt)」(第七八二二句)と見事に言い中でられている。詩人たちが「周囲に坐り、囲み歌う」(註(45))、第三四句)のは故に「唐櫟」や「榿」ならぬ「聳える逞しき榿」であり、この硬質の「榿の力(Eichenkraft)」に支えられ、「あの勇猛な(魂)、苦闘する男子の魂を、合唱の歌声が一つに結ぶ」(註(45)、第三五句―第三六句)のである。

(f) 「樹齡千年の榿」

硬質な「堅木」の「榿」は当然、年輪の間隔が狭い。すなわち太く成育するのに長い樹齡を要する。従ってヘルダーリンは『荒野にて記す(Auf einer Haide geschrieben)』第十一句⁽³²⁾や『テックの峰(die Tek)』第二九句⁽³³⁾など「樹齡千年の榿(causendjährige Eichen)」と歌う。このことは詩歌に限らず、例えば当時のカムペ編『ドイツ語辞典(Wörterbuch der Deutschen Sprache)』第一卷(一八〇七年)における「榿(die Eiche)」の項でも、これが「周知の大変有用な樹木で、丈高く、大いに太く、千年以上の高い樹齡(ein hohes mehr als tausendjähriges Alter)に達する」⁽³⁴⁾と説明されている。この様な「樹齡千年」にも及ぶ「堅木」の「榿」の木の周囲に坐り、囲み歌う(註(45))のであり、「パンとぶどう酒」第十三句でも、正に「榿」の「林苑の樹頭を息吹きが揺り動か

す」(註(1))と考えられるのである。

前述の如く、この西欧の「榿」は洋榿であるが、南欧の地中海世界に見られる常緑広葉樹とは異なり、北欧ドイツの「洋榿(Europäische Eiche)」には、わが国の「榿」や「柏」のような落葉広葉樹が多い。従って先に示した通例の訳語「かしわ(榿、榿、柏)」(註(50))の由来も此所にある。但し「かしわ(Quercus dentata)」は西欧に見られない落葉の「榿(Quercus)」で、「所謂(ドイツで)古榿(die sog. alten Eichen)」と呼ばれる「落葉榿(Sommer-Eiche)」は、ゲーテの詩語「逞榿(Eichenkraft)」(註(51))が念頭に置いていると思われる「堅榿(Quercus robur)」である。この学名に云う「ロブール(robur)」とは、「心材(Kernholz)とりわけ榿材(Eichenholz)」を示す具象名詞で、更に抽象化された語義として「強さ(Stärke)」「力(Kraft)」「堅さ(Festigkeit)」の意味を有することになり、要は「堅木」としての「榿」を考えるのが相応しいと思われるのである。

次に「神苑」と結びつく「堅木」の「榿」を民俗学の関連で、古代ゲルマニアの祭祀共同体との係わりで考えてみよう。するとこの脈絡で「名高いのが例えば(北欧の主神オーディンの息子トール雷神)ドーナルの榿で、ガイスマル付近のこの榿は(北欧神話の)祭祀上崇拜の対象であったが、西暦七二五年に(中世キリスト教会権力公認の聖者)ボニファティウス(六七三年頃―七五四年)により切り倒された」と『ドイツ民俗学辞典』の「榿(クエルクス・ロブール)」の項に記されている。そして「民俗学上、榿は自由(Freiheit)と力(Kraft)の象徴であり、幾多のインド・ゲルマニア諸民俗、殊にゲルマニア人たちの下で、榿は最たる崇拜の神木なのである」⁽³⁵⁾から、中世に「ゲルマニアの雷神ドーナルの神木(heiliger Baum)」たる榿⁽³⁶⁾が教会権力により「切り倒された」ことの意味は大きい。すなわち『聖書』の「ねたむ神」(註(11))の猛威により中世に非寛容にも奪われた「ドイツ神話」(註

(33)の「自由と力」が、後に近世の宗教改革および啓蒙と革命の精神とともに十全に展開せんとする地盤がここに在るからである。

この様に「宗教史および文化史上、樫は格別重要であり、就中インド・ゲルマニア諸民族のもと、或いは又わが国日本人の下で神木である。ギリシアの主神ゼウスには、ドードーネーで、樫が神木として捧げられていたし、(ギリシア人たちの樹の妖精)ドリュアスたちの名は「ドリュース(樫)」(註(46))に由来している」と考えられる。但し既に述べたように「ねたむ神」(註(11))が根付かなかったわが国の「神苑」の場合とは異なり、「オリュムピア」(註(14))の神苑にせよ、「雷神ドーナルの神木」(註(61))にせよ、もはや昔日に古代神話世界の没落とともに世界史から一度は消えてしまったものである。

(8) 「牧歌風現実」と「人倫の偉容」

新たな「ギリシア神話」や「ドイツ神話の復活」(註(33))が望まれるのは、正にこの没落ゆえである。しかし他方、西欧十八世紀啓蒙期に「林苑」は、殊に隣国フランス宮廷風ロココ趣味もあいまって、むしろ遊興と行楽の場として登場する。例えば当時の趣味を代表するアナクレオン派の詩人ハーゲドルン(一七〇八年—五四四年)は、「かの木蔭の闇で、ことによると彼に羊飼いの娘が笑いかける、歓楽の住まう林苑の中く(in den lustigewohnen hain)」と誘ふ。この様な「林苑」は言わばバリの「ブローニエ」の林苑(le Bois de Boulogne)に似た「神苑(Bois sacre)」ならぬ単なる「林苑(Bois)」であり、「牧歌風現実を気安く好む趣向」に適う「オペラ文化」の格好の場である。

当十八世紀において「神苑」ならぬ「牧歌風」「林苑」は、アナクレオン派の詩歌象徴とか歌劇(オペラ)の舞台に見い出されるのであるが、引き続き十九世紀にも「林苑」の「牧歌風現実」が消えたわけではない。

Schön umgeben! — Klar Gewässer
Im dichten Haie! Frau, die sich enkleiden,
Die allerliebsten! — Das wird immer besser.

六九〇五 周囲は麗しい! 澄んだ川が(流れ)
こんもりとした林苑を! 女性たちが衣をぬぎ

六九〇五 とても甘美な(女性たちが)! — それがいよいよ素晴らしくなる。⁶⁶

(ゲーテ『ファウスト』第二部、一八三二年)

「ドイツ神話の復活」(註(33))へと繋がる「林苑」の「神苑」としての本質は、この様な「牧歌風現実を気安く好む趣向」(註(64))たる「アレクサンドレイア風明朗性」(註(28))により陰蔽され勝ちである。だが「人間の聴きとることを観照(テオリアー)に変え」(註(24))る「理論(Theoria)的人間の明朗性」(註(27))では「至福なるギリシア」(註(13))へと西欧キリスト者の意識を突き抜けられず、せいぜい「蛮地タウリスからゲーテのイフィゲーニエが海の彼方の故国ギリシアへと向けたあの憧憬の眼差以上には達しなかった」のであり、此所から更に「古典ギリシア精神と空無の思想」(註(38))を旨指すには「樫が息吹く」(註(18))「林苑の樹頭」(註(1))に象徴される北欧ゲルマニア神話世界観の基底が顎を開き、この「ドイツ神話」(註(33))の根源にある「音楽の精髓から悲劇が誕生」(註(25))せねばならない。正に当の「パンとぶどう酒」の詩想展開は、この筋の流れの中にあるのである。

啓蒙十八世紀において、この筋の「ドイツ神話復活」(註(33))への思潮は「疾風怒濤(Sturm und Drang)」と呼ばれ、前述の「牧歌風現実を気安く好む趣向」(註(64))たる隣国フランス宮廷風ロココ趣味と鮮やかな明暗を織り成す。『パンとぶどう酒』の場合は後者の「オペラ文化」(註(65))が、第二句で何時とはなしに詩人の脳裏を「騒然と疾駆し過ぎ去る」と読める。⁶⁶

實際二十才そこそこの若きゲーテが一七七二年にシュトラースブルク大聖堂に驚嘆した時、この「ゴシック式遺跡」こそ他ならぬ「こんもりと広がる崇高な神の木のように天にそそり立つ」(註(152))と想われたのである。

探究的観照につかれた私の目が、たそがれによってやさしくいたわられたことが何度あったことだろう。そんなとき、無数の部分が全体の質量にとけこんで、それが単純巨大な姿となって私の魂の前に立ち、私の力は享受と認識のために歓喜に満ちてひろげられるのであった。

(『ドイツの建築について』註(152))

「観照(Schauen)」を事とする「魂の眼」(註(24))は後退し、ゲルマニアの「文化と気質」に適用「音楽の精髓」(註(25))から「響き渡る晩鐘の音」(第十一句)と「息吹く林苑」(第十三句)が見事に協和し合うと言えよう。

(h) 「空無を孕んだ知性」

かく北欧ゲルマニア神話の基底を礎として、『パンとぶどう酒』の詩想は第四節の第五五句「至福なるギリシア」(註(13))を旨指す。もはや「牧歌風現実を気安く好む趣向」(註(64))に適用ギリシア神話、例えば先の『ファウスト』第二部(註(66))に見られるような淡い明朗な彩りに包まれた桃源郷(Arkadia)は見直されねばならない。単に神話(ミューゼ)の世界に限らず、更に叙知(ロゴス)の世界に関しても「理論(Theoria)的人間の明朗性」(註(27))は破邪され、「古典ギリシア精神と空無の思想」(註(38))へと突き抜けるべく要請が掲げられる。この脈絡で筆頭に上がる古代ギリシア人は恐らく哲人ソークラテースであろう。

もしヘルダーが『人間性形成のための歴史哲学異説』(一七七四年)で述べるように、古代ギリシアでは「万事が青春の歓楽、愛らしさ、遊

び戯れ、そして恋愛! : : ギリシア人が手にしたものは、美しき像、玩具、目の保養以外何物でもなく! : : 若者の夢や娘が喜ぶお伽話!」(ヘブライ民族の『旧約聖書』に見られるような)東方の知恵は神秘の帳を拭い去られ、ギリシアの学校や市場での甘美なお喋りや授業の口論となる」としたならば、「学者(ソピステース)の筆頭で最高の者、あらゆる学者的努力の鏡にして精華たるソークラテース」にこそ「理論(テオリア)的人間の明朗性」(註(27))すなわち彼の「アレクサンドレイア風明朗性」(註(28))が見い出せることになろう。ところが「疾風怒濤」の認識を裏付ける上で見逃せぬ著作家ハーマンの代表作『ソークラテース追憶録』(一七五九年)に見られるソークラテース像は、この様な「明朗性」とは正反対の空無へと開かれた清澄なる性格を有している。

ソークラテースは或る守護霊(Genius)を有しており、 : : それがソークラテースの神であり、 : : その声をソークラテースは信じた。そして、その息吹き(Wind)により、 : : ソークラテースのような人の空無を孕んだ知性(der leere Verstand)は、清浄な処女(聖母マリア)の懐と同じく(神性を宿し)実り豊かとなることができる。(『ソークラテース追憶録』第二章)

実は『パンとぶどう酒』第十三句で歌われているような「或る息吹き(ein Wehn)」(註(73))が、哲人ソークラテースの認識活動の母胎となっているとハーマンは見ている。

更にこの関連では、『パンとぶどう酒』第三節の第四七句に云う「歓呼する狂気」が注目される。

四七 Drum! und spotten des Spotts mag gern frohlockender Wahnsinn,
四八 Wenn er in heiliger Nacht plötzlich die Sänge ertreift.

四七 正にそれ故! 聖なる夜に、歓呼する狂気が不意に襲うと、

四八

狂気の歌人は、世人の嘲りを嘲けり返すに躊躇しないのだ。⁸⁰
(『パンとぶどう酒』第三節、第四七句―第四八句)

第四七句の「狂気」が、老哲ソークラテースが青年パイドロスの物語る「詩歌女神ムーサ達の狂気(マニア)」「プラトーン『パイドロス』二四五A」を踏まえることにより、「イリソス河畔の篠懸(プラタナス)の林苑」に繋がるからである。

少なくとも、至福をもたらす自然の懐から、或いはイリソス河畔の篠懸の林苑(Platanenhain)から帰ってきた神々しい時間には尚のことだ。ぼくはそこでプラトーンの弟子たちと一緒に横たわり、この壮麗な哲人が始源世界の暗い彼方を彷徨するため飛翔するのを見送った。また眩惑を感じながらもこの哲人に従い、幽玄の深みへと霊界の果てまでも僕は赴いた。そこには世界霊が自らの生命を自然の千の血脈へと注ぎこみ、また流出した諸力が測り知れぬ循環を経て戻る場所なのだ。或いは、(死に臨みつつも清澄なる心で、靈魂の不滅を物語る)ソークラテース(の毒)杯に陶然となり、更には『饗宴』でのソークラテースとの友好の集いに酔い、青年たちが感動に満ちて甘美な熱弁で、聖なるダイモーン神エロースに奉仕しているのに耳を傾けた。その際には、ふざけるのアリストパネースが茶化した神話を述べ、そして最後には師の神々しいソークラテース自身が天上の知恵でダイモーン神エロースの本質を青年たちに教えるのである。⁸¹

(一七九三年七月付ノイファー苑ヘルダーリン書簡六〇)

『パイドロス』の舞台である「イリソス河畔の篠懸(プラタナス)の林苑(ハイン)」は、「歓呼する(詩神の)狂気(マニア)」「(註(78)と(79)の「息吹き」により、俗化された「林苑(Bois)」ならぬ聖なる「神苑(Bois sacré)」(註(63)―(64)となる。そしてヘルダーリンの物語るソークラテース像(註(80)も、ハーマンが解した「疾風怒濤」のソークラテース像に通う「(霊の)息吹き」(註(77)にみちた「神々しいソークラテース」として、「天上の知恵でダイモーン神エロースの

本質を青年たちに教える」のである。

(i) 静聴する理性

一見事もなげに「或る息吹きが林苑の樹頭を揺り動かす」(註(73))のであるが、この慎ましくも威厳ある「人倫の偉容」(註(74))を礎として、『パンとぶどう酒』の詩想展開は始源の神人応答の往き交うアラームの「林苑(エーローネー)マムレー」(註(15))に木霊なして、北欧ゲルマニア神話世界の根源から「樫が息吹く」(註(18))「吟唱歌人らの林苑」(註(19))に「静聴する(Vernehmen)」理性(Vernunft)」「(註(21))を目覚めさせ、「至福なるギリシア」(註(13))における「空無を孕んだ知性」(註(77))へと眼差を向ける。此所で鍵となるのは「静聴する理性」であるが、この点でヘルダーリンとの関連で筆頭に挙げるのは、先の『ドイツの祖トウイスコン』(註(20))の歌人クロプシュトックであらう。

例えば前述(註(54))の「樹齡千年の樫の樹々の下を逍遙した(中部ドイツのゲルマニア人)ヘルミノー」(第四九句―第五一句)を「わが祖国の吟唱歌人」(第四七句―第四八句)と呼ぶ「林苑の歌(Haingesang)」(第五四句)において、クロプシュトックは「静聴する理性」の成果を神話上の伝説として次のように歌い上げる。

Die Zwillingbrüder Alzes graben

In Felsen auch das Gesez der heiligen Freundschaft:

九五 Erst des hingehetzten Blickes lange Wahl,

Dann Bund auf ewig!

九五 双生の兄弟アルツェス両神は刻んだのだ
巖の中へと汝らの神聖な友情の立法を。
まず眼差をしかと据え、長く選び、

そして盟約を永遠に!⁽⁸²⁾

(『丘陵と林苑』一七六七年、第九三句―第九六句)

「静聴する理性」(註(21))は、ここで、「眼差をしかと据え、長く選び(hingehetzten Blickes lange Wahl) (第九五句)において、無類の詩歌象徴の調べとなり浮き彫りにされている。

加えて留意されて然かるべきは、この「静聴する理性」の成果としての、「林苑」における「盟約(Bund)」である。実は既に当の「林苑」と「盟約」との結びつきは、『旧約聖書』の「創世記」における主なる神とアブラハムとの間(註(9))に見られたものである。この様な神人応答が此所ではクロプシュトックの筆力により「ドイツ神話の復活」(註(33))を旨指す詩想へと練り上げられ、古代ゲルマニア神話世界の基底から「ドイツの心」(註(71))と「人倫の威容」(註(74))とをしかと結ぶ絆として「神聖な友情の立法」(註(82))が据えられているのである。

(i) 「浅薄な詩人たち」

ところで興味深いことに、クロプシュトックが「神聖な友情の立法」や「静聴する理性」を『丘陵と林苑』(一七六七年)や『ドイツの祖トウイスコン』(一七六四年)など北欧吟唱歌で謳いあげてゆく十八世紀中葉は、他方で「歓楽の住まう林苑の中へ」(註(63))とアナクレオン詩派がフランス宮廷風のロココ趣味を導き入れていた時代であり、実は全体こちらの趨勢の方が強かったようである。例えば一七五五年に刊行された『苦境のドイツ(Das bedrängte Deutschland)』の第八節から第九節にかけて、ウーツ(一七二〇年―九六年)は「苔むした檻(die bemosten Eichen)」(第三四句)の如く質実剛健で「空恐ろしく自由で(furchtbarfrei)」(第三五句)であった「ドイツの祖」(註(20))を

偲んで、当時の「軟弱な習俗(weiche Sitten)」(第三〇句)を嘆いて
いる。

Wir, die uns kranker Wollust weihn,
Geschwächt vom Gifte weicher Sitten,
Wir wollen derer Enkel sein,

Die, rauh, doch furchtbarfrei, für ihre Wälder stritten?

Die Wälder, wo ihr Ruhm noch itzt
Um die bemosten Eichen schwebet,

.....

三〇 我らはと言えば、病める快楽に身を捧げ、
軟弱な習俗の毒で無力化している。

この私達が、かの祖たちの子孫たることを望み得ようか?
かの荒々しく、だが空恐ろしく自由で、自らの森のため戦った祖たちの。

かの森林群、そこでは(ドイツの)祖たちの榮譽が、なお今も
苔むした檻の樹林の囲りに漂よっている。⁽⁸³⁾
.....

(『苦境のドイツ』第二九句―第三四句)

「おお恥辱だ! (O Schande!)」(第七節、第二五句)とウーツが叫ぶのは、外国文化への「卑屈な従属(keige Knechtschaft)」(第七節、第二七句)を根にもつ「ドイツの苦境」ゆえである。

更に謹嚴なカルヴァン主義の血脈をひく詩人ハラー(一七〇八年―七七
年)の場合は一層と激しい語調で、一七七二年三月のゲミンゲン宛書簡
を次のように締め括っている。

これが気難しがり屋の不平とでも言うのでしょうか? もし私の昔今の希望
を、すなわち、かくも夥しい機知、あんなにも樂觀的な空想、この極めて明

朗な画面に燃える色彩が、遍き災いのために振り向けられねば良いがという希望を、ばやきとでも言うのでしょうか？そして陽気で茶目気あり浅薄な詩人たちの礼讃者らが正しいのでしょうか？この連中ときたら自由気儘に人倫を害ね、むしろ欠くべからざる義務意識を圧殺せんと唆し誘惑する詩歌を創作するのみならず、更には迫害の手を伸ばし、なお詩歌に嚴肅な何物かを保持し、かつ詩歌を偉大な使命や精神の高揚へと連れ戻し、有徳でもって世の幸福のために働こうとする人々を迫害しているのですから。

此所でハラーが嘆く時勢の動きを、当面のクロプシュトックの北欧吟唱歌成立の六十年代に探すならば、例えば本論にかかわる「古典ギリシア精神と空無の思想」(註(38))との関連で、ヴィーラント(一七三三年—一八二三年)の韻文作品『滑稽物語(Comische Erzählungen)』(一七六五年)が念頭に浮かぶと思われる。なぜならこれが、後に『ギリシア物語(Griechische Erzählungen)』(一七八四年)と改題されていることから解かるように、次の様な彼の「アレクサンドレイア風明朗性」(註(28))の証左たる「軟弱な習俗」(註(83))の典型フランス宮廷風ロココ趣味と考えられるからである。

その様にキュプリア(ウエヌス)は立ち、半ば身を振らせ、
さながらフィレンツェの(女神像)に似て、片手で被う、
顔を紅潮させ、自らに撓垂れ、
三九〇 魅惑の乳房を、だが被いようもない。
そして別の(手)で—皆様御存知の所を。

(『パリスの審判』第三八七句—第三九一旬)

この様なヴィーラントのロココ風作品が、西歴一七七三年七月二日、クロプシュトック生誕四十九年を祝して、焚書にされたのはゲッティンゲン林苑同盟の詩人たちによってであった(註(93))。

(k) 「林苑同盟」

「林苑同盟(Hainbund)」とは後にその一員フォス(一七五一年—一八二六年)により一八〇四年に名付けられた名であるが、この命名は見事にこの詩人同盟の性格を物語っている。文字通り「神聖な友情」(註(82))の「盟約(Bund)」は、「檜」の「林苑(Hain)」において、一七七二年九月十二日の満月の夜に結ばれた模様である。

おお九月十二日、わが親しい友よ、その時は貴君も此所に居るべきだった。
ミラー兄弟、ハーン、ヘルティ、ヴェアス、そして僕は、なお夕暮時に近隣の村へ足を向けた。その時は殊のほか澄みきっていて満月だった。僕たちは美しい自然の情緒に浸り切った。そして農家で牛乳を口にしてから広野へ出て、此所に一寸した檜の林苑(Eichengrund)を見つけ、直ちに僕たち誰もが思いついたのだ。友情の盟約(Bund der Freundschaft)をこの神聖な樹々の下で誓うことを。僕たちは帽子に檜の広葉(Eichenlaub)を巻きつけ、この帽子を樹の下へと置いてから、皆で手を取り合って幹を囲んで舞い躍り、そして満月や星に僕らの盟約の証人となってくれるよう頼み、永遠の友情を誓い合ったのだ。

(一七七二年九月二〇日付ブリュクナー宛フォス書簡)

『パンとぶどう酒』第十三句の「(檜の)林苑の樹頭(die Gipfel des Hains)」に引き続き、「月(der Mond)」(第十四句)そして「靈氣溢れる夜が星辰に輝きみちて(Voll mit Sternen)到来する」(第十五句—第十六句)のも、「人倫の偉容」(註(74))なす「神聖な友情の立法を」そして盟約を永遠に(註(82))せんがための証に他ならないであろう。そして「檜の木の周囲に、…あの勇猛な(魂)、苦闘する男子の魂を、合唱の歌声が一つに結ぶ」(註(45))と歌われた「シュトゥットガルト」第三四句以下が思い併されるのである。

更に別の書簡(一七七二年一〇月二六日)で、フォスはゲッティンゲン林苑詩人同盟の様子を報告し、当の林苑同盟の畏敬的クロプシュトック

ク(一七二四年—一八〇三年)に言及する。

健康を祝して、更に乾杯をした。まず第一にクロプシュトックの(健康を祝し)！ポイエが杯を取り、立ち上がって、叫んだ。「クロプシュトック！」と。誰もがポイエに倣い、この偉大な名を叫んだ。そして神聖なる静粛(Silichweigen)の後に、また飲んだ。今度はラムラーの(健康を祝し)！こんなにも壮麗に充ちてはいないが、レッシングの、ゲルステンベルクの、ウィツの、ヴァイセの、その他の(健康を祝して)……誰かがヴィーラントの名を挙げた。それはビュルガーだったと僕は思う。そして杯を満たして立ち上がり、そして(叫んだ)「死ぬが良い、人倫の破壊者(Sittenverderber)ヴィーラントは、死ぬが良いヴォルテールは！」等々

既に一七二一年にクロプシュトックの『頌歌集』(註(18))は刊行され、当の一七二二年には市民悲劇の傑作たるレッシングの『エミリア・ガロット』も衆目に触れる所となっており、十九世紀に埋もれてゆくヴィーラントのロココ風作品をよそに、着実に「ドイツの偉容(Deutsche Größe)」(註(74))は「始めて真正に芽生え、あたかも生育する自然の如く、静寂の中で、自らの密やかで遠大な諸力を展開させることになる」(註(71))のである。

今度はフォスの筆力に動かされて、ゲッティンゲン林苑詩人同盟に加わったブリュクナー(一七四六年—一八〇五年)が、一七七三年五月七日付フォス宛書簡において、林苑同盟結成の前年に公刊されたヴィーラントの叙事詩『新アマデウス(Der neue Amadis)』(一七七一年)を「快適に飾られた売春宿(Ein wohlgeschmücktes Hutenhaus)」と弾劾し、「この新たなオウィディウスを撲滅する(diesen neuen Ovid wegzutilgen)」ことを提唱する。

『新アマデウス』。この本は淫猥な娯楽を目的とし、優男と娼婦のために出現した。……

同様ヘルダーリンにも『新アマデウス』は「下劣(schlecht)」で「読むに耐えぬ(nicht zum Lesen)」ものとなり、他方「偉大な『救世主』の歌人(クロプシュトック)」が浮上してくるのである。

こう言った当時一七七〇年代の趨勢は『若きヴェルテルの悩み』(一七七四年)の作家ゲーテにも顕著に現われている。当の『ヴェルテル』(註(17))所収の一七七一年八月十六日付書簡における印象深い場面面で発せられる感激の言葉、「クロプシュトック！……あの壮麗な頌歌(『春の祝祭』一七五九年／七一年)……気高き詩人よ！汝が僕の眼差に宿る崇敬の念(Verehrung)を目にしたならば、……」こそ、その証左となる。そのみではない。更にゲーテは『ヴェルテル』と同年一七七四年刊『神々、英雄たち、ヴィーラント』において、当のヴィーラントを諷刺の対象として俎上に載せたのである。

アルケステイス あなた(描いた)アルケステイスは善良で、あなたの(描いた)小娘や男の子を楽しませ、また恐らく懽たりしたことでしょう。つまりこれがあなたのおっしゃる感動なのですから。……
ヴィーラント あなたは否定なさらないでしょう。私の方が全体を、より感じ易く(delikater)取り扱った点で。

(『神々、英雄たち、ヴィーラント』)

ゲーテの言う「神々」と「英雄たち」とは、当然ながら古典ギリシア芸術において表現され形造られた神話世界の雄姿なのであり、このような始源の精神界を目指して十八世紀ドイツ文化は自らの根源から立ち上がり、フランス風ロココ趣味に彩られた「苦境のドイツ」(註(83))を克服しようとする。当の諷刺劇『神々、英雄たち、ヴィーラント』の意味する所も正にこの「息吹き」(註(1))に他ならないと考えられるのである。

(1) 「盟約」

目下話題の「ゲッティンゲン林苑詩人同盟」(註(86))が一七七二年に結成されたのも、同じ「息吹き」に「揺り動か」されてのことである。例えば林苑同盟の代表的抒情詩人ヘルティ(一七四八年―一七六六年)の「一七七二年九月に」と記した「盟約の歌(Bundsgesang)」が、この「息吹き」を物語っている。

五 Ihr kniet nieder, schwöret dem Laster Hohn,

Den Schändern eurer Fluren, die Galliens,

Und jedes Auslands Kette schleppen,

Schwöret ihr Hohn, und der Tugend Huldung.

五 君達は跪き、宣誓するのだ、あの悪習に嘲笑を、

君達の広野を冒瀆する者どもに、ガリアの(鎖)を、

また抑異国の鎖を引き摺る(冒瀆者どもに)、

宣誓するのだ、その鎖に嘲笑を、して有徳に真心を。

(「盟約の歌」第二節、第五句―第八句)

「有徳」(第八句)は当然「ドイツの偉容」なす「人倫の偉容」(註(74))に宿るはずであるが、「異国の鎖」(第七句)とりわけ「ガリアの鎖」(第六句)を断たなくては事が始まらない。

「ガリア」とは蓋し、大革命により王権を打倒したフランス共和国(一七九二年九月樹立)の市民集団を指すのではなく、むしろ革命前の旧体制(Ancien Régime)封建制度下で政治や文化を先導していたブルボン王朝を意味する。殊にヘルダーリンの詩想を睨み合わせるならば、明らかに「今や既に王の時代ではない(Die ist die Zeit der Könige nicht mehr)」ので、同じフランスと言っても革命の前後では雲泥の差があることに留意しなくてはならない。すなわち讃歌『ライン河』第一〇節などでヘルダーリンが英雄として讃えたルソー(一七一二―一七八年)が迫害された旧体制ブルボン王朝下と、エルムノンヴィル

に埋葬されたルソーの遺体をパリの偉人廟(Panthéon)に祖国の英霊として安置(一七九四年)した共和国フランスのもとでは事情が百八十度コペルニクスの転回を遂げているのである。

この事情を当の「盟約(Bund)」に関してみると、フランス革命勃発(一七八九年七月十四日)以降は、この「盟約」の背後に新たな意味が加わる。すなわち「国民公会(Convention Nationale)」(一七九二年―一九五年)と言われる「国会(Nationalbund)」の礎なす「民約(Contrat Social)」が、文字通り『民約論』(一七八二年)を書いたルソーの民主共和制思想の「息吹き」を伝えて「盟約」に繋がる。例えばヘルダーは詩歌『一七九〇年七月十四日に』を創作し冒頭をこう始めている。

気高き祭壇の囲りに汝は見る。フランス人たちが同胞と
人類のため身を捧げている。神々しい聖なる祝祭だ！

(「一七九〇年七月十四日に」第一句―第二句)

更にヘルダーリンの書簡中では、この「神々しい聖なる祝祭(göttliches, heiliges Fest)」(第二句)が「盟約の祝祭(Bundfest)」と言い換えられる。

七月十四日、自分たちの盟約の祝祭日(Tag ihres Bundesfestes)を、フランス人たちは挙国一致の大行事で祝うことだろう。

(一七九三年七月上旬弟宛書簡五八)

「盟約」はかくして単なる「詩人同盟」(註(86))に留まらぬ一層と広汎な現実の啓蒙と革命につながる概念と成ったのである。

恐らく右記書簡で話題となっている一七九三年七月十四日に関してであろうが、興味深い逸話が残っており、ヘルダーリン研究においてのみならず、ヘーゲル研究などでも折に触れ言及される次の一節がある。

或る朝に、…或る日曜日——それは晴れた明るく澄んだ春の朝だった——ヘーゲルとシェリングは、なお数名の親友たちと一緒に、テュービンゲ

ンから遠からぬ草地へと赴き、そこに自由の樹 (Freiheitsbaum) を植えた
 とのことである。

文中の「親友たち」の中にヘルダーリンがいたことを疑う者はなからう。
 そこで私としては、本論の話題とする『パンとぶどう酒』第十三句との
 関連で、この「自由の樹」を今迄考察した「堅樅 (Quercus robur)」
 (註(57))と想像してみたい。すると「自由と力の象徴」(註(60))た
 る「樅」が、一重に「林苑詩人同盟」結成(註(87))に見られるよう
 な文芸史上での精神革命にのみならず、更に一層と広汎な現実の諸相に
 つながり、竟には政治上での人倫社会の動静とも響き合うことになるの
 である。

従って基調としては「林苑同盟」に兆した「ドイツ神話の復活」
 (註(33))を保持しながらも、ヘルダーリンがテュービンゲン神学
 院 (Tübinger Stift) 時代 (一七八八年秋—一七九三年秋) に結んだ
 「麗しく至福な永遠の盟約 (der schöne, seelige, ewige Bund)」(『友
 情の祝祭日に』一七八八年、第一三三句) には、次第にフランス革命の
 「息吹き」が察知されるようになり、竟には前述(註(99))の如き出来
 事にまで発展してゆくと考えられるのである。

ところで共和国は当時フランス以外に、ヘルダーリンの故郷ヴュルテ
 ムベルク南方にスイス連邦共和国 (Schweizerische Eidgenossenschaft)
 があり、やがてシラーの戯曲『ヴィルヘルム・テル』(一八〇四年)に
 より芸術作品にまで高められる建国 (一二九一年) の歴史を有していた。
 殊にハプスブルク帝国から独立した折に母胎となったシュヴィーツ州
 (Kanton Schwyz) に関して、ヘルダーリンは革命思想の持主であった
 ヒラー (一七六九年—一八一七年) に献じた英雄詩韻律六步格詩歌『シュ
 ヴィーツ州 (Kanton Schwyz) 』わが親愛なるヒラー』に (一七九一年)
 を創作しており、壮大な大自然の山河の描写のあとで作品の中央部にお
 いて、共和国独立の折の「リニョトリの盟約 (Eidgenossenschaft vom

Rüti) (一二三五年) つまり「自由に生きるか、さもなくば死か！
 (frei zu leben oder zu sterben :)」を想い起こして、共和国スイス
 連邦の「祖たち」(第四〇句)に呼びかけている。

四〇 …… 汝ら、自由な国民の祖たちよ！

聖なる一群の人々よ！ 目下ばかりは深く (溪谷を) 見下ろす。すると満
 たされるのだ

予感の巧が約束したことが、甘美な靈感が

かつて僕に少年の頃教えたことが。その折に僕は想い浮かべたのだった、
 かの気高い

牧者 (アブラーハム) をマムレーの林苑において、……

(『シュヴィーツ州』第四〇句—第四四句)

興味深いことに政治上の史実は詩人の内観において『創世記』へと深ま
 りゆき、本論が当初話題とした始源の宗教体験の場たる「林苑 (エーロ
 ネー) マムレー」(註(15))へと結びつく。これは不自然な心の動きで
 はない。なぜなら敬虔な詩人は歴史上の出来事である「盟約」(註(14))
 を単に政治上の事件に解消せず、むしろ此所に同時に神人応答する根源
 の生の局面を見るからである。

かくして『パンとぶどう酒』第十三句で「林苑の (堅樅の) 樹頭を揺
 り動かす息吹き」(註(1))が喚起する「盟約」は、フランス革命につ
 づく激動の時代の相をも映し、政治上で今日二十世紀の西独ドイツ連邦
 共和国 (Bundesrepublik) や東独ドイツ民主共和国 (Demokratische
 Republik) へと至る人倫上の変革をも志向することになり、この脈絡で
 隣の連邦スイス共和国建国の史実が重大な意味を持ち浮上して来るので
 ある。

ではさらば かの平和な谷に住む幸福な人々よ。

やいば、誓約の地よ！ 聖なる夜に、

七〇 嚴肅な盟約 (der ernste Bund) がおんみを訪うたとき、星々がおんみに

向って、歓呼をあげていた

かつて蒼ざめた暴君が、僕たちに空しくも温順なへつらいの勇気を命じようとした

かがやく山なみよ！——力づくや庄政にさからって正義の、仮借なき復讐は、起ちあがったのだ——

……

自由のうつくしい戦いに登場したヴァルターやテルの仲間たちよ！

神々しい自由の邦よ！……

八〇

…… おんみや聖なる戦士たちを思うとき

燃えるような恥じらいと悲哀が、ぼくに襲いかかるのだ。

……

八五

とは言え、ぼくはおんみを忘れはすまい！ この恥じらいと悲哀とがいつか颯爽たる行動に変ずるその日を、ぼくは望み、待ちこがれよう。

(『シュヴァイツ州』第六八句—第七三句/第七八句—第八一句/

第八四句—第八五句)

話題の詩歌『シュヴァイツ州』は、この様な社会変革への意気込みで結ばれている。目下フランス革命の進展は有無を言わさぬ勢いで第一共和制樹立(一七九二年)とルソーの霊廟入り(一七九四年)を目指し、今日のフランス共和国(République française)の礎が据えられんとしている。その革命時代の渦の中で一七九二年夏六月にヘルダーリンが妹に向かい、「もしオーストリア軍が勝利を占めると、悪く酷い時代になる。王侯の権力乱用が甚しく手に負えなくなるだろう。お兄さんの言うことを信じなさい！そして人権の擁護者であるフランス人のために祈りなさい」⁽⁸⁾と主張している言葉に傾聴すべきである。

「嚴肅な盟約 (der ernste Bund)」(註(103))は「ドイツ神話の復活」(註(33))する生の根源から「林苑詩人同盟」(註(86))の「樞」(註

(87))の「息吹き」に「揺り動か」されて生成するとともに、新たな民

主共和制の人倫を樹立せんと現実社会の史実にも目を開く。そこで浮上した『シュヴァイツ州』における「嚴肅な盟約」(第七〇句)の歌われた詩節が、先の「林苑同盟」結成の経緯(註(87))における詩的な世界と形象面で呼応し合うのも不思議ではない。共に『パンとぶどう酒』

第一節と同じく「聖なる夜」であり、「満月」など「星辰」が「盟約」の証人となっている。つまり「林苑の樹頭」(第十三句)に引き続き第十四句以下で歌われているように、此所では「月も/また秘蔵の莊嚴から解き放たれ、靈氣溢れる夜が到来する。/星辰に輝きみつる (der Mond / Kommet geheim nun auch; die Schwärmerische, die Nacht kommt, / Voll mit Sternen)」(註(88))「聖なる夜 (heilige Nacht)」

(註(103))が現象することになり、どの場合も「新たな盟約 (der Neue Bund)」つまり『パンとぶどう酒』の主題たる新約 (Novum Testamentum) を求めて、北欧ゲルマニア神話世界で重鎮なす「夜 (Nox)」(註(88))が召喚されているのである。

(m) 「神聖なる野蛮人」

以上の論述で展望は大きく開かれたのであるが、此所で再び狭く「林苑同盟」へと話題を戻して、文芸史上の問題を追究してみよう。前述の一七七二年三月におけるハラーの憂慮(註(84))とは裏腹に、同七年九月に結成された林苑同盟は新たな「疾風怒濤」(註(68))の七十年代の口火を切り、その「来たるべき盟約の友にしてドイツの質実朴訥な男子 (künftiger Bundesbruder und deutscher Biedermann)」⁽⁹⁾と呼ばれたブリュックナーの提唱(註(90))に倣い、実際ヴィーラントの『浪漫風詩歌、イドリスとツェニーデ (Idris und Zenide. Ein romantisches Gedicht)』(一七六七年)を支離滅裂にしたあと肖像画とともに焚書にした模様である。

クロプシュトゥック生誕の日(七月二日)を僕たちは壮麗に祝った。……上座に据えた肘掛椅子は空席で、クロプシュトゥックのためにあり、薔薇と紫羅蘭花が撒かれ、その上にはクロプシュトゥック全集が載せられた。その椅子の下にはヴィーランドの『イドリス』が支離滅裂となつて横たわっていた。

……(煙草点火用の)紙捻はヴィーランド著作集から作られ、喫煙しないボイエもやはり紙捻に火をつけ、そして支離滅裂の『イドリス』を踏みしただかねばならなかった。その後僕らはライン産葡萄酒を飲み祝した。クロプシュトゥックの健康、ルターの追憶、ヘルマンへの追想、僕らの盟約のつづが無きを、そしてエーバートの、ゲーテの(君はゲーテを恐らくまだ知らないのではないか?)、ヘルダーの、等々を。……僕らは自由について語り、帽子を頭に、ドイツについて、有徳の歌について語った。君は想い描けるだろう、その様を。そして会食の後に混成酒となり、最後に僕らは焚書にしたのだ、ヴィーランドの『イドリス』と肖像画とを。……

(一七七三年八月四日、ブリュクナー宛フォス書簡)

此所には空恐ろしい「ねたむ神」(註(11))にも通じる「空無の思想」(註(38))が、北歐神話世界観の幹とも言える神木「樫」(註(87))を機に目覚め、ゲッティンゲン林苑詩人同盟と呼ばれる「人倫の偉容」(註(74))なして生育し、異国宮廷風ロココ趣味の殿堂ヴィーランドの諸作品を異端として撲滅せんとする様がありありと見て取れる。

まず、この様に空無へと大きく開かれた北歐ゲルマーニアの「文化と氣質」(註(74))を考える上で、見逃すことのできないのがタキトゥスの『ゲルマーニア』第九章に見い出される次の件であらう。

ところでゲルマーニア人たちは神々を、(神殿のように)壁で囲んだ中に閉じ込めたり、(神像のように)何らかの人の顔形に似せたりすることは、この天上の者たちの偉容に相応しくないと看做しており、森(Juncos)や林苑(memora)を神々の聖域としている。そして神々の名で呼ばれるのは、かの秘蔵の莊嚴(secretum)であり、これをゲルマーニア人たちは只管な畏怖の念で以て見るのである。

もし古来のこの心性を「ドイツ神話の復活」(註(33))に際して無際限に拡張するとしたならば、「聖なる民」(註(10))の「ねたむ神」にも劣らぬ偶像破壊の猛威が縦横無尽に吹き荒れ、今世紀の全体主義国家ドイツ第三帝国(一九三三年―四五年)の下におけるユダヤ人大量虐殺(就中アウシュヴィッツ強制収容所)にも似た大惨事にまで至るであらう。

故に「至福なるギリシア」(註(13))が「パンとぶどう酒」では、この様な「神聖なる野蛮人(heiliger Barbar)」に立ち開かることになる。これはヘルダーリンが先輩シラーの『ギリシアの神々』初稿における問題提起を継承したことを物語るものである。

…… Schöne lichte Bilder

一一〇 scherzen auch um die Nothwendigkeit, und das ernste Schicksal blickte milder durch den Schleyer sanfter Menschlichkeit.

Nach der Geister schrecklichen Gesetzen richtete kein heiliger Barbar,

一一五 dessen Augen Thränen nie benetzen, zarte Wesen, die ein Weib gebahr.

…… 麗しく明朗な形姿が

一一〇 不可避の必然(ネメシス)の回りでも遊び戯れ、また厳肅なる運命(モイラ)の眼差も
柔和な人性の薄絹の面紗により和いだのだ。

聖霊たちの怖ろしい立法により

裁きを下す神聖なる野蛮人は居なかった。

一一五 女性より生まれし優しい本性なす

涙が眼を潤おすことのないような野蛮人は居なかったのだ。

(『ギリシアの神々』初稿、一七八八年、第十四節―第十五節、第一〇九句―第一一六句)

興味深いことに、この詩歌は一七八八年三月刊『独逸メルクル』に掲載されており、この著名な文芸誌の編者が実は目下話題となっているヴィーランドなのである。

反響は凄じい様相を呈した。すなわちシラーが『ギリシアの神々』を公刊すると、「ほぼ至る所で人々は悲鳴をあげ、シラーを無神論者だとか何か知らぬ或る主義者として宣告を下し、神聖なる熱意に燃えてシラーを地獄へと真逆に投げ落とした。……だが『独逸メルクル』でヴィーランドが一瞥の批評文を書いた他は、誰も公然と自己を主張し、信心家やその他の熱気に逸る人々が、恐らくは神聖な信者熱に性急に浮かされてゐるのを恥じようとしな⁽¹⁰⁾い」と、ノヴァーリス（一七七二年—一八〇一年）が『フリードリヒ・シラーの弁明』で書いている通りであった。

実に「神聖なる野蛮人」（註(108)）とは西欧キリスト者としてのシラー自身の自己認識に根ざした洞察と考えられるが、正にこの「汝自身を知れ！」と言うことほど苛酷なことはない。だが自己自身の本質を古典ギリシアの明鏡に映さざるを得なかったのが、シラーやヘルダーリンたち当時の純粋な詩魂であり、この生粋の詩魂に担われて始めて「神聖なる野蛮人」は「悲劇の誕生」（註(38)）する古典ギリシア芸術の浄罪界へと歩み入るのである。

ところで「人倫の破壊者」（註(89)）の典型として一七七三年七月に焚書（註(106)）にされたヴィーランドその人も、実は十数年前、謹厳なボードマー（一六九八年—一七八三年）を後盾にして、当時のアナクレオン風ロココ趣味の戯詩『恋神の勝利（Sieg des Liebesgottes）』（一七五三年）の著者ウーツを「人倫を破壊する、軽薄なアナクレオン詩派の代弁者（sitzenverderbender Wortführer der leichtfertigen Anakreontik）」⁽¹¹⁾と、自著『共感（Sympathien）』（一七五六年）と『キリスト教徒の感情（Empfindungen eines Christen）』（一七五七

年）において弾刻した張本人であった。他方ウーツは反面で既に見た『苦境のドイツ』（一七五五年）で「苔むした檻」（註(83)）を歌った憂国の詩人でもある。この様に瞠目すべきことに、一人の人物の中に「人倫の破壊者」と、これに「悲鳴をあげ」る「キリスト教徒の感情」とが同居しているのであり、この事情はウーツやヴィーランドのみならずシラーやヘルダーリンにおいても変わらないと考えられるのである。

(n) 「優美と尊厳」

事情は単純ではない。ウーツの場合はほぼ同時期に両者の傾向の作品を物している程であるし、焚書の的となったヴィーランドとて何時までも宮廷風ロココ趣味に奉仕していたわけではない。確かに林苑同盟により燃え上がった疾風怒濤の嵐、例えば『若きヴェルテルの悩み』（註(17)）やシラーの『群盗』（一七八一年）に見られるような「息吹き」が、古典ギリシアの明鏡を眼の当としなかったならば、「ドイツの偉容」（註(74)）は誇るに足るものとはならなかったであろう。従って当然のことながら『パンとぶどう酒』第十三句で歌われた当の「息吹き（Weh）」（註(1)）とて、先輩シラーやゲーテの例に違わず古典の明鏡を眼の当としつつ、更には当の偉大なる先例の精神を一層と徹底させて「ギリシア」を「至福」の彼方に問いつつ畢竟キリスト像を目指すのである。他方ギリシアも右の『ギリシアの神々』第十四節（第一〇九句—第一一二句、註(108)）に見られる「牧歌風現実を気安く好む趣向」（註(64)）に留まっているわけにはゆかないのであるから、まして先のロココ風ヴィーランドが描くような「半ば身を振らせたキューブリア（ウェヌス）」（註(85)）も見直されねばならない。すなわち後期ギリシア文化衰退期ヘレニズム期に特有の裸体女神像から目を転じて、古典期ヘラス芸術の「優美と尊厳（Anmuth und Würde）」⁽¹²⁾に住まう「永遠に清澄にして明鏡の如き（Ewig klar und spiegelrein）」⁽¹³⁾「ギリシアの神々」

が探し求められるのである。

六〇 かの空恐ろしくも壮麗な女神(天上の)ウーラニアが、
焰の王冠を外して
起立する——美(の女神)として我らの眼前に。

……

四三五 女神自身、かの優しきキュブリア(美神アプロディーテー)が、
焰の王冠に巻かれて輝き
起立し今や成人した息子(芸術家)の眼前に
あからさまな隠れなき姿を示す——(天体万有の諧調な女神)ウーラ
ニアとして、^⑩

(『芸術家』一七八九年、第五節/第三二節)

古典ギリシア芸術の本質は此所で、「悲劇の誕生」(註(38))する「かの空恐ろしくも壮麗な(furchbar herrlich)」(第五九句)る現存の基底から「美(Schönheit)」(第六一句)へと造形し、またこの「美」の「女神自身、かの優しきアプロディーテー」(第四三三句)から「永遠に清澄にして明鏡の如き」(註(31))「あからさまな隠れなき(entschleiert)ウーラニア」(第四三六句)へと回帰する動静として表現されている。

蓋し古典芸術の明鏡への道は峻厳を極めており、単なる靈感の「息吹き」(註(一))に「揺り動か」されただけでは到底覚束ないこと必定である。故にゲッティンゲン林苑詩人同盟(註(86))の一員シュトルベルク(一七五〇年—一八一九年)が『ギリシアの神々』批判(一七八八年八月)で述べる「気高くする(veredlen)生き生きとした感情(lebhaft Empfindungen)」つまり「靈感(Begeisterung)」のみでは事足りないものであるから、シュトルベルクが許容した「シラーの輪唱歌『歓喜に寄す』(一七八六年)^⑪」に見られるような「心魂が溶け込みゆく至福の時機(Selge Momente)^⑫」に留まっているわけにはゆかず、敢て目前の「至福の時機」を「古典ギリシア精神と空無の思想」(註(38))

へと突き抜けた「至福なるギリシア」(註(13))が理念追求されるのである。

この探究に際してヘルダーリンは「新たな盟約」を結ばんととして、『パンとぶどう酒』を「ハインゼに(An Heinze)^⑬」と捧げている。恐らく詩人の念頭には、ハインゼ(一七四九年—一八〇三年)の長編小説『アルディングロ(Ardinghelo)と至福の島々(die glückseligen Inseln)』(一七八七年)の第二巻・第四部の次の一節が思い浮かべられていたことであろう。

Und die Liebe ward geboren, der süße Genuß aller Naturen für einander, der schönste, älteste und jüngste der Götter, von Uranien, der glänzenden Jungfrau, deren Zaubergürtel das Weltall in tobendem Entzücken zusammenhält.

そしてエロースが誕生した。生きとし生ける自然造化相互の甘美な歓び、この上なく美しく、この上なく太古よりの、またこの上なく若い神エロースは(天上の)ウーラニア(美神アプロディーテー)から(誕生した)。かの輝く処女神より。そしてこの女神の霊妙なる帯は、宇宙万象が狂気に酔うままを結び合わせる。^⑭

(『アルディングロ』第二巻、第四部)

実際『調和の女神に寄せる讃歌』(一七九〇年—九一年)の標語として、既にチュービンゲン(註(99))神学院時代ヘルダーリンは、この『アルディングロ』の一節を踏まえ、「(天上の)ウーラニア(女神アプロディーテー)、この輝く処女神が、自らの霊妙なる帯で、宇宙万象が狂気に酔うままを結び合わせる。アルディングロ^⑮と表現しているのである。成程ヘルダーリンには、この純化された「霊妙なる帯」(註(116))の一節がハインゼの表現の中で格別な意味を有し、恐らく原著者の考えた以上に深遠な思想へと円熟した詩歌象徴の衣を纏い練り上げられてゆくのであるが、当の小説『アルディングロ』そのものの技法と表現は未だ

俗なものであった。

すなわち単に感性上で燃える活写や想像力の豊満では、尚とうてい十分ではない。故に『アルディンゲロ』はいくら感性（表現）の力量と彩色の輝きに溢れていても、所詮は一篇の感性（表現）の戯画に過ぎず、真迫性もなければ審美上の尊厳もないのである。⁽¹⁸⁾

（シラー『素朴文学と情感文学』）

当の著名な文学論（一七九五年—九六年）でハインゼをこれ程までに酷評できるのは、シラーがハインゼと同年輩（一七四九年生）の文豪ゲーテを念頭に置いているからである。実にシラーとゲーテとの「盟約」（一七九四年からシラーの死一八〇五年まで）が、この厳しいハインゼ評の背後に控えていると考えられる。

シラーに私淑したヘルダーリンも恐らく右記ハインゼ評（註(118)）に興味深く目を通したことであろうし、その際にゲーテの筋も考え併せたであろう。その上でも敢て詩人は『パンとぶどう酒』を「ハインゼに」（註(116)）と献呈しており、あたかもシラーとゲーテとの盟約に代わり得る「新たな盟約」を兩人で結ぼうとするかの様にさえ思われる程である。だが詩人として此所でハインゼをヘルダーリンの盟友とするのは心もとない。なぜなら「優美と尊厳」（註(111)）の両面において古典ギリシアの典雅沈静へと、ハインゼの『アルディンゲロ』に見られるような言葉で歩み入るのは覚束ないことに思われるからである。

確かに「心魂が溶け込みゆく至福の時機」（註(114)）なら時折『アルディンゲロ』で出会えるかも知れない。しかし文芸作品として味読する限り、この種の「疾風怒濤」（註(68)）なす「息吹き」をも乗り越えゆく動静をハインゼにおいて見出すことは難い。成程「数多くのものが『アルディンゲロ』など小説類の中で結び合わされている。但しそれは芸術上の完成においてよりむしろ著者の意欲において（im Willen mehr als im künstlerischen Vollbringen）である⁽¹⁹⁾」と、ホフマンスタール

（一八七六年—一九二九年）が後に述べている通りである。従って芸術作品としてよりは、むしろ芸術論文として『アルディンゲロ』を読み、この論文の意図した所がヘルダーリンの詩歌作品において無類な「芸術上の完成（Vollbringen）」（註(119)）に達した筋を考量するのが妥当と思われるのである。

そこで再び前掲の『アルディンゲロ』第二巻・第四部の一節（註(116)）に戻るとしよう。一応『アルディンゲロ』は小説として「彩色の輝きに溢れ」（註(118)）た筋の展開と、別に美術紀行として「感性（表現）の力量」（註(118)）を含むのであるが、ヘルダーリンの着眼した点はそれら以外の形而上学にあったようである⁽²⁰⁾。殊に当の『調和の女神に寄せる讃歌』の標語（註(117)）のもととなった一節がその証左となる。美学芸術論文『優美と尊厳について』（一七九三年）でシラーも、この「靈妙なる帯（Zaubergürtel）」（註(116)）を「魅惑の帯（Gürtel des Liebreizes）⁽²¹⁾」とか「ウェヌス（女神アプロディーテ）の帯（Gürtel der Venus）⁽²²⁾」と呼んで、「優美（Anmut）という客観的な特性⁽²³⁾」の座と看做しており、これを如何に解するか？ が「神聖なる野蛮人」（註(108)）たる西欧キリスト者の単なる「尊厳（Würde）」を古典ギリシアの明鏡に恥じらいなく映し得る鍵となるのである。

ハインゼの言葉に注目すると、「靈妙なる帯」は「処女神（Jungfrau）」（註(116)）に属している。これは『パンとぶどう酒』の焦眉の急キリスト、この詩歌作品全体に調和あらしめる「靈妙なる帯」なす有和の神性が、処女（Jungfrau）マリアに属する『新約聖書』の物語（「マタイ福音書」第一章、第一八節）⁽²⁴⁾を想いあわせるならば、意味深長となる。具体的にはミケランジェロ（一四七五年—一五六四年）の彫像「慈悲（ピエタ）⁽²⁵⁾」で、処女マリアに抱かれたキリストを表象すれば良い。勿論ハインゼの語気（註(116)）には、これ程に切な大悲（アガペー）

の響きは宿っていない。だが事が『パンとぶどう酒』のキリスト像となると、正にこの大いなる慈悲(アガペー)の形而上(学)的深みから「霊妙なる帯」が纏まれていると考えられるのである。

他方シラーの論文『優美と尊厳について』においては、当の「優美と尊厳」がむしろ心理(学)上の概念で把握されている。

So wie die Anmuth der Ausdruck einer schönen Seele ist, so ist Würde der Ausdruck einer erhabenen Gesinnung.

あたかも優美が美しき魂の表現であるように、尊厳は崇高な志操の表現である。(83)

(『優美と尊厳について』)

「美しき魂(schöne Seele)」でゲーテの詩魂が、「崇高な志操(erhabene Gesinnung)」でシラー自身の心に宿る「人倫の偉容」(註(74))が考え併され、この両者の「盟約」がヴァイマル古典主義の核を形造る。この結果シラーは「精神の或る種の処女性(eine gewisse Jungfräulichkeit des Geistes)」たる「形而上学的情操(die metaphysische Stimmung)」を捨てた模様である。

o) 「音楽的なもの」

ところが先師シラーの歩みとは逆に、むしろヘルダーリンは当の「形而上学的」「処女性」を守らんとする。

Ich betrachte jetzt die metaphysische Stimmung, wie eine gewisse Jungfräulichkeit des Geistes

私は目下、形而上(学)的情操を、精神の或る種の処女性と看做しておりませう。(84)

(一七九七年八月シラー宛ヘルダーリン書簡一四四)

明らかにシラー自身この徹底性に危惧を感じていたようで、実際一七九

七年六月三十日ゲーテ宛書簡でこう述べている。

正直申し上げまして、私はあの(ヘルダーリンの)詩歌(『神氣に寄せる』や『さすらい人』)の中に、私自身の昔日の姿を幾多見出したのです。...

ヘルダーリンは或る強烈な主観性(eine heftige Subjectivität)を有し、これを或る種の哲学精神と思念の深み(ein gewisser philosophischer Geist und Tiefsinn)に結びつけておられます。この状態は危険な(gefährlich)ものです。なぜなら、このような天性の人々は全く手に負えないのですから。(85)

流石のシラーも戸惑いを隠し切れない。自らがヘルダーリンの「哲学精神」とゲーテの「美しき魂」(註(125))により引き裂かれんとしている。そこで盟友ゲーテは事情を素早く読み取り、巧みにシラーの動搖を鎮め、相互の「盟約」を固くしようとする。

私自身も実は正直申し上げまして、あれらの詩歌から、あなたらしきものが私に語りかけてきたことは事実で、類似の傾向は恐らく看過し得ぬと思われまふ。しかしながら、それらの詩歌にはあなたのお仕事に見られますような充盈(Fülle)も力(Stärke)も深み(Tiefe)もありませぬ(から安心なさいとせよ)。(86)

(一七九七年七月一日シラー宛ゲーテ書簡)

翌日に早速返信なのであるから、シラーも直ちに氣を取り戻し、ゲーテの厚情に感謝したことであろう。

ひとたび歩み出したヴァイマル古典主義への道は、もはや後戻りがきかない。それは蓋し思潮史の上で見ると、形而上学(学)の諸真理」を「詩歌」から追放する合理主義的啓蒙理性への逆戻りでもあった。

詩歌は完璧な感性的言説(eine vollkommene sinnliche Rede)である。... 形而上学的諸真理の体系が故に、更に感性的言説と、この両者が一つに——この両者は恐らく相互に擦り減らし合うのではないか？(87)

(『形而上学者ポープ』一七五五年)

メンデルスゾーン（一七二九年―一八六年）との共著ボープ論で、ヴォルフ（一六七九年―一七五四年）学派バウムガルテン（一七一四年―一六二一年）の『詩歌に関する』… 哲学的省察（*Meditationes philosophicae* …）』（一七三五年）第九章「完璧な感性的言説が詩歌であり（*Oratio sensitiva perfecta est POEMA*）」…「⁽⁸⁸⁾」を踏まえ、レッシング（註(89)）は詩人ボープ（一六八八年―一七四四年）と「形而上学者ボープ」（註(90)）との間の確執を「相互に擦り減らし合う（*einander aufreiben*）」（註(92)）と評価する。

実はヘルダーリンの先覚者シラーが、この様な「慣行（*Mode*）」⁽⁹³⁾に反旗を翻して、讃歌『歓喜に寄す（*An die Freude*）』（註(114)）を高唱したのであった。

Freude, schöner Götterfunken,

Tochter aus Elisium,

Wir betreten feuertrunken

Himmische, dein Heiligtum.

五 Deine Zauber binden wieder,

was der Mode Schwerd getheilt;

…

歓喜よ、美しき神々の火花よ、

至福の島エーリュシオンの娘よ、

私達は焰に酔い踏み入るのだ、

天上の娘たる歓喜よ、汝の聖殿へと。

五 汝の靈妙な力は再び結び合わせる、

慣行の剣が分別したものを。⁽⁹⁴⁾

…

（『歓喜に寄す』一七八六年、冒頭）

既にシュトルベルクとの関連で述べたように、単に「心魂が溶け込みゆ

一一五 『パンとぶどう酒』第一節「聖なる夜」その五（高橋）

く至福の時機」（註(114)）に留まる文芸の受容では事足りない。また「分別」を事とする啓蒙期の理論（テオリーアー）理性（註(25)）の「慣行」に従うわけにもゆかない。

すなわち合理化すれば「相互に擦り減らし合う」（註(92)）に過ぎない知性と感性との「新たな盟約」を、静聴する純粹理性（註(21)）が実践において樹立すべき要請が掲げられる。但しこれを心理上（註(95)）で古典主義へと傾斜しても、「精神の処女性」（註(96)）を喪失し「ウーラニア―女神アプロディーテーの靈妙な帯」（註(96)）が俗化されてしまう恐れがある。そこでベートーヴェン（一七七〇年―一八二七年）が第九交響曲（一八二三年―一八二四年）で実践したように、言わば「音楽の精髓から（*Aus dem Geiste der Musik*）」（註(25)）「形而上（学）の諸真理」（註(99)）が溢れ出でて「感性に訴え」（註(99)）ることにより、新たに「精神の処女性」たる「或る種の哲学精神と思想の深み」（註(107)）を回復せねばならない。しかば実際に「優美と尊厳」（註(111)）なる古典ギリシア芸術にも恥じない悠然たる雄渾な調べが第三楽章で滔々と流れた後、始めて終楽章において「合唱歌」（註(33)）が真正の「歓喜に寄す」と言い得る讃歌を唱い上げ、文字通り理論理性の「慣行の剣が分別したものを再び結び合わせる」（註(131)）のである。

本論が目下話題としている「ドイツ神話の復活」（註(33)）を喚起する『パンとぶどう酒』第十三句の「息吹き」（註(1)）が目指す方向は此所に見て取れる。つまりベートーヴェンからマラー（一八六〇年―一九一一年）に至るまで想念豊かに脈動するドイツ交響曲と心から響き合う「思想詩（*Gedankenlyrik*）」⁽⁹⁸⁾が「芸術上の完成（*Vollbringen*）」（註(119)）へと円熟する精神史の筋が肝要なのである。この脈絡では古典期のシラーが詩歌として過小評価し、一八〇〇年刊『詩集』第一部に

採用しなかった『歓喜に寄す』(註(13))と『芸術家』(註(12))が逆に浮上してくる。殊にフランス革命勃発(一七八九年七月)の数ヶ月前(同年三月)にヴィーラント編『独逸メルクル』に掲載された全四八一句に亙る雄篇『芸術家(Die Künstler)』こそ、ドイツ抒情思想詩の歴史における転回の基軸であろう。なぜなら『芸術家』においてこそ思想詩史上で、シラーの二つ「音楽的なもの」(Das Musikalische)〔^④〕が滔々と響き始めたと考えられるからである。

この「音楽的なもの」についてシラーは、一七九二年五月二五日ケルナー宛書簡で次のように物語っている。

僕が坐つて或る詩歌を創作しようとすると、その内容に関する明晰な概念(der klare Begriff)よりも遙かにしばしば僕の心に思い浮かぶのが、その詩歌の音楽的なもの(Das Musikalische)なのだ。他方の明晰な概念に関しては、まず折り合いがつかないのが僕自身しばしばなのだけれども。^④

「明晰な概念」がプラトーン哲学のように「魂の目」(τὸ τῆς ψυχῆς ὄμμα)〔註(24)〕へと鮮明に象眼されるのではなく、むしろその根源において言わばアイスキュロスの悲劇作品『アガメムノン』冒頭にも似た或る「音楽的なもの」が滔々と沸き出ずる脈絡を考えたならば、シラーにおいてこそ「ドイツ神話の復活」の「息吹き」が正に「音楽の精髓から」たち昇ると看做されるのである。

その脈動において新たな「唯一の真理の盟約の中へ」(in Einen Bund der Wahrheit)〔註(51)〕とドイツの「芸術家」は『パンとぶどう酒』においてであれ、『ファウスト』(註(51))においてであれ、「回帰」すると考えられる。

Erhebet euch mit kühnem Flügel
hoch über euren Zeitenlauf;
fern dämmre schon in euern Spiegel

四七〇
das kommende Jahrhundert auf.
Auf tausendfach verschlungenen Wegen
der reichen Mannigfaltigkeit
kommt dann unarmend euch entgegen
am Thron der hohen Einigkeit.

四七五
Wie sich in sieben milden Strahlen
der weisse Schimmer lieblich bricht,
wie sieben Regenbogenstrahlen
zerrinnen in das weiße Licht:

四八〇
so spielt in tausendfacher Klarheit
bezaubernd um den trunkenen Blick,
so fließt in Einen Bund der Wahrheit
in Einen Strom des Lichts zurück!

果敢な雄飛なして高く
汝等の時空を越え飛翔せよ。
彼方には既に、汝等芸術家の心を鏡として、
来たるべき世紀の曙光が白み始めている。

四七〇
幾千にも絡み合い交錯し
豊かで多彩な道また道を辿りて
到来し、今や汝等を腕に抱き出向かえる
崇高なる永遠の玉座の傍において。

四七五
あたかも七色の柔和な光線なして
白色光が屈折するように、
あたかも七色の虹の光が
白色光へと溶け入るように、

四八〇
そのように幾千にも多様で明澄な彩り成しつ遊び戯れ、
陶然とした眼差を囲み魔笛の如く、
かく滔々と唯一の真理の盟約の中へと、
ただ一条の光の流れへと回帰するのだ！^④

(『芸術家』終結部、第四六六句―第四八一句)

滔々たる詩歌象徴の流れにおいて形造られてゆくのは、思弁を事とする理論(テオリーア) 理性が結晶させる「明晰な概念」(註(134))とは異質な「形而上(学)的な情操(metaphysische Stimmung)」(註(126))と読み取れる。そしてこの「情操」を奏でる「音楽的なもの」(註(134))こそが、『歓喜に寄す』とか『芸術家』の精髓を成しているのである。

(P) 「理想化技法」

ところで、もしベートーヴェンの第九交響曲での「音楽的なもの」が無かったならば、シラーの『歓喜に寄す』は恐らくシュトルベルクのよきな血気者の「心魂が溶け込みゆく至福の時機」(註(114))に留まり、当時の「林苑同盟」(註(86))の如き「疾風怒濤」(註(68))の嵐が心情を過ぎ去ると一種軍隊行進曲の単調さを免れ難くなるであろう。また『芸術家』にしても啓蒙と革命の時代精神の上昇気流に乗り害うならば、同様の難点に付き纏われよう。故にヘルダーリンがハインゼと結ばんとする「新たな盟約」の目指す所、すなわち『パンとぶどう酒』のキリスト像には濃淡細やかな幽玄の深みが加味されることになる。だが微妙なこの問題への詳細は「至福なるギリシア」(註(13))を中心に据えた別論『ヘルダーリンの西欧ギリシア論』(註(34))に譲るとして、此所では「音楽的なもの」が十全ではないにしても『芸術家』を機に成る「真理の盟約」(註(135))において、如何なる精神活動が営なまれんとしているのかに関心を向けてみようと思う。

既に先に引用したゲーテへの書簡(一七九七年六月三〇日)でシラーが危惧を抱いた「哲学精神と思念の深み」(註(127))を、実は古典期よりも前のシラーは唱導していたのである。その代表例が『芸術家』成立後しばらくして一七八九年五月二十六日に講義された『世界史とは何を意味し、如何なる目的へと向けこれを学ぶか?』であった。

哲学精神(der philosophische Geist)は世界史の素材のもとに長くは留まらず、やがて新たな衝動が哲学精神において働きたし、調和一致を希求し——この衝動が抗し難く哲学精神をそそり、自らを取り巻く一切を哲学精神固有の自然本性に相応しくさせ、そして自らに立ち現われる現象を哲学精神自らが認識した至高の成果すなわち思想(Gedanke)へと高めるのである。⁽⁸⁾

(「イエーナ大学就任講義」一七八九年)

同様の「調和一致(Ubereinstimmung)」を求める方向で『パンとぶどう酒』の詩想も「神」なるキリストを指すと読み取れる。

神から始源が由来する。……一切は無限の協和一致(Alles unendliche Einigkeit)である。だがこの一切の只中で唯一つ卓抜して協和一致し協和一致させるもの、その物自体で如何なる自我でも無いもの、これが僕たちのもとで神(Gott)たらんことを!……殊のほか宗教(Religion)と僕は取り組んでいる。⁽⁹⁾

(一八〇一年三月下旬弟宛書簡(三三))

ヘルダーリンが此所で弟に語る「協和一致」させる「神」こそ、正に『パンとぶどう酒』ではキリスト像として作品全体を「結び合わせる霊妙なる帯」(註(116))となる。このために「精神の処女性」たる「形而上(学)的情操」(註(126))を守るのが、シラーの唱導する「哲学精神固有の自然本性」(註(136))と考えられ、この「精神の自然本性」において始めて「音楽的なもの」(註(134))がその精髓から溢れ、ベートーヴェンの第三交響曲『英雄』(一八〇四年)とかマーラーの第二交響曲『復活』(一八九四年)と心から響き合うドイツならではの「思想詩」(註(132))を生み出だすのである。

スイスのバーゼルの史家ブルクハルト(一八一八年—一九七七年)は、思うに同様の脈絡をも含み置いて、「詩歌『芸術家』が恐らく、これまで編まれた最高の綱領(das höchste Programm)なのです。」⁽¹⁰⁾と、

『シラー記念講演』(一一八五九年)で述べ、引き続き興味深い次の発言を付加している。

この詩歌「芸術家」は、シラーの哲学著作や『ドン・カルロス』書簡と並びまして、その分野における誠心誠意(Gewissenhaftigkeit im Fache)の至って強力な証左と呼んで差し支えないのです。⁽¹³⁾

ブルクハルトはシラー古典期の詩歌群、例えば『幽魂の国』(註(11))つまり後の『理想と人生』などを、当の『シラー記念講演』で黙殺し、ゲーテなどの詩人の本領なす「体験詩(Erlebnisichtung)⁽¹⁴⁾」からシラーの「思想詩(Gedankendichtung)⁽¹⁵⁾」を峻別し純化する。

今後ともシラーは、あらゆる抒情詩人の中で唯一無比の存在たるでありましよう。なぜならシラーは強力な浄化された意志(starker, geläuterter Wille)を以て、個々の瞬間(Moment)とか個々の状況(Situation)を永遠化(Verewigung)する、これを根本から諦観(wesentlich entsagt)し、プロペルティウスやオウィディウスやバイロンやウィクトル・ユゴーやゲーテたちが就く偉大である彼の文芸の種類に属していないからです。シラーが永遠化しますのは、極めて高貴で威力ある表現様式(die edelste und gewaltigste Stilform)における情操の全体(das Ganze einer Empfindung)であります。……幾千の者たちは甘美な恋愛詩(Liebeslieder)を創作しました。シラーだけなのです『女性の尊厳(Würde der Frauen)』(一七九六年)は。……⁽¹⁶⁾

十九世紀には真価が埋もれ、ブルクハルトには知られていなかった、シラーの「哲学精神と思念の深み」(註(17))の真正な継承者ヘルダーリンの「祖国(ドイツ)の歌」(註(18))も、『芸術家』同様に「個々の瞬間とか個々の状況を永遠化することを根本から諦観し」た「極めて高貴で威力ある表現様式」に他ならなかったのである。

実際ヘルダーリン自身、自らの詩歌の「崇高で純粋な歓呼⁽¹⁹⁾」を

「恋愛詩」(註(142))の「相変わらず疲れた飛翔⁽²⁰⁾」と峻別していた模様である。

ところで恋愛詩(Liebeslieder)は相変わらず疲れた飛翔(immer müder Flug)です。つまり素材が千変万化したとて、常に日常意識に落ち込んでいるからです。これとは異なるのが、祖国(ドイツ)の歌の崇高で純粋な歓呼(das hohe und reine Frohloken vaterländischer Gesänge)です。⁽²¹⁾

(一八〇三年十二月ウィルマンズ宛ヘルダーリン書簡二四三)

資料や史実となる「世界史の素材(Stoff)」のもとに長くは留まらぬ「哲学精神」(註(136))は、「体験詩」(註(140))の機因なす実話の「素材」(註(143))に係わることを「根本から諦観」(註(142))し、久遠の彼方に聳える大悲(アガペー)の神キリストへの止み難い理念追求の衝動(エロース)に擲まれる。此所に恋愛の処女マリア(註(124))にも恥じぬ「精神の処女性」が「形而上(学)的情操」(註(126))として現存意識を純化し、ドイツ抒情思想詩の成果は『パンとぶどう酒』において彩り豊かで濃淡細やかな実りの秋を迎えるのである。他方、思想詩成育の盛夏に『芸術家』(一七八九年)の如きシラーの雄篇が繁茂している。このシラーの「林苑」に「新たな盟約」を指し「息吹き」が到来したのを明確に告げるのは、「世界史の素材」から誕生した史劇『ドン・カルロス』(一七八七年)であろう。殊にこの劇作品を「崇高で純粋な歓呼」へと高める鍵は、ポーザと言う理想主義者の形姿にあったと考えられる。ブルクハルトも『シラー記念講演』でこう述べている。

全てがこの人物においては史実にあわず、もともと不可能なのです。しかしながら、このポーザは、ドイツの文芸と感情世界の発展にとり不可欠(unentbehrlich)であります。恐らくこう申して良いでしょう。この世界市民はドイツ文学におきまして、最も国民的な形姿(die nationalste Figur)なのです。⁽²²⁾

『世界史とは……』(一七八九年)と題した就任演説(註(136))でシラー自身が演説した思想は、既に自作悲劇『ドン・カルロス』において文芸上の表現を獲ており、「世界史の素材のもとに長くは留まらぬ」『哲学精神』が、「最も国民的な形姿」として「ドイツの文芸と感情世界の発展にとり不可欠」となっていたのである。

このシラーの「林苑」の「息吹き」を、ヘルダーリンほど満身に浴び、「そこで巨匠の円熟した精神が、自然よりも威圧的で無理なく、だがそれ故また一層と無理やり積極的に若い芸術家に働きかけ」た場合も稀であろう。確かに『カルロス』を冷静に読むことは、恐らく容易ではないでしょう。⁽¹³⁶⁾とヘルダーリン自身一七九九年九月上旬シラー宛書簡で、なお正直に告白している程なのであるが、しかし同時に先師シラーの「哲学精神」の本質を詩人は同書簡において的確に擲んでいる。

先生の『フィエスコ(の反乱)』(一七八三年)も私は研究しました。そして正にまた再び内的構造(der innere Bau)を、あの生き生きとした全き形成(die ganze lebendige Gestalt)を、すなわち私見によりますれば、当作品のこの最も不滅な点(das Unvergänglichste)を、偉大でしかも実に真実味ある諸性格や輝やかしい諸々の場面とか言葉の魔力的な彩り豊かな展開(magische Farbenspiele der Sprache)より以上に驚嘆いたしました。⁽¹³⁷⁾

(一七九九年九月上旬シラー宛書簡一九四)

ヘルダーリンは作品の「個々の瞬間とか個々の状況(場面)」を永遠化するを根本から諦観し、極めて高貴で威力ある表現様式における情操の全体(註(142))を見据え、しかもこれを造形彫刻のような「明晰な概念」としてよりは、むしろ意識の内観を力強くうねる「音楽的なもの」(註(134))つまり「生き生きとした全き形成」の脈動として擲んでいると考えられる。

「思想へと高め」られ諧調なして響き渡たるドイツ古典交響曲に通じ、

「協和一致を希求」する「哲学精神」(註(136))の「息吹き」(註(1))が、『パンとぶどう酒』にもシラーの「林苑」から伝わり、当詩歌は鮮明な個々の表現にも増して、その奥底を滔々と「魂の歌声」が脈動し、心の遠い彼方の「至福なるギリシア」(註(13))の果てに始めて、「協和一致し協和一致させる神」(註(137))をキリスト像として理念追求する。かく「調和一致を希求」する精神の動向を、シラーは匿名での文芸批評『ビュルガーの詩歌について(Uber Bürgers Gedichte)』⁽¹³⁸⁾(一七九一年)において、「理想化技法(Idealisierung)」と命名している。

詩人に要請される必要条件の一つが理想化(Idealisierung)であり、気高くすること(Veredlung)であり、これなくしては詩人の名に値しなくなる。詩人に相応しいことは、自らの対象の卓拔性を……粗雑で少くとも異質な玉石混淆(Beimischungen)から解放し、様々な諸対象に散在せる完全性の光(Strahlen von Vollkommenheit)を、或る唯一の光のもとに集めることである。……この理想化技法(Idealisierung)がビュルガー氏に見られないのを私達は遺憾とするのである。⁽¹³⁹⁾

一見この文面からは、疾風怒濤のゲッティンゲン林苑同盟(註(86))の一員シュトルベルクが唱導した「気高くする(veredlen)生き生きとした感情」つまり「靈感(Begeisterung)」(註(113))が話題とされている様に見受けられるが、それに対してシラーは応え、「靈感のみでは十分でなく、要請されるのは教養ある精神の靈感(die Begeisterung eines gebildeten Geistes)なのである。⁽¹⁴⁰⁾」と述べている。

「教養(Bildung)」すなわち精神形成が此所では鍵となり、ヘルダーリンが正にシラーに見出しした、この「生き生きとした全き形成」(註(147))こそが「理想化技法」(註(149))の要と考えられる。つまり「体験詩」(註(140))や「恋愛詩」(註(142))とともにビュルガーの「実に卓抜した機会詩(ein sehr vortreffliches Gelegenheitsgedicht)」⁽¹⁴¹⁾に

も恐らくドイツ歌曲類と同様に、古典交響曲に見られるような「理想化された純粋性と完璧さ (die ideale Reinheit und Vollendung) (15)」は望み得ない。他方この精神形成 (Bildung) の「純粋性と完璧さ」を達成せんと、『芸術家』とか『パンとぶどう酒』などドイツ抒情思想詩 (Gedankenlyrik) が奏でられたのであり、更に「玉石混淆」(註(149))の悲喜劇『ファウスト』(註(66))に至っても尚マーラーの第八交響曲 (一九〇七年) の響きで「音楽の精髓」から純化され理想化されて竟に「永遠なる女性がわれらを引き上げる (Das Ewig-Weibliche / Zieht uns hinan) (16)」のである。

(9) 「保守と革命の盟約」

当の「靈感のみ (Begeisterung allein)」ならぬ「教養ある精神の靈感」(註(150))は蓋し、西欧近世なかならず啓蒙期に顕著となり始めた「知識圏の拡大と職種の分業化」(17)を前提としており、この現存諸活動の分離個別化現象を根源に据えつつも、なお更に「強力な浄化された意志」(註(142))の脈動で以て「ドイツの文芸と感情世界の発展にとり不可欠」(註(144))となる「あの生き生きとした全き形成」(註(147))を成し遂げんと志向するのである。

知識圏の拡大と職種の分業化が必然としてもたらした、私達の精神諸力の個別化と断片的有効性に際して、それはまず詩歌芸術のみ (die Dichtkunst beinahe allein) である。魂の分離された諸力を再び協和一致 (Vereinigung) へともたらし、頭脳と心、洞察と創意、理性と想像力とを調和ある盟約 (harmonischer Bund) のもとで活動させ、言わば全き人間 (der ganze Mensch) を私達の中に生み出すのは (詩歌芸術のみである) (18)。

前述の『シラー記念講演』においてブルクハルトが、分業化された「専門分野で誠心誠意なす最も強力な証左」(註(139))をシラーの『芸術家』に見たのも、恐らくこの様な「理想化技法」(註(149))が目指す「調

和ある盟約」と「全き人間」を理想追求してのことであろう。

此所に「全き人間」を志向する「新たな盟約」がある。『パンとぶどう酒』もこの「盟約」へと結ばれる。当の「盟約」は新たな時代の動きとしての「個別化」「分離」(註(153))を忌避せず、敢てこの「否定的なるものの物々しい力量」(註(136))を「哲学精神」(註(136))は恐れず見詰め、この根源分離なす「絶対的分裂の只中においてこそ、精神は真理を獲得する」(19)のである。故に血気者シュトルベルクが期待したような甘美に「心魂が溶け込みゆく至福の時機」(註(114))へと逃避するならば、「詩歌芸術」も「あたかも鉄砲玉のように、絶対知から直接始まる靈感 (Begeisterung) (20)」に過ぎなくなると考えられる。

シラーの「盟約」は「魂の分離された諸力」(註(153))を言わば核分裂の如き「否定的なるものの物々しい力量」(註(154))として前提としつつも、更に核融合させ再び「或る唯一の光のもとに集める」(註(149))ことを主眼としている。従って『芸術家』終結部の詩歌象徴が、「かく滔々と唯一の真理の盟約の中へと、ただ一条の光の流れへと回帰する」(註(135))と締め括られる以前には、あらかじめ『ギリシアの神々」(註(108))に見られるような、厳しい「切開 (Absonderung)」と新たな縫合 (Zusammenfügung) (21)への努力が大前提として横たわっているのである。

例えば「神聖なる野蛮人」(註(108))とシラーが西欧キリスト者の意識を「切開」して見せると、「靈感のみ」を事としたシュトルベルクは「冒瀆 (Frevel) (22)」だの「瀆神 (Lastung) (23)」だのと憤るばかりで、ノヴァーリスが危惧を抱いた通り、「神聖なる熱意に燃えてシラーを地獄へと真逆に投げ落とした」(註(109))のである。反してヘルダーリンは当の「神々」と「神聖なる野蛮人」との確執を、『パンとぶどう酒』において一層と深化させ、「古典ギリシアとキリスト教西欧」(24)が織り成す幽玄な魂の明暗として継承する。つまり「至福なるギリシア」(第

五五句」と「乏しき時代」(第二二句)の明暗がこれである。

明暗とは同一意識内における「私達の精神諸力」が「職種の分業化 (die Absonderung der Berufsgeschäfte)」(註(153))を敢行すると顕著になる。西欧キリスト者の心は「古典ギリシアとキリスト教西欧」の両極へと「切開 (Absonderung)」(註(157))され深淵の闇を覗く、と同時に内心の葛藤は炸裂した魂の「新たな縫合 (Zusammenfügung)」(註(157))を求め、久遠の「至福なるギリシア」(註(13))の果てに「無限の協和一致」(註(137))なすキリスト像を詩歌象徴として理念追求するのである。

この「分業化」のもたらした心魂の核分裂と核融合に、シュトルベルクが心を掻き乱されたのも無理はない。実に当のシラーでさえも後に、「この状態は危険なもの」(註(137))であると恐れ、自己の分身ヘルダーリンから離れ、むしろ「恋愛詩」(註(142))や「体験詩」(註(140))の達人ゲーテと結んだ程であった。

近いのだ (Nah ist)

しかも抱え難いのだ、神は。

だが危険 (Gefahr) ある所、生育するのだ

救い (Das Rettende) もまた

(『パトモス』初稿、一八〇二年、第二節冒頭、第一句―第四句)

あたかも唯一の実子イサークを神に促され犠牲に捧げんとした「かの氣高い牧者アブラーハム」(註(102))の心にも宿る逆説(パラドクス)思考が、西欧キリスト者ならではの果敢な心魂の投機を企て、古典ギリシアの明鏡へと西欧キリスト者の既成意識を放下する。尚も「靈感のみ」にて旧き意識を丸く収めようとするれば、「神聖なる野蛮人」に留まらざるを得なくなるのである。

すなわち『聖書』のみが唯一無比な神権を振り翳す時代は、文芸復興

(Renaissance) 以来おもむろに終焉を迎えつつある。シラーやヘルダーリンの詩歌象徴「神聖なる野蛮人」や「至福なるギリシア」は、この歴史の進展する方向に拍車をかける。他方シュトルベルクは新時代の流れに抗して、敢て「聖書と自然」のみを範として「俗界からはなれた自然の中の自由」を獲ようとする。この筋が興味深いことに、シラーの『ギリシアの神々』が刊行された一七八八年に成るシュトルベルクの架空物語『島 (Die Insel)』に見い出される。

一応シュトルベルクは「林苑同盟」(註(86))の「息吹き」に推参した純粹な情操の持主なのであるから、封建制下ドイツ諸領邦宮廷の「牧歌風現実」(註(64))に組せず、更には「二十世紀よりの自由の歌 (Freiheitsgesang)」(一七七五年)に見られるように「暴君たちの鮮血! (Der Tyrannen Blut!)」が流れるのを求めた反専制の熱血漢であるとともに、優しい「心の充盈 (Fülle des Herzens)」をも表現し得た繊細な心の人であった。実に初期ヘルダーリンの詩作にさえ抒情詩人シュトルベルクの影響は垣間見られる程である。従って『島』に「封建的な農業制度の批判」つまり「農奴制の批判」など、当時の「時代の尖端を行く時代批判、文明批判」が見られるのも不思議ではない。

ところが『島』でシュトルベルクは、「あくまでもキリスト教の立場に立っており、その隠者風の内面性と家父長的な權威主義の精神」が、現実には旧封建体制の温床となっていた「農業の優位 (Die überwiegende Bedeutung des Ackerbaus)」をまで疑問視するに至らず、『島』には「工業や商業は存在せず、すべてのものが同一の職業、農業に従事し、…従って分業は存在せず…分業を必要としないだけの自然の環境があることになっている」のであるから、当時芽生えつつあった新たな産業革命の「息吹き」などシュトルベルクの関心をひく所ではなかったであろう。

反して『パンとぶどう酒』冒頭では「手仕事の品々」(第六句)のみならず、「して収支得失を慮る思慮深い家長(Und Gewinn und Verlust wäget ein sinniges Haupt)」(第四句)が、引き続き第五句にかけて「悠然と和やかにわが家にくつろぐ(Wohnzufrieden zu Haus)」(註(1))と高唱される。「高唱?」と異議を挟む人は今なお居るかも知れない。実際に和訳ヘルダーリン全集(註(50))の第二巻で当該の箇所(第四句―第五句)は、「抜かりのない商人はわが家にくつろいでその日の損益を思いはかる」(手塚富雄訳)と訳されており、また近年の専門研究書『一八〇〇年頃の悲哀と理想——ヘルダーリンの悲歌作品研究』(一九八二年)においてヴァックヴィッツは当該の第四句に搾取階級ブルジョワ(bourgeois)を読み取り、第五句で「悠然と和やかにわが家にくつろぐ」と歌われる根拠を「市場での営業が儲かったからである(denn die Praxis des Markts hat sich gelohnt)」と説明している。この様に商工業の筋を、思念溢れ内面性豊かな『パンとぶどう酒』の如きヘルダーリン詩歌の基調に反する異物と看做すことが、今日の信憑性ある専門研究家にも見られるのであるから、昔日の不十分な資料と実証に基づいた理解において、ヘルダーリンが「保守的文化理念」の代表者として名を挙げられたのも不思議ではない。

例えば「もしカール・マルクスが、フリードリヒ・ヘルダーリンを読んだとしたならば」(註(10))と想定して、トーマス・マン(一八七五年―一九五五年)が『文化と社会主義(Kultur und Sozialismus)』(一九二九年)の終結部で、「保守的文化理念と革命的社會思想との盟約と協定(ein Bund und Pakt der konservativen Kulturidee mit dem revolutionären Gesellschaftsgedanken)」(註(11))を物語る場合がこれである。

焦眉の急に思われ、畢竟ドイツ的たり得るであらうことは、恐らく保守的文化理念と革命的社會思想との盟約(Bund)と協定、かい摘んで言えばギリ

シアとモスクワとの間の盟約と協定であらう。——既にかつて私はこの事を尖鋭化して、こう言った。ドイツに關して始めて良くなるであらう。そしてこの事が正に見い出されたことになるであらう。もしカール・マルクスが、フリードリヒ・ヘルダーリンを読んだとしたならば——(註(12))。

「保守的文化理念」の代表者と此所で看做されているヘルダーリン自身が『ヒュペーリオン』(註(4))の副題を「ギリシアの隠者(Der Eremit in Griechenland)」としており、正にこの長篇小説の第一巻(一七九七年)が「神聖なる自然! (Heilige Natur!)」や「靈感! (Begeisterung!)」や「精神の息吹き(das geistige Wehen)」や「高唱する点を念頭に置くならば、『パンとぶどう酒』第十三句で目下話題の「息吹き(ein Wehn)」(註(1))も「靈感」(註(113))のみを事とするシュトルベルク流の「隠者風の内面性」(註(171))から擷まれ、「革命的社會思想」を閉め出す「保守的文化理念」の象徴に過ぎなくなるかも知れない。もし西欧キリスト者の既成意識が「至福なるギリシア」(註(13))へと心魂を放下せず、敢て未来の彼方へと現存の可能性を投機しないで「聖書と自然」(註(163))のみを範とするならば。

確かにシュトルベルクの場合はそうであり、「俗界からはなれた自然の中の自由」(註(164))を獲ただけであつた。ところが『パンとぶどう酒』をヘルダーリンは敢て「俗界」から歌い始める。そしてこの思想詩冒頭の都市像において、第四句から第五句にかけて「思慮深い家長」(註(175))が高唱され、抒情詩において「俗界」の「収支得失(Gewinn und Verlust)」が同時に内省化され「聖化(Sanctification)」されることになる。かくしてシュトルベルクの架空物語「島」のように「工業や商業は存在せず、すべてのものが同一の職業、農業に従事し、…従つて分業は存せず…分業を必要としないだけの自然の環境があること」(註(173))は、ヘルダーリンの『パンとぶどう酒』冒頭の場合において考え難いことなのである。

しかも「分業」は『パンとぶどう酒』の詩想展開において、一重に意識内面で繰り広げられる「切開と新たな縫合」(註(157))にのみ留まらず、更に濃淡細やかな明暗を織り成す「俗界」と精神界との相互対話^{gegenseitige Dialogik}として、詩人の内観と史実の外観との両面が映える現実を形造る。例えば筆者が別論で探究した第四句の詩歌象徴「思慮深い家長」(註(175))こそ当の証左と考えられる。すなわち「家長」の背後に控える詩人の親友ランダウエル(一七六九年—一八四五年)は工場制手工業へと躍進するドイツ産業革命の担い手「ランダウエル絨毯毛織物商会」(一七九七年創設)を経営し「収支得失を慮る思慮深い家長」たる豪商であり、ヘルダーリンと「同様に政治上で共和主義者にして民主主義者であった」^{(註(158))}と考えられ、そして経済上の地盤から新たな民主共和制ドイツを目指す産業界の豪商ランダウエルと、心の内なる精神界へと深く物思いに耽るゲルマニア風詩人ヘルダーリンとの邂逅が礎となり、当の「思慮深い家長」に言わば「保守的文化理念と革命的社會思想の盟約」(註(178))が結ばれ得ることになるのである。

この様な「新たな盟約」を、ヴァイマル古典主義の「丸く収まった芸術作品(ein abgerundetes Kunstwerk)」^{(註(159))}に見い出すのは難い。なぜなら一七八八年十二月二十五日ケルナー宛書簡でシラーが既に述べているような考え、すなわち「どの芸術作品も作品そのものにのみ、つまり作品固有の美の規則にのみ弁明すれば良く、如何なるほかの要請にも従わない」^{(註(160))}と云う芸術観からは恐らく、「革命的社會思想」を孕む「俗界」へと開かれた詩魂は期待できないであろう。事実これを裏付けるように『古典主義と革命(Classicismo e Rivoluzione)』(一九六九年)第五章でバイオーニが論述した「ヴァイマル古典主義により実現した美学的反動(von der Weimarer Klassik bewirkte ästhetische Restauration)」^{(註(161))}には「疾風怒濤から初期ロマン派の若き旗手へと受け継がれた彼の進歩的で革命的な醗酵素(jene fortschrittlichen und revolution-

nären Fermente)を何もかも排斥する傾向」^{(註(162))}が見られるのである。

他方ヘルダーリンに「保守的文化理念」のみを見て、「革命的社會思想」(註(178))を認めない解釈は、今日のフランス共和国におけるドイツ研究、例えばオントの『知られざるヘーゲル(Hegel secret)』^{(註(163))}(一九六八年)とかベルトの『ヘルダーリンと仏革命』^{(註(164))}(一九六九年)などの研究成果により論駁されており、次第に一面的な理解として歴史の過去へと埋没しつつある。実際「もしカール・マルクスがフリードリヒ・ヘルダーリンを読んだとしたならば」(註(178))と云うマンの着想は、現実の演劇界でヴァイスの戯曲『ヘルダーリン』^{(註(165))}(一九七二年)において巧妙に筋書き通り上演されている程であり、ヘルダーリンを読んで感激して詩人その人に会いに来る若きマルクス登場の大団円(第八場)に、正に当の「保守的文化理念と革命的社會思想との盟約」が見事に造形化されているのである。

かくして『パンとぶどう酒』第十三句において「林苑の(檜の)樹頭を天上へと揺り動かす(ragt die Gipfel des Hains auf)」^{(註(166))}「息吹き(ein Wehn)」(註(1))の目指す「新たな盟約」が、一重に美学芸術上の内なる苦闘の諸相のみならず、更に啓蒙と革命の時代を生きた市民意識に宿る「人倫の偉容(eine sittliche Größe)」(註(74))の下にも考察されたと思われる。この様にヘルダーリンの詩歌象徴の意味する所は広く深いと言え、本論の冒頭で引いたシュミット註解(註(3))に見られるような、詩人の用語や語法を修辭上で整理するだけの実証研究では詩想の内実へと推参するに覚束なからう。故に今後とも『パンとぶどう酒』の詩想を一角でも穿たんとするならば、西欧意識の内外に互る広汎な歴史文化遺産と真摯に相互対話を織り成しつつ、一步一步と着実に理解の鑿を打ち込んでゆかねばならないのである。

註 解

(4) 林苑と盟約

(a) 「息吹き」

(1) ヘルダーリン全集、シュトゥットガルト版、一九四六年—七七年(索引一九八五年)、第二巻、九〇頁。参考のため第一句から第十二句までも此所に掲げておく。

静かに安らう都市。ひそやかに街路に燈火がともし、

して松明に飾られて騒然と馬車は疾駆し過ぎ去る。

満ち足りて家路へと、昼間の歎びに別れを告げ、安らぎを求め歩

みゆく人々。

して収支得失を慮る思慮深い家長は

五 悠然と和やかにわが家にくつろぐ、(黄昏の今は) 葡萄も花束も

なく、

して手仕事の品々もなく安らう、(昼間は) 忙しき広場の市場。

だが他方、豎琴の音が彼方の庭園から響いて来る。恐らくは

そこで、恋人が奏で、或いは孤独な者が

彼方の友を想いつつ、また若き日を偲びつつ。して噴泉が

一〇 滔々と湧き、清冽な水しぶきをあげ迸り、芳香に匂う花壇を

濡している。

ひそやかに黄昏の夜気に響き渡たる晩鐘の音、

して時刻を想い、その数を夜警は声高に呼ばわる。

今や又ある息吹きが到来し、林苑の樹頭を揺り動かす。

形象面で「芳香に匂う花壇」(第一〇句)と「林苑の樹頭」(第二三句)との

対比は、カントが前者を「美」に、後者を「崇高」に関連させて考察してい

る例からも察せられる通り、「美と崇高の感情」の明暗を織り成している

と考えられ、この転調は当詩歌において見事である。註(21) 作品集、第二巻、

二〇八頁、カント『美と崇高の感情に関する諸考察』(一七六四年) 第一節

参照、「聖なる林苑の高き樅の樹林や孤独な木影は崇高で、花壇や……」。

(2) 『旧約聖書』「創世記」第一章、第二節などを参照。ドイツ聖書協会刊シュ

トゥットガルト版(ブライ語聖書(一九六七年—七七年、一九八四年)二頁。

同協会刊ギリシア語七十人訳聖書セプトウアーギンター(一九三五年、

一九七九年) 第一巻、一頁。同協会刊ラテン語訳公認ウルガータ聖書

(一九六九年、一九八三年) 第一巻、四頁。同協会刊一五四五年版ルター訳ド

イツ語聖書(一九六七年、一九八三年) 前巻、一頁右。

(3) ヘルダーリンのエレギー「パンとぶどう酒」一九六八年、三七頁。

(4) 「長篇哲学小説(philosophischer Roman)」と「ロベール・リオン」をニ

チェの『ツァラトゥストラはこう語った』(一八八三年—八五年)と並べ命

名したのは、ディルタイ著「体験と創作」第八版、一九三二年、三九六頁)

であり、その主旨は『ヒューベリオン』がハイム著「ロマン派」(初版、

一八七〇年)で解されたような「浪漫詩文の傍系(ein Seitentrieb der

romantischen Poesie)」(二八九頁)では無いということである。蓋し浪

漫風憧憬や浪漫情緒をも許容し得るヘルダーリンの作品解釈において、これ

は微妙な問題と考えられ、当該の『パンとぶどう酒』第十三句の読解におい

ても「浪漫詩文」の流れから端的に切り離してしまうことなく、但しその

「傍系」へと流れ去らぬように留意して、敢て思想詩(Gedankenlyrik)の

精華と言い得るこの雄篇の詩想の核心へと迫りゆくことが望まれよう。

(5) 全集、第三巻、五〇頁。註(182) 参照。

(6) 全集、第二巻、七四頁。

(7) 全集、第二巻、一四八頁。

(8) ヘルダーリンのエレギー「パンとぶどう酒」(註(3)) 三八頁。論拠は全

集の第二巻所収バイスナー註(六二九頁)より得ている。

ヘルダーリンとその同時代人(殊にゲーテ)は、この言葉を今日の語法と

異なり尚文字通りの意味に近く、「何かを上へ動かす」として使っている。

(第二巻、六二九頁)

(b) 「林苑」と「ねたむ神」

(9) 一五四五年版ルター訳聖書(註(2)) 前巻、七頁右。八頁左。九頁左。

九頁右。九頁右。一〇頁左。

ら遠くけようとする。… 私達を満足さすべきは、国内(ドイツ)の樅(Landische Eiche)である。」(一九六二年刊ハンザー版クロプシュトック選集註解一二六頁に引用)と述べているのが興味深い(アルテミス記念版、第一巻「ゲーテ詩歌全集(決定版)」、一九五〇年、三五五頁)。

(19) 右記(註(18))頌歌集、一九六頁。「トウイスコン」第一節、第三句。

※時代は下るが『経験の歌(Songs of Experience)』(一七九四年)の「序(Introduction)」で英国詩人ブレイク(一七五七年—一八二七年)が、「太古の樹林の間を歩んだ(That walk'd among the ancient trees)」神言(The Holy Word)を耳にした」(第三句—第五句)「北欧歌人の声を聴け(Hear the voice of the Bard)！」(第一句)と歌っているのも興味深い。レクラム文庫版英独対訳『英国浪漫派詩歌集』(一九八〇年)五〇頁にケインズ編『著作全集(Complete Writings)』(一九六六年)より引用。

(20) 右記(註(18))頌歌集、一九六頁。

※註(134)でシラーが言う「音楽的なもの」が此所でも本質をなし、『ドイツの特性と芸術について』(一七七三年)所収の『オシアン論』でヘルダーが語る、「自作詩歌の滔々と歌う箇所におけるクロプシュトック」(註(17)全集、第五巻、一八五頁)が問題となる。この点ゲーテの前述の格言詩(註(18))と同様に、「一七七〇年頃のヘルダーの書評の如く、「クロプシュトックが…ドイツの林苑(Hain)をギリシア詩壇(Parnassus)に対抗させる！」(同巻、三三七頁)とも言うべき北欧吟唱歌を含む頌歌類と共に、何より「救世主」全二十歌(一七四八年—一七三年)が注目されて然るべきであろう。なぜなら当叙事詩完結の一七七三年にヘルダーが評した様に、正に「救世主」においてこそ、「ほほ言葉は…堅いドイツ語(harte Deutsche Sprache)たることを止め、調へ(Ton)となり黄金の琴線の和音(Anklang)となる」(同巻、二五九頁)ことが確かめられるからである(同巻、三五〇頁も参照)。

更に加えて用語の問題であるけれども、話題のクロプシュトックの頌歌「トウイスコン」第九句以下に、「してドイツの祖は、それを聴き取り(Und This-kon vernimmt)」…「て耳をそばだてて(und horcht)」とある所の二つの動詞「聴き取る(vernehmen)」と「耳をそばだてて(horchen)」は、後世シラーの詩歌「守護神(Der Genius)」(一七九五年)第三三句にも現われる。

Das entweihete Gefühl ist nicht mehr Stimme der Götter,
Und das Orakel verstummt in der entadelten Brust.

三三三 Nur in dem stilleren Selbst vernimmt es der horrende Geist
noch,
Und den heiligen Sinn hütet das mystische Wort.

穢れた感情はもはや神々の声にあらず、
して神託は卑俗化した胸中で沈黙し、

三三三 ただ密やかな自己の内奥でのみ、耳をそばだてる精神が尚それを聴き
取り、
聖なる秘義を神秘の言葉がうち守る。

(ヴァイマル版シラー全集、第二巻、第一部、一九八三年、三〇二頁)

但しヘルダーリンが「聴き取る」(註(14))のは「ヴァイマル古典主義により実現した美学的反動」(註(186))の「聖なる秘義」ではない。

(21) カント「純粹理性批判」(初版、一七八一年)が、十八世紀啓蒙の単なる理論理性の限界を突き破り、「純粹理性の所産(Producte der reinen Vernunft)」と言える「道德法則(die moralischen Gesetze)」を理念追求した労作である点は周知のことである。この点は「先驗的方法論」第二章「純粹理性の規準」第一節(初版、八〇〇頁)参照。プロイセン学士院版に拠るカント作品集(複写版)一九六八年、第三巻、五二〇頁。再版、一七八七年、八二八頁。

※「理性(Vernunft)」とは、まさに神の事業の理解(聴く)(das Vernehmen)だから「ヘーゲル『歴史哲学』(一八三七年)序論(第一篇 一般序論)」(二、「世界史の理性観」B、「歴史の理念とその実現」(b)「理念の実現のための手段」、岩波文庫、武市健人訳、全三巻、一九七一年、上巻、一〇七頁。一八三二年—四五年版に拠るヘーゲル作品集、全二十巻、一九六九年—七一年(索引一九七九年)、第十二巻「歴史哲学講義」序論B、b)五三頁。)

(22) 尾崎和彦「北歐の世界観の基底—エッダ「巫女の予言」を通して—」(明治大学人文科学研究紀要、第二十冊、一九八一年)五頁の「原詩と翻訳」に依る。なお原詩校本は、一九二三年レイキヤヴィク刊ノルダル編「巫女の予言」で、尾崎訳は「私は、…静聴(譚聴)をお願いする。」となっ

ている。

※谷口幸男訳『エッダ―古代北欧歌謡集』(新潮社、一九七三年) 十六頁の註で指摘されているように、この「静聴」に関連しては、タキトウス『ゲルマニア』第十一章に記されている、古代民会の始まる折に「神官の(命じる) 静粛(silentium per sacerdotes)」(東独版レクラム文庫羅独対訳『ゲルマニア』第七版、一九七六年、二〇頁)に注目するとともに、「多くの北欧詩人が詩の冒頭に聴衆に静粛を求める」点、および『エッダ』とか『オシアン』の作品自体が正に当の「静粛」を基盤として心に響く北欧の歌声である点、すなわち視覚造形彩り鮮かな南欧の詩文とは趣きを異にして、言わば「音楽の精髓から」(ニーチェ『悲劇の誕生』一八七二年) たち現われる聴覚と音響の世界である点に留意したい。

(23) 全集、第二巻、二〇二頁。

(d) 「魂の目」と「魂の歌声」

(24) ボーマン『…ヘブライ人の思维』植田重雄訳、原著『ギリシア語との比較によるヘブライの思维』(Das hebraische Denken im Vergleich mit dem Griechischen) 再版(一九五四年)より和訳、新教出版社、初版一九五七年、復刊一九八四年、三二六頁。原著、第五版、一九六八年、二二八頁。訳書で「この神の語りかけを輝きとし」とある箇所を、筆者は「この神の語りかけを除き去り」と改めた。すなわち原著二二八頁に見い出される動詞(eliminieren)を、訳者は「輝きとし」と解したのであるが、筆者は当動詞を辞書に見い出すことが出来ず、むしろ原著の誤植で本来は「除き去り(eliminieren)」とすべきであらうと考えたからである。なお原著の第五版で引用箇所は註三二六として巻末に移し変えられている。また訳書中の「ギリシャ」は引用の際に「ギリシア」と改める。

実際フィロンの著作『アブラーハム論』第二九節を例に取れば、その第一四九章以下において「五官」のうち「味覚と嗅覚と触覚」は下位に置かれ、一応「聴覚(ἀκοή)と視覚(ὁρασις)」に格別な地位が与えられているけれども、「視覚」にこそ「魂の似姿(ψυχῆς εἰκών)」を見るフィロンの場合「魂の目」の圧倒的優位は揺らぐことがない。原典ローブ古典叢書

フィロン第六巻(一九三五年) 七六頁と七八頁、および独訳フィロン第一巻(一九〇九年) 一二七頁以下を参照。

※「魂の目」(τὸ τοῦ ψυχῆς ὄμμα)を上方へと導く」とプラトンの『国家』五三三D(作品集、学術書籍協会編、希独対訳、シュライエルマハー独訳、一九七一年、一八巻、第四巻、六二二頁)に見られる。その他は岩波書店刊『プラトン全集』別巻『総索引』(一九七八年) 五〇二頁に、「ソピステース二五四Aの「魂の目」や「饗宴」二二九Aの「精神の視力」とともに、『国家』第七巻の「洞窟の比喩」(殊に五一八)への言及がある。

※※当の「魂の眼」による「観照」から転じて、後述のルターにおけるごとく「ただ聞くこと」(註(33))へと専心するまでの道程は長かったようである。例えば教父アウグスティヌス(三五四年―四三〇年)にしても『告白』(三九七年―四〇〇年)で神に対し「我に聴かしめ(audiam) 知解せしめよ(intellegam)」(第十一巻、第三章、第五節。トイフナー古典叢書『告白』再版一九六九年、二六六頁)と祈願しているように、穀知(intellectus)を求める「魂の目」は強く、実際その第七巻、第十章、第十六節でこの脈絡をこう語っている。

私は内に入り見た、或る魂の目を以て、当のわが魂の目(oculum animae meae)の彼方、わが精神の彼方に不変の光を。…

(右記トイフナー古典叢書、一四〇頁)

興味深いことに「魂の目」は、あくまで働きつづけて残っており、「耳で聞かれるが目では見えない」(註(33))と言える時空へと魂が放下され、言わば「音楽の精髓から」(註(25))して始めて静聴する理性(註(20))に予感され聞こえてくると言う具合ではない。但し当の第十章、第十六節でアウグスティヌスは、

… 我は在りて在る者(ego sum qui sum)であるぞ」と(神の声が)私には聞こえた(audivi) あたかも心に聞こえるが如く(sicut audire in corde)。(右叢書一四一頁)

とも語っており、「魂の眼」のみに専念しているわけではない。この点はソクラテースの守護霊の声(註(77))に関しても同様である。

(25) 批判版全集、第三部、第一巻、一九七三年、一七頁。

(26) 右記(註(25))第三部、第一巻、七二頁。

- (27) 右記(註(25)) 第三部、第一巻、一一一頁。
 (28) 右記(註(25)) 第三部、第一巻、一二一頁。
 (29) 右記(註(25)) 第三部、第一巻、一二四頁。
 (30) 右記(註(25)) 第三部、第一巻、一二三頁。
 (31) 右記(註(25)) 第三部、第一巻、一二六頁。
 (32) 右記(註(25)) 第三部、第一巻、一四二頁。
 (33) 右記(註(25)) 第三部、第一巻、一四三頁。

※ルターと「魂の歌声」(註(23))との関連では、あくまで「人間の聴きとることを観照に変え」ずに「聖書原典で人間の耳が神の明らかな語りかけに出会う」(註(24))と言える場合を、ルターの『詩篇講義(Dicata super Psalterium)』(一五三一年—一六一年)に見出し得ると思われる。例えばヴァイマル版ルター全集の第一部・作品篇の第三巻(一八八五年)と第四巻(一八八六年)を底本とした笠利尚訳『詩篇講義』(中央公論社『世界の名著』一九六九年刊・第一八巻所収)にはこうある。

なぜなら、その中では見ることができず、むしろ、ただ聞くことだけができた神の聞、すなわち人間性の中に、神は隠されたかたとして知られずにいたものからである。

『詩篇』一八・一一の講解、三八九頁。原典、第三巻、一二四頁)

「わたしは聞きましよう」とあるのは、いつくしみと救いを得させる神の賜物は、われらの聴覚(auditus)に知らされているのであって、決して、われらの視覚(visus)に知らされているのではないからである。

…「神が語られること」とあるのは、神の言はただ聞くことによつてのみ正しく理解されるから(ut patet quia verbum dei non nisi auditu percipitur)。

『詩篇』八五・八の講解、四〇二頁。原典、第四巻、九頁)

人は、耳で聞かれる(auribus percipitur)が目では見えない(oculis non videtur)み言葉のみによつて導かれねばならないのである。

『詩篇』一一九・一〇五の講解、四〇五頁。原典、第四巻、三五六頁)

(34) 全集、第二巻、九二頁。

※「偉大なる運命が轟く」「至福なるギリシア」に関しては筆者の別論、ヘルダーリンの西欧ギリシア論——「至福なるギリシア」(一九八四年／八五年／八六年

度・高知大学学術研究報告、第三三巻／第三四巻／第三五巻、人文科学篇、一九八五年三月／八六年三月／八六年十二月刊、一三頁—一七頁／一頁—一七頁／一頁—一六頁所収)の「(二) 古典ギリシアとキリスト教西欧、(2) 悲劇の死と復活、(3) 偉大なる運命、(4) 古典神話の畏怖と荘厳(第三三巻、四四頁—五八頁)を参照されたい。

※※更に、「音楽の精髓からの悲劇の誕生」(註(25))を基調として「声明にも似た音声で呻吟された」と解す本論とは異なり、むしろ「視覚芸術で以て」「偉大なる運命が轟く」詩節(第六一句—第六四句)を把握しようとしたハリソンの研究書『ヘルダーリンとギリシア文学』(一九七五年)一〇四頁以下に対する批判は、筆者の欧文論文、ヘルダーリンの『パンとぶどう酒』における「至福なるギリシア」に関する一考察——「偉大なる運命」を最高潮として(一九七八年度・高知大学学術研究報告、第二七巻、人文科学篇、一九七九年二月刊、横組七頁—四二頁所収)の二三頁以下を参照されたい。例えばそこでハローティウス『歌章』第一巻・第三四歌・第二節(トイブナー古典叢書ホラーティウス作品集、一九五九年刊第三版復刻第五版一九七〇年刊、三五頁)から、「閃めく稲妻にて雲間を割くこと多かりし日のおほん父神が、(このたびは)轟きわたる馬と疾き車をば晴れわたる青天に駆らせたまうた」(現代思潮社版・古典文庫『歌章』藤井昇訳、一九七三年、六一頁)などと言う絵画風な描写が引用(一〇五頁)され、「このホラーティウスの形象表現で以て、ヘルダーリンが自然の神性への信仰を表明している」(同一一〇五頁)と指摘されているが、筆者は支持できない。なぜなら敢て話題の「ギリシア精神(The Spirit of Greece)」「(八四頁)」と言えるものは「パンとぶどう酒」の場合、「音楽の精髓」から誕生するからである。

(35) 右記(註(34))『西欧ギリシア論』の、(三) 神話の神、(1) 内面の飛翔(第三四巻、二二頁—二四頁)参照。

※話題の古代ゲルマニア風の根源より古典ギリシアの清澄なる時空を目指す詩想は、十全ではないけれども、既にクライストの自然讃歌『春』(二七四九年)冒頭にも確かめられるものである。

抱け私を！ 聖なる(林苑の)木蔭よ！ 汝ら甘美な魅力の住居よ、

汝ら、青葉繁く、眠れる暗き(霊)気に満ちた高き木立ちの九天井よ！

汝らは幾たびか孤独な詩人たちに、未来を被う天幕を裂き、

幾たびか詩人たちに清澄な神界オリュムポスの碧空の門戸を開き、
五 英雄たちと神々とを示したのだ。：

(レクラム文庫版『クライスト全集』一九七一年、一〇頁)
但し改訂版『春』(一七五六年)では「聖なる木蔭」が「木蔭の林苑」(右全集
一一頁)と改められ、「清澄な神界の碧空の門戸」に関する詩節は削除され
ている(同一頁)。

(36) 全集、第四卷、二八二頁。ヘルダーリン『宗教論』一七九九年。

「かくして全ての宗教の本質は詩歌象徴となるであろう。」(同頁)

(37) 『パンとぶどう酒』のキリスト像に関しては、右記(註(34))『西欧ギリ
シア論』の、(二)の(7)古典古代理念追求(第三四卷、七頁—一〇頁)と、
(三)の(10)最深の親密性(第三五卷、二頁—一四頁)を参照されたい。

(38) ニーチュ『悲劇の誕生、或いは、古典ギリシア精神と空無の思想』新版、
一八八六年。全集(註(25))第三部、第一卷、三頁。

(39) 註(1)参照。

(40) 「離在と噴泉」に関しては筆者の別論、『パンとぶどう酒』第一節「聖なる
夜」その三——「離在」と「噴泉」(一九八七年度・高知大学学術研究報告、
第三六卷、人文科学篇、一五頁—四二頁、一九八七年九月刊)を参照。

(41) 註(1)参照。

(e) 「息吹く樅」

(42) 右記(註(22))『ゲルマニア』一八頁。

(43) 全集、第二卷、九二頁。

五〇 パルナッソス山の麓へと、白雪が輝くデルポイの巖へと、
五一 かのオリュムポスの国土へと、かのキタイローンの山間へと、
五二 新緑の唐檜の青葉の下、実り落つ葡萄の撓撓なる地へと、かの地
には

五三 テーベーの泉が湧き、イスメーノス川がカドモスの地を滔々と流れ、
五四 かの地から由來し今や帰郷を兆す神(パックス)が到來する。

(『パンとぶどう酒』第三節、第五〇句—第五四句)
(44) 全集、第二卷、九四頁。

一四三 そうだ！ 歌人たちの言は正しい。酒神は昼と夜とを宥和し、
一四四 天空の星辰を永遠に上へと下へと導き、

一四五 いつも歓喜にみち、常緑の唐檜の青葉の如く、
一四六 この酒神の好む青葉の如く、また自ら木蔭から選んだ花冠の如し。
(『パンとぶどう酒』第九節、第一四三句—第一四六句)

(45) 全集、第二卷、八六頁—八八頁。第一節、第七句—第八句/第一五句—第
一六句、八六頁。第二節、第二七句—第二八句/第三四句—第三六句、八七
頁。第五節、第七七句—第七八句、八八頁。

※ハラー『スイス詩歌の試み』初版(一八三三年)所収『アルペン山脈(Die
Alpen)』第一〇節には、ベルン共和国の高山地方における祝祭(Bergfeste)
に関連(註(84)選集、二〇頁)して「樅」が歌われている。(選集、一九頁)。

九一 蒸し暑い大気ゆえ生温かい風が肌を撫で、

九二 巨大な日輪の純然たる光が、青春の血を滾らせる頃、

九三 村(の人々)は、こんもりとした樅の樹林の影(Schatten breiter
Bichen)に集い、

九四 (若者と娘の) 技と優美が衆目を集める。

当詩節は以後の改作では第十一節(第一〇一句—第一〇四句)に相当する。

※※話題の祝祭空間に現われる「樅の樹林」(註(17))が、本論の扱う『パンと
ぶどう酒』第十三句で歌われた「息吹く林苑の樹頭」(註(1))に関連する。

この脈絡で注目されるのがノヴァーリスの論文「靈感について(Von der
Begeisterung)」(一七八九年前後)の冒頭(註(109)著作集、第二卷、九〇
頁—九二頁)である。当論ではまず「始源の風(Der erste Wind)」が取り上
げられ、これが「樅の樹頭(Gipfel der Eiche)を喰り過ぎた」と言える太古

の昔日が考え併される。その折には「力強き存在が現存するという思想」があ
り、「人類が若々しく充実した大河の漲り」を示し、「この上なく崇高で力強い
感情と情熱の高貴なる嵐の娘たる詩歌芸術(Dichtkunst)が始めて誕生した」
とある。此所にノヴァーリスは、「気高き靈感(hohe Begeisterung)」とか
「かの神々しい焰(Jenes göttliche Feuer)」を認めるわけ。

(46) 『セプトゥアーギンター』(註(2))第一卷、一三頁。

(47) ランゲンシャイト版メンゲ編ギュートリング『希独大辞典』第二版、
一九七三年、一九二頁。

- (48) 「林苑(エーローン)」と「樹木(アローン)」に関しては、ゲゼニウス『旧約ヘブライ語・アラム語中型辞典(Handwörterbuch)』(第十七版、一九一五年)四二頁左段参照。

- (49) 『シュトゥットガルト版ヘブライ語聖書』(註(2))五八頁。『一五四五年版ルター訳ドイツ語聖書』(註(2))前巻、二二頁左段、「嘆きの榎(die Klageiche)」参照。

- (50) 例えば『シュトゥットガルト』第二節の第三四句(註(45))の「榎の木(Eichbaum)」が、和訳「ヘルダーリン全集」(河出書房新社、一九六六年・六九年)第二巻の一〇四頁で「榎の樹」(手塚富雄訳)と訳されており、同様に『ムネーモシネー』再稿の第十一句(全集、第二巻、一九五頁)で「榎の樹林が息吹く(Eichbaume wehn)」と歌われている箇所も和訳全集の第二巻の二四一頁で「かしわの樹々は風にゆれる」(浅井真男訳)となっている。また詩人が直接「榎」を歌った「榎の樹々(Die Eichbaume)」(全集、第一巻、二〇一頁)も和訳全集の第一巻の二三五頁で「かしわの樹」(生野幸吉訳)と訳され、更に別の訳者の訳語も「かしわ」とか「榎」や「榎」とあるのみで「榎」「榎」「榎」は見られない。但し生野幸吉訳では折に「榎」(和訳全集、第一巻、一一〇頁と一一五頁)と振仮名で「榎」を指し、漢字で「かしわ」に当たる字を使う表現が見られる。

- (51) 作品集(註(16))第三巻、一三七頁。

- ※ 聳える逼しき榎の広葉に巻かれ」と『ファウスト』第七八二二句で歌われている「榎」でも、後に見る「牧歌風現実を気安く好む趣向」(註(64))に適合する形象として取り上げられると、例えばザロモン・ゲスナー(一七三〇年・一七八年)の「牧歌(Idyllen)」(レクラム文庫、一九七三年)所収の散文詩『夜(Die Nacht)』(一七五三年)で「細くしなやかな榎の樹々(schlanke Eichen)」(八頁)と表現される。

(f) 「樹齡千年の榎」

- (52) 全集、第一巻、二九頁。
(53) 全集、第一巻、五五頁。

- (54) 『テックの峰』第三九句。全集、第一巻、五六頁。
(55) カムペ編『ドイツ語辞典』第一巻(一八〇七年)、三修社複刻一九六九年、八二六頁。

- (56) 「カシ」類はコナラ属 Quercus の一亜属、すなわちカシ亜属 Cyclobalanus として取扱われるが、カシ属 Cyclobalanopsis として独立させる見解もある(日本語版『ブリタニカ国際大百科事典』第四巻、一九七二年、「カシ」の項、西田誠(英文原典参考追補)執筆、二六七頁)。

- ※ この様に学名では「クエルクス(Quercus)」を「カシ」よりは「コナラ」で示すので、落葉の「洋榎」は「榎」とでも呼ぶ方が正確であろう。因みに平凡社世界大百科事典の第五巻(一九七二年)には、佐竹義輔執筆の説明(四九一頁)にてこうある。「俗にカシとは、常緑のアラカシ、イチイガシ、アカガシ、ウラジロガシなどをさしているが、植物学的にいうときは落葉のナラ類もカシに含められ、ブナ科の中の常緑または落葉の高木の一群をさす。…大きく分けて落葉のナラ類と、常緑のカシ類に区別される。」

- (57) ヘルダー社『植物事典』一九七五年、五四頁。「(秋に落葉する)夏榎(クエルニクス・ローブル)、欧川全域に分布する(所謂、古榎)。…(常緑の)冬榎あるいは石榎(クエルニクス・ペトラエア)、比較的狭い分布地域を有す。」

- (58) ランゲンシャイト社刊メンゲとギュートリング編に拠る『中型羅独辞典(Handwörterbuch)』(一九七一年、一九八三年)五五三頁。

- (59) クレーナー版『ドイツ民俗学事典』第三版、一九七四年、一六〇頁、「榎」の項。

- ※ 『マイヤー百科事典』第七巻、一九七三年、四六七頁の「榎」の項には、「ガイスマル(恐らくフリッツラー付近のガイスマル)にあった(雷神)ドーナルの榎を、ボンファートイウスは七二四年に切り倒させた」とある。

- (60) 『新ブロックハウス百科事典』第一巻、一九三六年、六四六頁。「榎」の項。※ 「崇拜の神木」は本論との係わりで「人倫の偉容」(註(74))に相応しい筋で探求されているが、他方この「神木」に纏わる売春乱交の面も等閑視できない。例えば既出の『創世紀』第三五章の「嘆きの榎(アローン・バクトート)」(註(49))を踏まえるなら、『イザヤ書』第一章の第二九節(註(11)和訳『旧約聖書』九四四頁)での「榎(Eichen)」(註(2))一五四五年版ルター訳聖書、

後巻、六頁)が、淫乱な偶像崇拜との関連で意味深長である。

あなたがたは、みずから喜んだかしの木によって、はずかしめを受け、みずから選んだ園によって、恥じ赤らむ。

旧約ヘブライ語原典は「アイル」の複数形「エーリーム」(註(2) シュトウツトガルト版、六七七頁)で語義は「榿(Eiche)のような大樹」(註(48)『旧約辞典』二九頁)とある。この様に『イザヤ書』第一章で言われている内容が何であるかは、『ホセア書』第四章の第十一節-第十四節(註(11)和訳『旧約聖書』一二四七頁)に詳しく述べられている(註(2)一五四五年版ルター訳聖書、後巻、一二六頁)。

一 酒(Wein)と新しい酒とは思慮を奪う。

二 わが民は木(Holz)に向かつて事を尋ねる。

またそのつえ(Stab)は彼らに事を示す。

これは淫行の霊(der Hurerey Geist)が彼らを迷わしたからである。

彼らはその神を捨てて淫行をなした。

三 彼らは山々の頂で犠牲をささげ、

丘の上、かしの木(Eichen)、柳の木、

テレビンの木の下で供え物をささげる。

これはその木陰がこちよいためである。

それゆえ、あなたがたの娘は淫行をなし、

あなたがたの嫁は姦淫を行う。

四

……
男たちはみずから遊女と共に離れ去り、

宮の遊女と共に犠牲をささげているからである。

此所には明確に「榿(アールン)」(註(2) 原典九九五頁)と示されている。

(61) 例えば常緑榿の繁る榿原宮旧址に一八八九年建立された榿原神宮の神紋は榿の葉である。

※岩波日本古典文学大系、第一巻『古事記祝詞』(一九五八年)古事記、中巻、神武東征、一六一頁。

如此荒夫琉神等を言向け平和し、伏はぬ人等を退け撥ひて、畝火の白櫛原宮に坐しまして、天の下治らしめしき。

更に同大系、第六七巻『日本書紀』上巻(一九五七年)巻第三、二二三頁にこ

うある。

辛酉年の春正月の庚辰の朔に、天皇、榿原宮に即帝位す。是歳を天皇の元年とす。

(62) 『マイヤー百科事典』第七巻(註(59)、四六七頁。「榿」の項。

※「ドードーネーの主神ゼウスの聖所(神殿)」における「榿(ドリュース)」(註(46) (47)) に関しては、プラトーンの対話篇『パイドロス』二七五B(註(24) 作品集、第五巻、一七八頁)に、「或る一本の榿の言葉」が「最初の予言の言葉」であった旨が述べられている。因みに当該の「榿(ドリュース)」が岩波文庫版『パイドロス』(一九六七年)では、一三五頁に「榿の木」(藤沢令夫訳)とあり、「かしわ」(註(50))を示していると読める。

[8] 「牧歌風現実」と「人倫の偉容」

(63) 『グリム独語辞典』第四巻、第二分冊、一八七七年。復刊、一九八四年、

第一〇巻、一七三三頁の引用(「林苑」に関するハーゲドルンの用例)より。

※この他ヴィーランドの韻文物語『ムザリオン』(一七八八年)の「林苑、そこへは色恋が喜んで迷い込み、そこでは厳肅な思考もしばしば軽快な冗談と結び合い、……」(第三巻、第一三八七句以下、マイヤー版四巻本作品集、

一九〇〇年、第一巻、二六三頁)の筋にも注目しておきたい。因みに『詩と真実』第二部の第七書によると、未熟なゲーテは当作品の印象深い場面に関し、

「此所にこそ私は古典古代が生々と甦えるのを見えると思った。」(註

(16) 作品集、第九巻、二七一頁)とあるけれども、「太古の神聖なる青葉繁き林苑」(註(14))を背景とした「イフィゲーニエ」の清澄なる魂の息吹きを念頭に置かならば、十八世紀ロココ趣味に潤色され結局は俗界の愛憎の渦に閉じ

た韻文物語を、古典ギリシアの時空に繋ぐことは困難と思える。尚ヴィーランド関係は註(84)以下で再び扱われる。

(64) ニーチェ『悲劇の誕生』第十九章。批判版全集(註(25))第三部、第一巻、一一二頁。

(65) 右記(註(64))第十九章。一一六頁。

(66) 作品集(註(16))第三巻、二二二頁。

(67) 右記(註(64))第二〇章。二二七頁。

(68) 当時の劇作家クリンガー(一七五二年—一八三二年)の戯曲『疾風怒濤』(一七七六年)に因む。

(69) 詳細は筆者の別論、内省と光明——『パンとぶどう酒』第一節「聖なる夜」その一(一九八五年度・高知大学学術研究報告、第三四巻、人文科学篇、一五五頁—二〇二頁、一九八六年二月刊)の(三)燈火と松明、(3)発酵と解体(一七六頁—一八二頁)参照。

(70) 全集、第二巻、九〇頁。前後は註(一)参照。

(71) 全集、第六巻、四〇七頁。一八〇一年一月上旬の弟宛ヘルダーリン書簡一三三。

(72) 全集、第二巻、九〇頁。前後は註(一)参照。

※別の詩『多島海』第二一〇句以下(全集、第二巻、一〇九頁)で歌われた神域デルポイでは、話題の「噴泉」(第九句)が「カスターリアー源泉(Kastaliss Quelle)」として「榎(Eiche)」の「林苑」(第二〇八句)へと繋がる。

二一〇 (詩神の古里) パルナッス山へ私は赴きたい。そしてもし榎の暗き林苑に、

二二一 微光を帯び、迷える私に、そこでカスターリアー源泉が現われるなら、『パンとぶどう酒』では目下の「噴泉が送り(causchen)」(第一〇句)に呼応して、右『多島海』第二一〇句で話題の「パルナッス山麓」を「海が轟く(rauschen)」(第四九句以下)として「カドモスの地をイスメーノス川が滔々と流れ(rauschen)」(第五三句)と同じ動詞で歌われ、やがて「至福なるギリシア」(第五五句)へと至る。全集、第二巻、九一頁。

四九 それ故イストモス地峡へと赴こう。彼の地、あの開かれた海が轟く五〇 パルナッス山麓へと、白雪が輝くアポローンの神域デルポイの巖へと、

五一 彼のオリュムポスの地へと、彼の酒神秘儀の神域キタイローンの山間へと、

五二 新緑の唐檜の青葉の下、実り落つ葡萄の撓撓なる地へと、彼の地には

五三 テーベーの泉が湧き、イスメーノス川がオイディプースと酒神の祖カドモスの地テーバイの都を滔々と流れ、

五四 彼の地より由来し今や帰郷を兆す来たる神ディオニューソスが到来

する。

(73) 全集、第二巻、九〇頁。註(一)参照

※引用の『パンとぶどう酒』第十一句から第十三句にかけての部分は浪漫派詩人ブレンターノ(一七七八年—一八四二年)が格別の関心を寄せた詩句で、第十一句と第十二句とに關しては筆者の別論、『パンとぶどう酒』第一節「聖なる夜」その四—晩鐘と時禱(一九八八年度・高知大学学術研究報告、第三七巻、人文科学篇、一頁—九〇頁、一九八八年六月刊)において、その関連を詳述した。当論「林苑と盟約」が話題とする第十三句「今や又ある息吹きが到来し、林苑の樹頭……」以下については、ブレンターノの改作童話『ゴッケル、ヒンケルとガッケライア(Gockel, Hinkel und Gackeleia)。クレメンス・ブレンターノにより再び物語られた童話(Märchen)』(一八三八年)において、時制を過去形に変え、多少配語も改め、第十八句(第一節終結)までが、典拠も挙げぬまま引用されている。「今や到来した、息吹きも又(Jetzt kam auch ein Wehen)」そして林苑の樹頭を揺り動かした。見よ、そして我らの大地の似姿(Ebenbild)たる月も現に到来した(Kam da)。…(四巻本ハンザー版ブレンターノ作品集、一九六三年—六八年、第三巻、七六八頁)。その他『ライン川の童話(Rheinnärrchen)』所収の『シュターレンベルク家の童話(Das Märchen von dem Hause Sharenberg)』にも、「今やだが微風が起り(Jetzt aber erhob sich ein Lüftlein)」林苑の樹頭を揺り動かした」(右記作品集、第三巻、一八七頁)と、類似の表現が見い出せる。

(74) ヴァイマル版シラー全集、第二巻、第一部、一九八三年、四三二頁。

※話題の「固有の価値」に關しては、他にもシラーの詩歌『ドイツの詩神(Die deutsche Muse)』(一八〇三年)が参考となる。ヴァイマル版シラー全集、第二巻、第一部、四〇八頁。

四 ドイツの芸術は名声により振興されず、

五 その精華が花開いたのは、

六 王侯の好意が光を注いだからではなかった。

……

一〇 誇らかにドイツ人はこう言って、

一一 一層と高らかに心打ち鳴らして差し支えないのだ。

一二 自己自身でドイツ人は自らの価値を創造したのだと。

更に引き続き『ドイツ人の詩神』第三節(第三句―第一八句)でシラーは当詩歌を締め括るとともに、その中で本論に係わる「ドイツ吟唱歌人たちの気高き歌声」(Deutscher Barden Hochgesang) (第一五句)を称えている。

一三 故に立ち昇るのだ、一層と高らかな弓弧を成して、

一四 故に滔々と溢れるのだ、より満ち足りた波濤を成して、

一五 ドイツ吟唱歌人たちの気高き歌声が。

一六 して固有の豊かさに膨らみ、

一七 して心情の深奥から湧き上がり、

一八 その歌声は諸規則の強制を嘲るのだ。

既にゲーテの格言詩(註(18))を引用して述べたように、この関連で重要なのがクロプシュトックの『トウイスコン』(註(18))―(20)や『丘陵と林苑』(註(81))―(82)に他ならない。

(h) 「空無を孕んだ知性」

(75) 全三巻ヘルダー全集、一八七七年―一九二三年、第五巻(註(17))、四九六頁―四九八頁。

(76) ニーチェ『悲劇の誕生』第三章。批判版全集(註(25)) 第三部、第一巻、八四頁。

(77) 歴史批判版ナトラー編六巻本全集(ヘルダー社、一九四九年―五七年)第二巻、七五頁。当全集に拠るレクラム文庫版ハーマン『ソークラテース追憶録/美学提要』一九六八年、五五頁。プラトーン『弁明』三一D参照。

(78) 全集、第二巻、九一頁。

(79) プラトーン作品集(註(24)) 第五巻、六六頁。

(80) 全集、第六巻、八六頁。

(i) 静聴する理性

(81) 一七七二年版『頌歌集』(註(18)) 二五五頁。

※『丘陵と林苑』(Der Hügel und der Hain)の中の言葉は、『丘陵(Hügel)』

は古典ギリシア詩文へと、『林苑(Hain)』は北欧吟唱歌へと繋がる。

(82) 右記(註(81))『頌歌集』二五八頁。

※「神殿や林苑」を所詮は「狡猾な迷信」の場に過ぎないと看做した後述(註(84))のハラーも、根本では「静聴する理性」の「内なる声(der innere Ruf)」に耳を傾けることを「至福(seilig)」への道と考えていた点が興味深い。(註(84)選集、一〇三頁)。

お至福なる哉、かの人々は、……

して自らを救いへと驚異せしめる、内なる声に誠実で (treu dem inneren Ruf) ……

(『悪の根源について』一七三四年、第三書、第一六一句と第一六三句)

(j) 「浅薄な詩人たち」

(83) 歴史批判版ドイツ国民文学 (Deutsche National-Literatur) 第四五巻(ムンカー編) 一八九四年頃、三修社写真複製一九七四年、第二部、三一頁。

(84) 右記(註(83))ドイツ国民文学、第四一巻、第二分冊(フライ編) 一八八五年頃、三修社写真複製一九七四年、選集補遺、一六三頁。

※「ヴォルテールに一種の尊敬をまじえた恐れ (frayeur respectueuse)」を感じしめた(文庫クセジュ一四、レオナルド著『プロテスタントの歴史』改訳、一九六八年、白水社、渡辺信大訳、一二頁。原典クセジュ四二七、一九五〇年、一二八頁)とまで言われる謹厳なカルヴァン派キリスト教徒ハラーにあっては、本論の話題としている「林苑」や「神殿」も所詮は、偶像崇拜の場に過ぎなかったことが興味深く思われる。

悪徳さえもが、神々の属性として許容され、
そして人々は、神々の不面目を世の例にすることが出来た。

一五〇 貪欲、虚言、豪奢、そして非難され得ることが、
黄金で飾られて祭壇に坐り、そして聖なる香を受けたのだ。

今や世は諸所、神殿や林苑に満ち、
更に神々も集った。そして貴金属に飾られ、

やがて祭司は俗衆の視線を捕え、

そして望んだのだ。自らの神の如く、俗衆に崇敬されんことを。

〔理性、迷信、不信仰についての考え〕第一四七句—第一五四句。

右フライ編ハラー選集、三九頁)

「そして万事は、狡猾な迷信 (schlaue Aberglaube) に跪いた。」(第一六〇句、三九頁)とハラーの結論が続くことになる。なお当詩歌は一二九一年に創作され、一七三三年刊『スイス詩歌の試み』初版で目の目を見て以来、その決定版・第十一版(ハラー没一七七七年刊)に至ってもなお、右記箇所が改作されることはなかった。

(85) ヴァーランド作品集、ハンザー版五巻本、一九六五年—六八年、第四巻、八六頁—八七頁。

※当の「フィレンツェの(ウェヌス女神像)」(第三八八句)はローマ時代の複製で、当時メデイチ家の収集品として世に知られており、今日ではフィレンツェのウフィツィ美術館にある。因みに一九七五年刊レクラム文庫版ハインゼ「アルディンゲロ」(一七八七年)第一巻・第一部には、この女神像に関連し、「豊満で優婉な丸腰 (üppige sanfte Wölbung)」(五〇頁)などについての記述が見られる。

(k) 「林苑同盟」

(86) ベッツ編『パウル独語辞典』第五版(一九六六年)に拠る第六版、一九六八年。「クロプシュトックが林苑をゲルマーニア詩歌芸術の場と象徴とし、ギリシアの(詩歌芸術の座である丘陵)に對置させ(一七六七年「丘陵と林苑」註(81)参照、故に林苑は一七七三年(九月十二日結成)のゲッティンゲン詩人同盟を特徴づける。但し詩人同盟は始めて一八〇四年にフォスにより林苑同盟と呼ばれることになったのである。」(二八三頁)

(87) フォス書簡集(一八一九年—三三年)第一巻、九二頁—九三頁。レクラム文庫版『ゲッティンゲン林苑(詩人同盟)』一九六七年、三四九頁に引用。

(88) 全集 第二巻、九〇頁。

Sieh! und das Schattenbild unserer Erde, der Mond

一五 Kommet geheim nun auch, die Schwärmerische, die Nacht

kommt,

Voll mit Sternen

見よ! して我らの大地の影像たる月も

一五 また秘蔵の莊嚴から解き放たれ、靈氣溢れる夜が到来する。

星辰に輝きみつる(夜が)

〔「パンとぶどう酒」第一節、第十四句—第十六句〕

※古代ゲルマーニア神話世界では「夜が日昼に先導すると見られて (nox ducere diem videtur)」おり、ローマ人のような太陽暦ではなく「月」を礎とした太陰暦であった (nec diem numerum, ut nos, sed noctium computant) と、タキトゥスの『ゲルマーニア』第十一章(註(22)二〇頁)に記されている旨を考え併せると、一層と「月」(第十四句)と「夜」(第十五句)とが意味深長に映じてくると思われる。

※他方オルベウス神話に目を遣ると、例えばウェルギリウス作『農耕詩 (Georgica)』第四書の第四六八句 (caligantem nigra formidine lucum) を、クロプシュトックが「林苑の暗黒な恐怖の夜の中へ (in des Haines Schwarze Schreckennacht)」(註(18)選集 一一九五頁)と訳し、冥府への筋を物語り、この関連で「櫻もオルベウス(の歌)に耳を傾けた (Hörerin wurd' ihm die Eiche)」(一九七頁)と原典の第五一〇句 (agentem carmine quercus) を紹介しているのが興味深い。なお「農耕詩」原典はバルキエージ編モンタドーリ版(一九八〇年、ミラノ)二二八頁と二三〇頁参照。

(89) フォス書簡集(註(87))第一巻、九三頁—九四頁。『ゲッティンゲン林苑』(註(87))三五〇頁に引用。

(90) 『オイフォーリオン』第三三巻(一九三三年)所収、メーテルマン編『ブリュクナールとゲッティンゲン詩人同盟』(三四一頁—四二〇頁)三九〇頁。

(91) 全集、第六巻、一〇頁。一七八七年二月十八日ナスト宛ヘルダーリン書簡六。

(92) 作品集(註(16))第六巻、二七頁。

(93) 作品集(註(16))第四巻、二二七頁。

(1) 「盟約」

(94) 『ゲッティンゲン林苑』(註(87))六八頁。

(95) 全集、第四卷、六二頁。『エムペドクレスの死』初稿、第一四四句。

(96) 全集、第二卷、一四六頁。当の『ライン河』第一〇節では、「ルソー」(第一三九句)が「酒神ディオニュソスの如く、愚直で神々しい」(第二四五句)と称えられている。

(97) 全集(註(17)と(75))第二九卷、六五九頁。

(98) 全集、第六卷、八五頁。

(99) 全集、第七卷、第一分冊、四五〇頁。

※ディルタイ『体験と創作』(一九〇五年)第八版(註(4)参照)三六二頁にはこうある。

学生たちは一政治的なクラブを設立し、シェリング、ヘーゲル、ヘルダーリンもまたそれに参加した。フランスでキリスト教が撤廃され、理性の礼拝が始まったその一七九三年に若い学生たちは市の或る広場に自由の樹(Freiheitsbaum)を立て、高らかに歓声をあげてそのまわりを踊りまわった。

(小牧健夫訳、岩波文庫、一九六一年、一一六頁)

(100) 全集、第一卷、六二頁。

※当初は詩歌創作の仲間たち、殊にノイファー(一七六九年—一八三九年)とマージェナウ(一七六七年—一八四六年)とヘルダーリンは「盟約」を結んだ。だが修辭上の仲間より次第に思想上の仲間、つまり「ヘーゲルとシェリング」(註(99))の方へ「盟約」の中心点は移ってゆき、ヘルダーリンの抒情詩に思想の深みと弁証力が増してくる。因みに後者のヘーゲルたちとの「盟約」に関しては、ヘルダーリン全集(第七卷、第一分冊、一三三頁—一三六頁)にも、前掲註(21)ヘーゲル作品集(第一卷、二三〇頁—二三三頁)にも収められた全一〇一句に互るヘーゲルの創作詩歌『エレウシース、ヘルダーリンに、八月、一七九六年』に詳しく、例えばその第十八句と第十九句とで繰り返して語られる当の「盟約(Bund)」は、その第二〇句で「自由な真理のためにのみ生きる(der freyen Wahrheit nur zu leben)」(全集、二三三頁)と規定され、目下話題の「自由の樹」(註(99))へと繋がることになる。

(101) 全集、第一卷、一四五頁の脚註一参照。

(102) 全集、第一卷、一四四頁。

(103) 全集、第一卷、一四五頁。和訳全集(註(50))第一卷、一七〇頁、高橋英夫訳。

(104) 全集、第六卷、七七頁。書簡五一。

(m) 「神聖なる野蠻人」

(105) フォス書簡集(註(87))第一卷、九六頁—九七頁。『ゲッティンゲン林苑』(註(87))三五頁。一七七二年一〇月二六日ブリュクナー宛フォス書簡。

※当の「質実朴訥な男子」に関し、一七八七年刊ロシウス(一七六〇年—一八一九年)著『歌曲と詩歌(Lieder und Gedichte)』に収められた『ドイツの少年(Der deutsche Knabe)』(六八頁—七〇頁)には、次の様に歌われている。

僕はドイツの少年だ。

僕の心魂は頑強で、僕の手のようだ。

僕は称える、僕のわが祖国(ドイツ)と、

その森と小屋とを。

五 君はドイツの少年ではない。

……

何だって、君がドイツの少年?

どのドイツの質実朴訥な男子を見ても、

フランス語が話せないからと言って、

君は蔑むじゃないか、君は愚か者だ!

二五 僕はドイツの少年だ。

……

引用はレクラム文庫版『啓蒙期児童青少年文学、原典資料集』(一九八〇年)二三九頁より。

(106) フォス書簡集(註(87))第一卷、一四四頁—一四五頁。『ゲッティンゲン林苑』(註(87))三五九頁。

- (107) 『ゲルマニア』(註(22))十六頁。
- (108) ヴァイラント編『独逸メルクル』一七八八年三月刊所収『ギリシアの神々』(二五〇頁—二六〇頁)二五五頁。ヴァイマル版シラー全集、第一巻、一九四三年、一九三頁。
- ※「神々」と「神聖なる野蛮人」との確執から『パンとぶどう酒』の「至福なるギリシア」におけるキリスト像を目指す論述の詳細は、筆者の『西欧ギリシア論』(註(34))を参照。
- (109) 著作集、一九二九年、第二巻、九〇頁。
- (110) 『ドイツ国民文学』第四五巻(註(83))所収「ウーツ詩選」への序論(ムンカー著)、一六頁。
- (n) 「優美と尊厳」
- (111) シラー『優美と尊厳について』(一七九三年)。ヴァイマル版全集、第二〇巻、一九六二年、二五頁。
- ※シラー『幽魂の国(Das Reich der Schatten)』第一節、第一句。シラー編『時神』第九号、一七九五年九月刊、一頁。ヴァイマル版全集、第一巻(註(108))二四七頁。後に改題で『理想と人生』(一八〇四年)第一句(註(74))全集、第二巻、第一部、三九六頁。
- (112) ヴァイラント編『独逸メルクル』一七八九年三月刊所収『藝術家』(二八三頁—三〇二頁)第五節(二八五頁)／第三節(三〇〇頁—三〇二頁)。ヴァイマル版全集、第一巻(註(108))二〇二頁／二二三頁。
- (113) 『独逸メゼウム』一七八八年八月刊所収シラー氏の詩歌「ギリシアの神々」に関する意見(九七頁—一〇五頁)九七頁。『ドイツ文芸批評の一世紀(一七五〇年—一八五〇年)』第二巻「シラーとその周辺」(ファムバッハ編)一九五七年、右「意見」(四四頁—四九頁)四四頁。
- (114) 右記(註(113))「意見」一〇四頁。右記(註(113))「シラーとその周辺」四八頁。
- (115) 全集、第二巻、九〇頁。
- ※『アルディングロ』の著者ハインゼに関しては註(85)を参照。
- (116) 『アルディングロ』(註(85))二七〇頁。

- (117) 全集、第一巻、一三〇頁。
- (118) ヴァイマル版シラー全集、第二〇巻(註(11))四六四頁。
- ※このシラーのハインゼ評を考える上で、例えば『アルディングロ』と同じくイタリアを舞台としつつ宮廷門閥の世界を批判したレッシング(註(89))の悲劇『エミリア・ガロッティ』(一七七二年)を考え併せてみると、両者ともに新たな市民社会幕明けを告知する文芸作品ながら、小説には悲劇に見られるような慎しみ深く謹厳な「人倫の偉容」(註(74))と「尊厳」(註(118))が見られない点に興味深く思われる。話題のシラーとゲーテとの盟約として名高い所謂ヴァイマル古典主義の目指す所も結局この筋の「人倫の偉容」に礎を置く「優美と尊厳」(註(11))に他ならないので、慎しみ深さに欠ける小説『アルディングロ』がシラーに酷評されるのも無理からぬことである。但し後世十九世紀の芸術の大家たち例えば詩人ハイネ(一七九七年—一八五六年)や音楽家ヴァーグナー(一八一三年—一八八三年)は、既成キリスト教倫理の堅苦しさを破る斬新な作品として『アルディングロ』を受けとり、レクラム文庫版『アルディングロ』(註(85))に引用された一節で各々がハインゼ頌を述べている。ハイネの場合は「一八二八年二月十五日デトモルト宛書簡で、「僕は今ハインゼの『アルディングロ』を読んだ。：ハインゼは恐らく目下僕が代表している新たな神靈ダイモンの一人だ」(五七八頁)と表明しており、ヴァーグナーは「自伝草案」(一八四三年)において、「当時(一八三四年)徘徊していた『若き西欧』の諸理念とともに『アルディングロ』読了は、私がドイツ歌劇音楽に抗して辿りついていた自らの変幻な情緒に研ぎ澄まされ、私自身の見解に基調を与えた。つまり就中(極度に品行方正な)清教徒風の偽善に反抗していた私自身の見解は、かくして『自由な感性(官能)』を大胆に称讃する方へ向かったのである」(五八三頁)と述べている。この「自由な感性(官能)」の脈絡で注目し値する箇所は、『アルディングロ』第一巻の終結部(第三部の末尾)を締め括る「真正な酒神の祝祭」(一九六頁)の件(一九七頁まで)であらう。
- ※※このシラーによるハインゼ評は、イタリア旅行後にゲーテの抱いていた考えに相当すると考えられる。例えば「シラーとの出会い」を描いた『幸運な出来事』において、ゲーテは『アルディングロ』に言及し、「ハインゼが官能と乱れた思考様式を、造形芸術により高尚化し補強せんと企てていたので、厭わし

かった。」と當時を述懐しているのが、その証左となろう。註(16)作品集、第一〇巻、五三八頁参照。

(119) 『アルディンゲロ』(註(85)) 掲載(六〇五頁―六〇六頁) 一九二四年八月二四日ブルクハルト宛ホフマンスタールの書簡。

(120) 殊に当の「ウーラニア女神アプロディーテーの靈妙な帯」(註(116))が話題となる『アルディンゲロ』第二巻・第四部が形而上学上重要で、その第四部の終わり数頁(註(85)、三〇三頁―三〇七頁)は『パンとぶどう酒』第五節でも歌われる「万有の全」(ヘン・カイ・パーン) (第八四句) が問題とされる。

…だがやがて隠れなき真理(アレータイア)として

神々そのものが到来する。人はこの幸に慣れてゆき、
日昼の光明に慣れ、あらかさまな神々へと眼差を向け、

既に久しく万有の全「(ヘン・カイ・パーン)」と呼ばれた神々
の顔を直視する。

八五 深く黙された胸に自由な解き放たれた充足が満ちる。

(『パンとぶどう酒』第五節、第八一句―第八五句。全集、第二巻、九二頁)

(121) ヴァイマル版全集、第二〇巻(註(111))、二五一頁。

(122) 右記(註(121))全集、第二〇巻、二五二頁。

(123) ヴュルテムベルク聖書協会の刊行本・原典希羅対訳『新約聖書』一九三〇年、二頁。ウルガータ聖書(註(2))第二巻、一五二七頁。一五四五年版ルター訳聖書(註(2))後巻、二四六頁左段。

(124) ヴァティカン市国「聖ペテロ教会」に安置。

(125) 右記(註(121))全集、第二〇巻、二八九頁。

(126) 全集、第六巻、二四九頁。

○「音楽的なもの」

(126) 全集、第六巻、二四九頁。

※此所でシラーに対しヘルダーリンが力説する「精神の或る種の処女性」たる「形而上(学)的情操」こそ、実はシラーの詩歌創作の際に基調なす「音楽的なもの」(註(134))と考えられ、この脈絡を例えばシラー自身は別に一七九六

年三月十八日付ゲーテ宛書簡において、「或る種の音楽的情操(Eine gewisse musikalische Gemütsstimmung)が先行し、これの後で私の場合には漸く詩的理念(die poetische Idee)が続きます。」(註(18))アルテミス記念版、第二〇巻「ゲーテ・シラー往復書簡集」(一九五〇年、一六五頁)と述べている。註(142)と註(147)も参照。

(127) ヘルダーリン全集、第七巻(資料編)、第二分冊、九八頁。

※実は当のシラー自身、ゲーテから見ると正に「強烈な主観性」の持主に他ならず、「これを或る種の哲学精神と思念の深みに結びつけ」ていた。このことは「幸運な出来事」と題し「シラーとの出会い」を述懐したゲーテが、「恐らく決して全面調停には至らぬ、客観と主観との最大の確執(Wettkampf zwischen Objekt und Subjekt)をへて、私達は途絶えず持続した盟約を固めた」(註(16))作品集、第一〇巻、五四一頁)と述べている筋に関連すべきである。

(128) 右記(註(127))第七巻、第二分冊、一〇〇頁。

※恐らくゲーテ作『ヘルマンとドロテア』(一七九七年十月刊)の終結部を飾る詩節(註(16))作品集、第二巻、五一四頁)における「盟約(Bund)」(第九歌、第三〇〇句)も、暗にシラーとゲーテの盟約に響き合うであろう。

至る所が動乱の日々なのだから、一層と堅固であれ、

三〇〇 ドロテアよ、(私達二人の)盟約が！二人してしかと持ちこたえ、

堅固に支え合い、そして堅固に素晴らしい富の所有を確保しよう。

(129) 一九二五年刊二五部「レッシング作品集」一九七〇年複製写真版、第二〇巻(第二四部)九九頁。

(130) バウムガルテン「詩歌に関する若干の点についての哲学的省察」(一七三五年) 羅独対訳、マイナー社刊・哲学叢書、第三五二巻、ハムブルク、一九八三年、一〇頁(第九章)。

因みにヴィンクラー版三巻本レッシング作品集(一九六九年―七二年)第三巻、八〇二頁の註解に、「詩歌は…この文章は文字通りバウムガルテンの『美学』から採られている。」とあるが、何ら正確な典拠が示されていない。蓋し『美学』(一七五〇年/五八年、写真複製版一九八六年)なら「完璧な感性的言説」ではなく、むしろ「感性的認識の完璧(Perfectio

cognitionis sensitiuae)が「美学の目標 (Aesthetics finis)」第一部、第一章、第一節の一四(六頁)と与えられている。

(131) ヴァイマル版全集、第一巻、(註(108))一六九頁。

(132) 「思想詩 (Gedankenlyrik)」とはシラーやヘルダーリンたちの用語ではなく、シラーは単に「教訓詩 (Lehrgedicht)」(註(121)全集、第二〇巻、四五三頁)と言う表現を『素朴文学と情感文学』(註(118))で用いている。ヘルダーリンの場合なら一八〇三年十二月ウィルマンス宛書簡四三三の言葉で「祖国 (ドイツ) の歌 (vaterländischer Gesang)」(全集、第六巻、四三六頁)とか、或いは「ドイツの歌 (Deutscher Gesang)」第二〇句の詩語で以て「魂の歌 (Seelengesang)」(註(23))とでも表現すべき所であらう。

※『思想詩 (Gedankenlyrik)』(一九八〇年)と題するトドロフの研究書の副題は「十九世紀における或る類概念の成立」(三頁)で、この書物の第一部・第一章「思想詩——一九五〇年代の抒情詩理論の新語」において、「モリス・カリエーレが当概念『思想詩』を初めて定着させた」(三頁)と著者は述べ、カリエーレ著『詩歌の本質と諸形式 (Das Wesen und die Formen der Poesie)』(一八五四年)を筆頭に挙げている。因みに当時十九世紀中葉までの著名な美学書では、例えばヘーゲル『美学講義』(一八二三年/二六年)とフィッシャー『美学』(一八四六年—五七年)が考え併される。殊に両者ともに抒情詩を扱った際に畢竟シラーの思想詩を賞揚しつつも、ヘルダーリン詩歌の雄篇類『パトモス』や『ライン河』(共に一八〇八年初刊)に無知であるのが興味深。そこでヘーゲルならシラーの『鐘の歌 (Das Lied von der Glocke)』(一八〇〇年『詩神年鑑』初刊)第三九七句—第四〇八句を、論述の最高潮で引用(註(21)作品集、第十五巻、四六一頁)し、思想詩を結局は『歌 (Lied)』(同巻、四五六頁)として扱いつつ、『幽魂の国』(註(11))や『芸術家』(註(112)と(135))に言及(同巻、四六〇頁)した後で、滔々と湧く雄弁で以てシラーの「哲学精神」(第十三巻、八九頁)を説明している。これに対しフィッシャーは、思想詩をヘーゲルが「歌」の名の下に分類してしまったのを遺憾(一九二二年—三年再版『美学』写真複写版一九七五年、第八巻、二五九頁—二六〇頁)としつつも、自らは「美しき思想詩歌 (schöne Gedankenpoesie)」(同巻、二五二頁や二六〇頁)とか「考察の抒情詩 (Lyrik der

Betrachtung)」(同巻、二五二頁)という命名しかしていない。とにかくフィッシャーにとっても「前述の如く、シラーが手本 (Vorbild) であり、粉うことなき模範 (reinstes Muster) に留まる」(同巻、二六〇頁)ことに変わりはないのである。

(133) 例えば一八〇〇年一月二日ケルナー宛書簡において、シラーは『芸術家』と「歓喜に寄す」に言及する。そして前者については、「残念ながら当詩歌は全く不完全 (durchaus unvollkommen)」と、出来の良い箇所はほんの僅かしかない(ヴァイマル版全集、第三〇巻、一九六一年、二〇六頁)と述べ、更に引き続き後者に関しても同様に「全く杜撰 (durchaus fehlerhaft)」(同頁)で「駄作 (ein schlechtes Gedicht)」(同頁)と評している。その理由としてシラーが「歓喜に寄す」に関し挙げている点は、「当詩歌が、成立当時の杜撰な趣向に迎合した故」(同頁)である。すなわちゲーテとの盟約(一七九四年)以降の古典期シラーの美意識からすると、疾風怒濤(註(68))期よりこのかた発酵と解体を繰り返す啓蒙と革命の時代の産物を、手放しに喜ぶわけにはゆかなかったようである。後述(註(186))する「ヴァイマル古典主義により実現した美学的反動」つまり「疾風怒濤から初期ロマン派の若き旗手へと受け継がれた彼の進歩的で革命的な醗酵素を何もかも排斥する傾向」が此所にあると言えよう。

(134) シュトルツ『詩人フリードリヒ・シラー』(一九五九年初版)一九六八年(第四版)二二三頁で「ギリシアの神々——芸術家」論(二〇六頁—二一四頁)において引用されている。因みに、註(126)引用の一七九六年三月十八日ゲーテ宛シラー書簡に言う「或る種の音楽的情操 (musikalische Gemütsstimmung)」と、目下話題の「音楽的なもの」とは同一視できよう。そして更にこれを「美的情操 (ästhetische Gemütsstimmung)」(『美を指す人間教育論』第二二書簡。ヴァイマル版全集、第二〇巻、三八四頁)へと関連づけるならば、「この美的情操により、かくして理性の自発性 (Selbsttätigkeit) が、感性の分野に既に開かれ、感覚の威力は既にその固有の限界内部において破壊を来し、自然のままの人間が弥々気高くされ、今や精神化された人間が自由の諸法則に従い、自然のままの人間から自己展開し成長しさえすれば良い」(同巻、三八四頁—三八五頁)と説くことが出来る。蓋しこの場合シラーが「音楽」の有する「無媒介直接の

感性的現前 (unmittelbare sinnliche Gegenwart) (第二「教育書簡」同卷、三八一頁) と「古典古代 (ギリシア) の安らかな威力」つまり「造形芸術」の有する「安らかな明澄性 (ruhige Klarheit) (同頁) を心から協和へとたらさんと努めていることは確かである。この課題を果たすべく「至福なるギリシア」(註(34)) も響き渡るのである。

※『詩人が自作について語る (Dichter über ihre Dichtungen)』フリードリヒ・シラー (二巻本、一九六九年) 第一巻には、計画されたが創作されなかった『光への讃歌』(一七九二年) に関連して当書簡が引用 (七二五頁) されているが、右記「詩人シラー」二二三頁での引用文と比べると、「私が坐って詩歌を創作しようとする」との部分の省略など多少異なる点が見受けられる。但し文意には変わりがない。

(135) ヴァイマル版全集、第一巻、(註(108)) 二二四頁。ヴァーラント編『独逸メルクル』(一七八九年三月) 三〇二頁。

(P) 「理想化技法」

(136) ヴァイマル版全集、第一七巻、一九七〇年、三七三頁。

(137) 全集、第六巻、四一九頁—四二〇頁。

(138) ブルクハルト『講義・講演集 (一八四四年—一八七七年)』(一九一九年刊) 二四頁以下より、独逸シラー協会編『シラー年鑑』第四巻 (一九六〇年) 所収マイヤー著『シラーの詩歌とドイツ抒情詩の伝統』七二頁以下に引用。その七二頁から七三頁。

(139) 『シラーの詩歌と…』(註(138)) 七三頁。

(140) 『シラーの詩歌と…』(註(138)) 七四頁。

(141) マルティニ『ドイツ文学史』第十七版 (一九七八年) より共訳、三修社、一九七九年、一六二頁、尾崎盛景訳。原著、第六版、一九七二年、一八二頁。彼 (ハラー) とともにあの力強い思想詩 (Gedankendichtung) が始まり、それはシラーにおいて円熟の域に達したのである。

(142) 『シラーの詩歌と…』(註(138)) 七三頁。

※此所で着眼されている「情操の全体 (Das Ganze einer Empfindung)」は、ベートーヴェンの第六交響曲『田園』に關しても言える心性であるが、

『パンとぶどう酒』第一節に關し浪漫派の詩人ブレントノーが「一八一〇年一月二十一日付ルンゲ宛書簡で「ヘルダーリン精神 (Genius) の情操の大海原 (das weite Meer seiner Empfindung) (註(1)) 全集、第七巻、第二分冊 (四〇七頁) を話題としてゐる様に、当思想詩についても読解上まず留意されるべき点かと思われる。

(143) 全集、第六巻、四三六頁。註(132) 参照。

(144) 『シラーの詩歌と…』(註(138)) 七二頁。

(145) 一七九七年六月二〇日シラー宛ヘルダーリン書簡一三九。全集、第六巻、二四一頁。

先生に私は依存し、これは克服し難いことです。(von Ihnen dependir, ich unüberwindlich)。

(146) 全集、第六巻、三六五頁。

(147) 全集、第六巻、三六四頁—三六五頁。

(148) 本論との係わりにおいて『ビュルガーの詩歌について』を考へる上で筆者は主に、内藤克彦『シラー「ビュルガー詩批評」の一考察』(南山大学『アカデミア』第二一輯、一九五八年三月刊、七一頁—九七頁所収) を参考にした。また更に後述 (註(150)) の『シラーの詩論』(一九八六年) も手堅い邦語参考文献として逸することが出来なかった。

(149) ヴァイマル版全集、第二二巻、一九五八年、二五三頁。

(150) 全集、(註(149)) 第二二巻、二四六頁。

※当の「教養ある精神」を『ビュルガーの詩歌について』において古典期シラーへの傾斜で見ると、「詩人の情熱を或る鎮静の彼方から観照する (sine Leidenschaft aus einer mildernden Ferne anzuschauen) (第二二巻、二五六頁) と言われる筋が「理想化技法」(註(149)) ととも重視され、「理想化技法」とい、観照的詩作法とい、これらは、明らかに、青年期のシラーもまたその大きな渦巻きの中にあった、かの疾風怒濤文学の激情的表現からの決別を意味するものである (内藤克彦『シラーの詩論』。一九八六年同学社刊『近代ドイツ抒情詩の展開』五八三頁) と論じられ得よう。但し本論では「魂の眼」(註(24)) による「観照」よりも、むしろシラーの言う「音楽的なもの」(註(134)) の方を、つまり「耳で聞かれるが目では見えない」(註(33)) 「魂の歌声」(註(23)) の方を重視して、詰る所は『パンとぶどう酒』へと結実する

ドイツ抒情思想詩の展開において「理想化技法」を考えてゆきたい。

(151) 全集(註(149))第二巻、二五七頁。

(152) 作品集(註(16))第三巻、三六四頁。『ファウスト』結句、第二二一〇句—第二二一一句。

※『ゲーテ／ファウスト』第二部のために(『南江堂、一九六四年』)所収の「永遠の女性」論においては『聖書』との関連で、当の理想化し純化する精神の脈動が、魂の光源キリストを指し話題とされていると考えられる。

ゲーテのゆくりなくも発した臨終の言「もつと光を!」の奥にひびく悲願は何であつたか。それはパウロの言、「キリストの栄光を鏡に映すように見つ、栄光から栄光へと、キリストと同質の姿に変貌(メタモルフォーゼ)させられていく。」(第二コリント三・一八参照)に照応する事態であつたらう。キリストをこれほどよくゲーテにもつてくることは、勿論ゆきすぎとは思ふが、ゲーテがゲーテらしい自由において、神性に向つて限りなく自己を円現せんと悲願したこと、神性を映す映像、永遠の人間たらんと靈願したことは事実である。さればこそ大詩篇の神韻縹渺たるフィナーレの数句ある所以である。

引用は小池辰雄著作刊行会刊『著作集』第二巻『芸術のたましい』(一九七六年)三三〇頁—三三一頁より。

※※確かにゲーテは「魂の目」(註(24))が強力な人であつたが、但し見ることを通して或る種の「音楽的なもの」(註(134))を掴み得たようである。このことを示すのが若き二十三歳のゲーテが物した論文『ドイツの建築について』(Von deutscher Baukunst)(一七七二年)の次の件である。作品集(註(16))第二巻、一一頁。中央公論社刊『世界の名著』第三八巻(一九七九年)共同訳「ヘルダー・ゲーテ」所収「ドイツの建築」(一七七二年)三〇七頁。

だが、大寺院の前に立って仰ぎ見たとき、何という思いがけぬ感じにおそわれたことだろう。一つの完全な巨大な印象が私の心を満たした。私たちの昔の兄弟たちの巨人的精神をその作品でとらえようとして、私は何度そこへ立ちもどったことだろう。あらゆる面から、距離をいろいろとり、光の具合をさまざまに変え、その気品と壮麗さをこの目で確かめるために、私は何度立ちもどったことだろう。身近な兄弟の作品でも、それがあまりに崇高なときは、目で確かめることなど、人間精神に

できることではない。ただ頭をたれてあがめるしかないのだ。探究的観照につかれた私の目が、たそがれによってやさしくいたわられたことが何度あつたことだろう。そんなとき、無数の部分が全体の質量にとけこんで、それが単純巨大な姿となつて私の魂の前に立ち、私の力は享受と認識のために歓喜に満ちてひろげられるのであつた。

此所でゲーテが目前にしているのはシュトラースブルクの「ゴティック式の会堂建築」であるが、この様な西欧の「大寺院」の「会堂建築」に関しヘーデルは『歴史哲学』(註(21))序論(第一篇「一般序論」)(二、世界史の理性観)B、「歴史の理念とその表現」(c)「理念の表現した形態」(註(21)和訳、二六頁。註(21)作品集、第十二巻、六七頁)において、次の興味深い論述を残している。

理性的な意志のみが、自分を自分自身の中で規定し、自分を発展させ、自分の諸契機を有機的な分枝として展開するような普遍者である。けれども古代人は、このような「普遍者をその土台とするというような」ゴティック式の会堂建築のことは少しも知らなかつたのである。

更にゲーテも『箴言と省察』第八七(作品集、第十二巻、三七七頁)において、当問題に関し、

古典古代の神殿は神を人間の中に収斂させ、中世の教会は高きに神を求めらる。

と述べており、この後者の「教会」の「巨大な壁」について、話題の論文『ドイツの建築について』では、「こんもりと広がる崇高な神の木の木のように天にそそり立つ」(二〇頁。和訳三〇六頁)と物語られる。そしてゲーテは「釣り合いの真と美をとらえた最も深い感情」が「強く粗いドイツの魂からわれわれの心に働きかけてくる」(十四頁。和訳三二〇頁)ことに着目し、「これがドイツの建築だ、われわれの建築だ、フランス人はもとよりイタリア人も誇るべき自己の建築をもたぬと、声を大にして告げうることをドイツ人は神に感謝すべき」(十二頁。和訳三〇八頁)との旨を力説している。註(74)も参照。

〔9〕「保守と革命の盟約」

(153) 全集、(註(149))第三巻、二四五頁。

※当の『ビュルガーの詩歌について』で「或る唯一の光のもとに集めること」(註(149))として語られる「調和ある盟約」は、先例の『芸術家』終結部において「滔々と唯一の真理の盟約の中へと、ただ一条の光の流れへと回帰する」(註(135))と歌われていたものであるが、既に二十歳のシラーの論文断片『生理学の哲学(Philosophie der Physiologie)』(一七七九年)にも音楽表現を念頭に置き「あらゆる諸力が働き(alle Kräfte wirken)」、そして相互透入し合う(in einander wirken)「あたかも楽器の弦に似て、千もの音響が協和し一つの旋律となる(tausendstimmig zusammenlaufend in eine Melodie)」(註(110)全集、第二〇巻、一〇頁)と、同様の精神の脈動が見い出される。そしてこの脈動が前述の『歓喜に寄す』(註(131))において、ヘーテ・ヴェンの第九交響曲の旋律を礎とし、始めて文字通り「この盟約(dieser Bund)」(註(108)全集、第一巻、一六九頁)と高唱され現美化するのである。

※※他方シラー自身は「調和ある盟約(Bund)」の成立困難も痛感しており、例えば『美を目指す人間教育論』(一七九五年)第六書簡では、当の「知識圏の拡大と職種の分業化」により、「人間本性の内奥の絆(der innere Bund der menschlichen Natur)」も亀裂を生じている(zerritt)。(註(110)全集、第二〇巻、三三三頁)との危惧が強く「拡大した経験(erweiterte Erfahrung)」や「諸学の尖鋭化した分業(schärfere Scheidung der Wissenschaften)」(同巻、三三三頁)の暗黒面が話題となる。

(154) ヘーゲル『精神現象学』(一八〇七年)序論、初版、三八頁。作品集(註(21))第三巻、三六頁。アカデミー版全集、第九巻、一九八〇年、二七頁。

※少くとも『イェーナ大学就任講義』(註(136))や『ビュルガーの詩歌について』(註(153))を中心にしてシラーの「理想化技法」(註(149))を考える限り、ヘーゲルが『精神現象学』序論で言う当の「否定的なるものの物々しい力量」は保持され、厳しい「切開と新たな縫合」(註(157))の両面を踏まえた上で、「詩歌芸術のみ言わば全き人間を生み出す」(註(153))と結論されていると理解される。これに対して前述(註(153))の教育書簡では「否定的なるものの物々しい力量」が退潮気味となり、当シラー書簡を前提として成立した、ヘルダーリンとヘーゲルとシェリングの合作『ドイツ観念論体系草稿』(一七九六年)に至ると、専ら「新たな縫合」の方向で「詩歌芸術のみ(die Dichtkunst allein)」(全集、第四巻、二九八頁)が「美の理念」(同頁)と

ともに格別の地位を占めることになり、後年ヘーゲルの『精神現象学』序論で「切開」する知性の「力量」を看過したとして批判されることになる。

(155) 『精神現象学』序論、初版、三八頁―三九頁。作品集、三六頁。アカデミー版、二七頁。

(156) 『精神現象学』序論、初版、三三頁。作品集、三一頁。アカデミー版、二四頁。

※当の「鉄砲玉」の比喩はヘーゲルが解したシェリング哲学に向けられている。なお当の哲学史との関連における『パンとぶどう酒』の詩想展開については、筆者の別論『ヘルダーリンの西欧ギリシア論』(註(34))の「(三)神話の神(6)数知直観と(7)絶対的分裂(第三四巻、三七頁―五二頁)を参照されたい。

(157) 一七八八年二月二十五日ケルナー宛シラー書簡。ヴァイマル版全集、第二五巻、一九七九年、一六七頁。

※当時十八世紀の学問において、人知の厳正な切開(Absonderung)と新たな縫合を敢行した哲学者が、『純粹理性批判』(註(21))や『実践理性批判』(一七八八年)などの著者カントであった事は周知のことであろう。実際にカント自身このことを意識していた模様で、例えば『人倫形而上学原論(Grundlegung zur Metaphysik der Sitten)』(一七八五年)の「序言」冒頭において「分業(die Vertheilung der Arbeiten)」との関連で「純粹理性」に言及し、「経験的部分を理性的部分から常に入念に切開(sorgfältig abzusondern)すること」を問題としている。作品集(註(21))第四巻、三八八頁。

様々な仕事がその様に区別されず、分業が成立しない所では、誰もが何でも屋であり、諸産業はなお野蠻の極みに残る。…此所で私は但し以下のみを問題とする。すなわち学の本性上要請されはしないか。経験的部分を理性的部分から常に入念に切開することが。更に…

(158) 前掲(註(113))『…意見』一〇〇頁。前掲(註(113))『シラーとその周辺』四四頁。

(159) 前掲(註(113))『…意見』一〇二頁。前掲(註(113))『シラーとその周辺』四七頁。

(160) 詳細は筆者の別論『ヘルダーリンの西欧ギリシア論』(註(34))の「(二)古典ギリシアとキリスト教西欧(第三三巻、四一頁―五一頁。および第三四

巻、二頁—二〇頁)を参照されたい。

(161) 全集、第二巻、九四頁。

..... Indessen dinket mir öfters

一一〇 Besser zu schlafen, wie so ohne Genossen zu seyn,

So zu harren und was zu thun indeß und zu sagen,

Weiß ich nicht und wozu Dichter in dürftiger Zeit?

..... とかくするうちに私には 数こう思われる。

一二〇 むしろ眠る方がよい。かく盟友なくあるよりは。

かく待ち望み、して何を為しこの間に、して言うべきか

知らぬのだ私は、して何を指し詩人が乏しき時代に?

(『パンとぶどう酒』第七節、第一九九頁—第二二二頁)

(162) 全集、第二巻、一六五頁。

(163) 藤平恵郎『十八世紀ドイツのユートピア—シュトルベルクの「島」と

ハインゼの「アルディンゲロと幸福な島々」——(明治大学教養論集、通

巻一四四号、一九八一年一月刊、九五頁。

※この「聖書と自然」と言う観点では、一七七九年八月ウィーラント編『独逸

メルクール』掲載の、フランツ・クライスト(一七六九年—九七年)作『唯一

神礼讃(Das Lob des einzigen Gottes)』『ギリシアの神々』への反詩』も

同じである。なお詳しい論述は筆者の別論、シラー対クライスト—『ギリシ

アの神々』と『唯一神礼讃』(日本独文学会中国四国支部編『ドイツ文学論集』

第十九号、三修社、一九八六年十一月刊、一八頁—二七頁所収)参照。

(164) 『十八世紀ドイツのユートピア』(註(163))一〇二頁。

(165) 『ゲッティンゲン林苑』(註(87))一九六頁。

(166) 『ゲッティンゲン林苑』(註(87))二二二頁。

※就中シュトルベルクの散文作品の佳作『心の充溢について』(一七七七年—

八二年)を参照するとよい。

(167) ベック『ヘルダーリンとシュトルベルク』(ヘルダーリン協会編『年鑑』

第二巻『イドゥーナ』一九四四年刊、八八頁—一四四頁)参照。

※単に詩作の面のみならず、ヘルダーリンとの関連でシュトルベルクは、『イー

リアス』翻訳(一七七八年)の面においても一瞥に値しよう。すなわち、それ

まで仏訳からの重訳(一七五四年レオン訳)でしかホメーロスは知られていな

かったのであるが、当一七七八年に始めて八十歳のボードマー訳『イーリアス』
『オデュッセイア』と並んで、当年二十八歳のシュトルベルク訳『イーリアス』
が六歩格(ヘクサトロン)で現われたからである。

(168) 『十八世紀ドイツのユートピア』(註(163))一〇四頁。

(169) 『十八世紀ドイツのユートピア』(註(163))一〇五頁。

(170) 『十八世紀ドイツのユートピア』(註(163))一〇八頁。

(171) 『十八世紀ドイツのユートピア』(註(163))一一〇頁。

(172) エンゲルス『ドイツの現状』一八四七年。マルクス・エンゲルス全集、第

四巻、一九六四年、四四頁。

イギリスは農産物を全く輸出しておらず、絶えず外国から輸入しなければ
ならない。フランスは少くとも輸出するだけ輸入しており、この仏英
両国の富の源泉は就んずく工業製品の輸出である。これに対してドイツ
は工業製品をほとんど輸出しておらず、夥しい穀物、羊毛、家畜を輸出
している。……農業の政治上の代表者は、他の欧州諸国と同様にド
イツでも、大土地所有者たる封建貴族であり、この貴族の専制支配に適
う政治形態が封建制度である。そしてこの封建制が解体した所はどこで
も、農業が国の産業を決定しなくなったのである。

当の「農業の優位」が失なわれてゆく時代の動きの中で、第六句の「手仕事
の品々(Werke der Hand)」(註(1))などを考察する詳細は、筆者の別
論、『パンとぶどう酒』冒頭の都市像(一九八三年度・高知大学学術研究報
告、第三二巻、人文科学篇、二二頁—七〇頁所収、一九八四年三月刊)を参
照されたい。

(173) 『十八世紀ドイツのユートピア』(註(163))一〇五頁。

(174) 註(172)参照。

(175) 「思慮深い家長」(第四句)を中心とした『パンとぶどう酒』の詩想に関す
る詳細は筆者の別論、『パンとぶどう酒』第一節「聖なる夜」その二—(四)
思慮深い家長(一九八六年度、高知大学学術研究報告、第三五巻、人文科学
篇、六七頁—一〇二頁所収、一九八六年十一月刊)の改稿(一九八九年度、
高知大学学術研究報告、第三八巻、人文科学篇その二、一九八九年十一月刊、
四三頁—九〇頁所収)を参照されたい。原詩は註(1)。

(176) 和訳全集(註(50))第二巻、一〇九頁。

(177) ヴァックヴィッツ『一八〇〇年頃の悲哀と理想——ヘルダーリンの悲歌作品研究』(一九九二年)三〇頁。

(178) 東独版トーマス・マン全集、一九五六年刊全十二巻、第十一巻、七二四頁。

(179) 全集、第三巻、一頁。

(180) 全集、第三巻、八九頁。

(181) 全集、第三巻、三二頁。

※「靈感」に関する詳細は筆者の別論『ヘルダーリンの西欧ギリシア論』(註(34))の(三)神話の神 (5)神の国(第三四巻、三四頁—三七頁)を参照されたい。

(182) 全集、第三巻、五〇頁。註(5)参照

(183) ヘルダーリン協会刊ベック／ラーベ共編『ヘルダーリン年代記』一九七〇年、三八九頁。

(184) 「丸く収まった芸術作品」はゲーテ文学を評してハイネが『ロマン派』(世紀記念版全集、第八巻、一九七二年、三五頁)で述べた言葉であるが、これと『パンとぶどう酒』との関連については、筆者の別論『ヘルダーリンの西欧ギリシア論』(註(34))の(一)シラーの問題提起 (3)理想と人生(第三三巻、二二頁—二六頁)、および更に筆者のもう一つの別論、内省と光明——『パンとぶどう酒』第一節「聖なる夜」その一(一九八五年度・高知大学芸術研究報告、第三四巻、人文科学篇、一五五頁—二〇一頁所収)一七〇頁を参照されたい。

(185) ヴァイマル版全集、第二五巻(註(157))一六七頁。

(186) ヴァイマル版『ゲーテ年鑑』第九二巻(一九七五年)七三頁—一二七頁所収、ケスター独訳、八三頁。註(133)および註(150)参照。

(187) 『知られざるヘーゲル』飯塚勝久／飯島勉共訳、未来社、一九八〇年。

(188) 『ヘルダーリンと仏革命』(スールカムプ刊)一九六九年

(189) 『ヘルダーリン』(スールカムプ刊)新稿(一九七一年十二月—七二年四月)全二幕、第二幕、第八場終結部、一八八頁—一九七頁。

※此所で「若きマルクス」がヘルダーリンの「大札讀者(ein grosser Verehrer)」(一八八頁)として登場し、詩人の「詩作、殊に『ヒューペーリオン』の邂逅」(一八九頁)を感慨をこめて物語り、更に次のようにヘルダー

リンの仕事を「革命」との関連で説くに至る。

「先生は半世紀前に、革命(die Umwälzung)を学術上で基礎づけた必然としてではありませんでしたが、しかし神話上の予感(mythologische Ahnung)として描かれました。これは先生の過誤ではありません。」(一九二頁)

この後マルクス退場(一九七頁)までに、七月革命(一八三〇年)などが話題(一九四頁以下)となる。

(平成元年・一九八九年 九月 一日受理)
(平成元年・一九八九年 二月 二七日発行)

一 静かに安らう都市。ひそやかに街路に燈火がとり
二 して松明に飾られて騒然と馬車は疾駆し過ぎ去る。
三 満ち足りて家路へと、昼間の歎びに別れを告げ、安らぎを求め歩みゆく人々。
四 して収支得失を慮る思慮深い家長は
五 悠然と和やかにわが家にくつろぐ。(黄昏の今は) 葡萄も花束もなく。
六 して手仕事の品々もなく安らう、(昼間は) 忙しき広場の市場。
七 だが他方、堅琴の音が彼方の庭園から響いて来る。恐らくは
八 そこで恋人が奏で、或いは孤独な者が
九 彼方の友を想いつつ、また若き日を偲びつつ。して噴泉が
一〇 滔々と湧き、清冽な水しぶきをあげ送り、芳香に匂う花壇を落している。
一一 ひそやかに黄昏の夜気に響き渡る晩鐘の音
一二 して時刻を想い、その数を夜警は声高に呼ばれる。
一三 今や又ある息吹きが到来し、林苑の樹頭を(天上へと) 揺り動かす。
一四 見よ！ して我らの大地の影像たる月も
一五 また秘蔵の莊嚴より解き放たれ、靈氣溢れる夜が到来する。
一六 星辰に輝きみち(清澄な) 夜は、恐らく私達などまず配慮もせず。
一七 彼方で光明を放ち、驚嘆させ、人間では異邦の者として
一八 山頂の上高く、悲愴かつ壮麗に立ち現われる。
(『パンとぶどう酒』一八〇〇年—〇一年、第一節、第一句—第十八句)

gegeben wurden. Diese fanden in dem von Goethe und Schiller geschaffenen ästhetischen Klima unter dem Druck der historischen Ereignisse allzu leicht den Weg der irrationalistischen Umkehr und institutionalisierten dauerhaft jene Scheidung zwischen Literatur und Gesellschaft, gegen die sich das Beste im Jugendwerk der beiden Weimarer gerichtet hatte. ... Der bedeutendste dichterische Ausdruck der von der Weimarer Klassik bewirkten ästhetischen Restauration ist wohl der Roman „Wilhelm Meisters Lehrjahre“, den Goethe, das Fragment der „Theatralischen Sendung“ überarbeitend, von Mai 1794 bis August 1796 schrieb. ...

187)Honte, Jacques: Hegel secret. 1968.

188)Bertaux, Pierre: Hölderlin und die Französische Revolution. Frankfurt am Main. Suhrkamp. 1969.

189)Weiss, Peter „Hölderlin“(Stück in zwei Akten) Neufassung. Dezember 1971 — April 1972. Frankfurt am Main. Suhrkamp. 1972. S.188-192.

LOTTE ZIMMER Nicht doch nicht doch

ein grosser Verehrer sagt er

Ist er Ihrer Gedichte

schreibt auch selbst und ist

Redaktor

an der Rheinischen Zeitung

(Auftritt der junge Karl Marx. Er bleibt abwartend stehn. Hölderlin verbeugt sich tief.)

S.188

S.189

MARX Es war die Begegnung

mit Ihrer Dichtung

vor allem dem Hyperion

die mir die eigenen Versuche

mit einem Schlag zerschmetterte

Vor solchem Licht und

solcher Deutlichkeit

mussten meine eignen Schreibereien

zu nichts zerfallen

Sie gaben mir Verehrtester

viel Verdross denn

plötzlich sah ich dass alles

was ich für Poesie hielt

auf dem Mond konstruiert war

Und dann

in dem was mir da unterging

und sich auf ein verschwommenes

Jenseits eingerichtet hatte

versuchte ich

mich wieder aufzubaun

In das zerrissne Allerheiligste

mussten neue Götter gesetzt werden

(Hölderlin ist Marx näher getreten. Er lauscht äusserst gespannt.)

S.190

S.191

S.192

.....

Vor Ihnen

stelle ich die beiden Wege

als gleichwertig hin

Dass Sie

ein halbes Jahrhundert zuvor

die Umwälzung nicht

als wissenschaftlich begründete

Notwendigkeit sondern

als mythologische Ahnung

beschrieben

ist Ihr Fehler nicht

.....

blühe — fragst du mich, wann diß seyn wird? Dann, wann die Lieblingin der Zeit, die jüngste, schönste Tochter der Zeit, die neue Kirche, hervorgehn wird aus diesen befleckten veralteten Formen, wann das erwachte Gefühl des Göttlichen dem Menschen seine Gottheit, und seiner Brust die schöne Jugend wiederbringen wird, wann — ich kann sie nicht verkünden, denn ich ahne sie kaum, aber sie kömmt gewiß, gewiß. Der Tod ist ein Bo-te des Lebens, und daß wir jezt schlafen in unsern Krankenhäusern, diß zeugt vom nahen gesunden Erwachen. Dann, dann erst sind wir, dann isr das Element der Geister gefunden! ...

Vgl. „Hypérion“ Vol. I. I. Livre: Oeuvres de la Pléiade. S.158-159.

Pluie du ciel, ô ferveur! Tu nous ramènera le printemps des nations! L'É-tat ne peut disposer de toi. Mais qu'il ne te gêne point, et tu viendras, avec tes voluptés toutes-puissantes, tu nous envelopperas dans un nuage d'or et nous élèveras au-dessus de la condition mortelle; alors, pleins de stupeur, nous douterons d'être ces mêmes indigents qui interrogeaient les astres pour (S.158/S.159) savoir s'ils verraient encore un prin-temps... Quand cela sera, me demandes-tu? Quand la préférée du Temps, sa plus jeune, sa plus belle fille, la nouvelle Église, surgira de ces formes désuètes et souillées, quand le réveil du sens du divin rendra à l'homme son dieu et au coeur sa jeunesse, quand... je ne l'annoncer, car c'est à peine si je la pressens, mais je ne doute pas qu'elle vienne. La mort est messagère de vie: si nous dormons maintenant dans notre hôpital, c'est que bientôt nous nous réveillerons guéris. Alors seulement nous serons, alors aurons trouvé l'élément où l'esprit respire!

Vgl. „Hellas und Hesperien bei Hölderlin“ (V(4)34) (III) „Gott der Mythe“

(5) „Reich Gottes“ (Forschungsberichte der Universität Kôchi fürs Jahr 1985. Geisteswissenschaften. Vol.34. 1986. S.34-37).

182) „das geistige Wehen“ (V(4)5): StA. Bd.3. S.50)

183) Hölderlin. Eine Chronik in Text und Bild. Hrsg.: Beck, Adolf / Raabe, Paul: Schriften der Hölderlin-Gesellschaft (Tübingen). Bd.6/7. Frankfurt am Main. Insel. 1970. S.389.

Politisch war auch er Republikaner, Demokrat.

184) Heine „Die romantische Schule“ I. Buch: Säkularausgabe. Berlin/Paris. Aufbau/Centre National de la Recherche Scientifique. Bd.8. 1972. S.35.

der Geist wurde Materie unter seinen Händen, und er gab ihm die schöne gefällige Form. So wurde er der größte Künstler in unserer Literatur, und alles was er schrieb wurde ein abgerundetes Kunstwerk.

Vgl. „Hellas und Hesperien bei Hölderlin“ (V(4)34) (I) Schillers Aufbruch

(3) „Das Ideal und das Leben“ (Forschungsberichte der Universität Kôchi fürs Jahr 1984. Vol.33. Geisteswissenschaften. 1985. S.22-26).

Vgl. Takahashi, Katsumi: VERINNERLICHUNG UND ERLEUCHTUNG — Über die erste Strophe von Hölderlins „Brod und Wein“: „Heilige Nacht“ Erster Teil (Forschungsberichte der Universität Kôchi fürs Jahr 1985. Vol.34. Geisteswissenschaften. 1986. S.155-201). S.170.

185) Vgl. V(4)157: Schillers Brief an Körner vom 25. Dezember 1788.

186) Baioni, Giuliano „Classicismo e Rivoluzione. Goethe e la Rivoluzione francese“ (Napoli. Guida Editori. 1969) 5. Kap.: Goethe-Jahrbuch. Bd.92. Weimar. Hermann Böhlau Nachfolger. 1975. S.73-127; „Märchen“ — „Wilhelm Meisters Lehrjahre“ — „Hermann und Dorothea“ (Übersetz.: Köster, Monika). S.83.

Goethe und Schiller — es ist kaum erforderlich, das zu sagen — werden dadurch nicht plötzlich zu Reaktionen, denn sie vermitteln dem bürgerlichen 19. Jahrhundert die hohe humanistische Tradition der europäischen Aufklärung. Aber diese ausschließlich ästhetische Mission, die sie angesichts der politischen Realität der Revolution ihrer Klasse gegenüber vollbringen zu müssen glaubten, hatte die Tendenz, alle jene fortschrittlichen und revolutionären Fermente zu beseitigen, die von ihrem Sturm und Drang aus an die jungen Vertreter der Frühromantischen Schule weiter-

bau aufgehört hat, entscheidender Produktionszweig eines Landes zu sein, in welchem sich neben der ackerbauenden eine gewerbtreibende Klasse, neben den Dörfern Städte gebildet haben. ...

Vgl. Takahashi, Katsumi: Das Stadtbild im Anfang von „Brod und Wein“ (Forschungsberichte der Universität Kōchi fürs Jahr 1983. Vol.32. Geisteswissenschaften. S.21-70. März 1984).

173) Fujihira „Die Utopie ...“ (V(4)163) S.105.

174) Das Stadtbild im Anfang von „Brod und Wein“ (V(4)172). S.30.

175) Takahashi, Katsumi: Über die erste Strophe von Hölderlins „Brod und Wein“: „Heilige Nacht“. Zweiter Teil: (IV) „Ein sinniges Haupt“ (Forschungsberichte der Universität Kōchi fürs Jahr 1986. Vol.35. Geisteswissenschaften. S.67-102. November 1986).

176) Takahashi, Katsumi: LANDAUER — „ein sinniges Haupt“ in Hölderlins „Brod und Wein“ (DOITSU BUNGAKU: DIE DEUTSCHE LITERATUR hrsg. v. der Japanischen Gesellschaft für Germanistik. Bd.73. Herbst 1984. S.83-91). S.83. Mit der Frage, ob das „sinnige Haupt“ ein „gescheiter Kaufmann“²⁾ oder ein „besonnener Hausvater“ ist, habe ich mich schon in meiner Arbeit: „Das Stadtbild im Anfang von „Brod und Wein“³⁾ auseinandergesetzt. ...

2) Im zweiten Band (1967) der Hölderlin-Übertragung ins Japanische (S.109) lautet es: „Nukarinonai Shonin“ (Tomio Tezuka).

3) Forschungsberichte der Universität Kōchi. Vol.32. Geisteswissenschaften. März 1984. S.38f. ...

177) Wackwitz, Stephan: Trauer und Utopie um 1800 — Studien zu Hölderlins Elegienwerk. Stuttgart. Hans-Dieter Heinz. 1982. S.30.

Im Gegensatz zur menschlichen Erinnerung, die allein Verluste — die vergangene Jugend und die fernen Freunde — bilanzieren kann, ist die ökonomische Reflexion — die Überlegungen des „sinnigen Haupt“, des bourgeois — affirmativ. „Gewinn und Verlust“ werden „wohlzufrieden“ bedacht, denn die Praxis des Markts hat sich gelohnt. ...

Vgl. Das Stadtbild im Anfang von „Brod und Wein“ (V(4)172). S.40.

178) Mann, Thomas (1875-1955) „Kultur und Sozialismus“ (1929): Gesammelte Werke. Berlin. Aufbau. 1956 (12 Bände). Bd.11. S.714.

Was not täte, was endgültig deutsch sein könnte, wäre ein Bund und Pakt der konservativen Kulturidee mit dem revolutionären Gesellschaftsgedanken, zwischen Griechenland und Moskau, um es pointiert zu sagen — schon einmal habe ich dies auf die Spitze zu stellen versucht. Ich sagte, gut werde es erst stehen um Deutschland, und dieses werde sich selbst gefunden haben, wenn Karl Marx den Friedrich Hölderlin gelesen haben werde —, eine Begegnung, die übrigens im Begriffe sei, sich zu vollziehen. ...

179) Hölderlin „Hyperion“: StA. Bd.3. S.1.

HYPERION ODER DER EREMIT IN GRIECHENLAND.

Vgl. „Hypérion“ (V(4)5): OEuvres de la Pléiade. S.135.

HYPERION OU L'ERMITE DE GRÈCE.

180) „Hyperion“ (V(4)5) Bd.1. II. Buch. Brief 30. S.159: StA. Bd.3. S.89.

Heilige Natur! du bist dieselbe in und außer mir. Es muß so schwer nicht seyn, was außer mir ist, zu vereinen mit dem Göttlichen in mir. ...

Vgl. „Hypérion“ Volume premier. II. Livre: OEuvres de la Pléiade. S.210.

Nature sacrée! tu es en moi et hors de moi la même. Peut-être n'est-il pas si difficile d'unir ce qui est hors de moi au divin qui est en moi.

181) „Hyperion“ Bd.1. I. Buch. Brief 7. S.55: StA. Bd.3. S.32.

O Regen vom Himmel! o Begeisterung! Du wirst den Frühling der Völker uns wiederbringen. Dich kann der Staat nicht hergebeten. Aber er störe dich nicht, so wirst du kommen, kommen wirst du, mit deinen allmächtigen Wonnen, in goldne Wolken wirst du uns hüllen und empor uns tragen über die Sterblichkeit, und wir werden staunen und fragen, ob wir es noch seyn, wir, die Dürftigen, die wir die Sterne fragten, ob dort uns ein Frühling

Vgl. Takahashi, Katsumi: Schiller contra Kleist — „Die Götter Griechenlandes" und „Das Lob des einzigen Gottes" („Die deutsche Literatur" hrsg. v. dem Zweigbezirk Chûgoku-Shikoku der Japanischen Gesellschaft für Germanistik. Sansyusya. Bd.19. 1986. S.18-27).

Vgl. Kleist, Franz(1769-97) „Das Lob des einzigen Gottes" („Der Teutsche Merkur" hrsg. v. Wieland. August 1789. S.113-129: V(4)109).

164)Fujihira „Die Utopie ... " (V(4)163) S.102.

165)Stolberg(V(4)113) „Freiheitsgesang aus dem zwanzigsten Jahrhundert" (1775) V.1-5/V.17-30: Der Göttinger Hain(V(4)87). S.195-196.

Sonne, du säumst!

Sonne, du säumst!

Weilen dich kühlende

Wellen des Meeres?

Sonne, du säumst!

5

... ..

Wir sahen dich einst,

Rauschender Strom,

Mitten im fliegenden Laufe gehemmt!

Bebend und bleich,

20

Wehend das Haar,

Stürzte der Tyrannen Flucht

Sich in deine wilden Wellen,

In die felsenwälzende Wellen

Stürzten sich die Freien nach;

25

Sanfter wallten deine Wellen!

Der Tyrannen Rosse Blut,

Der Tyrannen Knechte Blut,

Der Tyrannen Blut!

Der Tyrannen Blut!

30

166)Stolberg „Über die Fülle des Herzens"(1777-82): Der Göttinger Hain(V(4)87). S.231-243. S.231: Über die Fülle des Herzens.

167)Beck, Adolf „Hölderlin und Fr. L. Stolberg. Die Anfänge des hymnischen Stiles bei Hölderlin": Iduna. Jahrbuch der Hölderlin-Gesellschaft. Bd.1. 1944. S.88-114.

168)Fujihira „Die Utopie ... " (V(4)163) S.104.

169)Fujihira „Die Utopie ... " (V(4)163) S.105.

170)Fujihira „Die Utopie ... " (V(4)163) S.108.

171)Fujihira „Die Utopie ... " (V(4)163) S.110.

172)Engels, Friedrich(1820-95) „Der Status quo in Deutschland"(1847): Marx/Engels. Werke. Institut Marxismus-Leninismus beim ZK der SED(Hrsg.). Berlin. Dietz. Bd.4. 1964. S.44.

England exportiert gar keine Ackerbauprodukte, sondern hat fortwährend auswärtige Zufuhren nötig; Frankreich importiert wenigstens ebensoviel davon, als es ausführt, und beide Länder stützen ihren Reichtum vor allem auf ihre Ausfuhr von Industrieerzeugnissen. Deutschland dagegen exportiert wenig Industrieprodukte, aber große Massen von Korn, Wolle, Vieh usw. Die überwiegende Bedeutung des Ackerbaus war noch viel größer als jetzt zu der Zeit, als Deutschlands politische Verfassung festgesetzt wurde — im Jahre 1815, und wurde damals noch durch den Umstand vermehrt, daß gerade die fast ausschließlich ackerbautreibenden Teile Deutschlands sich am eifrigsten an dem Sturz des französischen Kaiserreichs beteiligt hatten. Der politische Repräsentant des Ackerbaus ist in Deutschland wie in den meisten europäischen Ländern der Adel, die Klasse der großen Grundbesitzer. Die der ausschließlichen Herrschaft des Adels entsprechende politische Verfassung ist das Feudalsystem. Das Feudalsystem ist überall in demselben Maße zerfallen, in welchem der Acker-

S.195
S.196

Freundlos, ohne Bruder, ... ///// Sieht er in dem langen Strom der
Zeiten / Ewig nur — sein eignes Bild. (1.Fas. 23.Str. V.177-184)

Ferner:

Da die Götter menschlicher noch waren,
Waren Menschen göttlicher.

(„Die Götter Griechenlandes“ 1.Fas. 24.Str. V.191-192)

160) Takahashi, Katsumi „Hellas und Hesperien bei Hölderlin“ (V(4)34) (II) Das
klassische Griechentum und das abendländische Christentum (Forschungsberich-
te der Universität Kōchi fürs Jahr 1984/1985. Vol.33. S.41-52/Vol.34. S.2-
20).

161) „Brod und Wein“ 7.Str. V.109-110/V.119-124: StA. Bd.2. S.93/S.94.

Aber Freund! wir kommen zu spät. Zwar leben die Götter,
Aber über dem Haupt droben in anderer Welt.

110

...

.....

S.93
S.94

Donnernd kommen sie drauf. Indessen dünket mir öfters

Besser zu schlafen, wie so ohne Genossen zu seyn,

120

So zu harren und was zu thun indeß und zu sagen,

Weiß ich nicht und wozu Dichter in dürftiger Zeit?

Aber sie sind, sagst du, wie des Weingotts heilige Priester,

Welche von Lande zu Land zogen in heiliger Nacht.

Vgl. „Le Pain et le vin“ v.109-110/v.119-124: OEuvres de la Pléiade. S.812/
S.813.

Mais nous venons trop tard, ami. Oui, les dieux vivent,

Mais là-haut, sur nos fronts, au coeur d'un autre monde.

110

...

.....

S.812
S.813

Alors, dans un fracas de foudre, ils surgiront. Mais jusqu'au jour de
leur venue,

Les sommeil souvent me paraît moins lourd que cette veille

120

Sans compagnon, cette fiévreuse attente... Ah! que dire encor? Que faire?

Je ne sais plus, — et pourquoi, dans ce temps d'ombre misérable, des
poètes?

Mais ils sont, nous dis-tu, pareils aux saints prêtres du dieu des vignes,

Vaguant de terre en terre au long de la nuit sainte.

162) Hölderlin „Patmos“ 1.Str. V.1-8: StA. Bd.2. S.165.

Nah ist

Und schwer zu fassen der Gott.

Wo aber Gefahr ist, wächst

Das Rettende auch.

Im Finstern wohnen

5

Die Adler und furchtlos gehn

Die Söhne der Alpen über den Abgrund weg

Auf leichtgebaute Brücken.

Vgl. „Patmos“ (Traduction par Roud, Gustave) v.1-8: OEuvres de la Pléiade.
S.867.

Tout proche

Et difficile à saisir, le dieu!

Mais aux lieux du péril croît

Aussi ce qui sauve.

Dans la ténèbre

5

Nichent les aigles et sans frémir

Les fils des Alpes sur des ponts légers

Passent l'abîme.

163) Fujihira, Norio: „Die Utopie im 18. Jahrhundert Deutschlands — Stolbergs
„Die Insel“ und Heinses „Ardinghello und die glückseligen Inseln“ (For-
schungsberichte der Kyōyō-Fakultät der Universität Meyiji. Bd.144. 1981.
S.95).

157) Schillers Brief an Körner vom 25. Dezember 1788: Weimarer Nationalausgabe(V(4)111). Bd.25. 1979. S.167.

Mir schiens daß Dir wirklich die Stolbergische Sottise und mein Gedicht einige Details an die Hand gegeben haben würden, Deine allgemeine Richtschnur auf einen besondern Fall anzuwenden. Ueberhaupt glaube ich ist hier die allgemeine Regel festzusetzen. Der Künstler und dann vorzüglich der Dichter behandelt niemals das wirkliche sondern immer nur das ideale oder das kunstmäßig ausgewählte aus einem wirklichen Gegenstand. Z. B. er behandelt nie die Moral, nie die Religion sondern nur diejenige Eigenschaften von einer jeden, die er sich zusammen denken will — er vergeht sich also auch gegen keine von beyden, er kann sich nur gegen die aesthetische Anordnung oder gegen den Geschmack vergehen. Wenn ich aus den Gebrechen der Religion oder der Moral ein schönes übereinstimmendes Ganze zusammenstelle, so ist mein Kunstwerk gut, und es ist nicht auch nicht unmoralisch oder gottlos, eben, weil ich beyde Gegenstände nicht nahm, wie sie sind, sondern erst wie sie nach einer gewaltsamen Operation, d.i. nach Absonderung und neuer Zusammenfügung wurden. Der Gott den ich in den Göttern Griechenlands in Schatten stelle ist nicht der Gott der Philosophen, oder auch nur das wohlthätige Traumbild des großen Haufens, sondern es ist eine aus vielen gebrechlichen schiefen Vorstellungsarten zusammen gefloßene Mißgeburt — Die Götter der Griechen, die ich ins Licht stelle sind nur die lieblichen Eigenschaften der Griechischen Mythologie in eine Vorstellungsart zusammen gefaßt. Kurz, ich bin überzeugt, daß jedes Kunstwerk nur sich selbst d.h. seiner eigenen Schönheitsregel Rechenschaft geben darf, und keiner andern Forderung unterworfen ist. ...

Vgl. Kant „Grundlegung zur Metaphysik der Sitten“(1785) Vorrede: Werke(V(4)21). Akademie-Textausgabe. Bd.4. S.388-389.

Alle Gewerbe, Handwerke und Künste haben durch die Vertheilung der Arbeiten gewonnen, da nämlich nicht einer alles macht, sondern jeder sich auf gewisse Arbeit, die sich ihrer Behandlungsweise nach von andern merklich unterscheidet, einschränkt, um sie in der größten Vollkommenheit und mit mehrerer Leichtigkeit leisten zu können. Wo die Arbeiter so nicht unterschieden und vertheilt werden, wo jeder ein Tausendkünstler ist, da liegen die Gewerbe noch in der größten Barbarei. ... : so frage ich hier doch nur, ob nicht die Natur der Wissenschaft es erfordere, den empirischen von dem rationalen Theil jederzeit sorgfältig abzusondern und vor der eigentlichen (empirischen) Physik eine Metaphysik der Natur, vor der praktischen Anthropologie aber eine Metaphysik der Sitten voranzuschicken, die von allem Empirischen sorgfältig gesäubert sein müßten, um zu wissen, wie viel reine Vernunft in beiden Fällen leisten (S.388/S.389) könne, und aus welchen Quellen sie selbst diese ihre Belehrung a priori schöpfe, es mag übrigens das letztere Geschäfte von allen Sittenlehrern (deren Name Legion heißt) oder nur von einigen, die Beruf dazu fühlen, getrieben werden. ...

158) Stolberg „Gedanken über ... Die Götter Griechenlandes“(V(4)113) S.100: Schiller und sein Kreis(V(4)113). S.45.

Jeder Lasterhafte fand einen Gott, oder eine Göttin, gegen welche er unschuldig scheinen, oder mit deren Beispiel er wenigstens seine Frevel beschönigen konnte. ...

159) Stolberg „Gedanken ...“(V(4)158) S.102: Schiller und sein Kreis. S.47. Vermeßner ist diese Klage:

Alle jene Blüten sind gefallen / Vor des Nordes winterlichem Wehn; /
Einen zu bereichern, unter allen, / Müßte diese Götterwelt vergehn.

(Schiller „Die Götter Griechenlandes“ 1.Fas. 20.Str. V.153-156)

Zur Lästung gesellt sich die Satyre — Satyre! Himmel und Erde! gegen Wen?

Jene Polypennatur der griechischen Staaten, wo jedes Individuum eines unabhängigen Lebens genoß, und wenn es Noth that, zum Ganzen werden konnte, machte jetzt einem kunstreichen Uhrwerk Platz, wo aus der Zusammenstückelung unendlich vieler, aber lebloser, Theile ein mechanisches Leben im Ganzen sich bildet. ...

- 154) Hegel „System der Wissenschaft. Erster Theil: die Phänomenologie des Geistes“ (Bamberg und Würzburg, bei Joseph Anton Goebhardt, 1807) Vorrede. S.38-39; Gesammelte Werke (Akademie-Ausgabe) in Verbindung mit der deutschen Forschungsgemeinschaft hrsg. v. der Rheinisch-Westfälischen Akademie der Wissenschaften (Düsseldorf). Bd.9. Hamburg. Felix Meiner. 1980. S.27: Werke(V(4)21). Bd.3. S.36.

Die Thätigkeit des Scheidens ist die Krafft und Arbeit des Verstandes, der verwundersamsten und größten, oder vielmehr der absoluten Macht. Der Kreis, der in sich geschlossen ruht, und als Substanz seine Momente hält, ist das unmittelbare und darum nicht verwundersame Verhältniß. Aber daß das von seinem Umfange getrennte Accidentelle als solches, das gebundene und nur in seinem Zusammenhange mit andern Wirkliche ein eigenes Daseyn und abgesonderte Freyheit gewinnt, ist die ungeheure Macht des Negativen; es ist die Energie des Denkens, des reinen Ichs. Der Tod, wenn wir jene Unwirklichkeit so nennen wollen, ist das furchtbarste, und das Todte fest zu halten, das, was die größte Krafft erfordert. Die kraftlose Schönheit haßt den Verstand, weil er ihr diß zumuthet was sie nicht vermag. Aber nicht das Leben, das sich vor dem Tode scheut und von der Verwüstung rein bewahrt, sondern das ihn erträgt, und in ihm sich erhält, ist das Leben des Geistes. Er gewinnt seine Wahrheit nur, indem er in der absoluten Zerrissenheit (S.38/S.39) sich selbst findet. Diese Macht ist er nicht, als das Positive, welches von dem Negativen wegsieht, wie wenn wir von etwas sagen, diß ist nichts oder falsch, und nun, damit fertig, davon weg zu irgend etwas anderem übergehen; sondern er ist diese Macht nur, indem er dem Negativen ins Angesicht schaut, bey ihm verweilt. ...

- Vgl. Hölderlin/Hegel/Schelling „Das älteste Systemprogramm des deutschen Idealismus“ (1796); StA. Bd.4. S.298; Hegel. Werke(V(4)21). Bd.1. S.235.

Zuletzt die Idee, die alle vereinigt, die Idee der Schönheit, das Wort in höherem platonischem Sinne genommen. Ich bin nun überzeugt, daß der höchste Akt der Vernunft, der, indem sie alle Ideen umfaßt, ein ästhetischer Akt ist, und daß Wahrheit und Güte, nur in der Schönheit verschwistert sind. Der Philosoph muß eben so viel ästhetische Kraft besitzen, als der Dichter. Die Menschen ohne ästhetischen Sinn sind unsre Buchstaben Philosophen. Die Philosophie des Geistes ist eine ästhetische Philosophie. Man kan in nichts geistreich seyn, selbst über Geschichte kan man nicht geistreich raisonniren — ohne ästhetischen Sinn. Hier soll offenbar werden, woran es eigentlich den Menschen fehlt, die keine Ideen verstehen, — und treuherzig genug gestehen, daß ihnen alles dunkel ist, sobald es über Tabellen und Register hinausgeht. Die Poësie bekommt dadurch eine höhere Würde, sie wird am Ende wieder, was sie am Anfang war — Lehrerin der Menschheit; denn es gibt keine Philosophie, keine Geschichte mehr, die Dichtkunst allein wird alle übrigen Wissenschaften und Künste überleben. ... (StA. Bd.4. S.298)

- 155) „Phänomenologie des Geistes“ Vorrede. S.38-39(V(4)154).

- 156) „Phänomenologie des Geistes“ Vorrede. S.32; Akademie-Ausgabe. Bd.9(V(4)154). S.24: Werke(V(4)21). Bd.3. S.31.

die Begeisterung, die wie aus der Pistole mit dem absoluten Wissen unmittelbar anfängt, ... (Akademie-Ausgabe. Bd.9. S.24)

- Vgl. Takahashi, Katsumi „Hellas und Hesperien bei Hölderlin“ (V(4)34) (III) „Gott der Mythe“ (6) „Intellectuale Anschauung“/(7) „Die absolute Zerrissenheit“ (Forschungsberichte der Universität Kôchi fürs Jahr 1985. Vol.34. Geistes Wissenschaften. S.37-52).

Werk, tretet hin und erkennt das tiefste Gefühl von Wahrheit und Schönheit der Verhältnisse, wirkend aus starker, rauher, deutscher Seele, auf dem eingeschränkten düstern Pfaffenschauplatz des medii aevi. ...

q) „EIN BUND DER KONSERVATIVEN KULTURIDEE MIT DEM REVOLUTIONÄREN GESELLSCHAFTSGEDANKEN“

153) Schiller „Über Bürgers Gedichte“: Weimarer Nationalausgabe. Bd.22(V(4)149). S.245.

Bei der Vereinzelung und getrennten Wirksamkeit unsrer Geisteskräfte, die der erweiterte Kreis des Wissens und die Absonderung der Berufsgeschäfte notwendig macht, ist es die Dichtkunst beinahe allein, welche die getrennten Kräfte der Seele wieder in Vereinigung bringt, welche Kopf und Herz, Scharfsinn und Witz, Vernunft und Einbildungskraft in harmonischem Bunde beschäftigt, welche gleichsam den ganzen Menschen in uns wieder herstellt. ...

Vgl. Schiller „Philosophie der Physiologie“ (1779) I. Das geistige Leben.

§.1: Weimarer Nationalausgabe. Bd.20(V(4)111). S.10.

§.1. Bestimmung des Menschen. Soviel wird, denke ich, einmal fest genug erwiesen seyn, daß das Universum das Werk eines unendlichen Verstandes sei und entworfen nach einem treflichen Plane. So wie es igt durch den allmächtigen Einfluß der göttlichen Kraft aus dem Entwurffe zur Wirklichkeit hinrann, und alle Kräfte wirken, und in einander wirken, gleich Saiten eines Instruments tausendstimmig zusammenlautend in eine Melodie: so soll der Geist des Menschen, mit Kräften der Gottheit geadelt, aus den einzelnen Wirkungen Ursach und Absicht, aus dem Zusammenhang der Ursachen und Absichten all den grossen Plan des Ganzen entdecken, aus dem Plane den Schöpfer erkennen, ihn lieben, ihn verherrlichen, oder kürzer, erhabner klingend in unseren Ohren: der Mensch ist da, daß er nachringe der Größe seines Schöpfers, mit eben dem Blick umfaße die Welt, wie der Schöpfer sie umfaßt — Gottgleichheit ist die Bestimmung des Menschen. Unendlich zwar ist diß sein Ideal: aber der Geist ist ewig. Ewigkeit ist das Maas der Unendlichkeit, das heist, er wird ewig wachsen, aber es niemals erreichen.

Vgl. „so fließt in Einen Bund der Wahrheit / in Einen Strohm des Lichts zurück!“ („Die Künstler“ V.480-481: V(4)135).

Vgl. Schiller „An die Freude“ („Thalia“ hrsg. v. Schiller. 1786: V(4)131) 2. Str. V.13-20; Weimarer Nationalausgabe. Bd.1(V(4)108). S.169: „An die Freude“ Zweite Fassung (Ausgabe letzter Hand 1805: V(4)131). 2.Str. V.13-20; Weimarer Nationalausgabe. Bd.2. Teil I(V(4)74). S.185.

Wem der große Wurf gelungen,
eines Freundes Freund zu seyn;
wer ein holdes Weib errungen,
mische seinen Jubel ein!

Ja — wer auch nur eine Seele
sein nennt auf dem Erdenrund!
Und wer's nie gekonnt, der stehle
weinend sich aus diesem Bund!
(Erste Fassung. 1786)

Wem der große Wurf gelungen
Eines Freundes Freund zu seyn,
15 Wer ein holdes Weib errungen,
Mische seinen Jubel ein!
Ja — wer auch nur Eine Seele
Sein nennt auf dem Erdenrund!
Und wer's nie gekonnt, der stehle
20 Weinend sich aus diesem Bund!
(Zweite Fassung. 1805)

Vgl. Schiller „Ueber die ästhetische Erziehung ...“ (V(4)134) 6. Brief: Weimarer Nationalausgabe. Bd.20(V(4)111). S.322-323.

Die Kultur selbst war es, welche der neuern Menschheit diese Wunde schlug. Sobald auf der einen Seite die erweiterte Erfahrung und das bestimmtere Denken eine schärfere Scheidung der Wissenschaften, auf der andern das verwickeltere Uhrwerk der Staaten eine strengere Absonderung der Stände und Ge- (S.322/S.323) schäufte nothwendig machte, so zerriß auch der innere Bund der menschlichen Natur, und ein verderblicher Streit entzweyete ihre harmonischen Kräfte. ...

Das Unzulängliche,
Hier wird's Ereignis;
Das Unbeschreibliche,
Hier ist's getan;
Das Ewig-Weibliche
Zieht uns hinan.

12110

Vgl. Koike, Tatsuo: Schriften. Hrsg.: Koike=Tatsuo-Schriften=Veröffentlichungsgesellschaft. Bd.2: „Die Seele der Kunst“. S.320-321.

Vgl. Goethe „Von deutscher Baukunst“(1772): Werke(V(4)14). Bd.12. S.11.

Mit welcher unerwarteten Empfindung überraschte mich der Anblick, als ich davor trat! Ein ganzer, großer Eindruck füllte meine Seele, den, weil er aus tausend harmonisierenden Einzelheiten bestand, ich wohl schmecken und genießen, keineswegs aber erkennen und erklären konnte. ... Wie oft bin ich zurückgekehrt, von allen Seiten, aus allen Entfernungen, in jedem Lichte des Tags zu schauen seine Würde und Herrlichkeit! Schwer ist's dem Menschengestalt, wenn seines Bruders Werk so hoch erhaben ist, daß er nur beugen und anbeten muß. Wie oft hat die Abenddämmerung mein durch forschendes Schauen ermattetes Aug' mit freundlicher Ruhe geletzt, wenn durch sie die unzähligen Teile zu ganzen Massen schmolzen, und nun diese, einfach und groß, vor meiner Seele standen und meine Kraft sich wonnevoll entfaltete, zugleich zu genießen und zu erkennen! Da offenbarte sich mir, in leisen Ahnungen, der Genius des großen Werkmeisters. ...

Vgl. Hegel „Philosophie der Geschichte“(V(4)21) Einleitung: Werke in 20 Bänden(V(4)21). Bd.12. S.67.

Die Hauptsache ist, daß die Freiheit, wie sie durch den Begriff bestimmt wird, nicht den subjektiven Willen und die Willkür zum Prinzip hat, sondern die Einsicht des allgemeinen Willens, und daß das System der Freiheit freie Entwicklung ihrer Momente ist. Der subjektive Wille ist eine ganz formelle Bestimmung, in der gar nicht liegt, was er will. Nur der vernünftige Wille ist dies Allgemeine, das sich in sich selbst bestimmt und entwickelt und seine Momente als organische Glieder auslegt. Von solchem gotischen Dombau haben die Alten nichts gewußt.

Vgl. Goethe „Maximen und Reflexionen“ 87: Werke(V(4)14). Bd.12. S.377.

Antike Tempel konzentrieren den Gott im Menschen; des Mittelalters Kirchen streben nach dem Gott in der Höhe.

Vgl. „Von deutscher Baukunst“(1772): Werke(V(4)14). Bd.12. S.7/S.10/S.12/S.14.

Als ich auf deinem Grabe herumwandelte, edler Erwin, und den Stein suchte, der mir deuten sollte: Anno domini 1318. XVI. Kal. Febr. obiit Magister Ervinus, Gubernator Fabricae Ecclesiae Argentinensis, ... Wenigen ward es gegeben, einen Babelgedanken in der Seele zu zeugen, ganz, groß, und bis in den kleinsten Teil notwendig schön, wie Bäume Gottes; ... (S.7//S.10) ... Wohl! wenn uns der Genius nicht zu Hülfe käme, der Erwinen von Steinbach eingab: vermannigfaltige die ungeheure Mauer, die du gen Himmel führen sollst, daß sie aufsteige gleich einem hoherhabnen, weitverbreiteten Baume Gottes, der mit tausend Ästen, Millionen Zweigen und Blättern wie der Sand am Meer ringsum der Gegend verkündet die Herrlichkeit des Herrn, seines Meisters. ... (S.10//S.12) ... Und nun soll ich nicht ergrimmen, heiliger Erwin, wenn der deutsche Kunstgelehrte, auf Hörensagen neidischer Nachbarn, seinen Vorzug verkennt, dein Werk mit dem unverstandnen Worte Gotisch verkleinert. Da er Gott danken sollte, laut verkündigen zu können: Das ist deutsche Baukunst, unsre Baukunst, da der Italiener sich keiner eignen rühmen darf, viel weniger der Franzos. ... wir ... treten anbetend vor das Werk des Meisters, der zuerst die zerstreuten Elemente in ein lebendiges Ganze zusammenschuf. ... (S.12/S.14) ... Und von der Stufe, auf welcher Erwin gestiegen ist, wird ihn keiner herabstoßen. Hier steht sein

vor und es wird mir wohl nicht leicht werden, den Karlos mit Verstand zu lesen, da er lange Zeit die Zauberwolke war, in die der gute Gott meiner Jugend mich hüllte, daß ich nicht zu frühe das Kleinliche und Barbarische der Welt sah, die mich umgab. ...

Vgl. lettre à Schiller, première quinzaine de septembre 1799 (Traduction par Naville, Denise): OEuures de la Pléiade. S.744.

... noble maître! — J'ai aussi étudié votre Fiesco, et j'en ai pareillement admiré la structure interne, toute la forme vivante, par quoi cette oeuvre me semble impérissable, bien plus encore que par les caractères si grands et pourtant si vrais, les situations éblouissantes, le miroitement ensorcelant du langage. Les autres pièces, je les garde en réserve, et il ne me sera guère plus facile sans doute de lire Don Carlos avec calme et réflexion, car il fut longtemps le nuage magique dont un Dieu de bonté entoura ma jeunesse, afin de ne pas me dévoiler trop tôt la mesquinerie et la barbarie du monde. ...

147) Hölderlins Brief 194: StA. Bd.6. S.364-365(V(4)146).

148) Naito, Katsuhiko: Eine Betrachtung über Schillers „Über Bürgers Gedichte“ („Akademia“ hrsg. v. der wissenschaftlichen Gesellschaft der Universität Nanzan, Nagoya. Bd.21. 1958. S.71-97).

149) Schiller „Über Bürgers Gedichte“ (1791): Weimarer Nationalausgabe(V(4)74). Bd.22. 1958. S.245-264. S.253.

Eine der ersten Erfordernisse des Dichters ist Idealisierung, Veredlung, ohne welche er aufhört, seinen Namen zu verdienen. Ihm kommt es zu, das Vortreffliche seines Gegenstandes (mag dieser nun Gestalt, Empfindung oder Handlung sein, in ihm oder außer ihm wohnen) von gröbern, wenigstens fremdartigen Beimischungen zu befreien, die in mehreren Gegenständen zerstreuten Strahlen von Vollkommenheit in einem einzigen zu sammeln, einzelne, das Ebenmaß störende Züge der Harmonie des Ganzen zu unterwerfen, das Individuelle und Lokale zum Allgemeinen zu erheben. Alle Ideale, die er auf diese Art im einzelnen bildet, sind gleichsam nur Ausflüsse eines innern Ideals von Vollkommenheit, das in der Seele des Dichters wohnt. Zu je größerer Reinheit und Fülle er dieses innere allgemeine Ideal ausgebildet hat, desto mehr werden auch jene einzelnen sich der höchsten Vollkommenheit nähern. Diese Idealisierungskunst vermessen wir bei Hn. Bürger. ...

150) „Über Bürgers Gedichte“: Bd.22(V(4)149). S.246.

Es ist also nicht genug, Empfindung mit erhöhten Farben zu schildern; man muß auch erhöht empfinden. Begeisterung allein ist nicht genug; man fordert die Begeisterung eines gebildeten Geistes. Alles, was der Dichter uns geben kann, ist seine Individualität. ...

Vgl. Bd.22(V(4)149). S.256: „Über Bürgers Gedichte“

Selbst in Gedichten, von denen man zu sagen pflegt, daß die Liebe, die Freundschaft u.s.w. selbst dem Dichter den Pinsel dabei geführt habe, hatte er damit anfangen müssen, sich selbst fremd zu werden, den Gegenstand seiner Begeisterung von seiner Individualität loszuwickeln, seine Leidenschaft aus einer mildernden Ferne anzuschauen. Das Idealschöne wird schlechterdings nur durch eine Freiheit des Geistes, durch eine Selbsttätigkeit möglich, welche die Übermacht der Leidenschaft aufhebt.

151) „Über Bürgers Gedichte“: Bd.22(V(4)149). S.257.

... — aber eben deswegen möchten wir es, seiner glänzenden Vorzüge ungeachtet, nur ein sehr vortreffliches Gelegenheitsgedicht nennen — ein Gedicht nämlich, dessen Entstehung und Bestimmung man es allenfalls verzeiht, wenn ihm die idealische Reinheit und Vollendung mangelt, die allein den guten Geschmack befriedigt. ...

152) Goethe „Faust“ (V(4)51/66) V.12104-12111 (Chorus mysticus): Werke(V(4)14). Bd.3. S.364.

Alles Vergängliche
Ist nur ein Gleichnis;

141) Martini, Fritz: Deutsche Literaturgeschichte. Von den Anfängen bis zur Gegenwart. 6. Aufl. Stuttgart. Kröner. 1972. S.181.

Haller ... in großen Lehrgedichten ... Mit ihm beginnt jene machtvolle Gedankendichtung, die bei Schiller eine reife Vollendung fand.
142) Burckhardt „Gedächtnisrede auf Schiller“ (V(4)138): Mayer „Schillers Gedichte ...“ (V(4)138) S.73.

Fortan steht er einzig unter allen lyrischen Dichtern, weil er mit starkem, geläutertem Willen der Verewigung des einzelnen Momentes, der einzelnen Situation wesentlich entsagt, nicht zu jener Gattung gehört, in der vor allem groß sind Properz, Ovid, Byron, Victor Hugo, Goethe. Schiller verewigt das Ganze einer Empfindung in der edelsten und gewaltigsten Stilform. Fortan sammelt er alle Strahlen des Gefühls vollständig, so daß er trotz der Allgemeingiltigkeit seiner Gedichte doch so ergreift, wie nur das Momentane irgend kann. Tausende haben schöne Liebeslieder gedichtet, nur Er die Würde der Frauen ...

Vgl. Brentano (V(4)73) „Brief an Philipp Otto Runge vom 21. Januar 1810“: StA. Bd.7. 2. Teil. S.407.

... und einige Oden des wahnsinnig gewordenen Württemberger Dichters Hölderlin, z.B. seine Elegie an die Nacht, seine Herbstfeyer, sein Rhein, Pathmos, und andere, welche in den zwey Musenalmanachen Seckendorf's von 1807 und 1808 vergessen und unkenntlich stehen. Niemals ist vielleicht hohe betrachtende Trauer so herrlich ausgesprochen worden. Manchmal wird dieser Genius dunkel und versinkt in den bitteren Brunnen seines Herzens; meistens aber glänzt sein apokalyptischer Stern Wermuth wunderbar rührend über das weite Meer seiner Empfindung. Wenn Sie diese Bücher finden können, so lesen Sie diese Lieder doch. Besonders ist die Nacht klar und sternenhell und einsam und rück- und vorwärts tönende Glocke aller Erinnerung; ich halte sie für eines der gelungensten Gedichte überhaupt. Während ich Solches erlebte, entstand in mir unbewußt die Begierde, ein Gedicht zu erfinden, ...

143) Hölderlins Brief 243: StA. Bd.6. S.436 (V(4)132).

... Liebeslieder immer müder Flug, ... ein anders ist das hohe und reine Frohloken vaterländischer Gesänge. ...

144) Burckhardt „Gedächtnisrede auf Schiller“ (V(4)138) S.72.

Alles an dieser Erscheinung ist unhistorisch und a priori unmöglich, und dennoch ist dieser Posa in der Entwicklung der deutschen Poesie und Gefühlswelt unentbehrlich, man darf wohl sagen, dieser Kosmopolit ist die nationalste Figur der deutschen Literatur.

145) Hölderlins Brief 139 an Schiller vom 20. Juni 1797 : StA. Bd.6. S.241.

... , aber von Ihnen dependir'ich unüberwindlich; ... Aber diese schlimme Alternative ist fast unvermeidlich, wo gewaltiger und verständlicher, als die Natur, aber ebendeßwegen auch unterjochender und positiver der reife Genius der Meister auf den jüngern Künstler wirkt. ...

Vgl. lettre à Schiller, 20 juin 1797 (Traduction par Naville, Denise):

OEuvres de la Pléiade. S.415-416.

... , mais par rapport à vous ma dépendance est insurmontable, ... (S.415/S.416) ... Mais cette redoutable alternative est presque inévitable lorsque le génie accompli des maîtres, plus puissant et plus compréhensible que la nature, mais de ce fait plus asservissant et plus positif, exerce son action sur l'artiste plus jeune. ...

146) Hölderlins Brief 194 an Schiller, erste Hälfte September 1799: StA. Bd.6. S.364-365.

... — edler Meister! — Ihren Fiesko habe ich auch studirt und gerade auch wieder den innern Bau, die ganze lebendige Gestalt, nach meiner (S.364/S.365) Einsicht das Unvergänglichste des Werks, noch mehr als die großen und doch so wahren Charaktere, und glänzenden Situationen und magischen Farbenspiele der Sprache bewundert. Die Übrigen stehen mir noch be-

Wie sich in sieben milden Strahlen
 Der weiße Schimmer lieblich bricht, 475
 Wie sieben Regenbogenstrahlen
 Zerrinnen in das weiße Licht,
 So spielt in tausendfacher Klarheit
 Bezaubernd um den trunk'nen Blick,
 So fließt in Einen Bund der Wahrheit, 480
 In Einen Strom des Lichts zurück!
 (Ausgabe letzter Hand. 1805: Nationalausgabe. Bd.2. Teil I. S.396)

p) „IDEALISIERKUNST“

136) Schiller „Was heißt und zu welchem Ende studiert man Universalgeschichte? / Eine akademische Antrittsrede“ (26. Mai 1789): Weimarer Nationalausgabe(V(4)74). Bd.17. 1970. S.359-376. S.373.

Nicht lange kann sich der philosophische Geist bey dem Stoffe der Weltgeschichte verweilen, so wird ein neuer Trieb in ihm geschäftig werden, der nach Uebereinstimmung strebt — der ihn unwiderstehlich reizt, alles um sich herum seiner eigenen vernünftigen Natur zu assimiliren, und jede ihm vorkommende Erscheinung zu der höchsten Wirkung die er erkennt, zum Gedanken zu erheben. Je öfter also und mit je glücklicherm Erfolge er den Versuch erneuert, das Vergangene mit dem Gegenwärtigen zu verknüpfen: desto mehr wird er geneigt, was er als Ursache und Wirkung in einander greifen sieht, als Mittel und Absicht zu verbinden. Eine Erscheinung nach der andern fängt an, sich dem blinden Ohngefähr, der gesetzlosen Freyheit zu entziehen, und sich einem übereinstimmenden Ganzen (das freylich nur in seiner Vorstellung vorhanden ist) als ein passendes Glied anzureyhen. ...

137) Hölderlins Brief 231 an den Bruder, wohl zweite Hälfte März 1801: StA. Bd.6. S.419-420.

Und so sei denn auch unter uns, bei dieser Bundeserneuerung, die gewiß nicht Ceremonie oder Laune ist, a Deo principium. Wie wir sonst zusamendachten, denke ich noch, nur angewandter! Alles unendliche Einigkeit, aber in diesem Allem ein vorzüglich Einiges und Einigendes, das, an sich, kein Ich ist, und dieses sei unter uns Gott! ... (S.419/S.420) ... Hier in dieser Unschuld des Lebens, hier unter den silbernen Alpen, soll mir es auch endlich leichter von der Brust gehen. Die Religion beschäftigt mich vorzüglich. ...

Vgl. lettre à son frère, probablement deuxième quinzaine de mars 1801 (Traduction par Naville, Denise): Oeuvres de la Pléiade. S.997-998.

Sois donc des nôtres dans cette alliance nouvelle qui n'a rien d'une cérémonie ou d'une fantaisie, a Deo principium. Les idées que nous partageons autrefois, je les ai toujours, mais mieux appliquées dans la pratique. Tout est unité infinie, mais dans ce Tout il est une unité, un principe unifiant par excellence qui, en soi, n'est pas un Moi; que cela soit, entre nous, Dieu! ... (S.997/S.998) ... Ici, dans cette innocence de la vie, ici, au pied des Alpes argentées, cela me viendra enfin plus facilement du coeur. La question religieuse me préoccupe essentiellement. ...

138) Burckhardt, Jacob (1818-97) „Gedächtnisrede auf Schiller“ (9. November 1859): Jahrbuch der Deutschen Schillergesellschaft. Bd.4. Stuttgart. Kröner. 1960. Mayer, Hans „Schillers Gedichte und die Traditionen deutscher Lyrik“ (S.72-89) S.72-73.

Es ist wohl das höchste Programm, das je aufgestellt (S.72/S.73) worden ist. Man darf das Gedicht neben seinen philosophischen Schriften und den Briefen über Don Carlos nennen als den stärksten Beweis für seine Gewissenhaftigkeit im Fache.

139) Vgl. V(4)138.

140) Burckhardt: op.cit.(V(4)138). S.74: „Erlebnisdichtung“

- 134) Storz, Gerhard: Der Dichter Friedrich Schiller. Stuttgart. Klett. 1959. 4. Aufl. 1968. S.206-214: Die Götter Griechenlands — Die Künstler. S.213.

Das Musikalische eines Gedichtes schwebt mir weit öfter vor der Seele, wenn ich mich hinsetze, es zu machen, als der klare Begriff vom Inhalt, über den ich oft kaum mit mir einig bin. ... an Körner, 25. Mai 1792.

Vgl. „Eine gewisse musikalische Gemütsstimmung geht vorher“ (V(4)126)

Vgl. Dichter über ihre Dichtungen. Friedrich Schiller. 2 Bände. München. Heimeran. 1969. Bd.1. S.725.

Das Musikalische eines Gedichtes schwebt mir weit öfter vor der Seele, als der klare Begriff von Inhalt, über den ich oft kaum mit mir einig bin. Ich bin durch meine Hymne an das Licht, die mich jetzt manchen Augenblick beschäftigt, auf diese Bemerkung geführt worden. ...

Vgl. Schiller „Ueber die ästhetische Erziehung des Menschen in einer Reihe von Briefen“ 22. Brief (die Musik)/23. Brief (die ästhetische Gemütsstimmung): Weimarer Nationalausgabe. Bd.20(V(4)111). S.381/S.384-385.

Die Musik in ihrer höchsten Veredlung muß Gestalt werden, und mit der ruhigen Macht der Antike auf uns wirken; die bildende Kunst in ihrer höchsten Vollendung muß Musik werden und uns durch unmittelbare sinnliche Gegenwart rühren; die Poesie, in ihrer vollkommensten Ausbildung muß uns, wie die Tonkunst mächtig fassen, zugleich aber, wie die Plastik, mit ruhiger Klarheit umgeben. ... (S.381//S.384) ... Durch die ästhetische Gemütsstimmung wird also die Selbstthätigkeit der Vernunft schon auf dem Felde der Sinnlichkeit (S.384/S.385) eröffnet, die Macht der Empfindung schon innerhalb ihrer eigenen Grenzen gebrochen, und der physische Mensch so weit veredelt, daß nunmehr der geistige sich nach Gesetzen der Freyheit aus demselben bloß zu entwickeln braucht. ...

- 135) Schiller „Die Künstler“ („Der Teutsche Merkur“ hrsg. v. Wieland. März 1789. S.283-302: V(4)112) 33.Str.(S.302). V.466-481; Weimarer Nationalausgabe. Bd.1(V(4)108). S.214: „Gedichte“ Zweyter Theil. 1803; Weimarer Nationalausgabe. Bd.2. Teil I(V(4)74). S.138: „Die Künstler“ (Ausgabe letzter Hand. 1805. Viertes Buch) 31.Str. V.466-481; Weimarer Nationalausgabe. Bd.2. Teil I(V(4)74). S.396.

Erhebet euch mit kühnem Flügel

hoch über euren Zeitenlauf;

fern dämmre schon in euerm Spiegel

das kommende Jahrhundert auf.

Auf tausendfach verschlungenen Wegen

der reichen Mannigfaltigkeit

kommt dann umarmend euch entgegen

am Thron der hohen Einigkeit.

Wie sich in sieben milden Strahlen

der weisse Schimmer lieblich bricht,

wie sieben Regenbogenstrahlen

zerrinnen in das weiße Licht:

so spielt in tausendfacher Klarheit

bezaubernd um den trunknen Blick,

so fließt in Einen Bund der Wahrheit

in Einen Stroh des Lichts zurück!

(„Der Teutsche Merkur“ 1789. S.302: Nationalausgabe. Bd.1. S.214)

Erhebet euch mit kühnem Flügel

Hoch über euren Zeitenlauf;

Fern dämm're schon in eurem Spiegel

Das kommende Jahrhundert auf.

Auf tausendfach verschlung'nen Wegen

Der reichen Mannichfaltigkeit

Kommt dann umarmend euch entgegen

Am Thron der hohen Einigkeit.

470

475

480

470

oder der Götter, deren Größe und Macht das ganze Innere durchdringt und den Dichter als Individuum verschwinden läßt. Hymnen, Dithyramben, Pãane, Psalmen gehören in diese Klasse, ... (S.451/S.454) ... 8) Auf einem zweiten Standpunkte stehen diejenigen Arten der lyrischen Poesie, welche sich durch den allgemeinen Namen Ode, im neueren Sinne des Worts, bezeichnen lassen. ... (S.454/S.456) ... γ) Die ganze unendliche Mannigfaltigkeit der lyrischen Stimmung und Reflexion breitet sich endlich auf der Stufe des Liedes auseinander, ... (S.456/S.460) ... Die dritte Stufe in dieser Sphäre wird durch eine Behandlungsweise ausgefüllt, deren Charakter neuerdings unter uns Deutschen am schärfsten in Schiller hervorgetreten ist. Die meisten seiner lyrischen Gedichte, wie die »Resignation«, »Die Ideale«, »Das Reich der Schatten«, »Die Künstler«, »Das Ideal und das Leben«, sind ebensowenig eigentliche Lieder als Oden oder Hymnen, Episteln, Sonette oder Elegien im antiken Sinne; sie nehmen im Gegenteil einen von allen diesen Arten verschiedenen Standpunkt ein. Was (S.460/S.461) sie auszeichnet, ist besonders der großartige Grundgedanke ihres Inhalts, von welchem der Dichter jedoch weder dithyrambisch fortgerissen erscheint noch im Drange der Begeisterung mit der Größe seines Gegenstandes kämpft, sondern desselben vollkommen Meister bleibt und ihn mit eigener poetischer Reflexion, in ebenso schwingreicher Empfindung als umfassender Weite der Betrachtung mit hinreißender Gewalt in den prächtigsten, volltönendsten Worten und Bildern, doch meist ganz einfachen, aber schlagenden Rhythmen und Reimen nach allen Seiten hin vollständig expliziert. Diese großen Gedanken und gründlichen Interessen, denen sein ganzes Leben geweiht war, erscheinen deshalb als das innerste Eigentum seines Geistes; aber er singt nicht still in sich oder in geselligem Kreise wie Goethes liederreicher Mund, sondern wie ein Sänger, der einen für sich selbst würdigen Gehalt einer Versammlung der Hervorragendsten und Besten vorträgt. So tönen seine Lieder, wie er selbst von seiner Glocke sagt:

Hoch überm niedern Erdenleben
Soll sie in blauem Himmelszelt,

...

(Schiller „Das Lied von der Glocke“ 1800. V.397-408)

Vgl. Hölderlin „Deutscher Gesang“ V.20: „Chant allemand“ v.20(V(4)23).

Den Seelengesang.: Le chant de l'âme.

133) Schillers Brief an Körner vom 21. Oktober 1800: Weimarer Nationalausgabe(V(4)111). Bd.30. 1961. S.206.

Verschiedene, wie die Künstler, habe ich wohl zwanzigmale in der Hand herum geworfen, eh ich mich entschied. Deinen Gedanken wegen dieses Gedichts hatte ich anfangs auch aber er ist nicht auszuführen. Leider ist daßelbe durchaus unvollkommen und hat nur einzelne glückliche Stellen, um die es mir freilich selbst leid thut. Die Freude hingegen ist nach meinem jetzigen Gefühl durchaus fehlerhaft, und ob sie sich gleich durch ein gewisses Feuer der Empfindung empfiehlt, so ist sie doch ein schlechtes Gedicht und bezeichnet eine Stufe der Bildung, die ich durchaus hinter mir laßen mußte um etwas ordentliches hervorzubringen. Weil sie aber einem fehlerhaften Geschmack der Zeit entgegen kam, so hat sie die Ehre erhalten, gewißermaßen ein Volksgedicht zu werden. Deine Neigung zu diesem Gedicht mag sich auf die Epoche seiner Entstehung gründen; ...

Vgl. „Goethe und Schiller ... diese ausschließlich ästhetische Mission ... hatte die Tendenz, alle jene fortschrittlichen und revolutionären Fermente zu beseitigen, die von ihrem Sturm und Drang aus an die jungen Vertreter der Frühromantischen Schule weitergegeben wurden. ... der von der Weimarer Klassik bewirkten ästhetischen Restauration ... "(V(4)186).

unrichtig (S.259/S.260) als eine Art des Liedes aufführt. Er weist auf Schiller hin, dessen Gedichte im Ganzen und Großen eine eigentlich normale Erscheinung dessen sind, was wir schöne Gedankenpoesie nennen; ... Es muß eine Poesie geben, welche den Gedanken merklicher in Gedankenform ausspricht, aber doch noch auf so starker Grundlage pathetischer Stimmung, daß wir sie noch nicht zum Didaktischen zählen dürfen. Sie wird aller hohen Anerkennung wert sein, wenn sie ihre Stellung an der Grenze der Poesie, wenn sie ihren Glanz, ihren rhetorisch deklamatorischen Stil als einen Schmuck zugesteht, dessen sie um ihres innern Mangels willen bedarf. Die Grenze zwischen dem, was dem echt Poetischen näher und was ihm ferner liegt, wird hier schwebend und ist nicht weiter zu verfolgen. Schiller bleibt, wie gesagt, Vorbild und reinstes Muster.

Vgl. Schiller „Ueber naive und sentimentalische Dichtung“: Weimarer Nationalausgabe. Bd.20(V(4)111). S.452-453.

Unter Deutschlands Dichtern in dieser Gattung will ich hier nur Hallers, Kleists und Klopstocks erwähnen. Der Charakter ihrer Dichtung ist sentimentalisch; durch Ideen rühren sie uns, nicht durch sinnliche Wahrheit, ... Unwillkürlich drängt sich die Phantasie der Anschauung, die Denkkraft der Empfindung zuvor, und man schließt Auge und Ohr, und betrachtend in sich selbst zu versinken. ... (S.452/S.453) ... nur diese zwey Felder besitzt die Dichtkunst; entweder sie muß sich in der Sinnenwelt oder sie muß sich in der Ideenwelt aufhalten, da sie im Reich der Begriffe oder in der Verstandeswelt schlechterdings nicht gedeihen kann. Noch, ich gestehe es, kenne ich kein Gedicht in dieser Gattung, weder aus älterer noch neuerer Litteratur, welches den Begriff, den es bearbeitet, rein und vollständig entweder bis zur Individualität herab oder bis zur Idee hinaufgeführt hätte. ... Dasjenige didaktische Gedicht, worinn der Gedanke selbst poetisch wäre, und es auch bliebe, ist noch zu erwarten. Was hier im allgemeinen von allen Lehrgedichten gesagt wird, gilt auch von den Hallerischen insbesondere.

Vgl. Hölderlins Brief 243 an Wilmans, Dezember 1803: StA. Bd.6. S.436.

Übrigens sind Liebeslieder immer müder Flug, denn so weit sind wir noch immer, trotz der Verschiedenheit der Stoffe; ein anders ist das hohe und reine Frohloken vaterländischer Gesänge. ...

Vgl. lettre à Wilmans, décembre 1803: Œuvres de la Pléiade. S.1013.

Les chants d'amour s'envolent d'ailleurs toujours d'une aile un peu lasse, car nous en sommes toujours au même point, malgré la diversité des sujets; la haute et pure jubilation des chants natals est tout autre chose. L'allure prophétique de la Messiede et de certaines odes est une exception. ...

Vgl. Hegel, G.W.F. „Vorlesungen über die Ästhetik“ Einleitung. III. (1).

2. Schiller, Winckelmann, Schelling / III. Teil. 3. Abschnitt. 3. Kap. Die Poesie. C. Die Gattungsunterschiede der Poesie. II. Die lyrische Poesie.

2. Besondere Seiten der lyrischen Poesie. c. Die Arten der eigentlichen Lyrik: Werke in 20 Bänden(V(4)21). Bd.13. 1970. S.89 / Bd.15. 1970. S.451/S.454/S.456/S.460-461.

2. Schiller, Winckelmann, Schelling / Da ist denn einzugestehen, daß der Kunstsinn eines tiefen, zugleich philosophischen Geistes zuerst gegen jene abstrakte Unendlichkeit des Gedankens, jene Pflicht um der Pflicht willen, ... früher schon die Totalität und Versöhnung gefordert und ausgesprochen hat, ... Es muß Schiller das große Verdienst zugestanden werden, die Kantische Subjektivität und Abstraktion des Denkens durchbrochen und den Versuch gewagt zu haben, über sie hinaus die Einheit und Versöhnung denkend als Wahre zu fassen und künstlerisch zu verwirklichen. ... (Bd.13. S.89/Bd.15. S.451) ... α) Auf der einen Seite nämlich hebt das Subjekt die Partikularität seiner Empfindung und Vorstellung auf und versenkt sich in die allgemeine Anschauung Gottes

Vgl. Baumgarten „Aesthetica“(1750/58) Faksimile-Nachdruck. Hildesheim. Olms. 1986. Pars I. Cap. I. Sectio I. §.14-§.15. S.6.

PARS I. AESTHETICA THEORETICA. CAPVT I. HEVRISTICA.

SECTIO I. PVLCRITVDO COGNITIONIS.

§. 14. Aesthetices finis est perfectio cognitionis sensitiuae, qua talis, §.I. Haec autem est pulcritudo, Metaphysic. §.521, 662. et cauenda eiusdem, qua talis, imperfectio, §.I. Haec autem est deformitas, Metaphysic. §.521, 662.

§. 15. Perfectiones cognitionis sensitiuae adeo reconditas, vt vel omnino nobis obscurae maneant, vel non nisi intelligendo possimus eas intueri, non curat aestheticus, qua talis. §.14.

131) Schiller „An die Freude“(1786) 1.Str. V.1-8: Weimarer Nationalausgabe. Bd.1(V(4)108). S.169. Erste Fassung.

Freude, schöner Götterfunken,
Tochter aus Elisium,
Wir betreten feuertrunken
Himmlische, dein Heiligthum.
Deine Zauber binden wieder,
was der Mode Schwert getheilt;
Bettler werden Fürstenbrüder,
wo dein sanfter Flügel weilt.

5

Vgl. „An die Freude“ Zweite Fassung(Ausgabe letzter Hand 1805). 1.Str. V. 1-8: Weimarer Nationalausgabe. Bd.2. Teil I(V(4)74). S.185.

Freude, schöner Götterfunken,
Tochter aus Elisium,
Wir betreten feuertrunken
Himmlische, dein Heiligthum.
Deine Zauber binden wieder,
Was die Mode streng getheilt,
Alle Menschen werden Brüder,
Wo dein sanfter Flügel weilt.

5

132) Todorow, Almut „Gedankenlyrik: Die Entstehung eines Gattungsbegriffs im 19. Jahrhundert“ Stuttgart. Metzler. 1980. I.Teil. Kap.I: Gedankenlyrik — ein Neologismus der Lyriktheorie der 50er Jahre. S.13.

Moriz Carriere hat den entsprechenden Begriff als erster fixiert. Er machte in der zweiten Fassung seiner Untersuchung über das Wesen der Poesie, 1884, geltend, er habe längst vor Friedrich Theodor Vischer — nämlich 1854 in der ersten Fassung dieser Poetik — die Lyrik der Betrachtung „als Gedankenlyrik bezeichnet“ und Vischer habe diesen Ausdruck dann in seiner Ästhetik(1846-1857) lediglich „adoptirt“.

Vgl. S.125: „Das Wesen und die Formen der Poesie“(Leipzig 1854)

Vgl. Vischer, Friedrich Theodor „Ästhetik oder Wissenschaft des Schönen“

(Bd.1. 1846/Bd.2. 1847-48/Bd.3. 1.Abschnitt. 1851/Bd.3. Die Baukunst. 1852/Bd.4. Die Bildnerkunst. 1853/Bd.4. Die Malerei. 1854/Bd.5. Die Musik. 1857/Bd.6. Die Dichtkunst. 1857) 2.Auf1. hrsg. v. Vischer, Robert. München. Meyer & Jessen Verlag. 1922(Bd.1-3)/1923(Bd.4-6). Faksimile-Nachdruck. Hildesheim. Georg Olms. 1975. Bd.6. S.252//S.259-260.

§894 Die Lyrik der Betrachtung steht ... An der Grenze der Prosa liegt als besondere Form das Epigramm und mit ihm eine große, unbestimmte Masse, die sich unter dem Namen der schönen Gedankenpoesie zusammenfassen läßt und namentlich der modernen Zeit und der deutschen Poesie angehört. ... (S.252//S.259) ... Das Epigramm nun ist der kleine benannte Punkt in einer ganzen weiten Welt von Dichtungen, die keinen Namen haben und die wir als Poesie des schönen Gedankens bezeichnen; sie verhalten sich zum Epigramme wie das Ausgeführte zum Zusammengezogenen. Es ist die schwer zu bestimmende Form, die auch Hegel zuletzt, aber gewiß

129) Lessing(V(4)118) „Pope, ein Metaphysiker"(1755): Werke. 25 Teile. 25 Bände. Bongs Goldene Klassiker Bibliothek. 1925/1929/1935. Faksimile-Neudruck. Hildesheim. Olms. 1970. Bd.20(24.Teil). S.98-99.

Vorläufige Untersuchung, / Ob ein Dichter, als ein Dichter, ein System haben könne? ... (S.98/S.99) Ein Gedicht ist eine vollkommene sinnliche Rede. ... Ein System metaphysischer Wahrheiten also, und eine sinnliche Rede; beides in einem — Ob diese wohl einander aufreiben? ...

130) „Pope ... ": Werke. 3 Bände. München. Winkler. 1969/1969/1972. Bd.3. 1972. S.802. Anmerkungen.

Ein Gedicht ... : Der Satz ist wörtlich der Aesthetik Baumgartens entnommen. (kursiv)

Vgl. Baumgarten, Alexander Gottlieb(1714-62) „Meditationes philosophicae de nonnullis ad poema pertinentibus/Philosophische Betrachtungen über einige Bedingungen des Gedichtes"(1735) Lateinisch/Deutsch: Paetzold, Heinz. Philosophische Bibliothek Bd.352. Hamburg (Felix Meiner) 1983. S.10/S.11.

§ IX. Oratio sensitiva perfecta est POEMA, complexus regularum ad quas conformandum poema POETICE, scientia poetices PHILOSOPHIA POETICA, habitus conficiendi poematis POESIS, eoque habitu gaudens POETA. (S.10)

§ IX. Eine vollkommene sensitive Rede ist EIN GEDICHT. Der Inbegriff der Regeln, denen ein Gedicht entsprechen muß, heißt POETIK. Die Wissenschaft der Poetik ist DIE PHILOSOPHISCHE POETIK. Die Fähigkeit des Gedichtemachens ist DIE DICHTUNG, und wer sich dieser Fähigkeit erfreut, ist EIN DICHTER. (S.11) /1986. S.6(Pars I. Capvt I. Sectio I. §.14).

Vgl. Baumgarten „Aesthetica"(1750/58) Faks.-Nachdruck. Hildesheim (Olms) Aesthetices finis est perfectio cognitionis sensitivae, ... (I.I.I.§14)

Vgl. Baumgarten „Meditationes philosophicae ... /Philosophische Betrachtungen ... " S.10/S.11.

§ V. Ex oratione sensitiva repraesentationes sensitivae connexae cognoscendae sunt, § 2, 4.

§ VI. Orationis sensitivae varia sunt 1) repraesentationes sensitivae, 2) nexus earum, 3) voces sive soni articulati litteris constantes earum signa, § 4, 1.

§ VII. ORATIO SENSITIVA PERFECTA est cuius varia tendunt ad cognitionem repraesentationum sensitivarum, § 5.

§ VIII. Quo plura varia in oratione sensitiva facient ad excitandas repraesentationes sensitivas, eo erit illa perfectior, § 4, 7.

§ IX. Oratio sensitiva perfecta est POEMA, complexus regularum ad quas conformandum poema POETICE, scientia poetices PHILOSOPHIA POETICA, habitus conficiendi poematis POESIS, eoque habitu gaudens POETA.

(S.10/S.11)

§ V. Aus einer sensitiven Rede sind zusammenhängende sensitive Vorstellungen zu erkennen, § 2, 4.

§ VI. Die Bestandteile einer sensitiven Rede sind 1) sensitive Vorstellungen, 2) deren Verknüpfungen, 3) Wörter oder artikulierte Laute, die aus Buchstaben als ihren Zeichen bestehen, § 4, 1.

§ VII. EINE VOLLKOMMENE SENSITIVE REDE ist eine solche, deren Bestandteile zur Erkenntnis sensitiver Vorstellungen streben, § 5.

§ VIII. Eine sensitive Rede wird umso vollkommener, je mehr Bestandteile in ihr dazu beitragen, sensitive Vorstellungen anzureizen, § 4, 7.

§ IX. Eine vollkommene sensitive Rede ist EIN GEDICHT. Der Inbegriff der Regeln, denen ein Gedicht entsprechen muß, heißt POETIK. Die Wissenschaft der Poetik ist DIE PHILOSOPHISCHE POETIK. Die Fähigkeit des Gedichtemachens ist DIE DICHTUNG, und wer sich dieser Fähigkeit erfreut, ist EIN DICHTER.

So wie die Anmuth der Ausdruck einer schönen Seele ist, so ist Würde der Ausdruck einer erhabenen Gesinnung.

126) Hölderlins Brief 144 an Schiller wohl zwischen 15. und 20. August 1797: StA. Bd.6. S.249.

Ich betrachte jetzt die metaphysische Stimmung, wie eine gewisse Jungfräulichkeit des Geistes und ...

Vgl. lettre à Schiller probablement entre le 15 et le 20 août 1797: Oeuvres de la Pléiade. S.423.

Je considère maintenant le penchant métaphysique comme une certaine virginité de l'esprit et ...

o) „DAS MUSIKALISCHE“

126) Vgl. V(4)126.

Vgl. Schillers Brief an Goethe vom 18. März 1796: Goethe-Artemis-Gedenkausgabe(V(4)18). Bd.20 hrsg. v. Beutler, Ernst. Stuttgart/Zürich. Artemis.

1950: Der Briefwechsel zwischen Goethe und Schiller. S.164-165(Brief 158).

Bei mir ist die Empfindung anfangs ohne bestimmten und klaren Gegenstand; (S.164/S.165) dieser bildet sich erst später. Eine gewisse musikalische Gemütsstimmung geht vorher, und auf diese folgt bei mir erst die poetische Idee. ...

Vgl. V(4)134: „Das Musikalische ...“(Schillers Brief an Körner 25.5.1792)

Vgl. V(4)142: „das Ganze einer Empfindung“(Burckhardt „Gedächtnisrede auf Schiller“ den 9. November 1859)

Vgl. V(4)147: „die ganze lebendige Gestalt“(Hölderlins Brief an Schiller. Erste Hälfte September 1799)

127) Schillers Brief an Goethe vom 30. Juni 1797: StA. Bd.7. Dokumente. II. Teil. S.98: Artemis-Gedenkausgabe. Bd.20(V(4)126). S.368-369(Brief 337).

Aufrichtig, ich fand in diesen Gedichten viel von meiner eigenen sonstigen Gestalt, und es ist nicht das erstemal, daß mich der Verfasser an mich mahnte. Er hat eine heftige Subjektivität, und verbindet damit einen gewissen philosophischen Geist und Tiefsinn. Sein Zustand ist gefährlich, da solchen Naturen so gar schwer beykommen ist. (Bd.7. II. Teil. S.98)

Vgl. Goethe „Glückliches Ereignis(=Erste Bekanntschaft mit Schiller)“(V(4)118): Werke(V(4)14). Bd.10. S.541.

Schiller ... erwiderte darauf als ein gebildeter Kantianer; und als aus meinem hartnäckigen Realismus mancher Anlaß zu lebhaftem Widerspruch entstand, so ward viel gekämpft und dann Stillstand gemacht; keiner von beiden konnte sich für den Sieger halten, beide hielten sich für unüberwindlich. ... Wenn er das für eine Idee hielt, was ich als Erfahrung aussprach, so mußte doch zwischen beiden irgend etwas Vermittelndes, Bezügliches obwalten! Der erste Schritt war jedoch getan, Schillers Anziehungskraft war groß, er hielt alle fest, die sich ihm näherten; ...

und so besiegelten wir, durch den größten, vielleicht nie ganz zu schlichtenden Wettkampf zwischen Objekt und Subjekt, einen Bund, der ununterbrochen gedauert, und für uns und andere manches Gute gewirkt hat.

128) Goethes Brief an Schiller vom 1. Juli 1797: StA. Bd.7. II. Teil. S.100: Artemis-Gedenkausgabe. Bd.20(V(4)126). S.370(Brief 338).

Ich will Ihnen nur auch gestehen daß mir etwas von Ihrer Art und Weise aus den Gedichten entgegensprach, eine ähnliche Richtung ist wohl nicht zu verkennen, allein sie haben weder die Fülle, noch die Stärke, noch die Tiefe Ihrer Arbeiten. (Bd.7. II. Teil. S.100)

Vgl. Goethe „Hermann und Dorothea“(Oktober 1797): Werke(V(4)14). Bd.2. S. 514: IX. Gesang „Urania“ Aussicht. V.299-301.

Desto fester sei bei der allgemeinen Erschütterung,
Dorothea, der Bund! Wir wollen halten und dauern,
Fest uns halten und fest der schönen Güter Besitztum.

- Vgl. „Brod und Wein“ 5.Str. V.81-88: StA. Bd.2. S.92.
 Möglichst dulden die Himmlischen diß; dann aber in Wahrheit
 Kommen sie selbst und gewohnt werden die Menschen des Glücks
 Und des Tags und zu schau'n die Offenbaren, das Antlitz
 Derer, welche, schon längst Eines und Alles genannt,
 Tief die verschwiegene Brust mit freier Genüge gefüllet, 85
 Und zuerst und allein alles Verlangen beglückt;
 So ist der Mensch; wenn da ist das Gut, und es sorget mit Gaaben
 Selber ein Gott für ihn, kennet und sieht er es nicht.
- Vgl. „Le Pain et le vin“ v.81-88: OEuvres de la Pléiade. S.811.
 C'est chose que les dieux souffrent jusqu'à l'extrême, alors
 Dans la réalité de leur présence ils apparaissent et les hommes
 S'accoutument au Jour, au bonheur, à contempler les Révélés, la face
 De ceux-là qui jadis ont nommé le Tout et l'Un, 85
 Comblé le coeur secret de libre et vaste plénitude,
 Et les premiers, les seuls, exaucé tout désir.
 Tel est l'homme: quand son vrai bien l'attend, qu'un dieu lui-même
 De ses dons lui prépare, il ne le sait voir ni reconnaître.
- 121) Schiller „Ueber Anmuth und Würde“: Weimarer Nationalausgabe. Bd.20(V(4)111). S.251/S.252/S.253.
 Die griechische Fabel legt der Göttin der Schönheit einen Gürtel bey, der die Kraft besitzt, dem, der ihn trägt, Anmuth zu verleyhen, und Liebe zu erwerben. Eben diese Gottheit wird von den Huldgöttinnen oder den Grazien begleitet. ... Alle Anmuth ist schön, denn der Gürtel des Liebreizes ist ein Eigenthum der Göttinn von Gnidus; ... Gürtel der Venus ... (S.251/S.252) ... Anmuth ist eine bewegliche Schönheit; ... Dieser Gürtel, als das Symbol der beweglichen Schönheit, hat aber das ganz besondere, daß er der Person, die damit geschmückt wird, die objektive Eigenschaft der Anmuth verleyht; ... (S.252/S.253) ... Der Gürtel des Reizes wirkt also nicht natürlich, ...
- 122) „Ueber Anmuth und Würde“ (V(4)121).
- 123) Biblia. Novum Testamentum graece et latine. Ed. Nestle, Eberhard/Nestle, Erwin. Stuttgart. Württembergische Bibelanstalt. 1930. S.2: Secundum Matthaeum. I. 18: Vulgata(V(4)2). Tomus II. S.1527: Biblia Germanica 1545(V(4)2). II. Teil. S.246: Die heilige Schrift(V(4)2). Das Neue Testament: im Jahre 1956 vom Rat der Evangelischen Kirche in Deutschland im Einvernehmen mit dem Verband der evangelischen Bibelgesellschaften in Deutschland genehmigte Fassung. S.5: Das Evangelium des Matthäus. 1.Kap. 18.
 Τοῦ δὲ Ἰησοῦ Χριστοῦ ἡ γένεσις οὕτως ἦν. μνηστευθεὶς τῆς μητρὸς αὐτοῦ Μαρίας τῇ Ἰωσήφ, πρὶν ἢ συνελθεῖν αὐτοὺς εὐρέθη ἐν γαστρὶ ἔχουσα ἐκ πνεύματος ἁγίου.
 Christi autem generatio sic erat: Cum esset desponsata mater eius Maria Ioseph, antequam convenirent, inventa est in utero habens de Spiritu sancto.
 Christi autem generatio sic erat
 cum esset desponsata mater eius Maria Ioseph
 antequam convenirent inventa est in utero habens de Spiritu Sancto
 Die geburt Christi war aber also gethan. Als Maria seine Mutter dem Joseph vertrauet war / ehe er sie heim holet / erfand sichs / das sie schwanger war von dem heiligen Geist.
 Die Geburt Jesu Christi geschah aber also. Als Maria, seine Mutter, dem Joseph vertrauet war, erfand sich's, ehe er sie heimholte, daß sie schwanger war von dem heiligen Geist.
- 124) Michelangelo Buonarroti(1475-1564) „Pieta“: San Pietro(Citta del Vaticano).
- 125) Schiller „Ueber Anmuth und Würde“: Weimarer Nationalausgabe. Bd.20(V(4)111). S.289.

von sich. Es ging immer tiefer ins Leben, und das Fest wurde heiliger; die Augen glänzten von Freudentränen, die Lippen bebten, die Herzen wallten vor Wonne. ...

Vgl. Goethe „Glückliches Ereignis(=Erste Bekanntschaft mit Schiller)“: Werke(V(4)14). Bd.10. S.538.

... ich nenne nur Heinses „Ardinghello“ und Schillers „Räuber“. Jener war mir verhaßt, weil er Sinnlichkeit und abstruse Denkweisen durch bildende Kunst zu veredeln und aufzustutzen unternahm, dieser, weil ein kraftvolles, aber unreifes Talent gerade die ethischen und theatrialschen Paradoxen, von denen ich mich zu reinigen gestrebt, recht im vollen hinreißenden Strome über das Vaterland ausgegossen hatte. ...

119) Hofmannsthal. Brief an Carl J. Burckhardt. Den 24. August 1924: Reclam-Ardinghello(V(4)85). S.605-606.

Dieser Heinse war solch ein kühner, ausgreifender älterer Deutscher; die Romane schließen Deutschland und Italien in eines, dahinter aber noch Levante, die griechischen Inseln, den Mittelmeerkreis. Vieles ist in (S. 605/S.606) ihnen verbunden (im Wollen mehr als im künstlerischen Vollbringen): deutsches Wesen und verstehende Bewunderung des Italienischen, wie bei Stendhal, allerlei sehr merkwürdige Figuren sind gegeneinander gestellt: Das alles hat mir mein Gewebe von Menschenschicksalen wieder sehr lebendig gemacht. ...

120) Heinse „Ardinghello“(V(4)85) Zweiter Band. Vierter Teil. Schluß. S.303-317: „Εν καὶ Πᾶν und Αἶθρῳ“(V(4)13: „Brod und Wein“ 4.Str. V.69) usw.

Man könnte auf diese Weise aber wohl doch noch die sonderbare Meinung des Xenophanes und seiner Schüler Parmenides und Melissos erklären, daß Eins Alles und Alles Eins sei. Nämlich, aller Grundstoff ist sich gleich, nur die Form seines unendlichen Wesens verschieden. ... (S.303/S.304)

... Alles wechselt miteinander ab und geht wieder in das Eins zurück. Vater Äther, aller Lebengeber! Und so wird und vergeht ewig alles, was ist. ... (S.304/S.305) ... Die Vollkommenheit des Weltalls besteht in allen möglichen Arten von Formen. Alle Geschöpfe sind bloß Gedanken Gottes und des höchsten Vergnügens in ihrem Maße fähig. Gott dachte: »Es werde Licht!« und es ward Licht. ... (S.305/S.306) ... Gott ist unendlich Eins, und in jedem Punkt Eins, und Eins in jedem angenommenen Maße, das dann Verhältnis in Bewegung und Verbindung nach seiner Realität und Form zueinander hat. ... (S.306/S.307) ... Und dies ist das Heilige (welches einige Alten für Feuer, Ursprung der Lebenswärme hielten, weil Feuer wäre: Wesen in seine größte Freiheit verbreitet), wovon alles in jedem lebendigen Eins ausgeht, sinnlich wird und erscheint und in dessen Liebesschoß sich alles wieder einsenkt; ... (S.307/S.308) ...

jedes besondere Ding ein Spiel, ein Mutwille des Wesens, und kann keinen Augenblick ohne das Ganze bestehen. Das ist eine ganz andre Hoffnung, Sicherheit von Unsterblichkeit, wann ich Stürme durch die Atmosphäre brausen höre und in mir fühle: bald wirst auch du die Wogen wälzen und mit dem Meer im Kampf sein! ... (S.308/S.309) ... Eins zu sein und Alles zu werden, was uns in der Natur entzückt, ist doch etwas ganz anders als das Schlaraffenleben, welches, vernünftigerweise und aller Erfahrung nach undenkbar, bezauberte Phantasien sich vorstellen. ... (S.309/S.310) ... Das erstere wäre entweder reine Weltaristokratie, jedes Element nämlich so göttlich als das andre; wo nach dem Homer Juno, Neptun und Apollo den Zeus binden könnten. Oder aristokratische Weltmonarchie; ein Element unter den andern der König. Oder demokratisch-aristokratische Weltmonarchie; Tiere und Pflanzen schon der Form nach von Ewigkeit da, wie Ihr oben selbst meintet. Aus diesem haben die Griechen ihre reizenden Dichtungen und schönen Göttergestalten geschöpft; und die erhabensten Philosophen dieser gefühlvollen Nation, wie selbst Aristoteles und Plato, konnten sich davon nicht losmachen. ...

Band 2: Schiller und sein Kreis (Hrsg.: Fambach, Oscar). Berlin. Akademie. 1957. „Gedanken ...“ (S.44-49) S.44.

Ich habe von Kindheit an die Poesie mit Leidenschaft geliebt, denn lebhaft Empfinden schien mir immer der süsseste Genuß, dessen ein Mensch sich erfreuen kan. Ich hielt früh den Dichter, welcher lebhaft Empfindungen, die denjenigen, welchem er sie mittheilt, veredeln, in andern erweckt, für ein wohlthätiges, für ein geflügeltes, heiliges Wesen, wie Platon sagt. Die Begeisterung ist eine Leidenschaft; ...

114) Stolberg „Gedanken über ...“ (V(4)113) S.104: Schiller und sein Kreis (V(4)113). S.48.

Wenn ich auch Schillers Rundgesang auf die Freude nie gelesen hätte, so würde ich doch gewiß sein, daß ein Mann von seiner glühenden Empfindung, Momente müsse gehabt haben, sel'ge Momente, in welchen seine Seele dahin schmolz bei der Empfindung des Allgegenwärtigen, Allliebenden. ...

115) „Brod und Wein“ Titel/Widmung: StA. Bd.2. S.90. Über Heinse (V(4)85).

BROD UND WEIN / AN HEINZE

Vgl. OEuvres de la Pléiade. S.807.

LE PAIN ET LE VIN / À Heinse.

116) Heinse „Ardinghello“ (V(4)85) Zweiter Band. Vierter Teil. S.270.

Und die Liebe ward geboren, der süße Genuß aller Naturen füreinander, der schönste, älteste und jüngste der Götter, von Uranien, der glänzenden Jungfrau, deren Zaubergürtel das Weltall in tobendem Entzücken zusammenhält. ...

117) Hölderlin „Hymne an die Göttin der Harmonie“ Motto: StA. Bd.1. S.130.

Urania, die glänzende Jungfrau, hält mit ihrem Zaubergürtel das Weltall in tobendem Entzücken zusammen. Ardinghello

118) Schiller „Ueber naive und sentimentalische Dichtung“: Weimarer Nationalausgabe (V(4)111). Bd.20. S.464.

... denn die bloß sinnliche Glut des Gemähltes und die üppige Fülle der Einbildungskraft machen es noch lange nicht aus. Daher bleibt Ardinghello bey aller sinnlichen Energie und allem Feuer des Kolorits immer nur eine sinnliche Karrikatur, ohne Wahrheit und ohne ästhetische Würde. ...

Vgl. Lessing, Gotthold Ephraim (1729-81) „Emilia Galotti“ (1772) / Goethe „Die Leiden des jungen Werther“ (V(4)16). Lessing (V(4)89) und Goethe (V(4)106) in bezug auf den Göttinger „Hainbund“ (V(4)86).

Vgl. Heine, Heinrich. Brief an Detmold, Johann Hermann. Den 15. Februar 1828: Reclam-Ardinghello (V(4)85). S.578.

Er ist einer jener Dämonen, die ich vielleicht jetzt repräsentiere, zu denen auch Sie gehören, und die einst den Olymp stürmen werden. ...

Vgl. Wagner, Richard „Autobiographische Skizze“ (1843): Reclam-Ardinghello (V(4)85). S.583.

Damals [1834] war ich einundzwanzig Jahre alt, zu Lebensgenuß und freudiger Weltanschauung aufgelegt; »Ardinghello« und »Das junge Europa« spukten mir durch alle Glieder: ... Die damals spukenden Ideen des »jungen Europa«, sowie die Lektüre »Ardinghello«, geschärft durch meine sonderbare Stimmung, in welche ich gegen die deutsche Opernmusik geraten war, gaben mir den Grundton für meine Auffassung, welche besonders gegen die puritanische Heuchelei gerichtet war, und somit zur kühnen Verherrlichung der »freien Sinnlichkeit« führte.

Vgl. Heinse „Ardinghello“ Erster Band. Dritter Teil. Schluß: Reclam-Ardinghello. S.196.

Nach Mitternacht ging es in ein echtes Bacchanal aus; ... Man entkleidete die Jungfrauen, die, Glut in allen Adern, sich nicht sehr sträubten, zuerst bis auf die Hemder, und schlitzte diese an beiden Seiten auf bis an die Hüften; und die Haare wurden losgeflochten. ... Man holte hernach aus der nahen Villa Sacchetti Efeu zu Kränzen und belaubte Weinranken mit Trauben zu Thyrsusstäben, und jeder Jüngling warf alle Kleidung

lem Wieland auf, der denn auch 1756 in seinen „Sympathien“ und 1757 in der Vorrede zu den „Empfindungen eines Christen“ die gehässigsten Ausfälle gegen Uz als sittenverderbenden Wortführer der leichtfertigen Anakreontik machte. Dieser antwortete 1757 in dem poetischen „Schreiben an einen Freund“ würdig mit dem Hinweis auf die Unschuld seines Lebens wie seiner dichterischen Versuche, die den ernsten Fragen der Philosophie und dem Preise der Gottheit nicht minder gewidmet waren als harmlos-heiterem Scherze; nur öden Schwulst und ungefälligplump moralisierenden Fanatismus lehnte er ab und forderte von der Dichtung vor allem die reizende Schönheit der Form, nicht bloß einen sittlich-erbaulichen Inhalt. ...

n) „ANMUTH UND WÜRDE“

111) Schiller „Anmuth und Würde“ (1793): Werke. Nationalausgabe. Weimar. Hermann Böhlaus Nachfolger. Bd. 20. 1962. S. 251.

Vgl. „Das Reich der Schatten“ 1. Str. V. 1 („Horen“ hrsg. v. Schiller. 9. Stück. 1795. September. S. 1); Weimarer Nationalausgabe. Bd. 1 (V(4)108). S. 247: „Das Reich der Formen“ („Gedichte“ Erster Theil. 1800); Weimarer Nationalausgabe. Bd. 2. Teil I (V(4)74). S. 118: „Das Ideal und das Leben“ 1. Str. V. 1 („Gedichte“ I. Teil. 2. Aufl. 1804/Ausgabe letzter Hand. 1805); Weimarer Nationalausgabe. Bd. 2. Teil I. S. 164/S. 396.

Ewig klar und spiegelrein und eben

Fließt das zephyrleichte Leben

Im Olymp den Seligen dahin.

(„Das Reich der Schatten“ 1795. V. 1-3: „Das Reich der Formen“ 1800. V. 1-3: Bd. 1. S. 247)

Ewigklar und spiegelrein und eben

Fließt das zephyrleichte Leben

Im Olymp den Seligen dahin.

(„Das Ideal und das Leben“ 1804. V. 1-3: Bd. 2. Teil I. S. 396)

112) Schiller „Die Künstler“ („Der Teutsche Merkur“ hrsg. v. Wieland. März 1789. S. 283-302) 31. Str. (S. 300-301)/5. Str. (S. 285); Weimarer Nationalausgabe. Bd. 1 (V(4)108). S. 213/S. 202: „Die Künstler“ („Gedichte“ Zweyter Theil. 1803); Weimarer Nationalausgabe. Bd. 2. Teil I (V(4)74). S. 138: „Die Künstler“ („Gedichte“ Viertes Buch. Ausgabe letzter Hand. 1805); Weimarer Nationalausgabe. Bd. 2. Teil I (V(4)74). S. 395 (28. Str.)/S. 384 (5. Str.).

Sie selbst, die sanfte Cypria,

umleuchtet von der Feuerkrone

steht dann vor ihrem mündgen Sohne

entschleyert — als Urania;

S. 300
435 S. 301

...

S. 301 Bd. 1. S. 213

die furchtbar herrliche Urania,

mit abgelegter Feuerkrone

60

steht sie — als Schönheit vor uns da.

S. 285 Bd. 1. S. 202

(„Die Künstler“ 1789. 31. Str./5. Str. V. 433-436/V. 59-61)

Die furchtbar herrliche Urania,

Mit abgelegter Feuerkrone,

60

Steht sie — als Schönheit vor uns da.

...

Bd. 2. Teil I. S. 384

Bd. 2. Teil I. S. 395

Sie selbst, die sanfte Cypria,

Umleuchtet von der Feuerkrone

Steht dann vor ihrem münd'gen Sohne

435

Entschleyert — als Urania;

(„Die Künstler“ 1805. 5. Str./28. Str. V. 59-61/V. 433-436)

113) Stolberg, Friedrich Leopold (1750-1819) „Gedanken über Herrn Schillers Gedicht: Die Götter Griechenlandes“ („Deutsches Museum“ 8. Stück. August 1788. S. 97-105) S. 97: Ein Jahrhundert deutscher Literaturkritik (1750-1850).

ceterum nec cohibere parietibus deos neque in ullam humani oris speciem assimilare ex magnitudine caelestium arbitrantur: lucos ac nemora consecrant deorumque nominibus appellant secretum illud, quod sola reverentia vident. (S.16)

Im übrigen ver trägt es sich nicht mit der Vorstellung der Germanen von der Erhabenheit der Himmlischen, Götter in Wände einzuschließen und irgendwie menschenähnlich darzustellen. Sie weihen ihnen vielmehr Lichtungen und Haine, und mit Namen von Göttern bezeichnen sie jenes geheimnisvolle Wesen, das sie nur in ihrer Verehrung und im Geiste schauen. D'ailleurs, enfermer les dieux entre des murs ou les représenter sous (S. 75/S.76) quelque apparence humaine leur semble peu convenable à la grandeur des habitants du ciel; ils leur consacrent des bois et des bocages et donnent le nom de dieux à cette réalité mystérieuse que leur seule piété leur fait voir.

108) Schiller „Die Götter Griechenlandes“ 1.Fas. („Der Teutsche Merkur“ hrsg. v. Wieland(V(4)85). März 1788. S.250-260) S.255: Werke. Nationalausgabe. Weimar. Hermann Böhlau Nachfolger. Bd.1. 1943. S.193: 14.-15.Str.

Damals trat kein gräßliches Gerippe
vor das Bett des Sterbenden. Ein Kuß
nahm das letzte Leben von der Lippe,
still und traurig senkt' ein Genius
seine Fackel. Schöne lichte Bilder
scherzten auch um die Nothwendigkeit,
und das ernste Schicksal blickte milder
durch den Schleyer sanfter Menschlichkeit. 105

Nach der Geister schrecklichen Gesetzen
richtete kein heiliger Barbar,
dessen Augen Thränen nie benetzen,
zarte Wesen, die ein Weib gebahr.
Selbst des Orkus strenge Richterwaage
hielt der Enkel einer Sterblichen,
und der Thrakers seelenvolle Klage
rührte die Erinnyen. 110

Vgl. Takahashi, Katsumi: Hellas und Hesperien bei Hölderlin — „Seeliges Griechenland“(V(4)34). 115

109) Novalis „Apologie von Friedrich Schiller“(1789-90): Schriften in 4 Bänden. Leipzig. Bibliographisches Institut. 1928. Bd.2. S.90.

Man hat fast überall über das vortreffliche Gedicht des Herrn Rats Schiller „Die Götter Griechenlands“ Weh und Ach geschrien, ihn für einen Atheisten und ich weiß nicht für was erklärt und voll heiligen Eifers ihn geradezu der Hölle übergeben. Kluge und unparteiische Köpfe haben größtenteils darüber mit mehr Gerechtigkeit geurteilt, doch keiner außer Wieland, der einen Wink davon im „Deutschen Merkur“ gab, hat sich öffentlich erklärt, um die Frömmen und andre enthusiastische Köpfe, die vielleicht ein heiliger Enthusiasmus schnell übereilte, zu beschämen. Ob ich mich gleich nicht zu den klugen Köpfen rechne, so schmeichle ich mir doch, wenigstens unparteiisch zu sein, indem ich weder den Dichter kenne, noch Atheist, Naturalist, Deist, Neolog oder strenger Orthodoxe bin, überhaupt zu keiner Sekte zähle. ... Stollberg, ein Mann, den ich wegen seines Dichtergenies verehere, scheint mir selbst das Gedicht aus einem falschen Gesichtspunkte angesehen zu haben, wie auch ... Kleist im „Deutschen Merkur“ („Das Lob des einzigen Gottes / ein Gegenstück / zu den Göttern Griechenlands“ August 1789); ...

110) Deutsche National-Litteratur. Bd.45(V(4)83). II.Teil. J.P. Uz. S.1-101. Einleitung(Muncker, Franz. S.5-22). S.16.

Neben mißgünstigen Recensionen, die sie veranlaßten, hetzten sie vor al-

m) „HEILIGER BARBAR“

105) Voß „Briefe“ Bd.I. S.96-97: Der Göttinger Hain(V(4)87). S.351.

Voß an Brückner / 26. Oktober 1772(V(4)89) ...

Das obige schwarze Buch heißt das Bundesbuch, und soll eine Sammlung von den Gedichten unsers Bundes werden, die einstweilen durchgehends gebil-
ligt sind. Noch steht nichts darin, weil die Gesänge, die jeder auf das
Bündnis unter der Eiche gemacht, anfangen sollen, aber nach meinem Gefühl
noch nicht eingeschrieben werden können. Nächstens schick ich Ihnen eini-
ge davon. Jetzt feilt noch ein jeder daran. Auch Sie, wertester Freund;
auch du, künftiger Bundesbruder und deutscher Biedermann, mußt einen Ge-
sang auf dieses edle Bündnis singen und einschreiben lassen.

Vgl. „Kinder- und Jugendliteratur der Aufklärung“ (Hrsg.: Ewers, Hans-Heiko)
Stuttgart. Reclam-Universal-Bibliothek. 1980. S.239-240: Lossius(1760-1819)

„Lieder und Gedichte“(1787) S.68-70. „Der deutsche Knabe“ 44 Verse.

Ich bin ein deutscher Knabe.

Mein Mut wird stark, wie meine Hand,

Ich lobe mir mein Vaterland,

Das Wäldchen und die Hütte.

Du bist kein deutscher Knabe.

5

S.68

...

S.69

Wie, du ein deutscher Knabe?

Siehst jeden deutschen Biedermann,

Der nicht französisch parliren kan,

Verächtlich an, du Thore!

Ich bin ein deutscher Knabe.

25

...

S.239

S.69

S.240

S.70

Du bist kein deutscher Knabe.

Dem Spiegel machst du oft Besuch,

30

...

Wärest du ein deutscher Knabe,

Was reitest du in fremdes Land,

Kennst du denn schon dein Vaterland

Von innen und von außen?

40

Ich bleib ein deutscher Knabe.

Das Land, das mir mein Leben gab.

Giebt mir ein Plätzchen einst zum Grab.

Am blauen Veilchenhügel.

106) Voß „Briefe“ Bd.I. S.144-145: Der Göttinger Hain(V(4)87). S.359.

Voß an Brückner / Göttingen, 4. August 1773

Seinen (Klopstocks) Geburtstag feierten wir herrlich. ... Oben stand
ein Lehnstuhl ledig, für Klopstock, mit Rosen und Levkojen bestreut, und
auf ihm Klopstocks sämtliche Werke. Unter dem Stuhl lag Wielands Idris
zerrissen. ... die Fidibus waren aus Wielands Schriften gemacht.

Boie, der nicht raucht, mußte doch auch einen anzünden, und auf den zer-
rissenen Idris stampfen. Hernach tranken wir in Rheinwein Klopstocks Ge-
sundheit, Luthers Andenken, Hermanns Andenken, des Bunds Gesundheit, dann
Eberts, Goethens (den kennst du wohl noch nicht?), Herders usw. Klop-
stocks Ode der Rheinwein ward vorgelesen, und noch einige andere. Nun
war das Gespräch warm. Wir sprachen von Freiheit, die Hüte auf dem Kopf,
von Deutschland, von Tugendgesang, und du kannst denken, wie. Dann aßen
wir, punschten, und zuletzt verbrannten wir Wielands Idris und Bildnis.

107) Tacitus „Germania“(V(4)22: Reclam/V(4)42: Les Belles Lettres) Kap.9: S.
16/S.17(Deutsch: Woyte, Curt) // S.75-76(Text établi et traduit par Perret,
Jacques).

- S.233: Hegel. Werke. 20 Bde(V(4)21). Bd.1. S.230: „Eleusis“ V.10-21. 10
 dein Bild, Geliebter, tritt vor mich,
 und der entfloh'nen Tage Lust; doch bald weicht sie
 des Wiedersehens süßern Hoffnungen —
 Schon mahlt sich mir der langersehten, feurigen
 Umarmung Scene, dan der Fragen des geheimern
 des wechselseitigen Ausspähens Scene, 15
 was hier an Haltung, Ausdruck, Sinnesart am Freund
 sich seit der Zeit geändert, — der Gewisheit Wonne,
 des alten Bundes Treue, fester, reifer noch zu finden,
 des Bundes, den kein Eid besiegelte,
 der freyen Wahrheit nur zu leben, Frieden mit der Sazung 20
 die Meinung und Empfindung regelt, nie einzugehn.
- 101) Hölderlin „Kanton Schweiz“. die Fußnote über „Stätte des Schwurs“(V.69):
 StA. Bd.1. S.145(V(4)103).
 Rütli, eine Wiese nah am Waldstättersee, dem Mytenstein gegenüber, wo
 Walther Fürst und seine Gesellen schwuren: *frei zu leben oder zu ster-
 ben!*
- 102) „Kanton Schweiz / An meinen lieben Hiller“(1791) V.40-44: StA. Bd.1. S.
 144. 40
 Staunend wandelten wir vorüber. — Ihr Väter der Freien!
 Heilige Schaar! nun schau'n wir hinab, hinab, und erfüllt ist
 Was der Ahnungen künste versprach, was süße Begeist' rung
 Einst mich lehrt' im Knabengewande, gedacht'ich des hohen
 Hirten in Mamre's Hain' und der schönen Tochter von Laben,
 103) „Kanton Schweiz“ V.68-85: StA. Bd.1. S.145. 70
 Lebt dann wol, ihr Glücklichen dort! im friedsamem Thale
 Lebe wol, du Stätte des Schwurs! dir jauchz'ten die Sterne,
 Als in heiliger Nacht der ernste Bund dich besuchte.
 Herrlich Gebirg! wo der blaiche Tyrann den Knechten vergebens,
 Zahn und schmeichlerisch Muth geboth — zu gewaltig erhob sich
 Wider den Trotz die gerechte, die unerbittliche Rache —
 Lebe wol, du herrlich Gebirg. Dich schmückte der Freien
 Opferblut — es wehrte der Thräne der einsame Vater. 75
 Schlummre sanft, du Heldengebein! o schliefen auch wir dort
 Deinen eisernen Schlaf, dem Vaterlande geopfert,
 Walthers Gesellen und Tells, im schönen Kampfe der Freiheit!
 Könnt'ich dein vergessen, o Land, der göttlichen Freiheit!
 Froher wär'ich; zu oft befällt die glühende Schaam mich, 80
 Und der Kummer, gedenk'ich dein, und der heiligen Kämpfer.
 Ach! da lächelt Himmel und Erd' in fröhlicher Liebe
 Mir umsonst, umsonst der Brüder forschendes Auge.
 Doch ich vergesse dich nicht! ich hoff' und harre des Tages,
 Wo in erfreuende That sich Schaam und Kummer verwandelt. 85
- 104) Hölderlins Brief 51 an die Schwester vom 19. oder 20. Juni 1792: StA.
 Bd.6. S.77.
 Es muß sich also bald entscheiden. Glaube mir, liebe Schwester, wir krie-
 gen schlimme Zeit, wenn die Oestreicher gewinnen. Der Misbrauch fürstli-
 cher Gewalt wird schrecklich werden. Glaube das mir! und bete für die
 Franzosen, die Verfechter der menschlichen Rechte. ...
 Vgl. lettre à sa soeur. 19 ou 20 juin 1792. Traduction par Naville, Denise:
 OEuvres de la Pléiade. S.83.
 La décision doit donc être proche. Crois-moi, chère soeur, les temps se-
 ront durs si les Autrichiens l'emportent. L'abus du pouvoir princier se-
 ra terrible. Crois-moi! et prie pour les Français, défenseurs des droits
 de l'homme.

- Verständlich den Guten, aber mit Recht
 Die Achtungslosen mit Blindheit schlägt
 Die entweihenden Knechte, wie nenn ich den Fremden?
 Vgl. „Le Rhin”(V(4)7) v.135-149: OEuvres de la Pléiade. S.853
- Maintenant c'est aux demi-dieux que je songe 135
 Et il faut qu'une connaissance me soit donnée
 De ces être sans prix, puisque leur vie
 Fait battre si souvent mon cœur plein de désir.
 Mais celui qui comme toi reçut en partage, ô Rousseau,
 Une âme qui ne peut être soumise, une âme 140
 De très profond support,
 Cette justesse de sens
 Et ce don si doux de savoir entendre et de parler,
 Pareil au dieu du vin, avec une plénitude sacrée
 Et le désordre d'un divin délire, de telle 145
 Sorte qu'il rende intelligible aux gens de cœur
 Le langage des êtres les plus purs, mais frappe
 Les sans-respect d'un juste aveuglement, les esclaves
 Profanateurs, — cet inconnu, quel nom lui donnerai-je?
 97) Herder „Auf den 14. Juli 1790": Sämtliche Werke(V(4)75). Bd.29. 1889. S.
 659-660: Werke in 5 Bänden(V(4)17). Bd.1. S.48.
 Rings um den hohen Altar siehst du die Franken zu Brüdern
 Und zu Menschen sich weihn; Göttliches, heiliges Fest! S.659
 Wie spricht Jehovah zum Volk? Spricht er in Donner und Blitzen? S.660
 Milder kommt er hinab; Wasser des Himmels entsüht
 Weihend die Menge zum neuen Geschlecht mit der Taufe der Menschheit.
 Vierzehnder Julius, dich sehn unsre Enkel einmal!
- 98) Hölderlins Brief 58 an den Bruder (Anfang Juli 1793): StA. Bd.6. S.85.
 Cotta schrieb aus Frankreich, wie ich von Stuttgart aus erfuhr, den 14ten
 Julius, den Tag ihres Bundesfestes werden die Franzosen an allen Enden
 und Orten mit hohen Thaten feiern. ...
 Vgl. lettre à son frère(début juillet 1793). Traduction par Naville, Denise.
 N° 58: OEuvres de la Pléiade. S.90.
 Selon des informations de Stuttgart, Cotta, qui est en France, dit que
 les Français vont partout célébrer par des hauts faits le 14 juillet,
 jour de leur fête nationale. ...
- 99) Schwegler, Albert „Erinnerungen an Hegel"(1839): StA. Bd.7. I. Teil. S.
 450. REVOLUTIONÄRE STIMMUNG IM STIFT. angeblich nach Ch.Ph. Leutwein.
 Eines Morgens, ... an einem Sonntag, es war ein schöner klarer Früh-
 lingsmorgen, seien Hegel und Schelling mit noch einigen Freunden auf eine
 Wiese unweit Tübingen gezogen und hätten dort einen Freiheitsbaum aufge-
 richtet.
- Vgl. Dilthey, Wilhelm(1833-1911) „Das Erlebnis und die Dichtung"(1905). 8.
 Aufl. Leipzig/Berlin. Teubner. 1922. S.362. Vgl. (V(4)4).
 In demselben Jahre 1793, in dem in Frankreich das Christentum abgeschafft
 und der Kultus der Vernunft eingeführt wurde, stellten die jungen Studen-
 ten auf dem Marktplatz einen Freiheitsbaum auf, den sie in hellem Jubel
 umtanzten. ...
- 100) Hölderlin „Am Tage der Freundschaftsfeier" V.129-133: StA. Bd.1. S.62.
 Doch siehe es kam
 Der seelige Tag — 130
 O Brüder in meine Arme! —
 O Brüder, da schlossen wir unsern Bund,
 Den schönen, seeligen, ewigen Bund.
- Vgl. Neuffer, Christian Ludwig(1769-1839) / Magenau, Rudolf(1767-1846) /
 Schelling, Friedrich Wilhelm Joseph(1775-1854) / Hegel, Georg Wilhelm Fried-
 rich(1770-1831) „Eleusis / An Hölderlin. August. 1796": StA. Bd.7. I. Teil.

93) Goethe „Götter, Helden und Wieland. Eine Farce“(1774): Werke(V(4)14)
Bd.4. S.207//S.212.

ADMET. ... Das verdiente einige ahndungsvolle Ehrfurcht. Der zwar Eurer ganzes aberweises Jahrhundert von Literatoren nicht fähig ist. ...
ALCESTE. ... Eure Alceste mag gut sein und Eure Weibchen und Männchen amüsiert, auch wohl gekitzelt haben, was Ihr Rührung nennt. ...
WIELAND. Könnt Ihr mir absprechen, daß ich das Ganze delikater behandelt habe? ... (S.207//S.212) ... , Koloß.
HERKULES. Bin ich dir als Zwerg erschienen?
WIELAND. Als wohlgestalter Mann, mittlerer Größe tritt mein Herkules auf.
HERKULES. Mittlerer Größe! Ich!

1) „BUND“

94) Hölty, Ludwig Christoph Heinrich(1748-76) „Bundsgesang im Septemb. 1772“
1.-2.Str. V.1-8: Der Göttinger Hain(V(4)87). S.68.

Habt Gottes Segen! Vaterland, Vaterland
Tönt jede Lippe, Vaterland, Vaterland,
Brennt jeder Busen, Brüderherzen
Flammen entgegen den Brüderherzen.

Ihr knieet nieder, schwörer dem Laster Hohn,
Den Schändern eurer Fluren, die Galliens,
Und jedes Auslands Kette schleppen,
Schwöret ihr Hohn, und der Tugend Huldung.

95) Hölderlin „Der Tod des Empedokles“(Erste Fassung. 1797-99) V.1449: StA.
Bd.4. S.62(V.1447-1452). (Zweiter Act. Vierter Auftritt)

BÜRGER. Du solltest König seyn. O sei es! seis!
Ich grüße dich zuerst, und alle wollens.

EMPEDEKLES. Diß ist die Zeit der Könige nicht mehr.

BÜRGER(erschrocken). Wer bist du, Mann?

PAUSANIAS. So lehnt man Kronen ab, 1450

Ihr Bürger.

BÜRGER. Unbegreiflich ist das Wort,

So du gesprochen, Empedokles.

Vgl. „La mort d'Empédocle“(Première version) Deuxième acte. Scène quatrième:
Oeuvres de la Pléiade. S.519-520.

CITOYEN. Sois notre Numa! Depuis longtemps nous pensions

Que tu devrais être roi. Oh! sois-le! sois-le!

Je te salue le premier, et tous vont le faire.

EMPEDEKLES. Voici que le temps des rois est passé.

CITOYENS(effrayés). Homme, qui es-tu?

PAUSANIAS. Ainsi se refusent les couronnes,

Citoyens.

CITOYEN. Incompréhensible est la parole

Que tu as dite, Empédocle.

96) Hölderlin „Der Rhein“ 10.Str. V.135-149: StA. Bd.2. S.146.

Halbgötter denk'ich jezt 135

Und kennen muß ich die Theuern,

Weil oft ihr Leben so

Die sehnende Brust mir beweget.

Wem aber, wie, Rousseau, dir,

Unüberwindlich die Seele 140

Die starkausdauernde ward,

Und sicherer Sinn

Und süße Gaabe zu hören,

Zu reden so, daß aus heiliger Fülle

Wie der Weingott, thörig göttlich 145

Und gesezlos sie die Sprache der Reinsten giebt

Er dichtete. Was ward daraus?
Ein wohlgeschmücktes Hurenhaus
.....

Und ein andermal eiferte ich auf solche Art:

Der neue Amadis.

Dis Buch, das an das Licht zum geilen Zeitvertreibe
Für Stutzer und für Metzen trat,
Gleicht einem schönen Leibe (Weibe)
Der die galante Seuche hat.
Das betrübte Schicksal des Hn W--d.
Die Musen stießen ihn hinaus;
Von Geilheit voll im heißen Busen
Gerieth er in ein Hurenhaus
Und sah die Metzen an für Musen.

Das heißt geschmäht. Ja, Freund, thue mit unserm Bruder das Deinige diesen neuen Ovid wegzutilgen.

- 91) Hölderlins Brief an Immanuel Nast vom 18.2.1787 (Br.6): StA. Bd.6. S.10.
Du fragst, wie mir Dein Amadis gefalle — ich sage — schlecht. Und warum?? — Nicht weil Wieland ohnehin nicht mein Stekkenpferd ist, auch nicht — weil ich gerner ein Märchen gelesen hätte, das nicht von der Satyre unterbrochen wird — sondern — ich sags mit aller Bescheidenheit — weil Dinge drinn vorkommen, die für reizbare Leute, wie ich bin, leider!!! — nicht zum Lesen sind. O Bruder! meinst Du, ich hab' ihn über halb gelesen? da dank'ich Gott, daß meine Fantasie noch unbefleckt ist, daß mir vor dem Dichter, der gewiß eine Unschuld schaamroth machen würde, ekelte. Gesteh mirs nur, Lieber, ist Dirs nicht besser ums Herz wann Du den großen Messiassänger hörst? oder unsers Schubarts wütenden Ahasveros liest? Oder den feurigen Schiller? — ...

Vgl. Lettre à I. Nast (Traduction par Naville, Denise): OEuvres de la Pléiade. S.21. (18 février 1787)

Mais soyons sérieux. Tu me demandes si ton Amadis me plaît — je réponds — fort peu. Et pourquoi? Non seulement parce que Wieland n'est pas mon cheval de bataille, et non seulement parce que j'aurais préféré lire un conte qui ne soit pas interrompu par la satire — mais surtout — je le dis en toute modestie — parce qu'il s'y passe des choses peu lisibles pour des gens malheureusement aussi irritables que moi. Ô frère, ne crois pas que je l'aie seulement feuilleté, pour lors je rends grâce à Dieu que mon imagination soit encore vierge, et qu'un poète qui ferait certainement rougir de honte une innocence me répugne. Avoue-le, mon cher, ne te sens-tu pas le coeur plus à l'aise en écoutant le chant grandiose du Messie? ou le furieux Ahasveros de notre Schubart? Ou en lisant l'impétueux Schiller? — ...

- 92) Goethe „Die Leiden des jungen Werther“ (V(4)16) Brief vom 16.6.1771: Werke (V(4)14). Bd.6. S.27.

Wir traten ans Fenster. Es donnerte abseitswärts, und der herrliche Regen säuselte auf das Land, und der erquickendste Wohlgeruch stieg in aller Fülle einer warmen Luft zu uns auf. Sie stand auf ihren Ellenbogen gestützt, ihr Blick durchdrang die Gegend; sie sah den Himmel und auf mich, ich sah ihr Auge tränenvoll, sie legte ihre Hand auf die meinige und sagte: „Klopstock!“ — Ich erinnerte mich sogleich der herrlichen Ode, die ihr in Gedanken lag, und versank in dem Ströme von Empfindungen, den sie in dieser Losung über mich ausgoß. Ich ertrug's nicht, neigte mich auf ihre Hand und küßte sie unter den wonnevollsten Tränen. Und so nach ihrem Auge wieder — Edler! hättest du deine Vergötterung in diesem Blicke gesehen, und möcht'ich nun deinen so oft entweihten Namen nie wieder nennen hören!

iamque pedem referens casus evaserat omnis,
redditaque Eurydice superas veniebat ad auras
pone sequens (namque hanc dederat Proserpina legem),
cum subita incautum dementia cepit amantem,
ignoscenda quidem, scirent si ignoscere Manes:

.....

S.128

S.130

illa quidem Stygia nabat iam frigida cumba.
septem illum totos perhibent ex ordine mensis
rupe sub aëria deserti ad Strymonis undam
flesse sibi, et gelidis haec evolvisse sub antris
mulcentem tigris et agentem carmine quercus:

510

Vgl. Klopstock: Ausgewählte Werke(V(4)18). S.1195-97: Orpheus und Eurydike.
Elend ward Orpheus, ...

.....

... Er weint zu der Laute der Liebenden Wehmut;
Hat dich, süßes Weib, dich an dem öden Gestade,
Dich, wenn der Tag anbrach, dich, wenn er sich neigte, gesungen:
Trat an des Tánarus Schlund, des Abgrunds Tor, in des Haines
Schwarze Schreckennacht; kam dann zu den Manen, zum grausen
Könige, Herzen, die eisern sind den flehenden Menschen.

.....

S.1195

S.1196

Jetzo kehrt er zurück, den Gefahren entronnen; schon atmet,
Nun nicht länger getrennt, Eurydike Lüfte der Erde,
Nahe folgend: (Dies war Deois Gesetz) da der Liebe
Unbedacht auf einmal den Törichten fasset; verzeihbar,
Wenn die Manen verziehn. Er stand, und sah sich, vom Tage
Schon erreicht, uneingedenk, ach erliegend dem Herzen,
Nach Eurydike um! Nun war mißlungen sein Mühsal,
War gebrochen der Bund mit dem eisernen Herrscher. ... (=foedera: V.
493: S.128)

.....

... Auch schwamm sie schon kalt in dem Nachen des Orkus.
Sieben Monde lang hat er unter bedurfteten Felsen,
Meldet die Sag', an der Woge geweint des verlassenen Strymons
Allen seinen Gram in schauernden Höhlen gesungen;
Tiger besänftigt' er da, und Hörerin wurd' ihm die Eiche. S.1196
S.1197
89)Voß „Briefe"(V(4)87) Bd.I. S.93-94: Der Göttinger Hain(V(4)87). S.350.
Voß an Brückner 26. Oktober 1772
Gesundheiten wurden auch getrunken. Erstlich Klopstocks! Boie nahm das
Glas, stand auf, und rief: Klopstock. Jeder folgte ihm, nannte den gro-
ßen Namen, und nach einem heiligen Stillschweigen trank er. Nun Ramlers!
Nicht voll so freilich; Lessings, Gleims, Geßners, Gerstenbergs, Uzens,
Weissens usw. und nun mein allerliebster bester Brückner mit seiner Do-
ris. Ein heiliger Schauer muß Sie den Augenblick ergriffen haben, wie
der ganze Chor, Hahn, die Miller mit ihrer männlichen deutschen Kehle,
Boie und Bürger mit Silberstimmen, und Hölty und ich mit den übrigen
(meine Stimme kennen Sie) das feurige: Lebe! ausriefen. Jemand nannte
Wieland, mich deucht Bürger wars. Man stand mit vollen Gläsern auf, und
— Es sterbe der Sittenverderber Wieland, es sterbe Voltair(e)! usw. ...
90)Brückner, Ernst Theodor Johann(1746-1805) „Brief an J.H. Voß vom 7. Mai
1773": Euphorion. 33. 1932. S.341-420. Metelmann, Ernst(Hrsg.). J. Brück-
ner und der Göttinger Dichterbund. Ungedruckte Briefe und Handschriften.
S.390: Neue Quellen zur deutschen Geistesgeschichte des 18. u. 19. Jahrh.

Der neue Amadis.
Genie und Wollust kömt zusammen
Und setzt des Dichters Herz in Flammen,

Mannigfaltigkeit zur größten harmonischen Einheit durch keine Kleidung und Stubenluft verdorben, immer in gehöriger Munterkeit und Bewegung erhalten, von hohem und heiligem und wollüstigem Geist beseelt, ein wenig Überfülle, wo sie sein müsse, üppige sanfte Wölbung und wieder straffer Umriß sei äußerst selten und ein Wunder in der Natur, und man kann es immer, wenn man es fände, als das Allergöttlichste auf diesem Erdenrund betrachten. ...

Vgl. Reclam-Ardinghello. Anmerkungen zum Text. S.464.

50, 16f. die griechische Venus zu Florenz: berühmte Statue der ehemaligen Sammlung Medici, Florenz (heute Florenz, Uffizien), römische Kopie nach einem griechischen Werk des späten 4. Jh.s.

k) „HAINBUND“

86) Paul/Betz: Deutsches Wörterbuch. Tübingen. Niemeyer. 5.Aufl. 1966: 6. Aufl. 1968. S.283.

Hain, ... als poetisches Wort durch Kl. sehr üblich geworden für einen anmutigen Wald oder für einen heiligen, den Göttern geweihten. Kl. hat den H. zum Sitz und Symbol der germanischen Dichtkunst gemacht im Gegensatz zur griechischen (vgl. die Ode Der Hügel und der Hain 1767) daher Hain 1772 als Bezeichnung für den Göttinger Dichterbund, der erst 1804 von Voß Hainbund genannt wurde.

87) Voß, Johann Heinrich (1751-1826) „Briefe“. Hrsg. v. Voß, Abraham. I/II/III(1-2). 1829-33. Bd.I. S.91-92: Der Göttinger Hain. Hrsg. v. Kelletat, Alfred. Stuttgart. Reclam-Universal-Bibliothek. 1967. S.349.

Voß an Brückner Den 20. September (1772). Von meinen Freunden hab ich vielmal zu grüßen; sie sind alle auch Ihre Freunde. Ach, den 12. September, mein liebster Freund, da hätten Sie hiersein sollen. Die beiden Müllers, Hahn, Hölty, Wehrs und ich gingen noch des Abends nach einem nahgelegenen Dorfe. Der Abend war außerordentlich heiter, und der Mond voll. Wir überließen uns ganz den Empfindungen der schönen Natur. Wir aßen in einer Bauernhütte eine Milch, und begaben uns darauf ins freie Feld. Hier fanden wir einen kleinen Eichengrund, und sogleich fiel uns allen ein, den Bund der Freundschaft unter diesen heiligen Bäumen zu schwören. Wir umkränzten die Hüte mit Eichenlaub, legten sie unter den Baum, faßten uns alle bei den Händen, tanzten so um den eingeschlossenen Stamm herum, — riefen den Mond und die Sterne zu Zeugen unseres Bundes an, und versprachen uns eine ewige Freundschaft. Dann verbündeten wir uns, ...

88) „Brod und Wein“ 1.Str. V.14-18(V(4)1).

Vgl. Tacitus „Germania“ (V(4)22) Kap.11: Reclam(V(4)22). S.20.

nec dierum numerum, ut nos, sed noctium computant. sic constituunt, sic condicunt: nox ducere diem videtur. (S.20)

die Germanen ... Sie rechnen übrigens nicht nach Tagen wie wir, sondern nach Nächten; demgemäß setzen sie Termine fest und treffen Verabredungen. Nach ihrer Auffassung geht die Nacht dem Tage voran. ...

(Reclam. S.21: Deutsch nach Woyte)

Vgl. Vergilius „Georgica“ Liber IV. V.454/V.464-470/V.485-489/V.506-510: Georgicon Libri IV / Georgiche. Testo, traduzione e note a cura di Alessandro Barchiesi. Milano. Arnaldo Mondadori Editore. 1980. S.126/S.128/S.130.

... miserabilis Orpheus

454

...
ipse cava solans aegrum testudine amorem
te, dulcis coniunx, te solo in litore secum,
te veniente die, te decedente canebat.
Taenarias etiam fauces, alta ostia Ditis,
et caligantem nigra formidine lucum
ingressus, Manisque adiit regemque tremendum
nesciaque humanis precibus mansuescere corda.

S.126

S.128 465

470

.....

- Saß gülden beim Altar und nahm den Weihrauch an.
 Man füllte nun die Welt mit Tempeln und mit Hainen
 Und die mit Göttern an. Bedeckt mit Edelsteinen,
 Nahm bald der Priester auch des Pöbels Augen ein
 Und wollte, wie sein Gott, von ihm verehret sein.
 Drauf herrschte der Betrug, bewehrt mit falschen Zeichen,
 Und mußte von der Welt die scheue Freiheit weichen,
 Die Wahrheit deckte sich mit tiefer Finsternis,
 Vernunft ward eine Magd und Weisheit Ärgernis;
 So ließ die Vorwelt sich die Macht zum Denken rauben,
 Und alles bog das Knie vor schlauem Aberglauben.
- Vgl. Haller „Versuch Schweizerischer Gedichte“ 1.Aufl. 1732 / 2.Aufl. 1734
 / 3.Aufl. 1742 / 4.Aufl. 1748 / 5.Aufl. 1749 / 6.Aufl. 1751 / 7.Aufl. 1751
 / 8.Aufl. 1753 / 9.Aufl. 1762 / 10.Aufl. 1768 / 11.Aufl. 1777.
- 85) Wieland, Christoph Martin(1733-1813) „Comische Erzählungen“(1765)/„Griechische Erzählungen“(1784): Werke. 5 Bände. Hrsg. v. Seiffert, Hans Werner/Martini, Fritz. München. Carl Hanser. 1965-68. Bd.4. 1965. S.75-169.
- Kaum ist er weg, so steht schon Cypria,
 Voll Zuversicht in diesem Streit zu siegen,
 In jenem schönen Aufzug da,
 Worin sie sich (das lächelnde Vergnügen
 Der lüsternten Natur) dem leichten Schaum entwand,
 Sich selbst zum erstermal voll süßen Wunders fand,
 Und im Triumph auf einem Muschel-Wagen,
 An Paphos reizendes Gestad
 Von frohen Zephyrn hingetragen,
 In erstem Jugendglanz die neue Welt betrat:
 So steht sie da, halb abgewandt
 Wie zu Florenz, und deckt mit einer Hand,
 Errötend, in sich selbst geschmieget,
 Die holde Brust, die kaum zu decken ist,
 Und mit der andern — was ihr wißt.
 Die Zauberin! Wie ungezwungen lüget
 Ihr schamhaft Aug! Und wie behutsam wird
 Dafür gesorgt, daß Paris nichts verliert!
 („Das Urteil des Paris“ V.377-394: Hanser Ausgabe. Bd.4. S.86-87)
- Saturnia lag, abgeredter Maßen,
 In tiefem Schlaf, als er erschien,
 Vom Bade matt, auf einem Ruhebette,
 Ein Liebes-Gott, doch nur von Marmor, schien
 Mit kühner Hand den Vorhang wegzuziehn.
 Sie lag in leichten Silber-Flor
 Mit vieler Kunst gehüllt, und eine Blumen-Kette
 Versteckte halb, was ihr Gewand
 Den Augen noch gegönnet hätte;
 Doch steigt halb unverhüllt die schöne Brust empor,
 Dort reizt ein weißer Arm, und eine kleine Hand,
 Hier ragt ein Knie wie Wachs hervor,
 Und noch was mehr, das wenn er's itzt erblickte
 Selbst Jupitern so sehr entzückte
 Als seinen Freund, dem, fast von Lust entseelt,
 Die Auge schwimmt, der Atem fehlt.
- („Juno und Ganymed“ V.748-763: Hanser Ausgabe. Bd.4. S.139)
- Vgl. Heinse, Wilhelm(1749-1803) „Ardinghello“(1787) Erster Band. I.Teil:
 „Ardinghello“ Stuttgart. Reclam-Universal-Bibliothek. 1975. S.50.
 die griechische Venus zu Florenz ... die zarten häufigen und doch festen Schwingungen des Lebens in den reinsten Formen mit aller reizenden

j) „DIE FLÜCHTIGEN DICHTER“
83) Uz, Johann Peter (1720-96) „Das bedrängte Deutschland“ (am 29. März 1746 an Gleim geschickt, erst in „Lyrische und andere Gedichte“ 1755 gedruckt) 1.Str./7.Str.-11.Str. V.1-4/V.25-44: Deutsche National-Litteratur. Historisch kritische Ausgabe. Bd.45. hrsg. v. Muncker, Franz. Stuttgart. Union Deutsche Verlagsgesellschaft. um 1894. Sansyusya. Faksimile-Nachdruck. 1974. 2.Teil: Uz/Kleist/Hamler/Karschin. S.30-31.
Wie lang zerfleischt mit eigner Hand
Germanien sein Eingeweide?
Besiegt ein unbesiegt Land
Sich selbst und seinen Ruhm, zu schlauer Feinde Freude?
3
..... S.30
S.31 25
O Schande! Sind wir euch verwandt,
Ihr Deutschen jener bessern Zeiten,
Die feiger Knechtschaft eisern Band
Mehr als den härtesten Tod im Arm der Freiheit scheuten?
Wir, die uns kranker Wollust weihn,
Geschwächt vom Gifte weicher Sitten,
Wir wollen derer Enkel sein,
Die, rauh, doch furchtbarfrei, für ihre Wälder stritten?
30
Die Wälder, wo ihr Ruhm noch itzt
Um die bemoosten Eichen schwebet,
Wo, als ihr Stahl vereint geblitzt,
Ihr ehrner Arm gesiegt und Latium gebebet?
35
Wir schlafen, da die Zwietracht wacht
Und ihre bleiche Fackel schwinget
Und, seit sie uns den Krieg gebracht,
Ihm stets zur Seite schleicht, von Furien umringet.
40
Ihr Natternheer zischt uns ums Ohr,
Die deutschen Herzen zu vergiften,
Und wird, kommt ihr kein Hermann vor,
In Hermanns Vaterland ein schmäählich Denkmal stiften.
84) Haller „Brief an Eberhard Gemmingen. März 1772“: Deutsche National-Litteratur. Bd.41. 2.Abt.(V(4)82). S.163.
Ist es also das Murren eines Sauertopfes, wenn ich gewünscht habe, wenn ich wünsche, daß so vieler Witz, daß eine so rosichte Einbildung, daß die glühenden Farben der hellsten Malerei nicht zum allgemeinen Schaden angewendet würden; und sind die lustigen, die schalkhaften, die flüchtigen Dichter, sind ihre Bewunderer gerecht, wenn sie nicht nur frei sein wollen, zum Schaden der Sitten, zur Unterdrückung nötigerer Pflichten reizend und verführerisch zu dichten; wenn sie sogar diejenigen verfolgen, die noch einigen Ernst bei der Poesie beibehalten und dieselbe zu ihrer großen Bestimmung, zur Aufmunterung zurückführen wollen, am Glücke der Welt durch die Tugend zu arbeiten?
Vgl. Léonard, Émile-G.: Histoire du Protestantisme. Collection QUE SAIS-JE?. N°427. Paris. Presses Universitaires de France. 1950. S.128.
Haller qui, d'après Philippe Godet, «inspirait à Voltaire une sorte de frayeur respectueuse», ...
Vgl. Haller „Gedanken über Vernunft, Aberglauben und Unglauben“ V.146-160: Deutsche National-Litteratur. Bd.41. 2.Abt(V(4)82). S.39.
Selbst Laster durften sich den Göttern zugesellen,
Und Menschen ihre Schmach der Welt zum Beispiel stellen,
Geiz, Lügen, Üppigkeit, und was man tadeln kann,

- i), „HINGEHEFTETEN BLICKES LANGE WAHL“
- 81) Klopstock „Der Hügel und der Hain“ V.45-56: Oden 1771 (V(4)18). S.255.
 Laß fliegen, o Schatten, die goldene Leyer 45
 Den mächtigsten Flug,
 Und rufe mir einen der Barden
 Meines Vaterlands herauf!
- Einen Herminoön,
 Der unter den tausendjährigen 50
 Eichen wandelte,
 Unter deren alternden Sproß ich wandle.
- Ich beschwöre dich, o Norne, Vertilgerin,
 Bey dem Haingesange, vor dem in Winfeld die Adler sanken!
 Bey dem liedergeführten Brautlenzreihn: O sende mir herauf 55
 Einen der Barden Teutoniens, einen Herminoön!
- 82) „Der Hügel und der Hain“ (V(4)81) V.93-96: Oden 1771. S.258.
 Die zwillingsbrüder Alzes graben
 In Felsen euch das Gesez der heiligen Freundschaft:
 Erst des hingehfteten Blickes lange Wahl, 95
 Dann Bund auf ewig!
- Vgl. Haller, Albrecht (1708-77) „Über den Ursprung des Übels“ (1734) III. Buch.
 V.161-190: Deutsche National-Litteratur. Historisch kritische Ausgabe. Bd.
 41. 2. Abt. Haller/Salis-Seewis. hrsg. v. Frey, Adolf. Stuttgart/Berlin. W.
 Spemann. um 1885. Sansyusya. Faksimile-Nachdruck. 1974. S.103.
- O selig jene Schar, die, von der Welt verachtet,
 Der Dinge wahren Wert und nicht den Wahn betrachtet,
 Und, treu dem innren Ruf, der sie zum Heile schreckt,
 Sich ihre Pflicht zum Ziel von allen Thaten steckt!
 Gesetzt, daß Welt und Hohn und Armut sie mißhandeln, 165
 Wie angenehm wird einst ihr Schicksal sich verwandeln,
 Wann dort, beim reinen Licht, ihr Geist sich selbst gefällt,
 Das überwundene Leid zu seiner Wollust hält
 Und innig hold mit Gott, dem Urbild ihrer Gaben,
 Sie Gott, das höchste Gut, in steter Nähe haben! 170
- Indessen ist die Welt, die Gott zu seinem Ruhm
 Und unserm Glücke schuf, des Übels Eigentum:
 In allen Arten ist das Los des Guten kleiner,
 Wo tausend gehn zur Qual, entrinnt zur Wohlfahrt einer,
 Und für ein zeitlich Glück, das keiner rein genießt, 175
 Folgt ein unendlich Weh, das keine Ruh' beschließt.
 O Gott voll Gnad' und Recht, darf ein Geschöpfe fragen:
 Wie kann mit deiner Huld sich unsre Qual vertragen?
 Vergnügt, o Vater, dich der Kinder Ungemach?
 War deine Lieb' erschöpft? Ist dann die Allmacht schwach? 180
 Und konnte keine Welt des Übels ganz entbehren,
 Wie liebtest du nicht eh' ein ewig Unding wahren?
- Verborgen sind, o Gott! die Wege deiner Huld,
 Was in uns Blindheit ist, ist in dir keine Schuld.
 Vielleicht, daß dermaleinst die Wahrheit, die ihn peinigt, 185
 Den umgegoßnen Geist durch lange Qualen reinigt
 Und, nun dem Laster feind, durch dessen Frucht gelehrt,
 Der Willen, umgewandt, sich ganz zum Guten kehrt;
 Daß Gott die späte Reu' sich endlich läßt gefallen,
 Uns alle zu sich zieht und alles wird in allen. 190

80)Hölderlins Brief 60 an Neuffer. Zwischen 21. und 23. Juli 1793.

Zwar schrieb ich an Stäudlin: Neufers stille Flamme wird immer herrlicher leuchten, wenn vielleicht mein Strohfeuer längst ver Raucht ist; aber dieses vielleicht schreckt mich eben nicht immer, am wenigsten in den Götterstunden, wo ich aus dem Schoos der beseeligen Natur, oder aus dem Platanenhaine am Ilissus zurückkehre, wo ich unter Schülern Platons hingelagert, dem Fluge des Herrlichen nachsah, wie er die dunkeln Fernen der Urwelt durchstreift, oder schwindelnd ihm folgte in die Tiefe der Tiefen, in die entlegensten Enden des Geisterlands, wo die Seele der Welt ihr Leben versendet in die tausend Pulse der Natur, wohin die ausgeströmten Kräfte zurückkehren nach ihrem unermeßlichen Kreislauf, oder wenn ich trunken vom Sokratischen Becher, und sokratischer Geselliger Freundschaft am Gastmahle den begeisterten Jünglingen lauschte, wie sie der heiligen Liebe huldigen mit süßer feuriger Rede, und der Schächer Aristophanes drunter hineinwizelt, und endlich der Meister, der göttliche Sokrates selbst mit seiner himmlischen Weisheit sie alle lehrt, was Liebe sei — da, Freund meines Herzens, bin ich dann freilich nicht so verzagt, und meine manchmal, ich müßte doch einen Funken der süßen Flamme, die in solchen Augenblicken mich wärmt, u. erleuchtet, meinem Werkchen, in dem ich wirklich lebe u. webe, meinem Hyperion mitteilen können, und sonst auch noch zur Freude der Menschen zuweilen etwas an's Licht bringen. (StA. Bd.6. S.86)

Vgl. Lettre à Neuffer. Entre le 21 et le 23 juillet 1793. Traduction par Naville, Denise: OEuvres de la Pléiade. S.90-91.

Il est vrai que j'ai écrit à Stäudlin: la flamme tranquille de Neuffer brillera d'un éclat de plus en plus beau lorsque (S.90/S.91) mon feu de paille se sera peut-être depuis longtemps dissipé en fumée; mais ce n'est pas cela qui me fait peur, surtout pas aux heures divines où je reviens du sein de la glorieuse nature ou du bois de platanes au bord de l'Ilissos; allongé parmi les disciples de Platon, j'ai suivi l'envolée du Magnifique parcourant ces confins obscurs que sont les origines du monde, tout étourdi je l'ai suivi au plus profond des profondeurs, aux sources les plus lointaines de l'esprit, d'où l'âme du monde projette sa vie dans les mille pulsations de la nature, d'où les forces s'écoulent et où elles reviennent après leur immense révolution. Grisé de nectar et d'amitié sokratique, j'écoutais au banquet les discours doux et enflammés des jeunes gens enthousiastes, célébrant l'amour sacré, tandis qu'Aristophane, le farceur, y mêle ses facéties et à la fin le maître lui-même, le divin Socrate, merveille de sagesse, leur enseigne à tous ce qu'est l'amour — alors, ami de mon cœur, je ne me sens pas tellement découragé, et il me semble parfois que je parviendrai tout de même à communiquer une étincelle de cette douce flamme, qui dans ces moments me réchauffe et m'éclaire, à mon opuscul, mon Hypérion, qui reflète ma véritable vie, et à créer peut-être autre chose encore qui fasse la joie des hommes.

Vgl. OEuvres de la Pléiade. Avant-propos par Jaccottet, Philippe. S.XII.

Il suffit de relire la lettre que le poète de vingt-trois ans écrit à son ami Neuffer en juillet 1793, pour sentir à quelle profondeur étaient descendues en lui les images de la Grèce qu'il découvrait alors dans le Phédre et le Banquet (comme il n'allait pas cesser d'en puiser chez Homère, Pindare ou Sophocle). La prose musicale de cette lettre, comme celle d'Hypérion même, est éclairée par la lumière d'un monde où les dieux (Hölderlin n'en doute pas) sont présents d'une si juste présence que chaque journée peut être cette «fête de la vie» qu'il rêve de «fêter mythiquement» à son tour.

77) Hamann, Johann Georg (1730-88) „Sokratische Denkwürdigkeiten“ Zweyter Abschnitt: Sämtliche Werke. Historisch-kritische Ausgabe. Hrsg.: Nadler, Josef. 6 Bände. Wien. Herder. 1949-57. Bd.2. S.75: „Sokratische Denkwürdigkeiten/Aesthetica in nuce“ mit einem Kommentar hrsg. v. Jørgensen, Sven-Aage. Stuttgart. Reclam-Universal-Bibliothek. 1968. S.55.

Das Genie ist die einmüthige Antwort. Sokrates hatte also freylich gut unwissend seyn; er hatte einen Genius, auf dessen Wissenschaft er sich verlassen konnte, den er liebte und fürchtete als seinen Gott, an dessen Frieden ihm mehr gelegen war, als an aller Vernunft der Egypter und Griechen, dessen Stimme er glaubte, und durch dessen Wind, (wie der erfahrene Wurmdoctor Hill uns bewiesen) der leere Verstand eines Sokrates so gut als der Schoos einer reinen Jungfrau, fruchtbar werden kann. ...

Ob dieser Dämon des Sokrates nichts als eine herrschende Leidenschaft gewesen ... wird, oder ob er ... ; ob er ein Engel oder Kobold, eine hervorragende Idea seiner Einbildungskraft, oder ...

Vgl. Platon „ΑΠΟΛΟΓΙΑ ΣΩΚΡΑΤΟΥΣ“ (Des Sokrates Verteidigung) 31D: Werke(V(4)24) Bd.2. 1973. S.40/S.41 (Deutsch nach Schleiermacher).

... ὅτι μοι θεῶν τι καὶ δαιμόνιον γίγνεται, ... Ἐμοὶ δὲ τοῦτ' ἔστιν ἐκ παιδὸς ἀρεῶμενον, φωνὴ τις γιγνομένη, ἣ, ὅταν γένηται, ...
... daß mir etwas Göttliches und Daimonisches widerfährt, ... Mir aber ist dieses von meiner Kindheit an geschehen, eine Stimme nämlich, welche jedesmal, wenn sie sich hören läßt, ...

78) „Brod und Wein“ 3.Str. V.40-48: StA. Bd.2. S.91.

Göttliches Feuer auch treibet, bei Tag und bei Nacht, 40

Aufzubrechen. So komm! daß wir das Offene schauen,

Daß ein Eigenes wir suchen, so weit es auch ist.

Fest bleibt Eins; es sei um Mittag oder es gehe

Bis in die Mitternacht, immer bestehet ein Maas,

Allen gemein, doch jeglichem auch ist eignes beschieden, 45

Dahin gehet und kommt jeder, wohin er es kann.

Drum! und spotten des Spotts mag gern frohlickender Wahnsinn,

Wenn er in heiliger Nacht plötzlich die Sänger ergreift.

Vgl. „Le Pain et le vin“ v.40-48: Oeuvres de la Pléiade. S.809-810.

Le feu divin lui-même, nuit et jour, s'efforce vers un brusque 40

Embrassement. Viens donc! et nous tourneront nos yeux vers l'étendue

Pour y chercher, si loin soit-il, un bien qui sera nôtre!

Une chose demeure ferme. Que midi sonne ou que le temps s'allonge

Dans le coeur de la nuit, une mesure est là toujours, commune

À tous, et chacun cependant reçoit en propre son destin. 45

Chacun s'en va, chacun s'en vient aux lieux qu'il peut atteindre.

Viens donc! Et qui pourrait mépriser le mépris, sinon ce triomphant S.809

Délire qui saisit les chanteurs soudain dans la nuit sainte? S.810

79) Platon „Phaidros“ (V(4)62) 245A/249C: Werke(V(4)24). Bd.5. S.66/S.84.

Deutsch nach Schleiermacher: S.67/S.85.

“Ὅς δ' ἄν, ἄνευ μανίας Μουσῶν, ἐκὶ ποιητικᾷς θύρας ἀφίκηται ,
ἀτελὲς αὐτός (S.66)

Wer aber ohne diesen Wahnsinn der Musen in den Vorhallen der Dichtkunst sich einfindet, meinend, er könne durch Kunst allein genug ein Dichter werden, ein solcher ist selbst ungeweiht, und auch seine, des Verständigen Dichtung, wird von der des Wahnsinnigen verdunkelt. (S.67)

Τοῦτο δ' ἔστιν ἀνάμνησις ἐκείνων ἃ ποτ' εἶδεν ἡμῶν ἡ ψυχὴ, συμπορευθεῖσα θεῶ καὶ ὑπερβούσα ἃ νῦν εἶναί φαμεν καὶ ἀνακύψασα εἰς τὸ ὄν ὄντως. (S.84)

Und dieses ist Erinnerung an jenes, was einst unsere Seele gesehen, Gott nachwandelnd und das übersehend, was wir jetzt für das Wirkliche halten, und zu dem wahrhaft Seienden das Haupt emporgerichtet. (S.85)

Vgl. Schiller „Die deutsche Muse“ („Gedichte“ Zweyter Theil. 1803): Weimarer Nationalausgabe. Bd.2. Teil I. S.408.

Kein Augustisch Alter blühte,
Keines Medizäers Güte
Lächelte der deutschen Kunst,
Sie ward nicht gepflegt von Ruhme,
Sie entfaltete die Blume 5
Nicht am Strahl der Fürstengunst.

Von dem größten deutschen Sohne,
Von des großen Friedrichs Throne
Gieng sie schutzlos, ungeehrt. 10
Rühmend darfs der Deutsche sagen,
Höher darf das Herz ihm schlagen,
Selbst erschuf er sich den Werth.

Darum steigt in höhern Bogen,
Darum strömt in vollern Wogen 15
Deutscher Barden Hochgesang,
Und in eig'ner Fülle schwellend,
Und aus Herzens Tiefen quellend
Spottet er der Regeln Zwang.

h) „DER LEERE VERSTAND“

75) Herder, Johann Gottfried (1744-1803) „Auch eine Philosophie der Geschichte zur Bildung der Menschheit“ (1774): Sämtliche Werke in 33 Bänden (V(4)17). 1877-1913. Bd.5. 1891. S.496-498: Werke. 5 Bde (V(4)17). Bd.3. S.57-59.

Die Liebe musste den Schleier des Harems durch manche Stufen verdünnen, ehe sie das schöne Spiel der Griechischen Venus, Amors und der Grazien ward. So Mythologie, Poesie, Philosophie, schöne Künste: ... Griechenland ward die Wiege der Menschlichkeit, der Völkerliebe, der schönen Gesetzgebung, des Angenehmsten, in Religion, Sitten, Schreibart, Dichtung, Gebräuchen und Künsten — Alles Jugendfreude, Grazie, Spiel und Liebe! ... (S.496/S.497) ... der Grieche behielt nichts als schönes Bild, Spielwerk, Augenweide — nennt gegen jenes Schwerere wie ihr wollt; gnug er wollte nur dies! Der Religion des Morgenlandes ward ihr heiliger Schleier genommen; und natürlich, da alles auf Theater und Markt, und Tanzplatz Schau getragen wurde, wurd in kurzem „Fabel, schön ausgedehnt, beschwätzt, gedichtet und neugedichtet — Jünglingstraum und Mädchensage!“ die Morgenländische Weisheit, dem Vorhange der Mysterien entnommen, ein schön Geschwätz, Lehrgebäude und Zänkerei der Griechischen Schulen und (S.497/S.498) Märkte. ... Griechenland! Urbild und Vorbild aller Schöne, Grazie und Einfalt! Jugendblüthe des Menschlichen Geschlechts — o hätte sie ewig dauren können! ...

76) Nietzsche „Die Geburt der Tragödie, / Oder: / Griechenthum und Pessimismus“ (V(4)38) Kap.13: op.cit. (V(4)25). Bd.1. S.84.

In dieser Tonart, halb mit Entrüstung, halb mit Verachtung, pflegt die aristophanische Komödie von jenen Männern zu reden, zum Schrecken der Neueren, welche zwar Euripides gerne preisgeben, aber sich nicht genug darüber wundern können, dass Sokrates als der erste und oberste Sophist, als der Spiegel und Inbegriff aller sophistischen Bestrebungen bei Aristophanes erscheine: ...

73) „Brod und Wein" 1.Str. V.11-13(V(4)1).

Vgl. Brentano, Clemens(1778-1842) „Gockel, Hinkel und Gackeleia. Märchen, wieder erzählt von Clemens Brentano"(1838): Werke in 4 Bänden. München. Hanser. 1968/1963/1965/1966. Bd.3. S.768.

Ach, da wuchs mir das Herz; die Welt ward zu enge, weit ward es um die Seele, meine Locken schienen mir Gefühle und Wünsche, die sich sehnten, im Winde zu spielen, und ich gab sie ihm hin; denn, horch, jetzt kam auch ein Wehen und regte die Wipfel des Hains auf; sieh, und das Ebenbild unsrer Erde, der Mond, kam da geheim nun auch; die schwärmerische, die Nacht kam, trunken von Sternen und wohl wenig bekümmert um uns glänzte die Erstaunende dort, die Fremdlingin unter den Menschen, über Gebirgsanhöhen traurig und prächtig herauf! — Ach! da dachte ich nichts mehr als: Wäre nur Vater und Mutter hier, und wenn selbst nur Kronovus hier wäre, daß ich mitteilen könnte, was ich fühle! — ...

Vgl. Brentano „Rheinmärchen". „Das Märchen von dem Hause Starenberg": Werke. Bd.3. S.187.

Ich saß auf einer hohen Felswand hinter Wachholdersträuchen und übersah den heimlichen schönen Waldgrund, ohne von dort aus bemerkt werden zu können. Jetzt aber erhob sich ein Lüftlein und regte die Gipfel des Hains auf, und eine Menge Vögel aller Art flogen hin und her, und trugen allerlei Kräuter und Reiser in Klauen und Schnäbeln auf den Gipfel der Eiche und schienen beschäftigt, ein großes Nest von den mannigfaltigsten wohlriechenden Hölzern und Kräutern zu erbauen. Der Mond lief noch nackt am Himmel herum, und der junge Tag, der aufstehen sollte, schämte sich vor ihm und errötete; nun aber zog der Mond ein weißes Hemd an und trat mit den Sternen hinter den himmlblauen Vorhang.

Vgl. Takahashi, Katsumi: Über die erste Strophe von Hölderlins „Brod und Wein". „Heilige Nacht". Dritter Teil. „Abgeschiedenheit" und „Brunnen". (Forschungsberichte der Universität Kōchi fürs Jahr 1987. Vol.36)/ Über die erste Strophe von Hölderlins „Brod und Wein". „Heilige Nacht". Vierter Teil. „Glocken" und „Stunden". (Forschungsberichte der Universität Kōchi fürs Jahr 1988. Vol.37. Geisteswissenschaften).

74) Schiller „Deutsche Größe"(1797): Werke. Nationalausgabe. Weimar. Hermann Böhlau Nachfolger. Bd.2. Teil I. 1983. S.431-432.

Die Majestät des Deutschen ruhte nie auf dem Haupt s. Fürsten. Abgesondert von dem politischen hat der Deutsche sich einen eigenen Werth gegründet und wenn auch das Imperium unterginge, so bliebe die deutsche Würde unangefochten. ... Sie ist eine sittliche Größe, sie wohnt in der Kultur u: im Character der Nation, der von ihren politischen Schicksalen unabhängig ist. — Dieses Reich blüht in Deutschland, es ist in vollem Wachsen und mitten unter den gothischen Ruinen einer alten barbarischen Verfaßung bildet sich das Lebendige aus. (Der Deutsche wohnt in einem alten sturzdrohenden Hauß aber er selbst ist ein edler Bewohner; und indem das politische Reich wankt hat sich das Geistige immer fester und vollkommener gebildet.) (S.431/S.432) ... endlich muß die Sitte und die Vernunft siegen, die rohe Gewalt der Form erliegen — und das langsamste Volk wird alle die schnellen flüchtigen einholen. Die andern Völker waren dann die Blume, die abfällt Wenn die Blumen abgefallen bleibt die goldne Frucht übrig, bildet sich, schwillt die Frucht der Aernte zu. Das köstliche Gut der deutschen Sprache die alles ausdrückt, das tiefste und das flüchtigste, der Geist, die Seele, die voll Sinn ist. Unsre Sprache wird die Welt beherrschen. Die Sprache ist der Spiegel einer Nation, wenn wir in diesen Spiegel schauen, so kommt uns ein großes trefliches Bild von uns selbst daraus entgegen. Wir kennen das jugendlich griechische und das modern ideelle ausdrücken. ...

- Darum die Sage von euch, daß immertrauernd die Seele
Vor der Zeit mir hinab zu euern Schatten entfliehe?
Aber näher zu euch, wo eure Haine noch wachsen,
Wo sein einsames Haupt in Wolken der heilige Berg hüllt,
Zum Parnassos will ich, und wenn im Dunkel der Eiche 210
Schimmernd, mir Irrenden dort Kastalias Quelle begegnet,
Will ich, mit Thränen gemischt, aus blüthenumdufteter Schaale
Dort, auf keimendes Grün, das Wasser gießen, damit doch,
O ihr Schlafenden all! ein Todtenopfer euch werde.
Dort im schweigenden Thal, an Tempes hangenden Felsen, 215
Will ich wohnen mit euch, dort oft, ihr herrlichen Nahmen!
Her euch rufen bei Nacht, und wenn ihr zürnend erscheint,
Weil der Pflug die Gräber entweiht, mit der Stimme des Herzens
Will ich, mit frommem Gesang euch sünnen, heilige Schatten!
Bis zu leben mit euch, sich ganz sie Seele gewöhnet. 220
Vgl. „L'Archipel" vers 200-220 (Traduction par Tardieu, Jean): OEuvres de
la Pléiade. S.826(v.200-218)/S.827(v.219-220).
Tant de nobles enfants, fils pieux que leur mère Fortune a nourris, 200
Est-il vrai qu'oublant leurs destins révolus les voilà loin de nous,
Retournés au refuge éternel de leurs pères là-bas? Est-ce vrai
Que leur foule a passé sans regret le Léthé, sans espoir d'un retour?
Est-ce en vain que mes yeux chercheront, ah! sur tous les chemins de la
terre,
À vous voir vous lever de nouveau, grandes formes semblables aux dieux?
Est-ce en vain que j'appris à parler votre langue, est-ce en vain que je
sais
Ce que disent de vous les récits? Est-ce afin que, d'une aile attristée,
Loin de moi, avant l'heure, mon âme au séjour de vos ombres descende?
Mais non! Plus près de vous, là où l'arbre des bois consacrés
Toujours croît, où le Mont solitaire et divin se voile de nuages, 209
Jusqu'aux pieds du Parnasse j'irai, et, dès que dans l'ombre des chênes,
Brillera la lueur de ton flot surgissant, Castalie! Ah! je veux 211
Dans la vasque puiser, à travers le parfum de tes fleurs, et répandre,
Sur le sol où renaît la prairie, l'eau sacrée et mes larmes, afin
Qu'une offrande pourtant vienne encore, ô dormeurs délaissés, vous
atteindre!
Et, plus loin, dans le val qui se tait, près des rocs suspendus de Tempé,
Près de vous j'élirai ma demeure à jamais, près de vous, noms splendides!
Et la nuit m'entendra à voix basse appeler et, parfois, si le soc 217
Profanant vos tombeaux vous réveille irrités et vous force à paraître,
Le chant d'un coeur pieux viendra vous calmer, Ombres saintes! 219
Et si toute mon âme, enfin, à vivre avec vous s'accoutume, 220
Vgl. „Brod und Wein" Str.3. V.47-56: StA. Bd.2. S.91.
Drum! und spotten des Spotts mag gern frohlokkender Wahnsinn,
Wenn er in heiliger Nacht plötzlich die Sänger ergreift.
Drum an den Isthmos komm! ... (V(4)43)
Vgl. „Le Pain et le vin" v.47-56: OEuvres de la Pléiade. S.809(v.47)/S.810
(v.48-56).
Viens donc! Et qui pourrait mépriser le mépris, sinon ce triomphant
Délire qui saisit les chanteurs soudain dans la nuit sainte?
Viens aux rives de l'Isthme, ... (V(4)43)

Vgl. Goethe „Dichtung und Wahrheit“ II.Teil. 7.Buch: Werke(V(4)14). Bd.9. S.271.

„Musarion“ wirkte am meisten auf mich, und ich kann mich noch des Ortes und der Stelle erinnern, wo ich den ersten Aushängebogen zu Gesicht bekam, welchen mir Oeser mitteilte. Hier war es, wo ich das Antike lebendig und neu wieder zu sehen glaubte.

64)Nietzsche „Die Geburt der Tragödie“ 19.Kap.(V(4)28:V(4)51).

65)„Die Geburt der Tragödie“ 19.Kap.: op.cit.(V(4)25). Bd.1. S.116.

Man kann den innersten Gehalt dieser sokratischen Cultur nicht schärfer bezeichnen, als wenn man sie die Cultur der Oper nennt: ...

66)Goethe „Faust“ V.6903-05: Werke(V(4)14). Bd.3. S.212.

Schön umgeben! — Klar Gewässer

Im dichten Haine! Frau, die sich entkleiden,

Die allerliebsten! — Das wird immer besser.

67)„Die Geburt der Tragödie“ 20.Kap.: op.cit.(V(4)25). Bd.1. S.127.

Wenn es solchen Helden, wie Schiller und Goethe, nicht gelingen durfte, jene verzauberte Pforte zu erbrechen, die in den hellenischen Zauberberg führt, wenn es bei ihrem muthigsten Ringen nicht weiter gekommen ist als bis zu jenem sehnsüchtigen Blick, den die Goethische Iphigenie vom barbarischen Tauris aus nach der Heimat über das Meer hin sendet, was bliebe den Epigonen solcher Helden zu hoffen, ...

68)Klinger, Friedrich Maximilian(1752-1831) „Sturm und Drang“(1776)

69)Takahashi, Katsumi: VERINNERLICHUNG UND ERLEUCHTUNG — Über die erste Strophe von Hölderlins „Brod und Wein“. „Heilige Nacht“. Erster Teil(Forschungsberichte der Universität Kôchi fürs Jahr 1985. Vol.34. Geisteswissenschaften. S.155-201. 1986). (III) Erleuchtung und Beleuchtung. (3)„Gähnung und Auflösung“(S.176-182).

70)„Brod und Wein“ 1.Str. V.2(V(4)1).

71)Hölderlins Brief 222 an den Bruder um Neujahr 1801: StA. Bd.6. S.407.

Aber daß der Egoismus in allen seinen Gestalten sich beugen wird unter die heilige Herrschaft der Liebe und Güte, daß Gemeingeist über alles in allem gehen, und daß das deutsche Herz in solchem Klima, unter dem Segen dieses neuen Friedens erst recht aufgehen, und geräuschos, wie die wachsende Natur, seine geheimen weitreichenden Kräfte entfalten wird, diß mein'ich, diß seh' und glaub'ich, und diß ists, was vorzüglich mit Heiterkeit mich in die zweite Hälfte meines Lebens hinaussehen läßt.

Vgl. Lettre à son frère probablement vers Nouvel-An 1801(Traduction par Naville, Denise): OEuvres de la Pléiade. S.986.

L'essentiel, c'est que l'égoïsme sous toutes ses formes s'inclinera devant le pouvoir sacré de l'amour et de la bonté, qu'en toute chose l'esprit de communauté prévaudra, et que sous le climat et la bénédiction de cette paix nouvelle le coeur allemand s'épanouira et déploiera en silence, comme la nature en croissance, ses forces lointaines et secrètes; voilà ce que je pense, voilà ce que je vois et ce que je crois; et voilà essentiellement pourquoi j'envisage avec sérénité la seconde moitié de ma vie.

72)„Brod und Wein“ 1.Str. V.9-10(V(4)1).

Vgl. Hölderlin „Der Archipelagus“ Str.11. V.200-220: StA. Bd.2. S.109.

O die Kinder des Glücks, die frommen! wandeln sie fern nun

200

Bei den Vätern daheim, und der Schicksaalstage vergessen,

Drüben am Lethestrom, und bringt kein Sehnen sie wieder?

Sieht mein Auge sie nie? ach! findet über den tausend

Pfaden der grünenden Erd', ihr göttergleichen Gestalten!

Euch das Suchende nie, und vernahm ich darum die Sprache,

205

- Vgl. Biblia Germanica 1545. II. Teil. S.126: Hosea. 4. 11-14
 HVrerey / Wein und Most / machen tolle. Mein Volck fraget sein Holtz /
 vnd sein Stab sol jm predigen / Denn der Hurerey geist verführet sie /
 das sie wider jren Gott hurerey treiben. Oben auff den Bergen opffern
 sie / vnd auff den Hügeln reuchern sie / vnter den Eichen / Linden vnd
 Buchen / denn die haben feine schatten / Darumb werden ewre Töchter auch
 zu Huren / vnd ewre Breute zu Ehebrecherin werden. Vnd ich wils auch
 nicht weren / wenn ewre Töchter vnd Breute geschendet vnd zu Huren wer-
 den / weil jr einen andern Gottesdienst anrichtet mit den Huren / vnd
 opffert mit den Bübin / Denn das töricht Volck wil geschlagen sein.
- Vgl. Die heilige Schrift. S.853: Hosea. 4. 11-14.
 11. Hurerei, Wein und Most machen toll.
 12. Mein Volk fragt sein Holz, und sein Stab soll ihm predigen; denn der
 Hurerei=Geist verführt sie, daß sie wider ihren Gott Hurerei treiben.
 13. Oben auf den Bergen opfern sie, und auf den Hügeln räuchern sie, un-
 ter den Eichen, Linden und Buchen; denn die haben feinen Schatten. Darum
 werden eure Töchter auch zu Huren und eure Bräute zu Ehebrecherinnen
 werden.
 14. Und ich will's auch nicht wehren, wenn eure Töchter und Bräute ge-
 schändet und zu Huren werden, weil ihr einen andern Gottesdienst anrich-
 tet mit den Huren und opfert mit den Bübinnen. Denn das törichte Volk
 will geschlagen sein.
- 61)Vgl. V(4)59.
 62)Vgl. V(4)59.
- Vgl. Platon „Phaidros“ 275B: Werke(V(4)24). Bd.5. S.178/S.179(Deutsch).
 Οὐ δὲ γ', ὦ φίλε, ἐν τῇ τοῦ Διὸς τοῦ Δωδωναίου ἱερῇ δρυὸς λόγους ἔφησαν
 μαντικὸς πρῶτους γενέσθαι. ... (S.178)
 Sollen doch, o Freund, in des Zeus dodonäischem Tempel einer Eiche Reden
 die ersten prophetischen gewesen sein. ... (S.179)

g)„IDYLLISCHE WIRKLICHKEIT“ UND „SITTICHE GRÖSSE“

63)Grimm: Deutsches Wörterbuch. Bd.4. 2.Abt. 1877. Faksimile-Neudruck. Mün-
 chen. Deutscher Taschenbuch-Verlag. 1984. Bd.10. Sp.173.

in den lustgewohnten hain,
 wo in jener schatten nacht

ihm vielleicht die hirtin lacht. HAGEDORN

Vgl. Wieland „Musarion“(1768) V.1-4(I.Buch)/V.1387-88, V.1435-36(III.Buch):
 Werke. Meyers Klassiker-Ausgaben. 4 Bände. Leipzig/Wien. Bibliographisches
 Institut. 1900. Bd.1. S.223/S.263/S.264.

In einem Hain, der einer Wildnis glich
 Und nah' am Meer ein kleines Gut begrenzte,
 Ging Phantias mit seinem Gram und sich
 Allein umher; ...

3

Ein Hain, worin sich Amor gern verliert,
 Wo ernstes Denken oft mit leichtem Scherz sich gattet;

1387

Er ward in einer einz'gen Nacht
 Zum γυναι σεαυτόν in Chloens Arm gebracht;

1435

Vgl. Meyers Enzyklopädisches Lexikon in 25 Bänden. Mannheim. Bibliographisches Institut. Bd.7. 1973. S.467: Über „Eiche“.

Religions- und kulturgeschichtlich ist die E. von hervorragender Bedeutung. Sie galt v.a. bei indogerm. Völkern, aber auch bei den Japanern als heilig. Dem griech. Gott Zeus war in Dodona eine E. geweiht. Der Name der Dryaden (weibliche Baumgeister der Griechen) geht auf „dryās“ (=Eiche) zurück. ... Der jap. Schintoismus kennt einen speziellen E.gott (Kaschima no kami). E.nhaine waren als Kultstätten bei den indogerm. Völkern Europas weit verbreitet. Am bekanntesten jedoch ist die E. als hl. Baum des german. Gottes Donar (die Donar-E., vermutl. in Geismar bei Fritzlar, ließ Bonifatius 724 fällen). ... Außerhalb der religiösen Sphäre gilt die E. als Sinnbild der Stärke, heldenhafter Standhaftigkeit sowie als Sinnbild des Sieges.

60) Der neue Brockhaus. Bd.1. 1936. Leipzig. Brockhaus. S.646: Über „Eiche“. In der Volkskunde ist die E. das Sinnbild der Freiheit und Kraft. Bei vielen indogerman. Völkern und bes. bei den Germanen ist sie der am meisten verehrte Baum; ...

Vgl. Biblia Hebraica Stuttgartensia(V(4)2). S.677: אֲשֶׁר הָיָה לָהֶם כִּי יִבְשׁוּ מֵאֵלֶיךָ „Jesaia“ 1. 29)

Vgl. Hebräisches Handwörterbuch(V(4)48). S.29.
großer Baum, wie Eiche, Terebinthe, Palme ...

Vgl. Septuaginta(V(4)2). Vol.II. S.567: Isaias. 1. 29.
διότι αἰσχυνθήσονται ἐπὶ τοῖς εἰδώλοις αὐτῶν, ἃ αὐτοὶ ἠβούλοντο, ...

Vgl. Vulgata(V(4)2). Tomus II. S.1098: Isaias. 1. 29.
confundentur enim ab idolis quibus sacrificaverunt ...

Vgl. Biblia Germanica 1545(V(4)2). II.Teil. S.6: Jesaia. 1. 29.
Denn sie müssen zuschanden werden vber den Eichen / da jr lust zu habt / vnd schamrot werden vber den Garten / die jr erwelet.

Vgl. Die heilige Schrift(V(4)2). S.660: Jesaja. 1. 29.
29. Denn sie müssen zu Schanden werden über den Eichen, daran ihr Lust habt, und schamrot werden über den Gärten, die ihr erwählt,

Vgl. Biblia Hebraica Stuttgartensia. S.995: תַּחַת אֵלֶיךָ וְלִבְנֵה וְאֵלֶיךָ כִּי טֹב צִלָּהּ „Hosea“ 4. 13)

Vgl. Septuaginta. Vol.II. S.493: Osee. 4. 13.
ἐπὶ τὰς κορυφὰς τῶν ὀρέων ἐθυσίαζον καὶ ἐπὶ τοὺς βουνοὺς ἔθυσον, ὑποκάτω δρυὸς καὶ λεύκης καὶ δένδρου συσκιάζοντος, ὅτι καλὸν σκέπη. διὰ τοῦτο ἐκπορνεύουσιν αἱ θυγατέρες ὑμῶν, καὶ αἱ νύμφαι ὑμῶν μοιχεύουσιν.

Vgl. Vulgata. Tomus II. S.1377: Osee. 4. 11-14.

11 fornicatio et vinum et ebrietas aufert cor

12 populus meus in ligno suo interrogavit
et baculus eius adnuntiavit ei
spiritus enim fornicationum decepit eos
et fornicati sunt a Deo suo

13 super capita montium sacrificabant
et super colles accendebant thymiana
subtus quercum et populum et terebinthum quia bona erat umbra eius
ideo fornicabuntur filiae vestrae
et sponsae vestrae adulterae erunt

14 non visitabo super filias vestras cum fuerint fornicatae
et super sponsas vestras cum adulteraverint
quoniam ipsi cum meretricibus versabantur
et cum effeminatis sacrificabant
et populus non intellegens vapulabit

- 50) Hölderlin „Stuttgart“ 2.Str. V.34: „Eichbaum“ (StA. Bd.2. S.87: V(4)45)
(Oeuvres de la Pléiade. S.805: „chêne“ (Jaccottet, Philippe))
Vgl. „Mnemosyne“ 2.Fassung. 1.Str. V.11: StA. Bd.2. S.195.
Und es tönet das Blatt und Eichbäume wehn dann ...
Et la feuille bruit alors et, près des glaciers, les chênes
Agitent leurs rameaux. („Mnemosyne“ Deuxième version. Traduction par
Roud, Gustave: Oeuvres de la Pléiade. S.879)
Vgl. „Die Eichbäume“ (StA. Bd.1. S.201).
51) Goethe „Faust“ V.7822: Werke(V(4)14). Bd.3. S.237.
Von hoher Eichenkraft umlaubt!
Vgl. „die bequeme Lust an einer idyllischen Wirklichkeit“ (V(4)28: V(4)64)
Dort hinter der Wiese hebt sich der strauchichte Hügel sanft empor, wo
unter schlanken Eichen das Mondlicht und dunkle Schatten durch einander
hüpfen, dort eilt der riesende Bach, ich hör, ich höre sein Rauschen, ...
(Geßner, Salomon „Die Nacht“ 1753: Idyllen. Reclam-Universal-Bibliothek.
Stuttgart. 1973. S.8)
- f) „TAUSENDJÄHRIGE EICHEN“
52) Hölderlin „Auf einer Haide geschrieben“ V.12-13: StA. Bd.1. S.29.
Jedesmal wandelt an meinen tausendjährigen Eichen
Mit entblößtem Haupt der Jäger vorüber, ...
53) Hölderlin „Die Tek“ V.29/V.39: StA. Bd.1. S.55/S.56.
Mein die trozende Felsen? die tausendjährige Eichen? (S.55: V.29)
Ewiger, als mein Nahme, die tausendjährige Eichen! (S.56: V.39)
Vgl. „La Tek“ v.29. Traduction par Jaccottet, Philippe: Oeuvres de la Plé-
iade. S.8.
Miens ces rocs insolents? ces chênes millénaires?
54) „Die Tek“ V.39: StA. Bd.1. S.56(V(4)53).
55) Campe, Joachim: Wörterbuch der Deutschen Sprache. Braunschweig. 1807-13.
Faksimile-Neudruck. Hildesheim. Olms/Sansyusya. 1969-70. Bd.1(1807). S.826.
Die Eiche, ... , oder der Eichbaum. 1) Ein bekannter sehr nutzbarer
Baum, der eine große Höhe und Dicke, und ein hohes mehr als tausendjäh-
riges Alter erreicht, ein gelbliches oder bräunliches festes und schwe-
res Holz hat und in den kältern Ländern wächst (Quercus L.). ...
56) Encyclopaedia Britannica auf japanisch. Bd.4. 1972. S.267.
57) Herder-Lexikon. Pflanzen. Freiburg. Herder. 1975. S.54.
Eiche: 1 Stiel- oder Sommer-E. (Quercus robur), in ganz Europa verbreitet
(die sog. alten E.n); 2 Trauben-, Winter- oder Stein-E. (Quercus petraea)
mit kleinerem Verbreitungsgebiet; 3 Flaum-E. (Quercus pubescens) mit
flaumfilzigen Blättern; 4 Rot-E. (Quercus borealis), raschwüchsig mit
herbstl. Rotfärbung; 5 Kork-E. (Quercus suber), eine immergrüne, waldbil-
dende E.
58) Langenscheidts Handwörterbuch. Lateinisch-Deutsch. Hrg.: Menge, Güt-
ling, Pertsch u.a.m. Zürich/Wien/München/Berlin. 1971/1983. S.553.
röbur, ... 1. a) Kernholz, bsd. Eichenholz ... 2. / Stärke, Kraft,
Festigkeit ...
59) Beitzl / Klaus: Wörterbuch der deutschen Volkskunde. 3.Aufl. Stuttgart.
Kröner. 1974. S.160.
Eiche (Quercus robur). In vorchristl. Zeit gehört die E. bei den Germ.
und anderen indogerm. Völkern zu den am meisten verehrten Bäumen des
Waldes. Berühmt ist z.B. die Donar-E. bei Geismar, die kultische Vereh-
rung genoß und im Jahre 725 von Bonifatius gefällt wurde.

- Begeisterung, immer nötig hat. Alles dies aber, was ich hier gesagt habe, gilt nur hauptsächlich von dem Morgenlande, dem eigentlichen Vaterlande der Menschheit, Sprache, Dichtkunst und daher auch der Begeisterung, von woher eigentlich wie vom Urstamme sich alles in die übrigen Erdgegenden und Zonen nur fortgepflanzt hat und eingepfropft worden ist.
- ... die Menschen und Künste erhielten hier die Kraft, die sie in den kältesten Wüsten und Regionen noch immer nach vielen Jahrhunderten erhält und ihnen feste Wurzeln fassen läßt: die schönen Gegenden, die Wärme und Heiterkeit des selten bewölkten Himmels bildeten sie, nährten sie.
- ... Hier entstand dann jenes göttliche Feuer — — —
- Vgl. „Stuttgart“ v.7-8/v.13-18//v.27-28/v.33-36//v.75-78: OEuvres de la Pléiade. Traduction par Jaccottet, Philippe. S.804/S.805/S.806.
- L'air maintenant s'emplit d'heureux, la ville et les bosquets
Autour accueillent les joyeux enfants du ciel. 8
-
- Mais eux aussi, les voyageurs, sont bien guidés, ils ont
Des couronnes en suffisance, le chant, le bourdon
Tout orné de corymbes et de feuillages, avec les ombres 15
Des pins: de bourg en bourg c'est fête, d'heure en heure.
Et tels des chars qu'entraîneraient des fauves, les montagnes
Procèdent, et le chemin même tarde et se hâte.
-
- Qu'un autre soin ici te presse: fêter de l'automne S.804
L'ancien rite, avec nous noblement refleuri! S.805 28
-
- C'est ce que signifie la table auguste où, sous le chêne,
Pareils à des abeilles, nous chantons ensemble,
Et aussi bien le bruit des coupes: ainsi l'âme effrénée 35
Des adversaires, le choeur la force à l'unisson.
-
- Déjà sous sa couronne de feuillage au loin, la ville S.805
Vantée lève sa face claire de prêtresse. S.806 75
Souveraine, elle tend le cep de vigne et le sapin
Jusqu'en la pourpre bienheureuse des nuages.
- 46) Septuaginta(V(4)2). Vol.I. S.23: Genesis. 18. 1. „δρῦς“
ὁ θεὸς πρὸς τῇ δρῦϊ τῇ Μαμβρη ... (V(4)9).
- 47) Menge-Güthling: Langenscheidts Großwörterbuch. Griechisch-Deutsch. 22. Aufl. 1973. S.191.
δρῦς, ὕος, ἡ Waldbaum, Baum, insb. Eiche, auch Fichte; meton. Holz.
- 48) Gesenius, Buhl u.a.m.: Hebräisches und Aramäisches Handwörterbuch über das Alte Testament. Unveränderter Neudruck der 1915 erschienenen 17.Auflage. Heidelberg/Göttingen/Berlin. Springer. 1962. S.41.
אלון ... — Identisch damit sind wahrsch.
die Formen, die d. Mass. אלון
תְּרוּמָה וְאַלֹן: „Buchen und Eichen“: תְּרוּמָה וְאַלֹן
(Isaia. 44. 14)
- 49) אלון בְּכוֹרִים (Klageiche: Eiche des Weinens): Biblia Hebraica Stuttgartensia(V(4)2). S.56. Genesis. 35. 8.
Vgl. Biblia Germanica 1545(V(4)2). I.Teil. S.22: Die heilige Schrift(V(4)2). S.42: „die Klageiche“(Genesis. 35. 8).
DA starb Debora der Rebeca amme / vnd ward begraben vnter BethEl / vnter der Eichen / vnd ward genennet die Klageiche. (I.Teil. S.22)
Da starb Debora, der Rebekka Amme, und ward begraben unterhalb Beth=El unter der Eiche; und die ward genannt die Klageiche. (S.42)

Diß der Pokale Klang, und darum zwinget die wilden
Seelen der streitenden Männer zusammen der Chor.

35

.....

S.87
S.88

75

Denn mit heiligem Laub umkränzt erhebet die Stadt schon
Die gepriesene, dort leuchtend ihr priesterlich Haupt.
Herrlich steht sie und hält den Rebenstab und die Tanne
Hoch in die seeligen purpurnen Wolken empor.

Vgl. Haller „Versuch Schweizerischer Gedichte“ 1.Auf1. 1732. „Die Alpen“
(1729) 10.Str. V. 91-100: Deutsche National-Litteratur. Bd.41. 2.Abt.(V
(4)82). S.19-20.

Wann durch die schwüle Luft, gedämpfte Winde streichen
Und Titans reiner Strahl der Jugend Adern schwellt;
So sammlet sich ein Dorff im Schatten breiter Eichen,
Wo Kunst und Anmut sich dem Volck zur Schau stellt.
Hier ringt ein kühnes Paar, vermählt den Ernst dem Spiele,
Umwindet Leib um Leib, und schlinget Hafft um Hafft.
Dort fliegt ein schwerer Stein nach dem gesteckten Ziele
Von starker Hand beseelt durch die zertrennte Luft;
Den aber führt die Luft was edlers zu beginnen

95

S.19
S.20

100

Vgl. Reclam-Haller: Die Alpen und andere Gedichte. Stuttgart. Reclam-Uni-
versal-Bibliothek. 1965. S.7: „Die Alpen“ 11.Str. V.101-110.

Wann durch die schwüle Luft gedämpfte Winde streichen
Und ein begeistert Blut in jungen Adern glüht,
So sammlet sich ein Dorf im Schatten breiter Eichen,
Wo Kunst und Anmut sich um Lieb und Lob bemüht.
Hier ringt ein kühnes Paar, vermählt den Ernst dem Spiele,
Umwindet Leib um Leib und schlinget Huft um Huft.
Dort fliegt ein schwerer Stein nach dem gesteckten Ziele,
Von starker Hand besellt, durch die zertrennte Luft.
Den aber führt die Lust, was Edlers zu beginnen,
Zu einer muntern Schar von jungen Schäferinnen.

105

110

Vgl. Novalis „Von der Begeisterung“ um 1788-90: Schriften(V(4)109). Bd.2.
S.90-91.

Der erste Wind, das erste Lüftchen, das dem Ohre des Wilden hörbar durch
den Gipfel der Eiche sauste, brachte gewiß demselben in seinem jungen,
unausgebildeten, allen äußerlichen Eindrücken noch offenen Busen eine Be-
wegung, einen Gedanken von dem Dasein eines mächtigen Wesens hervor, der
sehr nahe an die Begeisterung grenzte und wo ihm nichts als Worte fehl-
ten, um sein volles, überfließendes Gefühl durch sie ausströmen und es
gleichsam den leblosen Gegenständen um ihn mitempfinden zu lassen, da er
jetzt ohne Sprache gewiß unwillkürlich auf die Kniee sank und durch seine
stumme Bewegung verriet, daß Gefühle an Gefühle in seinem Herzen sich
drängten. Wie sich allmählich die Sprache aus- (S.90/S.91) zubilden
anfang und nicht mehr bloß in Naturtönen stammelte, sondern mit vollem
Strome der Jugendfülle des menschlichen Geschlechts dahinbrauste und je-
der Ton, jede Stimme derselben fast Empfindung und durch abstrakte Be-
griffe und Erfahrung noch nicht ausgebildet und verfeinert war, da ent-
stand zuerst die Dichtkunst, die Tochter des edelsten Ungestüms der er-
habensten und stärksten Empfindungen und Leidenschaften, die sich zwar
nachher wie ein Chamäleon nach den Organisationen der verschiedenen Erd-
stiche, Zeiten und Charaktere umgebildet, aber in ihrer Urbedeutung, zu
ihrer größten Stärke, Zauberei und Wirkung auf die Gemüter, der hohen

- 43) „Brod und Wein“ 3.Str. V.49-54: StA. Bd.2. S.91.
 Drum an den Isthmos komm! dorthin, wo das offene Meer rauscht
 Am Parnas und der Schnee delphische Felsen umglänzt, 50
 Dort ins Land des Olympos, dort auf die Höhe Cithärons,
 Unter die Fichten dort, unter die Trauben, von wo
 Thebe drunten und Ismenos rauscht im Lande des Kadmos,
 Dorthin kommt und zurück deutet der kommende Gott.
 Vgl. „Le Pain et le vin“ v.49-54: OEuvres de la Pléiade. S.810.
 Viens aux rives de l'Isthme, oh viens! Là-bas où la rumeur immense de
 la mer
 Monte vers le Parnasse, où la neige scintille en diadème aux rocs
 delphiques,
 Là-bas dans le pays de l'Olympe, à la cime du Cithéron là-bas,
 Là-bas parmi les pins, parmi les pampres d'où voici Thèbes
 Et le fleuve Isménos bruire, et la fontaine de Dircé,
 C'est là d'où vient, c'est là ce que désigne à son tour le dieu proche!
- 44) „Brod und Wein“ 9.Str. V.143-150: StA. Bd.2. S.94-95.
 Ja, sie sagen mit Recht, er söhne den Tag mit der Nacht aus,
 Führe des Himmels Gestirn ewig hinunter, hinauf, 145
 Allzeit froh, wie das Laub der immergrünenden Fichte,
 Das er liebt, und der Kranz, den er von Epheu gewählt,
 Weil er bleibt und selbst die Spur der entflohenen Götter
 Götterlosen hinab unter das Finstere bringt. S.94
 Was der Alten Gesang von Kindern Gottes geweissagt, S.95
 Siehe! wir sind es, wir; Frucht von Hesperien ists! 150
 Vgl. „Le Pain et le vin“ v.143-150: OEuvres de la Pléiade. S.814.
 Oui, leur parole est vraie: il est celui qui réconcilie
 Le jour avec la nuit, guide éternel du chœur des astres alternés;
 Sa joie est de tout temps, pareille à la verdure impérissable 145
 Des pins qu'il aime, à ce lierre aussi qu'il a choisi pour sa couronne,
 Car il demeure, apportant lui-même à ceux qui se lamentent
 Sans dieux dans la ténèbre un vestige des dieux enfuis.
 Ce qu'ont prédit des enfants de Dieu les chants antiques,
 Vois! nous le sommes, nous! Ce sont là les fruits de l'Hespérie! 150
- 45) Hölderlin „Stuttgart“ 1.Str. V.7-8/V.13-18 // 2.Str. V.27-28/V.33-36 //
 5.Str. V.75-78: StA. Bd.2. S.86/S.87/S.88.
 Voll ist die Luft von Fröhlichen jetzt und die Stadt und der Hain ist
 Rings von zufriedenen Kindern des Himmels erfüllt. 8

 Aber die Wanderer auch sind wohlgeleitet und haben
 Kränze genug und Gesang, haben den heiligen Stab
 Vollgeschmückt mit Trauben und Laub bei sich und der Fichte 15
 Schatten; von Dorfe zu Dorf jauchzt es, von Tage zu Tag,
 Und wie Wagen, bespannt mit freiem Wilde, so ziehn die
 Berge voran und so trägt und eilet der Pfad.

 S.86
 Jetzt ist Anderes Noth, jetzt komm' und feire des Herbstes S.87
 Alte Sitte, noch jetzt blühet die Edle mit uns. 28

 Diß bedeutet der Tisch, der geehrte, wenn, wie die Bienen,
 Rund um den Eichbaum, wir sitzen und singen um ihn,

Vgl. Takahashi, Katsumi: Hellas und Hesperien bei Hölderlin — „Seeliges Griechenland"(Forschungsberichte der Universität Kōchi fürs Jahr 1984/1985 /1986. Vol.33/Vol.34/Vol.35. Geisteswissenschaften. S.13-72/S.1-72/S.1-66). (II) Das klassische Griechentum und das abendländische Christentum. (2)Der Tod der Tragödie und ihre Wiedergeburt(Vol.33. S.44-47)/(3)„Das große Geschick"(Vol.33. S.48-51)/(4)„Die schrecklichfeierlichen Formen"(Vol.33. S.51-58).

35)„Hellas und Hesperien bei Hölderlin"(V(4)34). (III)„Gott der Mythe". (1) „Innigerer Flug"(Vol.34. S.22-24).

Vgl. Kleist, Ewald Christian „Der Frühling"(1749) V.1-10 / „Der Frühling"(1756) V.1-5: Sämtliche Werke. Stuttgart. Reclam-Universal-Bibliothek. 1971. S.10/S.11.

Der Frühling. 1749.

Empfangt mich heilige Schatten! ihr Wohnungen süßer Entzückung
Ihr hohen Gewölbe voll Laub und dunkler schlafender Lüfte!
Die ihr oft einsahen Dichtern der Zukunft Fürhang zerrissen
Oft ihnen des heitern Olympos azurne Thoren eröffnet
Und Helden und Götter gezeigt; Empfangt mich füllet die Seele 5
Mit holder Wehmuth und Ruh! O daß mein Lebensbach endlich
Von Klippen da er entsprang in euren Gründen verflösse!
Führt mich in Gängen voll Nacht zum glänzenden Throne der Tugend
Der um sich die Schatten erhellt. Lehrt mich den Wiederhall reitzen
Zum Ruhm der verjüngten Natur. Und ihr, ihr lachenden Wiesen! 10

Der Frühling, ein Gedicht. 1756.

Empfang mich, schattigter Hayn, voll hoher grüner Gewölbe!
Empfang mich! fülle mit Ruh und holder Wehmuth die Seele!
Führ mich in Gängen voll Nacht zum glänzenden Throne der Tugend,
Der um sich die Schatten erhellt. Lehr mich den Wiederhall reizen
Zum Ruhm verjüngter Natur. Und ihr, ihr lachenden Wiesen!

36)Hölderlin „Über Religion": StA. Bd.4. S.281.

Gott der Mythe. ... So wäre alle Religion ihrem Wesen nach poetisch.

37)Hölderlins Christusbild in „Brod und Wein": „Hellas und Hesperien bei Hölderlin"(V(4)36). (II) Das klassische Griechentum und das abendländische Christentum. (7)Die Antike als Idee(Vol.34. S.7-20) / (III)„Gott der Mythe". (10)„Die tiefste Innigkeit"(Vol.35. S.2-14).

38)Nietzsche „Die Geburt der Tragödie, / Oder: / Griechentum und Pessimismus"(1886): op.cit. Bd.1. S.3.

39)„Brod und Wein" I.Str. V.9-10(V(4)1).

40)Takahashi, Katsumi: Über die erste Strophe von Hölderlins „Brod und Wein": „Heilige Nacht' Dritter Teil: „Abgeschiedenheit" und „Brunnen"(Forschungsberichte der Universität Kōchi fürs Jahr 1987. Vol.36. Geisteswissenschaften. S.15-42. 1987.

41)„Brod und Wein" I.Str. V.8(V(4)1).

e)„DIE EICHE WEHT"

42)Tacitus „Germania"(V(4)22) Kap.9: Reclam(V(4)22). S.16: Tacite „La Germanie". Texte établi et traduit par Jaques Perret. Collection des Universités de France. Paris. Les Belles Lettres. Troisième Tirage. 1967. S.76.

lucos ac nemora consecrant(S.16/S.76)

Sie weihen ihnen vielmehr Lichtungen und Haine,(Reclam. S.17: Woyte)
ils leur consacrent des bois et des bocages(S.76: Perret)

hervorgewachsen: in deren Choral die Zukunftsweise der deutschen Musik zuerst erklang. So tief, muthig und seelenvoll, so überschwänglich gut und zart tönte dieser Choral Luther's, als der erste dionysische Lockruf, der aus dichtverwachsenem Gebüsch, im Nahen des Frühlings, hervordringt. Ihm antwortete in wetteifendem Wiederhall jener wehevoll übermüthige Festzug dionysischer Schwärmer, denen wir die deutsche Musik danken — und denen wir die Wiedergeburt des deutschen Mythos danken werden!

33) „Die Geburt der Tragödie“ Kap.23: op.cit. Bd.1. S.143(V(4)32).

Vgl. Luther, Martin „Dictata super Psalterium. 1513-16“: Werke. Kritische Gesamtausgabe (Weimarer Ausgabe). Weimar. Hermann Böhlau. Bd.3/Bd.4. 1885/1886. Unveränderter Abdruck. Weimar. Hermann Böhlau Nachfolger. 1966/1966.

Psalmus XVIII. 11: op.cit. Bd.3. S.124.

Quia sic est deus absconditus et incomprehensibilis. Tercio potest intelligi mysterium Incarnationis. Quia in humanitate absconditus latet, que est tenebre eius, in quibus videri non potuit sed tantum audiri.

Psalmus LXXXV. 8: op.cit. Bd.4. S.9.

Audiam: quia auditui nostro ostensa est misericordia ista et donatum salutare istud dei, nondum autem visui. ...

Quid loquatur: quia verbum dei non nisi auditu percipitur. Natura enim verbi est audiri. ...

In me. In hoc tangitur differentia euangelii et legis. Quia lex est verbum Mosi ad nos, Euangelium autem verbum dei in nos. ...

Psalmus CXIX. 105: op.cit. Bd.4. S.356.

Nam oculos oportet captivari in obsequium Christi et solo verbo duci, quod auribus percipitur, oculis non videtur. ... Et tamen est lucerna, quia pedes dirigit et affectum, non intellectum requirit fides.

34) „Brod und Wein“ 4.Str. V.61-64(V(4)13).

Vgl. Takahashi, Katsumi: Eine Betrachtung über das „seelige Griechenland“ in Hölderlins „Brod und Wein“ — „das große Geschik“ als Höhepunkt(Forschungsberichte der Universität Kōchi fürs Jahr 1978. Vol.27. Geisteswissenschaften. 1979. S.7-42). S.23-28: (3) „das große Geschik“. (b) in bezug auf Harrison's Erklärung. S.23.

Die Mitte der vierten Strophe(V.61-64) von „Brod und Wein“ hat wohl Bezug auf die beiden Götter: „Zeus“ und „Apollon“. Aber es geht dabei ... um „jenes Naturhafte, das die Griechen der großen Zeit das δεινόν und δεινότατον, das Furchtbare nannten“(Heidegger „Nietzsche“ 1961. Bd.1. S. 151). ... In „Hölderlin and Greek Literature“(Oxford. 1975) scheint mir R.B.Harrison dieses Wesentliche und das wesentliche Symbol zu vernachlässigen. Er hätte „the Spirit of Greece“(S.84) gerade im wesentlichen Symbol: „das große Geschik“ sehen sollen. Jedenfalls erklärt er die V.59-64 folgendermaßen(S.104f.): In the following strophes of 'Brod und Wein' Apollo and Zeus continue to provide Hölderlin with the imagery with which he writes of 'seeliges Griechenland'. In the fourth strophe he conjures up a vision of Greece in a series of questions. The first third of strophe, itself embedded in the triadic structure of the elegy as a whole, ends with a quite general picture of Greek religion: Aber die Thronen, wo? ... (S.104/S.105) ... Hölderlin, however, asserts his belief in the divinity of nature with the imagery of Horace, who professed to revise his sceptical attitude when he heard how 'Diespiter ... per purum tonantes / egit equos volucremque currum' („Carmina“ I.34. 5ff.). ...

- 25) Nietzsche „Die Geburt der Tragödie aus dem Geiste der Musik“ (1. Aufl. 1872/2. Aufl. 1874): Werke. Kritische Gesamtausgabe. Berlin. Gruyter. 1972. III. Abteilung. Bd. I. S. 17.
- 26) „Die Geburt der Tragödie“ (V(4)25) Kap. 11: op.cit. Bd. I. S. 71.
Mit dem Tode der griechischen Tragödie dagegen entstand eine ungeheure, überall tief empfundene Leere; wie einmal griechische Schiffer zu Zeiten des Tiberius an einem einsamen Eiland den erschütternden Schrei hörten „der grosse Pan ist todt“: so klang es jetzt wie ein schmerzlicher Klage-ton durch die hellenische Welt: „die Tragödie ist todt! Die Poesie selbst ist mit ihr verloren gegangen! ...
- 27) „Die Geburt der Tragödie“ (V(4)25) Kap. 17: op.cit. Bd. I. S. 111.
diese Heiterkeit ist ein Gegenstück zu der herrlichen „Naivetät“ der älteren Griechen, wie sie, nach der gegebenen Charakteristik, zu fassen ist als die aus einem düsteren Abgrunde hervorwachsende Blüthe der apollinischen Cultur, als der Sieg, den der hellenische Wille durch seine Schönheitsspiegelung über das Leiden und die Weisheit des Leidens davont trägt. Die edelste Form jener anderen Form der „griechischen Heiterkeit“, der alexandrinischen, ist die Heiterkeit des theoretischen Menschen: ...
- 28) „Die Geburt der Tragödie“ (V(4)25) Kap. 19: op.cit. Bd. I. S. 121.
Es liegt also auf den Zügen der Oper keinesfalls jener elegische Schmerz eines ewigen Verlustes, vielmehr die Heiterkeit des ewigen Wiederfindens, die bequeme Lust an einer idyllischen Wirklichkeit, ... Wer die Oper vernichten will, muss den Kampf gegen jene alexandrinische Heiterkeit aufnehmen, ...
- 29) „Die Geburt der Tragödie“ (V(4)25) Kap. 19: op.cit. Bd. I. S. 123-124.
Vor der deutsche Musik aber mag (S. 123/S. 124) sich der Lügner und Heuchler in Acht nehmen: denn gerade sie ist, inmitten aller unserer Cultur, der einzig reine, latere und läuternde Feuergeist, von dem aus und zu dem hin, wie in der Lehre des grossen Heraklit von Ephesus, sich alle Dinge in doppelter Kreisbahn bewegen: alles, was wir jetzt Cultur, Bildung, Civilisation nennen, wird einmal vor dem untrüglichen Richter Dionysus erscheinen müssen. Erinnern wir uns sodann, wie dem aus gleichen Quellen strömenden Geiste der deutschen Philosophie, durch Kant und ...
- 30) „Die Geburt der Tragödie“ (V(4)25) Kap. 19: op.cit. Bd. I. S. 123.
Aus dem dionysischen Grunde des deutschen Geistes ist eine Macht emporgestiegen, die ... , die deutsche Musik, wie wir sie vornehmlich in ihrem mächtigen Sonnenlaufe von Bach zu Beethoven, von Beethoven zu Wagner zu verstehen haben. Was vermag die erkenntnisslüsterne Sokratik unserer Tage günstigsten Falls mit diesem aus unerschöpflichen Tiefen emporsteigenden Dämon zu beginnen? ...
- 31) „Die Geburt der Tragödie“ Kap. 20: op.cit. Bd. I. S. 126.
Wenn demnach ... , wenn der „Journalist“, der papierne Slave des Tages, in jeder Rücksicht auf Bildung den Sieg über den höheren Lehrer davont tragen hat, ... — in welcher peinlichen Verwirrung müssen die derartig Gebildeten einer solchen Gegenwart jenes Phänomen anstarren, das nur etwa aus dem tiefsten Grunde des bisher unbegriffnen hellenischen Genius analigisch zu begreifen wäre, das Wiedererwachen des dionysischen Geistes und die Wiedergeburt der Tragödie? ...
- 32) „Die Geburt der Tragödie“ Kap. 23: op.cit. Bd. I. S. 142-143.
Alle unsere Hoffnungen strecken sich vielmehr sehnsuchtsvoll nach jener Wahrnehmung aus, dass unter diesem unruhig auf und nieder zuckenden Culturleben und Bildungskrampe eine herrliche, innerlich gesunde, uralte Kraft verborgen (S. 142/S. 143) liegt, die freilich nur in ungeheuren Momenten sich gewaltig einmal bewegt und dann wieder einem zukünftigen Erwachen entgegenträumt. Aus diesem Abgrunde ist die deutsche Reformation

Das Auge des Geistes fängt erst an, scharf zu sehen, wenn das leibliche von seiner Schärfe schon verlieren will, und davon bist du noch weit entfernt. — ...

Vgl. Augustinus „Confessiones“ Liber XI. III. 5: Bibliotheca Teubneriana. edidit M. Skutella(1934)/ H. Jurgens/ W. Schaub. Stuttgart. Teubner. 1969. S.266: „Confessiones/Bekenntnisse (Lateinisch/Deutsch) übers. v. Bernhart, Josef. München. Kösel. 1955. S.608/S.609(Deutsch).

Audiam et intellegam, ...

Laß mich vernehmen und verstehen, wie Du »im Anfang Himmel und Erde erschaffen hast«.

Vgl. „Confessiones“ Liber VII. X. 16: Bibliotheca Teubneriana. S.140: Confessiones/Bekenntnisse. S.334/S.335(Deutsch).

intravi et vidi qualicumque oculo animae meae supra eundem oculum animae meae, supra mentem meam lucem incommutabilem, ...

Ich trat ein und schaute mit dem Auge meiner Seele, so schwach es war, hoch über diesem selben Auge meiner Seele, hoch über meinem Geist das unwandelbare Licht, ...

Vgl. Augustinus „Confessiones“ Liber VII. X. 16: Bibliotheca Teubneriana. S.141: Confessiones/Bekenntnisse. S.336/S.337(Deutsch).

... et cum te primum cognovi, tu assumisti me, ut viderem esse, quod viderem, et nondum me esse, qui viderem. et reverberasti infirmitatem aspectus mei radians in me vehementer, et contremui amore et horrore: ... et clamasti de longinquo: immo vero ego sum qui sum. et audivi, sicut auditur in corde, ...

... Und sobald ich Deiner inne ward, da nahmst Du mich hin, damit ich sähe, daß etwas sei, was ich sehen sollte, aber ich noch nicht der wäre, der es zu sehen vermöchte. Und Du schlugest, blendhell in mich strahlend, zurück meines Auges Unkraft, und ich erschauerte in Liebe und Erschrecken. ... Und Du riefest aus der Ferne: »Nein! Ich bin es, der Ich bin.« Und ich hörte es, so wie man mit dem Herzen hört, ...

Vgl. Philon „De Abrahamo“ XXIX. §.149-153: Loeb-Classical-Library. London. Heinemann. Philo VI. 1935, Nachdruck 1950, 1959, 1966. S.76/S.78: Werke. Breslau. Marcus. 1909. Photomechanischer Nachdruck. Berlin. Gruyter. 1962. Bd.1. Ueber Abraham, Übersetzt von J. Cohn. S.127-128.

... Tierischer und sklavischer Natur sind drei von den fünf Sinnen, der Geschmack, der Geruch und der Tastsinn, von denen die gefräßigsten und geilsten Tiere hauptsächlich beherrscht sind; denn den ganzen Tag und die ganze Nacht hindurch füllen sie sich entweder mit Nahrung an oder sie folgen ihrer Brust. Zwei Sinne aber sind von feinerer Art und haben die Führerrolle, das Gehör (ἀκοή) und das Gesicht (ὄρασις); nur sind die Ohren langsamer und gewissermaßen (S.127/S.128) weiblicher als die Augen, die kühn zu den sichtbaren Dingen vordringen und nicht erst abwarten, bis diese sie erregen, sondern ihnen vorher entgegenzueilen und sie im Gegenteil in Bewegung zu setzen suchen. Das Ohr (ἀκοή) sollte also, weil es langsam und weiblicher ist, den zweiten Rang einnehmen, einen besonderen Vorzug aber sollte das Auge (ὄρασις) haben; denn Gott erklärte dieses für den König der übrigen Sinne und setzte es über sie alle, und da er ihm gleichsam auf der Burg seinen Sitz anwies, machte er es am meisten der Seele (ψυχή) verwandt. ... (S.76/S.78) ... So kann man kurz sagen, dass das Auge mit höchster Kunstfertigkeit als ein Abbild der Seele geschaffen ist, dass es wie in einem Spiegel ein deutliches Bild von der Seele gibt, die von selbst ihrer Natur nach nicht sichtbar ist. ...

... Die Philosophie will den Inhalt, die Wirklichkeit der göttlichen Idee erkennen und die verschmähte Wirklichkeit rechtfertigen. Denn die Vernunft ist das Vernehmen des göttlichen Werkes.

22) Nordal, Sigurdur: Völuspá. Reykjavík. 1923 (Völvens Spådom, udgivet og tolket af S. Nordal, fra islandsk ved Hans Albrectsen. København. 1926).

1. Hljóðs bið ek allar helgar kindir, meiri ok minni mögu Heimdallar; ... (Ozaki, Kazuhiko: Grundlaget af den Nordiske Verdensanskuelse i VÖLUSPÁ; Bulletin der geistesgeschichtlichen Institut der Universität Meyiji. Bd.20. 1981/Bd.21. 1982 // Forschungsberichte der Kyōyō-Fakultät der Universität Meyiji. Bd.170. Bulletin. Bd.20. S.5)

Vgl. Tacitus, Publius Cornelius (um 55-um 120) „Germania“ (Lateinisch/Deutsch) Leipzig. Reclam-Universal-Bibliothek. Bd.726. 7. (2. zweisprachige) Auflage. 1976. S.20.

silentium per sacerdotes (Kap.11)

Die Priester, ... , gebieten Ruhe (S.21)

(Übers. v. Curt Woyte)

23) Hölderlin „Deutscher Gesang“ V.15-20: StA. Bd.2. S.202.

dann sitzt im tiefen Schatten,

15

Wenn über dem Haupt die Ulme säuselt,

Am kühlathmenden Bache der deutsche Dichter

Und singt, wenn er des heiligen nüchternen Wassers

Genug getrunken, fernhin lauschend in die Stille,

Den Seelengesang.

20

Vgl. „Chant allemand“ (Traduction par Fédier, François) v.15-20: OEuvres de la Pléiade. S.883.

alors est assis dans l'ombre profonde,

15

Quand par-dessus la tête l'orme murmure,

Au ruisseau qui exhale la fraîcheur, le poète allemand

Et chante, quand il a de l'eau saintement sobre

Assez bu, écoutant au loin dans le calme,

Le chant de l'âme.

20

d) „AUGE DER SEELE“ UND „SEELENGESANG“

24) Boman, Thorleif „Das hebräische Denken im Vergleich mit dem Griechischen“ Göttingen. Vandenhoeck & Ruprecht. 5. Aufl. 1968. S.228.

Das griechische Element in Philons Denken kommt nicht zuletzt darin zum Ausdruck, daß, wo er in seinem Bibeltext auf ein ausdrückliches Reden Gottes zu den Ohren der Menschen stößt, er sofort bemüht ist, das Reden Gottes zu eliminieren und an die Stelle des Hörens der Menschen ein Schauen, und zwar ein Schauen durch das Auge der Seele treten zu lassen. Die Verwandlung der Ohren in Augen und weiter in Augen der Seele ist ein bei Philon öfters auftretendes Motiv; ...

Vgl. Platon „Politeia“ 533C-D: Werke auf der Textgrundlage der „OEuvres complètes (Collection des Universités de France)“ (Paris. Les Belles Lettres. 1955-74) Darmstadt. Wissenschaftliche Buchgesellschaft. 1971-81. Bd.4. S.

612/S.613 (Deutsch: Schleiermacher, Friedrich Daniel Ernst).

ἡ διαλεκτικὴ μέθοδος μόνη ... τὸ τῆς ψυχῆς ὄμμα ... ἀνάγει ἄνω, ...

Nun aber, sprach ich, geht die dialektische Methode allein auf diese Art, alle Voraussetzungen aufhebend, gerade zum Anfange selbst, damit dieser fest werde, und das in Wahrheit in barbarischem Schlamm vergrabene Auge der Seele zieht sie gelinde hervor und führt es aufwärts, ...

Vgl. Platon „Sophistes“ 254A: Werke. Bd.6. S.350/S.351 (Deutsch).

τὰ γὰρ τῆς τῶν πολλῶν ψυχῆς ὄμματα ...

Denn die Geistesaugen der meisten sind in das Göttliche ausdauernd hineinzuschauen unvermögend.

Vgl. Platon „Symposium“ 219A: Werke. Bd.3. S.374/S.375 (Deutsch).

Ἡ τοι τῆς διανοίας ὄψις ...

sannen lang, ohne zu schreiben: sprachen sie aber, so wards und stand.
 ... Haller, dessen Gedichten mans gnug ansieht, wie ausgedacht und zusammendrängend sie sind: Leßing ist, glaub'ich, in seinen spätern Stücken der Dichtkunst auch in dieser Zahl — ... Von der (S.184/S.185) zweiten Art muß z.E. Klopstock in den ausströmendsten Stellen seiner Gedichte seyn: ... Ramler, glaube ich, sucht diese Arten zu verbinden, ... Wieland sucht sie zu verbinden, ...

Vgl. Herder „Gefundene Blätter aus den neuesten Deutschen Litteraturannalen von 1773“ I.: Sämtliche Werke. Bd.5. 1891. S.258-259.

— und so erschien endlich in dem Jahre der Meßias ganz. Allerdings ein Monument der Deutschen Poesie und Sprache. Voll der unmittelbarsten Empfindung und einer Einbildung, die sich oft der Inspiration nähert. Malelei und Äußerung der Seele, wie sie sich in den geheimsten, verwickeltesten Gefühlen nur ausreden, in Worte (S.258/S.259) ausgießen läßt, und was dem Werk gewiß nicht zur letzten Ehre gereicht, voll Religion und Gesang. Wo sich immer nur die Menschliche Seele aufschwingen ließ, wird Gesang; Gesang wie Nachhall seliger Geister aus einem Thale der Unschuld und Liebe. Fast hört die Sprache auf, was sie ist, Sprache, und was sie nach einigen seyn soll, harte Deutsche Sprache zu seyn, wird Ton! und Anklang goldner Saite. Da es Religion ist, was sie tönert: und von hier aus der Gesang Alles umfaßt, was nur der leiseste Lispel des Gefühls auf Erd und Himmel, Vergangenheit und fernster Zukunft faßen konnte — ...

Vgl. Herder „Recensionen. Aus der Allgemeinen Deutschen Bibliothek. 1770-1774“ 13.(Kretschmann) Der Gesang Rhingulphs des Barden. 1769. Der Barde bei Kleists Grabe. 1770. ... Die Jägerinn. 1772: Sämtliche Werke. Bd.5. S.337.

... Klopstock, der, die nordische Einbildung mit dem wärmsten Herzen und großer Kraft der Deutschen Sprache vereint, dieser Dichtart am meisten Welt zu geben, den Deutschen Hain dem Griechischen Parnassus entgegen zu setzen! Orpheus und Osian, wo möglich, zu uns hinüber zu ziehen gewagt hat.

Vgl. Herder „Recensionen cit.“ 16. Oden (von Klopstock). 1771: Sämtliche Werke. Bd.5. S.350.

Und da dieser Naturgeist, die ganze Fülle des Herzens und der Seele alle Stücke des Verf. durchgeht und jedwedes so eigentümlich bezeichnet: welches ein Geschenk hat unsre Sprache, unsre Dichtkunst, ja wir möchten sagen, die Menschheit unsres Vaterlandes an dieser einzigen Sammlung Oden. Ein Mann vor 200 Jahren, der großer Geist, und wirkliches Genie war, hatte ein Lieblingsbuch, das er allen in der Welt vorzog. Es war eine Sammlung Oden: wir nennen sie die Psalmen Davids und der Mann hieß Luther — ...

21) Kant, Immanuel „Kritik der reinen Vernunft“ 1.Aufl. 1781. S.800: 2.Aufl. 1787. S.828: Werke. Unveränderter photomechanischer Abdruck von „Kants gesammelte Schriften“(Preußische Akademie der Wissenschaften. Bd.3. Berlin. 1904/11) Berlin. Gruyter. 1968. Bd.3. S.520.

Dagegen würden reine praktische Gesetze, deren Zweck durch die Vernunft völlig a priori gegeben ist, und die nicht empirisch bedingt, sondern schlechthin gebieten, Produkte der reinen Vernunft sein. Dergleichen aber sind die moralischen Gesetze; mithin gehören diese allein zum praktischen Gebrauche der reinen Vernunft und erlauben einen Kanon.

Vgl. Hegel, G.W.F. „Vorlesungen über die Philosophie der Geschichte“(1.Aufl. 1837). Einleitung: Werke in 20 Bänden. Auf der Grundlage der „Werke“ von 1832-45 neu edierte Ausgabe. Hrsg. v. Eva Moldenhauer und Karl Markus Michel. Frankfurt am Main. Suhrkamp. 1969-71 (Register 1979). Bd.12. 1970. S. 53.

Gott regiert die Welt, der Inhalt seiner Regierung, die Vollführung seines Plans ist die Weltgeschichte. Diesen will die Philosophie erfassen;

18) Klopstock, Friedrich Gottlieb (1724-1803): Oden. Hamburg. Bode. 1771.
 Faksimile-Nachdruck. Bern. Herbert Lang. 1971. S.196(V.1-12)/S.197(V.13-16):
 „Thuisikon“ (1764). 4 Strophen. 16 Verse.

Wenn die Strahlen vor der Dämmerung nun entfliehen, und der Abendstern
 Die sanfteren, entwölkten, die erfrischenden Schimmer nun
 Nieder zu dem Haine der Barden senkt,
 Und melodisch in dem Hain die Quell' ihm ertönt;
 So entsenket die Erscheinung des Thuisikon, wie Silber stäubt 5
 Von fallendem Gewässer, sich dem Himmel, und kommt zu euch,
 Dichter, und zur Quelle. Die Eiche weht
 Ihm Gelispel. So erklang der Schwan Venusin
 Da verwandelt er dahin flog. Und Thuisikon vernimmt, und schwebt
 In wehendem Geräusche des begrüßenden Hains, und horcht; 10
 Aber nun empfangen, mit lauterem Gruß,
 Mit der Sait' ihm und Gesang, die Enkel um ihn.
 Melodien, wie der Leyer in Walhalla, ertönen ihm
 Des wechselnden, des kühneren, des deutscheren Odenflugs,
 Welcher, wie der Adler zur Wolk' itzt steigt, 15
 Dann herunter zu der Eiche Wipfel sich senkt.

Vgl. Goethe „Die Kränze“ V.1-4: Sämtliche Gedichte. I. Teil: Die Gedichte
 der Ausgabe letzter Hand: Artemis-Gedenkausgabe. Zürich. Bd.1. 1950. S.355:
 Klopstock. Ausgewählte Werke. München. Hanser. 1962. Anmerkungen von Karl
 Schleiden. S.1266. Vgl. Herders Rezensionen 1770-74(V(4)20): Bd.5. S.337.

Klopstock will uns vom Pindus entfernen; wir sollen nach Lorbeer

Nicht mehr geizen, uns soll inländische Eiche genügen;

Und doch führet er selbst den überepischen Kreuzzug

Hin auf Golgathas Gipfel, ausländische Götter zu ehren!

19) Klopstock „Thuisikon“ 1.Str. V.3: Oden(V(4)18). S.196.

Vgl. Blake, William „Songs of Experience/Lieder der Erfahrung“ Introduction
 /Einleitung. V.1-5: Gedichte der englischen Romantik. Englisch/Deutsch:
 Borgmeier, Raimund. Reclam-Universal-Bibliothek. Stuttgart. 1980. S.50/S.

51: Complete Writings. London. Oxford University Press. 1966(1.Aufl.)/1969.

Hear the voice of the Bard! Hört die Stimme des Barden! / wel-

Who Present, Past, & Future, sees; cher Gegenwart, Vergangenheit und

Whose ears have heard Zukunft sieht; / dessen Ohren ge-

The Holy Word hört haben / das Heilige Wort, /

That walk'd among the ancient trees, das unter den alten Bäumen wandelte,

20) Klopstock „Thuisikon“ 3.Str. V.9-10: Oden(V(4)18). S.196.

Vgl. Schiller „Der Genius“ V.15f./V.29-34; Weimarer Nationalausgabe. Bd.

2. Teil 1. S.302: „Natur und Schule“ (1795) V.15f./V.29-36(Bd.1. S.252f.).

Freund, du kennst doch die goldene Zeit, es haben die Dichter 15

Manche Sage von ihr rührend und kindlich erzählt.

...

Aber die glückliche Zeit ist dahin! Vermessene Willkühr
 Hat der getreuen Natur göttlichen Frieden gestört. 30

Das entweihte Gefühl ist nicht mehr Stimme der Götter,

Und das Orakel verstummt in der entadelten Brust.

Nur in dem stilleren Selbst vernimmt es der horchende Geist noch,

Und den heiligen Sinn hütet das mystische Wort.

Vgl. „Natur und Schule“ V.35f.: Bd.1. S.253.

Aus der Sinne wildem Geräusch verschwand das Orakel, 35

Nur in dem stilleren Selbst hört es der horchende Geist.

Vgl. Herder „Über den Ursprung der Sprache“ (V(4)17) Bd.5. S.49.

Der Mensch ist also als ein horchendes ... Geschöpf ... gebildet, ...

Vgl. Herder „Von Deutscher Art und Kunst“ (1773) I. Auszug aus einem Brief-
 wechsel über Obian und die Lieder alter Völker: Werke. Bd.2. S.254: Sämtli-
 che Werke. Bd.5. S.184-185.

Im ersten Falle haben Milton, Haller, Kleist und andre gedichtet: sie

17) Goethe „Die Leiden des jungen Werther" (V(4)16): the oak of Morven.
Vgl. „Poems of Ossian" translated by Macpherson, James in his edition of 1773. Ed. Eyre-Todd, George. London. Walter Scott. ca 1888. S.151-159: „The Songs of Selma" (Die Gesänge von Selma). Stern der dämmernden Nacht, ...

STAR of descending night! ... The stormy winds ... Farewell, thou silent beam! Let the light of Ossian's soul arise! ... (S.151/S.152) ... COLMA. ... Rise, moon! from behind thy clouds. Stars of the night arise! Lead me, some light, to the place, where my love rests from the chase alone! ... (S.152/S.153) ... When night comes on the hill; when the loud winds arise; my ghost shall stand in the blast, ... (S.153/S.154) ... RYNO. ... (S.154/S.155) ... ALPIN. ... (S.155/S.157) ... Arise, winds of autumn, arise; blow along the heath! streams of the mountains roar! roar, tempests, in the groves of my oaks! ... (S.157/S.158) ... He saw fierce Erath on the shore: he seized and bound him to an oak. Thick wind the thongs of the hide around his limbs; he loads the wind with his groans. ... All night I stood on the shore. I saw her by the faint beam of the moon. All night I heard her cries. Loud was the wind; ... (S.158/S.159) ... My voice remains, like a blast, that roars, lonely, on a sea-surrounded rock, after the winds are laid. The dark moss whistles there; the distant mariner sees the waving trees!

Vgl. Herder, Johann Gottfried „Abhandlung über den Ursprung der Sprache" (Berlin. Christian Friedrich Voß. 1772) 2. Aufl. 1789. I. Teil. 3. Abschnitt. S.94-100: Sämtliche Werke. Bd.5. Nachdruckauflage. Reprografischer Nachdruck der Ausgabe Berlin 1891. Berlin/Hildesheim. Weidmann/Olms. S.61-64.

Wir sind Ein denkendes sensorium commune, nur von verschiedenen Seiten berührt — ... Allen Sinnen liegt Gefühl zum Grunde, ... (S.61/S.62) Alle Zergliederungen der Sensation nei Buffons, Condillacs und Bonnets empfindendem Menschen sind Abstraktionen: der Philosoph muß Einen Faden der Empfindung liegen lassen, indem er den andern verfolgt — in der Natur aber sind alle die Fäden Ein Gewebe! ... Anfangs nur Gefühl. (S.62/S.63) ... Das Gefühl liegt dem Gehör so nahe: seine Beziehungen z.B. hart, rau, weich, wolligt, sammet, haarigt, starr, glatt, schlicht, borstig u.s.w. die doch alle nur Oberflächen betreffen, und nicht einmal tief einwirken, tönen alle, als ob mans fühlte: ... Das Wort: Duft, Ton, süß, bitter, sauer u.s.w. tönen alle, als ob man fühlte: denn was sind ursprünglich alle Sinne anders, als Gefühl? — ... (S.63/S.64) ... Hier ist die Hauptbemerkung: „Da der Mensch blos durch das Gehör die Sprache der lehrenden Natur empfängt, und ohne das die Sprache nicht erfinden kann: so ist Gehör auf gewiße Weise der Mittlere seiner Sinne, die eigentliche Thür zur Seele, und das Verbindungsband der übrigen Sinne geworden." ...

Vgl. Herders Werke in 5 Bänden. Berlin/Weimar. Aufbau. 1978. Bd.2. S.136ff: Sämtliche Werke. Bd.5. S.65-66(=Werke. Bd.2. S.140).

Das Gehör ist der Mittlere unter den Sinnen an Deutlichkeit und Klarheit; und also wiederum Sinn zur Sprache. ... Wiederum das Gesicht ist so helle und überglänzend, ... Das Gehör ist in der Mitte. Alle in einander fallende dunkle Merkmale des Ge- (S.65/S.66) fühls laßt liegen! ... Das Gehör greift also von beiden Seiten um sich: macht klar, was zu dunkel; macht angenehmer, was zu helle war: bringt in das dunkel Mannichfaltige des Gefühls mehr Einheit, und in das zu hell Mannichfaltige des Gesichts auch: und da diese Anerkennung des Mannichfaltigen durch Eins, durch ein Merkmal, Sprache wird, ists Organ der Sprache. 3. Das Gehör ist der mittlere Sinn in Ansehung der Lebhaftigkeit und also Sinn der Sprache.

Vgl. Werke. Bd.5. S.127: Sämtliche Werke. Bd.5. S.49.

Der Mensch ist also als ein horchendes, merkendes Geschöpf zur Sprache natürlich gebildet, ...

Vgl. „Der Archipelagus“ Str.11. V.208-210(V(4)72): StA. Bd.2. S.109.
 Aber näher zu euch, wo eure Haine noch wachsen,
 Wo sein einsames Haupt in Wolken der heilige Berg hüllt,
 Zum Parnassos will ich, und ...

210

c)VOM URGRUND ZUM URSPRUNG

15)Vgl. V(4)9.

16)Hölderlins Brief 12 an Immanuel Nast, Anfang September 1787: StA. Bd.6. S.16.

Eine Neuigkeit! eine schöne, schöne herzerquickende Neuigkeit! Ich habe den Ossian, den Barden ohne seines gleichen, Homers großen Nebenbuhler hab'ich wirklich unter den Händen. Den must Du lesen, Freund — da werden Dir Deine Thäler lauter Konathäler — Dein Engelsberg ein Gebirge Morvens — Dich wird ein so süßes, wehmütiges Gefühl anwandeln — Du must ihn lesen — ich kan nicht deklamiren. Er muß mit nach Nürtingen in die Vakanz, da leß'ich ihn so lang, biß ich ihn halb auswendig kan. ... — der gute, blinde Ossian da schwadronirt mir immer im Kopf. ...

Vgl. OEuvres de la Pléiade. S.27. Traduction par Naville.

Une nouvelle, une bonne, bonne nouvelle qui rafraîchit le coeur. J'ai reçu le volume d'Ossian, le barde sans pareil, j'ai en ce moment entre les mains le grand rival d'Homère. Il faut que tu le lises, mon ami — alors tes vallées deviendront toutes des vallées de Kona — ton Engelsberg un mont de Morven — tu te sentiras envahi par une douce mélancolie — il faut le lire — je ne sais pas déclamer. Il m'accompagnera en vacances à Nürtingen, et là je le lirai tant que je finirai par le connaître à moitié par coeur. ... Le bon Ossian aveugle ne cesse de bourdonner dans ma tête. ...

Vgl. Goethe „Die Leiden des jungen Werther“: Werke. Bd.6. S.82/S.108-114.

Am 12.Oktober. (1772) Ossian hat in meinem Herzen den Homer verdrängt. Welch eine Welt, in die der Herrliche mich führt! Zu wandern über die Heide, umsaust vom Sturmwinde, der in dampfenden Nebeln die Geister der Väter im dämmernden Lichte des Mondes hinführt. Zu hören vom Gebirge her, im Gebrülle des Waldstroms, halb verwehtes Ächzen der Geister aus ihren Höhlen, und die Wehklagen des zu Tode sich jammernden Mädchens, um die vier moosbedeckten, grasbewachsenen Steine des Edelgefallnen, ihres Geliebten. Wenn ich ihn dann finde, den wandelnden grauen Barden, ...

(S.82/S.108) „Stern der dämmernden Nacht, ... Die stürmenden Winde ... Lebe wohl, ruhiger Strahl. Erscheine, du herrliches Licht von Ossians Seele! ... Colma ... (S.108/S.109) Tritt, o Mond, aus deinen Wolken, erscheinet, Sterne der Nacht! Leite mich irgend ein Strahl zu dem Orte, wo meine Liebe ruht ... (S.109/S.110) Wenn's Nacht wird auf dem Hügel, und Wind kommt über die Heide, soll mein Geist im Winde stehn ... Ryno ... (S.110/S.111) Alpin ... (S.111/S.112) Auf, ihr Winde des Herbstes! auf, stürmt über die finstere Heide! Waldströme, braust! Heult, Stürme, im Gipfel der Eichen! ... (S.112/S.113) Er sah den kühnen Erath am Ufer, faßt' und band ihn an die Eiche, fest umflocht er seine Hüften, der Gefesselte füllte mit Ächzen die Winde. ... (S.113/S.114) Die ganze Nacht stand ich am Ufer, ich sah sie im schwachen Strahle des Mondes, die ganze Nacht hört'ich ihr Schreien, laut war der Wind, ... " Ein Strom von Tränen, der aus Lottens Augen brach und ihrem gepreßten Herzen Luft machte, hemmte Werthers Gesang. ... Die Lippen und Augen Werthers glühten an Lottens Arme; ein Schauer überfiel sie; sie wollte sich entfernen,

- Car c'est ainsi que les Divins prennent demeure et qu'ébranlant
 Les profondeurs, trouant l'ombre, leur Jour descend parmi les hommes.
- 14) „Brod und Wein" 6.Str. V.99-108: StA. Bd.2. S.93.
 Aber wo sind sie? wo blühen die Bekannten, die Kronen des Festes?
 Thebe welkt und Athen; rauschen die Waffen nicht mehr
 In Olympia, nicht die goldnen Wagen des Kampfspiels,
 Und bekränzen sich denn nimmer die Schiffe Korinths?
 Warum schweigen auch sie, die alten heiligen Theater?
 Warum freuet sich denn nicht der geweihte Tanz?
 Warum zeichnet, wie sonst, die Stirne des Mannes ein Gott nicht,
 Drückt den Stempel, wie sonst, nicht dem Getroffenen auf?
 Oder er kam auch selbst und nahm des Menschen Gestalt an
 Und vollendet' und schloß tröstend das himmlische Fest.
- Vgl. „Le Pain et le vin" v.99-108: OEuvres de la Pléiade. S.812.
 Mais où sont-ils? Où fleurissent-elles, les très-illustres, les couronnes
 De la fête? Athènes s'est fanée, et Thèbes. La rumeur des armes, des
 Rivaux, s'est-elle à jamais tue aux échos d'Olympie? chars d'or
 Et les nefs de Corinthe ont perdu leurs couronnes pour toujours?
 Et pourquoi ce silence encore aux antiques et saints théâtres?
 Pourquoi la danse morte, et sa rituelle allégresse?
 Et pourquoi donc un dieu ne grave-t-il plus le front de l'homme
 Comme jadis, et scellant de son sceau celui qu'il a saisi?
 Lui-même il descendait parfois et prenant forme humaine
 À la divine fête il donnait fin, consolateur.
- Vgl. Goethe „Iphigenie auf Tauris"(1787) V.1-6: Werke. Hamburger Ausgabe.
 München. Beck/dtv. 1981/1982. Bd.5. S.7.
 Heraus in eure Schatten, rege Wipfel
 Des alten, heiligen, dichtbelaubten Haines,
 Wie in der Göttin stillen Heiligtum,
 Tret ich noch jetzt mit schauerndem Gefühl,
 Als wenn ich sie zum erstenmal beträte
 Und es gewöhnt sich nicht mein Geist hierher.
- Vgl. Hölderlins Brief 121 an den Bruder vom 2.6.1796: StA. Bd.6. S.208.
 Göthe sagt irgendwo: »Lust und Liebe sind die Fittige zu großen Thaten.«
 Goethe dit quelque part: «Le plaisir et l'amour sont les ailes qui por-
 tent aux grandes actions.»(Traduction par Naville, Denise: OEuvres de la
 Pléiade. S.385)
- Vgl. „Iphigenie auf Tauris" V.664-666: Werke. Bd.5. S.25.
 Bin ich nicht immer noch voll Mut und Lust,
 Und Lust und Liebe sind die Fittiche
 Zu großen Taten.
- Vgl. Hölderlin „Der Archipelagus" Str.10. V.193-7: StA. Bd.2. S.109.
 Göttertempel entstehen, ein heilighühner Gedanke
 Steigt, Unsterblichen nah, das Olympion auf in den Aether
 Aus dem seeligen Hain; noch manche der himmlischen Hallen!
 Mutter Athene, dir auch, dir wuchs dein herrlicher Hügel
 Stolz aus der Trauer empor und ...
- Vgl. „Der Archipelagus" Str.7. V.104-8: StA. Bd.2. S.106.
 Aber an Salamis Ufern, o Tag an Salamis Ufern!
 Harrend des Endes stehn die Athenerinnen, die Jungfrau,
 Stehn die Mütter, wiegend im Arm das gerettete Söhnlein,
 Aber den Horchenden schallt von Tiefen die Stimme des Meergotts
 Heilweissagend herauf, ...
- Vgl. „L'Archipel"(Traduction par Tardieu, Jean) vers 208-210(V(4)72).
 Mais non! Plus près de vous, là où l'arbre des bois consacrés
 Toujours croît, où le Mont solitaire et divin se voile de nuages,
 Jusqu'aux pieds du Parnasse j'irai, et, ...

195

105

210

12) Biblia Germanica 1545. I. Teil. S. 53: „Exodos“ 34. 27-29.

UND der HERR sprach zu Mose / Schreib diese wort / Denn nach diesen Worten / hab ich mit dir vnd mit Israel einen Bund gemacht. Vnd er war alda bey dem HERRN vierzig tage vnd vierzig nacht / vnd ass kein brot / vnd tranck kein wasser. Vnd er schreib auff die Tafeln solchen Bund / die zehen wort. Da nu Mose vom berge Sinai gieng / hatte er die zwo Tafeln des Zeugnis in seiner hand / ...

Vgl. Die heilige Schrift. S. 98-99.

XXXIV. 27. Und der Herr sprach zu Mose: Schreib diese Worte; denn nach diesen Worten habe ich mit dir und mit Israel einen Bund gemacht. 28. Und er war allda bei dem Herrn vierzig Tage und vierzig Nächte und aß kein Brot und trank kein Wasser. (S. 98/S. 99) Und Er schrieb auf die Tafeln die Worte des Bundes, die Zehn Worte. 29. Da nun Mose vom Berge Sinai ging, hatte er die zwei Tafeln des Zeugnisses in seiner Hand ...

Vgl. Vulgata. Tomus I. S. 126: Liber Exodi. 34. 28.

et scripsit in tabulis verba foederis decem

Vgl. Septuaginta. Vol. I. S. 147: Exodos. 34. 28.

καὶ ἔγραψεν τὰ ῥήματα ταῦτα ἐπὶ τῶν πλακῶν τῆς διαθήκης, τοὺς δέκα λόγους. —

Vgl. Biblia Hebraica Stuttgartensia. S. 145: אֵת דְּבַר־יְהוָה עָשָׂה מֹשֶׁה לְיִשְׂרָאֵל

13) „Brod und Wein“ 4. Str. V. 55-56 (S. 91) / V. 57-72 (S. 92): StA. Bd. 2. S. 91-92.

Seeliges Griechenland! du Haus der Himmlischen alle, 55

Also ist wahr, was einst wir in der Jugend gehört?

Festlicher Saal! der Boden ist Meer! und Tische die Berge,

Wahrlich zu einzigem Brauche vor Alters gebaut!

Aber die Thronen, wo? die Tempel, und wo die Gefäße,

Wo mit Nectar gefüllt, Göttern zu Lust der Gesang? 60

Wo, wo leuchten sie denn, die fernhintreffenden Sprüche?

Delphi schlummert und wo tönet das große Geschick?

Wo ist das schnelle? wo brichts, allgegenwärtigen Glücks voll

Donnernd aus heiterer Luft über die Augen herein?

Vater Aether! so riefs und flog von Zunge zu Zunge 65

Tausendfach, es ertrug keiner das Leben allein;

Ausgetheilet erfreut solch Gut und getauschet, mit Fremden,

Wirds ein Jubel, es wächst schlafend des Wortes Gewalt

Vater! heiter! und hallt, so weit es gehet, das uralte

Zeichen, von Eltern geerbt, treffend und schaffend hinab. 70

Denn so kehren die Himmlischen ein, tiefschütternd gelangt so

Aus den Schatten herab unter die Menschen ihr Tag.

Vgl. „Le Pain et le vin“ v. 55-69 (S. 810) / v. 70-72 (S. 811): OEuvres de la Pléiade. S. 810-811.

O Grâce bienheureuse! O toi, demeure à tous les dieux donnée,

Quoi! c'est donc vrai, ce qu'en notre jeunesse un jour nous entendîmes?

O salle des festins! Ton sol? Mais c'est la mer! Tes tables? Les mon-

Jadis à cette seule fin bâties, en vérité. tagnes

Mais les trônes, où sont-ils donc? Les temples? Où, les urnes

De nectar, et le chant qui doit réjouir le cœur des dieux?

Où brillent-ils, où donc, les oracles frappant au loin comme l'éclair?

Delphes dort, et la voix du grand Destin, où sonne-t-elle?

Où le dieu prompt? Lourd d'un universel bonheur, où, de quels cieux en

Jailli, frappe-t-il les regards de sa splendeur tonnante? fête

Éther, ô Père! Ainsi montait le cri par mille et mille lèvres

Multiplié; nul n'était seul à supporter la vie. Car un tel bien,

C'est par l'échange et le partage avec les inconnus qu'il donne joie.

Une allégresse éclate; il s'acçoit en dormant, le pur pouvoir

Du mot Père! et voici le legs de nos parents, le très antique

Signe qui retentit au loin, frappe et féconde!

b) „HAIN“ UND „EIN EIUERIGER GOTT“

9) Biblia Germanica 1545(V(4)2). I. Teil. S.7/S.8./S.9/S.10: „Genesis“ 12ff. Also nam Abram sein weib ... vnd Seelen ... zogen aus zu reisen in das land Canaan. Vnd als sie kommen waren in dasselbige Land / zog Abram durch / bis an die stet Sichem / vnd an den hayn More / ... (12. 5-6). Also erhub Abram seine Hütten / kam vnd wonet im Hayn Mamre / der zu Hebron ist / Vnd bawet daselbs dem HERRN einen Altar. (13. 18). AN dem tage machte der HERR einen Bund mit Abram / ... (15. 18). Vnd ich wil meinen Bund zwischen mir vnd dir machen / ... (17. 2). Sihe / Ich bins / vnd hab meinen Bund mit dir / Vnd du solt ein Vater vieler Völcker werden / Darumb soltu nicht mehr Abram heissen / sondern Abraham sol dein name sein / ... (17. 4-5). VND der HERR erschein jm im Hayn Mamre / ... (18. 1)

Vgl. Die heilige Schrift(V(4)2). S.15-20: „1.Mose“ 12-18.

XII. 5. Also nahm Abram sein Weib ... und die Seelen, ... zogen aus, zu reisen in das Land Kanaan. Und als sie gekommen waren in dasselbe Land, 6. zog Abram durch bis an die Stätte Sichem und an den Hain More; ... XIII. 18. Also erhob Abram seine Hütte, kam und wohnte im Hain Mamre, der zu Hebron ist, und baute daselbst dem Herrn einen Altar. ... XV. 18. An dem Tage machte der Herr einen Bund mit Abram ... XVII. 2. Und ich will meinen Bund zwischen mir und dir machen ... 4. Siehe, ich bin's und habe meinen Bund mit dir, und du sollst ein Vater vieler Völker werden. 5. Darum sollst du nicht mehr Abram heißen, sondern Abraham soll dein Name sein; ... XVIII. 1. Und der Herr erschien ihm im Hain Mamre,

Vgl. Vulgata(V(4)2). Tomus I. S.23: „Genesis“ 18. 1.

apparuit autem ei Dominus in convalle Mambre ...

Vgl. Septuaginta(V(4)2). Vol.I. S.23.

ὁ θεὸς πρὸς τῇ ὁρῇ τῇ Μαμβρή ...

Vgl. Biblia Hebraica Stuttgartensia(V(4)2). S.24: וַיֵּרָא אֵלָיו יְהוָה בְּאֵלֵי מַמְרֵה

10) Biblia Germanica 1545. I. Teil. S.42: „Exodos“ 19. 6.

Vnd jr solt mir ein priesterlich Königreich, vnd ein heiliges Volck sein.

Vgl. Vulgata. Tomus I. S.103: regnum sacerdotale et gens sancta

Vgl. Septuaginta. Volumen I : βασιλείον ιεράτευμα καὶ ἔθνος ἅγιον (S.118)

11) Biblia Germanica 1545. I. Teil. S.52: „Exodos“ 34. 10-14.

VND er sprach / Sihe / Ich wil einen Bund machen fur alle deinem Volck / ... Hüt dich / das du nicht einen Bund machest mit den Einwonern des Lands / da du ein kompst / das sie dir nicht ein Ergernis vnter dir werden. Sondern jre Altar soltu vmbstürzten / vnd jre Götzen zubrechen / vnd jre Haine ausrotten. Denn du solt kein andern Gott anbeten / Denn der HERR heisst ein Eiuerer / Darumb das er ein eiueringer Gott ist /

Vgl. Die heilige Schrift. S.98: „2.Mose“ 34. 10-14.

XXXIV. 10. Und er sprach: Siehe, ich will einen Bund machen vor allem deinem Volk ... 12. Hüte dich, daß du nicht einen Bund machest mit den Einwohnern des Landes, da du hineinkommst, daß sie dir nicht ein Fallstrick unter dir werden; 13. sondern ihre Altäre sollst du umstürzen und ihre Götzen zerbrechen und ihre Haine ausrotten; 14. denn du sollst keinen andern Gott anbeten. Denn der Herr heißt ein Eiferer; ein eifriger Gott ist er.

Vgl. Vulgata. Tomus I. S.125.

respondit Dominus ego inibo pactum ... cave ne umquam cum habitatoribus terrae illius iungas amicitias quae tibi sint in ruinam/sed aras eorum destrue/confringe statuas lucosque succide/noli adorare deum alienum/Dominus Zelotes nomen eius Deus est aemulator/

Vgl. Septuaginta. Vol.I. S.146.

ἐγὼ τίθημι σοι διαθήκην. ... (34. 10). ... καὶ τὰ ἄλση αὐτῶν ἐκκόψετε ... (34. 13). ... ὁ γὰρ κύριος ὁ θεὸς ζηλωτὸν ὄνομα, θεὸς ζηλωτὴς ἐστίν. (34. 14).

Vgl. Biblia Hebraica Stuttgartensia. S.144: כִּי יְהוָה קָנָן שָׂנֵא בָּל קָנָן נָקֵן

3) Schmidt, Jochen: Hölderlins Elegie „Brod und Wein“. Berlin. Gruyter. 1968. S.37.

Das „Wehn“ der Luft hat hier wie auch sonst oft in Hölderlins Dichtung den Sinn von πνεῦμα „Lufthauch“, „Windeswehen“, „Atem“, „Seele“, „Geist“. Im „Hyperion“ ... Ein Distichon aus dem Schlußabschnitt der „Elegie“ ... ein Vers der Rheinymne, ...

4) Dilthey, Wilhelm: Das Erlebnis und die Dichtung. 1905. 8.Aufl. Leipzig/Berlin. Teubner. 1922. S.396.

Hyperion ist nicht ‚ein Seitentrieb der romantischen Poesie‘, wie Haym ihn auffaßte; ... Eben darin, daß der Dichter den finsternen Zug, der dem Antlitz des Lebens so tief eingegraben ist, zuerst in diesem Roman sichtbar machte, ... Und in der Darstellung dieser Lebensdeutung erwuchs ihm eine neue Form des philosophischen Romans; sie hat dann in dem Zarathustra Nietzsches ihre höchste Wirkung gewonnen.

Vgl. Haym, Rudolf „Die Romantische Schule. Ein Beitrag zur Geschichte des deutschen Geistes“ (Berlin. Rudolph Gaertner. 1870). III. Buch. I. Kap.: ‚Ein Seitentrieb der romantischen Poesie‘ (S.289). IV. Aufl. Berlin. Weidmann. 1920. S.341.

5) „Hyperion“ Bd.1. 1797. II. Buch. 13. Brief. S.88: StA. Bd.3. S.50(V(4)182). Und die Menschen giengen aus ihren Thüren heraus, und fühlten wunderbar das geistige Wehen, wie es leise die zarten Haare über der Stirne bewegte, wie es den Lichtstral kühlte, ...

Vgl. „Hypérion“ (Traduction par Jaccottet, Philippe) Volume premier. Second livre. Hypérion à Bellarmin: OEuvres de la Pléiade. S.174.

Les hommes sortaient sur leur seuil, sentaient le merveilleux souffle immatériel soulever leurs fines chevelures, rafraîchir les rayons de la lumière; ...

6) „Elegie“ (1799) V.97-100: StA. Bd.2. S.74.

Darum möcht', ihr Himmlischen! euch ich danken und endlich

Tönet aus leichter Brust wieder des Sängers Gebet.

Und, wie wenn ich mit ihr auf Bergeshöhen mit ihr stand,

Wehet belebend auch mich, göttlicher Othem mich an.

100

7) „Der Rhein“ 13. Str. V.186-8(S.147)/V.189-190(S.148): StA. Bd.2. S.147f.

Die Liebenden aber

Sind, was sie waren, sie sind

Zu Hauße, wo die Blume sich freuet

Unschädlicher Gluth und die finsternen Bäume

Der Geist umsäuselt, ...

Vgl. „Le Rhin“ (Traduction par Roud, Gustave): Oeuvres de la Pléiade. S.854.

Mais les amants

Demeurent tels qu'ils furent; ils se retrouvent

Chez eux aux lieux où l'innocente caresse

D'un rayon réjouit la fleur, où frémissent

Au souffle de l'esprit les arbres sombres;

8) Schmidt: op.cit. S.38. Vgl. Beißner: StA. Bd.2. S.629.

Für die eigentümliche Wendung „regt die Gipfel des Hains auf“ gilt die Erläuterung Friedrich Beißners zu Vers 74 der Elegie „Heimkunft“ („... du regst Langgelerntes mir auf!“): „Hölderlin und seine Zeitgenossen (besonders Goethe) wenden das Wort anders als der heutige Sprachgebrauch noch in der buchstäblicheren Bedeutung an (‚etwas nach oben bewegen‘), und zwar nicht nur psychologisch wie hier (und z.B.: Palinodie V.4f.: ‚Was regt ihr mir Vergangenes auf‘), sondern auch im Bereich des Greifbaren: vgl. ‚Brod und Wein‘ V.13: ‚und regt die Gipfel des Hains auf‘; ...

schreibung eines rasenden Sturms, oder die Schilderung des höllischen Reichs von Milton erregen Wohlgefallen, aber mit Grausen; dagegen die Aussicht auf blumenreiche Wiesen, Thäler mit schlängelnden Bächen, bedeckt von weidenden Heerden, die Beschreibung des Elysium, oder Homers Schilderung von dem Gürtel der Venus veranlassen auch eine angenehme Empfindung, die aber fröhlich und lächelnd ist. Damit jener Eindruck auf uns in gehöriger Stärke geschehen könne, so müssen wir ein Gefühl des Erhabenen und, um die letztere recht zu genießen, ein Gefühl für das Schöne haben. Hohe Eichen und einsame Schatten im heiligen Haine sind erhaben, Blumenbetten, niedrige Hecken und in Figuren geschnittene Bäumen sind schön. Die Nacht ist erhaben, der Tag (S.208/S.209) ist schön. ... Das Erhabene rührt, das Schöne reizt. ...

Vgl. Kant „Observations sur le sentiment du beau et du sublime“ (1764) Première section. Des différents objets du sentiment du sublime et du beau: OEuvres philosophiques. Vol.I. Des premiers écrits à la Critique de la raison pure. Bibliothèque de la Pléiade. Paris. Gallimard. 1980. S.453.

Le sentiment plus raffiné que nous voulons examiner maintenant est avant tout de deux sortes: le sentiment du sublime et du beau. L'émotion produite par l'un et l'autre est agréable, mais de façon très différente. La vue d'une montagne dont les cimes enneigées se dressent au-dessus des nuages, la description d'une furieuse tempête, ou la peinture du royaume des enfers par Milton, causent du plaisir, mais un plaisir mêlé d'effroi; au contraire, la vue de prairies pleines de fleurs, de vallées aux ruisseaux serpentants, couvertes de troupeaux qui paissent, la description de l'Élysée ou la peinture que fait Homère de la ceinture de Vénus provoquent également une sensation agréable, mais joyeuse et riante. Pour que la première de ces impressions puisse agir sur nous avec la force requise, il faut que nous ayons un sentiment du sublime et, pour bien jouir des suivantes, un sentiment du beau. De grands chênes et des ombres solitaires dans le bois sacré sont sublimes, des parterres de fleurs, des haies basses et des arbres taillés en forme de figures sont beaux. La nuit est sublime, le jour est beau. ... Le sublime touche, le beau ravit. ... (Traduit par Lortholary, Bernard)

Vgl. „Betrachtungen ...“ Abschnitt II: Werke(V(4)21). Bd.2. S.211/S.215. Verstand ist erhaben, Witz ist schön. ... (S.211//S.215) ... Die mathematische Vorstellung von der unermesslichen Größe des Weltbaues, die Betrachtungen der Metaphysik von der Ewigkeit, der Vorsehung, der Unsterblichkeit unserer Seele enthalten eine gewisse Erhabenheit und Würde. ... In moralischen Eigenschaften ist wahre Tugend allein erhaben.

Vgl. „Observations ...“ (Traduit par Lortholary) II: Vol.I. S.455/S.461. L'entendement est sublime, l'esprit est beau. ... (S.455//S.461) ... La représentation mathématique de l'infinie grandeur de l'univers, les considérations de la métaphysique sur l'éternité, la Providence, l'immortalité de notre âme, offrent une certaine sublimité et une certaine grandeur. ... Dans les qualités morales, seule la vraie vertu est sublime. ...

2) „Genesis“ 1. 2: Biblia Hebraica Stuttgartensia. Deutsche Bibelgesellschaft. 1984. S.1: Septuaginta. Stuttgart. Deutsche Bibelgesellschaft. 1979. Vol.1. S.1: Biblia iuxta Vulgatam Versionem. 3.Aufl. Stuttgart. Deutsche Bibelgesellschaft. 1983. Tomus I. S.4: Biblia Germanica 1545 (Deutsch: Luther). Faksimile-Ausgabe. Stuttgart. Deutsche Bibelgesellschaft. 1983. I. Teil. S.1: Die heilige Schrift nach der deutschen Übersetzung Martin Luthers. Stuttgart. Württembergische Bibelanstalt. 1961. Das Alte Testament nach dem 1912 vom Deutschen Evangelischen Kirchenausschuß genehmigten Text. S.5.

der Geist Gottes: spiritus Dei: πνεῦμα θεοῦ: רִיחַ אֱלֹהִים

QUELENNACHWEIS

(V) VON DER ABENDDÄMMERUNG ZUR HEILIGEN NACHT

(4) „Hain“ und „Bund“

a) „WEHN“

1) Hölderlin, Fr. „Brod und Wein“ 1.Str. V.1-18: Sämtliche Werke. Stuttgarter Ausgabe (=StA). Kohlhammer. 1946-77 (Register 1985). Bd.2. S.90.

Rings um ruhet die Stadt; still wird die erleuchtete Gasse,

Und, mit Fakeln geschmückt, rauschen die Wagen hinweg.

Satt gehn heim von Freuden des Tags zu ruhen die Menschen,

Und Gewinn und Verlust wäget ein sinniges Haupt

Wohlfrieden zu Haus; leer steht von Trauben und Blumen,

Und von Werken der Hand ruht der geschäftige Markt.

Aber das Saitenspiel tönt fern aus Gärten; vielleicht, daß

Dort ein Liebendes spielt oder ein einsamer Mann

Ferner Freunde gedenkt und der Jugendzeit; und die Brunnen

Immerquillend und frisch rauschen an duftendem Beet.

Still in dämmriger Luft ertönen geläutete Glocken,

Und der Stunden gedenk ruft ein Wächter die Zahl.

Jetzt auch kommt ein Wehn und regt die Gipfel des Hains auf,

Sieh! und das Schattenbild unserer Erde, der Mond

Kommt geheim nun auch; die Schwärmerische, die Nacht kommt,

Voll mit Sternen und wohl wenig bekümmert um uns,

Glänzt die Erstaunende dort, die Fremdlingin unter den Menschen

Über Gebirgshöhen traurig und prächtig herauf.

Vgl. „Le Pain et le vin“ (Traduction par Roud, Gustave) vers 1-18: Oeuvres de la Pléiade. Paris. Gallimard. 1967. S.807(v.1-2)/S.808(v.3-18).

La ville autour de nous s'endort. La rue illuminée accueille le silence,

Et le bruit des voitures avec l'éclat des torches s'éloigne et meurt.

Rassasiés des plaisirs du jour, vers le repos s'en vont les hommes,

Et satisfait, songeur, un front penché soupèse

Pertes et gains. Dépouillé de ses fleurs, dépouillé de ses grappes,

Las du labeur de mille mains, désert, le marché dort.

Mais au coeur des jardins s'éveille et tremble une musique lointaine,

Là-bas joue un amant, qui sait? ou peut-être un homme saisi de solitude

Qui se souvient de ses amis perdus, de sa jeunesse, et dans l'arôme

Des parterres fleuris chantent les fraîches fontaines infatigables.

La voix des cloches vibre au calme crépuscule

Et le veilleur, gardien des heures, crie un nombre à pleine voix

Oh! voici naître et frémir la brise aux feuilles extrêmes du bocage,

Regarde! et le fantôme de notre univers, la lune,

Mystérieusement paraître; et la fervente, la Nuit vient,

Peuplée d'étoiles, et tout indifférente à notre vie;

La Donneuse d'émerveillements, l'Étrangère parmi les hommes

Aux cimes des monts là-bas s'éploie et brille dans sa mélancolique

magnificence.

Vgl. Kant „Betrachtungen über das Gefühl des Schönen und Erhabenen“ (1764) Erster Abschnitt. Von den unterschiedenen Gegenständen des Gefühls vom Erhabenen und Schönen: Werke(V(4)21). Bd.2. S.208-209.

Das feinere Gefühl, was wir nun erwägen wollen, ist vornehmlich zwiefacher Art: das Gefühl des Erhabenen und des Schönen. Die Rührung von beiden ist angenehm, aber auf sehr verschiedene Weise. Der Anblick eines Gebirges, dessen beschneite Gipfel sich über Wolken erheben, die Be-

"GROVE" AND "COVENANT"

- On the line 13 in Hölderlin's "Bread and Wine"

Katsumi TAKAHASHI

ABSTRACT

The spiritualized "grove"(1.13) puts remembrance in the "Grove Covenant" in the epoch of Storm and Stress: "Go to hell, Wieland, the demoralizer; go to hell, Voltaire!"(Voß to Brückner, Oct. 26th 1772). They have an aversion to the foreign culture, imported from the ancien régime. Taking advantage of this moral purification, Hölderlin brings his "blest Greece"(1.55) face to face with the secularized Hellenism. This confrontation corresponds to the difference between the sacred "grove" and the profane bosquet. Of the two, the latter is in the secular garden of king's palace and the former relates to the sanctuary of Biblical patriarchs, ancient Greeks or Teutons. It follows that the "blow of the grove"(1.13) aims at the Supreme Being in order to agree with the "blest Greece".

There is Schiller's "art to idealize" in Hölderlin's quest of the "blest Greece". The question here is not only the return to the ideal state of nature, but also the new foundation of a civil society. Schiller has already practiced his "art to idealize" in the grand poem "The Artists"(1789) which Jacob Burckhardt designates "the supreme programme": "Schiller immortalizes the whole of a sentiment in the most noble and the most powerful form of style"("Memorial address to Schiller" 1859). But in the "covenant" with Goethe since 1794, the classic Schiller does not attach importance to this "supreme programme". It is just the same with his famous hymn "To the Joy"(1786).

The "intense subjectivity" of Hölderlin's "philosophical spirit" shocks Schiller, because the disciple is the very image of the master's former self. Immediately, Goethe calms the disturbed friend and takes no account of the "philosophical spirit". On the contrary, Hölderlin will persistently develop the "whole of a sentiment in the most noble and the most powerful form of style" as Beethoven does his best in the Choral Symphony with Schiller's "To the Joy". Keeping the Weimar classics at a distance, he dedicates "Bread and Wine"(1800-01) to Heinse and wants to conclude a New Covenant with this author of the novel "Ardinghello"(1787). His greatest interest is not in the stories of adventure, but in Heinse's metaphysical speculations: "Urania, the splendorous virgin, holds with her magic girdle together the universe in furious delight. Ardinghello"(Hölderlin "Hymn to the Goddess of Harmony" 1790-91. Motto). This "splendorous virgin" can be well-grounded on "a certain virginity" of Hölderlin's "philosophical spirit": "I regard now the metaphysical disposition as a certain virginity of the spirit ... "(Hölderlin's letter to Schiller in August 1797).

Hölderlin's "art to idealize" carries out its intention both in the marriage of Germanism and Hellenism and in the spiritual succession to the French Revolution, that is to say in Thomas Mann's word: "a covenant of the conservative idea of culture with the revolutionary thought of society, ... , if that is the case for Karl Marx to have read Friedrich Hölderlin" ("Culture and Socialism" 1929). The Germanic study today takes to justify the possibility of such a "Covenant", being in opposition to the "aesthetic restoration, executed by the Weimar classicism"(Guiliano Baioni "Classicismo e Rivoluzione" 1969). According to Baioni, it has "the tendency to clear away all those progressive and revolutionary ferments which were taken over from their Storm and Stress to the young representatives of Early Romantic School". But for all his "progressive ferments", Novalis vindicates the positive religion against the splendor of Greek ideals which catch the German classics' eye ("Hymns to the Night" 1800. V). In opposition to this restorative tendency to eclipse the serene Hellenism by the Christian shadowland, Hölderlin pushes on with Schiller's "art to idealize" in quest of the "blest Greece".

formé «après une opération violente, c'est-à-dire, après l'incision et la suture nouvelle» (Lettre de Schiller à Körner, le 25 décembre 1788: V(4)157). C'est après l'«opération violente» de la Révolution meurtrière que la société civile s'est formée en république démocratique, où il est encore plus nécessaire de diviser le travail, c'est-à-dire, l'«incision» de l'activité humaine. Néanmoins, «presque la poésie seule» promet à Schiller une «suture nouvelle» du pouvoir séparateur (V(4)153). Il avance cette thèse de l'«art d'idéaliser» dans «Sur les poèmes de Bürger» en 1791 (V(4)149). D'autre part, il a déjà appliqué cette théorie dans son volumineux poème «Les Artistes» quatre mois avant le 14 juillet 1789. Jacob Burckhardt distingue ce grand poème dans son discours commémoratif de Schiller le 9 novembre 1859: «C'est sans doute le programme suprême, ... Schiller immortalise la somme d'un sentiment en forme du style le plus noble et le plus puissant» (V(4)138/142).

Quoiqu'il dût accomplir son «art d'idéaliser» en l'alliance avec Goethe, Schiller s'effrayait de la «subjectivité intense» de l'«esprit philosophique» de son disciple Hölderlin dans une lettre à Goethe le 30 juin 1797 (V(4)127). Le lendemain Goethe calme l'inquiétude de son compagnon de l'alliance, en sous-estimant les poèmes de Hölderlin (V(4)128), car la «subjectivité intense» lui paraît tout à fait suspecte. Et puis Schiller va déprécier ses «Artistes» (Lettre à Körner, le 21 octobre 1800: V(4)133). Au contraire, son disciple estime beaucoup «toute la forme vivante» (V(4)146), c'est-à-dire, «la somme d'un sentiment» dont Burckhardt parle ci-dessus:

Je considère maintenant le penchant métaphysique comme une certaine virginité de l'esprit ...

(Lettre de Hölderlin à Schiller, août 1797: V(4)126)

Puisqu'il y a un certain froid en relations avec son maître, Hölderlin dédie «Le Pain et le vin» à Heinse, pour conclure une Nouvelle Alliance avec cet auteur du roman «Ardinghello» (1787). La devise de l'«Hymne à la Déesse de l'Harmonie» (1790-91) de Hölderlin est «Ourania, la vierge brillante, tient l'univers entier furieux et ravi ensemble avec sa ceinture magique. Ardinghello» (V(4)117). Cette «vierge brillante» de Heinse se fait interpréter par «une certaine virginité de l'esprit philosophique» de Hölderlin. Il en va sans doute de même de l'«Ourania avec magnificence terrible» dans le vers 59 des «Artistes» de Schiller (V(4)112).

Hölderlin demande à son compagnon de l'alliance d'«idéaliser» et d'«immortaliser la somme d'un sentiment en forme du style le plus noble et le plus puissant». Il en est de même pour l'«Hymne à la joie» à la fin de la neuvième symphonie de Beethoven en 1822-24, tandis que cet hymne est rabaisé par son auteur même à l'époque de l'alliance avec Goethe. On peut rapporter ce détournement résigné de l'effort d'«immortaliser la somme d'un sentiment» à la «restauration esthétique exécutée par le classicisme de Weimar» (Giuliano Baioni «Classicismo e Rivoluzione» 1969). D'après Baioni, elle avait «la tendance à supprimer tous ces enzymes-là progressistes et révolutionnaires qui se succédaient de leur début de l'Orage et de la Tempête en les jeunes représentants de l'école romantique de la première période» (V(4)186). Voici la fin de l'alliance de l'idée culturelle conservatrice avec la pensée sociale révolutionnaire.

«Mais par rapport à vous ma dépendance est insurmontable» — ainsi avoue Hölderlin l'influence imposante de Schiller, parce qu'il y a ici un bon exemple, comment «le génie accompli des maîtres, plus puissant et plus compréhensible que la nature, mais de ce fait plus asservissant et plus positif, exerce son action sur l'artiste plus jeune.» (Lettre de Hölderlin à Schiller, le 20 juin 1797: V(4)145) Quant à la «brise du bocage», l'auteur de l'«Hymne à la joie» (1786) épure «cette réalité mystérieuse» des iconoclastes par l'«esprit de la musique» (V(4)25) Il s'ensuit que cette épuration de l'esprit allemand va s'accomplir aussi bien dans la neuvième symphonie chorale qu'en la «Grèce bienheureuse, où sonne-t-elle, la voix du grand Destin» («Le Pain et le vin» quatrième strophe. vers 55/62: V(4)13/34).

SOMMAIRE

Thomas Mann voyait rêve en «une alliance de l'idée culturelle conservatrice avec la pensée sociale révolutionnaire»: «Il ira bien d'abord en rapport de l'Allemagne, si Karl Marx aura lu Friedrich Hölderlin» («La culture et le socialisme» 1929: V(4)178). Cette «alliance» ne veut dire aujourd'hui qu'une commission exécutée par les germanistes. Alors, «Le Pain et le vin» ne représente pas seulement l'idée conservatrice de la «Grèce bienheureuse» (vers 55), mais il a aussi des relations avec la «pensée sociale» du «temps d'ombre misérable» (vers 122). Il en résulte qu'il conclut une alliance aussi bien avec les Dieux olympiens qu'avec la société future d'une république démocratique: «Voici que le temps des rois est passé» (Hölderlin «La mort d'Empédocle» première version. vers 1449: V(4)95). On trouve à cette époque la première rencontre de l'idée conservatrice et de la «pensée révolutionnaire» chez les poètes de l'«Alliance du bocage» (Hainbund) à Göttingen depuis 1772 dans ce temps de l'Orage et de la Tempête. C'est le compagnon Leopold Stolberg qui faisait tantôt le «Chant de la Liberté à partir du XX^e siècle» en 1775, tantôt une traduction hexamètre de l'«Illiade» d'Homère en 1778.

Nous nous souvenons de l'«Alliance du bocage», en lisant aussi ce vers-ci:

Jetzt auch kommet ein Wehn und regt die Gipfel des Hains auf,

— u | — u u | — u | — u | — u u | — —

Oh! voici naître et frémir la brise aux feuilles extrêmes du bocage,

(«Le Pain et le vin» première strophe. vers 13: V(4)1)

Par conséquent, nous ne pouvons pas être contents de l'interprétation phraséologique de Friedrich Beißner et de Jochen Schmidt qui examinent essentiellement la «brise» (Wehn) et le verbe «frémir» (regt ... auf), sans tenir compte du «bocage» (Hain) à la fin spondaïque au sommet hexamètre. Certes, il s'agit ici d'une «brise spirituelle» (V(4)5), c'est-à-dire, un pneuma pour «frémir aux feuilles extrêmes du bocage», mais c'est le «bocage» qui mérite d'être remarqué en accord avec ce brise-là.

«Mort à Wieland, le destructeur des mœurs; Mort à Voltaire!» (Lettre de Voß à Brückner, le 26 octobre 1772: V(4)89) — voici une effusion du cœur pur de l'«Alliance du bocage». La culture importée de l'Ancien Régime inspirait de la répugnance aux poètes de l'«Alliance». Ils faisaient en effet un autodafé des livres de Wieland dans le goût rococo. (Lettre de Voß à Brückner, le 4 août 1773: V(4)106) Cette épuration des mœurs donne à Hölderlin la possibilité de mettre la «Grèce bienheureuse» en face de la Grèce sécularisée de l'époque. Cette confrontation répond à la différence entre le bocage sacré et le bocage profane. Nous trouvons le dernier dans un jardin séculier du palais des rois, tandis que l'autre concerne le sanctuaire; c'était la demeure de l'Être suprême chez les patriarches bibliques, les Grecs antiques et les Germains. Il s'ensuit que la «brise du bocage» (vers 13) se dirige vers l'Être suprême jusqu'à ce qu'elle s'accorde bien avec la «Grèce bienheureuse» (vers 55) dans «Le Pain et le vin» (1800-01).

Le cœur pur de ces poètes-là iconoclastes peut correspondre à la divinité des Germains, dont Tacite nous informe qu'«enfermer les dieux entre des murs ou les représenter sous quelque apparence humaine leur semble peu convenable à la grandeur des habitants du ciel; ils leur consacrent des bois et des bocages et donnent le nom de dieux à cette réalité mystérieuse que leur seule piété leur fait voir.» («Germania» chap. 9: V(4)107) Schiller considère cet ennemi juré des olympiens plastiques comme «barbare sacré» dans le vers 114 de la première version des «Dieux de la Grèce» en 1788. On doit apaiser ce différend de la divinité. C'est le problème auquel Hölderlin va faire face. En tout cas, ce «barbare sacré» est «un avorton composé de plusieurs sortes de la représentation estropiée et tordue» qui s'est

Dieser „glänzenden Jungfrau“, von Hölderlin wohl mit „philosophischem Geist und Tiefsinn“ und seiner „Jungfräulichkeit des Geistes“ interpretiert, entspricht Schillers schöne „furchtbar herrliche Urania“:

die furchtbar herrliche Urania,
mit abgelegter Feuerkrone
steht sie — als Schönheit vor uns da.
Der Anmuth Gürtel umgewunden,
wird sie zum Kind, daß Kinder sie verstehn:
was wir als Schönheit hier empfunden,
wird einst als Wahrheit uns entgegen gehn.

.....

Sie selbst, die sanfte Cypria,
umleuchtet von der Feuerkrone
steht dann vor ihrem mündgen Sohne
entschleyert — als Urania;

.....

(„Die Künstler“ V.59-65/V.433-436: V(4)112)

Der Bund mit Heinse führt für Hölderlin offenbar eher zu der nach Burckhardt von Schiller geleisteten „Verewigung des Ganzen einer Empfindung in der edelsten und gewaltigsten Stilform“ als der Weimarer Klassiker-Bund, der sich zusehends von deren „metaphysischer Stimmung“ entfernt.

Die Abkehr von diesen Verewigungsbestrebungen leitet über in die „von der Weimarer Klassik bewirkte ästhetische Restauration“, die nach Giuliano Baioni in „Classicismo e Rivoluzione“(1969) „die Tendenz hatte, alle jene fortschrittlichen und revolutionären Fermente zu beseitigen, die von ihrem Sturm und Drang aus an die jungen Vertreter der Frühromantischen Schule weitergegeben wurden.“(V(4)186) Das Sich-Zurückziehen aus den revolutionären Strömungen der Zeit in die idyllische Scheinsicherheit des festumgrenzten Heims spiegelt sich in den V.299-301 der „Urania“ von Goethes „Hermann und Dorothea“(1797) wieder(V(4)128):

Desto fester sei bei der allgemeinen Erschütterung,
Dorothea, der Bund! Wir wollen halten und dauern,
Fest und halten und fest der schönen Güter Besitztum.

Dies ist das Ende des „Bundes der konservativen Kulturidee mit dem revolutionären Gesellschaftsgedanken“. Daher bricht Hölderlin in „Brod und Wein“ mit dem „Alten Bund“ zu Weimar und schließt einen „Neuen Bund“ mit „jenen fortschrittlichen und revolutionären Fermenten“ der Stürmer und Dränger, deren „Wehn des Hains“ eines Göttinger Dichterbundes „jezt auch kommet“:

Jezt auch kommet ein Wehn und regt die Gipfel des Hains auf,
Sieh! und das Schattenbild unserer Erde, der Mond
Kommet geheim nun auch; die Schwärmerische, die Nacht kommt,
Voll mit Sternen ...

.....

(„Brod und Wein“ 1.Str. V.13-16: V(4)1/88)

In einer „schwärmerischen“ Vollmondnacht vom 12. September 1772 wurde in der Tat der Göttinger Hainbund „geschworen“, wie Voß in einem Brief an Brückner vom 20. September 1772 davon erzählt(V(4)87):

Der Abend war außerordentlich heiter, und der Mond voll. Wir überließen uns ganz den Empfindungen der schönen Natur. Wir aßen in einer Bauerhütte eine Milch, und begaben uns darauf ins freie Feld. Hier fanden wir einen kleinen Eichengrund, und sogleich fiel uns allen ein, den Bund der Freundschaft unter diesen heiligen Bäumen zu schwören. ...

so spielt in tausendfacher Klarheit
bezaubernd um den trunkenen Blick,
so fließt in Einen Bund der Wahrheit
in Einen Stroh des Lichts zurück!

(„Die Künstler“ 1789. Schlußverse 474-481: V(4)135)

Von diesem Gedicht sagt Jacob Burckhardt in seiner Gedächtnisrede auf Schiller am 9. November 1859: „Es ist wohl das höchste Programm, das je aufgestellt worden ist. ... Fortan steht er einzig unter allen lyrischen Dichtern, weil er mit starkem, geläutertem Willen der Verewigung des einzelnen Momentes, der einzelnen Situation wesentlich entsagt, nicht jener Gattung gehört, in der vor allem groß sind Properz, Ovid, Byron, Victor Hugo, Goethe. Schiller verewigt das Ganze einer Empfindung in der edelsten und gewaltigsten Stilform.“(V(4)138/142)

Im geistigen Bund mit Goethe, der dann „den größten, vielleicht nie ganz zu schlichtenden Wettkampf zwischen Objekt und Subjekt“(V(4)127) bedeuten sollte, rang sich Schiller freilich nicht zu der von Burckhardt gelobten Verewigung des Ganzen einer Empfindung durch, sondern schrak zurück vor der „heftigen Subjektivität“ von Hölderlins „philosophischem Geist und Tiefsinn“(Brief vom 30. Juni 1797: V(4)127). Schon am nächsten Tag beruhigt Goethe in seiner Antwort den Freund: Hölderlins Gedichte „haben weder die Fülle, noch die Stärke, noch die Tiefe“ von dessen „Arbeiten“(V(4)128). Da Goethe der „starke, geläuterte Wille“ und die „heftige Subjektivität“ deutlich suspekt waren, nahm Schiller seine „Künstler“ und „An die Freude“ 1800 nicht in den ersten Teil seiner „Gedichte“ auf, vermutlich weil ihm beide Werke „durchaus unvollkommen“ zu sein schienen, wie er es in seinem Brief an Körner vom 21. Oktober 1800 in bezug auf die „Künstler“ formuliert(V(4)133).

Schillers Verewigung des „Ganzen einer Empfindung in der edelsten und gewaltigsten Stilform“ kennzeichnet freilich nicht nur Hölderlins Bestrebungen, sondern auch die einer Reihe führender Köpfe des folgenden Jahrhunderts. Beethoven verbindet in seiner Neunten Sinfonie von 1824 das „Lied an die Freude“ mit dem „Geiste der Musik“, ganz im Geist der „Idealisierung“ von dessen Autor. Ähnlich setzt später Mahler in seiner 8. Sinfonie von 1908 die Schlußverse von Goethes „Faust“: „Das Ewig-Weibliche / Zieht uns hinan“(V(4)152) in Musikum. Wie ein Brief an Schiller vom August 1797 bezeugt, vollzieht Hölderlin die Abkehr von der „heftigen Subjektivität“ des „geläuterten Willens“ in Weimar nicht mit(V(4)126):

Ich betrachte jezt die metaphysische Stimmung, wie eine gewisse Jungfräulichkeit des Geistes ...

Mithin lockern sich seine Beziehungen zu Weimar, und es kommt zu einer Verbindung mit Heinse zu schließen, dem er „Brod und Wein“ widmete, wohl aufgrund der Lektüre von dessen Roman „Ardinghello“(1787), der nach Schillers scharfer Kritik in „Ueber naive und sentimentalische Dichtung“(1795-96) „bei aller sinnlichen Energie und allem Feuer des Kolorits immer nur eine sinnliche Karrikatur, ohne Wahrheit und ohne ästhetische Würde bleibt“(V(4)118).

Hölderlin schätzt den „Ardinghello“ wohl „im Wollen mehr als im künstlerischen Vollbringen“(V(4)119); offenbar legte er mehr Gewicht auf dessen metaphysischen Inhalt als auf dessen literarische Qualitäten. Als Motto für die „Hymne an die Göttin der Harmonie“ wählt er die folgende Passage aus der 5. Teil des Romans(V(4)117):

Urania, die glänzende Jungfrau, hält mit ihrem Zaubergürtel das Weltall in tobendem Entzücken zusammen.

Ardinghello

sterbe Voltaire!" (V(4)89). Dem reinen Herz der ikonoklastischen Stürmer und Dränger, die die ihnen fremde Rokoko-Kultur verdammen, könnte die „Vorstellung der Germanen von der Erhabenheit der Himmlischen entsprechen, denn „sie weihen ihnen vielmehr Lichtungen und Haine, und mit Namen von Göttern bezeichnen sie jenes geheimnisvolle Wesen, das sie nur in ihrer Verehrung und im Geiste schauen“, ohne wie etwa die Griechen „Götter in Wände einzuschließen und irgendwie menschähnlich darzustellen“ (Tacitus „Germania“ Kap.9: V(4)107).

Schiller nennt im V.114 der ersten Fassung von „Die Götter Griechenlandes“ (1788) diese geschworenen Feinde der plastischen Olympier „heilige Barbaren“. In Hölderlins „Brod und Wein“ wird das „seelige Griechenland“ mit Tempeln, Hainen und Göttern dem „heilig barbarischen“ „Wehn des Hains“ gegenübergestellt. Im Höhepunkt des „seeligen Griechenlandes“ aber „tönt das große Geschik“, das sozusagen „die Geburt der Tragödie aus dem Geiste der Musik“ (V(4)25) symbolisiert:

Seeliges Griechenland! ...

.....

Aber die Thronen, wo? die Tempel, und wo die Gefäße,
 Wo mit Nectar gefüllt, Göttern zu Lust der Gesang?
 Wo, wo leuchten sie denn, die fernhintreffenden Sprüche?
 Delphi schlummert und wo tönet das große Geschik?
 Wo ist das schnelle? wo brichts, allgegenwärtigen Glücks voll
 Donnernd aus heiterer Luft über die Augen herein?
 („Brod und Wein“ 4.Str. V.55/V.59-64: V(4)13/34)

Im musikalischen Wesen stimmt das „Wehn des Hains“ (V.13) mit dem „tönenden Geschik“ (V.62ff.) im hymnischen Höhepunkt überein. Ferner reinigt einerseits das reine Gemüt der gebildeten Stürmer und Dränger den Begriff der griechischen Kultur, weil ihre klassische „Anmuth und Würde“ („Ewig klar und spiegelrein ...“: V(4)111) unter dem höfischen Einfluß des Rokoko-Geschmacks verweltlicht und entweiht wurde. Andererseits bekämpft das „seelige Griechenland“ mit mannigfaltigen Göttergestalten die intolerante Alleinherrschaft des ikonoklastisch „eifrigen Gottes“ der Bibel, dem auch „jenes geheimnisvolle Wesen“ im germanischen Hain entspricht. Indirekt ist dies auch ein Angriff auf das Gottesgnadentum, der die endgültige Ablösung der Feudalgesellschaft durch das republikanische Bürgertum signalisiert, die ihren sichtbarsten Ausdruck 1793 mit der Guillotinierung von Ludwig XVI. fand.

Schiller nennt in seinem Brief an Körner vom 25. Dezember 1788 den „heiligen Barbaren“ „eine aus vielen gebrechlichen schiefen Vorstellungsarten zusammen gefloßene Mißgeburt“, entstanden „nach einer gewaltsamen Operation, d.i. nach Absonderung und neuer Zusammenfügung“ (V(4)157). Nach der „gewaltsamen Operation“ der blutigen Französischen Revolution entstand dann die demokratisch ausgerichtete bürgerliche Gesellschaft, in der eine „Absonderung“ der menschlichen Tätigkeiten immer notwendiger wird. „Bei der Vereinzelung und getrennten Wirksamkeit ist es die Dichtkunst beinahe allein, welche die getrennten Kräfte der Seele wieder in Vereinigung bringt, welche Kopf und Herz, ... Vernunft und Einbildungskraft in harmonischem Bunde beschäftigt, welche gleichsam den ganzen Menschen in uns wieder herstellt“ (Schiller „Über Bürgers Gedichte“ 1791: V(4)153). Die hier geforderte „Idealisierungskunst“ (V(4)149) verwirklichte er schon vier Monate vor Ausbruch der Französischen Revolution in seinem umfangreichen Gedicht „Die Künstler“:

Wie sich in sieben milden Strahlen
 der weisse Schimmer lieblich bricht,
 wie sieben Regenbogenstrahlen
 zerrinnen in das weiße Licht:

Thomas Manns Wunschtraum war „ein Bund und Pakt der konservativen Kultur-idee mit dem revolutionären Gesellschaftsgedanken“, als er die Hypothese aufstellte:

Ich sagte, gut werde es erst stehen um Deutschland, und dieses werde sich selbst gefunden haben, wenn Karl Marx den Friedrich Hölderlin gelesen haben werde —, eine Begegnung, die übrigens im Begriffe sei, sich zu vollziehen.

(„Kultur und Sozialismus“ 1929: V(4)178)

Nach heutigem Verständnis ließe sich solch ein „Bund“ nicht nur als Wunschtraum, sondern auch als Auftrag an den Wissenschaftler auffassen, der sich mit der Dichtung Hölderlins befaßt. In der Tat befaßte sich u.a. schon Pierre Bertaux in „Hölderlin und die Französische Revolution“ (1969) mit dieser Aufgabe; aufgrund mancherlei Forschungsergebnisse trat dann 1971 im Drama „Hölderlin“ von Peter Weiss der junge Marx als Hölderlins „grosser Verehrer“ (V(4)189) auf die Bühne.

Nun war zwar der Dichter kein Bannerträger eines „revolutionären Gesellschaftsgedanken“, aber sein „Brod und Wein“, das nicht nur die „konservative Kulturidee“ des „seeligen Griechenlandes“ (V.55) repräsentiert, sondern auch viel mit der damals recht „dürftigen Zeit“ (V.122) zu tun hat, steht sicher im Bund sowohl mit den Göttern Griechenlandes wie mit der zukünftigen Gesellschaft einer demokratischen Republik: „Diß ist die Zeit der Könige nicht mehr“ („Der Tod des Empedokles“ 1. Fas. V.1449: V(4)95). Der erste Ansatz zu einer Begegnung zwischen „Konservativem“ und „Revolutionärem“ findet sich seinerzeit bei den Stürmern und Drängern, z.B. im Göttinger „Hainbund“ (1772ff.), dessen adliges Mitglied Leopold Stolberg, der Übersetzer der „Ilias“ (1778) im „Freiheitsgesang aus dem zwanzigsten Jahrhundert“ (1775) schon „Der Tyrannen Blut!“ (V(4)165) sehen will.

Im V.13 von Hölderlins „Brod und Wein“ (1800-01) geht es um „ein Wehn des Hains“, das an den Göttinger „Hainbund“ gemahnt:

Jetzt auch kommt ein Wehn und regt die Gipfel des Hains auf,
(„Brod und Wein“ 1.Str. V.13: V(4)1)

Daher befriedigt nicht ganz die phraseologische Untersuchung von Friedrich Beißner und Jochen Schmidt, die hauptsächlich auf das „Wehn“ und „regt ... auf“ hinausläuft, ohne den säuselnden „Hain“ am spondeischen Versende im Höhepunkt des Hexameters zu berücksichtigen (V(4)8). Freilich ist das „Wehn“ als „geistiges Wehn“ (V(4)5) von großer Bedeutung, doch gerade deshalb nimmt sich im Zusammenklang damit der erregte Hain noch eindrucksvoller aus.

Ein „geistiges Wehn“, also ein Pneuma, das hier „die Gipfel des Hains aufregt“, läßt sich in Verbindung bringen mit dem Odem des alttestamentarischen Gottes, der Moses in den Gesetztafeln gebot:

Hüte dich, daß du nicht einen Bund machest mit den Einwohnern des Landes, da du hineinkommst, ... sondern ihre Altäre sollst du umstürzen und ihre Götzen zerbrechen und ihre Haine ausrotten; denn du sollst keinen andern Gott anbeten. Denn der Herr heißt ein Eiferer; ein eifriger Gott ist er.

(„Exodus“ 34. 12-14: V(4)11)

Ähnlich wie später dieser „eifrige Gott“ (Deus zelotes) griechische und germanische Haine vernichtete, hat dann der Göttinger Hainbund „Wielands Idris und Bildnis verbrannt“ (V(4)89): „Es sterbe der Sittenverderber Wieland, es

- i) „Hingehefteten Blickes lange Wahl" : «Le choix long du regard dans le blanc des yeux» : "Fixed gaze's long choice"
- j) „Die flüchtigen Dichter" : «Les poètes superficiels» : "The superficial poets"
- k) „Hainbund" : «Alliance du bocage» : "Grove Covenant"
- l) „Bund" : Alliance : "Covenant"
- m) „Heiliger Barbar" : «Barbare sacré» : "Holy Barbarian"
- n) „Anmuth und Würde" : «Grâce et Dignité» : "Grace and Dignity"
- o) „Das Musikalische" : «Fond musical» : "Musical bottom"
- p) „Idealisierkunst" : «Art d'idéaliser» : "Art to idealize"
- q) „Ein Bund der konservativen Kulturidee mit dem revolutionären Gesellschaftsgedanken" : «Une Alliance de l'idée culturelle conservatrice avec la pensée sociale révolutionnaire» : "A Covenant of the conservative idea of culture with the revolutionary thought of society"

Zusammenfassung / Sommaire / Abstract (XXXVIII. II. 204-210)

INHALT / TABLE DES MATIÈRES / CONTENTS (XXXVIII. II. 211-214)

(5) Eleusis : Éleusis : Eleusis

- a) „Traurig und prächtig" : «Mélancolique magnificence» : "Mournful and gleaming"
- b) „Reich Gottes" : «Royaume de Dieu» : "Kingdom of Heaven"
- c) „Mondnacht" : «Nuit à clair de Lune» : "Moonlight Night"
- d) „Sternen" : «Étoiles» : "Stars"
- e) „Das Ideal und das Leben" : «L'Idéal et la Vie» : "The Ideal and the Life"
- f) „Heilige Nacht" : «Nuit sacrée» : "Holy Night"
- g) „Suchen" und „Prüfen" : «Chercher» et «examiner» : "Seek" and "examine"
- h) „Anschauung" und „Suchen" : «Contempler» et «chercher» : "Contemplate" and "seek"
- i) „Romantisieren" : «Romanciser» : "Romanticize"
- j) „Sittlichkeit" : «Mœurs» : "Mores"

(VI) SCHLUSS : CONCLUSION : CONCLUSION

— Von der Aufklärung zum 19. Jahrhundert : De l'âge des lumières au XIX^e siècle : From the Enlightenment to the 19th century —

[V] VON DER ABENDDÄMMERUNG ZUR HEILIGEN NACHT : DU CRÉPUSCULE
DU SOIR À LA NUIT SACRÉE : FROM THE EVENING TWILIGHT TO
THE HOLY NIGHT

- (1) „Abgeschiedenheit" : «Renonciation» : "Renouncement"
(XXXVI. 16-21)
- (2) „Brunnen" : «Fontaines» : "Fountains" (XXXVI. 21-42)
- (3) „Glocken" und „Stunden" : «La voix des cloches» et «le
veilleur, gardien des heures» : "Church-bells" and "the
watchman calling out of the hour" (XXXVII. 1-75)

* „GLOCKEN" UND „STUNDEN" — Über die V.11-12 in Hölderlins
„Brod und Wein" : «CLOCHES» ET «HEURES» — Sur les vers
11-12 dans «Le Pain et le vin» de Hölderlin : "BELLS" AND
"HOURS" — On the lines 11-12 in Hölderlin's "Bread and
Wine"

(Mskr. des Vortrags mit Materialien beim Herbstlichen
Kongreß der Japanischen Gesellschaft für Germanistik
im Konferenzsaal vom Park Okazaki der Stadt Kyôto am
16. Oktober 1987 : Exposé présenté avec matériaux au
congrès automnal de la Société Japonaise des Études
Germaniques dans la salle de conférence du parc d'Oka-
zaki à Kyôto le 16 octobre 1987 : Derivery with mate-
rials at the Autumn Congress of the Japanese Society
for Germanic Studies in the meeting hall of Okazaki
Park in Kyôto on October 16th, 1987) (XXXVII. 76-83)

Zusammenfassung / Sommaire /
Inhaltsübersicht (XXXVII. 84-90)

- (4) „Hain" und „Bund" : «Bocage» et «Alliance» : "Grove" and
"Covenant" (XXXVIII. II. 91-203)

- a) „Wehn" : «Brise» : "Breeze"
- b) „Hain" und „ein eiuertiger Gott" : «Bocage» et «un Dieu
zelé» : "Grove" and "a zealous God"
- c) Vom germanischen Urgrund zum griechischen Ursprung :
Du fond de la terre germanique à la source grecque : From
the bottom of the Germanic ground to the Grecian source
- d) „Auge der Seele" und „Seelengesang" : «Oeil de l'âme» et
«Chant avec grande âme» : "Mind's eye" and "Song of great
mind"
- e) „Die Eiche weht" : «Le chêne souffle» : "The oak blows"
- f) „Tausendjährige Eichen" : «Chênes millénaires» : "Mille-
nary oaks"
- g) „Idyllische Wirklichkeit" und „sittliche Größe" : «Réa-
lités idylliques» et «Grandeur morale» : "Idyllic actu-
alities" and "Moral greatness"
- h) „Der leere Verstand eines Sokrates" : «L'intelligence
vide d'un Socrate» : "The void intelligence of a Socra-
tes"

- [II] „RINGS UM RUHE DIE STADT“ : «LA VILLE AUTOUR DE NOUS
S'ENDORT» : "ROUND US THE TOWN IS AT REST" (XXXIV. 160-169)

- * Über den ersten Vers von Hölderlins „Brod und Wein“
(Mskr. des Vortrags mit Materialien beim 33. Kongreß
des Zweigbezirks Chûgoku-Shikoku der Japanischen Ge-
sellschaft für Germanistik am 5. November 1983 : Ex-
posé présenté avec matériaux au XXXIII^e congrès de la
Section de Chûgoku-Shikoku de la Société Japonaise
des Études Germaniques le 5 novembre 1983 : Delivery
with materials at the 33th Congress of the Chûgoku-
Shikoku branch of the Japanese Society for Germanic
Studies on November 5th, 1983)

(XXXVIII. II. 16-25)

- [III] „ERLEUCHTUNG“ UND „BELEUCHTUNG“ : «LES LUMIÈRES AUX
FENÊTRES» ET «L'ÉCLAT DES TORCHES» : "THE LIGHTS AT THE
WINDOW" AND "THE GLITTER OF THE TORCHES" (XXXIV. 170-201)

- * «BELEUCHTUNG» ET «ERLEUCHTUNG» — La culture de l'opéra
au XVIII^e siècle des lumières et l'espace de la fête
classique de Hölderlin (Le contrepoint des lumières dans
l'image de la cité au début de «Brod und Wein»)

(Mskr. des Vortrags mit Materialien beim 7. Kongreß
der Japanischen Gesellschaft zur Forschung des 18.
Jahrhunderts am 25. Mai 1985 : Exposé présenté avec
matériaux au VII^e congrès de la Société japonaise
d'étude du XVIII^e siècle le 25 mai 1985 : Delivery
with materials at the 7th Congress of the Japanese
Society for Eighteenth-Century Studies on May 25th,
1985)

(XXXVIII. II. 26-42)

- [IV] „EIN SINNIGES HAUPT“(Neufassung) : «SONGEUR, UN FRONT
PENCHÉ»(Édition revue) : "A THOUGHTFUL HEAD"(Revised
edition) (XXXVIII. II. 43-73)

(1) Vorwort (2) Christian Landauer (3) „Landauersche
Fußteppiche- und Wollwarenhandlung“ (4) Gemeingeist
und Alleinherrschaft

LANDAUER — „ein sinniges Haupt“ in Hölderlins „Brod
und Wein“ (Deutsche Neufassung) (XXXVIII. II. 83-90)

- * LANDAUER UND HÖLDERLIN — Bürger und Künstler
(Mskr. des Vortrags mit Materialien beim 35. Kongreß
des Zweigbezirks Chûgoku-Shikoku der Japanischen Ge-
sellschaft für Germanistik am 9. November 1985 : Ex-
posé présenté avec matériaux au XXXV^e congrès de la
Section de Chûgoku-Shikoku de la Société Japonaise
des Études Germaniques le 9 novembre 1985 : Delivery
with materials at the 35th Congress of the Chûgoku-
Shikoku branch of the Japanese Society for Germanic
Studies on November 9th, 1985) (XXXVIII. II. 74-82)

HÖLDERLINS „BROD UND WEIN“. ERSTE STROPHE:
'HEILIGE NACHT' FÜNFTER TEIL:
„HAIN“ UND „BUND“

«LE PAIN ET LE VIN» DE HÖLDERLIN. PREMIÈRE
STROPHE: «NUIT SACRÉE» CINQUIÈME PARTIE:
«BOCAGE» ET «ALLIANCE»

HÖLDERLIN'S "BREAD AND WINE". FIRST STROPHE
'HOLY NIGHT' FIFTH PART:
"GROVE" AND "COVENANT"

TAKAHASHI, Katsumi
(Seminar für Deutsche Philologie der Philosophischen Fakultät)
(Section de Philologie allemande de la Faculté des Lettres)
(Seminar for German Philology of the Faculty of Arts)

FORSCHUNGSBERICHTE DER UNIVERSITÄT KÔCHI (Kôtzsch).
JAPAN 1989. VOL.38. GEISTESWISSENSCHAFTEN II.
BULLETIN ANNUEL DE L'UNIVERSITÉ DE KÔCHI.
JAPON 1989. TOME XXXVIII. SCIENCES HUMAINES II.
RESEARCH REPORTS OF KÔCHI UNIVERSITY.
JAPAN 1989. VOL.38. HUMANITIES II.

INHALT : TABLE DES MATIÈRES : CONTENTS

* DAS STADTBILD IM ANFANG VON „BROD UND WEIN“ : L'IMAGE DE
LA VILLE AU DÉBUT DU POÈME «LE PAIN ET LE VIN» : THE IMAGE
OF THE TOWN IN THE OPENING OF "BREAD AND WINE"

(XXXII. 21-70)

Einführung

(1) Umgebung der Stadt

1) Stadt und Land 2) Ökonomisches Jahrhundert

(2) Stadt

1) Innenraum der Stadt 2) Burgstadt 3) Residenz-
stadt Stuttgart

(3) Bürger

1) Stadtleben 2) Erleuchtung 3) Festspiel und Opern-
kultur 4) Übergangsgesellschaft

Schluß

[I] EINLEITUNG : INTRODUCTION : INTRODUCTION (XXXIV. 156-159)

* „Romantisieren“ und „Idealisieren“ : «Romanciser» et
«Idealiser» : "Romanticize" and "Idealize"

(XXXVIII. II. 4-15)